空へ、未来へ

南の二等星

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
空へ、未来へ

【Ｎコード】
Ｎ０２６１Ｅ

【作者名】
南の二等星

【あらすじ】
アーチャ・ルーイェンは、ある日突然、ドレイとなった。深い絶望の中、海底のドレイ収容所でアーチャが出会ったものは、頼れる男ジャーニス、鼻持ちならない親友、いかれたじいさん、そして、百年も前に滅びたはずのマイラ族の少女だった。

プロローグ（前書き）

「これから始まるおとぎ話」の姉妹編「空へ、未来へ」。始まりです！

プロローグ

開け放たれた出窓からたそがれ時の涼風が舞い込み、鏡台の前に座る少女の前髪をふわりと撫でた。鏡に映る少女の眼は、その鮮緑色に輝く麗しい瞳で自身を見つめ、窓から射る西日の射光を受けてキラキラと煌いた。

肩まで伸びた露草色の髪の毛は水を流したように繊細で、純白のワンピースがそのほっそりと痩せた全身を優しく抱擁するように少女を包み込んでいる。

瞳の中の広い草原にその身を溶け込ませる少女は、目の前の自分を見つめ、そして、己自身の過去と未来を見据えていた。

「シャヌお嬢様」

シャヌは鏡の中の扉が開くのを見た。柔らかな声と一緒にメイド姿の女が部屋に入ってくる。それは、いつもシャヌを世話してくれるメイドだった。ふくよかな体を機敏に動かし、鼻歌を交えて少女へと近寄る。

「着替え、お持ちしましたよ。ここに置いておきますね」

女はそう言って、スパンコールの輝く黄色いドレスをベッドの上へそっと置いた。それはまるで、生まれたての赤子でも寝かしつけるような優しい手つきだった。

「今日はジェッキンゲン様の昇進を記念した祝賀会の日ですからね。美しく正装しなくっちゃ」

女は鏡台に置いてあるべっこう素材の高価なくしに手を伸ばしな

がら、楽しげに声を弾ませた。シャヌは鏡に映る女の笑顔を見つめた。

「私、ある本を読んだの」

シャヌはメイドにというより、鏡の中の自分に向かって言葉を投げかけた。一メートル向こうの話相手にも届かなさそうな、か細い声だった。

髪をすいていたメイドの手が止まり、その大きな丸い目は、鏡の世界の無表情な少女をただまっすぐに見つめていた。

「また恐ろしい挿絵の入ったローロー教の本をお読みになったんですか？」

メイドは深刻そうな声色で聞いたが、やがてクスクスと笑いだした。

「ごめんなさい。夜怖くなってトイレに行けなくなったお嬢様の幼い頃を思い出したんです」

メイドの言葉を聞いて、シャヌの顔にもようやく笑顔が広がったが、それは束の間だった。

「それとは違うの。……私はね、私自信に関する本を読んだの」

「もしかしてお嬢様……」

メイドは口をつぐみ、鏡の中でも一際その存在感を知らしめる、優雅な神秘を見つめた。シャヌの背中にふわりとなびく、その神秘という名の白い翼を。

西日を受けてオレンジ色に輝くその翼は間違いなくシャヌの背中から伸びていて、しなやかで厳かな雰囲気をかもし出すそれは、まさに天使の翼そのものだった。

シャヌは鏡の中の自身を断ち切るようにメイドを振り返り、不安げに見つめ返すその表情をまっすぐに見つめた。

「この16年間。誰も、何も教えてくれなかった理由がやっと分かったわ」

シャヌは力強い眼差しと揺るぎない口調でそう言った。

「その昔、背中に白い翼を持つマイラ族は、黒い翼を持つジャーグ族と空に漂う浮遊島で共存していた。けど、マイラ族は徐々に力をつけ始めるジャーグ族を恐れ、彼らを地上へ追放した。そして今から百年前。浮遊島は謎の大きな光を放って消滅し……マイラ族は滅びてしまった。私ただ一人を残して」

シャヌはそこまで言って、また鏡に向き直った。メイドの案じ顔がその様子を静かに目で追った。

「でも分からない……なぜ百年も前に滅びたはずのマイラ族の私がここにいるのか……どうしても分からない。そして、それがとても怖いことだと知ったの」

「シャヌお嬢様がマイラ族だということは、何年も前から分かっていました」

メイドは曇った表情のままそう言い、指先で翼にそっと触れた。

「ですが、お嬢様の抱かれるその疑問は、私たちにも到底理解でき

ないものだったのです。その答えを知っているのは、おそらく、御主人であるジェッキンゲン様だけ……」

シャヌは鏡の中のメイドと目を見合わせた。

「近く、あの人は私をここから連れ出そうとしていると、そう聞きます。物心着いた時からこの屋敷に閉じ込められていた私にとって、外界の世界は本の中と同じ……完全な空想上の世界でしかない。でも、私は確信してる。きっとこの広い世界のどこかに、私がこの時間に存在しなければならない本当の意味が隠されてるって……私は、いつかきっとその答えを見つけてみせる」

窓の向こうに広がっていく無限大の可能性を見据えながら、シャヌは自身の心に強く誓った。

そして、ある一人の青年が深い暗闇の中で目を覚ましたのは、ちょうどそんな時のことだった。

プロローグ（後書き）

前書きにも記しましたが、この物語は「これから始まるおとぎ話」の姉妹編です。続編ではありません。

内容はどちらから読んでも楽しめるようにできていますので、読み比べてみるのも面白いと思います。

ゆっくり更新していくので、読者の皆様も時間をかけて、焦らずゆっくり読んでみてください。

それでは、これより本編スタートです＾＾

一章　アクアマリン　1

闇の中から誰かの話し声が聞こえてくる。そのぼんやりと反響する声は、何を言っているのか聞き取ることができない。まるで、それぞれがトンネルの入り口と出口に立って、遠くの話し相手に向かって声を投げかけているようだった。

やがてその話し声は、何百と重なり合う足音のようなものに変わり、親指でガッチリ耳栓をしたいほどの騒音にまで発展した。それも、だんだんと大きく、はっきりと聞こえてくるようになった。耳の穴を通って直に脳味噌を刺激されているようだ……そのせいか、頭がひどく痛む。

しばらくすると、ひんやりと冷たい感触が右頬を伝って全身に流れていくのを感じた。それと同時に、不快な騒音は少しずつ小さくなっていったが、頭部は金槌で殴られたように激しく痛み始めていた。

『もうやめてくれ！　もうこりごりだ！』

うめき声と共に目をしばたかせながら、青年ははっきりと目を覚まし、石のように重たい上半身をゆっくりと起こした。

そこは、狭くて薄暗い洞窟のような空間だった。今にも消えてしまいそうなランプのかすかな光が、剥き出しにされた岩壁を天井からほのかに照らし出しており、小石や砂の混じった冷たい土の床が辺り一面を覆い尽くしている。雑草でさえ顔を突き出すのに尻込みしそうな、質の悪い土のようだった。

青年の周囲には確かに、数名の人と思しき存在があった。どれも壁にもたれて座っているが、何人かはおぼつかなげな歩き方で青年の周囲をうろうろし、部屋の奥へと消えていった。何しろほの暗い部屋なので判断の難しい部分も多いが、奥の方には小声で話し込む

人の姿が二つほどあるようだ。
青年がここにいるべき存在かどうかということに関しては、誰一人、疑う気配はないようだった。

「どこだよ、ここ……？」

青年の声は枯れていた。歯を噛み合わせるたび、砂を噛み砕くタチの悪い感覚が口の中に広がる。肌寒い空気が部屋を満たしていたが、青年は全速力で走った後のように喉がカラカラだった。頭部の痛みさえ一向に引かなかったので、子猫を可愛がるような手つきでボサボサの黒髪を優しく撫でていると、後頭部に小山のようなたんこぶができあがっているのに気付いた。状況が全く呑み込めず、青年の中にイライラが募っていった。

そもそも、こんな怪しげな所にはまるで身に覚えが無い。この世に生を受けてから十七年間、ろくな人生を歩んではこなかったが、ここまで陰気で、うさんくさい場所を見るのは青年にとって初めてだった。しかも、着ている服をよくよくしっかり見てみると、バスローブのような、小汚くてダサい、しま柄の服に着替えさせられているではないか。確かに、昨日まで着ていた一張羅の服はこれよりも汚くてボロだったが、青年に言わせれば、こんなドレイ服よりよっぽどマシだ。

そして、青年は足下を見た。靴がない。両方ともなくなっている。手の届く範囲をくまなく探ってみたが、部屋が暗いせいで見当もつかない。手に触れるのは、硬い石ころと冷たい土ばかりだ。

それから間もなくして、ここで目覚めてから聞いてきたどの足音よりも元気で、軽い足取りの何者かが、部屋の奥の通路からやって来るのが分かった。足音の持ち主が部屋に入ってくると、青年の前でピタリと止まった。砂埃の舞い上がる息苦しい中、青年は何者かを見上げた。ランプの明かりに弱々しく照らし出されていたのは、眼鏡をかけた中年の男だった。顔の下半分は無精ひげで覆われてい

て、青年と同じくらい痩せ細って見える。

「おはよう、新人くん」

狐につままれたような表情の青年に向かって、男は小声でそう呼びかけた。青年の不安をよそに、やけに楽しげな笑顔だ。

「新人？　俺はアーチャだ……アーチャ・ルーイェン」

目いっぱいの疑念を抱きつつ男を眺めながら、青年は自己を紹介し、手を差し出した。二人は互いの手を精一杯強く握り、握手した。

「僕はジャーニス。ルーティー族の血が流れているけど、元々はヒト族だよ」

この世界には数え切れないくらいたくさんの種族が点在するが、この男の場合、科学技術を用いた最先端医療を駆使して、自らを混血にしたようだった。ルーティー族は学習能力や記憶力、判断力に優れ、戦場での状況に合わせた完璧な戦略法を即座に編み出すスペシャリストだ。ずる賢いヒト族が生み出したこの手の種族にしてはなかなか出来の良い代物で、世界一の軍隊を率いる将軍、ザイナ・ドロもこれにはさぞ御満悦だっただろう。自然の摂理を破壊してきたヒト族にとって、新たな種族を創り出す理由や、混血者を増やす目的なんてものは、完全に不要となっていたのだ。

「何でルーティー族が俺の目の前に？」

土の床よりひんやりとした岩壁に手をつき、ゆっくりと立ち上がりながら、アーチャはしゃがれ声で聞いた。だがジャーニスは、もう片方の手に持っていた交換用のランプを掲げ、切れかけの微弱な

光を放つ天井のランプと交換している最中だった。アーチャは大人しくその様子を眺めていたが、突然まばゆい光が発せられたので、目がくらんで顔を背けた。

しばらく待つと視界は正常に戻り、ランプが交換されたおかげで、部屋の様子が先ほどより鮮明になった。そこは廊下のような、うねうねと長細い部屋だった。ヒト族の大人が一人、ギリギリ横になれるくらいの幅しかなかったが、その分、奥行きは二十メートル以上あり、天井は小柄なアーチャが手を伸ばせば届いてしまうほど低かった。左側には部屋の出入り口となる穴がぽっかり開いていて、左右に広がる通路がうっすら確認できた。

どうやら、ここは人工的に作られたものではない……自然によって生み出された地下洞窟だ。

一章　アクアマリン　2

「なあ、ここはどこなんだ？　何で俺たちはこんな地下にいる？」

部屋全体の様子を不安気に観察しながら、アーチャは声を張り上げて質問を続けた。これも部屋が明るくなってから気付いたことだが、この部屋にいる全員がアーチャと同じ服を着て、そのきゃしゃな体を地面に投げ出し、死んだように眠り込んでいる。心なしか、その髪の毛は鮮やかな緑色に輝いて見える。

「アーチャくん」

ジャーニスはかすれるような小声で呼びかけた。

「そうやって大声を出すのは、君にとっても、そして周囲の者たちにとっても、あまり好ましい行為とは言えないんだよ……少なくとも、このアクアマリンの中ではね」

ジャーニスはそうたしなめると、首からぶら下げていた懐中時計を金のチェーンごと引っ張り上げ、時間を確認した。

「ついておいで。君には、ここのことを知る権利がある」

懐中時計を丁寧に服の中へしまい込みながら、ジャーニスはほとんど唇を動かさずにそう言った。結局、アーチャは訳が分からないままその部屋を後にし、ジャーニスの背中を追って通路を左に曲がった。通路といっても、今さっきまでいた部屋より少し幅が広くなっただけで、他に際立った変化は見られない。壁沿いにランプの明かりが灯っていなければ、あの部屋とは見分けがつかなかっただろ

う。

どこまでも続くほの明るい静かな通路を、二人は黙々と歩き続けた。誰かとすれ違うことも、別の部屋を見つけることもなかった。やがて、二人は通路の末端に辿り着いた。通路を抜けた先には、アーチャが度肝を抜かすような空間が広がっていた。それは例えていうなら、まさに“アリの巣”がふさわしいだろう。

広々とした開放感のある空間の岩壁には、数え切れないほどたくさんの穴が開いていて、ドーム状の見上げるほど高い天井からは鋭利な岩のつららが無数に垂れ下がっている。中央には大きな湖があり、湖面にもう一つの丸天井を反射させてでんと構えている。しかも、なぜかは分からないが、ここは他と比べてかなり明るいようだった。天井からも、湖面からも、青緑色の淡くぼんやりとした光が、広大な空間全体に放出されている。アーチャがこんなにも神秘的な情景を目の当たりにしたのは、生まれて初めてのことだった。

「ここがアクアマリンの中枢だ。この美しい景観から、僕たちの間では聖地と呼ばれている」

アーチャはうんともすんとも返事をしなかった。目の前の光景に圧倒されて、言葉が一時的に迷子になっていた。急ぎ足で歩き出したジャーニスの背中を追いかけながら、アーチャは今来た道を振り返った。たくさんある穴の内の一つで、他の穴とは見分けがつかない。何しろ、何十メートルも高くそびえ立つ壁という壁が虫食いだらけなのだ。

アーチャは、たまに自分がルーティー族だったらいいのにと思う時があった。ルーティー族特有の並外れた記憶力は、物忘れの激しいアーチャにとってはうってつけだが、理由はそれだけではない。冷静で正確な状況判断がアーチャには出来ないのだ。何事にも熱心で負けず嫌いのアーチャは、激しい怒りにかられたり、ひどく動揺したりすると、よく理性を失った。

「なあ、ジャーニス……」

湖の岸辺にそびえる針のような大岩の脇を足早に通り過ぎた時、アーチャはふと、四方八方から冷たい視線を浴びていることに気が付き、思わずジャーニスの名を呼んだ。だがジャーニスは無視し、湖を半周ほどして入り込んだ通路に辿り着くまで、口を開かなかった。

「気付いたかい？」

心配そうに聖地の方を振り返りながら、ジャーニスはますます声を小さくして言った。

「ここには僕らのような、数多くの種族が囚われている。だが、彼らは仲間だ……敵ではない」

『僕らのような、だって？』

今のジャーニスの発言は何かのまちがいではないかと……いや、まちがいであって欲しいと願いながら、アーチャは下唇を強く噛んだ。

『まさか、この俺が……アーチャ・ルーイェンが、“ドレイ”にされた？』

そんな疑問が頭の中でグルグルと旋回し、アーチャを混乱させた。きっとまだ夢の続きを見ているのだと、これは何か悪い冗談なのだと、そう自分に言い聞かせることで、血迷い気味の感情を抑制するしかなかった。一刻も早く真実を知りたい。

一章　アクアマリン　3

「ここだよ。さあ、お入り」

アーチャの思いが天に届いたのだろうか、目的の場所へは思ったより早くに到着した。気が動転していて気付かなかったが、目の前には背の高い木製の扉が黙然とたたずんでいた。ジャーニスは扉を押し開け、アーチャの背中をポンと叩いて部屋の中に入れた。

同じ部屋でも、アーチャが目を覚ましたあの部屋とはまた別格だった。六畳ほどの大きさしかないが、緑の絨毯が土を覆い隠すようにして床一面に敷かれ、小タンスや本棚、文字のつづられた用紙の束が雑然と積み上げられた大きな机が、壁際にきちんと配置されていた。岩肌の天井からは、四つのランプがシャンデリア風に部屋を明るく照らし出している。それに、どうもこの部屋は、他とは違って若干暖かい。

「ここに座って、さあ」

三脚の丸椅子を机の下から引っ張り出しながら、ジャーニスは優しく促した。アーチャは崩れるように腰かけた。

「まずは、うん、心を落ち着けて。君はこれからの生活において、知っておかなければならないことが山ほどあるからね」

ジャーニスはそう言って、机の上に置いてある『キャッチランプ補給』と書かれた底の深い金属性の箱の中に切れかけのランプを投げ入れ、持ち手付きの丸いフタで封をした。世間でよく知られるキャッチランプとは、貧乏人がこぞって用いる“倉庫用の明かり”だった。油も火も使わない、電気を利用した充電式のキャッチランプ

は、人々の注目を集め、一斉を風靡した画期的な調度品だった。しかし、その使い勝手の悪さが次第に利用者の癇に障るようになり、このキャッチランプは広く、倉庫や納屋などに用いられるようになった。つまり、アーチャの目覚めたあの部屋は、それらと同然の扱いらしい。

「あまり時間がないからかいつまんで説明するけど、一度しか言わないから、よく聞いてくれ。まず君は、今日からドレイとなった」

目玉がひっくり返ったように視界が真っ暗になった。アーチャの目からは悔し涙が溢れんばかりだった。

「噂には聞いてたけど、本当にこんな所が存在していたのか……」

アーチャの声がうつろなのは、自分に課せられた現実を完全に理解した確かな証拠だった。ジャーニスは机に寄りかかりながら、アーチャと同じくらい深刻そうな表情をしていた。

「アーチャくんがさっき言った通り、ここは陽の光さえ届かない海の地下室だ。僕たちは、このアクアマリンと呼ばれる牢獄のような所でドレイとして働かされているんだ。ちなみに僕は、このアクアマリンが築かれた二年前からずっとここにいる」

二年前の自分を思い返していたアーチャは、ふと、先ほどのジャーニスの言葉を思い出した。

「あんたさっき言ってたよな？　ここには数多くの種族が囚われてるって。それはどういうことなんだ？」

ジャーニスは眼鏡のレンズをうっすらと覆っていた砂埃をドレイ

服で拭き取ると、そのレンズを通した大きな瞳でアーチャをしっかりと見た。

「つい最近まで地上で生活していた君になら、現在の世界戦争の戦況がどういったものかよく分かっているだろう？　ヒト族とヒト族の無意味な争いに、他の様々な種族たちが巻き添えを食っているんだ。ヒトには無い、生まれ持っての特異な血と力が欲しいためにね……そして、ルーティー族という混血の新種まで生まれてしまったんだ」

一度大きく息を吸い込み、ため息のように吐き出しながら、ジャーニスは腕を組んで首を横に振った。

「そうして完成したのが、アクアマリンと呼ばれるドレイ収容所だ。この海底洞窟は、元々マープル族……一般に人魚族と呼ばれる者たちが住み家としていたのだが、世界一の軍事力を誇るグレイクレイ国の将軍、ザイナ・ドロが魔力を手にするために侵攻した。人魚族の一人を拷問し、この隠れ家のありかを聞き出してね」

「あのいかれじじい！」

アーチャが地団駄を踏みながら悪態をつくと、ジャーニスは思い切り顔をしかめてアーチャを睨んだ。

「もう分かっているとは思うけど、僕たちを昼夜監視しているのはザイナ・ドロの部下たちだ。今はまだ早朝で巡廻の手も緩いが、もしそんなことを聞かれでもしたら今日の昼には公開処刑だ……まあ、地上へ出られるにこしたことはないけどね」

「話を戻そう」と言わんばかりに、ジャーニスは咳払いをした。

「ここアクアマリンに、ドレイとして様々な種族たちが集められたのは、それからすぐのことだった。グレイクレイ国軍の非道な行いは“血族狩り”と呼ばれ、今も尚世界の各地で続けられている。そして、ドレイという形で均一の種族となった彼らには、各々の力に合った仕事が与えられた」

指折り何かを数えながら、ジャーニスはぶつぶつと語り始めた。

「体力面、肉体面に優れたイクシム族は謎の神殿作りに回されている。栽培を専門とするノッツ族は、人魚族の魔力を借りて、とある特殊な部屋で野菜や果物、麦や豆などの穀物類を大量に生産している。一日一食の食事が食べられるのも彼らのおかげだ。大人しくて手なずけやすいゴーレム族は、主に“面倒くさい”仕事をやらされていることが多いかな……掃除とか、朝の挨拶とか、食事を運ぶとか。いつも悪巧みしか考えていないギービー族は危険な上、集団生活が大の苦手でね。別室で監禁されている。僕のようなルーティーの血が混じったヒト族は、敵対国の地理や軍事形態を分かりやすくデータ化する作業をしなければならない。比率としては、イクシム族が最も多く、僕らルーティー族は最も少ない」

そう説明して、ジャーニスは机の上に広げられている用紙の束を物々しく指差した。

「そして、アーチャくんが知りたかった『数多くの種族が囚われている理由』についてだが、それは人魚族に課せられた仕事が大きなヒントを握っている、と僕は思う。というのも、実は僕にも詳しいことは分からないんだよ。だが、ここに運ばれてくる資料やサンプルデータを読み解いていくうちに、重大なことが分かってきたんだ。人魚族はアクアマリンという魔力の結晶体を使って、軍が密かに開

発を進める殺戮機械に命を吹き込んでいるらしいということ。そして、その殺戮機械をベースに種族たちの血を混ぜ合わせ、どの種族の血が戦闘で最も効力を発揮するかという、機密の生体実験をこの地底で行っているということ」

にわかには信じ難い話が続いた。アーチャはうなずくことさえしなかったが、自分でも驚くほど落ち着き払っていた。頭のこぶがまたひりひりと痛み始めたのは、ある程度の緊迫感から抜け出た証ではないだろうか？　ある一つの大きな疑問が膨らんだのは、その直後だった。

「だったら、俺は何でここへ来た？　俺は純粋なヒト族だ」

アーチャは、ジャーニスの両目が丸くなるのを見た。ひどく驚いている様子だ。

「今、何て？」

ジャーニスは即座に聞き返し、穴の開くほどアーチャを見つめた。

「だから、俺は純粋なヒト族だって、そう言ったんだ。今の話を聞いてると、まともなヒト族は不要みたいに聞こえたけど？」

アーチャは見開かれたままのジャーニスの瞳を、しっかりと見つめ返し続けた。アーチャは、予想以上に大きな反応を示したジャーニスを見ていて、少しずつ不安になってきた。

「それは……んー……そうだったのか……。それじゃあ聞くけど、君はどうやってここまで来た？　なぜつれて来られた？」

答えをもらえないまま、逆に質問を返されたことはアーチャにとって心外だったが、すぐにその答えは出た。

「分からない、何にも、さっぱり。周りがうるさくて、頭が痛くて、ふと目が覚めたら、もうここにいた」

「昨夜は何を？」

ジャーニスは素早く切り返した。

「昨夜からの記憶はないけど……でも俺は確かに、昨日まで仲間のヴァークスって男と一緒に行動してたんだ。ガムダンの国で……そう、標的にしていたレイオット・ペムズの大屋敷に忍び込むための偵察をするために」

アーチャの最後の言葉を聞いた瞬間、ジャーニスの眉がピクリと動いた。

「仲間とか、忍び込むとか……アーチャくん、君は一体何者なんだい？」

好奇心にかられたような口調でジャーニスは聞いた。アーチャはあごをしゃくって胸を張った。

「世界に名高き窃盗団、“ルースター・コールズ”っていやあ、ちまたで知らない奴はいないぜ？　俺はその一味でね……みなしごで身寄りの無い俺を、一年前、首領のヴァークスが拾ってくれたのがきっかけさ。今はある秘密の大会に出場中なんだけど、こんな状況じゃあしばらく身動きがとれそうにないな」

一章　アクアマリン　4

そう言って、アーチャはドレイ服から土埃を払い落とした。シマウマのような服を見つめれば見つめるほど、自分が惨めに思えてくる。だがジャーニスは、そんなアーチャにいささかの興味を持ったようだった。

「ルースター・コールズという窃盗団の名は聞いたことがないが、君はたくさんの地を訪れて、自由な生活を送っていたんだろうね。羨ましいよ……僕はここに来る前からもずっと、軍の下でドレイのような生活を強いられていたんだ」

返す言葉がなかった。確かに、かつては束縛のない自由な生活を送っていた。だが、それはもう過去の話だ。地上では当たり前だったことが、ここでは幸せと思えてしまう……そんな地下世界に、アーチャは突然、何の予告もなしに落とされてしまったのだ。今のアーチャに、わずかな希望の兆しさえ与えられることはなかった。

互いに思い耽り、そのせいでしばらくの沈黙が続いたが、やがてアーチャが静寂を破った。

「そういえば、俺がここへ来たことをどうして知ってたの？」

ジャーニスがアーチャを『新人くん』と呼んだのを、アーチャはまだうっすらと覚えていた。その質問を受けて、ジャーニスはゆっくりと顔を上げた。先ほどと何ら変わりない、優しい笑顔がアーチャを見つめ返した。

「聖地にあった湖を覚えているかい？　あの湖は海とつながっていて、よく外界から潜水艇がやって来るんだ。新たなドレイを連れて

来たり、交替の兵士が乗り降りしたりするためにね。つまり、アクアマリンと地上とをつなぐ出入り口のようなものなんだ。無論、アーチャくんもその潜水艇に乗ってここへやって来た。僕はたまたまその現場に通りかかっただけさ」

「通りかかったって……ただそれだけの理由で、俺をこんな所までつれて来て、色々と親切に語ってくれるっていうの？　そりゃ有り難いけどさ……」

アーチャが飛びっきり怪訝そうな視線を送り続けると、ジャーニスはあっさり観念したようだった。朗らかな笑みが真剣な顔つきに変わり、誰か聞き耳を立ててはいないか、扉の向こう側を透かして見ているようだった。

「見ず知らずの君を手厚くもてなす理由……」

ジャーニスは低音の小さな声で、仰々しく切り出した。吐息の音すら立てまいと、アーチャは自分なりにジャーニスを気遣った。

「それは、僕の計画に君の力が必要だと考えたからだ。追々分かってくるとは思うけど、ここには君のような若者は数少ないんだ。それに、みな長期の肉体労働でかなり疲労している。この秘密の計画には、アーチャくんのようなたくましい若者の力が必要不可欠なんだよ」

「その計画って？」

アーチャはすばやく聞いた。

「アクアマリンからの脱走さ」

ジャーニスはもっとすばやく答えた。

その時、扉が音もなくパッと開いた。その向こう側で、ドレイ服に身を包んだ青白い顔の男が、おずおずと二人を見つめて立っていた。

アーチャは思わず飛び上がった。血色の悪い肌をした貧相な顔つきの男が、腰をわずかに曲げて低い入口をくぐり、部屋に入って来る……。

「コッファか……ノックぐらいしてくれよ」

大丈夫、とアーチャに目配せした後で、ジャーニスはコッファという男と向き合った。コッファは後ろ手で扉を閉めると、アーチャとジャーニスを交互に見下ろした。なんとこの男、頭髪が天井をこするほど背が高いのに対し、横幅は小柄なジャーニスより細い。マッチ棒のようだとアーチャは思った。

「彼はコッファ。僕と同じルーティーの血が流れる混血だよ。コッファ、彼はアーチャくんだ。昨日来たばかりの新人だよ」

アーチャは小さくお辞儀をし、コッファを見上げた。不安げな表情でアーチャを見つめ返している。

「ジャーニス、おめえ、まさか、この子にも?」

鼻の詰まったようなくぐもり声に弱い東部なまりを交えながら、コッファは恐る恐る聞いた。予想どおりの軟弱な喋り方だ……しかも、言葉を発する毎に唇は震え、何かに怯えているようだった。

「外で聞いてたんだろう? 察しのとおり、アーチャくんにも僕ら

の計画に参加してもらうことに決めたんだ。聞けば、彼はいっぱしの盗賊だって言うじゃないか。きっと頼もしい仲間になるよ」

「ちょ、ちょっと待てよ。まだその計画に乗るとは……」

「アーチャくん。君だって、こんな所で一生を終わらせたくはないだろう？　君だけじゃない……僕だって、他のみんなだって同じ思いだ。僕は二年も待った……もう待ちくたびれた」

ジャーニスの決然とした口調と真剣な眼差しに、アーチャは二の句が継げなかった。それはコッファも同じだったらしく、うつむいたままドレイ服の汚れた裾を指でこすっている。

「それはそうと、僕に何か用でもあったのかい？」

コッファの顔を覗き込みながら、ジャーニスは穏やかに聞いた。

「ジクス、元気ねえ。昨日から、部屋で寝たきり。病気かどうか、ジャーニス分かるか？」

コッファの青い顔が更に青くなるのをアーチャは見た。

「残念だけど、コッファ、僕は医者じゃないよ。だけどもし午後の休憩時間までに、レクイテッド占領地から送られてきた膨大な量の暗号文を解読できたら、二人で見舞いに行こう」

コッファは気の乗らない声で「分かった」とだけ言い、訪れた時より更に顔色を悪くして部屋を出て行った。

「ジクスって誰？」

扉が閉まるとほぼ同時に、アーチャは聞いた。

「僕と同じルーティー族だよ。僕たち三人は昔からの長い付き合いでね。コッファとジクスは脱走計画の参加者として数えているんだけど……コッファがさっき言ったとおり、ジクスは近頃体調が思わしくないようでね。そうか……とうとう床に就いたか」

無理もない、とアーチャは心底納得した。こんな陽の当たらない所でドレイ生活を強いられていれば、風邪の一つも患ったことのないアーチャでさえ油断はできないだろう。

「さて、そろそろ時間かな」

懐中時計で時間を確認しながらジャーニスは言った。アーチャはドキリとした。

「いいかい？　決して兵士たちに逆らってはいけないよ。彼らは血に飢えた野獣そのものだ。ムチを振るための口実探しに余念がなく、相手が誰であろうと、理由がどうであろうと、暴力でねじ伏せてくる。……これを持っていきなさい」

ジャーニスは机の引き出しからもう一つ、銅製のくたびれた懐中時計を取り出すと、それをアーチャの首にかけた。かなり年季の入った懐中時計だが、まだ元気に動いている。『12』という数字の右上には、太陽の絵が描かれている。おそらく、朝と夜とで絵柄が変わる仕組みになっているのだろう。

「時計なんて、何の役に立つの？」

懐中時計をしげしげと眺めながら、アーチャは不思議に思ってそう聞いた。

「よく考えてごらん、アーチャくん。太陽の存在しないこの地下世界で、他にどうやって時間を知ることができるんだい？　兵士たちは気まぐれで、決まった時刻に休憩や睡眠の時間を挟んではくれない。休憩無しの上に朝まで労働……そんな状況はまれじゃないんだ。ここで正確な時間を知らないと、次第に体内時計は狂わされる……そうなれば、精神状態が不安定になるのも時間の問題だ」

錆び付いたチェーンを手に握り、時計を服の中にしまい込みながら、アーチャは嘆息を漏らした。

「俺って今、かなり面倒なことに巻き込まれちゃってるみたいだな……まじで」

二人は扉の前までやって来ると、もう一度顔を見合わせた。アーチャは、まるで戦地へ出兵していく兵隊の一人にでもなった気分だった。

「労働の開始時刻は朝の六時から七時までと不規則だが、寝坊はしちゃいけないよ。三秒の遅刻が命取りになるからね。食事は十二時から十六時の間に一回。味に文句を言わず、全部しっかりお食べ。睡眠開始時刻は零時から六時まで……とにかく、睡眠をしっかりとること、いいね？」

「分かった、ちゃんと守るよ」

返事をしながら、アーチャはジャーニスが父親のような存在に感じて、ちょっぴり嬉しかった。十年前に両親を亡くして以来、ずっ

とみなしごだったアーチャを拾ってくれたヴァークスは、とうてい父親と呼べる柄ではなかった。忘れかけていた親の温もりを、アーチャは少し思い出すことができた。

「例の計画についての詳細は、また後日、君と二人で会える時間があったら話すよ」

アーチャは肌寒い岩肌の通路に一歩踏み出してから、もう一度ジャーニスを振り返った。できればずっと一緒にいてほしい……そう言いたかった。だがアーチャには、それが叶わぬ願いだということが分かっていた。

「ジャーニス……ありがとう」

アーチャはもごもごと言った。ジャーニスは「さあ、行って」とだけ言い、アーチャの背中を軽く押し、笑顔で送り出してくれた。

これから始まろうとしていることが、アーチャにとってどんなに過酷であったとしても、それを乗り越えるための勇気と力を与えてくれる、そんなジャーニスの笑顔がそこにあった。

二章　惨劇の始まり　1

時計を見ると、六時を二分ほど過ぎていた。聖地には相変わらずひと気が無く、ジャーニスの言っていた労働開始時刻までには、まだ時間の余裕がありそうだった。湖のほとりで今後の生活を案じているのも悪くないが、見渡す限りの穴という穴から誰かがこちらを覗いていると思うと、一秒だってこんな所にいるのは御免だった。アーチャは仕方なく、目が覚めたあの細長い窮屈な部屋に戻ろうと決心した。

しかし、すぐに考えを改めた。案の定、通ってきた通路を忘れてしまっていた。忘れたというより、初めから認識していなかったのかもしれないが、今や、ジャーニスのいる部屋の位置すら定かではなくなっていた。どこを見ても穴だらけの風景が広がるばかりで、その場でじっと考えれば考えるほどより複雑化していく。

その時、静まり返った聖地に一組の足音が聞こえてきた。音は段々と大きくなり、こちらに近づいているのは確かなようだが、どの穴から聞こえてくるものなのか、さっぱり見当がつかない。アーチャの緊張は一気に高まっていった。

「そこで何をしてる?」

アーチャは急いで振り向いた。赤い軍服を着用し、その上から褐色の丈の短いマントをはおった、背の高い凛々しい顔立ちの男が、アーチャの立っている湖の岸辺に向かって、段々と歩み寄って来るところだった。金色の頭髪とマントが、一歩前進する度になびいた。

「そこで何をしてる?」

兵士はもう一度聞いた。ここに来て目覚めてから、ドレイ服を着

ていない人物を見るのはアーチャにとって初めてだった。おそらくこの人がジャーニスの言っていた、“血に飢えた野獣”に違いない。アーチャは、何もやましいことは無いとばかりに兵士と向き合った。

「道に迷ったんだ」

アーチャは自信たっぷりに、しかもやたらと強気になって答えた。将軍の操り人形たちより貧弱な存在であり続けるなんて、アーチャには我慢できなかった。

「お前の番号は？」

兵士は聞きながら、アーチャの全身を上から下まで丹念に観察していた。また、それはアーチャも同じだった。純粋なヒト族らしく、その身なりから兵士であることにまちがいはないようだが、アーチャは、この男から全く敵意を感じなかった。どちらかと言えば、ジャーニスのような穏和な性格の持ち主のようにも見て取れる。

それになぜだか、この兵士とは初対面の気がしなかった。ずっと前に、どこかで会ったことがあるような気がする……。

「俺の番号？」

様々な思いに耽りながら、アーチャはいぶかしげに尋ねた。

「服の襟に書いてあるだろう。……違う、前ではない、後ろだ」

アーチャは襟を前までたぐり寄せて番号を探した。兵士の言う通り、子供の落書きのような汚い文字で、『８１２』という数字が黒インクのようなもので書き記されている。

アーチャが数字を読み上げようとしたその時、またどこからか足

音が聞こえてきた。今度は、重たそうなズシンズシンという足音が折り重なって聞こえる。

「ゼル・スタンバイン少佐！」

「問題でも？　何か大きな問題でも？」

暗緑色の軍服を身にまとった二人組みの巨漢が、我先にと転がるように走って来た。二人はゼルという名の兵士の前で急ブレーキをかけたが、一人は前につんのめり、一人はそれに足を取られて無様に吹っ飛び、しばらくそのまま動かなくなった。

「何か大きな問題でも？」

巨漢の一人がもう一人の巨漢を助け起こしながら、まるで何事もなかったように清々しく尋ねた。二人は軍服から土埃を払い落とすと、横に整然と立ち並んでゼルからの命令を待った。

その時、アーチャはこの二人が双子であることにようやく気付いた。脂っこい肌、額の赤いニキビ、押しつぶれたような鼻、分厚い唇。そのどれもが、まるで鏡で照らし合わせているかのようにうり二つだ。

「この８１２番を北２５の部屋まで案内しろ。だが、どうやら新人らしいから、一からちゃんと教えてやってくれ」

ゼルはきびきびと命令を下し、マントをひるがえして足早に立ち去っていった。ゼルが右手奥の通路に姿を消すまで双子は敬礼を続け、アーチャはその後ろ姿を目で追った。やがてゼルの姿が完全に見えなくなると、双子のどちらかが突然アーチャの頭をわしづかみにし、ズルズルと引きずり始めた。アーチャはあまりの痛さにその

手を振り解こうともがいたが、その力は凄まじいものだった。ついに、いつもの悪い癖が口を突いて飛び出した。

「手を放せ！　放しやがれ！　このデぅ……アイタッ！」

アーチャは通路の暗がりまで投げ飛ばされ、岩壁に後頭部を強打してのた打ち回った。たんこぶが更に肥大し、激しい痛みで頭が割れそうだった。

「こんなに威勢の良い奴は初めてだ。こりゃ今日から楽しめそうだぜ」

痛みでヒーヒー喘ぎ続けるアーチャを片手で摘み上げながら兵士は言った。アーチャは殺気立った目で睨みつけてやったが、双子の四つの瞳はアーチャの怒気を掻き消してしまうほど冷たく、残忍だった。脂肪でたるんだまぶたが瞳に覆いかぶさり、より一層目つきが悪い。

「あの生意気な若造の命令どおり、ここでの“ルール”ってやつを、死なない程度に一からみっちり叩き込んでやる。８１２番、今日から俺たちはお友達だぜ」

アーチャは何も言い返すことができない自分が悔しくて、ただ拳を握るしかなかった。

スタンドに引っ掛けられた帽子のようにブラブラと漂いながら、アーチャは間もなくして、元いた部屋に戻ってきた。オレンジ色のランプの明かりで照らし出された部屋の様子が、そのかすんだ視界に入るとほぼ同時に、アーチャは道端に投げ捨てられる空き缶のようにポイと部屋に放り込まれた。中にいた数名がひそひそとざわめいた。

「よく聞け、カスども！」

狭い出入り口で押し合いへし合いしながら、双子がだみ声を揃えて叫んだ。

「労働開始は十分後だ！　それまで俺たちのお友達が逃げ出さないよう、ちゃんと見張っててくれよ！」

そう言い残し、ゲラゲラと下品な笑い声を発しながら双子は行ってしまった。

二章　惨劇の始まり　2

アーチャはうずくこぶをなだめるようにさすりながら、上半身をゆっくりと起こした。アーチャのすぐそばに座り込んでいた二人から、非難がましいささやき声が発せられた。声の調子から、どうやら男と女らしい。

アーチャは顔を上げてその二人を見た……ノッツ族だ。先ほどは気付かなかったが、以前、写真で見たとおりの姿形をしている。こげ茶の肌に、黄緑の長髪、小さな黒い瞳、骨張った全身。アーチャは十七年間のびのびと生きてきたが、ノッツ族の実物を見るのは生まれて初めてだった。自然豊かな国のへんぴな村にある大きな森に、集団でこっそり隠れ住んでいるという噂を聞いたことがある。だが、人目を避けて生活する種族なんてものは、珍しくも何ともない。このたぐいの種族から言わせれば、むしろ、他人に私生活をさらけ出すヒト族の方がどうかしている。

「なあ、お前たち、ノッツ族だろ？　自分たちの髪の毛だけを食べて生活してるって、本当か？」

アーチャは四つん這いになり、ゆっくりと近づきながら出し抜けに聞いた。二人は急いで顔を見合わせ、アーチャと目を合わせないようにした。他の種族と接しにくいという気持ちはアーチャにも良く分かるが、何も目線まで逸らすことはないだろう。

「なんだよ、返事くらいしてくれても……いいじゃないか」

アーチャは二人の顔を覗き込んだせいで、言葉が喉で詰まるところだった。ノッツ族の顔は、よく見ると、ヒト族とはかなりかけ離れていた。顔のすべてのパーツが真ん中に集合し、鼻はやすりで削

られたように低い。穴だけがそこに存在しているかのようだ。しかも、男女の区別をつけることは極めて難儀だった。髪型も一緒だし、眉毛の濃さも一緒、全身は二人揃って枯れ枝のように細い。おそらく、同族の者たちにしか理解できない領域なのだろう。

「あなた、彼らのお友達になった。だから私たち、あなたとはお話しできません」

その横顔に向かって怒鳴りつけてやりたかったが、アーチャはとっさに我慢した。ネズミが喋れたら絶対にこんな声だろうと確信させるような高声だ。きっと女性だろう。そんな乱暴なことはしたくない。

「あいつらと接点を持ったのは俺だぜ？　お前たちには関係ないじゃないか」

「彼らのお友達、みんな死んだ」

今度は男の声が言った。アーチャから見て左側に座っている方だ。

「死んだって？」

アーチャは聞いたが、二人は顔を見合わせたまま硬直してしまった。よほど答えたくない質問だったのだろう。

「態度が悪い人は、みんな彼らのお友達。そのお友達のお友達は、同じ扱いになる。……結局、みんな殺された」

しばらくしてから男は言った。どういうことなのか、アーチャはやっと理解できた。

「つまり、俺と関わる奴らはみんな殺されるってわけだな……ばかばかしい」

アーチャはもう、その二人を見ていたくなかった。興味本意で近づいたアーチャの自業自得だが、ノッツ族の連中があそこまで心配性だったなんて思いもしなかった。部屋の奥まで歩いて行く途中、ひそひそ声で話す二人の会話がアーチャにまとわりついてきた。

「……あの人も、……も、みんなそう。この部屋は……ばかり……」

それにしても、兵士たちに目をつけられたドレイが殺されてきたなんて、とても信じたくない話だ。他種族を好まないノッツ族の作り話でありますようにと、アーチャは心から願った。

ランプの明かりさえも届かない部屋のずっと端の方まで進み、アーチャはドカッと腰を下ろした。手を大きく左右に投げ出すと、何かにぶつかった。足だ。太い、ゴツゴツした両足が、アーチャの方に向かって無気力に投げ出されている。仰向けで、腰より上は裸だった。ピクリとも動こうとしない。アーチャはできるだけゆっくり、ひざ、腹、首へと目を動かしていった。本来顔のあるべきところに、一着のドレイ服がかけられている。

アーチャは小さな悲鳴と共に立ちあがり、ずるずると後ずさりした。こぶの痛みも、ノッツ族のことも、今後のことさえも、頭から綺麗さっぱり吹っ飛んだ。

そこで横になっていたのは……死体だった。

「ここへは近づくな」

どこからか聞き覚えのない低いしゃがれ声が聞こえ、アーチャの心臓が更に跳ね上がった。目を凝らしてよく見ると、死体の脇に人

が座っている。正座をして、死体をじっと見つめているようだった。

「何だって？」

アーチャは間の抜けた声で聞いた。心臓はまだ激しく鳴りっぱなしで、心は動揺を隠せていなかった。

「ここへは近づくな。去れ」

男は座ったまま、アーチャの方を見向きもしないで静かにそう言った。

「だって、どう見たってそれ……その……つまり……生きてないじゃないか……」

アーチャは男を気遣って言葉を濁らせた。それに、こんな光景を目の当たりにして、黙って立ち去るつもりもなかった。

「一体何があったんだ？」

男は突然立ち上がると、アーチャにぐいぐい詰め寄った。アーチャは男が近寄った分だけ逃げるように後退した。すると、ランプの明かりに照らされ、男の素性が明確になった。男は、ヒト族でもノッツ族でもない……イクシム族だ。

イクシム族はおそらく、とても人目につきやすくて、その見た目だけならこの世で最も恐れられる種族だろう。顔はヒト族に近いが、輪郭が大きすぎるせいで首がなく、横に大きく裂けた口の中には鋭利な牙が生え揃い、頭部には針金のような太い毛が四、五本だけまばらに伸びている。全身が岩のようにゴツゴツしていて、ゴリラのような体格だ。ドレイ服を着ていてもはっきりと分かる。

このイクシム族の場合、背はアーチャより頭二つ分ほど高い。これでもまだ小柄な方だ。

「どこの馬の骨かは知らねえが、俺たちに近寄るな！　目障りだ！　とっとと消えろ！」

男は声を落として怒鳴ったが、窮屈な部屋のあちこちに反響して何倍にも大きく膨れ上がった。アーチャはその怒声に押し出されるようにしてその場から遠ざかった。誰からも相手にされない自分が情けなくて、その悔し紛れにジャーニスからもらった懐中時計を眺めるしかなかった。六時十五分……もうそろそろ労働開始の時間だ。ふとあたりを見回すと、ノッツ族の二人もいなくなっていた。

「おーい。もう行かないとやばいんじゃないのか？」

アーチャは暗がりに向かって呼びかけた。返事はなく、歩み寄って来る気配も感じない。アーチャはとうとう苛立ち始めた。廃墟となった建物を好んで隠れ住むイクシム族を親友にしようとも思わないが、アーチャはどうしてもあの男を見捨てることができなかった。それに、ヒト族を理由もなく遠巻きにしてうじうじしている奴は許せない。

「おい！　聞こえてるんだろ？　さっさとしないと俺まで厳罰なんだぞ！　おい……」

アーチャのおせっかいがあだになった。無視して行ってしまえば良かったと、今頃になって後悔してももう遅い。遠くの方から、二人分の陽気な鼻歌が軽やかな足取りと共に近づいて来る……まちがいない、“あの二人”だ。

二章　惨劇の始まり　3

アーチャは男の方へ駆け寄った。男はイクシム族特有の鋭い牙を突き出して威嚇してきたが、アーチャはそれを物ともせずに声を張り上げた。

「今ならまだ間に合う。あいつらが来る前に急いでここを出よう。さあ、早く！」

男はまた牙を突き出した。だが、それはアーチャに向かってではない……その背後にだ。

二つの巨体が、今にもはち切れんばかりのサイズの小さな軍服を狭い入口に滑り込ませ、真っ赤な顔をして部屋に入ってくるところだった。あの様子では、もう逃げ場がない。

「８１２番！　お友達の８１２番！　三秒過ぎても聖地に来なかったから、こうして迎えに来てやった！」

先に入口を通過した方が、ランプの光に額の汗を点々と輝かせながら息苦しそうに言った。入口が以前より大きくなったせいか、もう一方の兵士は軽々と通過した。しかし、兵士がアーチャの目の前に立つと、そんな向こう側の様子が一切見えなくなってしまった。

「兄さん！　ジング兄さん！　８１２番の他にもまだいる！　二人いる！」

後からやって来たジングが、弟の肩越しにこちらを覗きこんだ。二人の並んだ顔を間近で見て、アーチャはやっと双子の分別方法が分かった。兄の方は、鼻の下になまずのような細いひげを伸ばして

いる。

「ニール。この部屋には反抗的なドレイが多いようだぞ。……あん？」

横たわるイクシム族の異変に気付いたジングが、ニールごとぐいぐい迫ってきた。ランプの光も漏れぬほどの圧迫感だ。すると、イクシム族の男がスッと立ち上がり、双子の前に立ちはだかった。アーチャは暗闇まで後ずさりし、今度は何が始まるのだろうかと案じているしかなかった。

「お前たちが殺した……お前たちが」

男の声は怒りで震えていた。アーチャは息を呑んだ。

「兄さん、こいつ、死んでるよ！　きっとあいつだ！　９１番だ！」

死体を指差しながら、ニールは楽しそうな弾んだ声で言った。

「ああ、俺も思い出したぞ！　体調不良を理由に俺の目の届かない所で休憩していやがった、あの９１番だ。ムチ一万回叩きの処罰で、確か１８０２回目でくたばった」

アーチャは耳を疑った。暗闇にうっすらと浮かび上がる双子のシルエットが、地獄に潜む鬼のように見えたが、アーチャは決してひるまなかった。むしろ、胸の内側からふつふつと込み上げる怒りを抑えることができないでいた。生を生として扱わず、命を玩具のようにもてあそぶこいつらを、絶対に許すことなんかできない。

「……殺してやる……殺してやる！」

アーチャが突撃しようと一歩踏み出したその時、イクシム族の男が絶叫しながら双子に飛び掛っていった。双子には勝るとも劣らない体格の持ち主だが、相手は二人だ。男は怒りで我を失っていて、見境のつけられない猛者と化していた。

拳を振り回し、牙を剥き出しにしても、双子の前ではハエが一匹飛び回っている程度のものだった。ニールは男の首根っこを持ち上げ、振り返った。

「兄さん、今日からこいつもお友達だね！　きっと９１番よりタフだよ！」

ニールはそう言ってジングと場所を交替した。二人は体を横にしなければ入れ替わることができなかったが、それでも何とかしてジングがアーチャの前にやって来た。ジングの股下から、男がじたばたしながら引きずられていく様子がうっすら見える。アーチャは歯を食いしばってジングを睨みつけた。そんな反抗的なアーチャの行動も、闇に紛れてジングには見えなかったことだろう。

「覚悟しとけよぉ、８１２番。遅かれ早かれ、お前もさっきの奴も、いつかこうなる」

ジングは横たわる死体に向かって唾を吐きかけた。その瞬間、怒りが頭を突き抜けて爆発した。頭の中が真っ白になり、目の前の光景が渦を巻いているかのようにぐるぐると回転している。ジャーニスの助言を忘れ、自分が何者かさえも忘れて……。

気付くと、アーチャのずっと前方でジングがうつ伏せで倒れていた。その向こう側で、ニールと男が取っ組み合いの姿勢のままアーチャを凝視している。

何が起こったんだ……アーチャは言い知れぬ不安を覚えた。怒り

で理性を失い、ほんの一瞬、意識がなくなった。

『どうしてあいつは倒れてる？　誰がやったんだ？　まさか、俺が？』

アーチャは自分の両手を恐怖に引きつった表情で見つめた。指を一本動かすことさえ、たまらなく怖かった。

「ジング兄さんが倒れてる！　死んだように倒れてる！」

ニールはどこからか、手の平サイズほどの黒いテレビリモコンのようなものを取り出すと、数あるボタンの一つに焦点をしぼり、その腫れぼったい指先を力強く押し当てた。すると、スズメバチの大群がリズム良く一斉に羽音を響かせたような、凄まじい警音が辺りに反響し、その音は少なくとも聖地の方まで届いていた。アーチャは何が起こるのだろうと不安になったが、大体の見当はついていた。

やがて、無数の足音が聞こえ、暗緑色の軍服が部屋を埋め尽くし、アーチャとイクシム族の男は無抵抗のまま……気を失った。

あれからどれくらいの時間が経ったのだろう？

闇の中で、アーチャはふとそう思った。全身が石のように重たい。まぶたさえも開かないほどだ。土の匂いがする……。

『俺、また寝てんのか？』

人生において、睡眠ほど無駄に過ごす時間はない。アーチャはまぶたを強引にこじ開けた。黄色い光が、視界いっぱいに広がった。

そこは、ランプの明かりに包み込まれた小さな空間だった。目の

前に立ちふさがる鉄格子と、通路が左右に伸びるその光景を目の当たりにすれば、誰だってここが牢屋の“内側”であることにすぐ気付くはずだ。時間は……七時を過ぎて間もない。

アーチャはうめいた。ジャーニスの部屋で語り合ったのが、一週間も前の出来事のように感じられる。とうてい部屋とは呼べないあの部屋で気がついてから、この牢屋に辿り着くまでの道のりは苦難の連続であったが、これから訪れる未来という時間に対しても、アーチャは生きる希望など一つまみも持てやしなかった。

それは、まさに絶望のうめきだった。

「この牢屋があいつらの間で何て呼ばれてるか、お前知ってるか？」

アーチャは驚いて声のする方へ振り向いた。イクシム族のあの男が、壁にもたれて座っていた。その瞬間、アーチャの頭の中にこの男の容姿がはっきりとよみがえった……。

『俺がここにいるそもそもの原因は、こいつが動こうとしなかったからじゃないか！』

「鳥かごか？　それとも動物園か？　自慢じゃないけど、俺はここに来たばかりなんだ。そんな質問……」

「実験生物控え室だ」

男はアーチャの言葉を無視して答えを述べた。

「へえ。それがどうしたって？」

アーチャは強がったが、顔いっぱいに広がる恐怖の色は隠しきれなかった。

「つまり、俺たちは殺される。殺戮機械の材料として」

男は何のためらいもなく、よどみない口調で言った。アーチャの胃袋がズシンと落ち込んだ。これは空腹のせいであってくれと、アーチャは切に願った。

「どうして殺戮機械のことを知ってるんだ?」

アーチャはジャーニスから機密の生体実験のことを教えてもらったが、それはジャーニスがルーティー族の混血で、特殊な仕事を課せられているがために知ってしまった事実だった。

「兵士たちの立ち話を盗み聞きしただけだ」

ランプの明かりから逃げるように顔を背けながら、男はにべもなくそう言った。

静寂が訪れた。閑静とした地下牢に、足音の一つさえ響くことはなかった。アクアマリンは地上から隔絶された地下深くにある海底洞窟だが、この暗さと寒さから、牢屋は更に地下に作られた場所のようだった。壁は岩ではなく土で、粘土ようなねばりっけがある。高い天井は今にも崩れてきそうだった。

きっかり十五分経った。ジャーニスからもらった懐中時計が指し示しているのだから、間違いない。アーチャは、ここからこっそり抜け出すにはどうしたらよいものか、錠のかかった扉とにらめっこしながら考えを巡らせていた。

「どうして俺なんかを助けようとした?」

どんな手を使っても開きそうにない屈強な鉄格子の扉と格闘する

アーチャに、男は探るような静かな声で聞いた。諦めたように扉を二、三回蹴っ飛ばした後、アーチャは荒い息遣いのまま男を振り返った。イクシム族特有のゴツゴツとした黄土色の肌が、土壁の背景にしんみりと馴染んでいた。

「さあね」

アーチャは冷たく、吐き捨てるように言った。アーチャはいつまでも根に持つタイプではないが、男の言う通り、実験の材料としてこのまま死を迎える運命ならば、今回ばかりは話が別だ。それは、仲間の一人を殺された、かわいそうなイクシム族だろうとも例外ではない。

「俺は世界でも指折りのおせっかい野郎でね。それがあんたの癇に障ったっていうなら謝るよ」

アーチャはドカッと座り込み、あぐらをかくと、男と真正面から向き合った。こうして見てみると、その図体の大きさに改めて驚かされた。男は相変わらず顔を背けたままだったが、しばらくすると、暗闇の中から巨大な輪郭を浮かび上がらせ、体とは反比例して小さいその瞳でアーチャを見た。

「ヒト族のくせに、俺を助けようなんてバカな真似するからだ」

アーチャは飛びかかって力いっぱい殴ってやろうかと膝を立てたが、一瞬でそんな気は萎えてしまった。男の表情は、今までになく朗らかだった。

「こう見えて、お前には感謝してるんだ。死んだ仲間のカタキ討ちとまではいかないが、あの兵士をぶっ飛ばしてくれた……ありがと

よ」

男の言葉を耳にしても、アーチャは素直に喜べなかった。むしろ、歯と歯の間に食べ物が挟まっているような気分の悪さだ。自分のことをこんなにも敬ってくれている者に対して、どうしていつまでもむきになっていたんだろう？　この男を恨んだところで、何の解決にもならないというのに。

二章　惨劇の始まり　4

「その……俺の方こそ……その……きつく当たって悪かった」

きちんと座り直しながら、アーチャはもごもごと言った。そして、気を取り直したように急いで付け加えた。

「俺はアーチャだ。あんた、名前は？」

今しがたの表情はどこへやら、男は急に顔をしかめた。

「知ってどうする？　俺たちはどうせすぐに死ぬ。もしこの牢屋から出られたとしても、またドレイとしての生活が戻ってくるだけだ。俺には、１０３という番号だけで十分だ。それに……」

男は更に顔をしかめた。イクシム族の醜悪そうな表情そのものだ。それは、先ほどの天使のような眼差しを帳消しにするばかりか、あれは錯覚だったのではないかと疑わせる、そんな表情だ。

「お前、ついさっき、眼鏡の男と会ってただろ？」

アーチャは小さくうなずいた。どうやら、ジャーニスと二人で部屋を出て行くのを見ていたらしい。

「あの連中とは関わるな。こんな地獄でも、長生きしたいと願うなら尚更だ」

「ジャーニスは悪い人じゃない。俺にアクアマリンのことを詳しく教えてくれたんだ」

「なぜ？」

アーチャは口をパクパクさせただけで、何も答えることができなかった。ジャーニスたちとの脱走計画を、そう易々と口にするつもりはなかった。

「今さら警告しても手遅れだが、これだけは言っておく。このアクアマリンから逃げ出そうなんて考えは捨てろ」

アーチャはギクリとした。言われっぱなしなのは癪だが、ここまで図星を突かれるとさすがに言い返す言葉が見つからない。

「フン！　ルーティー族の考えそうなことだ。お前をだしにして、まんまととんずらするつもりだろうな。あいつらは並外れて賢い。関係を保ちたいなら、それなりの覚悟をしておくんだな」

アーチャのイライラが再び戻りつつあった。先ほどの謝罪を抹消してやりたい気分だ。だが折りしも、何者かの足音が地面を伝って近づいてくるのが分かった。アーチャはここに来てたくさんの足音に耳を澄ませてきたせいか、この足音の持ち主が自分たちにとって危険な存在ではないということがうっすらと分かった。

やがて、赤い軍服と褐色のマントを着込み、胸ポケットに様々な形のバッジを輝かせた、あの兵士が二人の前に姿を現した。ゼル・スタンバイン少佐だ。

「立て」

ゼルはそう言うと、鍵束から銀製の鍵を選び出し、扉の錠前に差し込んで二度ひねった。鍵はあっさりと外れ、重たい鉄の扉がゆっ

くりと開かれた。金属のこすれる嫌な音が辺りに鳴り響いたが、アーチャは、そんなことはどうでもいいと思えるほど緊張していた。もし、本当に実験の材料にされることになったら？

「出ろ」

ゼルは短い命令を繰り返した。二人は素直に従った。

「１０３番、８１２番。今日はおとなしく部屋でじっとしていろ。作業に加わる必要はない。処罰もなし……その代わり、飯抜きだ」

その瞬間、安堵感からか、それともただの空腹だからなのかは分からないが、アーチャの腹が弱々しく鳴った。飯抜きは厳しいが、死ぬよりはマシな結果だろう。

「どうして飯抜きだけで済んだんだろう？」

ゼルに連れられて歩を進めながら、アーチャは男に囁いた。男は黙って歩き続けたが、おそらく、頭の中はアーチャと同じ考えでいっぱいだったはずだ。そうでなければ、ゼルの背中をまじまじと見つめながら歩くものか。きっと、アーチャと共通の何かを、この兵士から感じているに違いない。

三人はやがて現れた、横幅の広い急な階段を上り、聖地に辿り着いた。労働時間だというのにひと気はなく、相変わらずの殺風景が広がっている。どうやら、働く場所はここではないらしい。

部屋に戻ってから、二人は一言も口をきくことはなかった。アーチャの場合、今はただ、あの寒くて暗い牢屋から生きて出られたという幸運に、ただただ感謝するしかなかった。それに、あのゼルという兵士にも心から礼を言いたい。

だが、どうしても分からない。あれだけの問題を起こしたにも関

わらず、なぜ軽い処罰だけで済んだのか。ゼル少佐はあの双子より立場が上だし、うまく説得してくれたのかもしれない。いや、もしかしたら、一見薄情なあの双子が情けをかけてくれたのかも……それはないか。

結局何も分からないまま、アーチャはその日を空腹に耐えながら過ごしたのだった。

二章　惨劇の始まり　5

朝の五時四十分。アーチャは寝返りをうった拍子に頭を壁にぶつけ、おおげさに驚いて飛び起きた。しばらくボーっとしていると、二日目のドレイ生活の始まりを告げる合図がやって来た。ゴーレム族の一人が部屋の出入り口の真ん前までやって来て、からっぽな声で叫んだのだ。

「労働開始三十分前です！　みなさん、今日もしっかり働きましょう！」

どうやら、これがゴーレム族の仕事の一つらしい。巨大な木彫り人形のような姿をしたゴーレム族は、よく富豪の大屋敷に召し使いとして雇われていることが多い。だから、こういった兵士たちが面倒くさがるような仕事はゴーレム族にとってはうってつけなのだ。従順で、文句の一つも口にしないゴーレム族は、兵士たちの大のお気に入りというわけだ。

ゴーレムが立ち去ると、アーチャの周りで眠っていたノッツ族の面々が、あくびと疲れ切った表情と共に目を覚まし始めた。ノッツ族は、昨日アーチャと話した二人の他にも六、七人ほど増えているようだが、誰が誰だがさっぱり見当もつかない。何せ、みんな同じ体格と顔をしているのだ。番号を覚えるのでさえ一苦労だ。

三十分後。今日こそ、アーチャは時間通りに聖地へ行くことができた。あのイクシム族の男も一緒だ。昨日二人が部屋に戻った時、あの死体はなくなっていた。だがきっと、それで良かったのだろう。あの男も、これで踏ん切りがつくはずだ。

聖地には時間通りに集まった他のドレイたちが湖を囲うようにして綺麗に並んでいた。イクシム族、ノッツ族、ゴーレム族、そして、ルーティー族……総勢で五百人ほどはいるだろうか？　それぞれが

生気を失った虚ろな瞳と土気色の表情で、青緑色に輝く天井からの光を見つめている。まるで、この壮麗な光輝を、大地を焦がす灼熱の太陽の代わりとして崇めるかのように……。

好奇心を剥き出しにして辺りをキョロキョロしていたアーチャは、人魚族が岸に身を乗り上げている姿を、ゴーレム族のどんぐりのようなたくさんの頭の間からかいま見た。

ノッツ族に出会った時もアーチャはそこそこ興奮したが、それも人魚族と比べれば雲泥の差だ。『人魚のうろこ』はどの地方にも出回っていない、盗賊でなくとも喉から手が出るほど欲しがる、希少価値が高い代物なのだ。アーチャの所属する窃盗団、『ルースター・コールズ』が作った“絶対いつか手に入れるお宝リスト”に『人魚のうろこ』が入っているのもうなずける。

ジャーニスの話から、いつかここで会えるのではといささか期待してはいたものの、まさか本物の人魚族をこの目で見ることができるなんて、アーチャは夢にも思っていなかった。人魚族はこんな海底洞窟に住んでいるものだから、地上でもその美麗な姿を目撃した者は数少ない。上半身は水で出来ているかのような、繊細な布で織られた衣に包まれ、下半身は魚の尾ひれだ。噂通り、その瞳は海のように青く、ダイヤモンドのような輝きを放っている。そう、まさにその瞳の輝きこそが『アクアマリン』なのである。

「時間だ！　全員持ち場へ移動！　駆け足！」

突然、ずっと前の方で兵士の一人が声を張り上げてそう叫んだ。その言葉どおり、聖地にいた何百という数のドレイたちが、己の持ち場に向かって駆け出し始めた。アーチャは高波に呑まれるように、何の抵抗もできないまま押し流されてしまった。気付くと、イクシム族のゴツゴツとした肌に囲まれており、アーチャは仕方なくその流れに乗った。ここで踵を返そうものなら、押し潰されて全身が粉々になってしまうかもしれない。

アーチャはそのままある穴へと入り、しばらくその狭い通路内を走り続け、やがて、聖地にも負けないほど巨大な大部屋に辿り着いた。アーチャは、空間の中央にそそり立つものを見て肝を潰した。

それは、黄金に輝く神殿だった。まだ建造途中だが、土台の真ん中に築かれた踊り場付きの階段は二階部分まで完成しており、それだけでも十分な見応えはある。ジャーニスの言っていた神殿作りというのが、まさかここまで壮大なものだったとは。兵士たちはこれほどまでに壮麗な建物を、すべてドレイたちの手で作らせたというのだろうか？　一体何のために？

光彩を放つ黄金の神殿に、いつまでも見惚れている暇はなかった。集まったイクシム族たちはすでに作業を始めていたのだ。壁際に高く積まれたたくさんのレンガを運び出したり、そのレンガに得たいの知れない黄色い液体を塗ったり、大きな岩石を削ったり、車輪付きのイカダのような台の上に十メートル以上はある石柱を十人がかりで載せたり……。

黙々と作業をこなす何百というドレイたちは、見渡す限りイクシム族だ。それを見て、アーチャは自分がここにいることがますます場違いなように思えてきた。力仕事は怪力のイクシム族にはもってこいだが、純粋なヒト族にとっては過酷そのものだ。

その時、軍服姿の兵士が十数人ほど姿を現した。全員が暗緑色の服に、軍指定の白と緑の帽子を浅くかぶっている。その中に、ジングとニールの双子も混じっていた。アーチャは液体塗りの作業場までとっさに疾走し、兵士たちに背中を向けてしゃがみこんだ。ペンキ塗り用の大きな刷毛を手にすると、イクシム族の手つきを見よう見まねして、兵士たちからなるべく目立たないようにした。とはいっても、周りのイクシム族とその体格を比べれば、アーチャなんてまだほんの子供だ。双子の、特にジングに見つかりでもすれば、どんな恐ろしい処罰（仕返し）が待っているか想像もつかない。

アーチャは双子のいる方をちらと見た。神殿を指差して何か熱心に話していた。ジングの痛々しく腫れ上がった左の頬が、ニールの

顔で覆われて見え隠れしている。アーチャは再びイクシム族に成り済まし、どうかあと三日くらいは気付かれませんようにと心底願った。そんな矢先、液体を塗りつけたレンガの表面が金色に変化していったことに、アーチャは目を丸くして驚いていた。

飯の時間まではあっという間だった。昨日から腹が悲鳴を上げっぱなしだったので、ゴーレム族の集団が深皿いっぱいに野菜やら肉やらパンやらを詰め込んで現れた時は、思わず小声で歓声を上げた。だが、それらは兵士たちにすべて持っていかれてしまった。

「なんだよ、もったいぶりやがって」

次のゴーレム族の集団がやって来た。今度は、平たい大皿の一面に緑色の豆が敷き詰められている。アーチャが目を疑うのと同時に、ゴーレム族の抑揚のない声が周囲に響いた。

「今日の食べ物は、パナッツ高山地方の大豆を再現した“お豆”ですよ。残さず食べよう」

大皿の一つを作業場に置いていくゴーレム族には何の悪気もない。そんなことはアーチャにも分かっていた。だが、『これ』が一日に食べることのできるただ唯一の食べ物だというのか？　冗談にも程がある。アーチャは、ゴーレム族の一人に文句を言ってやろうと意気込んだが、そんな暇はなかった。なんと、今まで大人しく作業をこなしていたイクシム族の面々が、目の色を変えて豆にむさぼりついている。アーチャはとっさに『お豆争奪戦』に加わったが、イクシム族の体格の良いこと。まるで壁だ。アーチャは簡単に弾き返されて床に転がったが、皿からこぼれ落ちた一粒のお豆を見逃しはしなかった。

味は無い。むしろ、食べなければよかったとさえ思えてきた。口の中にお豆のわずかな甘みが残ってしまったせいで、食前より空腹

感が倍増し、喉も渇いた。アーチャはふと、ここへ来る前の食生活を思い返した。美味いものでもなかったが、少なくとも腹いっぱいまで食べれたし、自分の分を他人に取られるなんてこともなかった。

「お前たちってほんと、並外れた生命力の持ち主だよ」

まともな食べ物さえもらえず、十分な休憩も与えられないこんなドレイ生活をよく続けられるものだと、アーチャはイクシム族のタフさに感心してそう呟いた。

二章　惨劇の始まり　6

ゴーレム族が皿を回収するためにまたやって来ると、作業は自然と再開された。約三十分程度の休憩だったが、アーチャにとってはそれで十分だった。この空腹を紛らわすためには、とにかく体を動かすしかないのだ。

それから一時間も経った頃、レンガに液体を塗るというだけの単純な作業に飽きてきたアーチャは、周囲をちらちらと見回して、作業の流れや兵士たちの目配りなどを観察していた。兵士たちはムチと剣をベルトに備え、ドレイたちを何とかして痛めつけてやりたいと言わんばかりに、目をぎらつかせながら徘徊している。一発のくしゃみさえも許されない、そんな張り詰めた空気が辺りを満たしていた。

「あ……」

アーチャは思わず立ち上がった。十メートル以上もある一本の巨大な石柱がバランスを崩し、山積みのレンガに向かってゆっくりと倒れていく……。

鼓膜を麻痺させるような凄まじい轟音と振動がアクアマリン全体に広まった。砂埃が天井高くまで舞い上がり、そのせいで神殿の金色がくすんだ。次にアーチャが見たのは、あるイクシム族の一人が兵士たちから暴行を受けている姿だった。取り囲む兵士たちの中に、あの双子も混じっている。イクシム族は地面にひれ伏し、頭を手で抑えてムチの連打に堪えていた。

「てめえ、よくも……もう少しで押し潰されるところだったぞ！」

叫びながらムチを振り下ろしているのはジングだった。空気を切

り裂くビュンビュンという音と、岩のようなイクシム族の肌にムチの末端がぶち当たるビシビシという音が重なった。むごたらしい悲惨な光景だ……。

確かに、過失はイクシム族にあるのかもしれないが、それを兵士たちが寄って集って暴行を加えるなど言語道断だ。だが、アーチャが頭にきた理由はそれだけではない。それは同じ血の通う仲間たちの反応だ。全員が見て見ぬふりを決め込み、作業を再開させている。俺たちには一切関係ないという態度だ。

どんな状況においても自分の身だけを守り、兵士に逆らわない手段が最も賢明な選択だということを、彼らはよく知っているのだ。アクアマリンに閉じ込められている以上、そんな考えを抱いてしまうのは当然と言えば当然である。しかし、こんな地獄のような所で心が腐ればもう終わりだ……すべてが駄目になってしまう。

だが少なくとも、あいつの心はまだ腐っていなかった。

「もう、許してやってくれないか？」

イクシム族の１０３番……根性悪のあの男が、兵士の群れに向かって声を張り上げた。兵士の一人が振り向いた……ジングだ。

「何だぁ、おい……今、何て言った？」

男はひるまなかった。

「許してやってくれって言ったんだ。ゲスチン」

ジングの表情に怒りがみなぎり、腫れた左頬の赤みが顔中に広がった。ジングはゆっくりと歩み寄り、大きく右足を振り上げて男を蹴り上げた。男の巨体は宙を舞い、ズシンと地面を打ち鳴らして叩きつけられた。

「よく見たら、てめえ、昨日のイクシム族じゃねえか。あの牢屋から運良く生きて出られたって噂は本当だったらしいな」

そう言って、ジングは渾身の力を込め、男に向かって何度もムチを振り落とした。殺気立った小さな瞳が、男を殺そうと奇怪な輝きを放っている。

「死ね！　死ね！　死ね！　死……」

ムチが突然、その動きを止めた。ジングが馬鹿力を加えても、ピクリとも動かない。ムチの先端を誰かががっちりと握りしめているから当然だ……アーチャがそこに立っていた。

「へへん！　助けに来てやったぜ！」

ズキズキと痛む右手でしっかりとムチを握り直しながら、アーチャは陽気に言った。男は首を横に振り、声にならない声でこう言った。「逃げろ」と。

ジングの顔に戦慄が走った。

「やっぱり生きていやがったか、８１２番」

武器を手に持ったたくさんの兵士たちに取り囲まれながらも、アーチャはいつもの自分を見失わなかった。

これでいいんだ……これが人として正解なんだ。アーチャたちの心は、まだ腐っちゃいないのだから。

「８１２番……今度こそ、今ここで、てめえをなぶり殺しにしてやる」

絶体絶命の状況で、アーチャは笑っていた。挑発するような、不敵な笑みだ。

「俺が８１２番？　そりゃ違うな。俺の名前はアーチャだ」

ジングの表情が怒りに歪み、顔中から汗を滴らせた。

「数字で呼び続けてドレイたちを支配しようなんて考え、俺には通用しないからね。だから、俺は絶対に本当の自分を見失ったりはしない」

ジングの一撃を皮切りに、兵士たちのアーチャに対する暴行が始まった。ムチを入れられ、蹴りを喰らい、唾を吐きかけられ、それでもアーチャはじっと耐え続けた。段々と気が遠くなり、痛みさえも感じなくなり始めた時、またあの声がした。騒ぎを止めようと、声を枯らして叫んでいる。薄れていく意識の中でアーチャが最後に見たのは、真っ赤な軍服を着たあの男だった……。

アーチャは全身にほとばしる激痛のせいで目を覚ました。頭の上のたんこぶが、体中の至る所に分裂してしまったかのようだった。足の指一本でさえ動かすことができない。

突然、アーチャは自分が今、ふわりと優しい温もりに包まれたベッドの上で横たわっていることに気がついた。地上に出られたのかもしれないと心を躍らせたが、右側にそびえる岩の壁や、土でできた天井を見る限りでは、どうやらそうではないらしい。アーチャはため息して、何故自分がここにいるのかを思い出そうとした。だが、脳味噌を働かすだけで頭が割れそうなくらい痛むので、なかなかうまくいかない。

確か、イクシム族のあの男をかばって、そして自分がボコボコに

されて、それから……。

「目が覚めたようだな」

ゼルの声がした。だが、姿が見えない。アーチャはゆっくり上半身を起こし、部屋全体を見回した。小ぢんまりとした部屋に（一瞬、アーチャはここがジャーニスの部屋かと錯覚した）、ゼルが一人で立っていた。

「どうして俺はここに？」

アーチャは小さな声で尋ねた。今は、ただ声を出すのでさえ辛い。

「お前を含めて三人が暴行を受けたが、幸い、他の二人は軽傷で済んだので部屋へ送り届けた。だがお前の場合、重傷の上に騒ぎばかり起こす常習犯だ。このまま帰すわけにはいかない」

「さっきのは俺じゃなくて……」

「どんな理由であれ、ここの兵士たちに歯向かうことは決して許されることではない。さあ、これを飲むんだ」

ゼルは水の入ったグラスと共に怪しげな白い錠剤を押し付けながら言った。アーチャは渋々とそれらを受け取った。

「鎮痛剤……痛み止めだ。それを飲んで、もう一度よく寝ろ。今晩中には部屋へ送ってやろう」

そう言ってサッとマントをひるがえし、ゼルは部屋を出て行ってしまった。アーチャは手に持ったままのグラスと錠剤をしげしげと

眺めた。ゼルとこの薬品をどこまで信用できるかは分からないが、とにかく今は、全身が内側から殴られているかのように痛い。早く楽になりたい……その一心で、アーチャは胃袋の中へ錠剤を一気に流し込んだ。たちまち、強烈な睡魔がアーチャを襲った。アーチャは空のグラスを握りしめたまま布団の中に潜り込み、そのまま深い眠りについた。

深夜。アーチャはゼルに連れられて部屋へと戻って行った。痛み止めのおかげでゆっくりと歩けるまでに回復していたが、まだ体中の節々がズキズキと痛む。そんなアーチャにとって、ゼルの部屋を出た直後に待ち受けていた急な坂道は、かなり酷だった。

ノッツ族の睡眠集団をまたぎ、アーチャは、部屋の奥まで歩いて行った。イクシム族のあの男が、アーチャの帰りを待っていた。

「よう、帰って来たぜ……えーと……１０３番」

男は首を横に振った。真剣な眼差しでアーチャを見つめ返している。

「１０３番という名で呼ばれ続けていた俺は、本当の自分と、イクシム族の誇りを忘れてしまっていたんだ。……アーチャ、お前のおかげでそのことに気付くことができた。これからは俺も、自分の名で生きていく。１０３番ではない、アンジという俺自身の名で」

二人は互いを本当の名で呼び合い、その日を境に親友となった。種族という名の血の壁を越えた『友情』が、アーチャとアンジを強く結びつけるきっかけとなったのだ。惨劇は、地下にも降り注ぐであろう、淡い月明かりと共に消え去った。

三章　いかれたじいさんと滅びの一族　1

アーチャとアンジが共に行動するようになってから四日が過ぎた。いつの間にか、暴行による傷の痛みも薄れ始めていた……あの日以来、アーチャの周りでは小さないざこざさえ起きず、過酷な労働と少なすぎる食事を除いては、特に問題なく時間が過ぎていった。だが、それは少なくともアーチャの周りだけの話だ。

兵士たちによる体罰は幾度となくアクアマリンのどこかで繰り返されており、何より最も性質が悪いのは、彼らが“情け”という言葉を知らないという点だった。どこかで暴力が始まれば、『お豆』に群がるイクシム族のように、兵士たちはたちまちその臭いを嗅ぎつけて加勢する。そうして弱ったドレイは、アーチャのように簡単な手当てを受けて作業場に戻されるか、そのまま実験の材料になるかのどちらかだった。

ジャーニスからは音沙汰なしだった。労働開始時刻に聖地で見かけはするものの、話し掛けられるような雰囲気ではない。私語が見つかればほんの一秒でムチが飛んでくる上、その内容はアクアマリンからの脱走を示唆するものだ。時と場所を厳選しなければならないことは、アーチャにだってよく分かっている。

もし、ジャーニスが教えてくれた脱走計画の話が真実で、首尾よく事が運べば、それはアーチャにとって願ってもないチャンスだ。いや、アーチャだけではない。あわよくば、アンジや他の大勢のドレイたちだってこのアクアマリンから脱出できるかもしれない。

「前にも言っただろう」

ノッツ族が深い眠りに落ちた夜遅く、アンジは小声で、だがはっきりとそう言った。それは、アーチャが脱走計画の真相を語った夜のことだった。

「長生きしたいならあいつらとは関わらない方がいいって。ルーティー族の血が混じったヒト族なんて、精神不安定のいかれ狂ったヘンタイに決まってる」

アンジの反応は、アーチャの予想を遥かに上回るほどひどいものだった。特別な間柄になった今のアーチャでさえ、アンジの断固とした意志を根本からくつがえすことはできなかった。

「とか何とか言って、本当は計画に参加するのが怖いんじゃないの？」

こう見えて、アンジはなかなか頭の切れる男だ。アーチャの挑発に乗るような無駄はしない。

「計画に参加するジャーニス以外の二人って誰なんだ？」

「一人はコッファっていうノッポで、ちょっと田舎くさい感じの男。もう一人は病気がちなジクスって男。みんなルーティー族だ」

アーチャは、アンジにもっと興味を引かせようと、疑念を抱かせるような言葉の並べ方をした。

「病気がちって？」

そら来た。

「体調が悪くて寝たきりだって聞いたけど……詳しいことは分からないよ。なあ、アンジ。今度は俺と一緒にジャーニスのところへ行ってみないか？　その機会があればの話だけど」

そんなことはわずらわしいとばかりに、アンジは天井を向いてあくびを一発吐き出した。

「もう寝よう、アーチャ。俺は今日もクタクタだ」

その日から更に二日が経った、まだ眠気の残る朝のこと。しばらくは安泰だったアーチャの身に、予期せぬ事態が舞い込んできた。事の起こりは、アーチャがいつものようにアンジの隣で目を覚ました、その時だった。

「おはよう」

「……おはよう」

ランプの眩い明かりから目を逸らしながら、アーチャは誰かと挨拶を交わした。相手は老いぼれたガラガラ声だ。アンジの声に似ているが、わずかに違う。アーチャは辺りを見回した。暖かそうな毛皮のコートに身を包み（ツルツルの頭は見るからに涼しげだが）、顔中にしわを寄せた謎のじいさんが、アーチャをボーッと眺めて座っている。挨拶を交わした相手が誰なのか、まるで分かっていない様子だ。またそれは、アーチャも一緒だった。

「あんた、誰？」

アーチャは思わず聞いた。その身なりから、アクアマリンに不適当な人物であることは明らかだ。

「わしは……その……あの……だが……つまり……しかし……であるからして……ようするに……そうそう、じいさんだ」

いかれてる。アーチャは確信した。いかれてるんだ、このじいさん。

「おじいさんだってことは見れば分かるよ……」

半ば苛立ちながらアーチャは言った。その時、アンジがやっと目を覚ましてくれた。のっそりと半身を起こし、寝ぼけ眼で二人を交互に見つめている。

「おはよう」

じいさんが一本調子で言った。アンジは体をブルッと震わせた。目は見開かれ、口は半開きだ。

「アーチャ、一体どこの誰なんだ?」

アンジは不快を露にして聞いた。また面倒なことになるなあ、という口調だった。

「アンジ。こちら“じいさん”。きっと、どっかの老人ホームで問題を起こして、ここに連れて来られたんだ」

言い終わると、アーチャは自分の頭を突っつき、首を横に振った。アンジは少しだけ理解したようだった。

「じいさん、名前は? いつ、どこから来た? ドレイ服はどうした? 俺の言ってる意味、分かるよな?」

アンジはぶっきらぼうにまくしたてた。じいさんは言葉を一つ一

つ理解するのに時間がかかっているようだった。

「名前は……そうそう、じいさんだ」

しばらくして、じいさんはやっとそれだけを答えた。アンジはこの時、アーチャの送ったサインをようやくすべて承知できた。このじいさんはいかれてる。

三章　いかれたじいさんと滅びの一族　2

「とりあえず、このおじいさんを兵士たちに預けよう。ゼル・スタンバインっていう兵士の所なら安心だ。彼なら信用できる」

アーチャはそう言って、懐中時計を見た。六時をわずかに過ぎてはいるが、ゴーレム族はまだ顔を出していない。ゼルに引き渡す時間の余裕ならかなりあるはずだ。それに、ゼルの部屋の位置については、何の心配もない。アーチャはこの一週間で、この部屋に通じる穴も、ゼルの部屋に通じる穴も、作業場に通じる穴も、みんなしっかり覚えていた。というより、アンジからその覚え方を教わったのだ。

まず、中央の湖を針時計に見立てる。ほとりから突き出る石筍のような大岩を12時と定め、2時の方向がアーチャたちの部屋。9時の方向がゼルの部屋。6時の方向が作業場だ。といっても、同じ方向に必ずしも穴が一つだけとは限らないので、そういった場合は穴の『形』で覚えるしかないらしい。

「そっちを持って……さあおじいさん、散歩にでも行こうか」

二人が息を合わせて立ち上がらせると、じいさんの顔がにんまり微笑んだ。

「散歩、散歩、楽しい散歩。はて……杖はどこにやったかな？」

じいさんはあたりをキョロキョロと見回した。部屋のどこにも、杖らしきものは見当たらない。

「こんな、いかにも騒ぎを起こしそうなじいさんは、とっととその

ゼルって兵士の所へ連れて行こう」

コートの中まで杖を探し始めたじいさんを横目で恐る恐る観察しながら、アンジは言った。アーチャは肩をすくめてうなずいた。

二人はじいさんを振り向かせ、ランプの明かりに照らされた所まで引っ張って行った。その時、何の前触れも無く、ランプがチカチカと明滅した。部屋が暗くなり、一寸先さえも闇に包まれた。しばらくして明かりが点いた……また消える……点く……消える……また点く……消える。そして、点いた。

「うぁ……！　うわあああああぁぁぁ！」

鼓膜をつんざく凄まじい叫び声が部屋でガンガン反響した。ランプを見つめていたじいさんが突然、断末魔のような甲高い叫び声を発し、アーチャとアンジの手を振り解いて地面に突っ伏した。まだ叫んでいる。

この騒ぎで、眠っていたノッツ族全員が残らず飛び起き、パニックになって部屋中を駆け回った。更には、じいさんと競い合うようにして絶叫し始めたではないか。アーチャとアンジは耳を塞ぎ、すっかり調子も良くなったランプの明かりから逃げるようにして、部屋の奥まで急いで避難した。このけたたましい騒音の真っ只中でも、アーチャには、こちらに走って近づいて来る兵士たちの足音が聞こえてくるようだった。

「うるさい！　黙れ！　さっさと静まらんか！」

アーチャの予想通り、四、五人の兵士が肩で息をしながら部屋へと飛び込んできた。てんやわんやしていたノッツ族は、兵士の発した怒声で瞬時に凍りつき、その場で彫像のように固まって動かなくなった。じいさんは背中を丸めて地面にうずくまったまま、小さく

嗚咽している。兵士たちがその周りを取り囲っても、それは同じだった。

「立て！　立てと言ってるだろう！　この老いぼれが！」

兵士の一人がフードをわしづかんでじいさんを引っ張り起こした。じいさんは両手で顔を覆ったまま、まだヒーヒー喘いでいた。兵士たちよりも恐ろしい何かが、じいさんを苦しめているようだった。

「何かの手違いか？　こんな年寄りがここにいるわけがない」

兵士の一人が、血管の浮き出たしわしわの両手と薄毛の頭髪に注目しながら言った。

「それに、ドレイ服も着せられていない。見ろ、靴まで履いてる」

兵士たちはそのいかめしい顔を寄せ合い、じいさんをくまなく調べ続けた。見れば見るほど怪しいじいさんだ。

「とりあえず、控え室にでもぶち込んどけ。こんな失態をジェッキンゲン大佐に見つかりでもしたら、当直の俺たちが左遷されてしまう。今日の昼前にはここに着くはずだから、それまで粗相のないように心がけろよ」

兵士の一人が声をひそめてそう言ったのを、アーチャもアンジも聞き逃さなかった。ゼル・スタンバイン少佐がアクアマリンのすべてを指揮しているのだとばかり思っていたアーチャは、そのジェッキンゲンという男が何者なのか興味をそそられた。

兵士たちが顔を覆ったままのじいさんを連れて部屋を出て行く際、こんな話し声が聞こえた。

「この部屋の誰かが手引きをしたとは考えられないか？」

アーチャは背筋が凍る思いをしたが、兵士たちが戻って来る気配はなかった。

「助かったぜ」

額の汗を拭い取りながらアーチャは言った。直立不動のノッツ族は枯れ木そのもので、兵士たちが立ち去った後も硬直したままだった。きっと、ムチが襲いかかって来ないという意外性に安堵しきったせいで、呆然としてしまっているのだろう。ドレイたちが早朝からお祭り騒ぎを起こしたにも関わらず、兵士たちが全く体罰を与えなかったなんて話は、きっと前代未聞だ。ジェッキンゲンという男に気付かれることを恐れ、事を大きく荒立てないように思考錯誤する兵士たちの姿は見ていて笑えるものだが、アーチャだって気を許すことはできない。アーチャのかつての叱責はすべてゼルの意志によって許されてきたが、ジェッキンゲンがそばにいるとなると、そううまくはいかないかもしれない。その男は、とんでもなく無慈悲で、アクアマリンにいる兵士全部を束にしたってかなわないほど残忍かもしれない……どうしても、アーチャにはそんな気がしてならなかった。

三章　いかれたじいさんと滅びの一族　3

「あのおじいさんって、結局は何だったんだろうな？」

その日の食事時間、アーチャは一人に一つずつ配られた『デンキイモ』にかじりつきながら、アンジにこっそり聞いた。デンキイモは舌がしびれるくらい辛くて、口を動かすのでさえ一苦労だった。

「さあな」

デンキイモを一口で頬張り、鋭い牙の生え揃った強じんなあごでむしゃむしゃと噛み砕きながら、アンジは興味なさげに言った。

「ただ一つ言えるのは、あのじいさんは完全にいかれてるってことだ」

アンジのじいさんに対する無関心さには納得のいく部分もあるが、なぜだか、アーチャはあのじいさんのことが心配で放っておけなかった。

「ゼルに頼んで、おじいさんを牢屋から出してあげられないかな？」

デンキイモの最後の一口を頬張りながら、アーチャは唐突に言った。アンジの胃の中でデンキイモがひっくり返った。

「じいさんの症状が移っちまったんじゃねえか？　さっきの状況を思い出して冷静に考えてみろ。あんなじいさんを野放しにしてたらこっちの身がもたねえ。正気に戻れ、アーチャ」

アーチャの頭の中に、アンジの言葉は半分ほどしか残っていなかった。ゼルにどううまく説明すればじいさんを助け出すことができるだろうかと、そのことばかり考えていたのだ。

ジングとニールの大きな体が作業場に現れたのは、ちょうどその時だった。ハイカラなけばけばしい色の服を着こなす、あごの尖った背の高い銀髪の男と、白いワンピースを着た小柄な少女が、双子の巨体に見え隠れして共に歩いている。双子の顔は、アーチャが今までに見たことがないくらいの笑顔だった。

「誰だろう?」

アーチャは呟いた。ちょうど、その周りでのん気に昼食をとっていた兵士たちが弾かれたように立ち上がり、真ん中の男に向かって敬礼したところだった。

「ジェッキンゲン・トーバノア。グレイクレイ国軍事総司令官、ザイナ・ドロ将軍のペットだ。前に一度、ここで見かけたことがある」

珍しくも何ともないと言わんばかりの口調でアンジは説明した。

「その後ろの女の子は?」

「知らないな……いや、ちょっと待て……ばかな」

アンジは平静を失い、いきなり四つん這い姿勢になったかと思うと、前方にあるレンガのうず高く詰まれた所へ移動し、その陰で背中を丸めて身を潜めた。少女をもっとよく見ようとしているようだった。

「マイラ族だ」

ようやく追いついたアーチャに向かって、アンジは震える声でそう言った。アーチャは鼻先で笑った。

「アンジ、お前こそ頭がいかれちまったんじゃないのか？　マイラ族は百年も前に滅びた種族だ。こんな所にいるわけない……」

アーチャが目にしたのは少女の後ろ姿だった。純白のたおやかな翼が背中を覆い隠し、しとやかに折りたたまれている。マイラ族である動かぬ証拠だ。

「本物か？　あの翼は本物なのか？　なあ、アンジ！」

高鳴る胸の鼓動のせいか、アーチャの声は自然と大きくなっていた。だがアンジはそのことを咎めようともせず、アーチャと同じくらい興奮して少女に見惚れていた。ただアーチャと違う点は、それを表に出さないということだった。

ジェッキンゲンと兵士たちの会話が聞こえてきた。二人はとっさに聞き耳を立てた。

「私が留守の間、ちゃんとドレイたちを見ていてくれたんだよね、君たち？」

虫唾の走る喋り方だ。兵士たちは揃いも揃って笑顔だ。

「もちろんですよ、ジェッキンゲン大佐！」

ジングとニールが気味の悪い笑顔のまま踊り出た。

「ご覧のとおり、今は食事の時間でして。ドレイたちにはこうした

適度な休憩を与え、腹いっぱい物を食べさせ、睡眠にたくさんの時間を費やすようにと言いつけております！」

ニールが兵士たちの食料を皿ごと引っつかみ、高々と持ち上げた。

「飯をおかわりしたい奴はいるか？　満腹になるまで食べたい奴はいるか？」

なんと珍妙な光景だろうか。兵士が豪勢な食べ物を高々と掲げ、「食べたいドレイは寄っといで」と叫んでいる。この機会をものにしない手はない。

「はーい、はい！　まだ食い足りないよ！」

アーチャはやんちゃにはしゃぎながら食べ物を受け取りに行くと同時に、ジェッキンゲンとマイラ族の少女にこれでもかと接近した。ジェッキンゲンの表情はわずかに笑顔だったが、それはアーチャのような弱い立場の者を小ばかにする、冷たい笑顔だった。シャベルのような輪郭に大きな黒い瞳と気取った口元、高い鼻が重なり、より一層性悪そうに見える。しかも、鼻の奥を強く刺激させる香水の匂いが体中から発せられている。

少女はずっと下をうつむいたままだったが、年齢はアーチャとさほど変わりないように見てとれる。今にも泣き出してしまいそうな表情がちらとうかがえた。本当にマイラ族だろうか？

深皿いっぱいの食料を脇に抱えてアンジの元へ戻ると、ジングがジェッキンゲンの目の届かない所で、歯を剥き出しにしてアーチャを睨みつけている姿が見えた。アーチャはおかしくて吹き出してしまいそうになるのを必死でこらえた。

「アーチャ、よくやったぞ」

野菜と肉とパンのご馳走を目の前にし、思わずよだれをすすりながらアンジは言った。周囲にいた大勢のイクシム族たちが、肉の香ばしい匂いにつられて集まり始めた。アーチャとアンジは自分が食べる分だけを取り、余った分はすべて他のドレイたちに分けてあげた。遠くの方から兵士たちの物欲しそうな視線が向けられているのを、アーチャはちくちくと感じていた。

三章　いかれたじいさんと滅びの一族　4

「あ、そうだ！」

両手をパンと叩きながら、ジェッキンゲンは声を張り上げた。久しぶりのまともな食事に舌鼓していたアーチャとアンジは、骨付きの肉にむしゃぶりつきながらも、声の聞こえる方へしっかりと耳を傾けていた。

「面白いおじいさんがアクアマリンの中に紛れ込んだっていうじゃないか。いえね、仲間外れが苦手な私は、自分だけ知らないことがあるなんて絶対に許せない性質でして。……この作業場にはいないのですか？」

「あのじいさんのことを気にかける奴がアーチャ以外にもいるなんてな。とんだ物好きだぜ」

肉を骨ごとガツガツと噛み砕きながら、アンジは愉快そうに言った。アーチャは言い返そうとアンジに詰め寄ったが、兵士の一人がそれを遮った。

「残念ですが、大佐。あの妙な老いぼれ……いえ……おじいさんは、敵国からのスパイではないかという可能性が浮上しまして。今日と明日を通して精密な尋問を……」

「はいはい、分かった分かった」

ジェッキンゲンは兵士の顔の前に手を突き出し、話すのをやめさせた。

「ですけど、ああ、本当に残念です。こうしてこの汗臭い作業場に立ち寄ったのも、そのおじいさんを見物しようと思い立ったからなんです。アクアマリンにはこんなにもおかしな人たちが働いているんだってことを、この子にも見せてあげたくって。少しでも興味を持ってくれればと考えたのです……でもやはり、あのハラペコくん一人では物足りないみたいですね」

ジェッキンゲンはうつむいたままの少女を見て、肩を落としたようだった。

「あいつ、気付いてないみたいだ。この中で自分が一番おかしな人だってことに」

“ハラペコくん”と呼ばれた腹いせに、アーチャはアンジにそう囁いた。

「では、明後日までにはそのおじいさんをここで働かせるように。でも、休憩はしっかり与えて。そうでもしないと、きっとすぐに死んでしまうでしょうから」

兵士たちは顔を見合わせ、はっと思い出したように突然笑い出した。それを見て、アンジがとっさに顔をしかめた。

「うへぇ。俺、あんなしらじらしい愛想笑い生まれて初めて見た」

ジェッキンゲンはまた大きく手を叩いた。あんまり音が大きいので、壁に反響して手拍子しているようだった。

「それと、大切なことをもう一つ」

兵士たちの表情に緊張感が戻った。

「つい先ほど、潜水艇の中でスタンバインから聞いたのですが、先日、イクシム族のドレイが一人死んだみたいですね」

兵士たちの顔の一つ一つに戦慄が駆け抜け、青ざめた。アーチャとアンジはためらうことなく兵士たちの方へ身を乗り出した。

「私、確かに言いましたよね？　ドレイは決して殺してはいけない、と。戦争の道具として生きた血が少しでも多く必要だから、と。確かにそう言いましたよね？」

「そ、それは……その……病死だったんです」

ジングが言った。もちろん嘘だ。そこにいる多くの者が分かっていた……おそらく、ジェッキンゲンもその一人だったはずだ。

「私は“冗談”は大好きですが、“嘘”は大嫌いでね」

ジェッキンゲンは落ち着き払った静かな口調で言った。ジングはたちまち笑顔を取り戻した。

「も、もちろん冗談ですよ！　ちょっと力が強すぎたみたいで……その……元から体が弱かったものでして、それで、ちょっとムチでしごいてやったら……」

「黙れ！　嘘つきは大嫌いだって言ってるだろう！」

ジェッキンゲンの怒鳴り声は壁に幾度もぶつかって反響し、拡声

器を使ったように大きくなっていた。辺りは水を打ったように静まり返った。恐怖に引きつった双子の哀れな表情が、ジェッキンゲンを見つめたまま凍りついている。

「二人とも、そこに並べ」

ジングとニールは言われたとおり、ジェッキンゲンの指差す方に向かって素直に並んだ。両足はガクガクと震え、腹に蓄えられた脂肪がそれにつられて揺れ動いた。

「私の目をごまかせられるとでも思っていたのですか？　ヒト族になりすました、醜いイクシム族のお双子さん」

ジェッキンゲンが双子に向かって右手をかざした。次の瞬間、双子の姿は、イクシム族特有の岩のような肌に包まれていた。軍服の所々が引き裂かれ、ゴツゴツとした黄土色の肌が顔を覗かせている。周りからどよめきが起こり、ジェッキンゲンの高笑いが広がった。

「無様ですねえ。ドレイを免れようとしてヒト族に姿を変えるなんて、無様すぎですよ、君たち。差し詰め、私がここを離れてからマープル族の力をこっそり借りたのでしょうけど、君たちの考えそうなことですよね、本当。まあ、そんなことにも気付かないでいた他の兵士たちの間抜けっぷりの方がよっぽど笑えますけどね！」

あの奸悪な双子の正体がイクシム族だったなんて……アーチャとアンジはショックのあまり口がきけなかった。それに、今、ジェッキンゲンは双子に向かって何を施したのだろう？　一瞬にして双子の化けの皮を剥がしてしまったではないか。

双子は返す言葉さえ見つからないようだったが、肩を怒らせて息を荒げているのは確かだった。イクシム族の姿に戻っても、その醜

悪そうな表情はほとんど変わっていなかった。

「このまま牢屋に入れるのも惨めですけど、ドレイ服を着させて労働させる方がもっともっと惨めですよね！　うん、決まり……んー……そら！」

ジェッキンゲンはぶつぶつと呟き、何か思いついたように指をパチンと鳴らした。その瞬間、双子の着ていた軍服がドレイ服に変わった。しかもなんと、白黒のしま模様が横ではなく、縦に並んでいるではないか……これでは、双子があまりにも惨めすぎる。ジェッキンゲンは満足したようにまた笑った。

「すごくお似合いですよ、二人とも！　今日から君たちもドレイとして心を入れ替え、身を粉にして働きたまえ。この神殿を一刻も早く完成させるために！」

ジェッキンゲンは回れ右をし、少女の肩に手を置いて優雅に歩き出した。アーチャはもう一度しっかりと少女を見ようとした。だが、先ほどのように目を凝らす必要はなかった。少女が自ら、アーチャの方を振り返ったのだ。大人びた綺麗な顔立ちに悲しげな表情を浮かべ、アーチャに助けを求めるように、その鮮やかな緑に輝く瞳をこちらに向けている。

少女を呼び止めようと、アーチャは思わず立ち上がっていた。アーチャの不意の行動に驚いたアンジは、手にしていたパンの欠片をポロリと落とした。

「いきなりどうした？　びっくりするじゃねえか」

パンを拾い上げながらアンジは言った。そして、突っ立ったままのアーチャを見て言い添えた。

「……おい、アーチャ。ジェッキンゲンを敵に回すようなことはするんじゃねえぞ。絶対だぞ」

三章　いかれたじいさんと滅びの一族　5

その日の夜、アーチャはなかなか寝付くことができなかった。今日一日だけで一週間も過ごしたような気分だ。謎のじいさんやジェッキンゲン、あの双子のことも気掛かりだが、何より、百年も前に滅びたはずのマイラ族の少女が、なぜこんな所にいるのかがさっぱり分からない。

マイラ族は人魚族さえもしのぐほどの強大な魔力を持ち、その力を使って空に島を浮上させたと伝えられている。だが今から百年前、天高く漂うマイラ族の浮遊島は、ある日突然、何の予兆もなく消えてなくなったという。地上でその時の様子を目撃していた人々は、口を揃えてこう言った……「光って消えた」と。

この手の専門家や学者たちは、巨大な浮遊島を一瞬にして消し去った謎の光に“フラッシュ”という名を付け、今尚『マイラ族の足跡』と題して研究が続けられている。

アーチャは目をつむった。目の前に広がる暗闇の中に、少女の姿がぼんやりと浮かび上がった。涙を流す少女に向かって、アーチャが語りかけている。

「大丈夫、俺は君の味方だ。だから安心して。俺は君を救いたいんだ」

アーチャはまた目を開けた。どうしても、あの少女のことを一時も忘れることができなかった。

朝が来た。

アーチャは、切れかけのランプがチカチカと明滅する薄明るい部

屋で目を覚ました。まぶたが鉛のように重い。

「労働開始三十分前です！　みなさん、今日もしっかり働きましょう！」

ゴーレムが目覚し時計代わりの大声を部屋中に響かせた。アーチャはまだ半数ほど眠ったままのノッツ族の上から、そのゴーレムを呼び止めた。

「ねえ、ここの部屋のランプ、すぐに取り替えてくれない？　こんなのじゃゆっくり眠れやしない」

ゴーレムはゆっくりと首を横に振った。アーチャはきょとんとした。

「ランプの交換はジャーニスの仕事。我々はそう命令された。だから、我々はランプの交換をしない」

アーチャはゴーレムの言っていることがよく理解できなかったが、とっさに、ある名案が浮かんだ。

「それじゃあ、今すぐこの部屋のランプを取り替えてほしいって、ジャーニスに伝えてくれ。これならいいだろ？」

「分かりました」

アーチャの思惑通り、ジャーニスに会う時間をうまく作り出すことができた。前に会った時から、すでに一週間以上が経っていた。

「ジャーニスがここに来るのか？」

満悦な表情のアーチャに向かって、アンジは不満そうに尋ねた。アンジはジャーニスのことを完全に信用しているわけではないので、アーチャとまだ密接な関係を保っていることが許せないようだった。

「アンジが心配してるようなことにはならないって。絶対に大丈夫！　アンジも一度ジャーニスと話してみるといいよ。そうすれば、彼がどんなに心優しい人なのか分かるはずだから」

数分後、ランプを手に持ったジャーニスが部屋を訪れた。アーチャの心は交換されたばかりのランプのように明るく輝いた。

「アーチャくん、久しぶりだね」

新しいランプに取り替えられたばかりの部屋は、まるでそこに太陽が昇ったかのようにまばゆかった。眼鏡の奥から熱い眼差しを送り続けるジャーニスは、無精ひげがまた少し伸び、わずかに痩せたように見えた。

「ジャーニス、久しぶり。あの、紹介したい人が……」

「それじゃあ、またね」

ジャーニスはアーチャの言葉を遮り、満面の笑みでそう言うと、そそくさと部屋を出て行ってしまった。アーチャの手に小さな紙切れを押しつけて……。

アーチャはしばらくそのくしゃくしゃの紙切れを眺めていたが、やがてそれがジャーニスからの手紙だということに気がついた。アーチャはアンジと向かい合って座り、ノッツ族から盗み見されないようにかがみ込んで黙読した。そこには、これぞジャーニスの筆跡

だと納得させられる、綺麗で丁寧な文字がつづられていた。

『明日の朝、五時頃までに僕の部屋へ来てくれ。君といつも行動を共にしている彼も一緒に。読み終わって地図を暗記したら、この手紙はちぎって部屋のどこかに埋めておいてもらいたい。兵士たちに見つかると厄介なことになるからね』

文字の下には聖地の分かりやすい絵図が描かれており、アーチャたちのいる部屋からジャーニスの部屋まで迷わないで行けるように、一本の線が引かれていた。

「ジャーニスのやることって、本当に抜かりがないよな」

アーチャはやたらと感心してそう言った。アンジはまだ気に染まないという表情だったが、アーチャはそのことに関しては何も咎めなかった。ジャーニスに対してアンジがそんなしかめっ面をできるのは、明日の朝までなのだから。

アーチャは指示されたとおり、手紙を地中に埋めようと伸びた爪を使って穴を掘った。途中、何か金属片のようなものに当たったが、気にせずアンジと一緒に掘り進め、バラバラに千切った手紙を地中に埋めた。

四章　また死……　1

次の日の早朝、アーチャとアンジは、静寂に包まれた薄暗い通路を聖地に向かって歩いていた。ジャーニスの手紙に書いてあったとおり、五時頃までにはジャーニスの元へ辿り着けるようにと、部屋の出入り口付近を陣取ってまで早起きしたのだ。そうでもしないと、もし間違ってノッツ族の足を踏みつけようものなら、またあの時のようなどんちゃん騒ぎになりかねない。それだけは絶対に避けなければ。

「まずいな」

通路から聖地全体をこっそりと覗きながら、アーチャが声を潜めて言った。

「見張りがいる……ほら、あそこ。前はいなかったのに」

アーチャに覆い重なるようにしながら、アンジも聖地を見回した。アーチャの言うとおり、兵士が一人、6時側の壁にもたれて立っている。

「でもあいつ、居眠りしてないか？」

アンジは目を凝らしながら言った。確かに、見張っているにしては不自然な体勢だった。体全体を壁にもたせかけ、腕はダラリとぶら下がり、首は左肩にかしげて口は半開きだ。

「よし、忍び足で駆け抜けよう」

抜き足、差し足、忍び足なら、盗賊であるアーチャの得意分野だ。針が床に落ちる音よりも小さな足音で、盗みに入った屋敷の中をよく機敏に動き回ったものだった……ルースター・コールズのみんなは、今ごろどうしているだろうか？

アーチャは過去の思い出を今だけ忘れることにした。アンジはアーチャの意見に何か言おうと口を開いたが、アーチャは聞く耳持たずにさっさと聖地へ飛び出した。仕方なく、アンジもすかさず後を追った。だがなんと、サイが平野を駆け抜けるような大きな足音が聖地に反響したではないか。とっさに、アーチャはジャーニスの部屋へ通じる穴へと脱兎のごとく駆け抜け、闇に向かって飛び込んだ。その直後、アンジが地面をドカドカと踏み鳴らしながらそれに続いた。

「おい、アンジ！　わざとやってんのか！」

肩で息をし、アンジを睨みつけながら、アーチャは声を殺して怒鳴った。見張りの兵士は寝ぼけ眼で周囲を見回していたが、やがてあくびと伸びをし、何事もなかったように見張りを再開させた。

「俺は手先も足先も不器用なんだ」

反省の色さえ見せず、アンジは堂々と言った。

「アンジ、お前って絶対に盗賊には不向きだよ」

服から土埃を払い落とし、気を取り直してからアーチャが忠告した。アンジは鼻で笑った。

「俺はコソコソと盗みなんか働かねえ。欲しい物は力ずくで奪う」

二人はランプの灯った薄暗い通路を歩き出した。ジャーニスの部屋への扉は、すぐに二人の前に現れた。

「ここだ」

言ってから、アーチャは扉をノックした。胸の鼓動が高ぶるのを感じた。中から地を踏む足音が聞こえると、やがて扉が半分ほど開いた。ジャーニスの朗らかな笑顔がそこにあった。忘れもしない、あの笑顔が。

「いらっしゃい。さあ、入って」

ジャーニスは、部屋を訪れたのがアーチャとアンジだということを確認すると、二人を部屋の中に招き入れた。ジャーニスの部屋は、以前アーチャが訪れた時とほとんど変わっていなかった。緑の絨毯、分厚い書物が並ぶ本棚、雑然とした机の上。『キャッチランプ補給』と書かれた箱も、今や木造の机と一体化してすっかり馴染んでいる。アーチャが丸椅子に座り、アンジが奥の壁に寄りかかると、ジャーニスは二人の間に立って切り出した。

「二人ともよく来てくれた。僕と同じ、アーチャくんにも仲間が出来たみたいだね。アクアマリンの中では、仲間という存在はとても心強い。えーと……お名前は？」

部屋を訪れてからというもの、アンジはずっとうさんくさそうな表情と目つきでジャーニスを見ていた。そのせいか、ジャーニスはたじたじになってアンジに名前を尋ねた。

「アンジだ。あんたのことはアーチャからよく聞いてる。何やら危険な計画をお考えのようで？」

アーチャは言葉を謹めとたしなめるように、アンジをするどく睨みつけた。だがジャーニスは、その表情から片時も笑顔を切り離すようなことはしなかった。

「計画のことまで知っているなら話は早い。アンジくん、もちろん君も僕たちの脱走計画に参加してくれるよね？」

アーチャはアンジを見つめた。アンジもアーチャを見つめ返した。

「断わる」

一瞬の静寂の後、アンジは答えを出した。

「アンジ！」

アーチャは立ち上がり、アンジにぐいぐいと詰め寄った。アンジは壁にもたれたまま、身じろぎもしない。

「言ったはずだぜ。俺は関わりたくないって。確かに、賢いルーティー族の考えた計画なら成功する可能性は高いかもしれない。だが、最終的に俺たちがどうなるかなんて分からないだろ？　俺たちは今、そういう立場に置かされているんだ」

「何を恐れてるんだい？」

激しい剣幕で睨み合うアーチャとアンジを引き離しながら、ジャーニスは言った。挑発するような口ぶりだ。

「何も恐れてなんかいないさ。俺はただ、あんたらを信用できない

だけだ」

「それは僕がヒト族とルーティー族の混血だから？」

ジャーニスの表情は、アーチャがこれまでに見たことがないほど威圧的だった。アンジの大きな体を見上げるジャーニスは、山よりも大きく見えた。

「忘れないでほしい、僕も君たちと同じ立場にいるということを。そうだろう？　僕だってアーチャくんのすべてを知っているわけではない。無論、それは君も同じだ。だけど僕たちは、このアクアマリンという名の牢獄で巡り合い、互いの素性も分からぬまま結束した。僕はアーチャくんと、アーチャくんは君と。地下を抜け出し、輝く太陽の下で生きたいという共通の思いを抱いていたからこそ、僕たちは悪夢のような状況下でも互いを信じ合うことができたんだ」

ジャーニスはアンジに向かって手を差し出した。アンジのことを信じるジャーニスの切な思いを、その右手から感じ取ることができた。

「だから今度は、僕と君とが結束する番だ。アンジくん、僕を信じてくれ。共に地上へ脱出するために」

アンジはジャーニスの差し出した右手をじっと見つめていた。何か深く考え込んでいるのだと、アーチャには分かった。やがて、アンジとジャーニスの会話が始まった。

「その右手、どこまで信用できる？」

「君次第さ」

「成功する自信は？」

「結果なんて誰にも分からない……だけど、僕は全力を尽くすよ」

「もし、手の平を返すような兆しが少しでも現れたら、俺はあんたと計画のことを兵士に告知する。それでもいいな？」

「言ってくれるじゃないか。君が計画の途中で怖気づいたりしないなら、僕は最後まで君たちを守る。約束だ」

「その言葉、眼鏡のレンズにでも書きとめておいてくれ」

「よし、決まりだ」

二人はしっかりと握手した。ジャーニスの熱い思いが、やっとアンジに届いたのだ。あの強情なアンジをこうも簡単に丸め込むなんて、やはりルーティー族の力は凄いものだと、アーチャは再び感心させられた。

四章　また死……　2

「計画の方はどこまで進んでる？」

椅子に座り直しながら、アーチャは興奮して尋ねた。アンジは部屋の隅からアーチャのすぐ脇に移動した。ジャーニスの声をもっとよく聞き取ろうと配慮したようだった。それは、アンジが本当にジャーニスのことを信じてくれた、確かな証拠だった。

「計画の準備は着々と進めてはいるんだけど、最近になってある問題が浮上した」

その問題とは何でしょう？　と問いかけるような視線で、ジャーニスはアーチャを見た。アーチャは聖地で見かけた見張りのことを思い出した。

「さっき、聖地で見張りをしてる兵士を見たんだ。眠ってたけど……」

ジャーニスの表情が少し曇った。

「見張りだって？　そうか……すまない、どうやら危険な目に遭わせてしまったようだね。だけど、その見張りのことと今ここで起こっている問題とが密接な関係にあるということを、君たちはまず知っておかなければならない」

ジャーニスは段々と声を低くして続けた。

「先日、ジェッキンゲン・トーバノアという男がアクアマリンに戻

って来たのは知っているね？　彼がここを去ったのは今から約半年前。アーチャくんがやって来るかなり前のことだ。手緩いと評判のゼル・スタンバインという少佐に指揮官が代わったことで、兵士たちは自由気ままにドレイを扱い、好き勝手するようになった。もちろん、早朝からの見張りなんてやるわけがない。今日になって突然見張りが現れたのもそのせいだろう。ジェッキンゲンが戻って来たことで警備状態が再強化され、脱走計画が困難になったことに間違いはないはずだ」

「そのジェッキンゲンって、もしかして魔法を使える？」

アーチャがやぶから棒に聞いた。

「ジェッキンゲンは戻ってきたその日に、俺たちの目の前で、双子の兵士の正体を見破ったんだ。魔法か何かを使って、あっという間に」

ジャーニスの表情が更に険しくなった。

「彼が魔力を備えてるって話は聞いたことがないよ。そもそも、魔法の力は人魚族だけに与えられた神の力だ。アクアマリンが彼の体の中に宿っているというなら話は別だが……」

「魔法を使える種族ならまだいるぜ」

アンジがすかさず割って入った。アーチャはジェッキンゲンという男と一緒にいた、あの少女のことを思い出した。

「その時ジェッキンゲンのそばには、滅びたはずのマイラ族の女の子がいたんだ。背中には、本の挿絵で見たとおりの白い翼が生えて

た」

ジャーニスの深刻そうな顔つきが、一瞬にして空っぽになった。そして、こいつは何を言っているんだと、いぶかしげにアーチャを覗き込んだ。

「俺もこの目で見たぜ。作りもんじゃないってことは、一目見ればすぐに分かった」

アンジがそう言うと、ジャーニスの表情はより険しさを増した。眉を寄せ、眼鏡を押し上げながらウンウンとうなっている。

「君たちを嘘つき呼ばわりするつもりじゃないが、にわかには信じ難い話だ。というより、そんなことは有り得ない」

やがてジャーニスは、あっちへ行ったりこっちへ行ったりしながら、部屋中を歩き回り始めた。アーチャとアンジは不思議そうに顔を見合わせた。

「『マイラ族の足跡』のことは君たちも知っているだろう？」

本棚の前で立ち止まってから、ジャーニスはやっと言葉を発した。二人は同時にうなずいた。

「マイラ族はヒト族を恐れて地上に近づこうとはしなかった……またそれは人魚族も同じだった。自分たちに適合した場所こそが最も安全だということを、ヒトという存在が下劣で貪欲な種族であるということを、彼らは知っていたんだ。だが、この二種族の共通点はまだ他にもある。それは、魔の力を糧として生きてきたことだ。人魚族はアクアマリンから生み出される力を、マイラ族は翼から生み

出される力を、魔力と名付けた……」

「そしてマイラ族は気付き始めた」

アンジが言葉を受け継いだ。

「かつて地上を支配してきたヒト族は、魔の力にはいとも簡単に屈してしまうということに……そして、自分たちが世界を支配する、真の王族として君臨すべき存在だということに」

アーチャはふと、両ひざを汗ばむほど強く握る自分がいることに気が付いた。二人の話を聞いていると、今まで事実だと確信していたことを再認識させられた。確かに、マイラ族という存在は地上のあらゆる生物を震撼させた、恐るべき力の持ち主だった。大陸を空高く浮上させるだけの魔力があると分かっていれば、ヒト族が恐怖するのも無理はない。あの人魚族でさえ一目置いていたほどなのだ……。

「マイラ族の暮らす浮遊島が謎の消滅を遂げたのは、ちょうどそんな頃だった」

語り手はジャーニスに戻っていた。伸びっぱなしの無精ひげで覆われたあごに指を添えながら、ジャーニスは物々しく続けた。

「浮遊島の高度は決して低くはなかったが、快晴であれば地上からでもその優美な姿を目にすることができた……マイラ族がこの世から抹消されたちょうどその日、地上から見る大空は雲一つない快晴だった。そして、目がくらむような一瞬の強い光とともに、マイラ族は浮遊島と共に消え去った」

ジャーニスはまた眼鏡を押し上げた。

「学者たちは揃って首をかしげた。爆音もない、爆風もない、強い衝撃もない……あるのは、奇怪な光だけだ。学者たちは、巨大な浮遊島を一瞬にして消滅させたその光をフラッシュと名付けた。結局、この事件は謎だらけのまま現在に至る」

三人はうなだれて考え込んだ。アーチャは、自分が作業場で見た少女が本当にマイラ族だったのか、どんどん自信がなくなってきた。またそれはアンジも同じだったらしく、気難しい表情で頭をかきむしっていた。

四章　また死……　3

「少し話は逸れちゃったけど、君たちが見た女の子が本当にマイラ族だとしたら、それは過去百年間の歴史上において、かなり貴重な発見と言えるだろう」

ジャーニスはそうまとめると、気を取り直したように二人に笑いかけて、話を続けた。

「計画の詳しい内容についてだが、決行日の前日にでもこうしてまた話すよ。外部に漏れるのを防ぐためにもね」

「それっていつ頃になりそう？」

アーチャが聞いた。

「早くても三日後……状況がこれ以上悪化するなら、更に伸びることも予想されるけど」

アンジが一歩踏み出した。

「そういやあ、病気がちな仲間がいるって聞いたけど？」

「ああ……」

ジャーニスは滅入ったような声色で返事をした。

「それが……残念なことに、病気を患っていたジクスがかなりの重症らしくてね。話し合った結果、彼はここに残ることになった」

「そんな！」

一人でも多くのドレイを助け出したい、そんな思いがあったからこそ、アーチャは悔しくてたまらなくなった。ジャーニスはすっかり落ち込んだアーチャの肩を優しく撫でた。

「仕方のないことなんだ。足下もおぼつかないジクスを無理に引っ張りまわすのは危険な行為だ。失敗は決して許されない……なぜなら、それは僕らにとって死を意味するからだ。脱走計画に二度目はないということを、しっかり頭に入れておいてほしい」

アーチャはジャーニスの顔を見上げた。黒い瞳が、語りかけるようにしてアーチャを見つめ返していた。アーチャはゆっくりとうなずいた。

「マイラ族の他に、まだ何か変わったことはあったかい？」

アーチャを見下ろし、アンジを見上げながら、ジャーニスは口早に尋ねた。どんな些細な情報でも収集しておこうとしているように見えた。

「んー……」

アーチャは考えた。誰かを忘れているような気がするのだが……あ、そうだ。

「そうそう、じいさんだ」

アーチャとアンジがほとんど同時にそう言った。二人は顔を見合

わせて気まずそうに笑った。

「じいさん？」

ジャーニスがすっとんきょうな声を出した。

「ヒト族のいかれたじいさんが、二日前の朝、俺たちの部屋にいたんだ」

「そしたら突然発狂して、部屋中大騒ぎになった。兵士たちは敵国のスパイだって言ってるけど……今は多分、牢屋の中じゃないかな」

アンジがおおざっぱに説明し、すぐにアーチャが継いだ。ジャーニスは、その時部屋に駆け込んで来た兵士たちと全く同じ、困惑した表情をしてみせた。

「アクアマリンにおじいさんがいるって？　老いた血はデータのサンプルにも使えないからって、ドレイの対象外になっているはずだけど……」

「そういえば、兵士たちはみんなおじいさんのことを知らないみたいだった。それにあのおじいさん、ドレイの服を着てなかった。毛皮のコートだった」

それはますます不可解だと、ジャーニスの表情が気難しそうに歪んだ。

「アーチャくんには以前も話したけど、地上からアクアマリンへ来るには潜水艇を使うしかないんだ。少なくとも、おじいさんはその潜水艇に乗って来たはずだよ……当然、兵士たちと一緒に。だが、

昨夜にはいなかったはずのおじいさんが、朝には私服のままそこにいた。そして、兵士たちは誰一人としてそのおじいさんを知らない」

よくよく考えてみると、つじつまの合わないなんとも不気味な話だ。ジャーニスは特に話し上手だったので、アーチャは話を聞いているだけで腕全体に鳥肌が立ってしまった。まるで、怖いもの巡りの怪談話でも耳にしているかのような気分だ。

「なあ、アンジ。あれはもしかしたら、アクアマリンの中をさまよう亡霊かもしれないぞ」

「よせよ……縁起でもねえ」

アンジは本気で参っているようだった。ジャーニスは愉快そうに短く笑った。

「僕が思っていたよりずっと、このアクアマリンという海底洞窟では摩訶不思議なことが繰り返されているようだ。それは魔力の宿ったアクアマリンであったり、絶対の権力者であったり、滅びたはずのマイラ族であったり、突如現れた謎のおじいさんであったり……だがあと三日で、目の前のすべてが変わるんだ。あと、たったの三日で……」

四章　また死……　4

アーチャとアンジは、労働開始時刻までジャーニスの部屋で待つこととなった。聖地を見張っていた兵士に見つかりでもすれば、面倒なことになりかねないからだ。ジャーニスが言うには、労働開始間近になるとあらゆる所からドレイたちが集まって来るので、その流れに乗って自然に聖地へ出れば、兵士たちの目をあざむくことはたやすいことらしい。

「それにしても、こんな居心地の良い部屋でお仕事なんて、さぞ楽しかろうねえ」

部屋の隅々まで見回しながら、アンジが皮肉を込めて言った。ジャーニスは机の上に山積みにされた資料の山を片付けている最中だった。

「んー……確かに、君たちの肉体労働よりはマシかな」

円や棒状のグラフが書き込まれた用紙をビリビリと引き裂きながら、ジャーニスは苦笑して言った。

「だけど、生きていく上で運動しないほど愚かな事はないさ。一日中座り仕事をしていると、やがて血流が悪くなり、脳味噌が正常に働かなくなってくる。そうなると、任された仕事はもう手におえない。それに、体力は衰える一方だしね」

そう言って、ジャーニスは時計を取り出して時刻を確認した。

「あと五分で開始時刻だ」

「ゴーレム族が来なかったのにどうして分かるの？」

アーチャも時計を引っ張り出した。今は六時二十分。二十五分前、アーチャたちは確かにここにいたが、ゴーレム族は部屋を訪れなかった。ジャーニスは別の廃棄資料に手を伸ばしたところだった。

「ドレイにも階級というものがあるみたいでね。僕たちはこういった仕事柄、アーチャくんたちよりは立場が上で、待遇も良いんだよ。次の日の労働開始時刻はその前日に教えてもらえるし、食事もわずかだが質が良い。ちょっとした頼みなら兵士たちも受け入れてくれるしね」

紙の引き裂かれる音を部屋いっぱいに響かせながら、ジャーニスは揚々と答えた。

「それって、ちょっとずるいよなあ？」

アーチャはふてくされた表情でアンジに聞いた。

「なあアンジ。昨日の飯、覚えてるか？」

「フンコロガシが転がしたようなブサイクな草団子がニつ……ああ、しっかりと覚えてるぞ」

三人は部屋を出て、聖地へ向かった。そこには既にドレイたちが集まっており、泥だらけの汚いドレイ服が悪臭を放って動き回っていた。ここには洗濯機も風呂もないため、汗臭い体臭が日に日に濃

くなっていくのは当然だった。だが中には、兵士たちの目を盗んで湖の水を頭からかぶる者もいた。アーチャやアンジもその一人で、中でもこの二人は知る人ぞ知る常連だった。

労働が終わると、二人は一目散に作業場を抜け出し、それから十秒以内に湖の中に頭を突っ込み、合わせて十秒以内に顔を洗い、加えて五秒以内に喉を潤し、とどめに頭から滴る水をよく切ってから平然とした表情で部屋に戻る。地面に水滴の跡が残っており、それがアーチャたちの部屋まで続いているのが兵士たちに見つかると、また厄介なことになりかねない。

だがそんな仕事終わりの楽しみも、昨日で最後だろう。ジェッキンゲンが戻ってきてしまったせいで、兵士たちは前にも増して目をぎらつかせている。二十四時間態勢で見張りに徹するつもりだ。本当に脱走なんてできるのだろうか？

「……ジクス？」

通路を抜けた矢先、ジャーニスが消え入るような声でその名を口にした。アーチャたちのすぐ右手にもう一つの穴が開いていて、そこに一人の男が壁にもたれて立っていた。両ひざはガクガクと震え、拳で岩壁にすがって体重のほとんどを支えているようだった。体重と言っても、アーチャの半分ほどしかないように思えた。服からはみ出る手足はほとんどが骨と皮だ。縮れたひげはジャーニスより長く、うっすらと灰色に染まっている。異常に長い前髪に覆い隠された瞳の輝きは風前の灯で、青白い顔から乾いた吐息が漏れ出ていた。

「ジクス……ジクスじゃないか！　こんな所で何を……部屋に戻るんだジクス。今すぐに！　さあ！」

ジャーニスはとっさに手を差し出したが、ジクスは見向きもせずに、ドレイたちでごった返す聖地に向かって歩き始めた。黒目がひ

っくり返りそうなほど上を向き、口から流れる唾液が糸を引いてあごから垂れ下がっている。それに、かすれた小声で何かをしゃべっているようだった。

「ジクス、お願いだ。このままでは死んでしまうぞ」

アーチャとアンジは面食らい、その場に棒立ちしているしかなかった。そのうち、周囲にいたノッツ族の群れがガヤガヤ、キーキーと騒ぎ始めた。事態に気付き始めたらしい。

「……これ……を……ファ……コッフ……どこ……」

握りしめた拳を前に突き出しながら、ジクスは頼りない足取りで前進を続けた。だが、ジャーニスの精一杯の制止を振り切った直後、ほとんど音も立てず、ジクスはゆっくりとその場に倒れ込んだ。すべての余力を尽くしたその男は……事切れていた。

「ジクス！」

ジャーニスは駆け寄り、すぐさまジクスを仰向けにすると、半開きの口に耳を寄せ、そのままの姿勢で胸の辺りをしっかりと観察した。

「どうなんだ？」

ノッツ族が騒ぎ立てる真っ只中で、アンジは大声でジャーニスに尋ねた。

「もう手遅れだ……死んでる」

アーチャはジャーニスの言葉をはっきりと聞き取ることができなかったが、その悲哀な表情や涙声から、ジクスが今どういう状態なのかは明確だった。事態を察知した数名の兵士が足早にジクスを取り囲み、金切り声で叫びまくるノッツ族を静めようと奮闘した。

「諸君、これは一体何事ですか？」

聞き覚えのある、あの気取った声がどこからか聞こえてきた。ジェッキンゲン・トーバノアのお出ましだ。

「今しがた、ルーティーの血族と思しき男が一人、ここで死亡しました。こちらです」

兵士の一人がジクスの亡骸を指差し、大きく敬礼して後退した。ジェッキンゲンはアーチャとアンジの肩をつかんでその場から引き離した。すすり泣くジャーニスの足下に転がるジクスの死体は、微動だにしなかった。

「これは……ふむ……どうやら栄養失調ではないようですね」

鼻がツンとするような香水の香りを辺りに振り撒きながら、ジェッキンゲンは装飾用のビロードのマントをひるがえした。

「どれ、ちょっと失礼」

ジェッキンゲンはおもむろにジクスの前髪をかき上げると、その手でまぶたをこじ開け、ぐいと覗き見た。アーチャはギョッとしたままその光景を見つめた。

「なるほど……なるほど……ほう」

ジェッキンゲンはぶつぶつ呟き、たまに手を叩いたり、大きくうなずいたりしながらジクスの亡骸を観察し続けた。そして、いよいよ結果が出た。

「これは呪いですね……程度は低いですが、かなり複雑に組み込まれている」

ジェッキンゲンはスッと立ち上がり（強烈な香水の香りがまたアーチャの鼻腔を刺激した）、周囲にたたずむドレイたちの注目を集めようと、右手を掲げて叫んだ。

「たった今、ここで人が死にました。その直前に、この男に触れた者はいますか？」

すぐに一つの手が上がった。ジャーニスだった。

「ちょっと待ってくれよ！」

アーチャはすかさずジェッキンゲンの前に飛び出した。目の前にそそり立つその姿は、鉄壁の砦のような風格があった。

「彼は違う！　このジクスって人を助けようとしただけだ。それに、ジクスは病気だったんだ」

ジェッキンゲンはアーチャを高い鼻の上から見下ろし、クスッと笑った。あのさげすむような笑い方だ。

「確かに、彼からはまるで魔の力を感じない。君もそう言いたいのだろう、ハラペコくん」

ジェッキンゲンはアーチャの額を小突くと、ハエでもあしらうかのように手で追い払った。アーチャはそれ以上盾突かず、じっとしたままジクスを見つめた。手に何かを握りしめている……。

「とりあえず、この死体は私が預かることにしましょう。誰かの恐ろしい陰謀の臭いがプンプン漂っていますからね！」

ジェッキンゲンは一人、この状況を心から楽しんでいるように思えた。兵士たちに死体を運ぶように指示した時も、満悦そうな笑顔だった。

「差し出がましいようですが……」

袖で涙を拭き取りながらジャーニスが言った。

「温かい太陽の陽射しが当たる場所に、彼の墓を作ってやって下さい。お願いします」

ジェッキンゲンはジャーニスに向かって曖昧に手を振り、死体の後を追ってその場を立ち去った。兵士たちが労働開始のかけ声を張り上げたのは、その直後のことだった。

四章　また死……　5

ドレイたちの予想通り、この日から兵士たちの目つきが変わった。その数は以前の二倍ほどに膨れ上がり、行動が遅いだの、力が弱いだの、もっと頭を使えだのと大声を張り上げて怒鳴り散らした。挙げ句の果てには、吐息がうるさいときたもんだ。兵士たち自身が、ジェッキンゲンが戻ってきたことに一番動揺しているようで、ドレイに対する善悪の見境がつかなくなりつつあったのだ。

先ほどのジクスの死がこの悪状況に輪を掛けているのも確かだが、彼らがゼル・スタンバインのような優しさを見せるという間違ったことは、やはり一度だってありはしなかった。荒々しい鼻息でドレイたちを監視するその姿は、しつけの行き届いた優秀な番犬そのものだった。

「アンジ、これ」

食事の時間、アーチャは口の中の血肉ソーセージを力いっぱい噛むふりをしながら、アンジにそうささやいてある物を手渡した。アンジは、噛むたびに血が吹き出す血肉ソーセージが気持ち悪くてしょうがないという表情でうつむき、アーチャから受け取ったある物を見た。それはくしゃくしゃの手紙だった。だが、くしゃくしゃなのは紙だけではない。書かれた字さえも、まるで大きな横揺れ地震の中で書いたかのようにひどく歪んでいた。内容はこうだ。

『私は死期を悟った、もう長くない。話すことさえままならないのだ。いいか、コッファ。ジャーニスとは縁を切れ、危険すぎる。あいつはもう駄目になっちまったんだ。コッファ、お前だけでも逃げろ』

最後の一文字は力尽きたようにかすれていたが、何とかすべて読み取ることができた。アンジは前を向いたまま、食事の続きを楽しむかのように物静かだった。

「どう思う?」

アーチャは近くで兵士が盗み聞きしていないかを目だけで確認しながら、こっそり尋ねた。

「どう思うって、アーチャ、こんなのいつどこで手に入れたんだ?」

「聖地さ。ジクスの死体が運び出された時、手から落ちたんだ。彼、死ぬ直前に拳を握っていただろ? きっとその手紙をコッファに渡そうとしてたんだと思う」

アンジはまた手紙を読み返した。この文面を見れば、アーチャの言っていることが事実であることに間違いはないだろう。

「あいつはもう駄目に……コッファ、お前だけでも逃げろ」

アンジは考えを巡らせながら、その部分だけをぶつぶつと繰り返し呟いていた。

「危険すぎる……コッファはここから逃げられるけど、ジャーニスは逃げられないってことか?」

アンジが意見を述べた。アーチャは首をかしげた。

「ジクスはその手紙をコッファだけに読ませようとしていた。だろ? ジャーニスには見向きもしなかったんだから。きっと、あの三

人の間に何かがあったんだよ」

アーチャが声を低くしてそう言うと、アンジは長いため息をついた。

「“何かがあった”だって？　冗談きついぜ。仲間の一人が呪い殺されたその渦中に、俺たちは真っ向から飛び込もうってんだからよ」

アンジは手紙を乱暴に突き返し、アーチャを睨んだ。アーチャも負けじと睨み返した。

「ジクスの死とジャーニスは何も関係ない。コッファもだ。あの二人には呪い殺す力なんてないんだ。そんなこと、アンジだって分かってるだろう？　もしかしたら、今度はジャーニスが殺されちゃうかもしれないんだぞ」

「何者かが脱走計画のことを小耳に挟んで、実行を阻止しようと企んでいるとでも？　そりゃいい。本だって出せるぞ。『ドレイ探偵アーチャの事件簿～奴は聞いていた！　死体に残された微細な呪いの臭気、ルーティー族を狙う殺人鬼の脅威のまじない！～』。絶対読むもんか」

アンジは楽しげにそう言ったが、その表情はあちこちが不安だらけだった。眉は垂れ、目は据わり、唇は紫色だった。

「それでも、俺はここを出たい……出なくちゃ。仲間の所へ帰るんだ、絶対に」

奮然と言ってみたはいいものの、アーチャには、誰が正しいのか、何を信用すべきなのか、さっぱり分からなかった。だが、計画実行

の日はそう遠くない。今ジャーニスを頼らないで誰を頼れというのか。もう一度陽の光を浴びるには、彼を信用するしかない。他に手はないのだ。

「この手紙をコッファに渡さなくちゃ……おい、アンジ」

アーチャはアンジの肩をさすって通路の出入り口付近を指差した。ドレイ服を着たあのいかれたじいさんが、そこに立っていた。アンジの表情が引きつった。

「アーチャ、分かってるよな？　他人のフリだ」

というより、他人になってしまいたいと言わんばかりにアンジは言った。声がわずかに上ずっている。アンジはどうしても、あのじいさんを好きになれないらしい。

「でも良かった、おじいさんが牢屋から出られて。スパイなわけないじゃないか」

二人の兵士がじいさんの脇に立ち、あれやこれやと作業についての説明をしているようだった。だがアーチャは、じいさんにそんなことをしてもくたびれ損だと思った。何せ、あのじいさんはいかれてる。

「それにしても、ジェッキンゲンってのは底無しのアホだな。あんな奴を働かせようなんて……」

「静かに！」

アーチャが声を殺してアンジを黙らせた。兵士がじいさんを連れ

て、アーチャたちの元へ歩み寄って来るところだった。

「お前たち、この老いぼれと同じ部屋だったな？」

二人の目の前に到着するや否や、兵士の一人が出し抜けに聞いた。

「そうでしたっけ？」

アンジがとぼけた声で言った。二人の兵士は同時にムチを取り出し、脅すようにしてアンジを睨みつけた。アーチャは肘でアンジの脇腹を小突いた。

「そう……そうだった」

アンジは観念し、うつむいて舌を打った。

「ならば、この老いぼれの世話をしろ。今日からずっとだ」

「でも、僕たちにも仕事が……」

今度はアーチャが睨まれた。兵士たちへの口答えは決して許されない。

「仕事と世話を同時にやれば済むことだろ。ジェッキンゲン大佐がたいへんお気に召された者だ。丁重に扱えよ」

「まるで悪夢だ」

じいさんを置き去りにして兵士たちが去っていった後、アンジはうなるように言った。じいさんは相変わらず何を考えているか分か

らない表情で、二人の前に突っ立っている。

「こんにちは」

じいさんが不意に挨拶した。

「こんにちは」

アーチャが笑顔で返した。何気ない挨拶が、なぜだかとても嬉しかった。

それから二日が経った朝のこと。ジャーニスからの連絡は、ゴーレム族の朝の挨拶と共に突然やって来た。

「こいつを俺に？　誰から？」

「兵士さんです」

ゴーレムがアーチャに持って来た物は、小さな四角に折りたたまれた、手紙らしきものだった。アーチャは状況がよく呑みこめないままそれを受け取ると、アンジとじいさんのいる部屋の奥の方へと戻った。そして、なるべくじいさんには見えないようにしながら、アンジと手紙を読んだ。まだ記憶に新しい、ジャーニスの丁寧な筆跡がそこにあった。

『いよいよ明日だ。今日の作業が終わり次第、僕の部屋に集まってくれ。明日の朝、計画実行だ』

五章　正当な行為　1

気付くと、アーチャは疲れ切った両腕に三本のゴボウを抱えて、アンジとじいさんがいる作りかけの巨大な石柱の所へ向かって歩いていた。土だらけのゴボウは無残にしなり果て、あらゆる箇所から威勢よく毛が伸びていた。ここで口にする最後の食べ物になるかもしれない、記念すべきゴボウだ。

「わしは昔から、野菜が大好きじゃった」

アーチャが放ったゴボウを受け取った時、じいさんは嬉しそうにそう言った。かつて味わったことのないほどの肉体労働で全身を痛めていたアーチャは、非難がましい目つきでじいさんを見た。

「気楽でいいよなあ。ペンキ塗りは」

昨日から続く過酷な労働は、悪化の一途を辿っていた。疲労困憊していたアーチャは作業が始まってからというもの、ほとんど意識がないまま重い石柱や黄金に輝くレンガを神殿の奥へと運んでいた。だがそのおかげで、時間は矢のように過ぎていってくれた。

「アーチャ……お前、かなり痩せたんじゃないか？　顔色も悪いぜ」

アーチャの横顔をしげしげと眺めながらアンジが言った。湖面に映る自分の顔が日に日に痩せ衰えていることに、アーチャ自信が一番よく気づいていた。頬は削げ落ち、あばら骨が浮き立ち、健康的だった小麦色の肌は全体が土気色に染まり始めている。体力には自信があったのに……ヒトという動物は、こんなにももろい生き物だったのか。

「精神的な疲れさ。……アンジこそ、見てみろ、すごい肌荒れじゃないか」

「これは生まれつきだ」

ドレイ服でゴボウの土を払い落とし、同時に毛を引っこ抜きながらアンジは言った。

「この岩のように強固な体を侮辱するな。先祖代々受けつかがれて来たイクシム族の血が……」

アンジは話をやめてゴボウにかじりついた。兵士が一人、三人のそばを通り過ぎたのだ。無駄な私語を禁止されているわけではないが、笑顔で漫談できる状況に置かされていないことくらい、ドレイ全員がしっかりと承知していた。

「つべこべ言ったって、あいつらは例外だ」

アンジが大岩の転がっているあたりをしっかりとあごで差した。縦じまのドレイ服に身を包んだジングとニールの双子がそこにいた。二人仲良く並んで、ムシャムシャとゴボウにかじりついている。ジェッキンゲンに正体を見破られて以来、ドレイとして労働に励んでいた双子は、恐ろしいくらい従順だった。まるで、何らかのチャンスを待ち望んでいるかのように……。

「あいつらはイクシム族の恥さらしだ」

声をより低くしてアンジは続けた。

「俺たちはこの特有の力をヒト族の連中に幾度も利用されてきた。だが、決して自尊心を失うことはなかった。ましてや、ヒト族になりすまして同じ仲間を殺すだなんて……」

アンジはまた話を中断させたが、兵士はそばにいなかった。アーチャはふと、アンジと初めて出会った時の光景を、亡骸を見つめるアンジの悲しげな横顔を、鮮明に思い出した。

「ヒト族だって同じさ」

アンジを慰めるように、そして自分に言い聞かせるように、アーチャは切り出した。

「地上では、ヒト族だってあいつらと大差ないんだ。領土や名誉、存在価値を求めて、ヒトとヒトとが無意味に争ってる。世界のすべてを手に入れようと、ばかげた思想を描いた将軍様がたくさんの血族を殺してる……今、この瞬間も」

しばらくの間、兵士たちが歩く地面のこすれる音と、じいさんがゴボウをおいしそうに噛み砕く愉快げな音しか聞こえてこなかった。

やがて、アーチャが再び口を開いた。

「もしアクアマリンから出られたとしても、地上で俺たちを待ってるのはここよりも残酷な“現実”だ……それだけは確かだ」

アンジは首を横に振った。

「ここに連れて来られてからの約一年、俺はそのことばかり考えていた。数多くの戦争で荒廃した地上にいるより、地下でひっそりと暮らしていた方がまだ気楽でいい……そういう結論を導き出したん

だ。その答えが正解なんだと、ずっと自分に言い聞かせてきた。……だが、アーチャと出会ってすべてが変わった。生きるってことの、本当の意味を思い出した」

アーチャは思わず顔を上げた。嬉しくて、恥ずかしくて、ゴボウの毛の先端をただ見つめているしかなかった。

「だから俺も、ここを出る。ここを出て、自分なりの生き方を見つけ出す」

五章　正当な行為　2

その日の作業が終わったのは、十一時を少し過ぎた頃のことだった。午後に言いつけられた仕事は、指示された絵を神殿の壁に刻み込むというもので、これはなかなか楽しかった。どちらがより“下手くそ”に描けるかをアンジとこっそり勝負したり、兵士たちに見つからないよう、落書きやメッセージ（「アーチャとアンジが世界を変える！」）を残し、些細なスリルを味わうなどして時を過ごした。それに、わずかだが、疲れを癒すこともできた。

二人がそんなイタズラを決行している傍ら、陰ながらの厄介者はじいさんだった。じいさんときたら、指示にはない、自分そっくりの自画像を描いてしまうものだから、世話を任されていたアーチャとアンジがこっぴどくなじられたのは、誰に言うまでもない事実だった。しかしこの自画像、ドレイたちの間ではなかなか好評で、兵士たちの目を盗んでよくここまで描けたものだと、じいさんに数々の賞賛の言葉が送られたのも、また事実だった。

作業終了後、アーチャたちは誰よりも早く作業場を抜け出し、一目散に自分たちの部屋へと戻った。

「おじいさん、もうおやすみの時間だ。でも俺たちはちょっと用事があるから、先に寝ててくれ」

曖昧に言葉を並べながら、アーチャは静まり返った部屋でじいさんにそう言い聞かせた。じいさんは脱出の際に迎えに来ようと、アンジと相談して決めたのだ。その余裕があればの話だが……。

「いざとなったら、死ぬ気で行動を起こすまでさ」

疲れ果てたドレイたちでごった返す聖地を横切りながら、アンジ

は陽気に話しかけた。計画の失敗が死に値するということは、ジャーニスの話で認識済みだった。

「だけど、死んだら意味ないぞ。ほどほどにね」

扉の前でアーチャが冷静に忠告した。そして、アンジ以外、誰も近くにいないことを確認してから、扉を三回、軽く叩いた。扉はすぐに開き、ジャーニスの青白い顔がそこにヌッと現れた。

「さあ、入りなさい」

周囲を確認した後、ジャーニスは早口で二人を促した。最後にもう一度辺りを確認してから、ジャーニスは扉を閉めた。部屋の中には、ジャーニスの他にもう一人、コッファがいた。緑の絨毯の上にどっしりと尻を据えており、相変わらずの怯えた表情で、アーチャとアンジを交互に見つめている。

「コッファ、彼がさっき話したアンジくんだよ。力強いイクシム族の味方さ」

アンジとコッファは無言で握手した。それはまるで、互いの心の内を詮索するかのような奇妙な姿だった。

「ずっと待ち望んでいた時が、とうとうそこまでやって来た」

二人がコッファの横に座ると、ジャーニスは唐突に話し始めた。

「噂どおり、ジェッキンゲンは今日の昼過ぎ、ここを去った。ほんの一時的だが、こんな好機会はめったに訪れるものではない。外壁は崩れ、頼もしい仲間が集い、最適な時刻に外からのお迎えがやっ

て来るんだ」

「それってもしかして、潜水艇？」

アーチャはとっさに聞いた。興奮で心臓は高鳴りっぱなしで、体が自然に前へと乗り出していた。ジャーニスはにっこり微笑んだ。

「そのとおり。明日の早朝、潜水艇が交替用の兵士と多くの研究資料を持ってアクアマリンへやって来る。僕たちは、その潜水艇を奪って逃走する」

コッファは体をブルブルと震わせ、アーチャとアンジは顔を見合わせて目をパチクリさせた。

「ここから脱走するなんて狂気の沙汰だ」

ジャーニスはおもむろに続けた。

「少なくとも、ここへ連れて来られたばかりの頃は、その考えが僕を支配していた。だが、現れた。この地獄から抜け出した、唯一の人間が」

「つまり、この地下から脱走した奴がいるってことか？」

アンジは腑に落ちないという表情で尋ねた。ジャーニスは机に腰かけ、三人を見下ろした。

「もう一年以上前の話だ。フィン・ラターシアという女性がアクアマリンにいた。彼女は、僕と同じルーティー族だった。我々混血はその賢い頭脳ゆえ、二つの種類に分かれた。一つは、アクアマリン

で無難に生き続けようと考える者。もう一つは、命を懸けてでも地上へ戻ろうと決意する者。フィンは、ここから脱走することを選んだんだ」

早く続きを聞きたいとばかりに、アーチャは熱い眼差しでジャーニスを見つめ、激しくせっついた。ジャーニスはすぐにその期待に応えてくれた。

「僕はもちろん、フィンの考えには反対だった。だが彼女は頑なに自分の意思を貫き通した。そして、彼女の持つ希望が、とうとう見つけ出した。地上へと通じる入口の存在を」

アーチャは息を呑んだ。手が汗をつかんでいる。

「それは、長い間ここに住みついていた人魚たちだから知っていた事実だった。フィンは教えられた入口を通って、地上へ戻っていった。それからのことは分からない。もしかしたら、途中で力尽きたかもしれないしね。……確かなことは、その入口はどの部屋にも存在しているということだ」

五章　正当な行為　3

そう言うと、ジャーニスはグルグル巻きにされた大きな用紙を引き出しの中から引っ張り出し、三人の前に広げた。それはアクアマリンの地図だった。光沢のある青いインクがランプの明かりに照らされてキラキラと輝き、アリの巣のようなアクアマリン内の構造を事細かに記している。

「こいつは軍から渡された資料の一つなんだ」

地図を覗き込むアーチャとアンジに向かってジャーニスは言った。

「注目してほしいのはここ」

ジャーニスが指差したのは、地図の外側に描かれた円状の通路だった。それは完全なドーナツの形をしていて、他のどの通路からもつながっていない。

「どこにも入口なんてないよ」

アーチャは目をすがめながら気まずそうに言った。

「まやかしさ」

ジャーニスは素っ気なく答えた。

「人魚族って生き物は、どうもこういったカラクリが大好きらしい。魔法を使った様々な仕掛けを、アクアマリンの至る所に施しているんだ。外敵に攻め入られた時の対処法の一つとしてね。部屋の奥の

壁に隠し通路の入口を設けたのもそのためなんだよ。入口を開けるのは簡単。ただ念じるだけでいい」

「それなら、俺たちはどうしてその方法で脱出しないんだ？　潜水艇をかっぱらうより安全で確実だろ」

アンジはおかしな部分を敏感に嗅ぎ取り、率直に尋ねた。アーチャも同意見だった。

「僕が本当に考慮しているのは、脱出した後のことなんだよ。その隠し通路を通り、もしここから脱出できたとしても、出口はどこにあるか分からない。僕やコッファでさえ、このアクアマリンがどの国の近海にあるのか知らないんだ。それこそ、海のど真ん中に放り出されてごらん。待ってるのは腹を空かした人喰いザメだ」

アーチャはとっさに地図から目を離した。サメに追いかけられるくらいなら、兵士たちと鬼ごっこしていた方がマシだと思えた。

「とにかく、僕がここを抜け出そうって決心できたのは、フィンのおかげなんだ。彼女には心から感謝してるよ」

ジャーニスは引き出しに地図を戻し、雑然とした机の上の資料を払い除けるように一まとめにし始めた。

「それで、どうやって潜水艇を奪うの？」

アーチャは身を乗り出しながらジャーニスの背中に向かって性急に尋ねた。

「力ずくさ」

振り向きざまに、ジャーニスは揚々と答えた。

「力ずくって、何か武器とかはないの？」

アーチャの声色は絶望的だった。

「そりゃそうだろうよ」

アンジが観念したように言った。

「よく考えてみろ。こんな薄暗い洞穴のどこに武器なんか転がってる？　魔法が使えりゃ話は別だが」

アーチャは何か堅い物で頭を殴られたような感覚に襲われた。ムチと剣を持った兵士たちと素手で戦うだなんて、自殺行為も甚だしい。

「でも、全くないってわけじゃない」

アーチャは顔を上げた。ジャーニスが首元から服の中に手を突っ込んでいる姿が目に入った。そこから取り出しのは、一本の細長い筒だった。

「吹き矢だ」

ジャーニスはアーチャたちに向かって、誇らしげにそれを見せつけた。どこからどう見ても、木製の平凡な吹き矢だ。

「へえ。その穴から弾丸でも飛び出すのかい？」

あざけるような口調でアンジは言った。確かに、見てくれは頼りなさそうな武器だ。

「見た目だけで判断しちゃ駄目だよ。使う矢には毒を仕込んであるから、こいつに射されたら数分で死ぬ」

アーチャとアンジは思わず身を引いた。ジャーニスのその一言で、弱々しかった吹き矢が巨大な機関砲に姿を変えた気がした。

「そんなもん、どこで手に入れた?」

突然、左横の方で太い声がしたので、アーチャはビクリとした。コッファがそこにいたことを、アーチャもアンジも半分忘れかけていた。

「もちろん手作りだよ。机の一部を切り取って、それを半円に削り、二つあわせて筒を作った。矢はゴーレム族に頼んで持ってきてもらった。と言っても、刺繍用の針だけどね。矢に仕込む毒が一番簡単だった。最近、デンキイモが食事に出たのを覚えてるかい? あのデンキイモの根っこには殺傷効果のある強い毒素が含まれていてね。この毒矢を作ろうと考えたのも、そのことを思い出したからなんだ。こいつもゴーレムに頼めばすぐだったよ。デンキイモの根っこなんて腐るほどあったから。……ただ時間がなくて、これ一つしか作れなかったんだけどね」

それを聞いて、三人は素直に喜べなかった。互いに困ったような顔を見合わせて、黙りこくっている。

五章　正当な行為　4

「兵士たちを殺すの？」

思っていたことがアーチャの口を突いて出たのは、それからしばらく後のことだった。ジャーニスは服の中へ慎重に吹き矢をしまい込んでから、アーチャをじっと見た。

「言っただろ、失敗は許されないって」

咎めるような厳しい口調だった。ジャーニスがこんな言葉遣いで話すのを、アーチャは初めて耳にした。

「計画の失敗は死を意味する、そうも言った。勘違いしてはいけないよ、アーチャくん。ここから綺麗に脱走しようなんて、そんな考えがあるなら今のうちに捨てるんだ。ここを逃げ出すということは、国軍に喧嘩を売るのと一緒だ。つまり、この計画が実行されたその瞬間から、兵士たちは僕らの敵となる。生半可な気持ちじゃ、決してうまくはいかない……決してね」

アーチャはひどく打ちのめされて、何も言えなかった。そして、脱走することの真の意味を履き違えていたことに、今ようやく気付かされた。地上へどう脱出するかなんて、むしろどうでもいい。問題は、それから待ち受ける運命をいかにして乗り越えるか、だったのだ。

「教えてくれ」

アンジがか細い声で言った。

「今俺たちにできることはなんだ？　計画がうまくいくように、ただ祈ってろっていうのか？」

ジャーニスはまじまじとアンジを見つめ返した。揺るぎない真剣な眼差しだった。

「潜水艇が来るのは朝の五時だ」

ジャーニスは、アンジを見つめながらやや大きめの声で切り出した。

「三日に一度、定期的にここを訪れるので間違いないはずだ。そして、潜水艇の改造を頼まれた時に手に入った操縦マニュアルもここにある」

ジャーニスは紐でくくられた分厚い資料を耳元でユラユラさせた。

「潜水艇がやって来る五時きっかりに、監禁されていたギービー族の連中が部屋から解放される。アーチャくん、僕が前に教えたことを覚えているかい？　彼らは集団生活が苦手で、別室に閉じ込められているって」

アーチャはその時のことを途切れ途切れに思い出しながら何度もうなずいた。

「いつも悪巧みしか考えていないギービー族は、かなり長い間、狭い部屋に閉じ込められていた。イタズラだけが生きる糧だったような種族だ。今までのうっぷんを晴らそうと、兵士たちと大いに暴れてくれるだろうさ」

「でも、誰がギービー族を解放させるの？」

アーチャは怪訝な表情で聞いた。

「くどいようだけど、こいつもやっぱりゴーレム族だ。ちょっと細工をして、彼らを手なずけさせたんだよ。僕の指示どおりに働いてくれれば、潜水艇が到着すると同時にギービー族が暴れ出す。兵士たちを動揺させ、その隙を狙って潜水艇を奪う。無論、兵士たちが素直に譲ってくれるわけもないので、襲いかかって来た奴には容赦なく攻撃を仕掛ける。地図と操作方法はしっかりと脳味噌に焼き付けてあるから、あとは追っ手が来ないうちにどこか遠くへ逃亡する」

「何だか、雲をつかむような話だな」

アーチャは賞賛の入り混じった声でそう言った。ジャーニスはクスッと笑った。

「首尾よく事が運んでくれるのを願うよ。とりあえず、計画の全容はこんな感じだ。今君たちにできることは、うん、朝になるまで眠っておくことだ。十分に体を休めて、明日に備えてくれ」

だが、アーチャはしばらく寝付けなかった。コッファのいびきがうるさかったせいもあるが、理由はそれだけではない。明日の今頃、自分はどこで何をやっているのだろうかと、本当に計画はうまくいくのだろうかと、そんなことばかり考えていたせいで、目がすっかり冴えてしまったのだ。

「まだ眠れないのかい？」

アーチャの耳元でジャーニスの声が聞こえた。アーチャが寝苦しそうに姿勢を変え続けるので、心配して声をかけてくれたらしい。

「明日のことを考えると眠れなくなっちゃって……」

自分を情けなく思いながら、アーチャは素直に白状した。

「さっきはきついことを言ってすまなかった」

アーチャと壁の間にあるわずかな空間に寝そべりながら、ジャーニスはそう言った。アーチャは思わず首をもたげてジャーニスを見た。

「でも、アーチャくんにはこれからのことをちゃんと分かっていてほしかったんだ。隠し切れない現実を、心からちゃんと見つめ直してほしかったんだよ」

アーチャはまた天井に目を向けた。いくつも重なったランプの光が眩しすぎて、半分ほどしか目を開けていられなかった。

「地上で俺たちを出迎えてくれるもの……ジャーニスは何だと思う？」

アーチャのやぶから棒な質問に、ジャーニスは戸惑いを隠せないでいた。眼鏡のレンズに付着した土埃を、何度も入念に拭き取り始めたのだ。ジャーニスが口を開いたのは、こんな質問をしなければよかったと、アーチャが本気で後悔し始めた矢先のことだった。

「それは、アーチャくん、君次第だよ。言うなれば、君が描く夢への希望そのものだ。どんなに廃れた未来が待っていようとも、その

苦難を克服できるだけの明るい希望が必要なんだ」

心の内にあったもやもやがスーッと消えていくのを、アーチャはしっかりと感じた。ジャーニスの穏やかな優しい声を聞いていると、全身が安堵感でふわりと満たされた。そして、アーチャは思い出すことができた。今は亡き“親”という存在を。

「ジャーニス……ごめん、なんでもない」

言えなかった。「地上へ出られたら俺の父親代わりになってください」だなんて……きっと断られるに決まってる。両親を亡くしてからの十年間、アーチャはずっと求め続けていた何かを、ここで見つけることができた。それは、人魚のうろこでも、マイラ族の翼でもない……父親と呼べるかけがえのない存在を、アーチャはやっと見つけることができたのだ。

アーチャが深い眠りについたのは、それからすぐのことだった。

五章　正当な行為　5

誰かに肩を揺さぶられて、アーチャはふと目を覚ました。ジャーニスがアーチャを覗き込んでいた。

「さあ、もうすぐで時間だ。あと三十分」

緊張からか、ジャーニスの声はわずかに上ずっていた。アーチャは疲労で強張った体をきしませながら、ゆっくりと起き上がった。アンジとコッファはすでに起きていて、ジャーニスに負けないくらい緊張しているように見えた。アンジは壁にもたれて右足をしきりに細かく動かしているし、コッファは耳まで青ざめていた。アーチャはというと、自分でも驚くほど平静を保っていられた。きっと、昨夜にジャーニスと会話したことが心の支えになっているのだろう。

「それじゃあ、僕はちょっと聖地の様子を見てくるから。僕が戻って来るまでじっとしているんだよ」

ジャーニスは大きな音を立てないよう慎重に扉を開けて、部屋を出て行った。アーチャはふと、ジクスがコッファ宛てに書いた手紙のことを思い出した。ずっとドレイ服の中に隠しておいたのを忘れていたのだ。

「コッファ、これ。ジクスからの手紙……渡すの遅れちゃったけど」

コッファの青白い顔が、差し出された手紙を見て、それからアーチャの顔を見て、また手紙に戻った。コッファは震える指先で手紙を受け取ると、読み始めた。すると、その表情がみるみるうちに強張り始めた。目は見開かれ、あごがガクガクしている。まるで、極

寒の地で寒さに震えているかのような姿だった。

「今なら、まだ間に合う」

手紙を見つめたまま、コッファはうつろな声を発した。アンジの右足が、その動きを止めた。

「二人とも、ジャーニスを信じちゃいけねえ……あいつがジクスを……ジクスを殺したんだ！」

扉が大きな音を立てて開いた。部屋の向こう側に立っていたのは、口に吹き矢をあてがうジャーニスの姿だった。驚いたのも束の間、「フッ」という音と共に、コッファはもうその場に倒れていた。長さ四センチほどの針が左肩に突き刺さっていた。

アーチャが止める間もなく、二度目の「フッ」が聞こえた。アンジがひざからくず折れ、うつ伏せに倒れた。全身がヒクヒクと痙攣している。

アーチャはあっという間にパニックに陥った。今は、扉の前で吹き矢を構えるジャーニスの姿しか目に入らない。すべてが、悪夢のような光景だった。

「どうして……？」

アーチャの声は今にも消え入りそうだった。

「どうしてこんなこと……」

ジャーニスは短く笑った。吹き矢を手にしたまま扉を閉め、奇妙な笑顔でアーチャの方へ歩み寄ってくる。アーチャは感覚のない足で後ずさりした。すると、左足のかかとに何かがぶつかった……す

でにピクリとも動かない、アンジの大きな肢体だった。頭の中は真っ白に、目の前は真っ黒になった気がした。

「それはこっちのセリフだ」

ジャーニスは冷たく言い放った。

「どうして僕の言うことにおとなしく従わないんだ？　君が牢屋に閉じ込められた時だってそうさ。兵士には逆らうなと、あれほど釘を刺したじゃないか」

ジャーニスの発言を理解するのに、アーチャはしばらく時間がかかった。そして、はっと思い出した。

「兵士を殴り飛ばした新人が牢屋に入れられたと聞いた時、僕がどれだけ苦労して君たちを救い出したか、アーチャくん、君には分からないだろう。ゼル・スタンバインほど物分かりの良い兵士がここにいなければ、君たちは今ごろ実験の材料として使われていただろうな」

ジャーニスはコッファのそばに落ちていた手紙を拾い上げ、読み始めた。アーチャは生唾をゴクリと飲み込んだ。

「警戒していた甲斐があった」

横たわるコッファに視線を移しながら、ジャーニスは言った。

「ジクスは、コッファに色々と厄介なことを吹き込んでいた。だから、僕にいつ手の平を返してもいいようにと、ずっと警戒してたんだ。さっきだって、聖地の様子を見に行くフリをしただけさ。僕が

そばにいない時こそ、コッファの本音を聞きだす絶好の機会だからね」

ジャーニスはまた手紙に目を戻した。

「『あいつはもう駄目になっちまったんだ』……ハッ！　怖気づいた臆病者が、よくこんなこと書けたもんだよ」

ジャーニスは手紙をくしゃくしゃに丸めて、コッファに向かって投げつけた。手紙はコッファの頭に当たり、跳ね返ってアーチャの足下に転がった。

「コッファがさっき言ってたことは本当？」

無精ひげの生い茂る、ジャーニスの細いあごの先端を見つめながら、アーチャは勇気を振り絞って尋ねた。

「その……ジャーニスがジクスを殺したって……」

「本当だ」

よどみない口調だ。

「僕が殺した」

その言葉を聞いた時、アーチャは心の中で拳を握った。アンジの警告は正しかった。ジャーニスとは関わるべきではなかったのだ。そのアンジも、今はもう指一本動いていない。アーチャは、極限の罪悪感にさいなまれ始めていた。

「正当な行為だった」

ジャーニスは落ち着き払って続けた。

「君がここへやって来る二ヶ月前、僕はコッファとジクスをこの脱走計画に誘った。当初、二人は快く計画の参加を引き受けてくれた。だが、日が経つにつれ、ジクスは怯え始めた。『私にはできない』『こんな計画は無謀だ』と、弱音を吐き始めたんだ。終いには、計画のことを兵士たちに告知すると言い始めた。この時、僕はジクスを殺そうと決心した」

「だけど、あなたにそんな力はなかったはずだ。ジェッキンゲンはあの時、ジクスは呪い殺されたって、確かにそう言ったんだ」

アーチャは鋭い視線で、今度はしっかりとジャーニスの目を見た。レンズの奥に見えるその瞳は、氷のように冷たかった。

「確かに、僕には命あるものを呪い殺す力なんてない」

突如、ジャーニスは机の端をひょいと持ち上げ、手慣れた感じで部屋の隅へと移動させた。アーチャの呆然とした表情をちらと見てから、ジャーニスはしわの寄った緑の絨毯をつかみ上げ、バッとめくり上げた。今しがたそこにあった机の真下に、上げ蓋式の小さな木製の扉が現れた。アーチャはますます訳が分からなくなった。

「僕にはない……だが、こいつは違う」

ジャーニスは取っ手の部分に足先を引っ掛け、思い切り蹴り上げた。その中にあるものが何か分かった瞬間、アーチャは呼吸を忘れた。

五章　正当な行為　6

「人魚……」

アーチャはそれを見て、呟いた。一メートルほど掘られた穴の中に、まだほんの小さな人魚の男の子が眠っていた。アーチャと同じボサボサの髪の毛に、痩せ衰えた小さな体、輝きを失ったうろこ……そのどれからも、まるで生気を感じない。ただ、“かろうじて”生きているのは確かだった。

「どうして人魚が……この子に何をしたんだ？」

ジャーニスはため息を吐いて首を横に振った。口元で微笑するその表情は、ジェッキンゲンがアーチャに見せたあの小ばかにする笑顔と全く一緒だ。

「いくらバカな君でも、大体の察しはつくだろう？　この人魚がジクスの部屋のランプに呪いをかけ、じわじわとなぶり殺していったってことくらい」

アーチャは愕然として言葉が出てこなかった。だがその代わり、アーチャの頼りない脳味噌は、ある日のゴーレムの言葉を鮮明に思い出させてくれた。それは、アーチャがランプの交換をゴーレムに命じた時のことだった。

『ランプの交換はジャーニスの仕事。我々はそう命令された。だから、我々はランプの交換をしない』

アーチャは机の上にある『キャッチランプ補給』の木箱を見た。

次いで緑の絨毯を、そしてジャーニスを……見た。

「分かった……あなたがどうやってゴーレムたちに命令をしていたのか」

アーチャは力無く言った。

「ずっと、兵士になりすましてたんだな」

ジャーニスは歯茎を覗かせるほどニンマリと微笑んだ。

「御名答」

冷たい声が言った。

「この脱走計画を進行するにあたり、僕にはずっと幸運がまとわりついていた。自分でも不気味に思うほどにね。第一の幸運は、この部屋の絨毯の色が軍服の色と同一だったことだ。これにより、僕は絨毯を軍服に似せて作ることに成功した。この世にゴーレム族ほど単純で純粋な種族はいない。緑の服と帽子さえ着用すれば、あのでくの坊たちを簡単に騙すことができたんだからね。そうして、僕はゴーレム族からランプの交換作業を奪い、計画の遂行における様々な物品を調達させ、君たちに手紙を送り、ギービー族の解放命令を下した」

アーチャの愕然とした表情を楽しむような笑顔で、ジャーニスは淡々と喋り続けた。

「第二の幸運は、この人魚だ。あれはそう、一ヶ月ほど前のことだ。両親が実験の材料として捕われてしまったこの子は、毎日のように

湖のほとりですすり泣いていた。その姿を見て、僕はこの子をうまく利用しようと考えた……そう、ジクスを殺す道具としてこの人魚を選んだんだ。魔力を持った人魚族といえども、相手はまだ子供だ。両親を失ったことでできた心の傷口に入り込み、励ましの言葉の一つや二つ吹き込んでやれば、あっさりと僕になついてくれたよ。『君の両親はすぐにまた君の元へ戻って来る』『それまで僕が君のお父さん代わりだ』……ハハ……笑っちゃうね」

アーチャは怒りで全身を震わせていた。ジャーニスの冷酷な本性だけがその起因ではない。こんな悪魔のような男を父親代わりにしたいと思っていた自分に、一番腹が立っていたのだ。

「だが、この子は本当に良く働いてくれた。僕の命令どおり、ジクスを何らかの病死だと思わせるため、日毎に段々と衰えていく、程度の弱い呪いをランプにかけてくれた。案の定、ジクスはランプから発せられる死の光を浴び続け、日を追う毎に衰弱していった。そして、とうとう死んだ。僕がランプの交換作業を買って出たのも、ジクスを呪いという力で間接的に葬って、僕のアリバイを成立させるためだったのさ。だが、ただ唯一の誤算は、ジクスが聖地で逝ってしまったことだ。あのまま自分の部屋でくたばってくれればよかったものを……まあ、さすがはジェッキンゲン大佐と言ったところか。あの微弱な呪いの香りを嗅ぎつけるなんてね……危うく、犯人が僕だとバレるところだった。差し詰め、このくだらない手紙をコッファに渡すつもりだったんだろうが、そのために余力を使い果たすなんて、全く、どこまでも往生際の悪い奴だったよ」

アーチャは憎悪をたぎらせた、殺気立つ瞳でジャーニスを睨んだ。アーチャの感情は、すでに怒りを通り越して我を忘れんばかりだった。

「いかにも気に食わないって目つきだね、それ」

ジャーニスはアーチャの顔に向かってあごを指した。その時、ランプの明かりが眼鏡のレンズに反射し、怪しくギラリと一閃した。

「お前の血は腐ってる」

声は怒りで震えていたが、アーチャはそのことにも気付かないほど怒り狂っていた。

「何だって？」

不快をあらわに、荒立たしい声でジャーニスは聞き返した。アーチャはひるまなかった。

「お前の血は腐ってるって、そう言ったんだ。何の罪もないジクスばかりでなく、人魚の子供やコッファ、それに……それに……アンジまで……」

「誰かが救われるには、誰かが犠牲にならなければならない。それがこの世の摂理だ」

ジャーニスは首からぶら下げていた懐中時計を服の中から引っ張り出し、ランプの明かりの下で現在の時刻を確認した。物思いに耽るような険しいジャーニスの表情が、再びアーチャを捉えた。

「僕には、この血を汚してでも守らなければならない大切な人たちがいる……だから、これらはみな正当な行為なんだ。……さあ、もう時間だ」

アーチャは動かなかった。

「どうして俺が？　どうして俺がこの計画に……」

「君の血だよ、アーチャ」

突然、アーチャの心臓が狂ったように激しく脈を打ち始めた。まるで、胸の内側を鈍器で殴られているようだ。そして、壁に手を添えないとまともに立っていられないほどの目まいに襲われた。

途端に意識がなくなり、アーチャは何も考えることができなくなった……。

「……すべてを承知したなら……」

ジャーニスの声は、どこか遠くの方から聞こえてくるようだった。そのうち、狭い部屋で怒鳴り散らしているかのように、耳の中でガンガンと反響して聞こえるようになった。それはとても騒々しく、立ったままでは耐えられないほどの不快感だった。

アーチャは以前にも、これと似た苦痛を味わったことがある……アーチャがこのアクアマリンに連れて来られて、ランプの切れかけた薄暗い部屋で目を覚ました、あの時の感覚にそっくり同じだ。

「君がこれからすべきことはもう心得ているだろう？　君の力が必要なんだ、今すぐにね」

「ああ、十分心得てるさ……この腐れ野郎」

アーチャの意識はまだ少しもうろうとしていた。だが、本当に今すべきことは、十分心得ているつもりだ。

アーチャは次の瞬間、ジャーニスを全力で押し飛ばし、扉を開け、

暗い通路を疾走していた……聖地にいる見張りの兵士のところへ向かって、疾走していた。

六章　地上へ　1

見張りの兵士は確かに聖地にいたが、アーチャを快く歓迎してくれるはずもなかった。恐怖に青ざめた表情で全力疾走してくるアーチャを、過度のノイローゼで頭がいかれたドレイだと勘違いしたようだ。一瞬だけかいま見せたあの怯えた表情をうかがえば、そう語っているのは明白だった。

「反逆者だ！」

ベルトに固定された剣に手を伸ばそうとする兵士に向かって、アーチャは叫んだ。童顔で小柄の、ひ弱そうな兵士の顔が何か言いたそうにアーチャを見つめ返した。

「ジャーニスだったんだ！　ジクスを殺したのはジャーニスだったんだ！　今日、これから、ここを脱走しようと企ててる！」

兵士が混乱気味にあたふたし始めた。何か様子がおかしい。

「すいません。僕、新人なんです。三日前にここへ来たばかりの」

アーチャは目を丸くし、穴の開くほど兵士を見つめた。ふと、これもジャーニスの策略なのではないかと疑ってしまった。よりによって、こんな日に限って新人の兵士が見張りだなんて……。

「悔し紛れの悪あがきかい？　アーチャ」

ジャーニスの声が聖地に反響した。平然とした顔つきのジャーニスが、乱れた髪の毛を整えながらこちらに歩み寄って来る。結局何

も出来ないまま、アーチャは挟み込まれてしまった。

「あ、もしかして、君が８１２番のドレイ？」

兵士が突拍子もない声を出したので、アーチャは思わず振り向いた。どうやら、襟に描かれていたアーチャのドレイ番号を読み取ったらしい。

「君、ブラックリストの『要注意・危険人物』の一人に数えられてるよ……」

「違う！　危険なのはあいつだ！　ジャーニスだ！　早く捕まえろ！」

アーチャが怒鳴っても、兵士は身じろぎもしなかった。それどころか、ますます状況が悪くなる。

「ジャーニスのことなら聞いてます。彼はルーティー族との混血種です。リストには載っていません……とりあえず、仲間を呼ぶので待っていてください」

兵士が胸ポケットから取り出したのは、見覚えのある小さなリモコンだった。とっさに、アーチャは兵士の腹部へ向かって肩から体当たりした。兵士は数メートルほど哀れに吹っ飛び、堅い地面の上を痛々しく転がって動かなくなった。

「僕は君と違って待遇が良いんだ。前に教えただろう」

再び、アーチャはジャーニスと正面から向き合った。奇妙なくらいの静寂と、穴という穴からこちらの様子を覗き見るたくさんの視

線が、この二人の周囲を取り囲んでいるように思えた。

「気が変わった」

ジャーニスの声は、閑静な空間と同化するような静かな口調だった。

「事の真相を知られても、君の力は必要だと思えた。だが、やはり危険だ。君は今、ジクスやコッファのように計画をぶち壊そうとした。この地獄を抜け出すために手を組んだ最高の仲間だと思っていたのに……どうやら、君とは馬が合わなかったようだ」

ジャーニスは服の中に手を突っ込み、おもむろに吹き矢を取り出した。その瞬間、アーチャの頭の中は、アンジとコッファのことでいっぱいに膨れ上がった。そして、改めてジャーニスのことが憎いと思った。殺人を犯したことに何の罪の意識も持たないジャーニスを、呪ってやりたいとさえ思った。

気付くと、ジャーニスは吹き矢を口にあてがい、その発射口をしっかりとアーチャに向けていた。

「血を汚してでも守らなければならない大切な人たちって？」

死期を悟ったアーチャは、ずっと気になっていたジャーニスの言葉の意味を唐突に尋ねた。心のどこかにあったわずかな希望が……ジャーニスを父親というかけがえのない存在として慕っていきたいというわずかな希望が、アーチャをそうさせていた。

吹き矢を握りしめるジャーニスの手が地面に向かって下ろされた。

「家族だよ」

アーチャはドキリとした。ジャーニスの口調や表情が、ほんの一瞬だけ、あの時に……アーチャがジャーニスと初めて会話したあの時に……両親と共に過ごした、幸せな時間を思い出したあの時に、戻った気がしたから。

「結婚してたの？」

「ああ……妻と子がいる。みんな、僕の帰りを待っている……だから、僕は家族にもう一度会うまでは、絶対に死ねない。絶対に計画の失敗は許されない！」

大量の水を弾き上げる謎の轟音が聖地に響き渡り、ジャーニスの叫び声の余韻を掻き消した。荒々しい波が湖面でうねり、ほとりを目指して波紋のように広がった。アーチャは、漆黒の巨体が湖から突き上がる異様な姿を、ジャーニスの頭越しにはっきりと見た。キラキラと照り輝く硬質なボディに、『グレイクレイ』という白い文字が描かれている。

アーチャたちが強奪する手はずだった潜水艇のお出ましだ。

船体はアーチャの予想以上に小さかったが、その威厳の大きさには感銘するものがある。アーチャは立ちすくむことしかできないでいたが、それは束の間だった。

事の発端は、同時に起こった。たくさんの羽音、大勢の足音、そして、開く潜水艇の扉。それらがすべて共通の空間に寄り集まり、互いにすべてを悟った時、ジャーニスの計画は実行された。

六章　地上へ　2

バサバサと慌しい羽音がアーチャの耳元をかすめた直後、目の前を小柄な真っ黒い何かが飛んで行った。それも、一つや二つではない。チラッと見た限りでは数え切れないほど多くの何者かが聖地の至る所を飛び回っている。アーチャは辺りを飛び交う中の一匹だけに的をしぼり、その何者かをよく見ようと試みた。

それはギービー族だった。大きな口は顔の半分を占め、両あごにびっしりと生え揃った鋭い牙をガチガチと鳴らし、金切り声でキーキー鳴き叫んでいる。うさぎに似た耳と、こうもりのような羽が空中でパタパタとはためいている。ずる賢そうな三つの黄色い小さな瞳がキョロキョロと動き回り、有り余る四つの細長い腕で何かイタズラを仕掛けてやろうと手もみしている。

その数と姿に、アーチャは鬼気迫るものを感じた。これだけ多くのギービー族が監禁されていただなんて、想像もしていなかったのだ。しかも、その一匹一匹がとても凶暴だ。所々で取っ組み合いの激しい喧嘩が勃発しているし（体長よりも長いしっぽを互いに引っ張り合ったり、耳にかじりついたり……）、内の一匹は、ジャーニスが手にしていた吹き矢を乱暴に引っつかみ、遠くの方へ放り投げてしまった。もはや、ギービー族は聖地だけに限らず、アクアマリンの至る所で暴れまわっているようだった。

やがて、アクアマリン内のすべての兵士たちがこの騒ぎに気付き始めた。こちらに向かっていた兵士たち、睡眠していた兵士たち、潜水艇の中の兵士たち、その全員が聖地に集結し、度肝を抜かれたような表情で天井を見上げた。そして、我に返ったような勇ましい顔つきに変わったかと思うと、聖地をほとんど黒一色に埋め尽くす小悪魔たちを一匹でも取り押さえようと奮闘し始めた。

「そうだ、それでいい！　もっとだ、もっと暴れろ！」

狂ったように歓喜しながら、ジャーニスは両手を天井に掲げて叫んでいた。もはや湖面に浮かぶ潜水艇には、ジャーニスの思惑通り、兵士たちの監視の目は行き届いていない。奪取しようと思えば、いつでもそうできる。アクアマリンの警備体制はギービー族によって完全に崩され、ここはすでに無法地帯と化していたのだ。

兵士たちが死に物狂いでギービー族と戦っているかたわら、ジャーニスは顔中をほころばせ、アーチャに向かってほくそえんでいた。

「僕は行く、地上へ。光と、愛すべき家族を求めて。……アーチャ、君はどうする？」

「俺の親友を殺したお前と手を組むくらいなら、ここで死ぬまでドレイをしていた方がまだマシだ。お前とは行かない……絶対に行くもんか！」

微塵の迷いもうかがわせない、よどみなきアーチャの言葉だった。

「言っておくけど、僕は君のことを恨んでいるわけではない。目の前にある絶好の機会を逃すことが自分のためにならないことくらい、君にだって分かっているだろう？　あとで後悔しても、もう手遅れだよ」

潜水艇に向かって歩き始めたジャーニスは、すぐにその足を止めた。どこか一点を、驚愕しきった表情で見つめている。アーチャはつられるように、ジャーニスの視線の先を見た。この大混乱の中、そこだけが切り取られた別世界のように、周囲とは異なった奇妙な雰囲気を漂わせていた。

死んだはずのアンジとコッファがそこにいた。青紫色の血の気のない表情のコッファはアンジにしがみつくように立っていて、その

手には確かに、あの吹き矢が握られていた。その姿に戦慄し、氷づけになったジャーニスは、吹き矢の狙い撃ちには最適な的と化していた。

アーチャが次に目にした光景は、同時に倒れ込むジャーニスとコッファのはかない姿だった。

「アンジ……お前、本当にアンジなのか？」

震える足取りでイクシム族の男に近づきながら、アーチャはまだ信じられないという口調でそう尋ねた。男は大きくしっかりとうなずくと、「俺だ」と一言だけそう口にした。アーチャは全身から力が抜け落ちた気がした。

「アンジ……よく無事だったな」

「お前らの体と一緒にすんじゃねえよ。岩よりも硬いこの体を打ちやぶれるものがこの世に存在するなら、ぜひ教えてほしいくらいだ……そんなことより……」

アンジはコッファの顔を覗き込んだ。すでに息絶えていた。あの一吹きで、すべての力を使い果たしてしまったのだろう。だが、毒によって苦しみながら死んでいったというのに、コッファの表情はなぜか安らかだった。

アーチャはジャーニスの方を見た。まだかすかだが、指先が動いている。地面をつかんで立ち上がろうと、必死にもがいているようだった。

「放って置け、あんな奴……おい」

アンジの言葉に耳さえ傾けようとせず、アーチャはジャーニスの

そばまで歩み寄り、仰向けに起こしてあげた。ジャーニスの荒々しい息遣いがアーチャの頬にあたり、毒矢が首に深く突き刺さっているのが見えた。周りではギービー族と兵士たちとの小さな戦争が巻き起こり、先ほどより一層騒がしくなった。

「あと……あと、もう少しだった……のに」

ガラガラと喉を打ち鳴らすような声だった。目には涙が溜まり、こめかみを伝って音もなく流れ落ちた。そんなジャーニスを見て、アーチャは思った。この人を死なせてはいけないと。この人は……ジャーニスは、アーチャにとって“大切”な人なのだと。

「喋っちゃダメだ……死んじまう……」

アーチャの声はジャーニスと同じくらい震えていた。何もできなかった自分が、誰も守れなかった自分が、とても腹立たしくて、とても悔しくて、このやりきれない思いを涙に乗せて流してしまいたかった。そうすることで、心の中の嫌なことをすべて忘れしまいたかった。

「泣くな……アーチャ……泣くんじゃない」

ジャーニスの微弱な声が語りかけた。アーチャは小さく、わずかにうなずいた。

「そう……それでいい。アーチャ……僕の代わりにここを出るんだ……ここを出て……守るべき大切な人を見つけるんだ」

アーチャは首を横に振った。

「ずっと言えなかったけど、最初会った時から、俺はジャーニスを父親のように思ってきた。忘れかけていた親の存在を、ジャーニスのおかげで思い出すことができたんだ。だから俺にとって、ジャーニスは大切な存在だ」

ジャーニスの顔がみるみる青ざめていった。その瞳にはすでに生気がなく、黒い天井を向いたまま据わっていた。そして、音を発しない赤紫色の唇が「違う」と、はっきりそう動いた。ジャーニスのまぶたはゆっくりと落ち、唇がまたわずかに動いた。今度はちゃんとその音を発した。

「行け、地上へ」

当たり所が悪く、矢に含まれていた毒は急速にジャーニスの体内を虫食んでいった。そして、ジャーニスは死んだ。アーチャただ一人に見守られながら、陽の光さえ届かない地の奥底で。

六章　地上へ　3

「おい！　ここで何してる！」

ずんぐりな兵士がアーチャのそばまでやって来て、息も絶え絶えに叫んだ。横たわる二つの体を死体と認知できないほど、この兵士は気が動転しているようだった。

「さっさと部屋へ戻れ！　邪魔だ！　いいと言うまで部屋から出るな！」

アーチャはほとんど聞いていなかった。人の死を目の当たりにするのはこれが初めてではない。だがやはり、『死』という出来事には関わりたくないものだ。

他人の今際に直面し、自分の力ではどうすることもできないと断念した時、人々は、そのすべてを不幸と呼んだ。己の無力さを肯定できないばかりに、目には見えない力をその元凶と断定することで、人々はようやく『死』について納得することができるのだ。

かつては、アーチャもその一人だった。目の前で両親が殺された時、恐怖とショックのあまりに気を失ってしまった。その当時は、何もできずにいた不甲斐ない自らを罵倒することしかできなかった……だが、今は違う。これから何をすべきか、アーチャにはちゃんと分かっていた。

その時、潜水艇が低いうなり声を響かせた。なんと、ギービー族に根負けした兵士たちがこぞって潜水艇に乗り込み、アクアマリンからの脱出を図ったのだ。一人の兵士が潜水艇に乗り込む際に、残留する部下たちに向かってこう叫んだ。

「ジェッキンゲン大佐を連れてくるから、お前たち、持ち場を離れ

るなよ！」

部下たちからの返事は悪態ばかりだったが、兵士はおかまいなしに扉を閉め、直後に、潜水艇は逃げ出すようにして湖の底へと沈んでいった。

「ジャーニスの話を覚えてるか？」

二人の死体をジャーニスの部屋へ運び入れた時、アーチャはゆっくりと切り出した。

「フィンが通った隠し通路のことだろ？　ああ、しっかり覚えてるぜ」

アーチャがそれ以上話さなくても、アンジにはすべて承諾済みのようだった。潜水艇という頼みの綱を失った今、ここを抜け出す唯一の術は、もうその方法しか残されていないということを。

「おじいさんとその人魚の子を連れて、先に行っててくれないか？」

アンジの怪訝そうな表情がアーチャを見つめた。

「俺は、必ず後から行く。あの子を……マイラ族の女の子を連れて」

アンジは物を言いたそうに口を開いたが、踏みとどまった。見つめ返すアーチャの勇ましい瞳が輝いているのを見て、こいつには何を言っても無駄だと思ったのだろう。

「分かった……だが、一つだけ聞かせてくれ。今ならまだ計画を中止にすることができる。それでも、地上への道を選ぶのか？」

ゆっくりと深呼吸をして、アーチャはうなずいた。そこには、どんな恐怖にも屈しない、アーチャの揺るぎない決意がはっきりと現れていた。

「大切な人を守れ、ジャーニスがそう言った。だから俺はあの子を守る。そして、俺の意思でここを抜け出す。アンジこそ、ここに残る気なんてないんだろう？」

「毛頭ないね」

決まりだった。アンジは眠ったままの人魚をそっとかつぎ、アーチャは扉を開けて先に通路へ出た。

「なあ、アンジ。矢が刺さってなかったんなら、どうして死んだふりなんかしてたんだよ？　危うく俺が死ぬところだった……」

通路を進みながら、アーチャははっと思い出し、咎めるように文句を言った。アンジは少し得意になって答えた。

「不意打ちしようと隙を狙ってたんだ。お前こそ、俺の肌が頑丈だってこと、忘れてんじゃねえよ」

聖地の方から時たま聞こえてくる兵士たちの悲鳴が、アーチャには面白おかしく感じた。日頃のうっぷんを晴らしているのは、どうやらギービー族だけではないらしい。それは、アーチャが聖地を覗き見た時にはっきりと分かった。

「アンジ、あれを見てみろよ！」

後からやって来たアンジに向かって、アーチャはさも楽しげにそう言った。聖地で暴れていたのは、なんと、ジングとニールの双子だった。ギービー族の反乱に加勢し、どさくさに紛れて兵士たちをぶん投げている。日毎に蓄積されてきた苛立ちが、ここに来てとうとう暴走を始めたようだった。双子は驚くほど息もピッタリだ。

「あいつらにもまだイクシム族の血が流れていたなんてな。……アーチャ、必ずあの子を見つけ出して、また戻って来い。地上へ行く時は一緒だ」

二人は別々の道を走り始めた。アーチャは聖地の中央へ、アンジはじいさんの元へ向かって。

アーチャはまず、簡単に騙せそうな兵士を見つけることに専念した。そして、その標的はすぐに見つかった。つい先ほど、その最適な兵士と話したばかりだった。

「おい！　起きろ！」

急降下と急上昇を繰り返すギービー族たちの群れをかいくぐり、アーチャは、まだ気を失ったままの新米兵士のそばへ駆け寄った。肩をゆすったり頬を叩いたりしているうちに、兵士は呆然と意識を取り戻した。そして、聖地を埋め尽くすギービー族の大群と、剣とムチを当てずっぽうに振り回す兵士たちの攻防戦を目の当たりにして、再び気を失いそうになっていた。

「ジェッキンゲン大佐からの命令なんだ！」

アーチャの作戦は効果絶大だった。兵士の瞳が完全にその輝きを

取り戻した。

「ジェッキンゲン……ジェンキンゲン大佐から！　な、何でしょう？」

「このギービー族の反乱で、マイラ族の少女の生存が危ぶまれた。ただちに救出せよ」

もうこの兵士は水を得た魚だった。ふんぞり返って立ち上がったかと思うと、さも得意げに語り始めた。

「マイラ族の少女がアクアマリンにいるという噂は、何度か耳にしたことがあります。確か、この海底洞窟で一番高い位置にある部屋で生活をしているとか……ところで、どうしてドレイの君がそのことを？」

アーチャがうまい言い逃れを思いつく前に、ギービー族がまた一騒動起こしてくれた。三匹のギービー族がいきなり新米兵士を取り囲んだかと思うと、力を合わせて宙に持ち上げ、湖の中へ放り込んだのだ。

どうやら、ギービー族は敵が誰かなのかをちゃんと承知しているらしい。

六章　地上へ　4

アーチャは彼らに感謝の念を抱きつつ、昨夜、ジャーニスに見せてもらったアクアマリンの地図の内容を思い出していた。ここで一番高い位置にある部屋は確か……。

「9時の方向……ゼル・スタンバインの部屋だ」

そうと分かればと、アーチャは再び走り始めた。ただ一つだけ不可解なのは、聖地にゼルの姿が見えないことだった。彼がもし、少女と一緒に部屋にいるとしたら……アーチャはそれ以上考えないようにした。不安と緊張で頭の中がパンク寸前だったのだ。一度にこんなにたくさんの考え事を巡らせたのは、アーチャが初めて窃盗団として盗みを働いた時以来だった。だがその時でさえ、心臓がこんなにも激しく脈を打つことはなかった。

道が坂になり、大きな曲線を描き始めた。通路の幅は上へ行くほど狭くなり、ランプの熱が肌に伝わってくるほどの圧迫感だ。そして、足先の感覚が鈍くなり始めた時、一つの扉がアーチャの前に突如として現れた。そこは少し開けた平坦な地面の上だった。まだ記憶に新しい、闇に溶け込むゼルの部屋の扉がその奥の方に見え、部屋と通路を隔てる木造の壁が黙々と立ちふさがり、こちらを冷たく見下ろしていた。

アンジと一緒に行こうと思えば、すぐにでもそう決断できた。だが、アーチャには忘れることができなかった。作業場で見た、少女の悲哀な表情を。助けを求める、あのすがるような眼差しを。アーチャは、すべてを捨てる覚悟で、扉を思い切り押し開けた。

見覚えのある質素なつくりの部屋がそこにあった。

部屋の片隅にベッドが、机の脇に鏡台がなければ、ジャーニスの部屋と区別がつかなかったろう。そして、ここがジャーニスの部屋

ではないと断言できる明確な点は、マイラ族の少女がこの部屋に存在していることだ。鏡台の前の小さな椅子に腰かけていた少女は、今しがた乱暴に扉を開け、部屋にずかずかと入って来たのはどこの誰だろうかと、鏡からそっと目を離し、そして、アーチャを見たのだった。

そのまましばらく、二人は沈黙という時間に縛られてしまったかのように、ただじっと見つめ合っていた。少女は何がなんだか分からなかったのだろうが、アーチャは違った。少女と目が合ったその瞬間から、アーチャの心は大きく揺れ動いた。この子を守るためならどんなことだってできる……そんな気さえした。

「あの……？」

少女は、ボーっと突っ立ったままのアーチャを心配そうに気遣い、澄み切った純粋な声で呼びかけた。アーチャはハッと我に返り、何度かまばたきを繰り返して平静を保とうとした。気付くと、少女は立ち上がり、サテン地の白いドレスをなびかせてアーチャに近寄ってくるところだった。

「あ、ごめん……驚かせちゃって。俺の名前はアーチャ……ここのドレイさ」

つい先ほどとは全く違う緊張感がアーチャを取り巻いていた。少女と目が合う度に、体中がじわりと熱くなるのを感じた。

「君を助けに来たんだ……アクアマリンから脱出するために」

言葉を並べるのでさえ一苦労で、アーチャはやっとの思いで言い終えることができた。それを聞いて、少女は何かを思い出したのだろう。両手で口をふさぎ、間の距離を更に縮めて、アーチャをもっ

とよく見ようとした。

「あなたもしかして、作業場にいた、あの……ハラペコくん？」

「え……ああ、そうさ。俺のこと、覚えててくれたんだね」

そのあだ名はアーチャにとってお気に召さないものだったが、それで少女が自分のことを覚えていてくれたのなら、ジェッキンゲンに少しくらいは感謝してやろうと、アーチャは渋々と深謝することにした。

「私、シャヌっていいます」

少女は名前を告げ、すぐに続けた。

「アーチャさん。見てのとおり、私、マイラ族……」

「アーチャって呼んでいいよ」

それだけを言って、アーチャはただにっこりと微笑んだ。

「私が怖くないの？」

純白の両翼がふわりと嬉しそうに弾んだのを、アーチャは見た。

「君を怖いと思うなら、わざわざこんな所まで助けに来るもんか」

嬉しそうにはためく翼は、その喜びをシャヌ本人にも分けてあげたようだった。

シャヌの笑顔を、アーチャは初めて目にすることができたのだ。

「ねえねえ。俺も君のこと、シャヌって呼んでいい？」

少女は赤面し、うつむいたまま小さくうなずいた。アーチャは心の底から安堵した。先ほどからしつこくまとわりついていた、あの奇妙な緊張感が少しだけ取り払われた気がした。

「私を助けるって、一体どういうこと？」

ベッドのシーツをがむしゃらに剥ぎ取ろうとするアーチャの背中に向かって、シャヌは小さな声で尋ねた。

「地上へ行くんだ。俺の仲間も一緒さ」

シャヌを不安がらせないように明るく振舞いながら、アーチャはとうとうシーツ全体を引っぺがした。そして、シャヌの着ている白いワンピースと背中の翼を覆い隠すようにして、そのシーツをふわりとかぶせてあげた。

「地上でその翼が見られちまったら、またここに逆戻りだからな……これでよし」

それはあまりに不自然な格好だったが、翼はうまい具合に隠れてくれた。あとは、本当にこのシーツの役立つ時が来てくれることを祈るばかりだ。

「私の話しを聞いてほしいの」

今度は部屋中の壁という壁を拳で叩き始めたアーチャに向かって、シャヌは声をかけた。だが、シャヌの声は小さすぎて、アーチャは

うまく聞き取ることができなかった。

「え、何？　何か言った？」

「私、ここからは出られない」

今度ははっきりと聞こえた。シャヌの思いもよらぬ言葉に、アーチャは呆気に取られて、しばらく口が半開きのままだった。

六章　地上へ　5

「何だって？」

違った意味で、アーチャはまた聞き返した。

「私、ここからは出られない」

シャヌの声はまた小さくなっていたが、その内容は全く一緒だった。

「どうして……何で？」

シャヌはまとったシーツを前にたぐり寄せ、ただでさえ小柄な体を更に小さくし、その表情をアーチャに窺わせないほど深くうつむいてしまった。

「シャヌが怖いのはよく分かる。俺だって……いや、俺は平気さ！　地上へ行くためなら、背に腹は変えられないだろう？　だから、その……シャヌもがんばろうぜ！」

こんな時、もっと気の利く言葉をかけられたらどんなに良いものかと、アーチャは心底悔やんだ。シャヌはうつむいたまま、首を横に振った。

「私がいなくなったら、みんなに迷惑をかけてしまう。それに……」

シャヌは何か言いたそうに、アーチャに向かって目配せした。

「何なの？」

戸惑いながら、アーチャは穏やかな口調で聞いた。そしてとうとう、覚悟を決めたように、シャヌはまっすぐ顔を上げた。

「地上で自由を手に入れても、私には行くところがない」

よく考えてみれば、すぐに気付きそうなことじゃないか。アーチャは自分の鈍感さにまたもや腹を立てた。そもそも、この時代にマイラ族が存在していること自体、おかしな話だというのに……。

「親はいないの？」

どこまで聞いてよいやら、アーチャにははっきりとした自信がなかった。シャヌの心を傷つけまいと、独り相撲をしているようで情けなかった。

「分からない……私がマイラ族のことを口にするのを、あの人はとても嫌っていたから……」

「あの人って、ジェッキンゲン・トーバノアのこと？」

シャヌがうなずいたのとほとんど同時に、扉がゆっくりと開いた。アーチャは悲鳴を上げそうになった。そこに立っていたのは、ゼル・スタンバインだった。

「何の用だ？」

目を皿のように丸くして硬直するアーチャを見つめながら、ゼルは冷静な口調で尋ねた。そして、アーチャの返事を聞くこともせず、

机の引き出しから白い用紙と短い鉛筆を取り出すと、立ったまま何かを走り書きし始めた。アーチャが見る限りでは、ギービー族の反乱について、誰かに報告書を書いているようだった。

「何の用なんだ?」

ゼルは繰り返した。一度目より、はるかに荒々しい口調だった。これ以上隠し切れないと思い、アーチャはついに観念した。

「俺は今日、これから、シャヌと一緒にアクアマリンを抜け出す。地上へ出て、俺はシャヌを守る」

アンジとじいさんのことを伏せて、アーチャは白状した。鉛筆を握るゼルの手がピタリと止まった。シャヌは不安げに、アーチャとゼルの姿を交互に見つめている。

今度こそ、実験の材料としてこの身をささげることになるだろう……常盤色のマントで覆われたゼルの後ろ姿を見つめながら、寒くて暗い牢屋のことを、アーチャは鮮明に思い出していた。何の解決策も見つからない、絶体絶命の土壇場にアーチャは立たされていた。

ゼルは用紙の脇に鉛筆を置き、アーチャを振り返った。赤い軍服と厳しいゼルの顔が、ランプの明かりに照らし出されてこちらを見下ろしていた。

もう、煮るなり焼くなり、好きなようにしてくれ……それは、アーチャが腹を決めて間もない時だった。

「その言葉、信じて良いのだな?」

アーチャは最初、ゼルが何を言っているのか理解できなかった。またそれは、シャヌも同じらしかった。寂しげな瞳で、怪訝そうにアーチャを見つめている。

「いざとなったら自分一人だけ助かればそれでいいなどと、たわけた考えを持っているのではないのか？」

重大な試験問題でも課するような物々しい口調で、ゼルは更に続けた。彼が何を伝えたいのか、アーチャはようやく勘付き始めた。

「こんな言葉を、父親から言い聞かされたことがある」

アーチャは過去の思い出に耽りながらそう言った。

「誰も救えない奴に、自分を救う資格はない……それは、俺が一番よく心得てることだ」

静寂が訪れた。アーチャはゼルを、ゼルはアーチャを、シャヌはその双方を見つめながら、ただ時間だけが過ぎていった。

「世界が破滅への道を歩み始めた」

しばらくの後、ゼルが出し抜けに切り出した。厳格な表情はそのままだ。

「そして、シャヌの恐るべき魔力は、我が軍の最終兵器となった」

シャヌは怯えるように体を震わせた。そんなシャヌをかばうように、アーチャはぐいと前へ踏み出した。

「シャヌは人殺しの武器なんかじゃない。俺たちと同じ人間だ。まっとうに生きる権利を俺たちから奪おうっていうなら、誰であろうと容赦はしない」

「私もそう思う」

ゼルの口調は穏やかだった。あまりに穏和すぎて、アーチャは拍子抜けしてしまった。

「８１２番……やはり、お前はかつてのドレイたちとは違うようだ。地下の地獄にいながらにして、お前の目はまだ死んでいない」

ゼルは部屋の奥まで進み、右手をそっと壁に添えた。すると、ゼルが触れていた面の壁が一瞬で消え去り（アーチャは思わずまばたきを繰り返し、シャヌの方からは小さな悲鳴が上がった）、その向こう側に暗闇が広がった。音はなかったが、冷たい風が部屋に入り込み、アーチャの顔を打った。

きっとこれこそが、フィンが通ったという隠し通路に違いない。その闇を背に、ゼルはこちらに向き直った。力強さを感じさせるその勇ましい眼差しが、アーチャとシャヌを見つめ返していた。

「私は、軍という組織に縛られ、己の意思を主張することへの恐怖心に屈していた。偶然など起こりはしない、これは運命だから仕方ないと決め付けていた過去の自分を、私は今、とても恥ずかしく思う」

再度、ゼルとアーチャは間近で向かい合った。アーチャを見下ろすゼルの表情には、一点の曇りさえなかった。

「お前を見ていると、偶然ではなく、奇跡というものを、私は一度信じてみたくなった」

やはり、アーチャの見る目に狂いはなかった。ゼル・スタンバイ

ンは、アーチャの予想以上に“まとも”な兵士だった。いや、彼は本当に兵士なのだろうか？　このまま兵士として、国軍に仕えていてよいのだろうか？　いぶかりながら、アーチャは尊敬の眼差しでゼルを見つめていた。ゼルがどんな立場であろうと、アーチャが彼を敬愛しているという事実に、何ら変わりはないのだ。おそらく、これらからもずっと。

ゼルはシーツで身を隠すシャヌの方へきびきびと歩いていった。

「シャヌ、彼と一緒にここを出なさい。彼ならきっと君のことを守ってくれる。私なんかよりもずっと頼りになるはずだ。大丈夫、ジェッキンゲンのことなら私が何とかする」

「でも、私がいなくなったらあなたが……」

「私のことはどうでもいい。それより、君が本当に心配すべきは自分自身のことだ。君はここにいてはいけないんだ……彼と一緒に、どこか遠くへ逃げなさい。追っ手の来ない、遥か遠い国へ」

シャヌはまたうつむいたが、それは束の間だった。再び顔を上げたシャヌの表情は、もう完全に吹っ切れていた。そこには、立派ともいえるマイラ族の優美な風格がにじみ出ていた。

「分かりました。私、やれるだけやってみます」

シャヌは、今度はアーチャの方を笑顔で振り向いた。アーチャはドキリとした。

「一緒にがんばろうね、アーチャ」

はにかみながら、アーチャはこくりとうなずいた。

「なあ、兵士さん……俺のこと、買いかぶりすぎなんじゃないか？」

恥ずかしさをごまかすために、アーチャは口ごもりながらゼルに質問した。ゼルは、そんなアーチャの思いを知ってか知らぬか、ただ「そんなことはない」と豪語しただけだった。

結局、アーチャはこの部屋の中で誰よりも安堵していた。実験の材料という、最悪の事態をまぬがれた……残された道は、たった一つだけだ。

「ここを行けば、地上に出られるはずだ。マープル族の間だけで知られる隠し通路だが、至って問題はないだろう」

「フィンが脱走に使った通路だからね」

アーチャは得意になって発言したが、ゼルのいぶかしげな視線にすぐさま気付いた。

「えっと……人に聞いたんだ。ジャーニスが……」

無意識のうちに、アーチャはその次の言葉を失っていた。嘆かわしい最期を迎えたジャーニスの姿が、アーチャの脳裏に浮かんでは消えた。

「ジャーニスが、脱走したフィンについて色々教えてくれたんだ」

アーチャは悲しみをぐっとこらえながら言い終えた。

「ああ。フィンのことも、彼らが企てていた脱走計画のことも、私は知っていた。先日死んだジクスが、私にだけそのすべてを語って

くれていたから」

通路の暗がりを見つめながら、ゼルは静かに言った。それを聞いて、アーチャは度肝を抜かれた。

「それじゃあ、どうして止めようとしなかったんだ？　あんたら兵士にとって、俺たちは戦争に使うための道具じゃなかったのか？」

アーチャは吐き捨てるようにまくしたてた。ゼルは漆黒の闇からアーチャへと視線を移し、その強面を少しだけ和らげた。

「誰にでも共通の未来が存在する。それがどのようなものであれ、お前たちにはその未来に向かって生きていく権利がある。私は、軍のやり方に納得がいかないだけだ」

「あんた、ちょっと変わってるね」

アーチャは半ば呆れて言った。

「いいえ、アーチャ。ゼルは兵士の中でも、自分のことをちゃんとよく分かってる兵士なのよ」

シャヌがそう指摘した時、アーチャはふと、この二人の間柄をもっと詳しく知りたくなった。だが、今はそんな時ではない。アーチャは忘れかけていた自制心を取り戻した。

「さあ、もう行こう！　仲間が待ってる」

アーチャはシャヌを促し、数歩先を進んで通路の闇に足を踏み入れた。

「８１２番！」

アーチャは立ち止まり、振り向いた。シャヌの肩越しに、におう立ちしているゼルの姿がちらと見えた。

「８１２番、名は何と？」

アーチャはにっこりした。

「俺はアーチャ・ルーイェンだ！　世界に名高き窃盗団、ルースター・コールズの“おせっかい野郎”とは俺のことよ！」

快活な叫び声を響かせながら、アーチャとシャヌは深い闇の中に消えていった。

六章　地上へ　6

ぬかるんだ地面を踏みしめながら、アーチャとシャヌは歩き続けた。黙々と歩き続けて数分後、細い一本通路はいつの間にか青緑色へとほのかに輝き、剥き出しの岩壁を美しく照らし出していた。高い天井からは聖地と同じ、無数の岩のつららがこちらに向かって突き出している。二人が地を踏み鳴らす音以外は全く何も聞こえない。無音の空気に包まれた空間が果てしなく続いているようだった。

「たくさんの魔の力が、ここに集まってるみたい……」

シャヌはアーチャのすぐ後ろを歩いていたが、その声がどこから発せられたのか分からないくらい、通路の壁という壁に反響し、二重、三重になってアーチャに聞こえた。

「分かるの？」

声を低く落としながら、アーチャはすぐに尋ねた。

「感じるの。どんどん強くなってる」

「いつもと変わらないけどなあ……壁が綺麗ってこと以外は」

アーチャは周囲をくまなく見渡した。ふと、シャヌと目が合った。

「怖い？」

アーチャをじっと見つめたまま、シャヌは首を横に振った。

「だけど、この海底に来る前までは毎日が怖かった」

そういえばと、アーチャは思った。シャヌがアクアマリンへ来る前のことを、アーチャはまだ何も知らない。

「シャヌがここへ来た時、ジェッキンゲンと一緒だったよね？　彼と住んでたの？」

シャヌは力無くうなずいた。

「物心ついた時から、私はあの人の屋敷にいたの。でも、その屋敷からは一歩も外へは出してもらえなかった。だから私は、一日のほとんどを自分の部屋で過ごしたわ……色々な本を読んだり、窓から見える風景を絵に描いたりして」

シャヌの表情は、エメラルドグリーンの美麗な輝きでさえ補えきれないほど、どんよりと暗くなっていった。

「そして、つい最近読んだ本でやっと分かったの。この翼の意味が……私がマイラ族という、百年も前に滅びたはずの種族だということが。本当の親が誰なのかも、どうしてここにいるのかも……私が存在する理由でさえ、何も分からない。そのことが、とても怖かった」

シャヌは足を止め、アーチャも即座に立ち止まった。あの日、作業場でシャヌが見せた、あのすがるような悲哀な表情が、アーチャをじっと見つめていた。

「アーチャ……私って何なの？　人目を避けて、隔離された部屋で何十年も生きてきた私って、一体何なの？」

「シャヌはシャヌさ」

アーチャは心からきっぱりと言い切った。

「マイラ族としてじゃなく、シャヌはシャヌのまま、自由に生きていけばいい。だから、いつかその翼を隠さなくてもいい日が来るように、俺は精一杯努力する。さっき言ったろう？　俺はシャヌを守るって」

いつの間にか、シャヌの顔は溢れんばかりの笑顔に変わっていた。これから待ち受けるどんな苦難にも打ち勝てる……そんな晴々とした笑顔だった。

上がりも下りもしない道を、二人は縦に並んで歩き続けていた。周りの様子も、この静けさも、何ら変わりはない。アーチャの記憶では、確か、この隠し通路は完全な円形だったはずだ。だとすると……。

「もしかしたら俺たち、同じ所を歩き続けてるかもしれないぞ」

アーチャは困惑を隠しきれずにそう口にした。

「でも、足跡がないわ」

シャヌは青緑色に照らし出される、アーチャの数メートル先の地面をしっかりと指差し、正確な事実を証明してみせた。確かに、この通路は足跡がはっきり残るほどぬかるんでいた。だとすると、

これも人魚族のまやかしなのだろうか？

「それに、魔力はますます強くなってる……あれ、何かしら？」

アーチャは前へ向き直った。先細くなりつつある通路の先に、大きく開けた、ここよりも遥かに明るい輝きに包まれる謎の空間が存在していた。二人はそこへ向かって、同時に走り出した。

そこで二人が見たのは、水のようにしっとりときらめく青い衣に身を包んだ、一人の年老いた人魚だった。空間の中央で堂々と身構える苔だらけの大岩に腰かけ、目をつむって物静かに瞑想している。うろこに覆われた繊細に輝く青緑色のその手には、メロンほどの大きな真珠が握られ、長い指に包み込まれながら淡い光を放っている。アーチャとシャヌは恐る恐る近づいて行った。

「この世に二つとない神秘、それが音」

ほんの数メートル手前まで来た時、人魚が突然口を開いた。

「音は、すべての事物に対し、その裏の顔を私に教えてくれる。真実に覆い隠された虚実が、私に語りかけてくるのです。あなたたちの吐息や足音でさえ、その対象となる」

シャヌに劣らないほど綺麗な声だが、じれったくなるようなゆっくりとした喋り方だった。

「あなたは誰？」

礼儀もわきまえず、アーチャは出し抜けに聞いた。しかし、人魚の目がぎょろりとこちらを見たので、アーチャはとっさに愛想よく笑っておいた。改めてよく見ると、人とも魚とも見て取れない顔を

している。だが、繊細に織り込まれた衣の裾から伸びるその下半身は、確かに魚の尾ひれだ。

「私の名はグランモニカ。この海底で二百五十年以上生きてきた、人魚族の長です」

アーチャとシャヌは顔を見合わせた。鏡を見ているかのように、二人の驚いた表情はそっくり同じだった。

「私には分かります。あなたたちの他にもまだ、こちらに向かって歩いて来る者たちがいる……」

「きっとアンジたちだ！」

アーチャは大きな声でそう言った。その声に反応するように、どこからか別の声が聞こえてきた。しかも、何だかやたらと騒々しい。

「本当に外に出られるんだろうな？　もし何か悪巧みしてるんだったら……」

「さっきからしつこいぞ……おい、じいさん！」

「あの老いぼれ、また立ち止まってるぞ。ニール、連れて来てやれ」

「いいよ。俺、お世話大好きだから」

「信用できねえ言葉だ」

「あいつはああ見えて純粋だ。俺は筋金入りの薄情だがな……ところでその人魚、非常食にしちゃあ豪華過ぎねえか？」

「ばか。非常食なはずないだろ」

不意に、アーチャとアンジは互いを見つけた。アーチャは通路から出てくるアンジを、アンジは満面の笑みでにおう立ちするアーチャの姿を。

「よう、親友」

アーチャは『やってやったぞ』という得意げな笑顔でアンジに言った。

「うまくいったみたいだな、親友」

シャヌの方にちらと目配せするアンジの表情は、どこか嬉しそうだった。折りしも、ジングとニール、そしてじいさんが通路を抜けてアーチャたちの元へと集まった。

六章　地上へ　7

「あの二人も連れて来たんだな」

グランモニカの容姿に見惚れる双子をちらりと観察しながら、アーチャは囁いた。

「そのせいで時間がかかっちまったけどな。……あいつらだって、腐っても俺と同じイクシム族だ……でも、ほんと言うと、ほっとけなくってな……アーチャのおせっかいが移っちまったかな」

それはいいことだと、アーチャは何度もうなずいた。

「あなたたちがここに来た理由は聞かずとも分かります」

グランモニカがそう言うと、みんなは自然と彼女の前に集まっていた。

「希望という名の軽やかな足取りが、私にそう教えてくれています。そして、あなたたちの呼吸は、地上を包み込む温かな空気を求め始めている。以前ここへ来た、あの女性のように」

「ここから地上へ出られるんですね？　俺たち、この地下から抜け出すためにここまでやって来たんです」

歯がゆい思いにそわそわしながら、アーチャは機敏に尋ねた。それは、ここに集まった全員が最も気にしていたことだった。

「それは自由を手にするためですか？」

アーチャの質問をかいくぐり、グランモニカは平然とした様子で質問を返してきた。

「俺たちが求めているのは明るい未来だ」

アーチャが答えた。

「ここから出られるなら、それ以上のものは求めないぜ」

アンジがそれに続いた。すると、アンジの肩で眠り続けていた人魚の子が突然宙に浮き、シャヌの頭上を越え、グランモニカの元へとゆっくり移動していった。

「私たちはヒト族にすべてを奪われました」

すやすやと眠る男の子の頭を優しく撫でながら、グランモニカは悲哀な声色で言った。

「魔力の結晶体であるアクアマリンを悪用し、我々の住み家であるこの海底を占領した。そして、愚かなヒト族は、ついに神の領域をも超越してしまった」

「ここのドレイさんたちが作り続ける、あの黄金の神殿と何か関係があるのですか？」

シャヌが尋ねても、グランモニカはしばらく何も答えなかった。シャヌをじっと見据えたまま、何か物思いに耽っているようだった。

「ええ。それも一つの要因となっているのは確かでしょう」

グランモニカの深刻な声色は、その表情からも察することができた。

「ですが、それだけではありません。むしろ問題なのは、マイラ族のあなた自身と、そこにいるご老人なのです」

それを聞いて、シャヌは身を引いたが、じいさんはとぼけた顔で耳の裏をかいているだけだった。

「何が問題なんです？」

アーチャはシャヌに負けないくらいの緊張感にかられて、とっさにそう聞いた。じいさんはともかく、シャヌを不安がらせるようなことはしたくない。

「なぜそうなってしまったのかも、それにより引き起こされる問題も、決して語ることはできません。その行為が、万物の流れを乱してしまうからです。ただ、これだけははっきりと言えます」

グランモニカの下あごから牙が突き出し、キラリと光った。

「あなたたち二人がこの瞬間に存在している理由が、必ずどこかにあるはずです。そして、その目的を成し遂げた時、その存在はこの時間の流れから消えてなくなる」

「何を根拠にそんなこと言って……」

重度の焦燥感で錯乱気味のアーチャを、グランモニカは片手を前に突き出すだけで落ち着かせてしまった。まるで、魔法でも使った

かのように。

「先ほども言いましたように、私にはその者が発する音だけですべて分かるのです。心の中を透かして読み取るなんて造作もないこと」

それを聞いて、心の中に次々と浮かんでは消えていくグランモニカへの悪態を、アーチャはとっさに考えないようにした。

「分かりました」

やにわにシャヌが口をきいた。アーチャが思っていたより、ずっとしっかりしているようだった。

「私は、ずっと自分のことが知りたいと思っていました。アーチャやここにいるみなさんと地上へ行き、滅びたはずのマイラ族である私がなぜここに存在しているのか……その理由を見つけ出してみます」

「そういえば！」

後ろの方でボーッと突っ立っていただけのじいさんが、何の予告もなしに突然声を張り上げたので、全員が一斉に振り向くことになった。

「何だよじいさん、脅かすなよ！」

アンジが不快に染まった怒声を浴びせても、じいさんはまるでへっちゃらだった。

「そういえば、わしも何かを探していたような気がするぞ！」

「散歩用の杖じゃないの？」

アーチャが嘲ると、じいさんは悲しそうな表情で首を振った。

「杖はずっと前になくしたんじゃ……」

じいさんがしょげ始めると、みんなはまたグランモニカの方を向き直った。

「アーチャ、先ほどの質問に答えましょう。この地下から脱出することは可能です。私の力を持ってすれば、あなたたちを好きな所へ移動させてあげます。ただし……」

喜びに浸るアーチャたちに平静さを取り戻させるため、グランモニカは声を低くして最後にそう付け加えた。狙い通り、アーチャたちの顔からは笑顔が吹き飛んだ。

「何ですか？」

アーチャは、もう勘弁してくれと言わんばかりの口調で聞いた。

「我々が失い、我々が再び与えた自由を、大切に過ごしてほしいのです」

グランモニカのその言葉は、みんなの心にずしりと感じるものがあった。

「アクアマリンの存在に気付いたヒト族がこの海底を襲撃しに来た時、私だけはここへ避難しました。ですが、多くの仲間はドレイと

して捕われ、今も尚、過酷な労働に耐え忍んでいます。私はそんな彼らのためにも、ここにじっと留まり、絶好の機会を狙っているのです。そう……ヒト族への反撃の機会をね」

自分がヒト族であることを、アーチャは段々と申し訳なく思うようになった。そして、同種であるヒト族が、戦争のためにたくさんの犠牲者を生み出しているという事実を知りながらも、何もできないでいる自分が悔しくてたまらなくなった。

「俺は、俺が今できることをやる。それがどんな小さなことでも、背を向けたり、投げ出したりしない。この狂い始めた世界を、俺が元通りにしてやる」

アーチャの言葉は、決して強がりではない。ドレイとしてこの海底にやって来てから、アーチャの考えは変わった。ここへ連れて来られるまでの自分は、戦争には他人事だった。今では、その頃の自分が無知な愚か者としか思えないでいた。

自分のことしか考えられなくなってしまったら、それは世界で一番の不幸と言えるだろう。

「暇つぶしに、俺も手伝うぜ」

「もちろん、私だって」

アンジとシャヌの真剣な眼差しがアーチャを見つめていた。後方で黙って話しを聞いていた双子も、さすがに事の重大さが分かってきたようだった。アクアマリンを抜け出し、再び地上へと戻っていくことの重大さが。

「その言葉、信じましょう。そして、私もできる限りのことはしま

す。世界を平和へと導くために。さあ、時が来ました。あなたたちが求めるその場所を、私に教えてください」

どこへ行きたいか、アーチャの中ではもう決まっていた。

「グレア・レヴにしよう。俺の仲間がそこにいるはずだ。あそこは犯罪者だろうが逃亡者だろうが関係無い。もちろん、種族の違いだって例外じゃないよ……お前たちはどうする？」

双子は互いの顔を見合って、ニヤリと笑った。アーチャは首をかしげた。

「俺たちは戦争のない国で気ままに暮らすぜ」

「ジング兄さん、頭いい！　すごくいい！」

ジングはアーチャとアンジの前までのそのそやって来たかと思うと、鼻の頭をちょっぴり赤くしてもごもご言った。

「ありがとよ……この恩は一生忘れねえ」

「ここで死んでいった仲間たちのことも、一生忘れるなよ。約束だぜ」

アンジの返答は素っ気ないものだったが、そこに嬉々とした思いが込められているのが、アーチャには何となく分かった。

「ジングとニールよ、あなたたちはチベルという国に送ってあげます。あそこは海に囲まれたへんぴな所ですし、多くのイクシム族も住んでいるはずです。他の四人はグレア・レヴですね。よろしい」

グランモニカがその大きな瞳を閉じた時、手元の真珠玉が今までで最も強く光り輝いた。

アーチャは足の裏が徐々に暖かくなるのを感じた。その直後、足のつま先から頭のてっぺん目がけて、体の中を何かが猛スピードで駆け抜けていった。そして、その何かに引っ張られるように、体がふわりと宙に浮いた。淡い青色に燦然ときらめく、不思議な光のベールに全身が包まれたかと思うと、目の前はもう真っ暗だった。

アーチャは緑の匂いを感じ、背の低い草花が頬をくすぐっていることにふと気付いた。その直後、アーチャの視界に飛び込んできたのは、青空の真っ只中でギラギラと燃え続ける灼熱の太陽だった。その暖かな射光が、アーチャ、アンジ、シャヌ、じいさんを、明るく出迎えてくれた。

アーチャたちの未来が、その明るい輝きのようであってほしいと言わんばかりに。

七章　グレア・レヴ　1

アーチャ、アンジ、シャヌ、そしてじいさんは、互いに手を取り合い、暖かい柔らかな草地から起き上がった。ふわりと心地良い夏の風が丘を駆け抜け、ずっと向こうの方で咲き誇る色とりどりの花たちを優しく揺らしていた。上空で何気なく漂うふっくらとした厚い雲が草原に影を落とし、風に煽られてゆっくりと南の方角へ移動している。

その場には似つかわしくないドレイ服姿の男三人と、白いワンピースの上に白いシーツをまとう少女が一人、目の前に広がる賛美な光景に目を奪われ、ただただその場で呼吸を繰り返しているしかなかった……長い間ご無沙汰していた、“地上”での呼吸を。

「俺たち、帰って来たんだ……地上に」

アーチャの口調は、まるで寝言のように物静かだった。

「これが地上じゃなかったら、きっと天国だろうな」

アンジは夢見るような表情で言った。アンジがこんな幸せそうな顔をするのは、兵士たちからたくさんの御馳走を奪ったあの時以来だった。

「見て！」

シャヌが空を指差して、突然叫んだ。青い鳥が数羽、楽しそうに空を舞っていた。アーチャはそれがどうかしたのかと聞きたくなったが、仲むつまじい鳥たちを見ているうちに、気がガラリと変わってしまった。知らぬ間に、涙が溢れ出そうになっていた。

「すげえ……すっげー！」

青い鳥たちを追いかけるように、アーチャは夢中になって丘を駆け下りていった。かつて、地上という世界で自由に翼を羽ばたかせる鳥たちを見て、アーチャはこれほどまで感銘したことはなかった。それが当たり前のことだと思っていたから……深く考えず、自由に行動することこそが、人間が生きていく上での当然の権利だと思っていたから。

「俺、やっと分かった！」

丘の上の三人を振り返って、アーチャはとんでもなく大きな声で言った。

「当たり前と感じることが、とっても幸せなことだったんだ！」

風に揺られて楽しそうに前後する草花の上に、アーチャは仰向けにドサリと倒れ込んだ。そして、地に向かって降り注ぐ太陽からの熱いエネルギーを、その弱りきった体のすべてで受け止めた。

「俺、生きるよ」

アーチャは呟いた。

「海底に残された他のドレイたちや……ジャーニスの分まで、しっかり生きる」

丘を下りてくる三人の足音が聞こえてきた。アーチャは軽快に立ち上がり、幾本もの細い灰色の煙が立ち昇る東の方角を指差した。

「あっちに歩いていけば街がある。まずはそこで今後のことを考えよう」

「アーチャが住んでいた所なの？」

シャヌのちょっとした質問に、アーチャはただ「うん」とだけ答えた。

「懐かしいのう」

東へ向かって歩き始めた矢先、じいさんが上の空で言った。

「何が？」

みんなが疑問に思ったことを、アーチャが代表して尋ねた。だが、じいさんは物思いに耽ったまますっかり黙り込んでしまった。アーチャは、じいさんがふらつく足取りで歩くのを心配そうに見つめ続けるシャヌの姿に気付いた。

「そういえば、シャヌはまだ何にも知らないんだっけ」

アーチャはアンジの巨大な腕をわしづかんで、シャヌの前にぐいぐい引っ張り出した。

「こいつがアンジ。鼻持ちならないけど、根は良い奴だ」

アンジはわずかにお辞儀して、シャヌの顔をちらと窺った。どうやら、イクシム族である自分の姿を、シャヌがどう思っているのか気になっているようだ。ただ者なら、怖くて逃げ出してしまうだろ

う。だが、シャヌの場合はむしろ、アンジのことをいささか気に入った様子だ。

「私はシャヌっていいます。もう知ってると思うけど、マイラ族の生き残りなの……アンジさんって、イクシム族でしょう？　イクシム族はすっごく力持ちだって、本で読んだことある」

「俺たちのことが本に？」

なぜだか、アンジは本の話題に気を取られた。

「自慢じゃないが、俺は生まれてから一度も本を読んだことがねえ。だから本の素性なんて知らないが、イクシム族のことを書くなんて、その作家はかなり暇を持て余してたんだな」

「タダ働きよりよっぽどマシさ」

過酷なドレイ生活を生々しく思い返しながら、アーチャはうつろな声を出した。

「あちらの方は？」

じいさんのくの字に折れ曲がった腰を不安そうに眺めながら、シャヌはこっそり聞いた。シャヌにとっては、アンジよりもじいさんの方がよっぽど恐ろしいに違いない。

「あの人は……」

二人は口ごもり、何も答えることができなかった。アーチャとアンジは、今ごろになってある事に気付いた。

「そういえば、俺、おじいさんの名前知らないや……」

肌に密着するドレイ服が気持ち悪いなと思いながら、アーチャはポロッと言った。

「俺もだ」

アンジときたら、知らなくても特に支障はないと言わんばかりの素っ気なさだ。

「聞いてくるね」

そんな二人を置いて、シャヌはじいさんのそばへ行ってしまった。アーチャは今まで、じいさんの名前を知りたいと思ったことさえなかった。というより、じいさんに名前を尋ねることが時間の浪費につながるということを、アーチャとアンジは誰よりもよく知っていたのだ。

「忘れちゃったんだって」

数分後、浮かない顔をこしらえて、シャヌは二人に悲しげな声で報告した。それを耳にして、アーチャとアンジは顔を見合わせた。

「あのおじいさん、少しいかれてるのさ」

アーチャが淡々と説明した。

「いや、かなりだ」

アンジがすぐさま訂正した。シャヌはわずかに首をかしげた。

「記憶喪失みたいだったけど……」

「え？　記憶……？」

記憶喪失という言葉に、アーチャは敏感に反応した。

「だけど、昔から野菜が好きだったって、前に言ってたよ。さっきだって、懐かしいとか懐かしくないとか……」

「何かを体験したり、感じたりしたことは、曖昧に覚えてるみたい」

「確かに……」

アンジはいかにも深刻そうな声色で会話に入り込んだ。

「断片的だったじいさんの記憶が突然はっきりとよみがえった例がある。じいさんが狂ったように奇声を上げて、部屋中が大騒ぎになったあの時だ。それに、人魚の所ではこうも言った……『わしも何かを探していたような気がするぞ』」

三人はしげしげとじいさんを見た。はげかけの頭をこちらに向け、空に浮かぶ雲の数を、声を上げて楽しそうに数えている。

「とても不思議なおじいさんね」

じいさんと出会った時のいきさつをアーチャが話し終えた時、シャヌはそう感想を漏らした。その時じいさんは、雲の形が何に見えるかを声に出して読み上げているところだった。じいさんが「ずん

ぐりカボチャ」と命名した雲のちょうど真下に、目的地の街を見渡すことができた。先ほどよりもその輪郭がはっきりと見え、空に昇っていく煙が段々と濃く、太くなってきた。

七章　グレア・レヴ　2

「この丘も、街も、山も、みんなひっくるめて『グレア・レヴ』っていうんだ」

両腕を限界まで広げながら、アーチャは自慢げに説明を始めた。

「グレア・レヴには街が一つしかないけど、住民は助け合いながら仲良く暮らしてる。街のリーダーの名前が『グレア・レヴ』だから、その名が付けられたんだ」

四人はゆるい坂を下り、街へと足を踏み入れた。だが、そこは本当に街と呼ぶべき所なのだろうか？

つい今しがた歩いて来た、野花の咲き誇る丘の優美な面影はどこにも見当たらず、黒と茶に染まった荒地がただ果てしなく広がっている。そして、その荒廃した地の上には、今にも崩れんばかりの、廃墟と化した石造りの家々が立ち並んでいる。屋根の無い家、壁が崩れ落ちて中が丸見えの家、右側だけが綺麗さっぱり切り取られたような家。極めつけは、ござが敷かれているだけの……これはもう、家と呼ぶに値しない家だ。

大型の台風が一日中ここに居座っていたのなら、街がこうなってしまった説明もつくだろう。問題なのは、そこに今も人々が住んでいるということだった。

「アーチャ、お前……」

アンジの声はかすかに震えていた。あの薄暗くて肌寒い海底の方がまだいくらかマシだと思える、そんな光景が目の前に広がっていた。

「スラム街だ」

呆然とするアンジとシャヌに向かって話しかけるアーチャの姿は、声だけで二人を引っ張っているように見えた。今、しっかりと前を向いて歩けているのは、じいさんを除いて、アーチャただ一人だった。

「ちょっと荒れてるけど、ここが俺を迎えてくれる唯一の街、グレア・レヴだ」

アーチャを先頭に、灰色の煙が立ち昇る街の中央に向かって四人は歩き続けた。

「街のみんなはどこにいるの？」

辺りに散らばる瓦礫の山を踏み越えながら、シャヌが尋ねた。

「大人たちの、特に男たちは、都心部へ出稼ぎに行って、夜まで帰ってこないよ。ゴミを集めて売ったり、道路の舗装工事や、建築の雑用をこなしたり……みんな肉体労働さ」

肉体労働なんて言葉を使うのはもうこれっきりにしたいものだと、アーチャは心から思った。

「遊び半分で都心部に出かけたりする子供たちもいるけど、中には、俺よりも年下の子が大人たちに混じって働いていたりもするんだ。老人の多くは、余生を精一杯楽しもうと自分たちなりに努力してるよ……」

さっそうと吹く風が砂を舞い上がらせ、四人の間をすり抜けていった。視界がかすみ、息苦しくなったその時、声がした。女の子の声だ。砂埃の向こうから、誰かがこちらへと駆けて来る。

「にい……にいだ！　にいが帰って来た！」

ぼやけた視界の中に、幼い女の子がいきなり現れた。腰まで伸びた滑らかな黒髪をなびかせ、まだまだあどけなさの残る顔いっぱいに、こぼれ落ちそうなほどの笑顔を広げている。白と黒のおしゃれなワンピースを装い、髪の毛は小豆色のカチューシャで束ねられている。

女の子はアーチャの前で急ブレーキをかけ（またも砂埃が舞い上がった）、大きな黒い瞳を輝かせたまま立ち止まった。

「よう、カエマ。悪かったな、長い間連絡もよこさないで。どうしたんだ？　その綺麗な服」

「この前の誕生日に、ママに買ってもらったの！」

カエマはつま先立ちになり、その場でクルッと回ってみせた。アーチャは「しまった！」と、自分の額をペチッと叩いた。

「ごめんごめん。色々あって、約束してた誕生日プレゼントのこと、すっかり忘れてたよ」

それを聞いて、カエマの表情はふてくされたようなしかめっ面に変わった。

「男が言い訳するなんて、カッコ悪いぞ」

カエマはそうたしなめてから、アーチャの後ろにいる三人をそれぞれ眺め回した。カエマは、魚のように口をパクパクさせるじいさんにすこぶる驚き、岩肌のいかつい顔つきで見つめ返すアンジに恐れおののき、半分シーツ姿のシャヌには戸惑いを隠せないでいた。

「この人たち、みんなにいのお友だち？」

アーチャを盾に半分ほど身を隠しながら、カエマはおずおずと聞いた。

「俺たちのことが知りたいなら、本でも読むんだな」

アンジはその大きな顔をぐいとカエマに近づけると、声を低くしてそう言った。カエマは顔を真赤にし、きびすを返して走り去ってしまった。

「アンジ！」

アーチャが怒鳴った。アンジは首を振って肩をすくめた。

「子供は苦手なんだ」

アーチャはそれ以上咎めなかった。子供が苦手だなんて、聞くまでもないじゃないか。

「今の子、アーチャの妹？」

脱兎のごとく走り去るカエマの後ろ姿を興味深げに眺めながら、シャヌはそう尋ねた。

「違うよ。二年くらい前にこの街へ移り住んで来たんだ。家族と一緒にね。カエマには弟がいるんだけど、盗賊の俺をいつもしたってくるんだよ」

七章　グレア・レヴ　3

四人はカエマの後を追うようにして、再び歩き始めた。やがて、跡形もなく崩れ落ちた家屋の近くに、小さな焚き火が五つほど燃えているのがちらと見えた。その炎を取り囲むように数十人のヒト族が寄り集まり（大人の女性と老人、子供ばかりだ）、みんながその疲れ切った瞳をアーチャたちに向けている。アーチャが帰って来たことで、数名の大人たちが何かを囁き合ったが、アーチャには聞き取ることができなかった。

どこからともなく、みすぼらしいぼろきれのような服を着た子供たちがアーチャたちの周囲に寄り集まってきた。物欲しそうに輝く瞳をちらつかせている……。

「これ、どうぞ」

シャヌが手渡したのは一輪の赤い花だった。丘に咲いていたひまわりに似た形の花で、綺麗だからと摘んでおいたものだ。子供たちは、シャヌが差し出した物が食べ物でないと分かると少し表情を曇らせたが、やがて笑顔に変わり、花を受け取って大人たちの元へと駆けて行った。その子供たちの足には、靴代わりの布が巻きつけられている。

カエマの姿があった。彼女はその服装のせいで、やたらと浮いた存在だった。アーチャたちも含め、みんなが土や泥にまみれたみすぼらしい格好なのに、カエマだけは大富豪の愛娘のような華やかさだ。

「みんなもう少しで帰ってくるはずよ。早朝に、森の畑へ野菜を収穫しに行ったの」

そばに転がっていた、形も大きさも手ごろな瓦礫を人数分せっせと並べながら、カエマはハキハキとそう言った。どうやら、アーチャたちに椅子を用意してくれたらしい。

「トナはどうした？」

瓦礫に腰かけるや否や、アーチャは少しそわそわしながら聞いた。

「みんなと一緒だよ。最近はずっとね」

「やっぱり！」

アーチャは頭を抱えた。

「あれほどダメだって、釘を刺してたのに」

「にいがいつまでも帰って来ないからよ」

カエマは一人その場に立ったまま、ぴしゃりと言い返した。新品の服を汚したくないようだった。

「トナって、お前の弟か？」

カエマが用意した瓦礫の上にもう三つ瓦礫を重ね置きながら、アンジはなるべく優しく聞こえるように尋ねた。カエマはわずかにたじろいだが、先ほどのことはもうあまり気にしていないようだった。

「うん。……私、カエマ・アグシール。ついこの前、五歳になったばかりなの。……ねえ、あなた、イクシム族でしょう？　ものすごい体つきね！」

「あ、ああ……とりあえず、その……おめでとう」

アンジは目をそらし、口ごもりながら呟いた。

「おめでとう」

シャヌが続けた。その口調は、まるで自分のことのように嬉しそうだった。

「ふーん」

カエマは品定めするような鋭い目つきでシャヌの顔をじっと覗き込んだ。

「何やってんだい？」

隣からアーチャが聞いた。カエマはアーチャに目線を移し、意味ありげな含み笑いを浮かべた。

「ふーん」

カエマの笑みは顔中に広がっていた。「ふーん」の声量が、より一層大きくなった。

「何だよ」

「グレア・レヴを長い間留守にしてたのは、そういうことだったのね」

途端に、アーチャは頬を赤らめた。

「ち、違うよ！　カエマ、それは違う！」

アンジがにべもなくバカみたいにゲラゲラ笑いだした。じいさんもそれに誘われるように、抜け落ちた歯の列を剥き出しにしてカラカラと笑った。

「おい、アーチャ。こんな子供に頭の一つも上がらねえみたいだな……じいさん、あんた何が面白いのか分かってないだろ」

ふんぞり返り、声にならない声で笑い続けるじいさんがそこにいた。

「私はシャヌ。深い深い地の闇から、アーチャが救ってくれたのよ」

シャヌの言っていることは、カエマにはちんぷんかんぷんだったらしい。カエマにとっては、白いシーツをマントのようにまとうシャヌの変な容姿も、謎めいたままだったに違いない。

「この街は、本当に懐かしいのう」

周囲を見渡しながら、じいさんは嬉々としてそう言った。

「ここに来たことがあるの？」

アーチャは驚いて聞いた。深呼吸を何度も繰り返すじいさんのその姿は、自らの中に眠るグレア・レヴの思い出と少しずつ調和していっているようだった。

「ずっと昔に感じたことがあるのじゃ……この風と光景を……しかし、何かが違うようじゃ」

「何が違うのですか？」

シャヌの質問に、じいさんはまず首を横に振って答えた。

「分からん……だが、それもまた神秘じゃ」

じいさんは必要以上に薄い唇を動かして言い終えた。

「何だか、変わった感じのおじいちゃんね」

カエマはアーチャに囁き、それから何事もなかったかのようにじいさんの観察を続けた。

七章　グレア・レヴ　4

その時、アーチャが急に勢い良く立ち上がったので、曖昧な思い出に浸っていたじいさんは仰向けにひっくり返り、有無を言わさず現実世界に引き戻された。

「どうしたの？」

ヒーヒー喘ぐじいさんを助け起こしながら、シャヌは半ば非難するような声色でアーチャに聞いた。

「あいつらだ……帰って来たんだ。前に話しただろう、俺には仲間がいるって。『ルースター・コールズ』が戻って来たんだ！」

「にい、ちょっとおおげさじゃない？　森から帰って来ただけなのに」

カエマが言い終わるか終わらないかする内に、シャヌたちの耳にも確かに聞こえてきた。遠くの方から聞こえる、ゴロゴロという低いエンジン音が。

小高い丘の上から現れたのは、暗緑色の迷彩柄で色付けされた屋根のないずんぐりとした自動車で、アーチャの目に間違いがなければ、あれはルースター・コールズが所有する『カメレオン』だ。手配車として警察から追われることの多いルースター・コールズの車は、常日頃から塗装を繰り返し、その外見を擬態動物よろしく変化させてきた。そうして、自動車はいつの頃からか、アーチャたちに『カメレオン』と呼ばれるようになっていた。

だが、グレア・レヴに住む者たちにこの変装は通用しない。この豪快なエンジン音を耳にするだけでルースター・コールズの自動車

だとバレてしまう理由は、とても単純だった。この街にたった一台しかない車が、この『カメレオン』という旧型車なのだ。

アーチャは、銀髪のロングヘアーを風になびかせて運転している優雅な男に気が付いた……アーチャの知らない男だった。いつもなら、あの席には首領であるヴァークスが座っているはずだ。後部座席には、三角帽子の先に白いふわふわをくくりつけた“小さな三人”が、ガタガタと車に揺さぶられるがまま座り込んでいた。三人は長い鼻が互いにくっつきそうになるくらい顔を見合わせて、何か話し込んでいる様子だった。アーチャが留守にしていたわずかの間に、『ルースター・コールズ』で何かがあったに違いない。

自動車はブルブル震えながらアーチャたちの前で静止した。後部の排気筒から黒煙の塊を一発吐き出すと、奇怪な音を奏でるラジオからの音楽も、騒音のようなエンジン音も、みな眠ったようにしんと静まった。

「アーチャ！」

後部座席に腰かける小人の一人が叫んだ。六十年ほど過剰に育ちすぎた幼児か、背が異様に低い老婆のような顔立ちだ。

「アーチャだ！」

もう二人が続けて同時に叫んだ。どちらもすさまじい金切り声で、一人目と瓜二つな顔をしている。どれも怒気を含む凄まじい形相だ。

「ああ、アーチャだ。留守にしてて悪かったよ」

三人はドアをひょいと乗り越え、アーチャの周囲に群がってギャーギャー騒ぎ始めた。小人たちは、背筋を伸ばしてもアーチャのひざほどしか身の丈がないのに、その姿はまるで小象のようだった。

一人一人がちぎれんばかりに両腕を振り回し、アーチャを殴ったり蹴ったりしている。どうやら、アーチャにご立腹らしい。

「どうして？　どうしてあたしたちをほったらかしにするのさ？」

「寂しくて死にそうだった！　おまけに、変な人まで……」

「でも、死んだのはあたしたちじゃないんだよ、アーチャ！　死んだのは……」

小人たちの猛攻から逃げ出しながらも、アーチャは大声で待ったをかけるのを忘れなかった。三人はアーチャの声に圧倒され、腕を振り上げたまま棒立ちになった。

「ヘイ！　あんまりカッカするなよ、少年！」

運転席にいた優雅な男が、車から降りてくるなりそう言った。長い銀髪を砂混じりの風になびかせるその男は、アーチャが見たこともないようなまばゆい格好をしている。世界中探したって、こんなファッションセンスを持った人物はいやしないだろう。スパンコールだらけのオレンジ色のボレロを着こなし、オレンジと青の縦ラインが刺繍されたけばけばしいズボンが、その長い足をより長く際立たせている。

華麗な銀髪には似合わない身なりだ。

こんなやぼったい服、一体どこの国で流行っているのだろうか？

アーチャは本気で考えそうになったが、踏みとどまった。

「そういえば、あんた誰だい？」

アーチャはいぶかしげに尋ね、そして男はその質問に答えるよう

に、まず、白い歯を輝かせた。

「これはこれは、申し遅れましたね。私の名はファージニアス。ある人物を追いかける者……とでも言いましょうか」

ファージニアスの輝く瞳は、アーチャからその後ろのシャヌへと移っていた。

「ようやく会えましたね！　うん、私の予想どおり、キュートな子だ」

「シャヌの何を知ってる？」

ファージニアスを見上げるアーチャの顔はより険しさを増したが、彼の方は余裕の笑顔のままだった。

「すべて……と言っても過言ではないですね。無論、それはここにいるみなさんにも言えることですけど」

アーチャたちの驚く表情を楽しむように、ファージニアスはクスッと短く笑って空を見上げた。その時、カエマがアーチャの服をぐいっと引っ張った。

「このおじさんね、三日くらい前からグレア・レヴをうろちょろしてたの……」

「安心したまえ、可憐なお嬢さん。私、女性にはいつも紳士なのです。だから決して、私のことを“おじさん”と呼んだことを咎めませんよ」

ファージニアスは独り言のように呟き、自分を見つめる全員の顔をしっかりと見渡した。そのすべてが、明らかに彼の存在を怪しんでいるというのに、ファージニアスはそのことに関してまるで無関心なようだった。まるで、自分が世界を動かす中心人物だとでも言いたげな、優越そうな笑顔だ。

「トナはどこなの？」

カエマは案じ顔で小人たちに聞いた。

「トランクの中よ。あそこがお気に入りみたいね」

「暗くて狭い所が好きだなんて、変わり者よ」

「つまみ食いしてなきゃいいけど」

小人たちが口々にまくしたてるのを無視して、カエマはトランクを開けに自動車の後ろに回った。狭苦しいトランクの中には、確かに、まだほんの幼い男の子が寝転がっており、食用の野菜たちにうずもれてぐっすりと眠りこけている。

「ったく、しょうがないな……」

カエマと一緒にトランクの中を覗きこんだアーチャが、やれやれといった声を発した。

「みんな、とりあえずアジトへ行こうか。これからのことはそこで決めるとしよう」

アーチャはそう提案し、「カエマとじいさんは車に乗ってくれ…

…ファージニアス、運転を頼む」と腑に落ちない様子で指示してから、アンジとシャヌを連れて再び歩き始めた。

七章　グレア・レヴ　5

「あの人……ファージニアスって人、私のことを知ってるようだった」

シーツをギュッとたぐり寄せながら、シャヌが不安げに呟いた。

アーチャはうなだれて首をかしげた。

「ある人物を追いかける者……か。きっと、俺たちが知らない何か重大なことを隠してるに違いない。それに少なくとも、ここらの人間じゃあないな。あれだけ気色の悪い服を着るのは、世界でもジェッキンゲンくらいなもんだ」

「どうでもいいけど、ファージニアスってジェッキンゲンに似てると思わないか？　顔立ち、服装、喋り方、仕草……」

アンジの声からは、確かにどうでもよさそうな雰囲気がにじみ出ていた。

「言われてみればそうかもしれないな……ジェッキンゲンの立場が立場なだけに、まだまだ油断は禁物だね。でもあいつ、素性の分からない怪しい奴だけど、悪党ではなさそうだよ」

「信用するのはまだ早いぜ？」

アンジが重々しい口調で忠告した。

「もしかしたら、国軍の一味かもしれない。俺たちの正体がバレたら、シャヌはともかく、俺たちに明日はない」

「大丈夫よ」

シャヌがきっぱり言い切ったので、アーチャもアンジもとっさに彼女の方を振り向いた。

「分かるの。大丈夫、彼なら信用できる」

「えらい自信だな。根拠でもあるのか？」

アンジがからかうように尋ねると、シャヌはこくりとうなずいた。

「うん。アーチャがそうだったから」

体中が熱くなるのを感じて、アーチャはとっさにシャヌから目をそばめた。そんなアーチャを小馬鹿にするように、アンジはニッタリと笑った。

「アーチャ、俺はお前の今後の活躍に期待してるぜ。色んな意味でな」

「へっ、そりゃどうも……そういえばシャヌは、こうして外を歩いたことってあんまりないんじゃないか？　ジェッキンゲンと一緒だった時も、屋敷の中に閉じ込められっぱなしだったって言ってたよね？」

シャヌは笑顔で、だがどこか悲しそうにうなずいた。

「私が知ってる世界は、すべて本の中のことだけだった。その世界は、どこまで行っても青空が続いていて、花が咲き乱れ、動物たち

は人間と共存し、そして、何よりも平和だった……アクアマリンと呼ばれる海底へ連れて行かれてから、現実はそうじゃないんだって、改めて気付かされたわ。……今世界がどうなっているのか、私は知らなくちゃいけない。だから、こうしてみんなで世界を歩けること、そうすることで、本には書かれていない本当に大切な物を見つけることが、今の私にとっては必要なことなの」

シャヌは青く澄んだ大空を見上げた。翼を羽ばたかせる一羽のオオワシが、空を大きく自由に舞っていた。

「一度だけでいいから、誰にも見つからないように、飛んでるところを見せてよ。見てみたいんだ、シャヌがその翼で飛ぶ姿を」

アーチャが楽しげに息を弾ませると、シャヌは少し戸惑ったようだった。そして、しわがピンと張るほど、シーツをしっかりと前にたぐり寄せた。

「飛べないの」

シャヌはすっかり落ち込んだ様子で言った。

「私、この翼で飛んだことがないの……一度も」

「一度も？」

アーチャはポカンとした。

「ジェッキンゲンの屋敷にいる時、こっそり飛ぼうとしてみたんだけど、どうしてもできなかった。飛び方が分からないの」

「飛べない翼ってわけか」

自動車のタイヤが残していったわだちの上をバランス良く歩きながら、アンジが横からしわがれ声を出した。

グレア・レヴの街はどこも殺風景だが、いつの間にか、あたりにはさっきまでいた町中とはまた別の、飾り気のない景色が広がっていた。北へと伸びる小石混じりの道はある建物の手前まで続いていて、両端には枯れ木が生えており（というより、ただ立っている）、その向こう側には荒野が広がっている。周囲数キロ先に、切り立った崖が鉄壁のようにそびえ立ってくれているおかげで、幸い、この廃れた街が立派な要塞のように見える。

「あれは？」

シャヌが見つめる先には何とも不思議な建物がそそり立っていた。凹凸の極端な建築物が地面から天に向かって伸びており、その根元には先ほどの自動車の姿も確認できる。この乾き切った長い一本道も、その珍奇な建物の手前で終わっていた。

「あれぞ！」

アーチャが二人の前に踊り出た。

「我らルースター・コールズのアジトだ。全部が拾い物で作られてる！」

アンジは一瞬足を止めたが、またすぐに歩き出した。

「拾い物？　つまり……ゴミか？」

アンジなりに分かりやすく言い換えたことが、アーチャには気に食わなかった。

「断じて、ゴミなんかではない。そうだな……あの入口を見よ」

アーチャは建物の下部にある、こげ茶色の立派な扉を指差した。アンジとシャヌがそれを見た。

「あの扉は、ティーバラ邸のものだ。主のファッダーが屋敷を取り壊して巨大カジノを建設するというので、その計画を聞きつけた俺たちは、作業員にまぎれてまんまと調達してきた。……そして、次は外壁」

アーチャは、今度は建物がすっぽり入るほど大きな円を指先で描き、物々しく説明を続けた。

「一階部分は元からそこにあった家の外壁を使わせてもらった。二階は鉄板を溶接して張り合わせ、中の熱を逃がすためにしゃれた窓もつけた。日当たりは最高だ。夜には星座の観察もできる。……続いて、三階に注目」

アンジとシャヌはちょっぴり顔を上げ、二階上部からこぶのように突き出している三階部分を眺めた。

「なんてったって、今の時代、鉄は貴重な代物だ。そこで、三階は木造になった。夏は涼しいし、冬は暖かい。だけど、あそこは首領のヴァークスの部屋一つきりしかないんだ。ちなみに、ヴァークスってのは俺たちのボスで、身寄りのない俺を拾ってくれた器のでかい男さ。ヴァークスか……そういえば、さっきいなかったな」

すぐに気を取り直して、アーチャは建物の一番てっぺんにある何かキラキラ光るものを指し示した。

「あれこそが、ルースター・コールズの象徴だ」

アンジとシャヌはキョロキョロと目を泳がせ、その象徴とやらを探した。陽射しが反射して見えにくいが、あれは確かに金色に輝くおんどりの像だ。

「あのニワトリがどうかしたか？　朝に鳴くのか？」

アンジの嫌味たっぷりな一言を、アーチャは鼻で笑ってあしらった。

「ルースター・コールズ……つまり、『おんどりの鳴き声』を象徴する純金の像だ。換金すれば、金貨千枚は確実だね」

“金貨千枚”という言葉に、アンジの目の色が変わった。

「売れ、今すぐ売ってしまえ！　今夜は脱走祝いだ！」

アーチャは原形をとどめないほど顔をしかめた。

「街のみんながそう言うよ。だけど、あれは絶対に売れない。ヴァークスでさえ一目置く、ルースター・コールズを見守ってくれている守護神だからね」

像を手に入れたいきさつを長々と説明しようと思ったが、そんな暇はなさそうだった。ゴミで作られた塔のようなアジトが、もう目と鼻の先まで迫っていたのだ。

「近くで見ると凄い迫力ね」

今にも崩れ落ちてきそうなアジトを見上げながら、シャヌは半ば感極まってそう言った。

「懐かしいなあ。ここに帰って来るのは三週間ぶりなんだ」

アーチャは車越しにアジトの周囲を見回した。大きくて頑丈そうな『笑いは危険』と書かれた木箱が数段になって積み重ねられているのも、根っこの先端まであらわにされた数本の大木が横様に倒れているのも、ひどく錆びついた調理用の鍋と空の酒瓶がごちゃまぜになって放り出されているのも、みんな三週間前と同じ、あの時のままだ。

「さあ、中に入ろうぜ……とは言っても、全員無事に入りきれるか心配だ」

アーチャは二人に向かって手招きし、他の“拾い物”と比べても到底釣り合わない豪華な扉を押し開けた。

七章　グレア・レヴ　6

扉の先はいきなり部屋だった。しかも、扉が完全に開ききらないほど狭い。その原因は、部屋中に溢れ返る“拾い物”のせいだ。天井高くまで積まれた本の山が三人を迎え出たかと思うと、すぐ足下には彩り鮮やかな毛糸編みの帽子が投げ捨てられおり、その先には足の長さがまちまちな食卓テーブルが置かれている。視界を遮るようにして天井からぶら下がっていたのは、古風な街並みが刺繍されたボロボロの絨毯で、その下には首から上のない悪趣味な人形が山のように折り重なっている。

剣と盾を勇ましく構える古びた甲冑が、部屋の隅で分厚いほこりをかぶったまま孤独に立ち続け、時折り闇をえぐってこちらを見つめてくる。

「なかなかのもんだろ……頭に気を付けて！」

アーチャは叫びながら、アンジの頭上でユラユラとぶら下がる傘付きの電球を指差した。

「足の踏み場もありゃしねえ！」

靴で踏まれた跡がくっきりと残る黒猫の油絵をそろそろとまたぎながら、アンジが呆れ顔で怒鳴った。アーチャやシャヌはともかく、アンジは少なくともヒト族の二倍は横幅が広い。そのせいで、大木のような太い腕に、投げ出された釣り糸の端っこがからまっても無理はなかった。

「人様のアジトで文句ばっか言ってると、飯抜きにすっからね！」

小人のキーキー声が部屋の奥の方から聞こえてきた。白い湯気が立ち昇っている。

「そこが台所。小人たちしか入れないから、注意して。そっちは便所で、こっちが洗面所、あっちは居間」

アーチャは部屋のあちこちをあごで指しながら、早口で説明した。教えられる側のアンジやシャヌにとっては、入口が埋もれて見えなくなった便所も洗面所も、大差ないように思えた。

「二階へ行こうか……料理に失敗すると、あの三人、ひどい癇癪を起こすんだ」

小声でそう囁いてから、アーチャは床に点在するわずかな足の踏み場を迅速に見つけ出し、階段まで軽快に歩を進めた。

「アーチャ、あんたには大事な話があるよ」

小人の一人が突然アーチャを呼び止めた。アーチャは二人に目配せし、先に行っててくれと手で合図した。

「六段目に気を付けて。底が抜けてるから」

そして、アンジとシャヌの階段を上っていく足音が聞こえ始めた時、キャベツの葉をどろっとした茶色の液体に漬けていた小人が、静かに切り出した。

「今までどこをほっつき歩いてたんだい？」

迷惑極まりない、といった口ぶりだ。

「ドレイとして働かされてたんだ。ガムダンの国でレイオット・ペムズの屋敷の偵察をしていた時、急に意識を失って、気付いたら海底洞窟にいた。記憶が途切れる直前までは宿でヴァークスと一緒だった……なあ、ヴァークスはどうしたんだ？　さっきから見かけないけど」

「ヴァークスは死んだよ」

椅子の上で爪先立ちになり、湯気の立ち昇る大鍋の中身をかき混ぜていた小人が、沈みきった声で言った。

「何だって？」

アーチャは聞こえなかったフリをした。

「今、何て？」

「死んだのさ。アーチャが行方不明になったその日に」

今度は、足下の食器棚から人数分の皿を取り出していた小人が答えた。アーチャは枯れ果てた観葉植物が植えられている鉢に足を取られ、よろめいた。

「死んだって……どういうことだ？　俺がいなくなった日って……？」

アーチャの声は芯まで震えていた。

「ありゃ他殺だわね。むごい殺され方だった……」

小人たちはかぶっていた帽子を手に持ち、一斉に鼻をかんだ。

「ひどいもんだった」

「犯人は捕まったのか？」

アーチャは少しでも大きな声を出して、平静さを失わないようにした。

「まだだよ。あたしたちが現場の宿屋に着いた時には、もうヴァークスの亡骸しかなかった……もぬけの殻さね」

ふと気付くと、キャベツの葉を漬けていた小人は、今度は手際良くピーラーを使いこなし、自分の手よりも大きなじゃがいもの皮をシャッシャッと剥いていた。三個目のじゃがいもを手に取った時、小人は顔を上げてアーチャを見た。

「まったく、ガムダンの警察ってのは、どうしてああも頼りないんだろうね。警棒の一つだってまともに扱えりゃしない。……犯人の動機は未だ不明。ヴァークスの所持していた金品が盗られた形跡もない。凶器は……不思議なことにね、凶器も分からずじまいさ」

「いくら頼りないって言っても、そこまで無能じゃないだろう？」

複雑な心境のまま、アーチャは意見を述べた。大きな深皿にフォークを投げ入れていた小人が、立ち上がり様にアーチャをねめつけた。

「彼らが無能だとすれば、きっとあたしたちも同類だろうね。ヴァ

ークスの亡骸を見た警察の答えは『撲殺』だった。あれだけむごい死に方をしたのに、凶器は人間の拳ときたもんだ……もう少し食い下がっていたかったんだけどね、あたしたちが窃盗団だと気付かれたら、それこそ死に値する処刑がお待ちかねさ」

小人たちが寸分の狂いもなく、一斉にため息を吐き散らすその姿は、見ていて気分のいいものではなかった。

「ルースター・コールズの首領は帰らぬ人となり、その右腕だったアーチャは行方不明。あたしたちがやっとこグレア・レヴに帰って来れたと思えば、ファージニアスとかいうナルシストがうろついてる。……アーチャ、あんた本当に何も知らなかったのかい？　ヴァークスのこと」

アーチャはギクリとした。いつの間にか、小人たちの冷たい視線がアーチャに注がれていた。

「まさか、俺がヴァークスを殺したとでも？　冗談やめてくれ！　この哀れな格好をしっかりと見てくれよ！　俺たちは本当にドレイとして働かされていたんだ！　どれだけ苦労してあの地下から抜け出して来たことか……」

アーチャの弁解をほとんど無視するかのように、小人たちは各々の作業に戻った。小人……つまり『ピゲ族』は、疑い深く、それでいて執念深い種族だ。ここで白黒はっきりつけておかないと、後で涙することになる。

「あのさ、俺の話をちゃんと聞……」

「“トラッシュ・ラッシュ・トワゴ”の件だけどね、あたしたちは

まだ諦めたわけじゃないんだよ」

なぜだか、唐突に話が変わった。アーチャはほっとしたが、やはりこのままでは後味が悪い。

「いきなり何を言い出すかと思えば……」

「ヴァークスがいなくなろうとも、あたしたちは諦めない。絶対に」

アーチャは小さく嘆息を漏らすと共に、首を横に振った。その執念深さゆえ、諦めが悪いのもピゲ族の特徴だ。

「あと二日で何ができるんだよ……何か目ぼしい品でもあるってのかい？」

「二日じゃなくて一日。つまり明日」

三人の内の誰かが口早に訂正した。アーチャはますます嫌気がさした。

「それじゃあ、あとたった一日で何をしようっての？　この世に眠る秘宝の在処は、みんなヴァークスの頭の中なんだ。今年もレッドワインの優勝さ……」

アーチャはガックリと肩を落とし、今度はみんなに聞こえるくらい大きなため息を吐いた。

「またグレアの高笑いを聞くことになると思うと、食欲がなくなるぜ」

「あの女は嫌な奴だけどね、腕っ節は本物だよ。常にあたしたちより一歩先を走ってんのさ」

七章　グレア・レヴ　7

野菜たちがぐつぐつと煮える良い香りが嗅覚を刺激し始めたところで、アーチャは一旦、二階へ上がることにした。ヴァークスのこともあるが、今はとにかく、少しでも体を休ませたい。過度の重労働で体も精神もボロボロだ。

「あ……聞いてたのか」

アンジとシャヌが、底抜けした六段目を挟んで階段に腰を落ち着けていた。どうやら、小人たちとの会話を聞いていたらしい。

「ま、そんなつもりじゃなかったんだけどな」

窮屈そうに腕組しながら、アンジがたどたどしく話しかけた。

「とりあえず、アーチャ……ヴァークスって奴のことでいつまでもくよくよしてんじゃねえぞ。これだけは言っておく」

「ご忠告ありがとさん……どうした、シャヌ？　顔色が悪いぜ」

シャヌのいちじるしい容態の変化に、アンジはずっと気付いていなかったらしい。青白い顔に薄紫色の唇が重なり、全身が小刻みに震えている。

「ごめんなさい……ただ、ちょっと具合が悪くて……」

震える指先で口元を押さえるその姿は、声を出すのでさえかなり辛そうだった。アーチャはすぐさまシャヌの腕を取り、ゆっくりと

立ち上がらせた。

「色々あったから、きっと疲れたんだ……さ、上れるかい？　アンジ、手を貸してくれ」

二人がかりでシャヌを二階まで運び終えると、ファージニアスの陽気な声がすぐに三人を歓迎してくれた。

「ヘイ、君たち、やっと来てくれましたね！　私だけで子ども二人と老人一人を世話するのは、とても容易なことではありませんよ。さあ、三人とも、ここへ座って。一緒に“一石二鳥ゲーム”でもやりましょう！」

この瞬間、アーチャは「しまった」と思った。この四人のことをすっかり忘れていたのだ。たった一つしかない部屋の中央をまるまる占領し、使い古しの『一石二鳥ゲーム』に使用する灰色の石ころで辺りは埋め尽くされている。

「だから言っただろう。聞くつもりはなかったって」

アーチャの耳元でアンジがぼそっと呟いた。

「アーチャだ！　アーチャが帰って来たんだ！　アグシール山賊団の復活だ！」

叫びながらアーチャに駆け寄ってきたのはカエマの弟のトナだった。アーチャからくっついて離れないトナは、今やアーチャの一番弟子ということになっていた。世界中を駆け巡る窃盗団のアーチャを、心の底から尊敬しているらしい。

「やっと帰ってこれたぜ、トナ。だけど山賊ごっこはしばらくお預けだ。今はこのお姉ちゃんを助けなきゃいけないからな」

アーチャは窓のそばに置いてある肘掛け椅子までシャヌを連れて行き、彼女をそっと座らせた。それから、出窓を開け放ち、空っぽの花瓶から濁った水を外へ放った。

「気分はどう？　……とは言っても、こんな所じゃ一向に良くはならないか」

部屋を見回しながら、アーチャは呆れ顔で首を振った。

「そんなことないよ。大分良くなったもの」

本人の言うとおり、少なくとも全身の震えは止まったようだった。窓からのそよ風が、シャヌの前髪をそっと揺らしていた。

「とってもいい眺め。私が閉じ込められていた部屋からは、いつも同じ街並みしか見えなかった」

夏の暖かな風に包み込まれるシャヌの横顔に、ほんのちょっぴり元気が戻ったようだった。

「下の階に比べれば、ここはまさに楽園だな」

『一石二鳥ゲーム』に興味津々のアンジは、ファージニアスたちの輪の中にもうすっかり溶け込んでいた。

「見てみろ。ほら。腕を自由自在に動かすことができる！」

アンジは長い両腕を前後左右に振り回し、その一言一言に皮肉を叩き込んだ。

「ここは寝室として使ってるからね。下よりも広いし、窓は開けられるし、日当たりもいい」

それからしばらくの間、昼下がりの穏やかな時間をみんな気ままに過ごした。アーチャはルースター・コールズが盗み出した数々のお宝の話をシャヌに語り聞かせていたし、『一石二鳥ゲーム』に興じていたアンジたちは、カエマが負け知らずなせいで、大人げなく躍起になっているようだった。

「はい！　また私の勝ち！」

いつもどおりの勝敗にファージニアスは高声で笑い飛ばしたが、アンジは納得がいかない様子だった。

「だってアンジったら、ルールが理解できてないんだもん」

カエマがせせら笑うと、アンジは胸の内に込められた怒りの矛先をどこに向けようかと、鋭く目を走らせた。

「アーチャ。さっき小人たちと話してたトラッシュ・ラッシュ・トワゴって何なんだ？」

アンジの乱暴な問いかけに、アーチャは「ああ、そのこと」と答えた。

「トラッシュ・ラッシュ・トワゴっていうのは言わば、窃盗団の、窃盗団による、窃盗団のための“隠された大会”さ」

アーチャは部屋にいるすべての者に聞こえるようにと、大きな声でそう切り出した。

「悪漢たちのはびこる危険な町トワゴが、ここグレア・レヴの近くにあるんだけど、そこで年に一度夏に開催されるのがトラッシュ・ラッシュ・トワゴっていう秘密の大会なんだ。世界中から名の知れた盗賊、山賊、海賊、空賊たちが集って、その腕を競うのさ。ただでさえ危険な街なのに、筋金入りの悪党どもが寄り集まるせいで、トワゴは完全な無法地帯と化すわけだ」

「それは恐ろしい！　ですが、絶壁に咲く花ほど華麗と呼べるものは、この世に二つとして存在しないでしょう！」

ファージニアスが興奮気味に割って入ったので、アーチャはしばし面食らったが、やがて気を取り直し、説明を続けた。

「ルールは単純。決められた期間内に、より珍しく、より高価な物品を盗んで来た窃盗団が優勝だ。どんなにずるい手を使っても、どんなに冷酷な手段に出ても、誰からもお咎めなしというわけさ」

「ルールってのは苦手だね」

アンジが吐き捨てるように呟いたが、アーチャの耳には入らなかった。

「優勝賞品は、本人たちが持ち帰った盗品と、その道を本業とする者であるなら誰もがうらやむトワゴの称号だ」

「ルースター・コールズの優勝経験はあるの？」

そう尋ねるシャヌの瞳は、アーチャへの大きな期待でキラキラと輝いていた。だが、アーチャはその期待に応えることはできなかった。

「残念ながら、まだ一度も。俺がルースター・コールズの一員として数えられたのはつい昨年の話なんだけどね……ちなみに、前回の優勝チームはレッドワイン。その首領の名をグレア・レヴといい、名も無き街の優勝者として、窃盗団の頂点に立つ女だ。ここら一帯がグレア・レヴと呼ばれるのも、彼女がこの街の出身者だからなんだ」

「それじゃあ、今年こそアーチャたちが優勝して、この街をルースター・コールズっていう名前にしてよ！」

トナに発破をかけられても、アーチャは素直に「うん」と言えなかった。

「そうしたいのは山々なんだけど、今年は色々とあってね……」

首領であるヴァークスの死を告知すべきか、アーチャは迷った。『死』なんて言葉は、幼い子供にはまだとうてい理解できないものだ。だが、首領のいなくなったルースター・コールズが自然消滅するのも、時間の問題だった。

「例え……」

結論に至らないまま、アーチャは喋り始めた。

「例え俺たちが優勝できたとしても、この街はグレア・レヴのまま

さ。何があろうと、これから先もずっと」

誰に言うでもなく、アーチャは虚ろな声で言い終えた。窓の向こう側に際限なく広がる青空をぼんやりと眺めながら。

七章　グレア・レヴ　8

日も暮れ、肌寒い静かな夜がやって来た。アーチャはようやく汚らしいドレイ服から解放され、身動きしやすい服装に着替えた。どちらもほこりまみれのくたびれた衣服だが、あんなドレイ服で都会の街中を歩くくらいなら、裸の方がまだマシだ。

アンジは……というより、イクシム族は、普段服を着て生活することはない。

「周りはみんな服を着てる。せめて、ズボンくらいは穿いたらどうだ？」

アーチャの提案に、アンジは渋々と納得した。というのも、長いドレイ生活の間に、服という物はアンジにとって心地良い貴重品となっていた。だが、アンジが余裕をもって着れるだけの服などありはしない。

「上着は遠慮しておく……下は……こいつをこのままひっくり返せばいい」

結局、アンジはドレイ服の上だけを脱ぎ捨て、ズボンの生地を裏表ひっくり返して使用するという荒業に出た。これなら、外を出歩いても怪しまれることはないだろう。

そうこうしている内に、みんなが待ちに待った夕飯の時間がやって来た。今や、アジトの中いっぱいに御馳走の香りが充満していた。

「ああ、もう！　こう狭くっちゃ息もできやしない！」

大きな丸テーブルの上から雑用品を払い除け、中綿の飛び出した

かび臭いクッションを椅子の上に敷きながら、小人がキーキー声で叫んだ。

「カエマ、今日はここで食っていくのか？」

野菜スープが煮立った大鍋をテーブルの真ん中まで運びながら、アーチャがカエマに聞いた。

「お邪魔してごめんね、にい。お母さん、帰りは明日になるって言ってたの。最近は特に忙しいんだって」

「どんなお仕事をしてるの？」

もうすっかり容態の良くなったシャヌがそう話しかけた。カエマはにっこりした。

「水商売。お客さんのグラスにお酒を酌んで、人生の相談にのってあげるんだって。ねえ、シャヌは何歳？　どこから来たの？　家族は？　好きな花は？　本は読む？」

目の前に並べられていく豪勢な食事には目もくれず、カエマは夢中になってシャヌに質問攻めした。シャヌはいささか困惑気味に、だがカエマに負けないくらいにっこりして質問に答えていった。食事が始まる頃になると、シャヌとカエマの間にはもうほとんど隔たりなどなくなっていた。

やがて、すべての料理と人数分の食器がテーブルの上に並べられた。ここしばらく食欲の失せるような食事ばかりだったアーチャとアンジは、この瞬間をどれだけ待ちわびたことか。イノノシの丸焼きを見つめる瞳が視覚を刺激し、部屋を満たすこうばしい香りが嗅覚をくすぐった。フォークを握りしめるアーチャの手はわずかに震

えている。

それからのことは、アーチャ自身、あまりよく覚えていなかった。ただ、唯一はっきりと覚えていることといえば、アーチャの胃の中は幸せな気持ちでいっぱいになり、こんなに美味しい料理を食べたのは生まれて初めてだと、夢見心地で感想を漏らしたことだけだ。

ふと我に返ると、アーチャの目の前に広がっていたのはバランス良く積み重ねられた空っぽの皿だった。

「大人げなーい」

いかにも極楽そうなアーチャの表情を覗き込みながら、カエマがあけすけに非難した。

「にいとアンジ、みんなの分まで食べちゃうんだもん」

アーチャはそっぽを向いた。

「なあアンジ……何か聞こえたか？」

「さあ？　耳元でハエでも飛んだかな」

アーチャとアンジのだらけっぷりに、シャヌは思わずクスッと笑ったが、カエマは苛立たしげに鼻をフンと鳴らして小人たちを手伝った。

「あ、私も手伝わなくっちゃ」

シャヌが立ち上がった。だが、背中の翼を覆い隠していたシーツはその運動に逆らうように……まだそこに居座っていたいとでも言うように……シャヌの肩からスルリと滑り落ちた。じいさんの座っ

ている椅子の脚が、床まで垂れ下がっていたシーツの端を踏んづけていたのだ。アーチャは滑り落ちるシーツを掴み取ろうととっさに腕を伸ばしたが、時すでに遅し、だ。

アジトに沈黙が訪れ、空気が張り詰めた。アーチャは前かがみ姿勢のまま硬直し、アンジはシーツと一緒に椅子からずり落ちそうになった。どこかで食器の割れるけたたましい音が鳴り響いた時、静寂は破られた。

「マイラの翼！」

三人の小人が一斉に声を張り上げた。絶叫前の深呼吸さえも同時だった。アーチャはうなだれたまま机に突っ伏した。次に聞こえてきたのはカエマの甲高い声だった。

「きっと作り物よ！　ね、シャヌ？　だって、マイラ族は滅びたんですもの。きっと……いいえ絶対に、にいが私たちを驚かそうと計画したのよ。ね、シャヌ？」

カエマは、自分では十分冷静を保てているつもりだったが、誰が見ても明らかに動揺していた。目は激しくシャヌの顔と翼を行ったり来たりしているし、なぜかドレスの裾を固く握りしめている。

「お姉ちゃん、すっごくきれい」

見惚れるトナのすぐ隣で、じいさんは、まるで女神様でも崇めるかのような恍惚そうな笑顔でシャヌを見つめていた。このままでは、手を合わせて拝みかねない。

「落ち着きたまえ、諸君！」

壁に寄りかかり、手に持っていたグラスを紳士的に傾けていたファージニアスが、誰よりも平静さを際立たせたその声でみんなを再び沈黙させた。彼があんな埃まみれの部屋の隅っこで何をしていたのか、アーチャは知っていた。グラスに注いだぶどうジュースをワインに見立てて一興していたのだ。

「この煌びやかさと、壮麗さを兼ね備えた翼を目の当たりにすれば、歴史上の事実に疑いの目を向けても仕方がないでしょう」

ファージニアスはグラスを小タンスの上に置き、床に転がっていたゴリラの不細工な人形を踏み越えると、シャヌを目の前にして立ち止まった。

「最悪な時代の流れに乗って生まれ落ちた天使……。これから、どんなに苦しい困難に遭っても立ち向かわなければなりません。……本当に、悲劇的なことです」

「あなたもしかして、私の過去を知ってるの？　私自身が知らない過去を」

シャヌが厳しく問いかけると、ファージニアスはあからさまに目線を逸らし、額に手をあてがって首を振った。

「いけない、いけない。私としたことが……危うく過去の二の舞を演じるところでした。それではみなさん、私はもう寝ます」

グラスの中身を急いで空にしたファージニアスは、逃げるようにして階段を上り始めた。だが、すぐにまた顔だけひょいと現れた。

「一応、念のため、後から来る方々に忠告しておきます。間違って

も、私の寝顔を踏みつけるようなことをしないで下さいね！」

ファージニアスの姿が完全に見えなくなると、小人たちが息を吹き返したようにまた一斉に騒ぎ始めた。その矛先はアーチャだった。

「どうして黙ってたのさ？」

「何が？」

アーチャの声には愛想のかけらもない。

「彼女がマイラ族だって……いや、そんなことはありえないんだけどね……一言教えてくれても良かったんじゃないかい？　……いや、そんなことはありえないんだけどね……」

小人たちはシャヌの周囲に群がり、高い鼻がくっつきそうになるほど間近で翼を観察した。そして、当惑しきったシャヌをわざと無視するように、大きな声で聞こえよがしに討論を始めた。一人はこの翼がまがい物であることを証明させる言葉を並べ、一人はマイラ族が滅びた一端を語って聞かせ、最後の一人はもっぱら相づち役に徹した。

「おい、やめろ！」

アーチャの堪忍袋の緒が音を立てて切れた。

「シャヌは特別でも何でもないんだ！　今すぐシャヌから離れろ！」

怒鳴り終えた時、アーチャは、どうしてこんなに熱くムキになっているのか、自分でもよく分からなかった。小人たちの無礼な態度

に腹が立っているのは確かだが……。

「そうかい」

小人の一人が呟くような小声で言った。

「あたしたちは信用できないってわけかい？　え？」

「ああ、ちっとも」

アーチャの冷たい口調は遠慮なしだ。

「ガムダンの国でもそうさ。お前たち三人がわがまま言って別行動をしてなきゃ、ヴァークスはもしかしたら……」

胸の内にしまっておいた不満を洗いざらいぶちまけてやろうと思ったが、アーチャはそれ以上言葉を続けなかった。カエマやトナのいる前で、ヴァークスの死を悟られるような言動は慎まなければと、アーチャなりにとっさに考慮したのだ。

三度の沈黙と同時に、かつてないほどの険悪なムードが流れ始めた。小人たちとは度々もめごとを起こしてきたアーチャだが、ここまで険悪なのは初めてだった。

アーチャと小人たちとの暗黙の睨み合いが一分も続いた後、その間に立っていたシャヌが気まずそうに口を開き、このどんよりと重々しい空気を少しだけ緩和してくれた。

「あの……そろそろ寝ましょう……疲れが溜まってて、それでみんなイライラしてるのよ」

七章　グレア・レヴ　9

アーチャとアンジは一階で眠ることになった。椅子を並べてベッドを作り、そこらに落ちていた衣服を布団代わりに使用した。寝心地が悪いせいもあってか（地下の固い地面よりはまだいくらかマシだが）、アーチャはなかなか眠れなかった。アンジと一言も口を利かない夜は、彼と親友になってからこれが初めてのことだった。そのことを考えると、アーチャはますます自分が惨めに思えてならなかった。

『少し気分を晴らしたい』

アーチャは椅子の寝台からそっと起き上がり、散らかり放題の床を踏み越え、扉を開けて静かに外へ出た。ひやりと冷たい夜の空気が全身を包み込み、背中をそっと押されるような弱い夜風が吹いていた。

周囲に視界を遮るものはなく、果てしなく続く大地がアジトの中とは両極端であるせいか、ここはさっきまでいた『拾い物の空間』よりも閑静のような気がした。夜空に散りばめられた星たちがまばゆいほどに輝くその姿は、それぞれが「私を見てくれ」と、ファージニアスのような自己主張をしているようだった。

アーチャは車に乗り込み、シートを後ろに倒してあっという間に二つ目のベッドを作ってしまった。こうすれば、ミルクの流れた跡とも呼ばれる天の川を一望できる。この場合、車に屋根がないのはアーチャにとって好都合だった。それに何よりも、疲れ切った心と体を癒す上では、この満天の星空の右に出るものはない。ドレイとして働かされるずっと前から、ここはアーチャのお気に入りの場所だったのだ。疲れた時や、何か嫌なことがあった日には、こうして夜空を見上げ、耳を澄ます。そうすると……。

「隣、いい？」

アーチャは声のした方とは反対の側へ飛び上がった。毛布にくるまったシャヌが、曖昧に微笑んでアーチャを見つめていた。

「シャヌ……どうしてここに？」

アーチャの声は明らかに調子外れだった。

「窓からアーチャの姿が見えたの。……それに、私も眠れなかったから」

アーチャはためらうことなくシャヌを招き入れ、隣のシートを倒して同じくベッドをこしらえた。

「窮屈な所ですが、ささ、どうぞおくつろぎ下さい」

アーチャはシャヌを丁重に招き入れ、手を取って彼女が車に乗り込むのを手伝った。

「わあ……すごく綺麗……」

夜空を見上げたシャヌは、無数の宝石で彩られた美しい夜空に酔いしれていた。そのうっとりと夢見るような表情は、まばたきをするほんの一瞬の時間でさえ損をしたくないと言わんばかりだった。

「こんな星空は初めて？」

少しためらいがちに、アーチャはそっと尋ねた。

「え？　あ、うん。都会ではこんなに綺麗な星空は見られなかったから……」

アーチャはシャヌの横顔をちらと見た。星明りに照らされ、ほの明るいあさぎ色に染まっている。緊張のせいか、また心臓が高鳴り始めた。アーチャは気を紛らわすために、星空へと目線を戻した。

『どうして緊張する必要がある？』

そんな疑問を振り払おうと、アーチャは天に輝く星の数を数え始めた。嫌なことや不安なことを忘れるには、このやり方が一番手っ取り早いのだ。

「アーチャ……」

「ん？」

二百五十個目まで数え終わった時、シャヌが不意に話しかけてきた。

「私がいると……迷惑？」

アーチャは思わず半身を起こし、シャヌを見つめた。さっき小人たちと一悶着起こしたことで、シャヌがここまで思い詰めていたなんて気が付かなかった。

「そんなことないさ！　絶対に！　もしかして、さっきのことを気にしてるの？」

シャヌはアーチャを直視しようとはしなかった。そのことが、更にアーチャを不安がらせた。

「あいつらが言ってたことなんか気にしちゃ駄目だ。ピゲ族って、脇目も振らない無礼な奴ばかりなのさ」

アーチャはどうにかしてシャヌを元気付かせようとがんばったが、虚しく空回りするだけだった。それからしばらくして、ようやくシャヌが口を利いた。

「ヴァークスさんが死んだって聞いたあの時、私、とても怖くなった」

シャヌが何のことを言っているのか、アーチャにはすぐピンと来た。小人たちとの会話が終わった直後、具合悪そうなシャヌを二階まで連れて行ったのは、ほんの数時間前のことだった。

「何がそんなに怖かったの？」

アーチャが尋ねると、シャヌは天の川を見上げたまま首を横に振った。

「私にもよく分からない。よく分からないけど、“死”っていう言葉が、私に何かを訴えかけてきたのは確かなの……体が震えて、頭の中は真っ白だった」

毛布を握るシャヌの両手に、ぐっと強い力が加わった。アーチャは、そんなシャヌの思いをしっかりと受け止め、彼女の横顔をまっすぐに見つめた。

「また何かあったら、いつでも、どこでも、どんなことでも相談してくれよ。俺、シャヌを守るって、心に誓ったんだ」

「うん。いつか、ね」

星明りでキラキラと照り返るシャヌの瞳が、やっとアーチャを見つめ返してくれた。アーチャが、その瞳に満面の笑顔で応えるかたわら、心の片隅でほっと安堵していたのは確かだった。

「さっきからずっと気になってたことがあるんだけどさ」

アーチャはウキウキしながらそう切り出した。

「シャヌって、魔法を使えるの？　言い伝えによると、マイラ族はその強大な魔力で地上のあらゆる生物を震撼させたって……」

ここまで言い終えて、アーチャは「またバカなことをした」と思い、とっさに口をつぐんだ……が、もう遅かった。

「いいの、事実だから」

シャヌの目線はまた星空に戻り、その口調は素っ気なかった。アーチャは罪悪感で胸が締めつけられるのを感じた。

「ごめん、シャヌ。本当にごめん！」

頭まで下げて平謝りするアーチャに、シャヌはちょっぴり驚いたようだった。

「アーチャ、どうしたの？　私、全然気にしてないよ」

アーチャはゆっくりと顔を上げ、笑顔のシャヌを見た。本当に気にしていないようだった。

「でもね……私、魔法は使わないようにしてるの。ジェッキンゲンの屋敷の中では魔法が禁止されていたし、それに……とっても怖いから」

語りかけてくるようなシャヌの瞳が、アーチャを見つめたまま離さなかった。

「ねえ、アーチャ……自分のことが怖くなる時って、ある？」

急に何を言い出すんだろうと、アーチャはいぶかしげにシャヌを見た。

「ある？」

消え入るような声で、シャヌは再び聞いた。アーチャはすぐに答えを導き出した。

「ああ……何度もあるよ」

アーチャは本当のことを言った。

「例えば、どんな時に？」

「そうだな……自分という存在そのものが、何なのか分からなくなった時。そして、
自分の無力さを痛感して、目の前が真っ暗になった時……」

アーチャはふと、子供の頃を思い出した。両親と共に生きていた、まだあどけないあの頃を……。だが、突如、アーチャの視界が真紅の炎に包まれた。

目に映るすべてのものが音を立てて激しく燃え、無数の火の粉が踊るように宙へ舞い上がっている。家という家から火の手が上がり、地を覆い尽くす炎が盛んに燃え上がった。驚くことに、見渡す限りの空も、そこに漂う細い筋のような雲も、すべて真紅に染まっていた。人々の悲鳴が聞こえ、逃げ惑う足音がいくつも重なる。熱風が、物の焼ける匂いが、断末魔の叫び声が、炎と化してアーチャを包み込む……。

その灼熱の炎に飲み込まれる町の真ん中で、アーチャ・ルーイェンが、声を上げて泣いていた。

「アーチャ？」

シャヌの呼びかける声で、アーチャは我に返ることができた。肌寒い野外だというのに、額にはしっとりと汗をかき、呼吸も荒かった。

「アーチャ、大丈夫？」

「ああ、もう大丈夫だ」

幾度か深呼吸を繰り返し、平静さをやや取り戻してから、アーチャはしゃがれ声で答えた。

「十年前のちょっとした思い出が……たまに思い出すと、パニックになっちまうんだ」

シャヌを怖がらせないようにと白状したつもりだったが、どうやら逆効果だったらしい。何だかんだ言ってごまかしても、視界は一向にぼやけたままだし、指先の感覚はまだ戻っていない。シャヌはそのことに、薄々勘付いているようだった。

「十年前に、一体何があったの？」

その質問に、アーチャは首を横に振って応じた。

「ごめん。今は教えられない……あ、つまりその……」

アーチャは、こちらに向けられたシャヌの熱い眼差しを避けようとして、言葉を喉に詰まらせてしまった。

「今日はもう遅いし、いつまでも外にいたら風邪を引いちまう。せっかく手に入れた自由を棒に振りたくはないだろう？」

アーチャを気遣うシャヌの積極的な態度を棒に振ることが望ましい状況であるなら、アーチャの言い分にも納得がいく。だが、アーチャが首を縦に振らなかった本当の理由は、それだけではなかった。シャヌに余計な心配をかけさせたくはなかったし、何より、十年前の一件を誰にも話したくないというのが一番の理由だった。両親を亡くした辛酸な過去を、大っぴらにしたくはなかったのだ。過去の惨劇に同情されるくらいなら、すべてを胸の内だけで抱え込んでいた方が気楽でいい……つまり、アーチャはそういう人間なのだ。

自分のことをひた隠しにし、シャヌのことばかり詮索するのはうしろめたい気もするが、今のアーチャにはどうすることもできなかった。

ただ今は、ほんの先にある未来へ向かって、がむしゃらに突き進

むしかない。これからのことはこれから考え、直面した危機にはそれぞれが結束して立ち向かうしかない。それが、アーチャたちに課せられた……国軍から追われるアーチャたちに課せられた使命なのだ。

「やれるだけ、やってやるさ」

アーチャはギシギシときしむ椅子のベッドの上で小さく寝返りをうちながら、そう呟いた。すっかり冷え切った体に布団代わりの衣服をしっかりとまとわせて。

八章　閉幕　1

曙光がアジトの中を照らし出し、アーチャを包み込んだ。目もくらむような陽射しから逃れるように寝返りすると、アーチャは椅子の上から無様に転げ落ち、その痛みと驚きで目を覚ました。その苦痛に満ちたうめき声で起こされたのはアンジだった。

「うわ……！　あっ……はあ……」

起きたばかりだというのに、アンジの顔は三日も不眠不休していたかのように疲れ切って見えた。

「なあアンジ、もう一眠りした方がいいんじゃないか？」

アーチャはアンジのことを本気で心配してそう促した。

「いや……ただ……の夢だ」

アンジの口はろれつが回らない。

「ドレイとして……重い岩を運ばされてた……そうしたら、岩が俺の方へ転がってきて……」

それ以上は続けられないとばかりに、アンジはブルッと震えた。無理もないとアーチャは思った。アンジがドレイとして働かされていた期間は、アーチャよりも遥かに長い。うまく脱走できたからといって、海底での辛酸な生活を完全に忘れられるわけではない。

「朝食はまだかなあ。いつもならもうとっくに作り始めてる時間帯

なんだけど」

食事の話をすれば、アンジも少しは元気を取り戻すだろうと考えて、アーチャはわざと大きな声でそう言った。しかし、台所を覗いてはみたが、そこに小人たちの姿はなかった。アーチャが不信に思った矢先、階段を下りてくる騒がしい足音が聞こえてきた。

「にい！　どうしよう！」

カエマだった。階下に辿り着くなり、悲鳴に近い声を発してアーチャにしがみついた。

「シャヌがいないの！」

アーチャもアンジも、この一言で完全に目を覚ました。バケツいっぱいの水を頭からかぶった気分だった。

「ばかな！」

アーチャは我を忘れて階段を駆け上がり、二階の部屋に足を踏み入れた。そこには、ファージニアス、じいさん、トナの寝姿しか確認できなかった。それに、いないのはシャヌだけではない。

「小人は？」

後を追って来たカエマに向かって、アーチャは荒々しく聞いた。

「分かんない。あたしが起きたら四人はもういなくって……」

「何か変わったことはなかった？　何でもいい」

カエマは部屋を見回して考えに耽った。

「あたし、寒いなあって思って、目が覚めたの……」

窓が開いていた。そこから、朝の柔らかな涼風が朝陽と共に部屋の中に入り込んでいる。それを見つけると、アーチャは無意識のうちに大股で歩きだしていた。脇目も振らずに部屋を横切ったので、危うくじいさんのきゃしゃな足を踏みつけるところだった。窓辺から身を乗り出して眼下を眺めると……。

「やっぱり……」

アーチャは絶望した。その目で見たのは、アジトの外壁を伝って、頑丈そうな縄はしごが地面まで垂れ下がっている光景だった。この縄はしごはヴァークスが非常用に設けたものだが、普段は丸く折りたたまれて窓のすぐ下に固定されていた。小人たちとシャヌは、ここからアジトを抜け出したに違いない。アーチャはそう確信を抱いた。

「でもなぜだ?」

ずっと遠くの景色を眺めながら、アーチャは考えを巡らせた。おりしも、足元で眠りこけていた面々が、ようやく目を覚まし始めた。

「誰か、小人たちとシャヌがこの窓から外へ出たのを見なかったか?」

だが、誰もアーチャの質問に答えられるような状態ではなかった。トナはいつまでも寝ぼけ眼をしばたかせていたし、じいさんはみん

なのそばへ歩み寄って朝の挨拶を交わすのに専念していた。ファージニアスときたら、聞いていたのかいなかったのか、寝起きの顔を誰にも見せまいと、うつむき加減で部屋を立ち去ってしまう有り様だ。

「おはよう、アーチャ」

これが朝の大切な仕事なのだと胸を張り、じいさんはアーチャに毅然とした語調で挨拶した。

「おはよう」

焦燥感にかられながら、アーチャは仕方なく挨拶を返した。

「なあ、じいさん。小人たちとシャヌがこの窓から外へ出たのを見なかったか？」

アーチャはもう一度同じ質問を繰り返した。じいさんはシミとシワだらけの顔にニンマリと笑顔を広げた。

「散歩は楽しいよ」

何か知っているような言い草だ。

「シャヌが出て行くのを見たの？」

トナの着替えを手伝っていたカエマがとっさに尋ねた。じいさんはもっとニンマリしてアーチャを見た。あんまり微笑むので、顔が上下に分かれるのではないかと思った。

「ピゲ族はわしに言ったんじゃ。散歩に行ってくる、と」

「シャヌも一緒だったか？」

アーチャは急き立てるような強い口調で問いただした。

「あれは夜中じゃった。暗かったが、わしは目が不自由で……じゃが、星は明るくてのう……そう、それは、シャヌがこの部屋へ戻ってきた直後じゃった。確か……一、二、三……四人が、その窓から……そして……」

じいさんがゆっくりと発する言葉を一つ一つ解釈するのは難儀だった。それでも尚、アーチャは歯がゆい思いを噛み殺し、じいさんの次の言葉を辛抱強く待った。

「おお、そうじゃった！」

じいさんは蚊も潰せないほど弱々しく手を叩いた。何か思い出したらしい。

「アンジにまだ挨拶をしていなかったようじゃ」

アーチャは怒鳴りつけたい衝動を必死に抑えつけながら、部屋を出て行くじいさんの背中を見送った。着替え終わったトナと、二人のやり取りを間近で観察していたカエマが、心配そうな面持ちでアーチャのそばまでやって来た。

「まさかとは思うけど、あの三人が無理やりシャヌを……？」

カエマの意見は、アーチャの意見と見事に一致していた。

「だけど分からないな……どうしてシャヌを連れ去る必要が……」

その時、壁に掛けられたある物を見て、アーチャは絶句した。それはすっかり色あせた風景画のカレンダーだった。ちょうど今日の日付のところに、大きく赤丸が付けられている。その丸の中には確かに、『トラッシュ・ラッシュ・トワゴ　～閉幕～』とヴァークスによって書かれたと思しき汚い字があった。

「これだ……これだったんだ！　あいつら、まさか……」

アーチャは言い知れぬ胸騒ぎを覚えた。

「そんなはずない！」

アーチャの心の中を見透かしたのだろうか？　カエマは、そんなことは有り得ないとばかりに、強い口調で否定した。

「だってそうでしょ？　シャヌを盗品として提出するなんて、人間として最低よ！」

「でも、あいつらならやりかねない。どこまでも執念深くて、お金や名声のためならどんな汚い手段にだって出る奴らだ」

アーチャは深刻な顔つきで念を押した。

「アーチャ……その……お姉ちゃんを助けに行くの？」

トナは口ごもりながらぶつぶつと聞いた。アーチャには、この質問の真意が何となく分かった気がした。トナの勝ち気な性格を前提

に踏まえると、ルースター・コールズが優勝できるのであれば、小人たちがどんなに“汚い手段”に出ても、許されるべきであると考えるはずだ。むしろ、この大会はそこを醍醐味として開催しているようなものだ。犯罪の『は』の字も心得ない悪党がこぞって参加する大会で、綺麗も汚いもあったものではない。

だが、今のアーチャに大会のルールを顧みている暇はない。トナへの返事は、当然初めから決まっていた。

「もちろん、助けに行くさ。今すぐにな！」

八章　閉幕　2

その二分後。アーチャ、アンジ、ファージニアスの三人は、ルースター・コールズが移動時に使用する自動車『カメレオン』に乗り込んでいた。状況を呑み込み切れないアンジとファージニアスをせっついて車へ乗せるのには一苦労したが、カエマとトナにぴしゃりと留守番を言いつけるのはたやすいことだった。

「前にあれほど教えただろう？　トワゴは危険な街だって。じいさんのお守でもして、暇でも潰しててくれ。……そんな顔をしてもダメ」

だが、膨れっ面と泣きっ面の二人を置き去りにするのはやはり気が引けた。「これもあいつらのためなんだ」と自分に言い聞かせることが、今のアーチャにできる精一杯の憐れみだった。

やがて、一向を乗せた『カメレオン』は動き出し、アジトを後にした。

「このアッシンベラ旧型モデルは、世界でもあまり生産されていない自動車なんですね。時代が時代なだけに、当時作られた代物はどれも欠陥が多くて！　最初は燃費が極端に悪いとか、ラジオの電波受信率が悪いとか、そんな苦情でしたよ。ですがそのうち、排気筒が謎の根詰まりを起こしたとか、ブレーキ音が幼女の金切り声そっくりに鳴るとか……何かと不吉なことが相継ぎまして、ええ。そして、その渦中に生産されたのがこのアッシンベラ旧型モデルなんですね！」

運転を申し出たファージニアスは誰に言うでもなく、まるで自動車を売り込む販売員のようにペラペラとまくしたてた。

「それで？　一体何があったっていうんだ？」

ファージニアスの小演説なんかどうでもいいと言わんばかりに、アンジは後部座席からしかめっ面を覗かせ、助手席に座っているアーチャを問い詰めた。朝食を食べ損ねたこともあいまって、アンジの機嫌は怒れる闘牛のように荒々しかった。

「昨夜、小人たち三人がシャヌをさらった。俺の推測だけど、昨日話したトラッシュ・ラッシュ・トワゴの会場に向かってるんじゃないかと思う。トワゴはここからそう遠くないし、日の出頃にはもう着いてるはずだ……何事もなければね。ファージニアス、もっと急いでくれないか？」

アーチャが急き立てるのも無理はなかった。馬車並みの速度で移動し続ける自動車と、変わり気のない近くの風景を見比べていれば、誰でも先行きが不安になるというものだ。

「どうしてチビたちはこの自動車を使わなかったんだ？」

「どうしてって、運転できないからだろう？　つまり、その……足が短くて」

アーチャは当たり前のことを言った。

「それに、あいつらが移動する時に使うのはもっぱらダリアン兄弟さ……裏で飼ってる馬のことだけどね。前に教えなかったっけ？」

アンジは何か考えながら首を横に振った。

「それじゃあ、あのチビたちは、シャヌを“盗み出した珍品”として……」

「そんな言い方やめろよ」

アーチャは厳しく咎めるような視線と口調でアンジの言葉を遮った。

「おっと、すまねえ。……つまり、あの三人は一人の人間を物のように扱おうとしてるわけか」

アンジは素直に訂正した。

「ですが、その衝動にかられるのも無理はないでしょう」

アクセルを強く踏み込みながら、ファージニアスは穏やかに言った。

「美麗で可憐な花を見つければ、誰でも摘み取ってしまいたくなるものですよ」

「へえ、そうかい」

アーチャは吐き捨てるような返事をした。

「けど、それとこれとは話が別だ。今回の一件で、俺はあいつらを完全に見損なったぜ。あの三人の我がままっぷりには毎度目をつぶってきたけど、今度という今度は絶対に許さない」

憎々しげに言いながら、アーチャは段々と腹が立っていくのが分

かった。

やがて、殺風景な荒地に色とりどりのペンキを流し込んだように、周囲の様相が一変した。小川が流れ、芝草が風に揺れ、彩り鮮やかな花が咲き乱れている。遥か遠くには濃淡のある山々が標高を競い合うように連なり、頂にニットキャップよろしく覆いかぶさるその万年雪は、今が夏季であることを思わせない涼しげな風情を感じさせてくれる。

しかし、この平穏な風景とは裏腹に、アーチャの不安と焦りはピークに達しようとしていた。道順を指示する口調は罵声に近く、場所を指し示す指先は刃の切っ先のように鋭く動いた。

「もう少し落ち着いたらどうなんだ？」

突然の砂利道に車体ごと声を震わせながら、アンジは言った。

「今取り乱したって、シャヌが助かるわけじゃないだろ。冷静さを欠くと、墓穴を掘ることになるんだぞ」

アンジが何を言いたいのか、アーチャにははっきりと分かっていた。海底から脱走してきたアーチャたちが人目の多い所へ出向いて行くということは、つまり、それなりのリスクを伴う結果となるのだ。

「そんなことはどうでもいいんだ」

アーチャの口調は柔らかだった。

「あの翼が人目に触れて、その情報がジェッキンゲンに行き届いたら、また振り出しに戻されちまう。シャヌは今、自分が何者なのかを、自分という存在が何なのかを、必死で見出そうとしてるんだ。

それなのに、名声や名誉のためだけに、シャヌの思いを踏みにじることができるはずないだろう?」

また段々と熱くなりながら、アーチャは続けた。

「シャヌだけじゃない。俺たちだって、この世界にいるべき理由がきっとあるはずなんだ。そうでなきゃ、生きている意味がなくなっちまう。……俺がどうなろうと、シャヌだけは守るんだ……シャヌを守ることは、俺が今を生きる証につながるんだ」

アーチャは自分が言ったことで気恥ずかしくなり、飛び交う二羽のオオワシで気を紛らわそうと空を見上げた。背後から、アンジのいつもの嫌味な笑顔がこちらを覗きこんでいるのがうっすらと分かった。

「がんばれよ、アーチャ」

アンジはそれだけを言って、その後は何事もなかったような態度で振舞った。

「俺、自動車に乗るのは生まれて初めてなんだ」

八章　閉幕　3

のどかな草原が過ぎ去り、見渡す限りのカボチャ畑が広がる田園地帯にさしかかると、アーチャはいよいよ緊張し始めた。

「もう少しだ……もう少し」

あぜ道を抜け、視界をこげ茶色の一色に染めていた田畑が過ぎ去ると、その先は森だった。

「この森を抜ければトワゴはもうすぐそこだ。車はここに置いていこう。トワゴ付近に駐車しようものなら、ものの数分で分解されて、闇市場へ直行だ」

アーチャたちは、森へ入ってすぐに見つけた、背の高い草や花が生い茂る湿地に車を停めた。こういう時、迷彩柄って本当に役立つよな、とアーチャは感心した。

「さあ、二人とも早く！　こんな森さっさと抜けちゃおう！　あの小人たちはそう待ってはくれないぞ……アンジ！　違う違う！　そこの取っ手を引いて、ドアを開けるんだ。乗り越えちゃダメだよ！　乗る時にやって見せただろう？」

散々まくしたてた後、性急に二人を促しながら、アーチャは先頭を切って歩き始めた。三人は木漏れ日に照らし出される暖かな道の上を突き進んだ。

「嫌なものですねえ。小さな虫が飛び回る森というのは」

顔の近くでビュンビュン飛び交う数匹の蚊に手をわずらわせながら、ファージニアスは非難じみた声を上げた。

「ファージニアス。お前、どこから来たのかくらい教えてくれてもいいんじゃないか？」

ハエの群がる、異様なほど巨大な黒い花に目を奪われようとも、アンジの抱くファージニアスへの疑わしげな感心を忘れさせたりはしなかった。シャヌのことで頭がいっぱいで、猛然と行進を続けていたアーチャでさえも、これには耳を傾けた。

「遠い未来からですよ」

アーチャは思わず足を止め、それにつられてアンジも立ち止まった。そして、二人は互いに顔を見合わせた。アンジはひどくショックを受けたような顔をしていたが、アーチャは吹き出しそうなのをこらえるため、けいれん混じりの無表情になってしまった。

「なーんてね！　冗談ですよ、冗談！」

ファージニアスの笑い飛ばす高らかな声が、森の木々にぶつかって響き渡った。そして、「さあ、歩き続けましょう！」とばかりの優雅な大股開きでさっさと出発してしまった。

「俺、じいさんの症状があいつに感染したのかと思った」

そう口にするアンジの笑顔は、「それはそれで面白い」と楽しげに語っているようだった。

「だけど……」

アーチャは声を低くして言った。

「結局またこうして、煙に巻かれたってわけだ。本当に、何者なんだろうな、あいつ」

数十分も歩いた頃、ようやく森の出口らしいものが見えてきて、三人の足は自然と小走りになっていた。左右に密集していた大木が少しずつその数を減らし、やがて完全に無くなると、そこはもう森ではなかった。トワゴの街を一望できる、小高い丘の上に三人は立っていた。

雑草がまばらに生い茂るなだらかな斜面の向こうに、その街はあった。だが、アーチャが“あれ”を街と呼ばなければ、誰もあれを“街”だと認識できなかっただろう。

言わばトワゴという街は、朽ちかけた円形状の巨大なドームだった。以前は、何か立派な施設だったに違いない。崩れ落ちた丸天井から確認できる限り、スポーツをやる上ではもってこいの形状になっているのは確かなようだった。石造だが、たくさんの観客席もあるし、緑の剥げかけた芝もわずかに残っている。

「国に認められた、正真正銘の街だよ。ちゃんと人が住める構造になってるし、雨風も防げる。夏にはこうして多くのならず者が集まるしね」

「元々は何だったんだ？」

丘を駆け下りながら、アンジが聞いた。

「剣闘士たちが戦っていた闘技場ですよ」

アーチャより早く、ファージニアスがきっぱりと答えた。まるで、私の知らないことなど皆無だと言わんばかりの、そんな流暢とした口ぶりだった。

「様々な言い伝えや伝統はあるようですが、剣闘士たちによる戦いは、主に見世物としてとり行われていたようですね。剣闘士に選ばれるのは、敵国との戦争で捕らえた捕虜やドレイ、死刑囚などで、“剣の奴隷”とも呼ばれていました。ですが、そんな冷酷な戦いに興味を抱く国民もいましてね。志願兵なんかも大勢いたみたいです。この闘技場はトワーゴ・ラ・アーミラと呼ばれ、トワゴという名の街となったのはつい最近のことなのです」

ファージニアスの説明ぶりは、観光スポットを案内するガイドも顔負けだったに違いない。トワゴをよく知るアーチャでさえ、今の説明には舌を巻いたほどだ。

「ファージニアスって、実は博識だよな」

アーチャは心の底からファージニアスのことを見直した。ファージニアスは、ごく当たり前のことをしたのだと主張するように、アーチャに向かってにっこり微笑んだ。

「私はあなた方の敵ではありません、仲間なのですよ。私の持ち得るすべての知識を、可能な範囲内であれば、あなた方に提供するのは当然のことです」

闘技場から溢れ出る熱狂的な歓声に圧倒され、“可能な範囲外”が何なのかを聞き逃したのは痛手だった。だが、トワゴへの入口はもう目と鼻の先だ。

「ずいぶんと盛り上がってるな……俺、ヒト族が大勢いる所は苦手なんだ」

闘技場の崩れかかった入口を前にして、アンジは二の足を踏んでいた。兜と鎧、そして剣を装備した剣闘士の大きな石像が、その狭い入口の両脇でにおう立ちし、それぞれがこちらを見下ろしている。

「らしくねえなあ、アンジさんよ」

アーチャが嘲った。

「別にここで待っててもいいんだぜ？　小人たちからシャヌを引き離して、大っぴらになる前にずらかるだけだからさ」

だが結局、三人一緒にトワゴへ行くこととなった。ここまで来て引き下がれるものかと、アンジがついに勇気を振り絞ったのだ。それに、アンジたちイクシム族はなぜか廃墟を好むため、その意欲に駆り立てられたのもまた事実だった。

八章　閉幕　4

薄暗がりの一本通路を抜けると、そこはもう別世界だった。三人の視界に広がった光景は、簡単に言い表すとすれば、『天井付きの街』が最もふさわしいだろう。かつて、剣闘士たちが血を流して戦ったと伝えられている荒野の上には、今や人の住む古風な家々が建ち並び、その戦いを見守るべく高い場所へ設けられた観客席には、骨組みの質素なテントがあらゆる所で組み立てられている。点々と存在するテントに群がる大勢の人だかりと、その賑わいぶりから見て、どうやら何かの商売をしているようだった。

崩れ落ちてぽっかりと穴の開いた天井部分から暖かな陽光が入射し、世界に名高い劇団でもしっかりとした芝居を演じられるくらい大きくて立派なステージを、これでもかと明るく照らし出していた。まさにあのステージ上で、『トラッシュ・ラッシュ・トワゴ』の受賞式が行われるのだ。今は、酒と宴で酔っ払った数人の男たちが強烈なだみ声で熱唱しており、それを見物する窃盗団のある一味が、足を踏み鳴らしたり、太い声を猛烈に張り上げてはやし立てたりするので、ステージ周辺は特に盛況しているようだった。

「よし！」

悪党面に群青色のヘルメットをかぶった空賊と思しき連中が三人のそばを通り過ぎた時、アーチャが威勢よく声を張り上げた。

「別れて探すぞ。ここはそう広くないし、盗みに失敗して青筋立てる窃盗団にからまれなきゃ、特に問題はないはずだ。ただし、深追いはするなよ。小人たちを見つけ次第、他の俺たち二人を探し集めて、行動はそれからだ。シャヌは絶対に小人たちのそばにいるはずだから、奇襲をかければ逃げる暇だってないはずだ」

アーチャは出発直後から練っていたシャヌ救出計画を口早に説明し、二人の半ば呆然とした表情を交互に見た。アンジとファージニアスが曖昧にうなずいたので、アーチャは更に続けた。

「ファージニアスは客席を探してくれ。あそこにある階段が見えるか？　あれを使えばすぐに客席へ上がれる。アンジはここら辺一帯を頼む。家を訪問する時は、ノックを忘れるなよ。トワゴの住民は何かと警戒心が強いからな。俺は内部のことに詳しいし、あいつらがうまく隠れそうな場所はもう見当がついてるから、まずはそっちに探りを入れてみる。説明は以上だ……何か質問は？」

とどめに、「こんな切羽詰まってる時に、質問なんかあるわけないよな？」と聞こえるような強い語気で締めくくると、アーチャは二人をぐいっと眺めた。アンジもファージニアスも揃って首を横に動かした。二人とも、ここは素直に従っておくべきなんだと、とっさに察知したようだった。

「それじゃあ、急いで見つけ出すぞ！　さあ、駆け足！」

クルリと背中を向けたかと思うと、アーチャの姿は人ごみに紛れてもう見えなくなっていた。

「はあ……」

ため息をつくアンジは、アーチャへのやり切れない思いで胸がいっぱいだった。

「アーチャの奴、一つのことに夢中になるとどうして周りが見えなくなっちまうのかな」

「大丈夫ですよ、アンジさん」

ファージニアスが声を弾ませた。

「恋ほど人を夢中にさせるものは、この世に二つとしてありませんからね」

ファージニアスはそう言うと、意味ありげに目配せし、客席の方へと行ってしまった。

「コイねえ……」

アンジは興味深げに呟いたが、雑踏の中を一人で突っ立っていることに気付いた瞬間、そんなことはもうどうでもよくなってしまった。そして、今はシャヌを見つけ出すことが先決なのだと、気持ちを切り替え、震える足取りで歩き出したのだった。

あれからどれだけの時が流れたのだろうか？

たそがれ時の青とオレンジ色に染まる夕空が、抜け落ちて空白となった天井部分からこちらに顔を覗かせるその様子は、闇を迎え入れる前準備だということを物静かに告げているようだった。

スポットライト風で使い勝手の悪い、たくさんの街灯がトワゴの中を照らし出した時、アーチャは、最も高見のできる客席につま先立ちしてトワゴ全体を見回していた。小人たちどころか、ごくわずかな手がかりでさえ、まだ見つかっていなかったのだ。そのことで、アーチャは完全に参っていた。

「まさか、俺の読みが外れたとでも？」

自らに問いをかけたが、返ってくる返事はなかった。三人がかりでの捜索を何時間も続けたのに、辿り着く先は常に「ここにもいない」だった。

宿の部屋という部屋は手当たり次第に顔を突っ込んだし、顔見知りの酒場のオーナーに頼み込んで倉庫の扉を開けてもらいもした。ゴミ箱の中身をひっくり返し、商品棚の奥まで手を伸ばした。女性専用トイレの前には小一時間も張り込んだ。翼の羽でも抜け落ちていないかと、脇目も振らず、地面を這うように探している自分をこっけいに思いながらも尚、アーチャはどんなに小さな手がかりも見逃すまいと、必死に探し続けた。

だが、これだけ探しても見つからないとなると、やはり……。

「さて、困ったことになりましたね」

アーチャの左手前方からファージニアスがひょいと姿を現し、出し抜けにそう言った。

「何か手応えはあったかい？」

アーチャは聞いたが、ファージニアスの深刻そうな表情がその答えを教えてくれていたので、彼が力無く銀髪を横に振る姿を見る必要はなかった。

「閉会は九時ですよね？　アーチャ、今の時刻は？」

ファージニアスはアーチャの首からぶら下がる懐中時計を指差してそう尋ねた。アーチャはその言葉にハッとして、懐中時計を手に取った。あんまり長い間首からぶら下げていたせいで、そこに時計

があったことを、アーチャはすっかり忘れてしまっていた。海底でジャーニスと初めて出会ったその日に、この懐中時計を受け取ったのだ。

「六時を過ぎたところだよ……アンジはどこに行ったんだろう？」

民家の井戸付近で昼飯のサンドイッチを手渡して以来、アンジとは顔を合わせていなかった。二人は横幅の狭い石段を下り、脇に井戸のある赤屋根の民家の前に辿り着くと、窓から家の中をちらりと覗きこんだ。イクシム族が二人、脚の長いテーブルを間に挟んで椅子に座り、何か楽しそうに会話していた。一人は間違いなくアンジだったが、もう一人はアーチャの知らないイクシム族だ。アンジが窓から覗き込むアーチャとファージニアスの存在に気付いたのは、その直後のことだった。

「悪い悪い。つい会話が弾んじまってよ」

家の中から出てくるや否や、アンジは朗らかな笑みでそう言った。アンジのこんな笑顔を、アーチャはかつて一度も見たことがなかった。テーブルいっぱいの御馳走を目の前にした昨夜でさえ、ここまで満面の笑みではなかった。

「いや、別にいいんだけど……それで……そちら様は？」

アンジの頭越しにこちらを覗き込むイクシム族のいかめしい顔を見上げながら、アーチャは恐々と尋ねた。

「わしはここの住人。名はティガー」

そう言って、ティガーはその小さな瞳をキラリと一閃させ、警戒

心を丸出しにした。そのたくましい体格や、岩のような地肌はイクシム族そのもので、背はアンジよりも頭一つ分抜いていた。どうやら、アンジよりずいぶん年上のイクシム族らしい。

「俺はアーチャだ。ティガーは、ずっとトワゴに住んでるのかい？」

「さっきも同じ質問を受けた」

ティガーは不機嫌そうに答えた。

「わしは血族狩りが始まった二年ほど前から、ここに住んでる」

アーチャはしめたと思い、唐突に質問を変えた。

「今日ここで、ピゲ族の三人と、シーツをまとった女の子を見なかった？」

「さっきも同じ質問を受けた」

ティガーは一本調子で繰り返した。

「そんな奴らは見ていない。それに、この時期はどうも人が多くてかなわん。夜が明けるまでどんちゃん騒ぎだ……だからわしは、あまり窓の外を見ないようにしている」

アーチャは同情するように優しく笑いかけた。

「このお祭りも今日で終わりさ……ありがとう、ティガー」

八章　閉幕　5

アーチャ、アンジ、ファージニアスは、ティガーに別れを告げ、人だかりの少ない西側の観客席へと向かった。あたりは人、人、人で溢れ返り（どれも人相の悪い悪党面ばかりだ）、朝ここへ来た時よりも遥かに人口密度が高くなっているようだった。

「それにしても、トワゴにイクシム族が住んでいたなんて思いもしなかったぜ」

前の座席の背もたれに両足を引っ掛けながら、アーチャは気だるそうに言った。

「扉をノックしたらすぐに彼が出てきて、立ち話も何だからって、家の中に招待してくれたんだ」

アンジは楽しげな口調で説明を始めた。事細かに話して聞かせるアンジの表情は、とても生き生きしていた。同種族に出会えたことが、とても嬉しかったに違いない。アンジを見つめるアーチャまで、心が弾むようだった。

「ティガーは軍が動き出したのを知って、早くに行動を起こしてたんだ。だから捕まらなかった……俺、何か変なこと言ったか？　……なんだよ、その顔」

自分に向かって微笑みかけるアーチャの笑顔が気色悪いとばかりに、アンジは思いっきり顔をしかめた。

「アンジ。俺にはお前の気持ちがよく分かる。俺も一人だった時が

あるからさ……だから俺も嬉しいんだ。アンジと同じなんだ」

アンジの頬がわずかに紅潮したのを、アーチャは見逃さなかった。

「ヘイ、ボーイズ！」

ファージニアスは二人のやり取りに感極まり、声を詰まらせながら高々と叫んだ。

「友情というものはいつ見ても美しいものです。互いを思い、互いを見守るその心はまさしく、神に仕えし天使のごとく清らかな心。お二人とも、あそこをご覧なさい。今まさに、多くの人々に見守られし若人たちが、ここに姿を現したようです！」

アーチャとアンジはファージニアスの目線の先を追った。そこにいたのは、紛れもない、ルースター・コールズの宿敵レッドワインだ。昨年の優勝チームであり、全員が女性ということもあって、レッドワインは拍手と喝采で手厚くもてなされていた。

「あの三人の内、ちょうど真ん中にいるのがグレア・レヴだ」

口元で笑うキザな笑顔と、大きく手を振って声援に答えるその仕草が不愉快だと言わんばかりの声色で、アーチャはぶっきらぼうに説明した。首元に赤いスカーフを巻き、露出度の高い身軽な服装でトワゴの街中を闊歩するグレア・レヴは、栄華を極めし者であり、また、窃盗団の頂点に君臨する存在でもあるのだ。そうでなければ、称賛の拍手と、尊敬の眼差しを向けられる彼女たちが、こんな街に顔を出すはずがない。

「去年は、世界で最初に製造されたと言われている“レレロイド産

赤ワイン・ペナージェ”を、厳重な管理倉庫からまんまと盗み出して優勝したんだ。宝のありかを嗅ぎ取る嗅覚と、真偽の疑惑を物ともしないその図抜けた目利きにおいて、グレアの右に出る者はない……と言われている……」

アーチャは自らの言葉で気分を害してしまった。

言わなければ良かったと後悔し始めたその時、心なしか、グレアがアーチャたちのいる西側の客席に向かって歩み寄って来るような気がしてならなかった。

「おい！　アーチャ！　アーチャ・ルーイェン！」

アーチャは腰が反るほどギクリとした。グレアが、間違いなくアーチャに向かって手を振り、ここまで来いと偉そうに指示している。

まったく、目ざとい女だ。

「へいへい。今行くよ」

アーチャはぶつぶつと不満げに返答し、アンジとファージニアスに向かって「ついて来いよ」と目配せすると、手前の手すりを飛び越え、階段を使わずにそのまま三メートル下の地面に着地した……が、やがて足の裏から体中に激痛が走り抜けた。ドレイ生活で痩せ衰えていた肉体が、その衝撃の強さに耐えられなかったのだ。結局、アーチャはその場に尻餅をつき、涙目で両足をさするはめになった。

「ンハハ！　アーチャ、何だそのザマは？」

足の痛みとグレアの高笑いが重なり、アーチャは心身ともに朽ちていくのが分かった。

「一から説明したところで、お前には一生かかっても理解できない苦痛を俺は味わったんだ。その結果がこれさ」

グレアの細い瞳がイタズラっぽくアーチャを覗き込んだ。

「あんた、かなり痩せたんじゃないか？　その様子だと、お得意の抜き足も使い物にならないんだろうね」

「心配ご無用」

尻についた砂埃を払い落としながら、アーチャは物憂げに言った。

「ルースター・コールズはもう終わっちまったんだ……抜き足、差し足、忍び足なんて、もう俺には不要だね」

「おいおい。まさか、またピゲ族とケンカでもしたんじゃないか？」

グレアがせせら笑った。

「それもあるけど……ヴァークスが死んだんだ。一週間以上前に」

グレアの顔から笑顔が消え去った。双方の背後から、アンジ、ファージニアス、レッドワインのメンバー二人がアーチャとグレアの元へ集まった。

「本当か？」

グレアの声はわずかに上ずっていた。アーチャは弱々しくうなずいた。

「ガムダンの国で、誰かに殺されたらしい……ヴァークスは失うし、小人には裏切られるし、ルースター・コールズはもうメチャクチャさ」

アーチャは飛び切り深いため息を吐き出し、グレアの背後に無愛想な表情で立ち続ける仲間の二人を交互に見つめた。右側に立っている女の両手にしっかりと抱えられているのは、淡いパンジー色の綺麗な布で覆われた細長い何かだった。だが、その輪郭からだいたいの見当はつく。

「今年は何を調達してきたんだ？　またワインか？」

アーチャは羨ましげに聞いてみた。

「あたしたちはワインしか盗まない。知ってるだろう？　どこの代物かは、後で分かるよ……ところで、そこのお二人さんは？　新人か？」

「違うよ。ちょいと訳があって、今アジトで一緒に暮らしてるんだ。あいつはアンジ。そんで、彼が……」

「ファージニアスといいます。初めまして」

アーチャの肩をつかんで向こうへ押しやり、グレアの前に進み出たファージニアスは、軽く一礼し、紳士的に微笑みかけた。

「アーチャからあなたの話はうかがっております。是非一度、お目にかかりたいと願っておりました。クペルマ硬貨型チョコレートなどいかがでしょう？　あなたのお口に合うこと、請け合いですよ」

差し出された金紙包みのチョコレートをかなり遠慮がちに受け取ったグレアは、「じゃあ、あたしたちは色々と準備があるから」と、仲間を引き連れ、逃げるようにしてその場を立ち去ってしまった。
アーチャは肩を落とすファージニアスの背中をポンと叩いた。

「あのレッドワインを退却させるなんて、なかなかやるじゃないか、ファージニアス！」

八章　閉幕　6

それから二時間ほど、今度は三人一組みになって小人たちを探したが、やはり結果は先ほどと変わらなかった。空が闇に包まれ、星が点々と輝き始めた八時頃、街の北に設置されたステージの上に、ある一人の男が姿を現した。その瞬間、割れんばかりの拍手と荒々しい歓喜の声で、トワゴの街は隙間なく埋め尽くされた。

「大会司会者のマットンだ！」

アーチャが興奮して叫んだ。

マットンは、遠くからでもよく目立つほどの派手なネクタイを締め、ちょっと大きめな黒の燕尾服で正装していた。その恰幅のよい体型からしぼり出される太い大声は、このけたたましい何百という歓声にも一人で立ち向かえるほど凄まじいものだった。

「俺様を見ろ！　下衆ども！」

出し抜けにマットンが叫び、そのえげつない言葉に反応してブーイングが起こった。

「もっと近くへ行こう。あいつらが来てるかもしれない」

アーチャが促すかたわら、マットンは容赦なく叫び続けた。

「今年のトラッシュ・ラッシュ・トワゴもいよいよ閉幕だ！　見苦しい殴り合いも、聞き苦しい言い争いも、全部ここまで！　エネルギー切れの奴がいるなら、さっさと電池交換することをオススメするぜ！　何せこいつら全員、筋金入りの短気なヤローどもだ！　そ

う長くは待っちゃくれねえぜ！」

天井を突き抜けるような歓声が沸き起こり、ステージの周りに群がる観衆たちは狂ったように叫び散らした。アーチャたちはその真っ只中に滑り込み、わずかに空いた隙間を縫って（アンジの怪力も手伝って）最前列にまで押し進んだ。

そして、一組目の『フェイフェン教徒』盗賊団が壇上に立った時には、会場の盛り上がりは最高潮に達していた。その後も、『デニス・デニス・デニス』海賊団、『天空の騎士』空賊団、『流浪バラ』海賊団、『タイタンガム』盗賊団、『フェルナム・ペンネボ』盗賊団と続き、それぞれがこの数ヶ月で手に入れた自慢の盗品を提出し合い、それを審査員であるヨボヨボの老いぼれじいさん数名が鑑定した。

「あのじいさんたちは？」

禿げた頭を寄せ合い、熱心に話し込むじいさんたちの後ろ姿を面白おかしく眺めながら、アンジは聞いた。

「数年前に引退した、世界中でその名が通る元盗人さ」

アーチャはやや興奮気味に答えた。

「ここに集まった奴らは、みんな彼らを崇拝してる。左からナフティ、レイオ、アルハーム、メメヒト、チャール、コーヘンエイギス。この世界を夢見る若者たちの多くが彼らの背中を見て育ってきたようなもんだ。……まあ俺の場合は、ヴァークスに『名前だけでも覚えとけ』って促されただけで、あの人たちが何をやったかなんてさっぱり分からないんだけどな」

最後に登場したのは、やはり、今年一番の注目の的であり、それに見合った確かな腕を持つレッドワイン盗賊団だった。

「さあ、さあ、さあ！　待たせて悪かったな、下衆ども！　本当はお前ら全員、この三人の美女を待ってたんだろう！」

マットンが『下衆』と呼ぶ人々と一緒になって騒ぎ立てるファージニアスを冷ややかな目で見つめながら、アーチャは聞こえよがしに大きく舌を打った。だが、そんなアーチャの小さな抵抗は、狂喜の絶叫に呑まれて消失してしまった。

「前回優勝チームであるレッドワイン！　王者の名誉とプライドを汚さず、そして、ひっきりなしに襲い来るプレッシャーをフェアな精神で受け止めてくれた彼女たちは、今回も俺たちの期待を裏切らなかったぜ！」

熱のこもった歓声を全身に浴びながら、マットンは更に続けた。

「さあ！　ぐずぐずしてると、この爆発寸前の熱気が冷め切っちまう！　では早速参りましょうぜ！　レッドワインがここトワゴに持ち帰った、世界に名高き盗品は……」

「ちょいとお待ち！」

この瞬間、アーチャの背筋が凍りついた。

聞き覚えのあるあの金切り声が、どこからともなく聞こえてきたのだ。声の主は誰なのかと、観衆たちは互いの顔を覗き込み、そのせいで歓声がどよめきに変わった。マットンは司会進行を妨げられたことに屈辱を覚え、怒り狂って拳を振り上げている。

「どこだ！　出て来い！」

マットンと一緒になってアーチャが叫んだ。すると突然、薄暗いステージ奥から青い筋のような光が放たれ、一瞬だけパッと輝いた。次の瞬間、ステージ奥に立つ四人分のシルエットがあった。四人のうち三人はピゲ族で、もう一人は……。

「シャヌ！」

海底で見た、あの悲しげな表情がアーチャを見つめていた。幸運なことに、シーツをまとっているおかげでまだ翼はあらわにされていなかった。アーチャがステージ上によじ登ると、それに習ってアンジとファージニアスも後に続いた。

「喜びな、アーチャ！」

小人が嬉々として叫び、シャヌの翼を覆い隠すシーツに手をかけた。アーチャは怒りに拳を震わせながら、何とか殴り飛ばしてやりたい感情を抑えつけた。

「あたしたちルースター・コールズが優勝する華々しい勇姿を、その目に焼き付けることができるんだからね！」

小人たちは不謹慎な口ぶりでそう言い、ゲラゲラと下品に大笑いした。

「一体、どこにどうやって隠れてやがったんだ？」

アンジが錯乱気味に聞いた。

「この子の魔法を使わせてもらったのさ。姿を消し去る魔法をね」

「どうりで、あれだけ探しても見つからないわけだ」

アーチャは感心したようにそう呟いてから、狐につままれたような表情でこちらを見つめる群集を尻目に、ファージニアスに耳打ちした。「車を頼む」と。

ファージニアスは笑顔でうなずき、ステージ横からポンと飛び降りると、人ごみに紛れて姿を消した。

「シャヌから離れろ。これは最終警告だ」

アーチャは本気だった。

「警告？」

シーツをつかんでいる方の小人が聞き捨てならないとばかりに返した。

「あたしたちはもう誰の指図も受けない……この計画を思いついた時、そう決めたのさ。それに、今までこき使われてきた分、ここらで恩の一つや二つ、返してもらおうじゃないか」

「好き勝手言いやがって。それ以上俺に歯向かおうってんなら……」

アーチャの口元に何らかの見えない力が加わった。いやおうなしにギュッとふさがれたまま、ピクリとも動かなくなったのだ。まるで、上下の唇の間をチャックで閉じてしまったかのようだ。

八章　閉幕　7

「お……お前たち！　一体さっきから何をやってるんだ？」

動揺を隠しきれないマットンは、腹の底から精一杯しぼり出したような声で口を挟んだ。そんなマットンの足元に、小人の一人が静かに歩み寄った。

「あたしたち、ルースター・コールズの一味だよ。大会にエントリーしてただろう？　名簿を確認しておくれ。これから、あたしたちが仲間から盗み取った、世界で最高の珍品をここでお披露目しなくちゃいけないからね」

アーチャはもう我慢の限界だった。この怒りを言葉に変えてぶちまけてやりたかったが、唇は閉じ切ったまま言う事を聞いてくれない。自分の身に何が起こっているのか、アーチャにはさっぱり分からなかった。

「さあ、ここに集いし同志よ」

マットンの立場を強引に横取りして、小人たちが声を張り上げた。

「これより、最高のショーをご覧に入れよう！　百年の時を超え、今まさに、滅びの一族が復活の瞬間を成し遂げようとしているのだ！」

アーチャとアンジは同時に走り出していた。何としてでも、小人たちのそばからシャヌを引き離さなければ。だが……アーチャは見た。何かに憑依されたような、おぞましい小人たちの顔を……こち

らに向けられる、殺気に満ち満ちた小人たちの両手を……。

「ダメ！　逃げて！」

シャヌの悲鳴と重なって、強烈な突風がステージ上を貫いた。アーチャとアンジは何が起こったのかも分からないまま、観衆の集まるステージ前まで吹き飛ばされてしまった。観衆がその二人をかわすように左右へパッと割れたので、二人は痛々しくも地面に叩きつけられてしまった。

「薄情な奴らだ！」

アーチャとアンジが口を揃えて観衆を非難した。激しい痛みと混乱で、アーチャは口が利けるようになっていることさえ気付かないほどだった。二人が手を取り合って立ち上がろうとしたその直後、頭上から落ちてきた何か柔らかいもので視界が遮られ、アーチャとアンジはまた地面に伏せ込む結果となった。

目の前が真っ暗闇に包まれたその時、トワゴの街全体が眠りに落ちたように、しんと静まり返った。アーチャの中を駆け抜ける不吉な予感が、闇の中を伝ってそのままアンジにも伝染したようだった。二人は大急ぎで光を遮る何かを取り払った。案の定、それはシャヌが肩にまとっていたあの白いシーツだった。

天井の破損部分から射し込む星明かりが壇上のシャヌを包み込み、大きく左右に広げられた翼に照り返ってまばゆい光彩を放っている……。

レッドワイン盗賊団、マットン、審査員、観衆……シャヌの美麗な容姿を間近で見たすべての者はまたたく間に魅了され、言葉さえも失った。マットンの場合、その冗舌な口元にはまだ“司会者の魂”が残っているらしく、何かを口に出したくてたまらない様子で、口をパクパクさせている。

「こ……こ……こいつは驚いた」

深い静寂の中、その小さな瞳を翼に捕われたまま、マットンがやっとの思いでどもりながらの感想を述べた。審査員のじいさんたちは我先にとシャヌに群がり、『生涯において最高に幸せな瞬間』とでもいうような表情で翼に魅入られている。

だが、シャヌに注がれる視線の数々は、やがて、賛美なものから冷酷なものに変わっていった。

「あれ、本物なのか？」

「そんなわけない。マイラ族はとっくに滅びたんだ」

「じゃあ、あれは？」

「偽物には見えないぜ、あれ」

あたりがざわめき始めた時、シャヌに異変が起こった。全身をワナワナと震わせ、ひどく怯えているようだった。口に両手をあてがうその姿は、昨日、その身に起きた症状と全く同じだ。

アーチャはシーツをわしづかみ、無我夢中でステージ上に舞い戻った。これ以上、シャヌが傷ついていくのを黙って見ていたくなかった。

アーチャが小人たちの手からシャヌを引き離した。かわいそうなシャヌ……多くの人々による無情な扱いによって、すでに心は傷だらけだ。アーチャはシャヌの肩にそっとシーツをまとわせてやり、見世物となった翼と共に、深く傷ついた心をも優しく包み込んであげた。そして、観衆をぐるりと睨みつけ、次に小人たちを睨みつけてやった……が、どこか様子がおかしい。

「マットン……マットン……」

あえぎながら、マットンの足にしがみ付く三人の小人の姿がそこにあった。どれもみな血の気の失せた青黒い顔をしており、黒目は上を向き、口からはあごを伝って唾液が垂れ下がっている。マットンは小人たちを振り払おうと必死に抵抗し、顔を恐怖で引きつらせた。

「マットン……優勝を……ルースター・コールズに……優勝を……」

アーチャは、観衆の気がシャヌから小人たちに移ったこの一瞬のタイミングを逃さなかった。シャヌを抱えてステージから飛び降り、アンジに目で合図を送ると、出口の通路目がけて脱兎のごとく逃げ出したのだ。

「アーチャ！　止まれ！　娘を返せ！」

二人が小人たちに対して完全に背を向けたその時、身も心も凍りつくようなおどろおどろしい叫び声が後を追いかけて来た。二人は振り返ることもせずに走り続けようと試みたが、そうは問屋が卸さない。

アーチャの耳元を、熱を帯びた何かが音を立てて追い越したかと思うと、目の前の民家に衝突して外壁の一部を粉々に打ち砕き、続いて目もくらむような光を放って大爆発を引き起こした。これには、アーチャも思わず振り返った。小人たちの頭上で赤々と燃え上がるそれは、まさに小さな太陽だった。

「アンジ！　伏せろ！」

二人は街の出入り口に通じる狭い通路に向かって頭からダイブし、二つ目の燃え上がる球体をギリギリのところでかわした。炎の球体は通路の壁をえぐりながら上昇し、天井にぶち当たると、やはり先ほどと同じく爆発した。

「あいつら、魔法を使えたのか？」

爆風で巻き上がった砂と埃でむせ込みながら、アンジは悲鳴に近い口調でそう尋ねた。

「まさか！　あいつらには魔力のかけらだってなかったさ……」

これ以上の長話は命取りになりそうだと、アーチャは考えを改めた。後ろを振り返ると、ダチョウのような軽やかな足取りと、チーターのような猛スピードでこちらに向かってくる、小人たちの不可思議な姿があったのだ。

「シャヌをこっちへ！　今のお前じゃ遅すぎる！」

アンジはアーチャからシャヌを強引に奪い取ると、そのまま出口へむかって突っ走った。天井から崩れ落ちて飛散した瓦礫に足を取られながらも、アーチャは何とか体勢を立て直し、アンジの背中を死ぬ気で追いかけた。

「アーチャ……アーチャ……」

背後から呼びかける小人たちの弱りきった声は、死の世界へと誘うかのような不気味さをじわじわとかもし出していた。しかも、その声は段々と近づいて来る……右肩をつかまれた……熱い……肩が燃えているかのようだ。

「アーチャ……アーチャ……ア……」

やがて、小人たちの声はぼんやりとかすれていった。ふと気付くと、アーチャはトワゴの外に広がる茂みでうつぶせに倒れ込んでいた。右肩には、小人の物と思しき白骨化した死体ががっちりとしがみついている。

その時、ゴツゴツした大きな手が、アーチャの腕をつかみ取って助け起こしてくれた。

「アンジ……どうやら、助かったみたいだな」

骨と化した小人の無残な成れの果てを払い除けながら、アーチャはぜえぜえ言った。

「あいつらの最期を見たぜ。通路から外へ出た瞬間、みんな粉になっちまった。残ったのは骨だけだ」

八章　閉幕　8

アンジのそばにシャヌがいないことに気が付き、アーチャは辺りを見回した。膝を抱えて小さくうずくまるシャヌがいた場所は、草の禿げかけた丘のふもとだった。

「今だけはやめておけ。今だけは……」

シャヌに駆け寄ろうとするアーチャの後ろ姿に向かって、アンジは静かに声をかけた。アーチャはコクリとうなずき、悔し紛れに草をむしり始めた。

「何もできなかった……。俺は、周りにいた群衆と同じ、ただ見ているしかなかったんだ」

渾身の力を込め、雑草を根元からごっそり引き抜いた時、アーチャとアンジは明るいライトによって照らし出された。追っ手が来たのかと思ったが、そうではなかった。ファージニアスが、車のライトをこちらに向け、なだらかな斜面を下りてくるところだった。

アーチャ、アンジ、シャヌは車へ乗り込み、一行は、ファージニアスの運転する『カメレオン』でアジトへの帰路を辿った。

自動車のエンジン音がより一層けたたましく感じるほど、静かな夜道が続いた。ここまで閑静なのには二つの理由があった。一つは、ここが田舎道だということ。もう一つは、車中の雰囲気が重苦しく、誰も口を開こうとしなかったことだ。あのファージニアスでさえ、事態の重大さをひしひしと感じているらしく、黙りこくったまま運転に集中していた。

こうなると、アーチャの行き着く場所はやはり星空だった。たと

え、ほんの数秒前に死ぬほど怖い体験をしていたとしても、この満天の星空を眺めれば一瞬で忘れることができる。その意思のせいで、助手席に座るアーチャはずっと顔を上げっぱなしだった。

森を抜け、カボチャ畑の果てへと続いていくあぜ道を走行中、突如として沈黙が破られた。

「車を停めて！」

そう叫んだのはシャヌだった。乱暴なブレーキで車が急停止し、その反動で四人全員が前のめりに突っ込んだ。

「何だ？　え？　シャヌか？」

アーチャは突然の不意打ちに面食らい、間の抜けた声を出して周囲をキョロキョロと見回した。ルームミラーに映っていたのは、降車しようとするシャヌの思いも寄らない姿だった。

「シャヌ、どこに行くんだよ？」

アーチャは聞いたが、シャヌは無視してそのまま来た道を戻り始めた。アーチャは車から降り、シャヌの後を急いで追った。アンジとファージニアスが黙って見守る中、アーチャはようやくシャヌに追いつき、腕をつかんで歩くのをやめさせた。

「気でも狂ったか？　シャヌ、一体どうしたっていうんだ……」

「どうして？」

シャヌの声は、涙を含んでいるかのように悲しみに満ちていた。

「私は、みんなと同じように過ごしたいだけなのに……みんなと同じように生きていたいだけなのに……どうしてみんな、私のことをあんな目で見るの？」

アーチャの心臓は、アンジの硬質な手で平手打ちされたかのように激しく痛んだ。

「それは……シャヌ、それは違……」

「私が滅びたはずのマイラ族だから？」

森の入口を遠くに眺めながら、シャヌは小さな声で言った。返す言葉さえなかった。

「ピゲ族の三人が言ったの……お前は珍しい生き物で、金になるから、この大会が終わったら国軍に高値で売るって……私、悔しかった……すごく悔しかった」

シーツに覆われたシャヌの後ろ姿を見つめたまま、アーチャはただ黙然と突っ立っているしかなかった。アーチャが恐れていた以上に、シャヌの心の傷は深かった。アーチャは不甲斐ない自分をますます責め立てた。

「それで、分かったの……背中にこの翼がある限り、私は誰とも関わっちゃいけないんだって……一人で生きていかなきゃいけないんだって……もう、私のせいでアーチャたちを困らせたくないの」

『そんなことない！』

『シャヌのためになるなら、どんなことだってする』

『すぐに助けてやれなかったこと、本当に悪いと思ってる』

『言っただろう？　俺はシャヌを守るって』

心に思ったことを、何一つ言ってやれなかった。思いつくすべての言葉に自信がなく、そんな綺麗事を並べただけの曖昧な言葉が、更にシャヌを傷つけてしまいそうで怖かった。

『シャヌ……ごめん』

言葉にできない思いをかみしめながら、アーチャはシャヌの腕をそっと離した。

「さようなら、アーチャ」

肩からシーツが滑り落ち、ふわりと宙を舞った時、もうそこにシャヌの姿はなかった。魔法で姿を消し、どこかへ……アーチャの手の届かない、どこか遠くへ、シャヌは行ってしまった。

九章　記憶の中の英雄　1

ヴァークスとピゲ族のいなくなったアジトで、アーチャは、何をするでもなく、居間の食卓テーブルに突っ伏してただほうけているしかなかった。

アーチャにとって、『ルースター・コールズ』は唯一、自分という人間を肯定してくれる存在だった。それにも関わらず、首領のヴァークスは何者かに殺され、ピゲ族は骨だけを残して消滅してしまった。やり場のない悲しみと怒りが混沌とし、心の中で音を立てて混ざり合っていく……。

だが、アーチャを無気力にさせた決定的な出来事は、何よりも、シャヌを失ってしまったことに違いなかった。昨夜はシャヌのことが心配で、一睡もできなかった。仲間を亡くした上、守るべき大切な人を守りとおせなかったことは、アーチャからいつもの快活な動力源を抜き取るのに十分すぎるほどの効果をもたらしていた。

「シャヌ、今ごろどうしてると思う？　一人で泣いてると思うか？」

窓からの陽光さえ届かない部屋の片隅で寡黙に立ち続ける甲冑に向かって、アーチャは尋ねかけた。甲冑が兜から覗かせる無の視線は、アーチャではなく、壁掛けの丸時計を見つめていた。無論、応答はない。

「昨夜から、ずっと考えてたんだ」

アーチャは一方的に話し続けた。

「シャヌはあのまま、ジェッキンゲンと一緒に暮らしていた方が良かったんじゃないかって。俺が余計な情けさえかけなければ、シャ

ヌは今ごろ……」

シャヌは今ごろどうしていたのだろう？　アーチャはふと考えた。シャヌを地下に置き去りにしておくことが、賢明なやり方だったと言えるだろうか？　それが正解なのだと、胸を張って言えるだろうか？

「俺は、後悔したくなかった」

アーチャはテーブルの上で拳を握った。

「シャヌをあの地獄から救い出すことに、何の迷いもなかったから……シャヌのためなら何でもできる気がしたから……だから、絶対に後悔したくなかったんだ」

「つまり、自分は断じて悪くないってわけだ」

アーチャは喋るはずのない鎧の騎士に命が宿ったのかと思い、胃の奥がひやりとした。だがその声は、二階から下りて来たアンジのものだった。

「一人でぶつぶつ言いやがって、一体誰と話してたんだ？」

壊れかけの椅子にドカッと座り込むなり、アンジはいぶかしげに尋ねた。

「俺のことを崇拝してくれる、鎧と兜ですべてを覆い隠した無口な兵士さんとだよ」

皮肉を込めた親指の先端を甲冑に向かって突き立てながら、アー

チャは所在なげに答えた。その指先にあるものを見たアンジは、すぐさま首をかしげた。

「なあ、アーチャ。シャヌがいなくなちまって、寂しい気持ちはよく分かる。だけど、頭までおかしくなっちまったらあのじいさんと一緒だ」

気の毒そうな視線をアーチャに向けながら、アンジはささやかにそう言った。

「外へ行かないか？」

「行かない」

アーチャは無愛想に断った。

「狩りをしに森へ行こうぜ。朝から何も食べてねえんだ」

「行くもんか」

アンジはとうとう、ため息だけをそこに残し、外へ出て行ってしまった。だが、いざアンジがいなくなると、アーチャはますます不安になってしまった。

「俺って、つくづく情けない男だろ、兵士さん？」

甲冑がコクリとうなずいたように見えたので、アーチャは思わず顔を上げた。更にその直後、扉が音を立てて勢いよく開いたので、アーチャは椅子から飛び上がるほど驚いた。

「にい！」

カエマが……喜びに瞳を爛々と輝かせ、肩で息をするカエマが、扉を開け放った張本人だった。

「何だ……カエマか」

アーチャは立ち上がったまま、意味の無い冷や汗をかいたことで後悔した。

「帰って来てたんなら、どうしてすぐに教えてくれなかったの？」

床に散乱するたくさんの『拾い物』を慣れた感じで踏み越えながら、カエマは喜びと苛立ちの入り混じった声でそう聞いた。

「アンジの姿が見えたから、おじいちゃんを引っ張ってここまで走って来たの。それで、シャヌは見つかった？」

「ああ……」

椅子に座り直しながら、アーチャは後ろめたそうに答えた。

「見つけた……けど、ここにはもういない」

カエマを直視していたわけではないが、彼女が動揺を隠しきれない表情でアーチャを見つめていたのは明らかだった。

「それ……どういう意味？」

「シャヌがそうすることを選んだ」

アーチャはテーブルの脚を呆然と眺めたまま、呆然と答えた。

「それじゃあ、今シャヌはひとりぼっちなの？　場所は？　探しに行かないの？」

「うるさい……」

アーチャはカエマからの質問攻めを静かに制止させたが、今のカエマには全く通用しなかった。

「ねえ、にい、どうしちゃったの？　いつものにいらしくないよ。それに、小人たちは？　ヴァークスだってまだ帰って来てないんでしょう？　ルースター・コールズはどうなっちゃったわけ？」

「うるさい！」

二つの拳をテーブルの上に振り下ろし、同時に甲高く怒鳴りつけるアーチャの姿を目の当たりにすると、さすがのカエマも二の句を継げなかった。アーチャの狂乱じみた血眼と目が合った瞬間、怖いもの知らずのカエマは戦慄した。

「他のメンバーはどうしたかって？　みんな死んだのさ！　俺を残して、みんな勝手に死んじまった！」

そこまで叫んで、アーチャは途端に我に返った。今にも泣き出しそうなカエマが、潤んだ瞳でまっすぐにアーチャを見つめていた。

「あ……ごめん」

アーチャが謝ると、カエマはうつむきながら首を横に振った。

「人が死ぬってこと、まだよく分かんないから……」

愚かなことをしてしまったと、アーチャの心は自責の念で満たされた。まだほんの五歳の女の子に八つ当たりし、『死』という言葉を用いて乱暴な発言を繰り返してしまった……。

「カエマ、本当にごめ……」

その時、また扉が開いた……というより、勢いが強すぎて、頑丈な扉が蝶番ごと吹っ飛んだ。

九章　記憶の中の英雄　2

「アーチャ！」

中に入ってくるなり、アーチャの名を呼んだのはアンジだった。枠から外れた扉を握りしめるアンジのその表情は、ここにきて最も青ざめて見えた。

「扉を壊してまで伝えたいことって、何なの？」

アーチャは少し非難がましく聞いてみた。

「あいつが……あいつがいるんだ」

アンジは急激に声量を落とした。

「ゼル・スタンバインが、街の広場にいる」

その名を聞いた瞬間、アーチャは反射的に立ち上がっていた。そして、アンジのそばまで詰め寄り、そのゴツゴツとした体を盾にアジトの外を覗き見た。そこから見えたのは、カラッとした晴れ空の下、ファージニアスが自動車『カメレオン』の窓拭きをしている姿と、じいさんが植木鉢をしげしげと眺めている姿だけだった。

「ゼルの他には？」

「海底で見かけたことのない兵士が一人だけだ……スタンバインの部下だろうな」

アーチャは顔を上げてアンジを見た。

「確かなのか？」

「俺は目だけはいいんだ」

不安げな表情のカエマを尻目に、アーチャは黙々と考えた。

アンジがゼルの名を口にした時はどうやって身を隠そうか迷いもしたが、思い返してみると、今ここでこうしていられるのはゼルのおかげでもあるのだ。シャヌを連れ立とうとするアーチャをゼルが捕らえていれば、アーチャは今頃、本物の闇の中にいたはずだ。

ゼルがアーチャたちの脱走を大っぴらにしていなければ、シャヌが地下から姿を消したことはともかく、そのことがアーチャたちの失踪を関連付ける要因になるとは誰も考えつかないはずだ。それは、アンジの言っていた『スタンバインの部下』らしき人物が、例えアクアマリンで勤務していた兵士だったとしてもだ。

「俺、会いに行ってみる」

アーチャは勇敢な答えを導き出した。

「正気かよ。相手は国軍だぜ？　いくら相手が少人数だからって、脱走者だってことを自分から打ち明けに行くバカがどこにいる？」

アーチャは聞く耳持たずだった。アンジの背後をすり抜け、外へ踏み出すと、一度深呼吸してアジトを振り返った。

「大丈夫、ゼルは俺たちの味方さ」

そう言って、アーチャは街の中心部へと続く長い一本道を歩き始

めた。

「どういうことだ？」

軽快な歩調で行進を続けるアーチャをドタドタと追いかけながら、アンジが聞いた。そのすぐ背後から、カエマのか弱い足音が重なる。

「俺がシャヌを救い出した時、ゼルは手を貸してくれたんだ。だから、彼ならきっと信用できる」

アーチャが言い終わらないうちに、背後で低いエンジン音がうなりを上げた。三人が振り向くと、こちらに向かってゆっくりと近づいて来るカメレオンの姿が視界に入った。

「さあ、参りましょうか！」

運転席からファージニアスが陽気に呼びかけた。

「グレア・レヴへやって来た、珍しいお客さんにお目見えするために！」

アーチャ、アンジ、カエマは車へと乗り込み、じいさん、ファージニアスと一緒に広場へと向かった。

「ゼル・スタンバインって、誰なの？」

カエマが我慢できずに聞いた。

「アクアマリンくらいは聞いたことあるだろ？」

アーチャは自らも質問するという形式で答えた。

「ええ、もちろん」

カエマの口調は自信たっぷりだ。

「前に、街の図書館で読んだことがあるの。そこにはこう書いてあった。『アクアマリンは、マープル族が大昔から守ってきた魔の力を持つ鉱石である。主の瞳は透き通る青に輝き、体内を巡る血液は繊細な魔力で満たされる。その神秘の力は十の指先より放たれ、万物を念じる強い精神と肉体の間より生まれる。海底に眠り続けるアクアマリンは、アクアマリンを糧とするマープルによって守られている』」

ここまで言い終わると、カエマを含めて全員が深呼吸した。そして、まだ続く。

「別の本にはこうも書いてあったわ。『隠され し世の最後の秘宝“アクアマリン”は、マープル族の長グランモニカによって、光をも寄せ付けぬ海底の洞窟で今も尚、輝き続けることを忘れてはいない。アクアマリンの眠る海域がグレイクレイ国によって統治されたのは、つい最近のことだ』……以上だけど?」

カエマは、「アクアマリンがどうかした?」とでも言うような語調で締めくくり、車中の全員をぐるりと見回した。みんな唖然としていた。

「ようするに、君はもう少し外で遊んだ方がいいってことだ」

アンジが結論を述べた。

「俺が聞きたかったのは、海底にある奴隷収容所のことだったのさ」

カエマに感心しつつも、アーチャは本題を忘れてはいなかった。

「俺、アンジ、シャヌ、おじいさんは、人魚たちの住み家を改造した奴隷収容所で生活してたんだ。その海底洞窟はアクアマリンと呼ばれていて、敵国を支配するための殺戮機械が作られたり、そのために科学的な生体実験が繰り返されたりしていて、世界中からたくさんの血族が集められていたんだ。俺たちはヘンテコな神殿作りに余念がなかったけどな……。ゼル・スタンバインって人はそこに勤務していた兵士のことで、俺たちがアクアマリンから脱出するのを手助けしてくれた人さ」

「それじゃあ、ゼルって兵士はあたしたちの味方ってわけね」

カエマが安心しきった声でそう言い終わってから、街の広場に到着するまでの時間は、至極束の間だった。車が広場の中央で停車すると、焚き火から立ち昇る細い筋のような煙が、そこに集まっていた人々と共にざわざわと揺らめいた。タイヤ痕から砂埃が舞い上がり、アーチャの視界の一部を黄土色に染め上げた。そして、息苦しいほどの砂埃に見え隠れしているのは、間違いない、ゼル・スタンバイン少佐だ。

九章　記憶の中の英雄　3

彼の姿はまるで、一年前にグレア・レヴへやって来た、『スラム救済団体・ベルネップボランティア』そのものだった。ぐったりと座り込む人々に話しかけ、各々の要求を聞いてあげては、できる限りの誠意を尽くしている。水が欲しい者には水筒の中身を分け与え、食べ物が欲しい者には自分の昼飯を食べさせてやり、毛布が欲しい者には着替え用の服を布団代わりにかぶせてやる。

時に笑いかけ、時に険しい顔つきで人々に話しかけるゼル・スタンバインが、そこにいた。

アーチャが車から降りると、アンジ、ファージニアス、カエマがそれに続いた。

「やあ」

ゼルの常盤色に染まる短いマントを見つめながら、アーチャが呼びかけた。ゼルは振り向くと同時に立ち上がり、怒りに満ちた鋭い目つきでアーチャを睨んだ。どうしてゼルがこんな表情をするのか、アーチャには察しがついていた。

「話は人づてに聞いている……すべてな」

「……シャヌのことか？」

アーチャは恐る恐る聞いてみた。ゼルは返事をする代わりに、アーチャにぐいぐいと歩み寄って来た。いや、もしかしたら、これがその返事だったのかもしれない。

「軍の中枢で活動する貴重生物保護管理局に昨夜、興味深い情報が

飛び込んできた」

ゼルは呟くように切り出した。眉がますます吊り上がり、その瞳にはより一層怒りが込められていった。

「トワゴという街に突然、絶滅したはずのマイラ族の少女が現れたそうだ。その情報を入手した私は、自らトワゴへ赴き、事件の詳細を探るべく聞き込みを始めた。そして、ここへ辿り着いた。ルースター・コールズの一味であるアーチャ・ルーイエンを求めて」

ゼルは後ろで手を組み、これ以上は無理というくらいアーチャに接近した。アーチャは目に見えない重圧感で押し潰されそうになった。

「アーチャ。君は確かに『シャヌを守る』と、そう私に言ったはずだ。『誰も救えない奴に、自分を救う資格はない』とも言った。そして私は、その言葉を心から信じた。その結果がこれか？」

アーチャは面目ないとばかりにうつむいた。何と弁解してよいやら、その言葉さえ見つからなかった。

「アーチャは悪くねえよ、兵士さん」

その様子を見ていたアンジが、声を張り上げて口を挟んだ。イクシム族のアンジを見て、ゼルは少し驚いたようだった。細く鋭かった目が、丸く穏やかになったのだ。

「アーチャはシャヌを助け出そうと必死だったんだ。仲間に裏切られて、シャヌがトワゴに連れて行かれた時だって……」

「アンジ、もういい」

アーチャの声はとても小さかったが、その一言は、アンジから次の言葉を奪い取ってしまうほど強烈な印象を与えた。

「俺の考えが浅はかだったんだ。シャヌのこと、生活のこと、今後のこと……みんな浅はかだった……でも、シャヌと一緒に地下から脱出したことに関して、俺は後悔してないし、間違った選択をしたとも思ってない」

ゼルの厳しい顔を見上げながら、アーチャは勇敢にもそう言い切った。トク、トクと、胸が小さく脈打つのを感じた。

「シャヌの捜索はすでに始まっている」

強面はそのままに、呟くような重々しい声でゼルが言った。

「次にシャヌが軍の手に渡った時、その魔力は悪用され、世界は破滅への第一歩を踏み出すだろう。殺戮機械が人々を支配し、大地は赤く染まるだろう。私たちは、多くの恐怖と共にこれからを生きていくことになるだろう。アーチャ……なぜ私が君にシャヌを託したのか、もう一度よく考えてほしい。そして、自らの意思で見出したその答えで、シャヌを守り続けてほしい」

そう言って、ゼルはあたりを見回した。何かを探しているようだった。

「シャヌはどこだ？　彼女にも話したいことがある」

これはまずいと、アーチャは焦りの色を隠せなかった。『守り続

けてほしい』と言われた矢先、『シャヌはここにいません』だなんて、死んでも言えない。

「あの子なら、もう少しでここに戻って来ますよ」

瓦礫の山を踏み越えてこちらに向かってくるかたわら、明るい声色でそう発言したのは、緑の軍服を丁寧に着込んだ兵士だった。アンジの言っていた『スタンバインの部下』とは、きっとこの人のことだろう。確かに、アーチャは地下でこんな凛々しい顔立ちの兵士を見たことがないし、今まで出会ってきたどの兵士よりも若い。アーチャよりもわずかに年上のようにも見て取れるが、その容姿や言動から、ずいぶんとませた感じの青年なのは明確だった。

アーチャはしばらくこの兵士を観察するのに夢中になっていたのだが、突如、そんなことはどうでもよくなった。なぜなら、どうしてこの見ず知らずの若者が、シャヌがここにいないことを知っているのか、そして、もう少しで戻って来るなどと断言できるのか、疑問に思ったからだ。

「お前、一体何者なんだ？」

名前を尋ねようと思っていたのに、アーチャの口を突いて出たのは、えたいの知れない者に対するいつもの荒々しい言葉遣いだった。驚嘆するアーチャに向かって、兵士は愉快げに微笑えみかけた。

「僕の名はユイツ。兵士の見習いです」

ユイツから放たれる何とも言い難い不可思議なオーラをひしひしと全身に浴びながら、アーチャは半ばぼんやりして彼の声を聞いていた。そして、こいつはただ者ではないと、アーチャはそう直感した。

「ゼル大尉。先ほど、本部から無線に連絡が入りました」

アーチャたちの自己紹介が終わると、ユイツは不意に話題を切り替えた。

「至急、場所を移動せよとのことです。ここら一帯は僕らの管轄ではないですし、何より今回は、ゼル大尉の勝手な行動があだになってしまいましたからね。ですから、ここはおとなしく従っておいた方が良いかと思われます。明日になれば、捜索隊がこのスラムにもやって来るでしょうし……今後の内密な活動に支障を及ぼさないためにも、これ以上ジェッキンゲン大佐を怒らせない方がいいですよ」

最後の一言は、耳を澄まさなければいけないほど声が小さかったので、すべてを聞き取るのに苦労した。内密な活動とは、軍に反感を抱くゼルに深く関係していることなのだろうか？

「私から直に話そう。しばらく待っていてくれ」

ゼルはそう言い残し、ユイツが来た道を戻って広場から足早に去って行った。

九章　記憶の中の英雄　4

「捜索隊がスラムにやって来るって、どういうことだ？」

ゼルの後ろ姿を目で追いながら、アーチャが率直に尋ねた。

「今までの話の流れから、みなさんはもう大方お気付きでしょう」

意味ありげなユイツのこの言葉は、アーチャたちだけでなく、焚き火を囲んで聞き耳を立てていた多くの住民にさえ、不吉な戦慄をしっかりと抱かせたのだった。そんな大勢の不安を尻目に、ユイツは話し続けた。

「明日、滅びの一族に宿る強大な魔力を求めて、特別捜索隊がこのスラムへシャヌを取り戻しにやって来るのです」

アーチャは耳を疑った。シャヌを公の場に明かしてしまったことで、まさか、ここまで多大な影響を及ぼすなんて想像もしていなかった。

「これから、俺たちはどうすればいい？」

アーチャの背後から、アンジが静かに尋ねかけた。この深刻な事態を目の当たりにしたアンジは、身も心も縮んでしまったかのように見えた。

「僕たちは、警告するためにこのスラムまでやって来ました。上官を出し抜くのはそれなりに大変でしたが、彼らからシャヌを守ることに徹するのであれば、僕たちは身の危険を顧みません。かつて、

君がそうしたように」

過去を見透かすようなユイツの視線は、アーチャにとってとても耐え難いものだった。楽しかった過去も、辛かった過去も、悲しかった過去も、すべて筒抜けにされているようで、とても怖かった。

「明日、捜索隊がここを訪れる前に、君たちはシャヌを連れてどこか遠くへ逃げて下さい。そして、しばらくの期間はそこに身を隠し、ほとぼりが冷めるまで下手に行動を起こさないでほしいのです」

「しばらくの期間って、その捜索隊ってのがここを離れるまでか？」

アーチャがぶっきらぼうに聞いた。ユイツは首を横に振って応じた。

「ジェッキンゲン大佐の目的は、シャヌの捜索だけではありません。もう一つ……」

「それ以上は国そのものに関わる極秘情報だ」

再び姿を見せたゼルが発した第一声は、ユイツを厳しく咎めるものだった。ユイツは肝を冷やしたような表情でゼルを振り返った。

「すみません、大尉。ただ、ここに住む彼らになら知っておく権利はあるかと……」

「それは私が決めることで、お前の役目ではない」

ユイツを説教するゼルの口調には一切の甘さを感じなかったが、その表情からは、わずかな慈愛の気配をかいま見ることができた。

「もういいから、お前は先に車に乗って待機していろ。すぐに出発だ。朝から部隊をほったらかしにしたことで、ジェッキンゲン大佐は心底ご立腹の様子だからな」

ユイツは姿を現した時と同様、爽やかな笑顔でアーチャたちに別れを告げ、クルリと背を向けて広場から去った。ユイツを取り巻く不思議なオーラが、彼の後を追いかけるようにしてアーチャの元から離れていった。

「これからのことはユイツから聞いたのだろう？　行動するなら早い方がいい。今日中にでも荷物をまとめてこの町から離れるんだ。アーチャ……シャヌがなぜここにいないのか、その理由を追求しようとは思わない」

まっすぐにアーチャを見据えながら、ゼルは静かに言った。

「だが、私は信じてる。世界から無意味な争いが消え去る時を……シャヌが平和と呼ばれる世界で自由に空を舞える時を……私は信じてる」

「それだけじゃない」

アーチャの瞳は燃え上がらんばかりだ。

「信じて、必死に戦うんだ。正当な戦いってのが何かを、国軍に教えてやるんだ。これからは、俺たちが未来を築き上げていかなきゃいけないから……だから、海底に今も囚われている仲間のためにも、俺は絶対に諦めたりしない。やってやる！」

そんなアーチャのやる気を消沈させたすべての発端は、アンジが弱々しくアーチャの名を呼んだことにあった。アーチャが振り向くと、そこには、アンジ、ファージニアス、カエマのひどく驚倒する表情があった。だが、それらと一緒にアーチャの視界に飛び込んできたのは、誰あろう、あのじいさんだった。よたよたとおぼつかない足取りで、アーチャのいる方へ向かって歩み寄って来る。

アジトの床に散乱する調度品の中に埋もれ、もうすっかり色あせてしまった東国の地味なお祭り衣装を、現地住民よりもピシッと着こなすじいさんのその表情は、まさにお祭り気分とでも言いたげだった。眉は溶けるように垂れ下がり、口元は痙攣しているかのようにヒクヒクと笑い、虚ろに輝くその瞳は、確かにゼル・スタンバインを見つめて離さない。

アーチャがこんなにおかしなじいさんを見るのは、これで二度目だった。一度目は、アーチャとじいさんが初めて出会った時に起きた、あの絶叫事件だ。だが今回のじいさんは、前回とはまるで様子が違う。何らかの喜びに、魂さえ抜け出てしまいそうな表情をしている。

こいつはただ事じゃないぞと、アーチャは息を呑んだ。

「ゼル……スタンバイン……少佐」

両腕を伸ばし、震える指先をゼルに向けながら、じいさんは荒い息遣いでそう言った。じいさんにいつもの平静ぶりは微塵もなかった。

「もう少佐ではない。重大な失態をしてしまい、降格したのだ」

ゼルはじいさんのことを何も知らなかったおかげで、ここまでおかしな彼を目の前にしても、いつもの冷静さを失ったりすることはなかった。じいさんのことに詳しいアーチャとアンジなら、今のじい

さんに声をかけることさえためらうだろう。
しかし、こんな状況下でも、アーチャの脳味噌は完全にその活動を停止させていたわけではなかった。ゼルの言う『重大な失態』が、シャヌを逃がしてしまったことを言っているのだろうと、アーチャはとっさに気付くことができたのだ。

「わしは……思い出した。かつて……わしの、心の中に存在した……英雄の、その名を……ゼル・スタンバインという、英雄のその名を」

じいさんの口から『英雄』という言葉が発せられた時、アーチャの中で何かが大きく弾け上がった。そして、その“何か”が、アーチャの遠い過去の記憶から抜け落ちてしまった、ある出来事が深く関係しているということも、同時に思い出すことができた。

「私が英雄？」

ゼルはいよいよ困り始めた。

「私は、英雄などと呼ばれるような正義を、かつて一度だって見せたことはない。主人の命令どおりに動く犬そのものだった。吠えろと命令されれば吠えるし、噛めと命令されれば見境なしに噛みついた。だが、私は今日、自分の意思でここにやって来た……誰の命令でもない、自分の意思で」

ゼルの言葉の真意をちゃんと理解できたのは、おそらくアーチャしかいなかっただろう。アクアマリンでの別れ際に自らのことを語ってくれたゼルの姿は、アーチャの心にまだ鮮明に残されていた。
最後に（おかしくなったじいさんを差し置いて）、アーチャはもう一度ゼルとの誓いを交わし、「絶対にシャヌを守ってみせる」と

豪語した。そうして二人は、二度目の別れを遂げたのだった。

九章　記憶の中の英雄　5

アジトに戻ったアーチャたちは、ユイツの言ったとおり、シャヌが帰ってくるのを待つことにした。誰もが半信半疑だったが、アーチャにとって、これがシャヌと再会することのできる最後の術だった。

「にい、馬車がこっちに来るよ」

カエマが指で指し示す方向を、その場にいた全員が目で追った。町の広場へと続く一本道の上をこちらにまっすぐ向かって来るのは、つややかな茶色い毛並みに覆われた一頭の馬で、天蓋付きの大きな馬車を豪快に引っ張っている。

「あのけばけばしい馬車は間違いなくグレアのだ。こんな大事な時に……」

馬車馬は容赦なく砂埃を舞い上げ、アーチャの数メートル手前で急停止した。

「グレア、着いたよ。ルースター・コールズのアジト前だ」

手綱を握っていた無愛想な表情の女が、馬車の中にいるグレアにそう呼びかけた。すぐに中から扉が開き、グレアのもう一人の仲間が出てくると、それに続いてグレアも馬車から降りた。グレアの優越そうな表情を見ていると、アーチャは、いつも以上に見下されているような気がしてならなかった。

「お前が街に帰ってくるなんて、珍しいじゃないか」

腕組みをしてこちらをじっと見据えてくるグレアに向かって、アーチャはボソボソと言った。

「話しを逸らそうとしたってダメだよ」

グレアの口調は冷ややかだ。

「昨夜のあれは何だい？　神聖な舞台の上で見苦しい仲間割れを起こしたかと思えば、滅びたはずのマイラ族を巡って乱闘騒ぎ。直後に国軍どもが乗り込んできて、会場は大混乱。審査どころじゃなくなって、今年の大会は優勝チームなしだ。ついでに、ルースター・コールズの参加は永久に認可されないとの伝言を預かってきたよ」

「へいへい」

アーチャのすげない返事が、グレアの癇に障ったのは確かだった。だが、グレアが思い切り舌打ちしても、今のアーチャにとってはどうでもいいことのようにしか思えなかった。

「そんな皮肉を言うためだけにここまで来たってわけ？　あんたたち、かなり悪趣味だよね」

苛立ちを隠そうともせず、アーチャは乱暴に言い放った。しかし、付き合いの長いグレアにとって、そんなアーチャの胸中はまるでお見通しだった。

「ところで、トワゴから帰る途中に誰かの落し物を拾ったんだけど、これ、誰の物か分かるかい？」

アーチャはしかめっ面でグレアを見た。馬車の中から何かを引っ張り出そうとしている。グレアは道中で何を拾ったのか？　さっぱり見当もつかないアーチャたちは、グレアから片時も目を離すことをしなかった。そして、その答えは直後に明確となった。

「シャヌ……？」

まさかと、アーチャは目を疑った。だが、馬車から降り立った人物は紛れもなくシャヌだった。あらわにされた翼が陽射しに当たって照り返り、アーチャの目にチカチカと刺激を与えた。こんな神秘的な輝きは、この世に二つとして存在しないはずだ。

「無事だったんだな」

アンジが嬉しそうに声をかけた。

「おかえりなさい、シャヌ！」

狂ったように跳ね回りながら、カエマが甲高い声でそう言った。

「みんな、あなたの帰りを心待ちにしてましたよ！　そうですよね、アーチャ？」

ファージニアスが聞いた。

「あ、ああ……」

みんなのように素直に喜ぶことが、アーチャにはできなかった。昨夜のことを後ろめたく思っているのも確かだが、今はただ、シャヌが戻って来てくれたという安堵感に浸るだけで精一杯だったのだ。

「森の中でうずくまってるのをあたしが見つけたんだ。アーチャ、この子と何があったのかは知らないけど、女の子一人を夜道に放り出すなんて、男失格だね」

グレアの言っていることはごもっともで、アーチャは言い返す気力さえ湧いてこなかった。

「グレアさん、アーチャは全然悪くないんです……悪いのはすべて私です」

シャヌはそう言って、アーチャたち一人一人をしっかりと見つめた。

「みんな、迷惑かけてごめんなさい……」

それからしばらく、誰も口を開こうとしなかった……いや、そこにいるみんなが、アーチャの言葉を待っていたに違いない。誰よりもシャヌのことを思うアーチャの言葉を……だが、アーチャはみんなの期待を裏切るかのように、だんまりを決め込む一方だった。

「一人で抱え込むなんて体に毒だぜ。どうして、もっと俺たちを頼ってくれないんだ？」

アーチャが何も言わないならと、アンジが真っ先に沈黙を破る結果となった。

「本当は、誰かに甘えていたい」

静かにそう答えるシャヌの瞳が、アンジではなく、アーチャを見

つめているということは、アーチャ自身が一番よく分かっていた。

「だけど、誰かが私を助けようとする度に、その人の身は危険にさらされてきた。私のせいで誰かが傷つくなんて、そんなの耐えられない……」

「ばかばかしいね、そんな考え」

グレアのその一言は、シャヌのすべてを否定するかのような痛烈なものだった。

「あんたさ、自分をおとぎ話に出てくるような“悲劇的な女の子”か何かと勘違いしてるわけ？　この世の仕組みなんてまだ何も知らないガキのくせして、誰の力も必要としないで生きていけるわけないでしょ」

グレアが右手を不意に振り上げたので、シャヌを殴るのかと思ったが、そうではなかった。シャヌの肩の上にその右手が乗った時には、グレアの表情に笑みが広がっていた。いつも他人をさげすむような笑い方しかできないグレアが、こんな優しい笑顔を見せることもあるんだと、アーチャは心底驚いた。

「グレアさん、私……」

グレアは首を振り、シャヌにそれ以上続けさせようとしなかった。なぜだか、グレアにはシャヌの言いたいことが分かっているようだった。

「あんた、幸せ者じゃないか。こんなにたくさんの仲間に見守られてさ」

シャヌはもう一度アーチャたちを見た。シャヌをマイラ族としてではなく、一人の人間として認めてくれる、そんなアーチャたちを、シャヌはもう一度見つめ直すことができた。そんな彼らに対して、心から「ありがとう」と言うことができた。

シャヌの笑顔に背中を押されるように、アーチャはとうとう一歩前へ踏み出した。

「シャヌはさ……自分の中に、英雄がいる？」

「英雄？」

シャヌはしばらく考え込んだ。

「よく分からないけど……アーチャの中には、英雄がいるの？」

「ああ、いるよ」

アーチャは意気揚々と答えた。

「俺は、十年前に両親が死んで、それからずっとこのスラムで生きてきたんだ。だけどちょうど一年前、スラム救済団体のベルネップボランティアってのがやって来て、その一員に扮装して悪行を繰り返していたヴァークスたちに拾われたんだ。その時まで、俺はずっと一人だった」

十年前に起こった事件の真相を語る瞬間が、とうとう訪れた。辛酸な過去を明かすことにためらい続けてきたアーチャにとって、これは苦渋の選択だった。だが、アーチャもシャヌと同じで、もう分かっていた。信頼できる仲間たちを目の前にして、隠す必要のある

過去や、心の悩みなどありはしないのだということを。

「十年前のある日……」

アーチャは、静ひつな声でゆっくりと切り出した。

「俺たちの住んでいた村が敵国の兵士たちに襲撃された。村中に火が放たれて、みんな殺された……俺の両親も……みんな殺されたんだ。だけど、その大勢の兵士と戦った男がたった一人だけいた。熱い炎の中、兵士たちに一人で立ち向かって、全員やっつけちまったんだ」

車の後部座席でぼんやりと空を眺めるじいさんを横目で見つめながら、アーチャは続けた。

「ついさっき、じいさんがゼルのことを英雄と言った。それで、分かったんだ。その男が誰だったのか……俺が英雄と呼んでいたその男が誰だったのか」

アンジが息を呑んだ。

「まさか、ゼル・スタンバインが？」

アーチャはアンジに向かってコクリとうなずいた。

「十年も前の記憶なんて曖昧だけど、これだけは確かだ。あの時、俺を助けてくれたのは間違いなくゼルだった。アクアマリンで初め会った時から、どうしても初対面のような気がしなかったんだ。ゼルが俺のことを覚えているかどうかは分からないけど、俺の中では、彼は英雄なんだ。……つまり、何を言いたいのかというと……英雄

とか、尊敬する人とか、頼れる仲間とか、そういう特別な存在を思い続けることで、心の支えになってくれたりするもんなんだ。と、俺はそう信じてる」

アーチャを見つめるそれぞれの瞳からは、アーチャが抱く揺るぎない意思を尊重するかのような、力強い眼差しが注がれていた。

九章　記憶の中の英雄　6

レッドワインが町を去って行ったのは、それから間もなくのことだった。次のお宝を探しに、まだ足を踏み入れたことのない未知の国へと旅に出るらしい。

「よし！　出発の準備に取り掛かるぞ！」

アーチャが意気込むと、カエマがそれに習った。

「あたし、お母さんにどこかうってつけの隠れ場所がないか、聞いてみるね！」

アーチャたちは、長期滞在に必要な物をアジトの片っ端からごっそりかき集め、車のトランクの中に放り込むという作業を繰り返した。その途中、昼間に起こった出来事をシャヌに一から教えたのはアーチャだった。

ゼルがここへ来たこと。新米の不思議な兵士が『シャヌが戻って来る』と予言し、見事に的中したこと。明日、捜索隊がここを訪れること。それまでにどこか遠い所へ非難しなければならないこと。

事細かに伝え終わると、ちょうど出発の準備が整ったところだった。

「忘れ物はないよな？」

助手席に乗り込みながらアーチャがみんなに聞いた。

「俺の隣にじいさんがいるってことは、他に何も忘れようがないだろ？」

アンジがそれに答えた。それならよしと、アーチャは親指を立てた。

「ここを出る前に、まずは広場だ。カエマの母さんがどこかいい場所を知ってるかもしれない」

車が再び広場を訪れると、母親を連れたカエマとトナがすぐに駆け寄って来た。

「久しぶりね、アーチャ。事情はカエマから聞いたわ」

アーチャに挨拶したのはカエマの母親で、都の酒場で働く綺麗な女性だった。だが今日は、仕事の疲れも溜まってか、その顔は少し疲れているように見えた。

アーチャが詳しい話を聞こうと身を乗り出した時、横からプリーツのあしらわれた黒いタキシードの袖がヌッと現れて、アーチャの視界を完全に遮った。最初、アーチャは何が起こったのか理解できなかったが、次の瞬間、その謎はすべて解けた。

「初めまして、マダム。私の名はファージニアス。是非、あなたの名前をお伺いしたい」

母親は呆然としていたが、それはほんのわずかな間だった。

「私はマニカ。初めまして、ファージニアスさん」

「マニカさん、クペルマ硬貨型チョコレートなどいかがでしょう？あなたのお口に合うこと、請け合いですよ」

「まあ、ありがとう！　後で子供たちと一緒にいただくわね！」

手慣れた感じでチョコレートを受け取り、女神のような微笑みを覗かせるマニカの姿に、アーチャは改めて感心させられた。

「人目のつかなそうなどこかいい場所、あります？」

食事に誘おうとするファージニアスを徹底的に無視しながら、アーチャは急き込んで聞いた。

「あるわよ」

マニカはウインクして、左手に持っていた古汚い地図を広げた。

「ここから遥か南、国境付近にあるシシーラという街を知ってる？　ここは二十年ほど前に滅びた街なんだけど、近年から少しずつ人口が増えてきて、再建されつつある街なの。利点は、まだ廃墟が多く残されてるってことね。人目につきにくいし、もし軍隊が押し寄せても、身を隠す所があるから安心よ……絶対とは言えないけどね。それと……」

マニカがジャケットの胸ポケットから取り出したのは色あせた写真だった。一人の女性が、誘惑するような甘い笑顔でアーチャを見つめている。

「数ヶ月前まで同じ職場にいた後輩なの。今はシシーラの酒場で働いてて、結構うまくやってるみたい。明るくて、しっかり者だから、何か困ったことがあったら彼女を訪ねてみて。裏に住所と名前が書いてあるわ」

「色々とありがとう……きっとまた戻って来るよ」

「きっとじゃなくて、絶対って言ってよ！」

母親の後ろに隠れたまま、トナの涙声がそう言った。泣き顔を見られたくないらしい。

「なあ、トナ。俺たち、戦場へ行くんじゃないんだぜ？　絶対にまた会えるさ」

「あっちに着いたら、すぐに手紙を送ってね。あたしも、捜索隊って奴らの行動を監視して、近況を書いて送るから。郵便の配達がやってればいいんだけど……。にい、シャヌのこと、絶対に守ってよ！」

トナとは反対に、カエマは飛びっきりの笑顔だった。

「もし何かあっても、俺はもうくじけたりしない。シャヌを助けるために全力を尽くすって、英雄に誓ったんだ……本物の英雄にね」

「あら……それ……」

マニカの目はアーチャの胸元に釘付けになっていた。その視線の先には確かに、ジャーニスから受け取った銅製のくたびれた懐中時計があった。

「時計がどうかした？」

「ううん、何でもない。それじゃ、みんな、気を付けてね」

やがて、車はどこかノロノロと走り出し（きっと運転手であるファージニアスが別れ惜しみしているのだろうと、アーチャはそう悟った）、グレア・レヴを後にした。町を背に丘を登り、トワゴとは反対の道を進み、その先に広がる広大な大地を視野に入れて、車は走り続けた。

遥か南、シシーラという街を目指して……。

十章　酒場の乙女　1

カーラジオから聞こえてくる歌声は、ウェノア・エルマータのものだった。アーチャは“流行の音楽”なんてものに全く無関心だったが、彼女のことはよく知っていた。というのも、ヴァークスが車を運転する時に、いつもラジオから流れていたのがウェノアの歌だった。

「この歌声を耳にしてウェノアの虜にならない者など、この世にいるはずがありません！」

ひと気のない綺麗な砂浜を右手に車を走らせながら、ファージニアスが爽快に言い放った。アーチャは素っ気ない声で返事をし、ルームミラーに映るシャヌをチラと見た。陽光を受けてキラキラと光り輝く砂浜に見惚れるシャヌの横顔は、どこか楽しげで、どこか悲しげだった。

シャヌのいたいけな視線とアーチャの複雑な思いが、ミラーの中で混ざり合った。

「アーチャ、顔色悪いよ？」

そう気遣ってくれるシャヌには、なぜアーチャの顔色が優れないのか、少しだけ分かっていたようだった。

「昨夜のことで、どうしても聞きたいことがあるんだ」

今度は直接シャヌの瞳を見つめながら、アーチャは言った。シャヌの表情は強張ったが、アーチャはそれでもためらわなかった。

「小人の三人に魔力を与えたのはシャヌなのかい？　あいつら、俺たちを追いまわした挙句、骨だけ残して死んじまった。シャヌも見ただろう？　そのことについて知りたいんだ」

今のシャヌには少し酷だということを承知した上での質問だった……だが、それはアーチャの杞憂だった。

「彼女たちに魔力を宿す源になったのは、間違いなくこの翼よ」

わずかな迷いもかいま見せないシャヌの姿に、アーチャたちは驚きを隠せなかった。大海原をバックに、車はいつの間にか山道を走り始めていた。

「翼の羽を手に持つだけでその身に魔力が宿るということを、あの三人は知っていた。だけど、まさか死んでしまうなんて……想像もしてなかった」

「強力な魔の力に耐えられなかったんだろうな、きっと」

アンジが推測を述べた。そのかたわらで、アーチャは低くうなっていた。

「でも分からないなあ。どうして小人たちは魔力を手に入れたかったんだろう？」

「そりゃ、便利だからだろ」

急なＳ字カーブで体を左右に揺らしながら、アンジは当然のことを指摘した。

「けど、あいつらはずっと前から魔の力を忌み嫌ってた……理由は分からないけど」

岸壁に体当たりする荒波がうねりを上げて音を響かせた。シャヌはまた海の方へ視線を戻した。

「私、海を見るのは初めてなの。……何だか、とっても不思議ね」

「不思議？　海がですか？」

鮮やかなハンドルさばきを披露しながら、ファージニアスがさも愉快そうに聞いた。

「海、空、山、森、大地……みんな同じ世界で、共に助け合って生きているのに、どうしてそこに住む私たちは戦争ばかりを繰り返すんだろう……なぜ平和を望もうとしないんだろうって、ずっと不思議に思ってた」

おりしも、ラジオの中のウェノア・エルマータが次の歌を歌うところだった。調子外れなノイズと重なるようにして、和やかな前奏が流れ始める。

「平和を愛するウェノアが自ら作詞作曲したのがこの歌です。しかし、争いの絶えない国々に向かって呼びかけるこの歌は、戦争国家への反逆を象徴し、示唆させるものとして、当時、世間からは多くの非難を浴びました」

「当時って？」

アーチャはとっさに聞いてみた。だが、ファージニアスはアーチ

ャと目を合わすこととさえせず、鼻歌で白々しくごまかした。

「いい歌ね」

シャヌがアーチャの気を逸らしてくれたことは、ファージニアスを助ける結果となった。

「シャヌは歌に興味ある？」

アーチャは座席から身を乗り出して揚々と聞いてみたが、シャヌは聞いていなかった。目を閉じ、安らぐような微笑みで心から歌に聞き惚れている。

「私にも歌えるかな」

シャヌがポツリと呟いたのを、アーチャは聞き逃さなかった。

「歌えるさ！　シャヌの声、すっごく綺麗だもん。練習すれば絶対うまくなるよ！」

「身も心も救われるような歌じゃ」

その傍らでじいさんが言うと、アンジがすぐ脇でおおげさに驚いてみせた。

「ほぉ！　じいさんにもこの歌の良さが分かるのか。俺にはどれも同じに聞こえるがな」

ファージニアスが高らかに、それでいて優雅に笑った。

「ヘイ、アンジ！　君にはユーモアが足りませんね」

“ユーモア”の意味を理解しようとするアンジを無視して、ファージニアスは話し続けた。

「内なる自分を大きく開放し、広い心で物事を受け止めるのです。音楽もその一つとして捉えれば、おのずと答えは見えてくるでしょう！」

アンジは不機嫌そうに鼻を鳴らして、ファージニアスをジロっと睨んだ。

「イクシム族は本を読んでも泣かないし、音楽に心を奪われることもない。なぜなら、ヒト族が作り出した代物に対し、俺たちはそれらを拒み続けてきたからだ。イクシム族は、あんたたちとは違うんだぜ？」

十章　酒場の乙女　2

オレンジの斜光が地平線の彼方から伸び、西の空が淡い紫色に染まる頃、アーチャたちはようやく目的地である『シシーラ』に到着した。街のすぐ手前は廃墟となった工場ばかりが建ち並ぶ長い直線道路で、ひと気もまるでなかったのだが、やはりマニカの言うとおり、このシシーラという街は徐々に再建されつつある街のようだった。

大きな通りでは人々が行き交い、数台の自動車がその脇を過ぎ去って行く。建物は改築されたものが多く、外壁も真新しい石造りのものが多数を占めていたが、窓がすべて割られたビルが点在していたり、廃材置き場に使われたりしている土地も少なくはなかった。街灯はあるが、そのどれにも明かりは灯っていない。

街の外れに流れる小川のすぐ脇を、自動車『カメレオン』はアーチャたちを乗せて低速で走り続けていた。突然の砂利道に揺られ、夕空によく映える廃墟をぼんやり眺めていると、アーチャはふとスラムのことを思い出した。明日やって来るという捜索隊が、町の住民に危害を加えなければいいのだが……。

「アーチャ！」

ファージニアスとアンジが同時にアーチャを呼んだ。アーチャは驚いて顔を上げた。

「え、何？」

アーチャは空っぽな声で聞いた。

「『何？』じゃねえよ。どこに身を隠すのかって、さっきから聞い

てるだろ」

アンジがイライラと息巻いた。

それからは、車から降りての探索となった。長期滞在にふさわしい廃墟を見つけ出そうと、アーチャとアンジは張り切って車を飛び出したが（近辺を見張らなければいけないからと、ファージニアスはかたくなに車から離れようとしなかった）、夜の闇が迫りつつあるシシーラの街では、それが無謀な行いだとすぐに分かった。周囲には一点の明かりさえなく、闇と静寂に包まれた廃墟の中に足を踏み入れるのはそれなりに危険が伴った。埃や瓦礫で覆われる床上は足取りもおぼつかなく、壁の至る所から突き出した錆びまみれの鉄骨が、闇の中で不気味なシルエットを浮かび上がらせている。

「ここもダメだな。見ろよ、床が抜け落ちてる」

穴を飛び越え、出口へと向かいながら、アーチャは途方に暮れるような声色でアンジに話しかけた。だが、アンジはその場から動こうとしなかった。

「いや、ここは今までで一番いい。地下に倉庫もあるし、窓が多くて外の状況を伺いやすい」

いきなり何を言い出すのだろうかと、すっかり闇の中に溶け込んでしまったアンジの後ろ姿を、アーチャはまじまじと見た。そして、ふと思い出した。

「そういえば、イクシム族って生き物は廃墟を好んで生活してるんだっけ？」

アンジの小さな二つの瞳が、暗闇からヌッと現れてアーチャを睨

んだ。

「他の種族を避けて生きてるだけだ。まあ少なくとも、あのアジトよりは快適だと思うけどな」

アーチャとアンジは、次の廃墟を最後にしようということで同意した。外はもうとっくに夜のとばりに包み込まれていたのだ。

「この屋敷がネズミでも寄り付かないようなオンボロだったら、それは違った意味で幸運だぞ」

開きかけの扉から体を半分中に滑り込ませながら、アーチャはアンジに話しかけた。

「もしここで寝ることになっても、耳をかじられずに済むからね」

しかし、屋敷の中は暗がりでも分かるほど綺麗なものだった。これまでに数件の廃墟を見て回って来たので、二人はすぐにそう気付くことができたのだ。しかも、二人が踏み込んだその部屋からは、何やら人の気配を感る……。

「今、何か聞こえなかった?」

アーチャの声は自然と小さくなっていた。誰かの囁く声が、部屋の片隅から聞こえた気がした。

「誰かいるのか?」

アンジが闇雲に声を張り上げた。次に聞こえたのは、硬い何かがこすれ合うようなギシギシという音だった。膝が震え始めたことに

気付かぬまま、アーチャは暗闇に向かって目を凝らし、神経を研ぎ澄ませていた。だが、その必要はすぐになくなった。

十章　酒場の乙女　3

部屋に明かりが灯った。

「やはりそうか」

聞き覚えのあるガラガラという声がそう言ったかと思うと、アーチャとアンジの前に立っていたのは、四人のイクシム族だった。全員がこちらを見つめており、怯えるような表情と興味深げな瞳がランプの明かりに当たってオレンジ色に照らし出されている。アーチャは叫びそうになったが、ぐっとこらえた。

「やはりイクシム。そうか……まだ残っていたのか」

天井に頭をこすらんばかりの大柄な男が、ランプを掲げ、アンジの顔を覗き込みながらそう言った。

「ですが父上、ここではあまり見かけない顔です」

恐々と顔を見合わせるアーチャとアンジを気にすることなく、イクシム族の会話は続けられた。今発言したのは、二番目に体格の大きい男だ。きっとこの大男の息子だろう。

「危険な方ではなさそうね」

女の声が言った。アーチャはイクシム族の女性と対面するのは初めてだった。女性は男性と比べるとやや細身で、縮れた髪の毛が頭皮を覆っており、顔は男性と違って朗らかで優しみのある表情だ。だがやはり、イクシム族特有のゴツゴツとした地肌はそっくりその

ままだ。

「母上、ヒト族もいます」

トナと同じくらい小柄な子が、アーチャを指差してハキハキとそう言った。イクシム族の子供を見るのも、これが初めてのことだった。

「あ……あんたたち、ここに住んでるのか？」

思いも寄らぬ出来事に、アンジの声は動揺を隠しきれていなかった。父上と呼ばれる大男が、ランプを手にしたまま二人に近寄った。

「そうだ。何十年も前から、私たちはシシーラに住んでいる」

父親は鋭い牙を剥き出しにしてそう言った。母親がその脇から詰め寄った。

「けど、最近になってヒト族が戻り始めた。南のレウェイラ国の国民が、グレイクレイ国の支配政治から逃れるために亡命してきたの」

「そうして僕たちイクシム族は、居場所を失っていった」

父親の後ろから、せがれの切ない声が聞こえてきた。

「“僕たち”って……まだ他にも仲間がいたってこと？」

アーチャが聞くと、四人は躊躇したように顔を背けた。ヒト族をないがしろにしようとする他種族の態度はいつ見ても不快なものだと、アーチャは思った。

だがしばらくして、屈託そうに母親が答えた。

「私たちは誰もやって来ないような廃墟を探し出して、そこで暮らさなければいけない。イクシム族は他種族との共存に適応しきれないから」

「そうして、仲間たちはこの街を去って行った」

間もなく、父親が言葉を引き継いだ。

「我々は最後まで彼らを引き止めたが、ダメだった。ヒト族と環境を共にしなければいけない現実を、彼らは受け止めようとしなかったのだ」

父親は天井のフックにランプを引っ掛け、部屋全体が明るくなるように工夫した。薄明るいランプの光に照らし出された父親の表情は、悲哀に満ちているように思えた。

「一時期は、我々もここを離れようと意を決したこともあった。だが、イクシム族は希望だけでは生きられない。ヒト族と違って、道理に背くようなことをしないからだ。道理に背いてまで、生きようとしないからだ」

アーチャの苛立ちは一秒毎に高まっていったが、その怒りをこの場で爆発させるようなことはしなかった。この岩山のような大男に立ち向かったところで、返り討ちに遭うことは目に見えているからだ。おそらく、生きては帰れないだろう。

男は更に続けた。

「同種族で争い、命を奪い合うことの何が生き様か？　私には分か

らぬ。無駄な争いに巻き込まれるくらいなら、ここでじっとしていた方が良策だ。この街なら軍の目も届きにくい。人づてに聞いた、海底のドレイ収容所という所に連れて行かれることもなかろう」

「だったら、何もするな」

アーチャのその乱暴な言葉には、積み上げられたイライラをちょっとずつ開放させるという小粋な意図があった。しかもそれは、一家全員が一斉にアーチャを睨みつけた瞬間でもあった。

「誰かが犠牲になってから、後悔ってことをすればいい」

四つの視線をかいくぐりながら、アーチャは最後まで言い切った。

「我々は、喧嘩をするためにあなた方の前に現れたのではない」

父親はあくまでも冷静だった。

「ここが我々に残された最後の場所だということを分かってほしい。あなた方二人が廃墟を巡る姿を、我々は先ほどから確認していた。何か理由があるのかもしれないが、どうかこの周囲だけには近づかないでくれ」

父親は二人にというより、アーチャにだけそう言い聞かせているようだった。

「分かった」

アーチャは素直に、しかしすげなく応じた。

「もう行こう、アンジ。行く宛てならまだある」

一家を見つめたまま身じろぎもしないアンジの背中をポンと叩きながら、アーチャは振り返ることも、別れの挨拶も交わすことなく、その屋敷から足早に出て行った。

しばらくすると、アンジも中から出てきた。

「ずいぶん遅かったな。あいつらと話してたのか？」

「ああ。ちょっとな」

ファージニアスたちの待機している車に辿り着く頃には、アーチャの機嫌はますます悪くなっていた。ヒト族を毛嫌いするような連中とアンジが仲良くするなんて、アーチャには許せなかったのだ。だが、それは仕方のない話だった。アンジが誰と会話しようがアーチャにその権限はないわけで、ましてや相手が同じ血の流れる種族なら、それはアーチャの横暴に過ぎない。

「どこかいい隠れ場所はありましたか？」

期待するような爛々とした瞳でファージニアスが聞いた。アーチャはそっぽを向いた。

「全然ダメだね。ほんと、廃墟ってのは全然ダメ」

アンジは言い返そうと口を開いたが、すぐに気を改めた。その直前にシャヌが割って入ったのだ。

「あの家で何かあったの？　他と比べてずいぶん長くいたみたいだし……」

シャヌの心配そうな表情を見ていると、アーチャは、一人で気を荒立てている自分を恥ずかしく思うようになった。そして、詫びるような重たい口調で、屋敷の中で起こったことを一から話し始めた。

「アーチャが怒るのも無理ないさ」

すべて話し終えた時、アンジが真っ先にそう言った。

「だがな、あれが俺たちの考え方だ。イクシム族は良いことも悪いこともしない。ただじっとしていたいんだ」

「アンジもそうなの？」

シャヌが遠慮がちに尋ねると、アンジは腕を組んで考えに耽り込んだ。

「そうだな……俺だって本当は、同じイクシムの血が通う仲間たちと一緒にいたい。将軍のザイナ・ドロや、妙ちくりんのジェッキンゲン・トーバノアに敵対意識を燃やすなんて無謀なことだし、やっと戻ってきた自由を台無しにしたくない……」

「もうやめないか、こんな話」

アーチャがルームミラーを覗き込みながら全員にそう促した。みんな押し黙ったが、その一言で空気が重くなったのも確かだった。

「それよりさ！　カエマの母さんに教えてもらった、この女の人を訪ねてみないか？」

場の雰囲気を和ませようと、アーチャはわざと明るい声を出した。全員の目線がアーチャの持っている一枚の写真に注がれた。

「確か、シシーラの酒場で働いているのよね！」

アーチャの空元気に便乗するような調子でシャヌが言った。

「そういえば、裏に名前と住所が書いてあるって言っていましたよね？」

ファージニアスが言った。アーチャは写真を裏返し、下部に書かれているマニカの字を見つけ、読み上げた。

「名前はフィン・ラターシア」

「名前はフィン・ラターシア？」

アンジのオウム返しだ。

「どっかで聞いたことあるぞ、その名前」

アンジが段々と興奮し始めた。そう言われてみれば確かに、アーチャにも心当たりがある。

「私にはまるで思い当たる節がないですね！」

ファージニアスは両手を掲げて首を振った。

「それに、一度お目にかかった事実があったとしても、そんな美しい女性を私が忘れるはずないでしょう！」

「私も知らないけど……おじいさんは？」

シャヌは眠たそうに目を瞬かせるじいさんに写真を手渡した。写真を見る前も、見た後も、じいさんの表情にはしわの数さえ変化は見られなかった。

「この顔は知らんが、フィンという名前なら記憶にある。確か……アクアマリンから脱走した唯一の人……」

アーチャは驚愕しきった表情でじいさんを見た。アンジも、アーチャと似たり寄ったりな顔つきだ。

「まさか」

アーチャは信じられないような真実をまっすぐに受け入れることができなかった。

「ジャーニスが言ってた……一年以上前、フィンっていう同じルーティー族の女性がアクアマリンを脱出したって……ジャーニスはフィンの行動に励まされたって……まさか、あのフィン？」

「アーチャ、目の付け所が違うぞ」

アンジは平静を保っているつもりでいたが、その顔は興奮で輝いていた。

「何がすごいって、お前、じいさんがその話を知ってたことだろ。ジャーニスがフィンのことを語ったその時、じいさんはどこにいた？　それに、じいさんは一度だってジャーニスに会ったことがない

んだ」

アーチャは背中がぞくぞくした。今までじいさんには驚かされっぱなしだったが、ここまでくるともう手に負えない。

「と、とにかく……ファージニアス、この住所まで向かってくれないか？　詳しいことはその途中で話すよ」

十章　酒場の乙女　4

酒場の西にある大きな空き地に到着したのは、それから五分ほど後のことだった。周囲は閑散としており、雑草の生い茂る荒地には枯れ木さえ生えていない。フィンが働いていると思われる酒場の中からは、炎のゆらめくような煌々とした明かりが漏れていて、それは中に人がいることを確信させる決定的な要素となった。

「まず、俺が一人で行って様子を見てくる」

「いいえ、私もお供しましょう」

アーチャが提案すると、すぐさまファージニアスが反論した。アーチャは、それは嫌だなと思った。写真を見る限り、フィンはファージニアス好みの美女だ。今までの経験から、ファージニアスがじっとおとなしくしているとは思えない。

「えっと……」

アーチャは言い訳するのに頭を働かせた。

「いきなり大勢で押しかけると目立っちまうだろ？　事情を話して、俺たちに手を貸してくれそうだったら、すぐ迎えに来るよ」

なるべく早口で説明し、逃げるようにしてその場から立ち去ると、ファージニアスはすっかり観念したようだった。

「あいつ、どう見たって未成年じゃねえか」

アーチャの後ろ姿に向かってアンジが呟いた。

「ファージニアスさん、やっぱりアーチャと一緒に行ってあげて。おねがい」

アンジの言葉に不安を覚えたシャヌが、運転席のファージニアスに向かってそう懇願した。ファージニアスは笑顔でうなずき、車から降りた。

「アーチャを思うシャヌ嬢の気持ちを、私、決して無駄には致しません！」

新兵さながら、ファージニアスは堂々たる行進でアーチャの後を追った。ファージニアスがアーチャに追いついたのは、アーチャが扉の取っ手に手をかけたその時だった。

「どうした？」

腕を前後に振って大股で近づいてくるファージニアスに向かって、アーチャがうんざりした口調で尋ねた。

「アーチャ一人では心もとない。そう察したわけですね、ええ」

ファージニアスが何を考えているのか、アーチャには理解することができなかった。ただ確かなのは、ファージニアスの表情はいつになく真剣そのものたということだ。次は、アーチャが観念する番だった。

「分かった、二人で会おう。……でも、邪魔だけはしないでくれよ」

扉を押し開けると、その先はもう暖炉の炎に照らされた店内だった。レンガ造りの壁には戦場で戦う兵士たちの絵画が飾られ、張り合わせたような床板が小さな店内に敷かれている。店の奥にはバーカウンターと丸椅子があり、山高帽をかぶった座高の高い男が、カウンター越しに若いバーテンダーと会話している。優しい木の香りと、抱擁されるような落ち着く温もりがそこにあった。

やがて、一人の女性がアーチャたちの前にやって来た。写真と同じ顔……フィンに間違いない。

「いらっしゃい！　席に案内するわね……」

「あなた、フィン・ラターシアさんですよね？」

アーチャは確信を抱きつつも聞いてみた。フィンの足がその場でピタリと止まった。

「誰なの？」

アーチャを振り向くフィンの顔からは、笑顔が抹殺されていた。振り向いたはずみで、金褐色のカールした髪の毛が一時的にその強張った顔を覆い隠した。

「俺はアーチャ。北のグレア・レヴからやって来た……グレイクレイの国軍から逃れるために」

その瞬間、フィンはアーチャから何かを感じ取ったに違いない。自分の身に災いするような、不吉な何かを。

フィンは何も答えず、赤いドレスをなびかせて部屋の奥のバーカウンターまで歩いて行った。アーチャとファージニアスは黙ってその様子を窺っていた。

「レッジ」

客と楽しそうに会話していたバーテンダーの男に向かって、フィンは重々しく呼びかけた。二人はそのまま店の裏へと引っ込み、すぐに戻ってきた。男は客の方へ、フィンはアーチャたちの方へやって来た。

「席へどうぞ」

フィンの顔に笑顔が戻っていた。アーチャたちが席へ案内されると、それとすれ違うようにして山高帽の客が帰っていった。というより、帰らされたようだった。

「フィン、鍵をしめて。今日はもう店じまいだ」

客が店を出て行くや否や、バーテンダーの男が言った。扉に鍵をかけたフィンが戻ってきて、カウンターの向こう側に立って男と並んだ。

「私のことをフィンと呼ぶのは、昔の仲間だけ。ここではジュリーって偽名を使ってる……あなた方と同じ、軍から逃れるためにね。この人はレッジ。ここで一緒に働いてるの。昔からの同僚よ」

「ただの雑談なら客として来ればいい」

レッジが言った。いつの間にか葉巻を咥え、いつの間にかマッチに火をつけていた。

「お前らは誰だ？　用件は？　なぜフィンを訪ねた？」

アーチャはレッジのひげ面とフィンの緊張混じりの笑顔を交互に見つめた。

「俺はアーチャ・ルーイェンで、こっちがファージニアス」

「初めまして、天女のように美しき酒場の乙女。クペルマ硬貨型チョコレートなどいかがでしょう？　あなたのお口に合うこと、請け合いですよ」

アーチャは、予想通りの展開に物も言えなかった。ファージニアスがフィンにチョコレートを手渡す光景を、ただ呆れ顔で見つめていた。

十章　酒場の乙女　5

彼なりの挨拶が無事に終わると、アーチャはやっと用件を伝えることができた。

「仲間の一人が軍に追われてるんだ。俺はその子をどうしても守らなきゃいけない。そのためには、どこか身を隠すところが必要なんだ。北のグレア・レヴというスラムに住んでるマニカ・アグシールに、あなたのことを聞いた。だからここを訪ねた」

「マニカさんが？　そう……」

フィンはカウンターの隅に重ね置きされていたガラス製の灰皿の一つを手に取り、それをレッジの手元に置いた。

「マニカさんは、私のことを何も知らなかったものね」

どこか浮かない顔でフィンは言った。

「私が軍に追われていること、そのために都を捨ててここまで逃げて来たこと……そのことを知っていたら、わざわざ私のことを教えたりしなかったはずよ」

レッジはそんなフィンの事情をすべて承知のようで、彼女が語り続けるかたわら、何でもないような表情で葉巻をくゆらせるばかりだった。

この二人にならすべてを話せる。アーチャはそう思った。

「海底のドレイ収容所、アクアマリンをご存知ですよね？」

フィンの顔が再び強張ったのを、アーチャはしっかりと見た。強面だったレッジでさえ葉巻を咥え忘れた。

「心配しないで」

アーチャはすぐに言い添えた。

「別に、あなたを連れ戻しに来たんじゃない。俺もアクアマリンから脱走したんだ。仲間と一緒に……つい二日前のことだ」

フィンとレッジの表情がより一層険しくなったので、アーチャは焦った。

「どうしてそのことを?」

フィンが物静かに尋ねた。

「ジャーニスから聞いたんだ。あなたの同僚だった、あのジャーニスに」

「ええ、覚えてるわ……でも、あの時のことはもう二度と思い出したくない」

フィンの声は沈みきっていた。

「ジャーニスはいつも私のことを気遣ってくれた……勇敢で、誠実で、どんな時だってくじけたりしなかった」

「……ジャーニスも一緒に脱出できたのか?」

レッジが聞いた。ジャーニスのことを知っているような口ぶりだった。

「いや……ジャーニスは……その……死んだんだ」

アーチャは躊躇しながらも最後まで言い切った。二人の顔は動揺の色を隠しきれなかった。

「ジャーニスが死んだ？　あいつが？」

レッジはカウンターから身を乗り出して叫ぶように聞いた。アーチャは小刻みにうなずき、レッジの赤くなった顔を見た。

「コッファとジクスはどうした？　あの三人はいつも一緒だったはずだ」

アーチャは間近に迫ったレッジの目をしっかり直視し、首を横に振った。その単調な行動一つで、レッジは全てを悟ったようだった。

「グレイクレイ国軍め！」

レッジは握り締めた拳をカウンターの上に振り下ろした。その振動で客が残していった空のグラスが倒れ、灰皿が音を立てて跳ねた。

「ジャーニスには……あいつには家族がいた。今もあいつの帰りを待っているはずだ……」

レッジが絶望しているその脇で、フィンが深々とため息をついた。

「人を人として扱わず、自分たちの利益になることならどんな卑劣な行為だって繰り返す……それが国軍のやり方よ。そうして、私たちのような混血種が生まれ、悲劇が始まった……」

「あなたもルーティー族？」

レッジに聞いてみると、怒りで血走った二つの目がアーチャを睨んだ。

「そうだ。人の手によって作られた汚らわしいルーティー族だ。俺たちは、ただ戦争のために作られ、今をこうして生きているんだ。軍に見つからないよう、ひっそりとな」

「なぜ軍から逃げなければいけないのか……そう聞きたいんでしょう？」

アーチャの質問したそうな表情を敏感に読み取ったのはフィンだった。アーチャはこっくりとうなずいた。

「過酷な労働、無視される人権。この二つが揃えば理由なんてそれで十分。だけどそれは、私たちが軍から逃げてる理由にしか過ぎない。軍がなぜ私を探すのか……それは、私が軍内部の極秘情報を知っているからなの。誰にも言えない、とんでもない情報をね」

アーチャは生唾を飲み込んだ。ジャーニスも軍の内部情報については詳しかったが、フィンの語る『極秘情報』はそのどれをも上回る代物らしい。

「そんな私たちにできることといったら……」

レッジの肩に手を添えながら、フィンがゆっくりと言った。

「この店の地下にある空き部屋を、あなたたちに貸してあげられることくらいかしらね。それ以外のことは、自分たちで何とかするしかないわ」

アーチャの顔に自然と笑みが広がった。

「ここの地下を？　本当に？　ありがとう！」

思わず立ち上がりながらアーチャは礼を言った。

「アーチャ……だったか？」

レッジが葉巻の先をアーチャに向けながら、たどたどしく話し掛けてきた。

「他にもまだ仲間がいるんだろ？　この街は治安が悪い。夜に外をうろつくのは危険だぞ」

アーチャはレッジの視線の先を見た。窓の向こうに、こちらを心配そうに見つめる三つの顔があった。シャヌにアンジ、それにじいさんだ。心配して様子を見に来てくれたらしい。

「誰なの？　アーチャが守らなきゃいけない子って。今度ゆっくり紹介してよね」

フィンはそう言って、窓の向こうにいる三人を店の中に招き入れた。

この街に来て以来、アーチャは初めて心からほっとすることがで

きた。

アーチャたちはその夜のうちに酒場の地下へと招かれた。そこは地下というだけあって肌寒かったが、長期滞在において必要なものはすべて揃っていた。二人分の布団に、みんなが囲えるだけの大きなテーブル。小さな厨房は使い古されて朽ちていたが、水も出るしガスも使える。換気扇の調子もバッチリだ。食器にはほこりがかぶっているが、大した問題ではない。浴室も便所も完備されていて、都会の安い宿泊施設と大差なかった。だが唯一の問題は、電気がないということだった。

「水は井戸から供給してるから、使いすぎには注意して。日照りが続くと渇水になったりするから。火の不始末には気をつけて。それと、一世帯辺りで使える電気の量が限られてるから、この地下では換気扇を回すだけで精一杯なの。我慢してね」

フィンは一つ一つの部屋を紹介しながら、アーチャたちにあれこれと注意点を指摘した。最後に辿り着いたのは倉庫のような部屋だった。何にもない空っぽだ。

「ここをよーく見て」

フィンは入り口正面の岩壁を漠然と指差した。アーチャたちは覆い重なるようにして壁を見つめた。

「……あ」

アンジが何かを見つけた。

「取っ手だ」

地下全体がほの暗いせいで、その取っ手を見つけるのはとても容易なことではなかった。だが、確かにそこには小さな窪みがある。

「隠し扉よ。この先には階段があって、建物の裏まで続いてる。もし何かあったら、ここを通って外へ出て。……これを使う時がこなければいいんだけどね」

「フィンさん……色々とありがとう」

アーチャは改まって礼を言った。フィンはクスッと笑った。

「お礼なんて全然いらないよ。だってあたしたち、もう同志じゃないの。ね？」

レッジと店の後片付けをしなければいけないからと、フィンは急ぎ足で階段を上ったが、その途中で振り向きざまに立ち止まった。

「私たち、普段は向かいの家にいるから、何かあったら訪ねて来て。でも、目立つような行動は厳禁だからね。車は一目につきにくい裏に停めておくといいわ。それじゃ、おやすみ」

階段を上っていくフィンの後ろ姿を、アーチャたちは見えなくなるまで見送っていた。今から始まる、地下での生活をしめやかに案じながら。

十一章　美しき罠　1

『みんなへ。
　にい、お手紙ありがとう！　あたしたちも、町のみんなも、何ら変わりはないから心配しないでね。トナは同年代の子供たちとの交流は幼稚すぎるからって、遊び相手がいないの。にいの帰りを誰よりも心待ちにしてるみたい。だから、そんな時は姉のあたしが相手をしてあげるの。でも、あたしがトナにできることといったら、服の袖に手を通すのを手伝ってあげるくらいなんだけど……。
　にいの言うとおり、軍の格好をした捜索隊が6人、すっごく大きな装甲車に乗ってグレア・レヴにやって来たよ。兵士たちはみんな威圧的な態度で、あたしたちはなるべく物陰に隠れて、その様子をじっとうかがってたの。
　リーダーみたいな人がいて、あとの五人は部下だと思う。地図とコンパスを照らし合わせてあちこち動き回ったり、掃除機みたいな大きい機械を使って地面や土の具合を調べてた。本当にシャヌだけが目当てだとしたら、あまりにおかしな行動だと思わない？
　二日経った今でも、捜索隊はグレア・レヴに滞在してる。時々、お得意の巨大な無線機を使って外部と交渉してるみたいよ。軍って組織は、使う物をみんな大きくしなきゃ気が済まないのね、きっと。
　何かあったら早急に手紙を送ってね。あたしも自分なりに頑張ってみるから！
カエマより』

「カエマって、何歳だっけ？」
　手紙を読み終えたアンジが、顔を上げるなりアーチャに聞いた。
「五歳」

アーチャはきっぱりと断言した。

「五歳児の書く手紙かよ、これ」

手紙を恐る恐る折りたたみながらアンジが言った。

「きっと、ものすごく賢い子なのよ」

壊れたラジオに両手をあてがいながら、シャヌがそう言った。それは、アーチャが廃材置き場から拾ってきたものだが（おそらく“拾い物”の目利きにおいて、アーチャの右に出る者はいないだろう）、今、シャヌの魔法でその破損したラジオを復活させようと試みているところだった。自らに宿る魔力をただ恐れ続けていたシャヌだったが、最近では、何か人のために役立てようと自分なりに努力しているようだった。薄暗い地下室でこうして手紙を読めるのも、シャヌが魔法で部屋を明るくしてくれたおかげだった。地下全体は今、発光塗料が壁一面に塗られたかのように明るかった。

だがアーチャはその反面、シャヌに無理強いをさせているようで後ろめたかった。自分からラジオを直したいと進み出たシャヌだが、本当はアーチャたちを気遣っているだけなのかもしれない。

「私なら大丈夫だよ、アーチャ」

修復途中のラジオからアーチャへと向けられたシャヌの眼差しは、自信に溢れた揺るぎないものだった。

「アーチャは、私が無理して魔法を使ってると思ってる……でしょう？」

シャヌの考えは、アーチャの心の的を真ん中から射抜いていた。

「何で分かるの？」

アーチャが不思議に思って尋ねると、シャヌは微かに笑って、またラジオに視線を戻した。

「だって、アーチャの心配事はいつも顔に書いてあるもの」

アーチャは思わず、両手でパチッと頬を覆い隠した。

「アーチャと出会ってからも、私は他人から特別視される珍しい生き物として存在しているんだって、ずっとそう思ってた。でも、グレアさんに言われてから気付いたの。マイラ族であること、魔力が宿っていること……そのすべてを認めてくれるアーチャたちがずっとそばにいてくれる。それは、誰よりも幸せなことなんだって、やっと気付くことができた」

シャヌの手から放たれる青白い光がより強く輝き、ラジオ全体を優しく包み込んだ。

「だから、私はもう魔法を恐れない。みんなに認められたこの力を、生まれ持ったこの力を、もう恐れない」

その時、ラジオのスピーカーからノイズに混じった東部地方の民謡音楽が聞こえてきた。アーチャとシャヌは顔を見合わせ、互いににっこり微笑んだ。

シシーラに滞在してから五日が経った。その間、カエマからは二通の手紙が届いたが、そのどれにも、状況が好ましくなるような兆

候をうかがわせる文章は書き記されていなかった。捜索隊は依然として町に居座り続けているらしく、町の端から端まで入念に何かを調査しているらしかった。

アーチャは、ユイツが言いかけた『捜索隊がやって来るもう一つの理由』が何か関係しているに違いないと確信していた。あのスラム街の地下に宝物が埋まっているとは到底思えないが、軍がこれほどの時間を費やして街を調査しているところから、何かしらの利益があってのことだろう。

軍が考え出すことなんて昔から不明瞭なことだらけだが、ここにきてスラム街にまで手を伸ばすところを見ると、『ザイナ・ドロ将軍の頭もとうとう老衰でいかれ始めたらしい』という根拠のない噂は、誰もが辿り着くべき明瞭な結末といえるだろう。

アンジにしてみれば、そんな世間の不安の種なんかどこ吹く風だ。というのも、アンジはここ最近、朝から夕方まで外出していることが多かった。行き先は告げないが（いつもヘタな理由を残して出て行ってしまう）、アンジを尾行しなくとも、アーチャにはその行き先がどこなのか言い当てられる自信があった。

「あの家族の住んでる屋敷を訪ねてるのさ。間違いないね」

残り少ない食料によってまかなわれたシャヌの手料理で、胃の中を満腹感と幸福感でいっぱいにしながら、アーチャは自信たっぷりにそう言った。それは、アンジが店の裏口から出て行った直後のことだった。

「きっと嬉しいのよ。同じ仲間に巡り会えたんだもの」

ミルクを温めていたシャヌが、アーチャの荒立った気を落ち着かせるような優しい口調でそう言った。この数日の間、あのイクシム一家を話題にすることが幾度かあったが、その度にアーチャの機嫌

はそこなわれてきた。だが、そのことを話のネタとして持ち掛けるのは常にアーチャで定着していたのもまた事実だ。

「でも、仲間だったらこんな近くにいるじゃないか」

「そういうのとは、またちょっと違うんじゃないかな？　……お代わりする？」

アーチャは仏頂面のままシャヌに皿を手渡した。皿いっぱいにカボチャスープが注がれて戻ってくると、アーチャは少しだけ気分を良くして、右斜め向かいで機械的な動きを繰り返しながらシチューを飲み続けるじいさんに向かって、イタズラっぽく笑ってみせた。

「おじいさん、おいしい？」

じいさんは大きく見開かれたままの目を瞬かせた。

「わしは昔から野菜が大好きじゃった」

「それは前に聞いたよ。ちなみに、俺も野菜は大好きさ」

柔らかくなったカボチャをスプーンの背で潰した後、じいさんはもう一度アーチャを見た。

「病気にならないための秘訣は、レタスの葉を布団に、大根を枕にして眠ることじゃ」

それを聞いてアーチャはすこぶる驚き、次には、息が続かなくなるほどの笑いの波が押し寄せてきた。

「おっかしいなあ」

笑いをこらえながらアーチャが言った。

「その秘訣は誰にも教えていないはずなんだけど、何で知ってるの？」

その時、誰かの階段を下りてくる足音が聞こえてきた。間もなくして、アーチャたちのいるキッチンにファージニアスがさっそうと姿を現した。夢見るような笑顔だ。

十一章　美しき罠　2

「ワーオ！　嗅覚を誘惑する甘いカボチャの香りの出所は、やはりここでしたか！」

ファージニアスはいつも以上に上機嫌だった。というより、新たな朝を迎えるたびに段々と気分が高揚しているようだった。それは例えるなら、バースデイパーティーを指折り数えて心待ちにする子供を描き表したような、とても奇妙なものだ。

「まるで育ち過ぎた幼児だな」

鼻歌混じりで席に着くファージニアスを眺めながら、アーチャはボソッと呟いた。

「はい、ミルク」

シャヌは湯気立った熱々のミルクを人数分、テーブルの上に手際よく並べた。アーチャが一番にカップを手に取った。

「うまい！」

舌の先を軽く火傷させながら、アーチャが声を張り上げた。カップを大げさにテーブルの上に置く仕草は、元首領のヴァークスを真似たものだった。

「シャヌって、本当に料理が上手なんだなあ。ピゲ族の作る料理なんか足元にも及ばないよ。だってあいつらときたら、腐りかけの食材だって遠慮なしに鍋の中に放り込むんだもの」

「私ね、ジェッキンゲンの屋敷にいる時、よく厨房に出入りしてたの。なぜか分からないけど、彼、私が料理を作ることに関しては口うるさく言わなかった……だから、ある程度の料理なら私に任せて」

アーチャがラジオから流れてくるニュースに聞き入っていた夕方頃、階段を踏みしめるハイヒールの音が地下全体に響き渡った。アーチャはフィンが来たのだとすぐに分かった。

「こんばんは」

大きな褐色の包みを抱えたまま、フィンが明るく挨拶した。こうしてフィンと向かい合うのは、この街へやって来たあの日以来のことだった。

「ここもずいぶん様変わりしたわね。……あ、これ、差し入れね。今晩みんなで食べて」

包みの中の深皿には、思わず舌鼓を打ちたくなるような豪勢な料理が並べられていた。しかもアーチャの好物ばかりだ。

「他のみんなは？」

部屋にアーチャ一人しかいないことを再確認しながら、フィンが聞いた。

「アンジは外出、ファージニアスは自動車の整備、おじいさんは昼寝、シャヌは隣の部屋で読書してる。この地下の本棚から、面白い

本を見つけたんだって」

空腹感を呼び覚ますような贅沢な料理を穴の開くほど見つめたまま、アーチャは淡々と説明した。

「ねえ、こんなすごい料理、一体どうしたの？」

めったにお目にかかれない豪華絢爛な料理から目を離すなんて、アーチャにとっては一秒たりとも我慢できない行為だったが、それではこの料理を持ってきてくれたフィンに失礼だ。アーチャは渋々と料理からフィンに視線を移した。

「色々あってね、これはそのお祝い。レッジと二人で用意したのよ。冷めちゃうとおいしくないから、早いうちに食べてね……あ、ダメダメ！」

つまみ食いしようとするアーチャの手をパシッと軽く叩きながら、フィンがたしなめた。アーチャはバツの悪そうな笑顔で手を引っ込めた。

「これはみんなで食べなきゃ。お祝い事なんだから、ちゃんと守らなきゃダメだからね。絶対よ！」

こんなご馳走を目の前にただよだれをすすっているだけなんて、それは、アーチャにしてみれば処刑宣告も同然の現実だった。

「分かった……守るよ」

アーチャは脱獄囚にでもなったような気分で了承した。

フィンが地下室を去った直後、アーチャは我慢できずに……シャ

ヌのいる部屋へと一目散に駆け込んだ。焼けた肉の食欲をそそるような香りが充満するあの部屋にいると、フィンとの約束をものの一分で破ってしまいそうで怖かった。

「フィンさんが来てたの？　声が聞こえたけど……大丈夫？」

シャヌは読みかけの本を机の上に置き、妙にそわそわしているアーチャを不思議に思いながらそう聞いた。アーチャはフィンとのやり取りをかいつまんで説明し、もうそれ以上、料理のことを思い出さないようにした。

「でも、みんなで食べた方がきっとおいしいよ。せっかくのご馳走なんだから、みんなの帰りを待たなきゃ」

シャヌはずばり指摘した。

「ファージニアスはともかく、アンジの帰りなんか待ってられないよ。昨夜のあいつを見ただろう？　胃袋をパンパンに膨らませて帰ってきたんだ。きっと今日もそうに決まってる……自業自得さ」

アーチャの子供じみた意見に、シャヌは何も言い返せないでいた。仲の良かったアーチャとアンジの間に、わずかながらのゆがみが生じていることを、シャヌは一早く気付いていたのだ。

十一章　美しき罠　3

「その本……何読んでるの？」

アーチャは強引に話題を変えようと、机の上の本を物々しく指差してそう尋ねた。シャヌは表紙をこちらに向け、口元に微かな笑みを浮かべた。表紙には、金箔の文字で『ヘインの見た世界』と書かれている。

「ヘインの見た世界。おとぎ話よ。魔力を持った人たちが力を合わせて、魔女や海賊たちと戦うの。とても面白くて、今日一日で半分以上も読んじゃった。全部読み終わったら、アーチャにも貸してあげるね」

シャヌが楽しげな弾んだ声で話しかけるその姿を見ているだけで、アーチャの心は自然と癒されていった。嫌なことを忘れさせてくれるシャヌの優しい笑顔がそこにあった。

「人のために何かするって、簡単なことじゃないよね……」

静ひつさを漂わせるシャヌの瞳は、本の背表紙を見つめたままだった。アーチャはただ黙ってうなずいた。

「だけどその人の心の中には、私という記憶がいつまでも残り続けると思うの。そうして初めて、私がこの世界に存在できる理由が生まれる……それが生きた証につながる」

「他人のために尽くすことだけが生きた証だなんて、そんなはずないじゃないか」

シャヌは顔を上げ、アーチャをしっかりと見つめた。だが、その視線は確かにシャヌのものなのに、アーチャにはなぜだかそんな気がしなかった。まったく別の誰かに見つめられているような感覚なのだ。シャヌの眼差しは、かつてないほど力強いものだったに違いない。

シャヌのその瞳は、片時もアーチャから離れようとしなかった。

「海底で出会ったグランモニカが、私とおじいさんに向かってこう言ったのを覚えてる？　あなたたち二人がこの瞬間に存在している理由が、必ずどこかにあるはず……その後にこうも続けたわ……その目的を成し遂げた時、その存在はこの時間の流れから消えてなくなる」

「うん。はっきりと覚えてるよ……だけど、グランモニカの言っていたことが事実だったとしても、シャヌがそうした意志で生きていく理由なんかどこにもないよ。生きた証なんかなくたって、誰もシャヌのことを忘れたりなんかしない。……シャヌが今俺の目の前から消えたとしても……俺はシャヌのことを絶対に忘れない！」

気付くと、アーチャは喉を枯らして叫んでいた。そんなアーチャに向かって、シャヌはただ首を横に振った。

「ねえ、アーチャ。私ね、ずっと考えてたの。この広い世界には今この瞬間も、戦争や病、飢饉に苦しむ人たちが大勢いて、誰かに助けを求めてる。私は、その人たちのために何ができるだろうって、ずっと考えてた。私にできることといったら、明るく励ますことくらいだろうけど……けど、それでもいいの。アーチャが私を助けてくれるように、私も誰かを助けたい。この世界に存在しているってことを、実感したい」

アーチャはシャヌをじっと見つめ続けた。紛れもない、シャヌの決然とした表情が確かにそこにあった。人のために生きることを選んだ、シャヌ自身と一緒に。

「シャヌが願い続ければ、いつかきっとその時が来る」

シャヌの瞳を見つめたまま、アーチャは静かに言った。

「俺たちって人間はさ、意識してなくても、自分の抱く夢や、思想や、目標に向かって、自然と歩み続けてるもんなんだ。そこにあるのが、些細な冒険心や、はかない希望だったとしても、それはどんな人にだってできることなんだ。だから、シャヌがそう決意したなら、いつか辿り着けるはずさ。シャヌに救われる命が、きっとどこかにある……そして、その時を待ってる」

顔をほこらばせるシャヌを見つめながら、アーチャは思った。ただ闇雲に生きるのではなく、意味のある生き方を選んだシャヌの強い志は本当に素晴らしい、と。そしてこうも思った。

『俺はどうしてシャヌを助けたいんだろう?』と。

海底のドレイ収容所で初めてシャヌを見かけた日の夜、長い時間を寝付けずにいたのを今でも鮮明に覚えている。あの時は、シャヌを助けたい一心だった。自分ならシャヌの全てを受け入れることができると、そう自信を持って言えた。

だが、その理由は未だに分からない。ただ純粋にシャヌのことを好いているだけなら、その答えは簡単だ。しかし、本当にそれだけなのだろうか? もっと大切なことを見落としてはいないだろうか? やはり、アーチャにはその答えを導き出すことができなかった。

一時間も過ぎた頃には、じいさんは昼寝から目覚め、ファージニアスは車の整備から戻ってきていた。みんなハラペコな様子だったが、アンジはやはりまだ帰ってこない。

「誰がなんと言おうと、俺はもう食う！　アンジなんか待ってられないよ！」

アーチャはご馳走を目の前に、頑固に言い放った。これにはシャヌも賛同せざるを得なかった。アーチャは、シャヌをも納得させるほど不幸な空腹感に耐え忍んだのだ。ファージニアスがフィンの時と同じような理由で横から口を挟もうが、もうおかまいなしだった。

「アンジの分は残しておけばいいわ。ファージニアスさん、実は私もお腹ペコペコなの」

シャヌの説得は効果絶大だった。ファージニアスは怖い顔でしばらく考え込んだが、それはやがて呆れたような表情へと変わった。

「分かりました。食欲に勝るものは食べ物の他に存在しませんからね……私は上へ行って、お酒を少々もらってきます。みなさんは先に食べていてください」

「ファージニアスの奴、いつの間に食事の権限を握ったんだ?」

階段を上っていく足音に向かっていぶかしげに尋ねながら、アーチャは褐色の美麗な包みをご馳走から完全に取り除いた。その直後、シャヌやじいさんでさえ、テーブルの上に現われた豪勢な料理に思わず目を奪われた。

ファージニアスは戻ってきても料理には手をつけず、ワインばか

り飲んでいた。アーチャはその時、こんがりと焼き上げられたターキーに食らいついていたが、突如、それどころではなくなった。強い睡魔に襲われたのだ。

学校という退屈な所では、健康な人ほど突然眠くなると噂で聞いたことがあるが、アーチャは学校にも通ったことがないし、ましてや食事中に眠るなんてバカな真似を一度だってしたことはなかった。だが、なぜかこの時は眠かった。眠気を拒絶しようとすればするほど視界がグルグルと回転し、その度にまぶたが重くなった。視界が狭まり、漠然とした意思で支えようとする頭は、幾度か前へ後ろへと奇妙な運動を繰り返した。

またそれは、シャヌとじいさんも一緒らしかった。二人は肩を寄せ合って眠りこける始末だったが、アーチャはその姿を見届けても尚、耐え続けた。徐々にその重みを増していくまぶたを、上限を知らない食欲と並外れた根気で抑制していた。

これが何らかの罠であることにアーチャが気付いたのは、顔中に会心の笑みを広げるファージニアスの表情を目にした時だった。だが、その時にはもう手遅れだった。アーチャは、ターキーに噛りつくことさえできないほどの深い眠りに落ちていた。

十一章　美しき罠　4

「もう一人は？　イクシム族が一人いたはずよ」

アーチャは、闇の中で誰かの声を聞いた。

「大した問題にはならないでしょう。彼のような人材は、海底のドレイ収容所に溢れ返るほどいますからね。それに、彼が一人で軍に抵抗するなど、ありえないことです」

ファージニアスの声がそう言ったのを、アーチャは、ぼんやりとした意識の中でもはっきりと耳にすることができた。まだ目の前は暗闇だった。

「一体どういうこと？」

「彼は争いを好まない種族として生まれました。心の中に独立させた概念を抱き、他人の考えを受け入れまいとする頑なな意思を確立させています。まあ、それがイクシム族の性格でもあるんですけどね」

何者かの動き回る音が部屋の中に響き渡った。落ち着きのない足音と、急かすような衣擦れする音が聞こえる。

「軍の到着はいつなんだ？」

男の声が聞いた。

「もうすぐですよ。血眼になって探していた滅びの一族を目の前に

して、ためらう理由など一つもありません」

その言葉を聞いて、アーチャの胸は悔しさでいっぱいになった。ファージニアスを信用してきた自分が、浅はかな考えでフィンを訪ねた自分が……そして何より、シャヌを守りきれなかった自分が、悔しくて、不甲斐なくて、我慢ならなかった。

まだ視界は真っ暗闇なのに、アーチャの目の前には、海底から地上へ脱出してからの日々が走馬灯のように流れていった。そのどれにも、ファージニアスの姿が思い浮かぶというのに、どうして一度でも彼を問い詰めるようなことをしなかったんだろう？　そうすれば、ファージニアスが軍の一味だということに気づけたかも知れない……そうすれば、もっと早いうちから手を打つことができたかもしれない。

今頃になってあれこれ考えても後の祭りであることは明らかだが、アーチャにはどうしても理解できないことが一つだけあった。ファージニアスには今までにも、軍に密告する機会がいくらでもあったはずだ。なぜ今頃になって行動に出る？

アーチャはまぶたをこじ開けるようにして闇を振り払った。そこは、アーチャたちが食事をとっていた部屋だった。テーブルの上を豪華に彩るご馳走の向こう側に、三人分の人影が見受けられる。おそらく、ファージニアスとフィン、レッジに違いない。アーチャは食事の時のように椅子に座っていたが、ここまで行儀よく座っていたことなど生まれてから一度だってありはしなかった。どうやら、手足を縄で縛られているようだ。

アーチャは首をもたげて三人を睨みつけてやった。それに気付いたファージニアスが、ほくそ笑みながら大またで近づいてくる。

「気分はいかがですか、アーチャ？　また海底へと戻される気分は？」

アーチャは怒りを言葉にして発散させようとしたが、唇が無意味に動くだけで、声が出てこなかった。

「おっと、これは失礼……」

ファージニアスはすぐさま訂正した。

「海底ではなくて、処刑台でしたね！」

アーチャは立ち上がって殴りかかろうとしたが、縄のせいで足がもつれ、その場に顔面から倒れこんでしまった。悲痛のうめき声さえ出てこなかった。

「眠り薬と一緒に麻酔薬まで投じたというのに、まだそんなに動けるなんて驚きましたね。あなただけ縄で縛っておいて正解でしたよ」

アーチャは床に倒れこんだまま、椅子に腰掛けて眠り続けるシャヌとじいさんを見た。何とかしてシャヌだけでも遠くへ逃がさなければ……だが、アーチャにはこの状況を打開するための決定的な策を見出せなかった。薬のせいで体中が強張り、脳みその活動も停止寸前だった。

「なあ、ファージニアス。本当にあんたのことを信用しても大丈夫なのか？」

レッジがいかにも疑わしげな口調でそう聞いた。ファージニアスのいつもの快活な声がすぐに答えを出した。

「もちろんですよ。私の計画は最初から最後までバッチリです！ですから、ご安心してブランデーでもお飲みになっていてください。

その間に、善人の心理をもてあそぶ私の美しき罠が完結することでしょう！」

アーチャの呼吸は段々と荒くなり、やがて、五感がほとんど機能しなくなった。

シャヌの名を必死の思いで叫び続け、ファージニアスの高笑いを聞きながら、深い底無しの闇へと、アーチャは真っ逆さまに落ちていった。

十二章　百十八年後の使者　1

アンジが酒場の地下に戻ってきたのは、その出来事から一時間以上も過ぎた後のことだった。地下に足を踏み入れた途端、アンジは言い知れぬ不安を感じ取った。シャヌが魔法で施した部屋の明かりが消えているし、物音一つしない。一瞬、アンジの脳裏には最悪の事態が……出かけている間に全員が国軍に捕まってしまったという恐ろしい事態が思い浮かんだが、そうではなかった。最悪の一歩手前だった。

「じいさん！　どうした？　一体何があった？」

部屋は薄暗く、すべてがぼやけて見えたが、じいさんが冷たい床の上に頬をべったり押し付けて眠っていることや、テーブルと椅子が乱暴に倒され、食べ物が床に散乱していることも、アンジにはすぐに分かった。

いくら声をかけても、じいさんは一向に意識を取り戻さなかった。絶望感の中、アンジは途方に暮れた。

「一体何がどうなって……？」

その時、奥の部屋の方から岩と岩がこすれ合うような重量感のある音が聞こえてきた。アンジの神経は一気に研ぎ澄まされた。そして、音がした方へちょっぴり近づき、そっと耳を傾けた。次に聞こえてきたのは、虚無感のある弱々しい足音だった。こちらに近づいてくる。

「誰だ？」

アンジは地下全体に威勢よく声を響かせた。足音はすぐに止まったが、またおもむろに動き出した。

「待て！　早まるな！　俺だ、レッジだ！」

殴りかかろうと腕を振り上げて前準備していたアンジに向かって、今しがた廊下を歩いてきた足音の主がそう言った。そこにいたのは、確かにレッジだった。

「ああ、あんたか……すまねえ」

アンジはにべもなく謝った。

「お前……アンジって言ったか？　今までどこに行ってた？」

レッジが聞いた。

「どこだっていいじゃねえか。それより、一体ここで何があったんだ？」

アンジも聞いた。

レッジの口調は乱暴だった。

「この状況を尻目に何を冷静になって話せっていうんだ？　まずは俺の質問に答えろ」

「俺の質問に答えろ」

アンジが負けじと怒鳴った。

穏やかで親切な人がこの無愛想な二人の会話を耳にしたら、きっと呆れ顔で嘆息を漏らしたことだろう。そもそも、アンジはルーティー族が嫌いだった。頭の狂った変人だと決め込んだのは遥か昔のことだが、それが決定的なものとなってしまったのは、ジャーニスとの一件があったからだ。

「今日は二回も昼寝しおったか。わしは世界一の幸せ者じゃ」

じいさんがやにわにむくりと起き上がり、出し抜けにそう言った。アンジは声を上げてその場から飛び退いた。

「驚かすな……と、説教したいところだが……」

アンジは踏みとどまった。

「じいさん、俺の質問に答えてもらうぞ。アーチャたちはどこへ行ったんだ？　どうして食べ物と一緒に床で寝てたんだ？　これは軍の仕業なのか？」

アンジはいつもの調子でじいさんを質問攻めにした。だが当の本人は、脳みそにしわを寄せるだけで精一杯だった。

「わしゃ、ただ眠っていただけじゃ。ぐっすりとな」

じいさんは素直に答えを出した。アンジの苛立ちは重なる一方だった。

「まあいいか」

レッジが冷たく言った。

「あんたたちでも、いないよりはマシだ。俺について来てくれ。案内したい所がある」

アンジは動こうとしなかった。部屋を出てから、レッジは振り返った。

「軍を倒し、お前の仲間を助けるための作戦を組み立てようってんだ。俺一人にやらせるつもりか？　一番奥の隠し扉のある部屋まで来い」

レッジは足早にその場を離れたが、アンジは頑固だった。

「行かんのかい？」

じいさんが小声で呼びかけた。アンジはじいさんを直視しようとしなかった。

「行くはずないだろ。アーチャたちが本当に軍に捕まったかどうかだってまだ分からないし、あのレッジって男はルーティー族だぞ。また何か悪巧みしてるかもしれない」

アンジは大きな声で聞こえよがしに言った。

「俺はもう危険を冒したくないんだ。軍の反感を買うには十分過ぎるほどのことを海底でやってきた。それに俺は……」

「俺はイクシム族だから……か？」

じいさんが突然言った。

「そのセリフ、もう聞き飽きたわい」

アンジは言葉を失った。言い返す言葉さえなかった。じいさんに言いくるめられるのはアンジにとって不快以外の何物でもないが、それは偽りのない真実だった。だから余計に腹が立ったのかもしれない。

「おぬし、何か大切なことを忘れとるんじゃないのかね？」

そう言い残し、じいさんはゆっくりとレッジの後を追って部屋を出て行った。一人取り残されたアンジは、沈黙して突っ立っているしかなかった。そうして、海底のドレイ収容所で何が起こったのか、もう一度よく考えてみた。

アーチャと出会ってからすべてが変わった……考え方や生き方を改めて考えさせられ、もう一度地上で生きるという希望を持つことができた。多くの血族が混沌とするこの世界で、種族の壁という概念を乗り越えて得られる、仲間や親友というかけがえのない存在と出会うことができた。

そしてその存在というのが、アーチャだった。

「そうだったよな……アーチャ」

忘れていた何かを思い出すように、アンジはそっと呟いた。

「お前がいたから、今の俺がいるんだ……」

アンジは部屋を飛び出した。二人の待つ奥の部屋まで行くと、アンジは声を張り上げた。

「今度は俺がアーチャを助ける番だ。そして、他人を信じる番だ」

十二章　百十八年後の使者　2

レッジが口ひげの下から白い歯を覗かせた。

「どうやら吹っ切れたみたいだな。さあ、ここが入り口だ。俺とフィンしか知らない、もう一つの地下室だ」

アンジとじいさんはレッジの指差す方を見た。前にフィンから教えてもらった隠し扉が開いていた。その先は地上へとつながる階段になっていたが、レッジの指先は階段と扉の間にある広い空間を指していた。

「この床が入り口になってる。隠し扉のすぐ後に隠し扉を作れば、見つかる可能性はかなり低いと考えたからだ」

レッジは床にあるわずかな窪みに手を入れ、階段の側へスライドさせた。床は低い音を立ててゆっくりと動き、それは、アンジがさっき聞いた岩と岩がこすれ合う音と同じだった。扉の下は階段で、下へ下へと伸びている。底の方からわずかな明かりが漏れていた。

「こんな地下深くで何をしようってんだ？」

狭い階段を息苦しそうに下りながら、アンジが非難がましく聞いた。レッジは得意げな表情でアンジを振り返った。

「見れば分かるさ」

階段を下りると、そこはもう別世界だった。

小さな部屋に、アンジが見たこともないような機械がぎっしりと

詰め込まれていた。赤や青、黒といった細いコードが束になって床の上を這い回り、それぞれが血管の役割を担ってコンピュータどうしをつなぎ合わせている。上からも下からも機械の発する精密な音が発せられており、ある場所から赤い光がパッと放たれたり、モニターの映像が独りでに切り替わったりと、百人ほどの科学者が忙しなく働いているように思えてならなかった。だが、その空間にたった三人しかいないのは確かだった。

「フィン、聞こえるか？　聞こえたら応答してくれ」

アンジが目を皿のようにして部屋を観察していると、レッジの声が聞こえてきた。アンジはじいさんを引っ張ってレッジの元へ歩み寄った。レッジは大きな白いイヤホンマイクを装着し、何かを聞き取ろうと試みていた。イヤホンのコードがつながれているのは、針の付いたメモリや、突起状のスイッチが横一列にびっしりと並んだ、これまた大きな機材だった。

「フィン、聞こえたら応答してくれ、フィン……ダメか」

レッジはイヤホンマイクを机に置き、黙ったままのアンジとじいさんを見つめた。

「何かあった時のために、フィンにはいつも小型無線機を持たせていた。さっきから呼びかけているのだが、応答がないんだ」

アンジは顔を曇らせた。

「何があったのか、もう話してくれてもいいんじゃないか？」

無頓着なコンピュータに取り囲まれながら話を聞くなんて御免だ

ったが、アンジはそのことを口にしなかった。レッジは上着のポケットから銀の灰皿を取り出し、机の上の書類を払い除け、空いたスペースにそれを置いた。どこからか葉巻を取り出すと、口に咥え、手馴れた様子で火をつけた。

「すべての発端は……そう、お前たちがフィンを訪ねたことだった。あの日、ファージニアスという男がアーチャと共に酒場に入ってきた。そして挨拶がてら、フィンにチョコレートを手渡した。だが、渡したのはそれだけではなかったらしい。小さく折りたたまれた即席の手紙が一緒だった。内容は、明日の深夜、三人で密会できないか？　というものだった。次の日の真夜中、俺とフィンの元にあいつが来た」

「ファージニアスと何を話したんだ？」

アンジがせっついた。レッジは葉巻を灰皿の上に置いた。

「まず初めに、あいつは自分の正体を教えてくれた。グレイクレイ国から派遣された軍の一人だということを。その証拠に、俺たちが軍の研究室で使用していた百五十の数字で構成される作業員ナンバーを、一字一句間違えることなく答えてみせた。その瞬間、俺とフィンは覚悟を決めた」

「うさんくさい奴だと思ってたんだ！」

アンジが憤慨した。そのかたわらで、レッジが冷静に葉巻を咥えなおした。

「だが、ファージニアスの狙いは俺たちではなく、本当の目的は別にあるらしかった。見逃してほしければ私の手伝いをしろと、俺た

ちを脅してきたんだ。その内容はこうだ。まず、ある程度の時間を置き、アーチャたちの警戒心が緩むのを待つ。食料も尽きかけてきた頃を見計らって、誰もが目を奪われるようなご馳走を用意する。その料理に強力な眠り薬を混ぜ、深い眠りへと誘う。その隙に軍を呼び寄せ、抵抗できなくなったアーチャたちを国軍に引き渡す」

「ちょっと待てよ」

アンジが待ったをかけた。

「ファージニアスの目的はアーチャたちを捕まえることだったのか？　それじゃあどうしてじいさんと俺を見逃すようなことをしたんだ？　しかも今頃になってそんなことを……」

「話を最後まで聞け」

レッジがぴしゃりと言った。アンジは腑に落ちないという表情でレッジを見た。

「軍が大勢で押しかけてきた時、指揮を取っていたのはジェッキンゲンという男だったのだが、そいつはファージニアスの姿を見つけるなり、魔法を使って彼を気絶させた。油断しきっていた俺たちに弁解の余地はなかった。フィン、アーチャ、シャヌ、ファージニアスは連れて行かれたが、俺は不必要な者として扱われた……フィンが持ってる軍の秘密に比べれば、俺の存在などちっぽけなものだったのかもしれないな。そこのじいさんは眼中にすらなかったようだが……」

鼻からたっぷり煙を吐き出した後、レッジは続けた。

「つまり、どうしてファージニアスがアーチャたちを裏切るようなことをしたのか、俺にも分からないってわけだ……確かなことは、アーチャたちは今、軍に連れて行かれてここにはいないってことだな」

アンジの口から出るのは、うなるような低音だけだった。

「連れて行かれたって……一体どこへ？　また海底か？」

レッジは物思いに耽るような眼差しで葉巻をくゆらせた。

「分からない。だが、これは俺がまだ軍内部の研究所で働いていた時の話だが、血族狩りで捕まった奴らは、一旦本部へと輸送され、何らかの検査を受けてから海底へ運び込まれる仕組みになってるんだ。彼らが同じ経緯を辿るかどうかは分からないが、軍の拠点へ連れて行かれるのは確かだ。だとすると、おそらく今は輸送機の中だろうな……つまり、空の上だ」

アンジの怪訝そうな表情を察して、レッジが言い添えた。アンジの鼻息が荒くなった。

「空の上だって？　助けるも何も、手の出しようがないじゃねえか！　……どうでもいいけど、あんた何でそんなに冷静なんだ？」

レッジは自信に満ち溢れた表情でにやりと笑ってみせた。

「俺たちは腐ってもルーティー族だ。俺とフィンは常日頃から軍と敵対するための作戦を考えてきた。最終的な脱出はあいつらに任せるしかないが、そのきっかけを作ることならできる。相棒がいれば、俺たちに不可能なことなどない」

レッジは無線機を始めとする部屋中の機械類を見渡し、得意げな表情でアンジを見た。

「こいつらは軍が廃棄した精密機器だが、俺がみんな修理してやった。型は古いが、中身は世界最高レベルの電子機器を使用してカスタマイズした。グレイクレイ国軍の扱う高性能コンピュータをハッキングするなんて造作もないことだ。この無線機がこんな地下で電波の送受信ができるのも、中継機を使用した特殊なシステムを取り入れているからで、まあそんなに難しいことじゃない。ヒト族でも扱える代物だ」

「……ふーん」

意味が一つも理解できなかった者の典型的な答えがこれだった。無論、アンジもその一人だった。

「だが、フィンと連絡が取れなければどうしようもない。今日はもう遅いから、交代で仮眠を取りつつ、フィンからの連絡を待つとしよう」

十二章　百十八年後の使者　3

それから六時間後、アーチャはふと意識を取り戻した。その瞬間、頭の中はシャヌのことでいっぱいになった。

「シャヌ……どこだ？　シャヌ……」

その名を呼びながら、アーチャは痛む頭とぼやける視界の中でシャヌを探した。そこは床から壁、天井からドアまで、すべてが金属で作られている大きな部屋だった。壁や天上は溶接された鉄板で組まれており、ドアは奇怪に黒光りする、見るからに頑丈そうな作りだった。アーチャのすぐ脇にはフィンが横様に眠り続けており、部屋の片隅に立っているのは……。

「ファージニアス……てめえ！」

アーチャは我を忘れて駆け出していた。まだ足元はおぼつかなかったが、それでもファージニアスを全力で殴り飛ばすには十分過ぎるほどの助走を得ることができた。アーチャががむしゃらに振り回した拳は、彼の左頬を見事にとらえていた。ファージニアスは床に倒れ込んだが、すぐに起き上がった。口角から血を流している。

「どうして……どうして俺たちを裏切った？」

アーチャの声は怒りで震えていた。ファージニアスは毅然とした表情でアーチャを見たが、反撃してくる様子はなかった。

「答えろ！　ファージニアス！」

アーチャの大声で、フィンが目を覚ました。フィンのおぼろげな瞳はアーチャを見つめ、次いでファージニアスを捉え、またアーチャに戻った。

「あれ……私、どうしたんだっけ？」

ここにきて、アーチャは何かがおかしいことに気付き始めた。軍によってこの部屋に閉じ込められているのだとすると、アーチャたちを罠にはめたファージニアスと、グルだったフィンが一緒に捕まっているのはなぜだ？　それに、じいさんとレッジ、シャヌの姿が見当たらない。

「一体どういうことなんだ？　誰か説明してくれ」

アーチャは痛む右手をさすりながらそう言った。フィンに聞きたかったが、彼女はアーチャ以上に困惑しているようだった。その表情は一向に呆然としたままだし、まともな会話ができそうな精神状態ではなさそうだ。

「ここはどこだ？　他のみんなは？」

アーチャは乱暴な口調でファージニアスに聞いた。ファージニアスはポケットの中から赤いハンカチを取り出し、血をそっと拭き取った。

「いいでしょう」

ファージニアスの第一声は、はっきりとした強い口調だった。

「いつか話す時が来ることは承知の上でしたからね。……まずは私

のことを話しましょうか」

ファージニアスは上着の内ポケットに手を突っ込んで何やらまさぐり始めた。そこから取り出しのたのは、金色に輝く薄っぺらいカードのようなものだった。ファージニアスは眩いほどのカードを顔の横で輝かせ、そこに刻まれた文字を読み上げた。

「本当は私、時空連盟……通称“時連”の派遣調査部に勤務する、百十八年後の未来からやって来たエリート派遣調査員なのです。姓はトーバノア……ジェッキンゲン・トーバノアの弟です」

アーチャの全身から怒りが消滅した。怒りどころか、感情のすべてが消し飛ばされたように思えた。今ファージニアスが発した言葉を一つでも理解できる人がこの世に存在するのであれば、ぜひ一度拝見してみたいものだと、アーチャは思った。

「そんな冗談を言って話の腰を折ろうとしたって、そうはいかないぞ」

アーチャは極めて冷静に処理しようと試みた。だが、ファージニアスはカードを掲げたまま、まばたきもせずにアーチャを見つめ続けた。その力強い眼差しで見つめられると、アーチャの心は段々とくじかれていった。

「私たちがグレア・レヴで最初に出会った時、私は自分のことをこう紹介しました。ある人物を追いかける者……と。私は兄を捕らえるため、時をさかのぼってはるばるここまでやって来たのです。それまでの過程は徹底的に調査済みでした。フィンとレッジが使用していた研究員ナンバーも、その時の調査で入手したものです」

「……まさか」

アーチャよりも早く、ずっと沈黙を続けていたフィンが何かに気付いた。その驚愕しきった表情からは恐怖さえも感じ取れた。

「グレイクレイ国の派遣兵だってことも、私たちを救ってやるっていうのも、みんな嘘だったわけね……。すべてはあんたの兄……つまり、ジェッキンゲンをおびき出すための罠だった……私とレッジは、まんまとはめられた……私がアーチャたちをはめたように」

フィンの声は今にも消え入りそうだった。

「誤解しないで下さい」

カードを内ポケットにしまい込みながらファージニアスは続けた。

「アーチャやあなた方を出し抜いてジェッキンゲンを追い詰めようとしたのは事実です。しかし、見捨てるつもりは毛頭ありませんでした。予想もしていなかったことが起こったのです。何を言っても言い訳にしか聞こえませんが……私の気付かぬうちに、兄は魔力を手に入れていた。それが一番の誤算でした。私の知っている未来では、軍が地下に乗り込んできた直後に兄の正体と犯行が発覚し、私の仲間が駆けつけて未来へ連れ帰るという筋書きだったのです……しかし、なぜか狂いが生じた。兄が魔力を手にするという重大なきっかけが、未来を大きく変えてしまった」

アーチャは海底のアクアマリンで、ファージニアスが魔法を使う光景を何度か目撃したことがある。だが、それが今になってどうしたというのだ。

「あんたが俺たちを裏切ったことに変わりはない。未来から来ただって？　だったら証明してみろ。今から何が起こるのか、未来の歴史の教科書には書いてなかったのか？」

アーチャは冷たく言い放った。ファージニアスは首を横に振った。

「残念ですが、これから何が起こるのかまったく分かりません。未来といっても、ちょっとしたはずみで様々な分岐点が発生し、複数の未来が存在する場合もあるのです。今回がその良い例です。兄が何らかの方法で魔力を入手してしまったことにより、そこに新たな未来が生まれた」

ファージニアスは深々とため息を吐いた。

「私の勤務する時連は、時空を超越して悪さを働く者を追跡し、捕らえることを目的として結成された世界組織なのです。今から百十年後の未来、人類はタイムトラベルの実験に成功し、ごく一部の者だけが、歴史的事実を調査するという一貫した目的のみで利用することを認可されました。ですが、関係者の中には裏で手を引いている者も多く、過去の歴史が知らない内に書きかえられていたり、未来に起こる出来事や事件、天変地異などの情報が流出したりという惨事が相次ぎました。そうして結成されたのが時空連盟という、警察に準ずる組織でした。兄と私はそこに勤務していたのですが、兄は他の時空犯罪者と同じく、時間という欲望に負けてしまった……そして、かつて例を見ないほどの大きな事件を引き起こしてしまった……」

ファージニアスは言葉を発しかけたが、その先をためらった。

「これ以上は語れません。へたをすれば、現時点の時間に狂いが生

じかねない。過去の歴史を変化させ、未来の真相を知るということは、とても危険なことなのです」

アーチャはまじまじとファージニアスを見た。にわかには信じ難い話だが、ファージニアスの表情を見る限り、それが真実であると信じないわけにはいかなかった。

「ファージニアス……その……あんたの素性は良く分かった。とりあえず、今の詳しい状況を教えてくれないか？　過去でも未来でもない、今の状況をさ」

ファージニアスはこっくりとうなずいて、アーチャとフィン、双方と向き合える適度な位置まで移動した。

十二章　百十八年後の使者　4

「兄の魔法によって気を失った私が目を覚ましたのは、シシーラの街のそばにある空軍基地でした。私たちは滑走路のそばに停車していた輸送車の荷台に乗せられていて、そこに乗り合わせていたのは私たち三人だけです」

「レッジと、アーチャと一緒にいたあのおじいさんは、軍の方から連行を拒否したのよ。イクシム族のアンジっていう子も無事のはずよ。だからアーチャ、安心してね」

フィンは落ち着きを取り戻したようで、アーチャに詫びるような口調と笑顔でそう言った。アーチャにはそれだけで十分だった。

「私が見た限りでは、輸送機は全部で二機用意されてあって、小型の方には私たちが、大型の方にはジェッキンゲンとその部下たち、それにシャヌ嬢が乗り込みました。グレイクレイ国の国軍は、首都にある軍事基地を拠点として活動していると聞きましたから、おそらく、今そこに向かっているのではないでしょうか？　どちらも旧型の“２００－ヘガ”という戦闘機でしたので、スピードはあまり出ないはず……私の計算だと、出発してから八時間後には到着する見込みです。ようするに、あと二時間というわけです」

アーチャは半ば唖然としてファージニアスの話を聞いていた。

「今、戦闘機って、そう言ったのか？」

アーチャは恐々と聞いてみた。ファージニアスは笑顔でしっかりとうなずいた。

「だったら、逃げ場がないじゃないか。……空か……そう言われて見ると、何だかこの部屋が宙に浮いてるような気がしてきた」

アーチャはその場にべったりと座り込んだ。こんなにも長い間地上から足を離していたのは、生まれて初めてのことだった。

「例えここから出られたとしても、俺たちはもう完全に軍のブラックリスト入りってわけか……アンジは今頃どうしてるかな」

それを聞いて、フィンの顔いっぱいに笑顔が広がった。

「やだ、どうかしてた！　私、無線機を持ってるのよ！　レッジと連絡が取れる！」

アーチャもファージニアスも驚いてフィンに詰め寄った。フィンは金褐色のふわふわした髪の毛の中に指先を差し入れ、まさぐりながら何かを探し始めた。やがてフィンが取り出したのは、光沢のある赤い小さなヘアバンドだった。フィンは得意げにヘアバンドの裏側を二人に見せつけた。

「レッジは軍から課せられていた研究のかたわら、こういった電子機器の設計、開発にも力を注いでいたの。エンジニアとしても活躍してたくらいよ。ちょっと待って……周波数を……」

フィンは爪の先端でしぼりを器用に回しながら説明した。

「この無線機はもしもの時のためにって、レッジが持たせてくれたものなの。彼ってすごいでしょ？　……レッジ、聞こえる？　こちらフィン。聞こえたら応答して」

アーチャは期待に胸を膨らませた。外と連絡が取れれば、ここから脱出するためのヒントが手に入るかもしれない。そうすれば、シャヌを助けに行ける。

やがて、小型無線機からかすれ声が聞こえてきて、その瞬間、緊張で固まっていた三人の表情にまた笑顔が戻った。

「こちらレッジ。ずっと君の声を待っていた」

レッジの声は、まるで嵐の中で発せられているかのように聞き取りづらかったが、その口調からは彼の嬉々とした思いをはっきりと捉えることができた。

「なあレッジ、そこにアンジはいるのか？　おじいさんは？」

アーチャは横から威勢良く割って入った。

「その声はアーチャか？　ああ、みんな無事だ。そっちの状況は？」

「どこかに閉じ込められてるみたいなの。ファージニアスが言うには、おそらく２００－ヘガの戦闘機だろうって」

「ファージニアスが？」

レッジの声がくぐもった。

「訳は後で話すわ……その時があるならだけど。とにかく今は、ここから出ることを考えなきゃ。もう軍の下でこき使われるのは絶対にいや」

フィンの表情が急に険しくなったのをアーチャは見た。またすぐにレッジの声が聞こえてきた。

「脱出方法ならもう考えてある。成功確立は至極低いが……だが、何もしないでいるよりはマシな判断だ。君たちが輸送機に乗せられているという大方の予想はついていたから、こちらでいくつかの作戦をストックしておいた。まず確認するが、君たちが乗っているのは確かに２００－ヘガだな？」

「間違いありませんよ」

ヘアバンドを覗き込みながら、ファージニアスが自信たっぷりにそう言った。レッジの「よし」と言う声と重なるようにして、アンジのわめく声が聞こえてきた。

「こちらでその輸送機の詳細を調べてみる。五分だけ……いてっ！　アンジ、じいさんを見張ってろ！　すまない。五分だけ時間をくれ。それじゃ、一旦切るぞ」

「ありがとう、レッジ」

無線機から最後に聞こえてきたのは、アンジがじいさんを説教している怒鳴り声だった。心の隅の方に幾らかの不安が残されたが、今はレッジにすべてを任せるしかない。

「そういえば、さっきから気になってたんだけどさ」

アーチャは改まった口調でファージニアスに言った。

「ファージニアスの目的は、ジェッキンゲンを捕まえることなんだ

ろう？　だったら、俺たちを眠らせたり、あんな小芝居を演じたりした理由は何なんだ？」

ファージニアスの口元に馴染みのある小さな笑みが浮かんだ。

「私の計画を順調に遂行するには、アーチャ、君の存在はあまりにも大きなものでした。君をあのまま眠らせずに軍を呼び寄せていたら、君はどうしていましたか？　シャヌ嬢を守るために、我を忘れて兄たちに立ち向かっていったのではないでしょうか？」

アーチャは気まずそうにうなずいた。ファージニアスの推測は大当たりだった。

「あからさまな悪役を演じたのは、フィンやレッジに私という存在が味方であると確信させるためで、それに応じた都合の良い芝居が必要だったのです」

アーチャは段々と訳が分からなくなってきたが、フィンは納得したような表情で何度もうなずいていた。

「正直、私は焦っていました。兄を捕まえるための計画はいくつも用意していたのですが、その機会が訪れるたびに何らかの狂いが生じた。その真相は分かりませんが、兄を捕らえようとする私の行動に、運命が反発しているような気がするのです。そのことで、私は危機感を察していました。強引にでも計画を実行しようと、こうして荒業に出たわけですが、やはり運命は私に味方してくれませんでした。まさに最悪の結果です」

「俺たちがこれからどうなるのか、本当に分からないのか？」

アーチャの声は緊張で上ずった。ファージニアスはゆっくりと首を振った。

「まったくもって見当がつきません。本当なら、この計画は成功するはずでした……いえ、正確には、どの計画にも誤りなどなかったはず……私の知らないうちに、未来は大きく変えられていた……今この瞬間でさえ、例外ではないのです」

「あなたの計画を邪魔する何らかの原因を突き止められれば、解決の糸口を見つけたも同然なのに……」

フィンは悔しそうに言った。

「この世に、時間ほど複雑で奇妙なものはないでしょう……少なくとも、百十八年後の未来では、ですが」

十二章　百十八年後の使者　5

その時、フィンが握り締めていたヘアバンド型の無線機からレッジのくぐもった声が聞こえてきたので、三人は一斉に寄って集った。

「こちらレッジ。フィン、応答してくれ」

「こちらフィン。どう？　何かつかめた？」

「十年前のものだが、２００－ヘガの戦闘機マニュアルがまだ残ってたんだ。軍が他人に知られたくないような機密情報が満載だ。それで、いいか、ここからが重要だ。時間がないので一度しか言わないから、みんなよく聞いてくれ」

フィンが無線機のボリュームを上げ、アーチャとファージニアスは頭髪がくっつくほど額を寄せ合った。

「まず、今君たちが乗っている輸送機の内部構造だが、人を閉じ込めておけるような大きな部屋はたった一つしかない。ドアはカードキーと暗証番号で二重にロックされていて、おそらく、イクシム族が十人束になって体当たりしても開かないだろう。そこで、俺が今からドアを制御してる内部コンピュータにハッキングをかけ、ドアロックを解除する。パイロットは必ず異変に気付くから、再びドアが閉まる前にその部屋から出るんだ。部屋の向こうは狭い通路になっていて、右に行って扉を開ければそこはもうコックピットだ。ここまでで何か質問は？」

「ハッキングって何だ？」

アーチャがとっさに聞いた。

「つまり、俺の手元にあるコンピュータを操作して、戦闘機内にあるコンピュータの一部を乗っ取り、こっちで遠隔操作するのさ。２００一ヘガは戦闘機だが、性能の悪さが理由で実用性がないと判断されたほどだ。そんなポンコツをハッキングするなんて俺にとっては朝飯前だ」

心なしか、無線機から聞こえてくるレッジの声は、アーチャが今まで聞いた中で一番生き生きしているように思えた。

「では次の説明を始めるぞ。とにかくその部屋から出たら、パイロットに奇襲をかけろ。見張りの兵士がいると仮定しても、相手は多くても三人といったところだろう。フィン、まだあれを持ってるよな？」

フィンはドレスの胸元に手を入れ、首から紐でぶら下げてあった小瓶を取り出した。フタはコルクになっていて、フタの裏側には小さな針が付いていた。針は小瓶の中の透明な液体に浸っており、それはとても怪しげな姿だった。

「何それ？」

アーチャが小瓶を指差しながら聞いた。フィンはまた申し訳なさそうな表情でアーチャを見た。

「手術にも使われる、結構な麻酔薬よ。アーチャにはこれくらいやらなきゃダメだって、彼が……」

アーチャはファージニアスを呆れ顔で睨んだ。

「おいおい……ここまでするか？　ふつう」

「ヘイ、アーチャ。私は今回の計画を確実なものにしたかったんですよ！　大目に見てくださいよ！」

アーチャは言い返そうと口を開きかけたが、それはレッジに阻止された。

「雑談はそのくらいにしてくれ。軍のやつらに、いつこの電波を拾われてもおかしくないんだ。時間がないってことを全員認識していてくれなきゃ困る」

レッジのその言葉で、部屋の中はシンと静まり返った。レッジはそのことを悟ったかのように、また続きを話し始めた。

「その麻酔薬を使って兵士たちが意識を失ったら、君たちが今いる部屋にでも閉じ込めておけ。カードキーがどこかにあるはずだ。そこまで済んだら、あとはその戦闘機をかっぱらって帰還するだけだ。操縦方法は俺がマニュアルを見ながら指示する。ハッキングには時間がかかるが、どうせポンコツの詰め合わせ戦闘機だ。コンピュータ内の端末も似たり寄ったりだろう。準備ができたら追って連絡する。それまでイメージトレーニングでもしていていくれ」

レッジの最後の一声は、緊張のかけらさえ窺えないほどウキウキしているのがアーチャにも分かった。

「きっと彼、嬉しいんじゃないかしら」

沈黙した無線機を眺めながら、フィンが静かに言った。

「自分を物のように扱ってきた国軍たちを相手に戦えるんだもの」

「同僚を何人も失い、恨み辛みも大きいのでしょう」

ファージニアスがしみじみと言った。二人が会話している間、アーチャはずっと黙ったままだった。もしこの作戦がうまくいっても、シャヌを救い出せるわけではないのだ。アーチャにとって、それが一番の気掛かりでもあった。そんなアーチャの気持ちを悟ったように、ファージニアスが声をかけてきた。

「シャヌ嬢のことが気になるのですか？」

アーチャは壁伝いにへたりこんだ。

「俺、またシャヌのことを守ってやれなかった」

どこか遠くを見つめるアーチャの瞳は、虚無感で満たされていた。

「シャヌを守るって、いつも言葉だけだった……」

「……アーチャ！」

ファージニアスはアーチャの前までやって来たかと思うと、突然叫んだ。アーチャもフィンもびっくりしてファージニアスを見上げた。

「くよくよしていても、シャヌ嬢は決して助かりませんよ。こうなってしまったすべての原因は私にあります。今度は私にも手伝わせてください……そうでもしないと、みんなに合わす顔がありません

からね」

「私にも手伝わせて」

フィンが明るい笑顔で言った。

「この輸送機を手に入れたら、シャヌの乗ってる戦闘機に乗り込んでやりましょうよ！　……そんなこと、出来るかどうか分からないけど」

アーチャはにっこりして二人を見つめた。微かな希望の光が、アーチャには見えた気がした。

レッジから連絡が入り、部屋全体が張り詰めたような緊張感で膨れ上がったのは、それからすぐ後のことだった。

「こちらレッジ。作業が予想していたより早くに終わりそうだ。準備の方を頼む」

「了解」

フィンが答えた。緊張からか、その声には喉の奥が震えるような響きがあった。三人はアーチャを先頭にして勇ましく立ち上がり、扉が開くのを待った。レッジの計画は本当にうまくいくのだろうか？　アーチャは行く末を案じたが、すぐにその必要はなくなった。扉はスーッと横にスライドすると、左右に広がる通路が真っ先にその姿をさらけ出してくれた。どうやら、レッジの言っていたハッキングが成功したらしい。アーチャたちが急いで部屋から飛び出した、その時だった。

アーチャは思わず身をすくめた。けたたましいほどのサイレンが機内中に響き渡り、ドアの上にある警告ランプが赤く点滅し始めた。

右手奥の扉が音を立てて開き、中から緑色の軍服に身を包んだ小柄の兵士が一人、慌てた様子で飛び出してきた。

十二章　百十八年後の使者　6

アーチャはフィンが握っていた麻酔薬入りの小瓶をもぎ取り、乱暴にフタをはずし、小瓶の中身を撒き散らしながら突進して行った。次の瞬間、兵士は何の抵抗もすることなく、その場にバタリと倒れた。アーチャの突き出した麻酔針付きのコルクは、確かに兵士の首筋を捉えていた。三人が安堵したのも束の間、扉の向こうにあるコックピットから、操縦士の叫び声がはっきりと聞こえてきた。

「メーデー！　メーデー！　こちらヘガのコックピット！　ドレイが脱走し、仲間の一人がやられた！　繰り返す！　仲間の一人がやられ……」

「私たちがドレイ？　勘違いも甚だしいですね」

兵士のうなじから針を抜き取りながら、ファージニアスが言った。それからすぐに操縦桿を握り、兵士をアーチャに任せた。

「ほんとに良く効く薬だよな……ところで、操縦できるのか？」

コックピットから兵士を引っ張り出しながら、アーチャが不思議に思って聞いた。ファージニアスは余裕たっぷりの笑みだった。

「時空連盟に勤める我々は、万物におけるエキスパートなのです。歴史や地理のことを徹底的に把握し、車や船、飛行機に始まり、ロケットやスペースシャトルの操縦まで幅広く……」

「ロケットとか、スペースなんたらとか、そんなの分かんないよ」

アーチャは兵士のポケットをまさぐりながら文句を言った。ファージニアスはしまったと言わんばかりに顔をしかめた。きっと、遠い未来に開発されるであろう、アーチャの知らない未知の乗り物のことを口走ってしまったに違いないと、アーチャは勘付いた。

「あったあった」

アーチャは兵士の胸ポケットから、レッジの言っていたカードキーらしき白いカードを見つけ出すと、それをフィンに手渡し（この手の代物は、フィンに任せた方が安全だとアーチャは考えた）、兵士を部屋の中まで引きずって行った。フィンが入り口のそばにあったカードリーダーにカードを通すと、ドアは横にスライドし、ピクリとも動かない兵士二人を覆い隠してしまった。

「レッジ、ドアロックの暗証番号は分かる？」

フィンが無線機に向かって聞いた。二人はドアをロックし、再びコックピットまで戻った。アーチャたちにとって、本当の難題はここからだった。

「アーチャ、あれを」

今しがた戻って来たばかりのアーチャに向かってファージニアスが言った。その視線の先は一面に広がる雲海だった。分厚い雲が満月の月光にあたって神秘的に輝き、その光景は見る者の心を感銘させた。コックピットの窓から見える景色はとても素晴らしいものだったが、ファージニアスが注目してほしかったのはまだ別にあった。

左斜め前方に、雲の中から見え隠れしている巨大な右翼の姿がかいま見えた。やがて雲の中からおもむろに姿を現したのは、身も心も恐怖で凍りつくほど巨大な戦闘機だった。黒々としたボディが闇

の中で輝き、そのおどろおどろしい大きな巨体をより威嚇的に見せつけている。低い雷鳴のような轟音が周囲を取り巻いていたが、その音も、吹き荒れる風も、空を覆う雲も、そして、アーチャの恐怖心さえも、みな空気の流れと同様にあの邪悪な生き物の中に吸い取られてしまっていた。

シートの背もたれを握るアーチャの手に、じわりと汗がにじんだ。フィンはコックピット内の無線機を調節し、レッジと連絡を取れるようにした。

「こちらフィン。レッジ、よく聞いてちょうだい」

「どうした？　何かトラブルか？」

レッジの心配そうな声がコックピット内に響き渡った。

「私たち、まだ帰れないの。シャヌっていう子が別の戦闘機の中に捕まっていて、その子を救い出してからそっちへ向かうわ。その戦闘機っていうのが、今私たちが乗ってるものと同じ２００－ヘガなんだけど、とても大型なのよ。こっちの十倍は大きいんじゃないかしら？　何か情報はある？」

「そんなバカな」

スピーカーから聞こえてきたのはレッジの否定的な返答だった。

「２００－ヘガに大型や小型といった区別はないはずだぞ」

「でも確かに、私が見たのはどちらも２００－ヘガでした。そばではっきりと見ましたから」

ファージニアスが豪語すると、無線機の向こう側からガサゴソと慌しい音が聞こえ、誰かに強い口調で命令する声がそれに続いた。

「そんなマニュアルはどこにもない。……だが、ファージニアスの言っていることが真実なら、そいつはもしかしたら改良型かもしれないな。だとしたら厄介だぞ。国軍本部の資料管理局にある数千万もの戦闘マニュアルから、その怪物の正体を見つけ出さなきゃならない。ハッキングをかけるだけでも数日がかりの大仕事だ」

「そんな時間あるわけないよ！」

アーチャは悲鳴に近い口調で言った。

重たい空気の中に沈黙が訪れた。アーチャはもどかしさに苛立ちを感じ始めていた。このままでは、シャヌが完全に軍の手に渡ってしまう。だがどうする？　どうやってシャヌを助ける？

「一つだけ、可能性を述べるとしたら……」

レッジの慎重な声が沈黙を破った。そこにいた全員が耳をそばだてた。

「大型に改良されたとは言え、基は君たちの乗ってるものと同類だ。だとすると、さっきと同じ要領で大型の方も遠隔操作できるかもしれない。機体そのものを誘導することはできないが……そうだな……扉の開閉くらいなら可能なはずだ」

「あれに飛び移れって言うの？」

フィンの声はあまり賛成的ではなかった。フィンだけではない、ファージニアスでさえも、それは無謀な作戦だと考えた。

「接近するだけも危険ですよ。パイロットが倒れ際に大型機へ連絡していましたからね。この戦闘機が安全でないことくらい、相手側は百も承知です。へたをすれば、機銃掃射で打ち落とされるかもしれません」

「でも、もう他に手はないじゃないか！」

アーチャが叫んだ。コックピット内も含め、無線機の向こう側にいるレッジたちでさえ沈黙した。

「もう時間がないんだ……シャヌを助けるには、あの戦闘機に侵入するしかない。……ファージニアスは操縦を続けて、フィンは俺たちに指示を送って。レッジは無線機を使って双方のやり取りを……俺はフィンの小型無線機を持ってあの中に侵入する」

「そんなのダメよ！」

フィンがアーチャの肩をつかんで前後に揺さぶった。ほとんど涙声だった。

「アーチャ、もう後戻りはできないぞ。ほんとにやるんだな？」

フィンの訴えをあえて無視するかのように、レッジがそう聞いた。アーチャは前方を飛行し続ける怪物の姿をしっかりとその瞳に焼き付けながら、力強くうなずいた。

「英雄と誓ったから……だから、今度こそ、俺の手でシャヌを助けたいんだ」

十二章　百十八年後の使者　7

「フィン。今のアーチャに何を言っても無駄だと思いますよ」

ファージニアスが穏やかに忠告した。フィンはまだ物言いたそうに下唇を噛んでいたが、やがて心に決めたように、きりりとした表情に整えた。

「分かったわ……でも、絶対に死んじゃダメだからね。シャヌを助け出したらすぐに連絡をちょうだい。必ず迎えに行くから」

「フィン、ありがとう」

アーチャが言い終わらない内に、無線機からレッジの声が聞こえてきた。

「水を差すようだが、まだハッキングに成功したわけじゃないんだ。まあ大丈夫だとは思うが……アーチャ、お前と話したい奴がいるみたいだぞ」

アーチャには、それが誰なのかすぐに分かった。

「アーチャ？　聞こえるか？　俺だ、アンジだ。分かるか？」

それはスピーカー越しからだったが、アーチャにとって、アンジと会話できてこれほど嬉しいと感じたのは初めてだった。アーチャの顔には自然と笑顔が広がっていた。

「ああ、ちゃんと聞こえてるよ、アンジ……ちゃんと聞こえてる」

アンジの照れくさそうな咳払いが鳴り響いた。

「それにしても、機械に向かって話し掛けるなんてバカバカしくてしょうがないぜ。そう思わねえか、アーチャ？」

「まあね……しかもイクシム族のお前にとっちゃ、そんな姿を同種の仲間に見られたくないもんだよな」

アーチャはからかい半分で言ったつもりなのに、アンジはその言葉をやたらと気にとめたようだった。しばしの沈黙の後、アンジの声がようやくスピーカーから聞こえてきた。

「俺、じいさんに説教されちまってさ。それからずっとお前のことを考えてた。アーチャがいなかったら、今ごろ俺はどうなっていただろうって。けどよ、お前の声聞いてると、もうどうでもよくなっちまった」

アンジの声は遠く離れた場所にいてもよく分かるほど清々しいものだった。アンジが何を伝えたいのかは不明瞭なままだったが、アーチャにはアンジの気持ちが何となく分かっていた。だから、そのことに関してはあえて何も触れなかった。

「アンジ。俺、絶対にシャヌを助け出すから、ちゃんと待っててくれよな。必ずそこに戻るから、それまで……」

「ああ、もう！　分かってるって！」

アンジは怒ったが、その声はアンジらしい優しさでいっぱいだった。

「お前にそれだけの力があるって、俺にはちゃんと分かってる。だから、俺はもうすでに確信してる。お前は必ず帰ってくるって……それだけで十分だろ？」

アーチャが返事をする前に、アンジの声がレッジのものに変わった。

「準備ができたぞ！　予想どおり、違うのはその外見だけだったみたいだ。こちらから指令を送れば敵機の外ドアが開き、中に侵入できる。だが、相手側が異変に気付いてドアを閉めればそれまでだ。タイミングは君たち次第でどうにでもできるが、ドアを開けていられるのはわずかな間だけだ。俺が敵機のコンピュータ内に送り込んだスパイウイルスの位置が軍に気付かれたら、もうどうすることもできないってことも肝に銘じておいてくれ」

「ウイルスだって？　そんなもんが何の役に立つっての？」

「怪物の詳細情報をそっくりそのまま頂戴するためのプログラムだ。風邪のウイルスと一緒にするな」

無知なアーチャの質問にはうんざりだという口調でレッジが説明した。

「内部の構造から暗証番号まで、何でも筒抜けにできる俺の最高傑作だ。いつか国軍の中枢に潜り込ませようと計画してたとっておきの奴だったんだが……長話が過ぎたようだ。全員、準備はできてるな？」

それぞれが緊張した面持ちで持ち場に着いた。ファージニアスは

操縦席へ、フィンはコックピットと通路をつなぐ境界へ、アーチャは、戦闘機の出入り口の正面へ向かった。

「アーチャ、頑張ってね」

フィンは小型無線機をアーチャに差し出し、瞳を潤ませながらそう言った。

機体のスピードが上がった。通路からはわずかにしか外の光景を確認できなかったが、大型戦闘機が近くまで接近しているのがはっきりと分かった。前方を優雅に飛行するその巨大な戦闘機は、そばで見ると更にその醜悪さに深みがかかった。

アーチャは緊張と恐怖にかられていたが、いつまでも怯えてるわけにはいかなかった。あの怪物の中に、きっとシャヌはいる。そして、誰かの助けを……アーチャの助けを待ってるはずだ。

「今右辺に回りこみました……ものすごい風圧です！」

汗だくになって操縦桿と格闘しながら、ファージニアスが無線機に向かって叫んだ。レッジの声がスピーカーを通して機内中に響き渡った。

「よし、まずは小型機のドアを開けるぞ。最初は非常用スイッチだ。燃料メーターのすぐ左にある赤いスイッチを押せ。次はコンパスの下にある黄色いスイッチだ。順番を間違えるな」

ファージニアスは指示されたとおりの順番でスイッチを押した。操縦桿と共に機体が震え、それはアーチャが壁に手を添えていないと耐えられないほどの大きな揺れだった。

「最後は、初めに押した赤いスイッチの下にある銀色のレバーを三

つとも全部下げろ。これで飛行中でもドアが開くはずだ」

「アーチャ、扉が開くわ。下がって」

アーチャが背後の壁に背中を押し付けた途端、鉄の重たい扉がゆっくりと音を立てて開いた。すぐ目の前には、うなりを上げて雲の中を突っ切る怪物の姿があった。ドア枠によって切り取られた断片的な姿だというのに、その怪物は、まさに空を支配する王者のような堂々たる風格でそこに君臨していた。

「敵機の扉を開けるぞ！　準備はいいな、アーチャ！」

「おう！　いつでもいいぜ！」

アーチャは大声を張り上げて威勢良く叫んだ。そうでもしないと、この怪物に立ち向かうだけの勇気を奮い起こすことなんかできやしない。

フィンがファージニアスに指示を送ると、機体が敵機に向かって急激に接近した。翼がぶつかるのではないかというくらい近い。だが、ここは操縦士の腕の見せ所だった。機体は徐々に斜めに傾き、左翼が漆黒の鋼のボディに接触しないよう、ファージニアスが高度な操縦を披露したのだ。

機体と機体が数メートルにまで接近し、手足の感覚がなくなるくらいの大きな揺れが訪れた時、いよいよ怪物の口が開き始めた。ブラックホールが目に見えるものとしてこの世に存在していたなら、それはきっとこんな姿に違いないはずだ。怪物の口の中は、闇そのものだった……光を包み込む闇、すべてを覆い隠してしまう闇、一寸先の未来も見通せない、闇。

「行け！　アーチャ！」

アンジの声が叫ぶと同時に、アーチャはドア枠から怪物の口目がけて身を投げ出した。その闇の中で見出した、希望という名の光を手にするために……そして、シャヌを軍の手から救い出すために、アーチャは空へ向かって飛んだ。

十三章　空へ、未来へ　1

アーチャは手を伸ばし、太いドア枠に指を引っかけた。強風で吹き飛ばされそうになる体を渾身の力で抑え、歯を食いしばって全身を機体の中へ押し込んだ。そこはほの暗い通路だった。アーチャはまだ開いたままの入り口から、ファージニアスたちの乗っている戦闘機を振り返った。さっきまで自分が乗っていた２００－ヘガ小型戦闘機の姿を（まるでブラウン管テレビに翼が生えたような、こっけいな姿だ）アーチャは今初めて見たが、確かに、今乗っている大型の戦闘機の方が何倍も大きいというのが一目で分かる。

「アーチャ、聞こえますか？　応答してください！」

ファージニアスの疲れきった声が無線機から聞こえてきた。

「俺は大丈夫だ。ここは危険だから、すぐに離れてくれ」

その時、アーチャは小型戦闘機が爆発したと、そう思った。尾翼が耳をつんざく爆発音と共に吹き飛ばされ、その周囲に黒煙が立ち込んだ。無線機を通してファージニアスとフィンの慌てふためく声や悲鳴が聞こえてくる。アーチャは頭の中が真っ白になった。

砲弾の炸裂する凄まじい轟音が再びあたりにこだました。その瞬間、小型戦闘機の左側面の外壁が赤い閃光を発して飛散した。黒煙がもくもくと溢れ出し、純白の雲と混じって視界を灰色に染め、やがてその中に姿をくらますようにして、ファージニアスたちを乗せた戦闘機は姿を消した。

「ファージニアス！　フィン！」

雲の向こう側を見つめながら、アーチャは口に無線機を押し当てて叫んだ。戻ってくる返事は、不吉なノイズ音だけだった。

「きっと狙撃されたんだ……」

アーチャは絶望した。大きく破損した戦闘機にいつまでも乗ってはいられないだろうし、あの機体が無事に着陸できるとは到底思えない。アーチャは不安でならなかったが、いつまでも他人の心配をしている余裕はなさそうだった。

間近で使用された銃が強烈な発砲音を奏でたその瞬間、アーチャの足元を一つの弾丸がかすめていった。見上げると、拳銃を構える四、五人の兵士の姿がそこにあった。吹き抜けになった二階の通路からこちらを見下ろし、威圧的な瞳をギラギラと輝かせている。

「動くな！　武器を捨てろ！　手を上げろ！」

兵士の一人が警告した。アーチャはとっさに逃げ場を探した。すぐ後ろは行き止まりだが、十メートルほど前方に二つの扉が見える。しかし、どんなに頑張っても兵士たちに追いつかれてしまう。唯一残されている逃げ場は、今しがたアーチャがやって来た空だけだった。アーチャはレッジとの連絡手段を知られてしまうことを恐れ、とっさに無線機の電源を切り、ポケットの奥に押し込んだ。

兵士が隊列を組んで階段を下り、足並み揃えてアーチャの前までやって来た。アーチャは抵抗しようと麻酔薬入りの小瓶を取り出したが、コルクをはずす直前に兵士に腕をつかまれ、床に落としてしまった。小瓶は粉々に砕け散り、液体が辺りに飛び散った。

「おとなしくろ！　ジェッキンゲン大佐がお待ちだ。はい、連行！」

両腕を腰あたりでねじられ、痛みでもがき続けるアーチャに向か

って兵士が言った。開いたままだったドアがゆっくりと閉められ、外からの光が遮断されると、辺りはオレンジ色の照明で照らし出された。兵士たちに取り囲まれながら強引に連行されていくアーチャが見たのは、朽ちかけた鉄骨の階段と、狭い通路と、その突き当たりにある無口な鉄のドアだった。ドアの先は、やはり通路だった。

「シャヌはどこにいるんだ？　女の子がここに乗ってるはずだ」

謹みさえわきまえず、アーチャは前を歩く兵士に向かって乱暴に聞いた。返ってくるのは、靴底が金属の床をこすりつける冷ややかな音だけだった。

これから何が起こるのか見当もつかず、結論に至らないまま、アーチャは黙々と歩き続ける他なかった。銃を構えた兵士たちが部屋を出入りしたり、アーチャの脇を忙しく過ぎ去っていく様子からすると、どうやらこの戦闘機には大勢の兵士たちが乗り込んでいるようだ。

やがて、他とも大して見分けがつかない、通路の端の方にある質素なドアの前までやって来ると、兵士が声を張り上げた。

「はい、止まれ！」

兵士たちは息を揃えて立ち止まり、ドアの方へ体を向けると、うやうやしく敬礼してそのまま動かなくなった。先頭を歩いていた兵士がドアをノックし、胸を張った。

「ジェッキンゲン大佐、侵入者を連れて参りました！」

しばらくすると、強固な鉄製のドアの向こう側から、鼻に付くような、あの気取った声が聞こえてきた。そのせいでアーチャは少し緊張したが、平静を保っていられるほど落ち着いていられた。兵士

が開け放つこのドアの向こうに、きっとシャヌがいるはずだ。ここまで来て尻込みするわけにはいかない……だが、そこにいたのはジェッキンゲンただ一人だった。

ワイングラスを片手に、純白の燕尾服に身を包んだジェッキンゲンが優越そうな笑顔でアーチャを見つめていた。ファージニアスが、ジェッキンゲンが自分の兄なのだと説明してくれたとおり、改めて見ると、その顔には確かに似通った点が見受けられた。だが本当に、未来から来た人間なのだろうか？　けったいな身なりや喋り方を別とすれば、何ら変わりない普通のヒト族なのは確かだろう。

アーチャが足を踏み入れたその部屋は、まるでホテルの豪華な一室がそっくりそのまま越してきた具合に作られていた。窓には手織りの赤い美麗なカーテンが飾られ、美しい刺繍の施された絨毯が床いっぱいに敷き詰められている。様々な形のワイングラスが並べられた棚の間に大きなキャビネットが置かれ、年代物のワインが一本、そこを独占するかのようにふわふわと宙に浮いている。

アーチャは大股でジェッキンゲンに近づき、二人の兵士がその光景を見守るようにしてドアのそばにたたずんだ。

十三章　空へ、未来へ　2

「ようこそ、ハラペコくん」

ジェッキンゲンが気さくに声をかけてきた。

「俺はアーチャ・ルーイェンだ。シャヌを連れ戻しに来た」

アーチャは真っ向からジェッキンゲンを見つめ、勇ましく切り出した。ジェッキンゲンの笑顔に驚きの表情が重なった。

「言ってくれますね。元々、彼女は私のものでした。それを、君が横から強引に奪っただけのこと。違いますか？」

アーチャが反論しようとするのを、ジェッキンゲンは空いている方の手を前に突き出すことで制止させた。ジェッキンゲンが指をパチンと鳴らすと、高価な皮生地があしらわれた椅子が二脚、床上数十センチの空間から突然現れ、音を立てて床に落ちた。ジェッキンゲンはグラスを丸テーブルの上に置き、その周りに丁寧に椅子を置いた。

「立ち話しは嫌いじゃないですが、ここは空の上です。乱暴な操縦のせいでせっかくのワインを台無しにしたくないですからね！」

ジェッキンゲンは椅子に座ると、足を組んで優雅にワイングラスを傾けた。アーチャは渋々とそれに従った。

「こんな格好で出迎えてしまったのはとても失礼でしたね。いえね、この後にシャヌを交えてのパーティを控えていたものですから。彼

女が我が軍に戻ってきたという情報で上官たちが浮かれてしまい、私もいやおうなしに参加させられてしまうというわけです」

「めでたいやつらだな」

アーチャは苛立たしくあしらった。ジェッキンゲンが再びワイングラスを置いた。

「それにしても不思議だ。一体どのようにしてあの戦闘機を乗っ取ったんです？　警備は万全だったはずなんですが。地上にいる第三者が関わっているような気がしてなりませんね……誰なんです？　知っているのでしょう？　私にだけこっそり教えてください、さあ」

アーチャはだんまりを決め込み、そのことに関して何も喋ろうとしなかった。銃で脅されたって口を割るものか。

「こんなところで悠長に話してる時間はないんだ。今すぐシャヌに会わせてくれ」

「くどいね、アーチャ」

ジェッキンゲンの表情から笑みが掻き消えた。

「あれは私のものです。君にどうこう言われる筋合いも、権利も、皆無に等しいのですよ」

「お前たち国軍と一緒にいることを、シャヌは望んでいなかった！」

「だからアクアマリンからシャヌを救い出したって？　その結果がこれだ！」

ジェッキンゲンがアーチャに勝るとも劣らないほど大きな声と強い口調で怒鳴った。ジェッキンゲンはワイングラスを引っつかみ、一滴残らずすべて飲み干すと、空のグラスを手に持ったまま厳しい表情で話を続けた。

「スタンバインが君をどうそそのかしたのか知りませんけど、思い上がりも程度をわきまえた方がいいのではないでしょうか？　君にシャヌを守るだけの力なんか、これっぽっちもありはしないのですよ」

「お前たちはどうなんだ？」

アーチャはひるむことなく言い返した。

「シャヌを守る以前に、実験の材料としてシャヌの魔力を悪用しようとしていたんじゃないのか？　人殺しの殺戮機械に絶対の力を与えるために、ドレイたちを使った生体実験を繰り返していたことくらい、海底にいた時からずっと知ってるんだ」

ジェッキンゲンの眉間にしわが寄るのをアーチャは見た。

「そうだよ、アーチャ……」

ジェッキンゲンの口調は急に柔らかだった。

「君がアクアマリンからシャヌを連れ出したあの日、私たちは極秘の実験を始めるつもりだった……シャヌを使った極秘の生体実験をね」

アーチャは半ば我を失いかけてジェッキンゲンに飛びかかっていた。その拍子にテーブルがなぎ倒され、ワイングラスが絨毯の上で跳ねた。アーチャがジェッキンゲンの胸倉を蝶ネクタイごとつかむと同時に、二人の見張りの兵士が反射的に銃を構えた。その筒の先端は、確実にアーチャの頭部を狙っていた。

「その物騒な物を下ろしなさい。弾の無駄遣いです。いざとなれば、この子にその程度の武器は通用しない……」

ジェッキンゲンの声は苦しそうに歪みきっていた。彼が何を言っているのか、アーチャにはちっとも理解できなかった。だが、ジェッキンゲンがそういう手に出るのであれば、こちらにも考えがある。

「お前が未来から来た犯罪者だってことは分かってるんだ。いい加減に化けの皮を剥がしたらどうだ?」

ジェッキンゲンの表情が凍った。銀色の前髪の奥に輝くその瞳には、アーチャのほくそ笑む顔が鮮明に映し出されていた。

「そうですか……分かりました」

ジェッキンゲンはアーチャの手を払いのけ、アーチャにしか聞き取れないような小さな声で言った。

「そこの二人、部屋の外を見張っていてもらえませんかね? その間、誰も部屋へ通さないように」

兵士たちは顔を見合わせ、いぶかしげな面持ちで部屋を出て行った。二人だけになると、ジェッキンゲンは倒れたテーブルを元に戻し、部屋の隅に転がっていたワイングラスを魔法で引き寄せると、

そのままテーブルの上に置いた。側面にヒビが入っていた。

十三章　空へ、未来へ　3

「さて、ずいぶん興味深いことをご存知のようですね。どこからの情報ですか？　まあ、大体の見当はついていますが」

「さっき、ファージニアスがみんな教えてくれたんだ。百十八年後の未来のこと、タイムトラベルのこと、お前のこと」

ジェッキンゲンは顔をしかめて舌を打った。

「いまいましい奴め……やはりあの酒場で殺しておくべきでしたね」

「一体どんな悪事を働いたんだ？　シャヌと何か関係あるのか？」

アーチャは核心に迫った。ジェッキンゲンの鋭い眼差しが攻撃的にアーチャを睨んだ。

「あんまり図に乗らないでほしいですね。君がどんな立場であろうと、私が優位であることに違いはないのですから。それに、今は自分の心配をした方がいいのではないでしょうか？」

「さっきから何が言いたいんだ？　俺のことをさも知っているかのように話しやがって」

アーチャがジェッキンゲンを不気味と感じたのは、彼が妖美な風貌だからでも、鮮やかに繰り出される魔法を目の当たりにしたからでもない。アーチャ・ルーイェンという存在の過去から未来まで、そのすべてを把握しているかのような瞳でこちらを見据えてくるからだ。アーチャ本人さえ知らない何か重大なことを、ジェッキンゲ

ンは知っているというのか？

「俺の何を知ってる？」

アーチャの声は自分でも気づかないほど微弱に震えていた。ジェッキンゲンの顔に再び笑みが広がっていた。

「君自身の記憶から失われた、想像を絶するような真実……そして、人々の記憶から忘れ去られてしまった血族の、本当の姿……」

視界に映るすべてのものがかすみ始めた。眺めているだけでイライラするようなジェッキンゲンの笑顔がよりによって三つに分裂して見えるなんて、それはアーチャにとって不快そのものだった。だが、もうそんな文句を言っていられる余裕さえなくなってきた。視界どころか、五感すべてがその機能を失いつつあった。

まただ……アーチャはやはりそう思った。

突然やってくる記憶喪失の予兆。呼吸さえも忘れてしまう苦痛。なぜこんなことが自分の身に起こるのか……まさか、ジェッキンゲンの言っていることと何か関係があるのだろうか？　アーチャは考えようと努めたが、次の瞬間……。

それは銃声だった。アーチャのいる部屋のすぐ外から聞こえてきた。一発目と二発目、そして少し間を置いた三発目が聞こえたとほぼ同時に、兵士が一人、拳銃を構えたまま部屋の中に押し入ってきた。

失いかけていた意識が瞬時によみがえり、アーチャにとっさに語りかけてきた。彼は敵ではないと。その言葉どおり、アーチャはこの兵士に見覚えがあった。

「これは何事ですか！　今の発砲音は？」

ジェッキンゲンが勢いよく立ち上がり、今しがた部屋に入ってきた兵士に向かって狂ったように叫んだ。兵士はかぶっていた帽子を脱ぎ捨て、よりしっかりとジェッキンゲンを見つめた。銃口が怪しくキラリと光った。

「あなたはスタンバイン小部隊に入隊した新人の……確か名は……」

「ユイツだ」

ユイツは引き金を引いた。つい先ほど、通路で鳴り響いたあの発砲音が部屋の中で強く反響した時にはもう、その銃口から一発の弾丸がジェッキンゲン目がけて飛び出していた。しかし、弾丸はジェッキンゲンの高い鼻の数センチ手前でピタリと止まった。

ユイツはもう一度、今度は全身の力を込めて（アーチャにはそう見えた）引き金を引いた。一発目の発砲音の余韻に二発目が重なり、アーチャの耳はしばらく使い物にならなかった。だが、その二発目もやはり一発目と同じ運命を辿った。ジェッキンゲンの右目を貫こうと企てていた弾丸は、その数ミリ手前で無情にも短い人生を終えた。ジェッキンゲンの目と鼻の先で静止したままの二発の弾丸は、その場に恐々と漂い続けていた。

「反逆者か……考えが甘かったね」

死んだ弾丸が息を吹き返した。上下左右と小刻みに振動し、赤く発光を始めたのだ。ジェッキンゲンの醜悪な笑顔がユイツに微笑みかけると、その二つの弾丸は、世界最速の飛行速度を誇る戦闘機も顔負けの速さで持ち主の元へと帰っていった。アーチャは息を呑んだが、その時はもうすでに、弾丸がユイツの体を貫通し、背部のド

アに食い込んでいた。
その光景に、アーチャは驚愕し、ジェッキンゲンは目を細めてニッタリと微笑んだが、当の本人は相変わらず拳銃を構えたままだった。やがて、ジェッキンゲンの表情がアーチャと同じになった。

「僕は不死身だ。今を生きる者たちの記憶として存在しているから」

ジェッキンゲンの目が丸くなった。ユイツの言っていることは、本人以外決して理解することのできない言葉だろう。それを“戯言”と認識するのは、ジェッキンゲンだけではないはずだ。そもそも、不死身の人間がこの世にいるはずがない。

「ユイツ……お前……どうしてここに？」

アーチャの言葉は切れ切れだった。ユイツがどのようにして弾丸を回避したのか、そのトリックを見つけ出そうと彼をくまなく観察していたためだった。ユイツの軍服には確かに弾丸の貫かれた痕跡が残されているが、どうも手傷を負った風には見えない。

「この世界に、本当に終わりの日が訪れるというのなら……僕のこの行為は全くの無駄と言えるだろう。だけど、誰かを助けるために投げ出せるその命が、何にも勝る勇気に値するとしたら、それは世界の破滅を防ぐ最大のきっかけになるかもしれない」

淡い光を放つユイツの瞳がアーチャを静かに見つめた。アーチャは椅子の背もたれにしがみついたまま、ユイツの顔をじっと見上げているしかなかった。グレア・レヴで感じたあの不可思議なオーラが部屋を包み込み、アーチャの意識を再びもうろうとさせた。

「そのきっかけを作り出せるのは、アーチャ、君たちだ」

「え、俺たち？」

アーチャはぼんやりと聞き返した。ユイツはキャビネットの中のワインに銃の照準を合わせた。ジェッキンゲンが慌てた様子で一歩踏み出し、アーチャがその動作に引っ張られるような具合に立ち上がった。その時既に、引き金は引かれていた。

ジェッキンゲンの叫び声と銃声が重なった。たそがれ時の雲を眺めているような、薄紫色の煙が部屋の一角を満たし始める頃には、アーチャの脳みそはその役割を半分も補いきれていなかった。その煙はアーチャの目の前から次第に薄れていき、やがて大切な何かを守護するように小さくまとまって、床の上でもくもくと漂い続けた。

三人の目が不自然な行動をとる薄紫の煙に釘付けになった。そしてアーチャは、煙の中からわずかにかいま見える煌びやかな光沢を見た……一生忘れることのない、翼から発せられるその神秘的な輝きを、その目ではっきりと見たのだ。

十三章　空へ、未来へ　4

「シャヌ！」

呆然と突っ立ったままのジェッキンゲンの脇をすり抜け、アーチャは一目散に煙に包まれるシャヌの元へと向かった。煙は手で軽く触れるだけでふわりと舞い上がり、そのままうっすらとかすみながら消えていった。シャヌは気を失っているようだが、目立った外傷もないし、呼吸も正常だった。

「なぜ分かった？」

ジェッキンゲンのか細い声からは落ち着きが感じられたが、大きな怒りが込められているのも確かだった。今や、その矛先のすべてがユイツに向けられている。

「人は安らぎを求める……」

ユイツの口元にわずかな笑みが浮かんだ。拳銃の先端が初めて赤い絨毯に向けられた。

「大切な物を手に入れた時、あるいは、命に替えても守りたいと思える者に出会えた時、人はそれを必死で守ろうとする。どこかに覆い隠したり、何か別のものに置き換えて偽装したり……そのやり方は様々で、各々の個性はそれに準ずる。力の限りを尽くして守り抜こうとする者も、中にはいるかもしれない」

わずかの間、ユイツの穏やかな視線がジェッキンゲンからアーチャへと移った。

「だけどその行いは、自己を満足させるだけの些細な手段でしかない。人はみな安堵していたい。ジェッキンゲン、あなたもそうだった。シャヌという大切な“物”を、ビンの中に閉じ込めておきたかった。そして、戦争によって荒廃した未来の世界から逃げるため、我が身を守るため、この時代へやって来た……愚かしいことだ」

ジェッキンゲンの高笑いが部屋の中でガンガン反響した。その声からはおぞましさがにじみ出ていたが、アーチャもユイツも、屈強とした面持ちでジェッキンゲンを見つめ続けた。高笑いは突然始まり、突然終わった。

「どうやったか知りませんが、なるほど、私の秘密をご存知のようですね」

ジェッキンゲンは頬をピンクに染めてそう言った。

「珍事は愉快さを兼ね備えていますが、場合によっては不快を招くこともある。よって、私は今、いささか気分が悪い」

ジェッキンゲンの右手が天井へ向かって掲げられ、手の平から熱を帯びた赤い小さな球状の物体が浮かび上がるのをアーチャは見た。次の瞬間、ユイツはもう動き始めていた。

「シャヌを連れて部屋を出るんだ！」

頭上から足元へ向かって大きく手を振り下ろしながら、ユイツが大声でアーチャに言った。アーチャは半ば衝動的にシャヌを抱きかかえ、開け放たれたままのドアに向かって走った。

「させるか！」

背後からジェッキンゲンの憤る声が後を追いかけてきた。通路へ出てから部屋の中を振り返ると、そこにはまたもやアーチャを驚愕させるような光景が広がっていた。

ユイツとジェッキンゲンの間の空間が、まるで水面のようにゆらゆらと揺らめいていた。その揺らめきを通して見るジェッキンゲンの姿は、まるで波立つ水中に潜水しているかのように原型をとどめていない。

ジェッキンゲンが右手を振り下ろした。赤い球体が発光しながらこちらに向かって飛んできたが、その謎の空間に触れると、音もなく消滅してしまった。そのうち、空間の揺らめきも少しずつ消失していった。

「何をした？」

ジェッキンゲンの声は動揺を隠しきれていなかった。

「月影の落とし道……正式名称“ムーンホール”。空間を捻じ曲げたんだ。簡単に言うと、別の場所と場所とをつなぎ合わせた。万物は、僕の作り出す特別な壁面の前では無力と化す」

「ならば知恵比べといきましょうか」

ジェッキンゲンの口調は穏便で、ほとんど挑発じみた発言だった。きっとユイツの実力を見込んでのことだろう。通路に転がる鎧をまとった死体をなるべく見ないように注意しながら、アーチャはそう考えた。

「私の魔力とあなたの超能力、どちらがその上をいくのか勝負です。

あなたがアーチャとシャヌをここから助け出せるのであれば、最後までその力を拝見させてもらいたいものです。無論、私が本気を出せば、あなたはここから生きては帰れませんけどね」

「能書きなんて聞きたくないよ。さっさと始めよう」

ジェッキンゲンが大きく一歩踏み出した。ユイツは手を頭上に掲げたまま後退し、後ろ向きで通路へと出た。そして先ほど同様、頭上から足元に向かって勢いよく手を振り下ろした。手の動きに沿って空間がねじれ、ドア枠の中のジェッキンゲンが縦に大きく揺らめいた。

「……芸が無い」

ドア枠に作られた『ムーンホール』に向かって、ジェッキンゲンは尚も歩き続けた。アーチャはジェッキンゲンの姿がその空間のねじれと共に消え去るのを目の前で見て、再び感銘した。

「なあ、今のどうやったんだ？　お前も魔法を使えたんだな」

どこかに向かって歩を進めるユイツの背中に向かって、アーチャは感慨を込めてそう言った。ユイツはその場で急に立ち止まり、怖い顔でアーチャを振り返った。

「無駄話をしてる余裕はないんだ。分かってるのかい？　君は今からシャヌを連れてここから出なくちゃいけないんだ」

ユイツはそうたしなめると、再び歩き始めた。ユイツの説教は続いた。

「大勢の兵士たちから逃げ切るにはそれなりの覚悟が必要になってくる。生半可な心構えでいるんなら、今からでもいい、冷静な判断をできるような精神状態を維持してくれ。……もうそろそろ、通路の末端に仕掛けた“見えない壁”の効果が消滅する頃だ。さあ、急ごう」

二人が足を速めた時だった。天井の照明の間からジェッキンゲンが姿を現し、アーチャたちの行く手を阻んだ。コウモリよろしく天井にぶら下がるその姿は、アーチャたちを戦慄させるには十分すぎるほどの不気味さをかもし出していた。

「そんな……あの空間は、戦闘機の外壁につながっていたはずだ」

「そうだったんですか」

焦るユイツを楽しむような口調でジェッキンゲンは言った。

「あれは魔法体といって、言わば私が作り出した幻影です。さて、次は私の番ですよね？」

ユイツはとっさに来た道を振り返り、またも手を大きく振り下ろした。二人の後方に、ムーンホールが姿を現した。

「アーチャ、行くんだ！」

次の瞬間、ユイツの体はジェッキンゲンの作り出した半透明の球体に包み込まれ、身動きできない状態になっていた。アーチャのすぐ目の前に、ジェッキンゲンの差し出す長い五本の指があった。

「さあ、アーチャ。大人しくシャヌを渡しなさい。もちろん、無償

の取引ではありません。あなたたちの自由を約束しましょう。そうすれば、もう軍と戦う必要はなくなるのですよ。地上の世界で、あなたたちは死ぬまで平凡な人生を送れるのです」

「シャヌのいない自由な人生なんて、ちっとも魅力を感じないね」

アーチャは本心を言った。白い靄の立ち込む半透明の球体の中で、ユイツが嬉しそうにうなずくのがうっすらと分かった。ジェッキンゲンは逆さまの宙吊り状態のままニッタリと笑った。

「君がそういう態度で盾突こうというのなら、おのずと答えは出るでしょう。私は君を殺してでもシャヌを奪い返す」

アーチャはとっさに踵を返した。数メートル向こうに漂うムーンホールが、アーチャとシャヌを今か今かと待ちわびていた。

「逃がすか！」

直後に、背後から聞こえてきたのは、刃と刃がこすれ合うような嫌な金属音だった。アーチャはシャヌをしっかりと抱えて空間の歪みに飛び込み、その先がどうなっているのかも分からないまま身を伏せた。たくさんの何かが頭上を飛び去っていくのが音で分かった。髪の毛の先端をかすめていくこともあり、アーチャはその度に身を縮めた。ずっと奥の方から聞こえてくるのは、何か金属のような物が壁にぶち当たる奇怪な音楽だった。

十三章　空へ、未来へ　5

やがて訪れた静寂の中で、アーチャはゆっくりと顔を上げた。そこは薄明るいどこかの部屋だった。そばには机と椅子が並べられており、その向こう側の壁際には何かキラキラするものが散らばっている。

アーチャはその光輝く物体をもっとよく見ようと壁伝いに立ち上がった。それは無数のナイフだった。

「本当に殺すつもりだったのか……」

金属製の壁に深く突き刺さったナイフを恐る恐る観察しながらアーチャは呟いた。

アーチャたちが迷い込んだ部屋は会議室のようなところだった。字を書くためのホワイトボードが三つも置いてあり、机の上には軍専用の迷彩柄の悪趣味なコップやら、『今季の予算』と書かれた書類のようなものがペンと一緒にいくつもおいてある。

アーチャはシャヌを壁に持たせかけ、肩を軽く叩きながらシャヌの名を呼び続けた。だが、シャヌは一向に目を覚まそうとしない。きっと何か強力な魔法をかけらていて、意識を取り戻せないでいるのだろう。アーチャはシャヌの顔色を窺いつつも、無線機の電源を入れた。

「レッジ、聞こえるか？　こちらアーチャ。応答してくれ」

「こちらレッジ！　無事で良かった！　シャヌも一緒みたいだな」

待ってましたとばかりに、レッジの素早い返答が無線機から返ってきた。

「シャヌが一緒って、どうして分かったの？」

アーチャはすかさず尋ねた。

「君が敵機に乗り込む直前にスパイウイルスの説明をしただろう？　そのウイルスが、監視カメラの映像や音声、機内の詳しい構造やデータ管理のパスワードまで、あらゆる情報を俺の元に送ってきてくれるんだ」

「そうか……ということはつまり、俺たちがこの部屋に隠れてるってことも軍にばれてるんじゃないのか？」

「……かもしれないな」

レッジの声は開き直ったかのように落ち着き払っていた。アーチャは耳を疑った。

「かもしれないって……俺たちはこれからどうすりゃいいんだ？　このままじゃ軍の拠点に連れて行かれて、結局今までの努力は水の泡だ……」

「冷静になれ、アーチャ！」

それは無線機越しだというのに、アーチャはレッジの凄みの効いた声に思わず沈黙してしまった。

「言っただろう。こっちには敵機の情報が筒抜けだと。俺に任せろ、アーチャ。必ずそこから助け出してやる」

勇気付けられるようなレッジのたくましい表情が、小さな無線機を通してアーチャに語りかけてくるようだった。この人なら絶対に信用できると、アーチャは無線機に向かって力強くうなずいた。

「よし。……アーチャの言ったとおり、機内の兵士たちが動き始めたようだぞ。まずはそこから出よう」

アーチャはシャヌを軽々と背負い、片手で器用に無線機のボリュームを上げた。

「その部屋には二つの出入り口があるはずだ。『N』と大きく書いてあるドアから通路へ出ろ。『W』ではなく、『N』だぞ。……急げ、敵は大勢いる」

アーチャはドアを開け放ち、急いで通路に飛び出した。

「次はどこ？」

小刻みに足踏みしながら、アーチャは急き立てるように聞いた。聞いているのかいないのか、無線機から聞こえてくるのは慌しい物音だった。

「アンジ、さっき出力した戦闘機の見取り図を広げろ！　違う、それじゃない！　さっきじいさんが眺めてたやつだ……ほら、じいさんがまだ持ってる！」

右往左往してまで気を落ち着かせようとするアーチャの気持ちも露知らず、無線機のスピーカーから聞こえてくるのは相変わらずなやり取りだった。

「レッジ、まだか？」

アーチャはもう我慢できなかった。

「長引かせてすまない。えっと……今君がいるのはこの通路だから……右へまっすぐ進むと、すぐ左手に別の通路があるはずだから、その通路を更に奥へ進め。突き当たりにドアがあるはずだ。大丈夫、モニターには敵の影さえ映ってない」

レッジがすべてを言い終える前に、アーチャはもうとっくに走り出していた。レッジの言ったとおりに進んで行くと、次に現れたのはドアだった。押しても引いても開かない。

「レッジ、だめだ！　このドアびくともしないよ！　引き返した方がいいんじゃないか？」

「待て待て！　近くに、ドアを開けるための鍵みたいなものがあるはずだ。よく調べてみろ」

アーチャはドアの脇にある親指サイズほどの窪みを見つけた。それは、何か硬い物をぶっつけてへこませたような、小さくて目立たないものだった。

「何だろう……ドアのそばに、白いパネルに覆われた窪みがあるけど？」

窪みをしげしげと観察しながらアーチャは言った。

「よし！　こっちも、抽出したデータの中からその鍵の情報を見つけ出した……アーチャ、こいつは指紋センサーだ！」

レッジの声は興奮で今にも張り裂けそうだった。

「指紋って、指先の模様みたいなやつのことだろ？　そんなのが鍵になるはずない」

アーチャは納得がいかないとばかりに抗議した。

「軍の間でのみ使われる最新の検出技術だ。これは厄介だぞ……数字を入力する機種は、言ってしまえば誰でも入室可能でセキュリティも薄いが、こうした個人を特定させるようなものは元々の保存データを破壊して、新しい情報を組み込まなければ……」

「とにかく！　俺はこれからどうすりゃいいんだ！」

アーチャの理解の範疇をないがしろにした説明を夢中になってまくしたてるレッジの気を静めようと、アーチャは大きな声で怒鳴った。

「そうだったな……俺はセンサーの内部情報を書き換えるから、しばらくそこで待機していてくれ。五十四秒で方をつける」

心の中でできるだけ早く時間を数えながら、アーチャはレッジからの連絡を待った。三十六秒まで数え終わった時、無線機からアンジの悲鳴のような声が響き渡った。

「あいつらだ……すぐ近くまで来てるぞ！」

モニターに映る兵士たちの姿が、アーチャにも見えたような気がした。心なしか、今しがた走ってきた通路から大勢の足音が折り重

なって鳴り響いている。銃を構えた一人の兵士が前方の通路から現れ、彫像のように固まって警戒していたアーチャに一瞬で気付くなり、何やら叫んだ。兵士の声が聞こえなかったのは、おそらく背後のドアが低い音を立てて開いたせいだろう……？

「ああっ……ドア！」

アーチャは仰天した拍子にシャヌを落とすところだった。兵士たちのたくさんの足音と重なるようにして、無線機からレッジの声がした。

「もたもたするな！　さっさと中へ入れ！」

アーチャが中に滑り込んだ瞬間、ドアは再び元の位置に戻り、アーチャと兵士たちとの間に分厚い頑丈な壁を作ってくれた。安堵しているアーチャに対して、無線機から聞こえてくるのは無情といえるほどのレッジの言葉だった。

「ドアは封鎖したが、開けられるのは時間の問題だ。すぐ左手にある階段を下りて、まっすぐ前方へ進んでくれ」

十三章　空へ、未来へ　6

「ちょっと聞いていいか？」

階下に辿りついた時、アーチャは遠慮がちに聞いた。周囲は薄暗く、唯一の明かりは壁際に等間隔に配置された、不吉な光明を放つ赤い小さな蛍光灯だけだった。

「何だ？　手短にな」

「ここが雲よりも高い空の上だってことを承知で聞くんだけどさ…俺たちが地上にどうやって戻るのか、その手段も考えてるのか？　……ほら、ファージニアスたちの乗った戦闘機は攻撃されて、今は消息がつかめないだろ？　本当は、あの小型戦闘機が俺たちを救助する手はずだったんだ」

スピーカーから聞こえてくるのは、レッジの余裕に溢れた短い笑い声だった。

「君からの連絡を待つ間、ただボーっと葉巻を楽しんでいたとでも思っているのか？　安心しろ。さっきも言っただろ、必ずそこから助け出してやるって。その通路を抜けると、脱出ポットのある部屋の真ん前に出る。君たちは脱出ポットに乗り込んでそこを出るんだ。また色々と面倒な操作が必要になってくるが、大した問題ではない。脱出した先は大海の上空で、着水に至っては特に支障はないはずだ。俺の勘だが、フィンらの乗った小型戦闘機も海に落ちたはず……残念ながら、まだ無線は通じていないが。……おい、アンジ。お前何をした？」

レッジの声色が唐突に変わった。アーチャの不安を掻き立てるような口調だ。

「どうした？　何かあったのか？」

アーチャの耳に伝わってくるのは、キーボードを凄まじい勢いで叩きまくる連打音で、それに混じって時折聞こえてくるのは、レッジの酷い悪態だった。

「何があったんだよ？」

アーチャの足は自然と歩くスピードを速めていた。

「アーチャ、よく聞け！　スパイウイルスの位置がばれて、今俺たちのいるハッキング元の地下室まで場所が特定されちまった！　ほとんどすべてのデータ受信が遮断された挙句、サーバーがダウンしてやがる！」

ようやく返ってきたレッジからの返事は、絶望的なものだった。その間にも、キーを打ち続ける音が休むことなく聞こえてくる。この非常事態を処理しようと、レッジが奮闘しているらしい。

「位置がばれたって、つまりどうなっちまうんだ？」

アーチャは長くて暑苦しい通路を汗だくになって走り抜けながら、無線機に向かって叫んだ。無線機からレッジの返答がやってくる前に、アーチャの背後から「バン！」というけたたましい騒音が連続して聞こえてきた。立ち止まって振り返ったその先には、天井から床に向かって次々と落下してくる巨大な壁の姿があった。アーチャの後を追いかけるように落下してくる壁の一つ一つに数字が書かれ

ており、近づくたびに数が一つずつ減らされていった。アーチャを中に閉じ込めるつもりか、もしくは押し潰すつもりなのだろう。まさに死へのカウントダウンだ。

「いいから走れ！　壁の降下は突き当たりまでなら問題ない！　とにかく振り切るんだ！」

アーチャはそれこそ死ぬ気で通路を疾走した。汗ばむ手から何度もシャヌを振り落としそうになったが、その度に体勢を立て直し、すぐ背後まで迫ってきていた無慈悲な鉄壁を寸でのところでかわし続けた。

「突き当たりを左へまっすぐ、正面のドアの先が脱出ポットのある部屋への入り口だ！　ぬああっ……くそっ！　軍のひよっ子どもが……俺と張り合おうってのか！」

無線機から聞こえてくるレッジの声をかろうじて聞き取りながら、アーチャは何とか無事に通路の突き当たりまで辿り着いた。『0』と大きく記された最後の壁がアーチャのすぐ後ろで悔しそうに落下し、その動きを完全に停止させた。アーチャはふらつく足取りで突き当たりを左に曲がった。三十メートルほど前方に、すっかり見慣れた鉄製の強固なドアがアーチャを待ち構えていた。

「よく聞け、アーチャ！　軍の奴らがドアをロックしようと企んでる！　こっちの回線状態はもう虫の息で、ドアロックの外部システムに即席の防壁プログラムを組み込むのがやっとだ！　回線がダウンする前にそこを脱出しろ！　閉じ込められるぞ！」

アーチャはもうろうとする意識の中で、残された余力を最後の一滴まで振り絞って通路を駆け抜けていった。走ろうと思ったわけで

も、助かりたいと哀願したわけでもない。シャヌを守りたいというアーチャの強い意志が、その疲れ切った両足を無意識の内に動かしていたのだ。

ドアの取っ手にアーチャの指が触れた。倒れこむようにして取っ手を掴み取ると、体重を利用してそのまま奥へ押した。ドアは開かれ、その向こうから眩いほどの明かりが射し込んだ。

アーチャは倒れこむようにして通路の外へ飛び出した。その拍子に手から無線機が滑り落ち、何者かの白い革靴の手前まで転がっていった。

「はいはい、ご苦労さまです！」

見上げると、すぐそこに靴の主がいた。そいつは、アーチャが今一番会いたくない人物だった。

「ジェッキンゲン……どうしてここに？」

息も絶え絶えにアーチャが聞いた。ジェッキンゲンの冷たい瞳がアーチャを見下ろし、次いでシャヌを見つめた。

「私は魔法使いですよ。魔法体を作って機内中を監視することなんて、すこぶるたやすいことです。もっとも、この時代は機械文明の最盛期ですから、魔法を代用するような機器はそこらへんに転がっているものです。例えば、この小型無線機とか」

アーチャは床に落ちていた無線機に手を伸ばしたが、手遅れだった。無線機は小さく爆発して粉々に吹き飛び、金属の焼ける悪臭がアーチャの鼻の奥を刺激した。外界との連絡手段が完全に絶たれてしまった。

「元国軍研究員のレッジが我々の手を焼かせた張本人だったなんてね……あのスパイ型のウイルスから発信元を特定した時、私としたことが、思わず恐怖を感じましたよ。数時間前に訪れていたあの廃墟も同然の地下深くに、軍と肩を並べるだけの高機能コンピュータが顔を揃えているんですもの。でも、これでレッジの悪巧みも終わり……もう軍隊がシシーラに向かってる頃でしょう。あの酒場の地下に潜むドブネズミどもを殺すためにね」

アーチャはとっさに無線機でそのことを伝えようとしたが、今しがたジェッキンゲンに破壊されていたことを思い出し、断念せざるを得なかった。だが、このままでは本当にアンジたちが殺されてしまう。

「やめさせてくれ……レッジたちはもう関係ないはずだ」

震える膝で立ち上がりながら、アーチャはしゃがれ声で説得を試みた。ジェッキンゲンの表情に会心の笑みが広がった。

「では、こうしましょう。君がシャヌを素直に引き渡してくれるのであれば、彼らの命は助けてあげます。今回の一件もなかったことにしましょう」

意地の悪いその二つの瞳が、口元に浮かぶ冷笑のように残酷な笑みを浮かべているのがアーチャには分かった。

「お前の心はどこまで腐ってやがるんだ?」

アーチャは食いしばった歯の隙間から怒りを込めた声を発した。

「おや、これは立派な取引ですよ。君がこれに同意できないという

ことは、つまり、私はシャヌを力ずくで奪い取り、レッジと君の仲間は軍によって殺されるということなのです。いくらバカな人間でも、選択しなければいけない答えがどれなのか、すぐに分かるでしょう。そう、君には『同意する』という選択肢しか残されていないのです」

ジェッキンゲンの残忍な笑顔が、戸惑うアーチャをさも愉快そうに見つめていた。どうすることもできない自分への憤りと、この取引から最善の選択肢を導き出さなければいけないという困惑が頭の中で混沌とし、アーチャを極限の状態まで苦しめていた。

「どうして……」

アーチャは苦し紛れに言葉を発した。

「どうしてそこまでしてシャヌを求める?」

ジェッキンゲンの表情から笑みが薄れ、やがて無表情になった。彼の心の中に眠る辛酸な過去が、その無表情という名のスクリーンに映像として浮かび上がっているようだった。

「私の求めるものすべてを、シャヌが持っているからです」

ジェッキンゲンのおぼろげな眼差しがアーチャを捉えた。アーチャはまぶたをパチパチさせた。

「では逆に問おう。なぜ君はシャヌを求める? なぜ自らの危険を冒してまでシャヌを助けようとする?」

『俺はどうしてシャヌを助けたいんだろう?』

アーチャが自らにそう問いかけたのは、つい昨日のことだった。
答えの見つからないその疑問を、頭の中で幾度も考え、思い、悩んだが、辿り着く先はいつも深い闇の中だった。

十三章　空へ、未来へ　7

「それは……」

アーチャの言葉が途切れた。未だ正解の見つからない回答を漠然とした面持ちで口にしようとしていたからなのかもしれないが、理由はまだ別にあった。アーチャとジェッキンゲンの間にあるわずかな空間がぐらぐらと歪み、アーチャは水中から水面を見上げているような不思議な感覚を覚え、それが起因して言葉を喉に詰まらせた。

ムーンホールからユイツの生首が突き出し、それに続いて二本の細腕が勢いよく伸びると、ジェッキンゲンの首と右腕をつかんだ。

「やはり、部屋に閉じ込めておいても無駄でしたか」

首を絞められているせいで、ジェッキンゲンの声は潰れていた。

「お前はここにいてはいけない……さっさと未来へ帰るんだ」

ユイツの両手に大きな力が加わり、ジェッキンゲンの魔法体を更に苦しめた。ユイツの瞳が威嚇するようにアーチャを振り返った。

「何をボサッとしてる！　早く行くんだ！　早く！」

アーチャはシャヌを連れて二人の脇を走り抜け、その先にある少し開けた空間を見た。そこは、アーチャがこの大型戦闘機に向かって飛び込んだ、あの場所だった。右斜め前方には両開きの大きなドアがあり、すぐ左手には細かな文字のつづられたドアと、二階へと通じる横幅の狭い急な階段がある。アーチャは床に飛散する割れた小ビンのかけらと、照明に反射してキラキラと輝く液体を見つけた。

「脱出ポット……」

アーチャはすぐそばにある、小さなドアを見つめた。レッジの言っていた、脱出ポットが格納されている部屋に通じているに違いない。アーチャの心は躍った。

「待て！」

アーチャの手が取っ手に触れた瞬間、ユイツの声が轟いた。アーチャは、取っ手から指先を伝って静電気が流れたとでもいうように、反射的に手を引っ込めた。

「君の進む道はそっちじゃない」

気付くと、アーチャの背後にある大きなドアの近くに空間の歪みが生じていた。その空間からユイツの片手が突き出し、しばらく宙をさまようと、ドアの脇にある赤いスイッチを殴るようにして押した。耳障りなほどの警報が鳴り響き、同時に、巨大なドアが左右にゆっくりと開いた。

ユイツが何をしたいのか、アーチャにはさっぱり見当がつかなかった。

「どうしろっていうんだ？」

アーチャは当惑して通路の先のユイツを見た。だが、そこには胸を押さえて苦しそうにあえぐジェッキンゲンの姿しかなかった。アーチャは周囲を見回し、今しがた開かれたドアの脇で空間が揺らめく様を見つけた。そのねじれからユイツの全身が威勢よく飛び出し、綺麗に着地した。

「ここから飛べって言いたいのか？」

アーチャは流れる雲をあごで差し、いきなり突っかかった。

「そうだよ」

他人事を決め込むようなユイツの一言だった。アーチャは愕然とすると同時に、いささかの恐怖を感じた。それはユイツに対しての恐怖……だが。

「正気か？　俺たちに死ねって言いたいのか？　すぐそこに脱出ポットがあるんだぞ！」

アーチャは困惑しきった表情で脱出ポットの部屋へと通じるドアを指差し、ユイツの考えがバカバカしいとばかりに首を振った。

「もう時間がないんだ。アーチャとシャヌじゃなきゃ駄目なんだよ」

アーチャは我慢の限界だった。くるりと回れ右をし、一刻も早く脱出ポットに乗り込もうと自分に言い聞かせた。

「恐怖を背にして、また逃げるのか？」

アーチャは自らの肩越しにユイツを見た。シャヌの翼に見え隠れするユイツの表情が、挑発的にアーチャを見つめ返していた。

「目の前の真実と向き合うんだ、アーチャ。そして思い出すんだ」

「何を……何を思い出すって？」

アーチャの声が微動した。それは、怒りが呼び起こす微かな震えだった。

「ふざけんな……俺のすべてを知っているような言い方はやめろ！」

発狂寸前のアーチャに向かってユイツがゆっくりと歩み寄って来た。風が巨漢のうなり声のような音を上げて吹きすさんだ。

「君の十七年間のすべてを知っているわけじゃない」

ユイツの声は、アーチャを説きつかせるように穏やかだった。

「だけど君は、誰よりも君自身が一番知っておかなければならない真実を、まだ失ったままでいる」

「どうして俺が……？」

アーチャはすがるような視線でユイツを見た。

「君がアーチャ・ルーイェンという存在であるための、決定的な過去を軍に奪われてしまったためだ……」

ユイツがシャヌに向かって手を差し伸ばす様子を、アーチャは呆然と眺めていた。ユイツの手の平が青白く輝き、シャヌの露草色の髪を柔らかく包み込んだ。ずっと閉じられたままだったシャヌのまぶたがゆっくりと開き、その宝石のように輝く瞳でアーチャを見つめた。アーチャがずっと待っていたシャヌの笑顔が、すぐそこにあった。

「アーチャ。私ね、アーチャの背中を、ずっと感じてたよ」

シャヌはゆっくりと床に降り立ち、またまっすぐにアーチャを見つめた。アーチャの不器用な笑顔がシャヌを見つめていた。

十三章　空へ、未来へ　8

「アーチャが私を必死になって助けてくれたことも、今までの話も、みんな分かってる……これから何をしなければいけないのかも、みんな分かってる」

「面倒な小芝居なら、もうたくさんだ！」

通路の暗がりからジェッキンゲンがよろよろと現れ、出し抜けに吠えた。ユイツが一歩前へ踏み出し、アーチャとシャヌの肩をつかんでドアの方へと押しやった。吹き荒れる風が渦となってアーチャの前髪をかき上げた。

「行くんだ、二人とも！　もう時間がない！」

ジェッキンゲンの前に立ちはだかるユイツの果敢な姿は、アーチャの心にしっかり焼きつくほど印象的なものだった。ユイツは、本気でアーチャとシャヌに空へ飛び立ってほしいに違いない。ヒナが巣立ちするのと同じように、この大空へ向かって羽ばたいてほしいと、心からそう切願しているに違いない。

「どこへ行こうというのです？」

あざけるような口調でジェッキンゲンが聞いた。だが、アーチャたちを見つめるその大きな二つの目玉は、動揺を隠しきれていなかった。上へ下へ、右へ左へ……黒い瞳がぐりぐりと動き回り、呼吸も荒い。

「さあ、シャヌ。私のところへおいで、さあ。もう部屋に閉じ込め

たり、薄暗い海底に連れて行ったりしないから。さあ、こっちへおいで……さあ！」

シャヌの毅然とした表情は、決して首を縦に振ったりしなかった。アーチャはジェッキンゲンを睨み返すシャヌの剛毅な横顔を見た。ジェッキンゲンの不気味な笑い声が響き渡った。

「なぜ死に急ぐのです？　その飛べない翼で、どうやって空を舞おうというのです？　理解できない……私には、ちっとも理解できない！」

ジェッキンゲンの醜悪に満ちたしかめっ面は、そこにあったはずの美形な顔立ちを、原型も留めないほどに覆い隠してしまっていた。

「私は、私自身を恐れていた」

シャヌはジェッキンゲンだけでなく、その場にいる全員に語りかけるような口調で言った。アーチャは、シャヌの勇敢な眼差しをしっかりと見た。

「私は、私に宿る魔力を恐れ、自分がマイラ族であるという真実から逃げ続けてきた。戦争の兵器として使われるこの血を、憎いと感じたこともあった。でも、その度にアーチャがそばにいてくれた……たくさんの仲間が励ましてくれた……一人じゃないんだって、気づかせてくれた。だから、私はもう何も恐れない」

シャヌがジェッキンゲンに背を向けた時、アーチャはシャヌの微笑みを……天使のような優美な微笑みを、見た。

「私の中の英雄は、ずっとアーチャだった」

怒りや悲しみ、喜びでさえも、その瞬間、アーチャの中から消えてなくなったような気がした。アーチャの心に眠る『ゼル・スタンバイン』という名の英雄が、決然たる面持ちでアーチャを見つめるのは、ユイツと同じ、この空へ飛び立ってほしいと願っているからなのかもしれない。

「だから私、アーチャと一緒なら絶対に飛べる。一人ではできなかったことが、アーチャとならできる気がする。行きましょう、アーチャ」

アーチャの腹はもう決まっていた。自分のことを心から信じてくれるシャヌを目の前にして、ためらうことも、尻込みすることもありはしない。信じる思いが勇気につながることを、アーチャは知っていたのだ。シャヌがそうだったように。

「俺もシャヌを信じる。だから、絶対に帰ろう。みんなのところへ」

アーチャはシャヌの手を取り、開かれたドアの向こうに際限なく広がる、夜明け前のほの明るい空をしっかりと見つめた。

「アーチャ、シャヌ」

高まる緊張感の中、ユイツが弾むような声で二人の名を呼んだ。アーチャとシャヌが振り向くと、ユイツは笑みを浮かべた口元でこう言った。

「見てくるんだ、未来を。東の光が導いてくれるその時に」

ユイツの発言を怪訝に受け止めながらも、アーチャとシャヌはも

う一度空を見た。ライラック色に染まる空に断片的な雲が重なり、川の水が流れるようにアーチャの視界から遠ざかっていく。

「怖くない？」

空に向かって歩を進めながらアーチャは聞いた。より強くアーチャの手を握り返すシャヌの手は、わずかに震えていた。

「ううん、大丈夫……大丈夫」

自分に言い聞かせるようにシャヌは言った。背後でジェッキンゲンが何やらわめいていたが、アーチャの耳にはもう届いてこなかった。風はますます高らかにうなり、緊張のせいで頭の中は空っぽだった。

つま先がドア枠に触れた時、二人は顔を見合わせた。

『この空の向こうに未来が待っているとしたら、それはどんな未来だろう？』

飛び立つ間際に、アーチャはふと考えた。人のために願うこと、信じることを忘れた人間たちに……そして、無意味に戦争を繰り返し、平和を望もうとしないこの世界に……明るい未来など存在するのだろうか？　存在していいのだろうか？　アーチャたちを待っているのは、廃れた未来なのではないだろうか？

ユイツは、それを確かめさせるためにこの道を選択した。アーチャとシャヌは、互いに信じ合うことで勇気を得た。空へ飛び立つ勇気を、未来を知るための勇気を。

「行くよ！」

「うん！」

次の瞬間、二人はもう空の中だった。

真実が未来で待っているのであれば、こちらから出向いてやればいい。苦難の中にその真実が埋もれているのであれば、手を使って掘り返してやればいい。

そんな強い意思を糧に、アーチャはほんの少しだけ歩むことができた。この空と未来へ、ほんの少しだけ。

十四章　歌と光と霧と……　1

全身が風を切り、アーチャとシャヌは冷たい雲の中を下へ下へと落ちていった。厚い雲を抜けると、視界いっぱいに青々とした大海原が広がった。それはまるで、地球全体を眺めているかのような感銘的な光景だった。東の空は朝陽で染まり、空を、海を、そしてアーチャたちを抱擁するように照らし出した。

その暖かな曙光に包まれながら、アーチャは光り輝くシャヌの翼を見た。シャヌは翼を羽ばたかせようと試みたが、地球から天へ伸びる目に見えない無数の手が、アーチャたちを暗黒の世界へ連れ込もうと強引に引っ張っていった。

「がんばれ、シャヌ！」

より強くシャヌの手を握りながらアーチャは言った。シャヌの懸命な表情が、段々と近づいてくる青黒い海面をまっすぐに見据えた時、アーチャの耳には確かに聞こえた。それは全身が風を切っていく音とは違う、別の音だった。

風を捉え、空に抱かれるような心地よい感覚が全身を包み込んだ。翼が左右に大きく広がり、世界中の空をどこまでも駆け巡ろうと嬉々として羽ばたいた。その生き生きとした羽音を、天空へ優雅に舞い上がる翼の歓喜の声を、アーチャはしっかりと聞いた。

「……シャヌ」

アーチャは声にならない声を発した。

「飛んでる……飛んでるよ！　飛べたんだ！　シャヌ、君はやっぱり飛べたんだよ！」

「私……飛んでる……この翼で」

シャヌは自分の言っていることと目の前の現実が、未だに信じ切れないようだった。アーチャは東の空に向かって歓声を上げた。

「ついにやったんだ……ほら、見て！」

アーチャは自分自身を指差した。アーチャの背中にも翼が生えたのだろうか？　空気よりも軽々と浮き上がり、まるで重力を感じない。シャヌの翼の力が、繋ぎ合わせる手と手を通じてアーチャにも伝わったのだろう。

「アーチャがいてくれたから……私一人じゃ、絶対に無理だったはずだもの」

アーチャはシャヌの顔を覗き込み、今しがた蒼白だったその顔面に満遍なく笑みを広げた。

「俺だってそうさ。シャヌがいたから空を飛ぶことができたんだ……俺たちは互いに信じ合えた。そのことが、勇気につながった」

二人は顔を見合わせ、突拍子もなく大きな声で笑った。それは、様々な思いが頭の中で交錯し、一時的な混乱を招いたからなのかもしれない。緊張と恐怖から開放され、心の中が雲一つない青空のように晴れ渡ったからなのかもしれない。いや、もしかしたら、ただ嬉しいだけなのかもしれない。

「見て、アーチャ……太陽が」

アーチャは朝陽の射光が輝く東の空を見た。そして、別れ際に発したユイツの言葉を思い出した。

「見てこい、未来を。東の光が導いてくれるその時に……東の光って、きっと朝陽のことだったんだ……シャヌ、下を見て！」

アーチャは眼下に広がる海面に向かって指を差した。アーチャが見たもの……それは霧だった。海とアーチャたちの間にふわりと漂うその霧は、切り取られた綿菓子のように白く、その甘味を武器にこちらを誘発してくるようだった。

アーチャは息を呑んだ。

「ユイツは空間と空間をつなぎあわせる不思議な力を持っていた……時間と時間をつなぐ力が存在する可能性だってゼロじゃない……」

「それってつまり……今と未来が、あの霧の中でつながってるってこと？」

霧の上空で旋回しながら、シャヌが不明瞭な答えを口にした。この世のすべての哲学者を一つの部屋にかき集めたって、こんな会話を始める人物は誰一人としていないはずだ。そんなことは、アーチャとシャヌが一番よく理解していた。

「ばかな考えだってことは承知してる……けど、ユイツの言っていた“未来”ってのを本当に見られるとしたら、それは俺たちが探し求める答えにつながるはずだ。シャヌとじいさんがこの時間の流れに存在する理由……俺が失ってしまった過去……そして、これからの世界の在り方。その答えにつながるはずだ」

旋回しつつ、シャヌは徐々に高度を下げていった。霧はすぐそこ

まで迫ってきていた。

「私、見てみたい。未来とその答えを」

手を伸ばせば届きそうなほどすぐそこに、向こうの景色さえ窺えないほど濃い霧が立ち込めていた。陽光が射し、散りばめたスパンコールのようにキラキラと照り輝くその美しい姿は、人々を魅せるには十分すぎるほどの誘発効果をもたらしていた。

「行こう、シャヌ！　未来へ！」

その手招きに誘われるように、二人は霧の中へと飛び込んでいった。途端に視界は完全な闇に閉ざされ、二人は意識を失った。

十四章　歌と光と霧と……　2

焦点の合わない眼をしばたかせ、“じいさん”はベッドからゆっくり起き上がると、ため息した。夢の中から現実世界へ強引に引き戻されてしまったことが、何より、じいさんの気分を朝から萎えさせる主因となっていたのだ。窓から見える無表情の街並みが、夢の世界と比べると、ここまで陰惨なものか？

「わしは、“こっち”側が“まとも”だなんて、絶対に認めないぞ」

ベッド脇のタンスの中から古汚い眼鏡を手探りで掴み取りながら、じいさんは息巻いた。だが、そんな奮然とした態度も、彼女たちの前では心細い。おりしも、じいさんがまだ着替え終わっていないのに、彼女たちはやって来た。イノシシが群れで押し寄せて、木造のもろいドアに次々と体当たりを喰らわせたような騒音が部屋中に響き渡った。

「さっさと起きとくれ！　さあ！　部屋が片付かないでしょう！」

女のにべもないキーキー声がドアの向こうで絶叫し、じいさんを、老人とは思わせないほどの速さで着替えさせた。次の罵声が轟く前に、寝間着から一張羅のセーター（虫食いだらけだが）へ着替えを済ませると、じいさんはおずおずとドアを開けた。だが、完全に開き終わらないうちに向こう側から強引に押し開けられたので、じいさんは数歩飛び退かなければならなかった。女二人とクレーターのように凹んだドアが、奇怪に立ち並ぶのをじいさんは見た。

「どいとくれ」

半ば呆然と立ち尽くすじいさんを見下ろしながら、一人目の女が吐き捨てた。

「私たちが戻る前に、朝食を済ませておいて。ちゃんと全部食べんだよ」

小さな瞳の奥から軽蔑をあらわに、二人目の女が言った。部屋を立ち去り、階下に辿り着くまで、女二人の愚痴はじいさんの跡を追うように聞こえてきた。

ここ『長寿の家』で生活する者にとっては（じいさんが最後の一人になってしまったのは、もう数ヶ月も前の話だった）日常茶飯事なことだった。朝起きて、介護人の怒声でせっつかれ、ほとんど手抜きの飯を一日に三度も食わされれば、じいさんが一人、この牢獄のような老人ホームに取り残されるのも納得がいく。

『あいつらはここを潰したいのじゃ。だから、わしたちを追い出すためなら何だってする。わしたちが嫌がること、不快に感じること、すればいい。そうすれば、わしたちがここを出て他に移ることを、あいつらは承知しておるのじゃ』

これが、じいさんと三年間共に暮らした仲間の一人が『長寿の家』を去る時、最後に残した言葉だ。不明確ではあるが、真実とは大差ないだろう。むしろ、そう考えるのが当然といえば当然である。

この戦争時代、安い給料で食っていけるはずもない。女たちは、もっと歩合の良い職場に身を置きたいのだ。例えばそれは、戦場で深手を負った兵士たちが運び込まれる大きな病院だ。戦争のため、国のため、敵国に勝利するため。それがどんな手段であれ、戦争に少しでも貢献することに、それ相応の見返りがあるという知識を女たちは持っているのだ。そういった現実を心構えながらも、老人ホーム『長寿の家』でいつまでも働いている理由がどこにあろうか？

無論、一人取り残されたじいさんが、余生の全てを『長寿の家』で過ごしたいと願っているはずもない。金銭的に裕福で、介護人に「よそへ移れ」と言われれば、鼻歌混じりで荷造りし、スキップしながらここを立ち去るだろう。だがそれすらも、今のじいさんには届かぬ願いだ。じいさんには財産どころか、貯金の蓄えすらない。家族もいなければ、思い当たる親戚もいない。あるのは“お年寄り”という肩書きだけだった。

じいさんが“お年寄り”でなければ、『長寿の家』にタダ同然で入居することは出来なかったろう。介護人がじいさんを見捨て、職場を離れられない理由も“それ”だ。お年寄りをいたわらないことは、重刑な処罰が待っているに等しい。この国がこれほどまでに老人をいたわる理由として、将軍様がめちゃめちゃ年寄りなせいだから、というのはもっぱらな噂だった。

じいさんはつい四日前、七十七歳の誕生日を迎えたばかりだ。その日、散歩から帰って来たじいさんを出迎えた介護人は、嫌がらせか、それとも精一杯の愛情を込めたのかは未だに分からないが、新聞に掲載されたある記事をバースデープレゼントとしてじいさんに手渡した。それは、その日の夕刊の一面だった。

『ザイナ・シュロ将軍の勝利宣言。光爆弾“フラッシュ”をついに解禁』

その場で記事を読み終えたじいさんは、新聞を乱暴に折り畳み、コートのポケットに押し込んだ。

十四章　歌と光と霧と……　3

午後、じいさんは薄毛の寂しい頭部に地味なニットキャップを、節くれ立った手には使い古しの長い杖を、そして、昨年のバースデープレゼントに仲間からもらったふわふわの毛皮のコートを全身に、冷たい初冬の風の吹く街へと足を踏み出していた。

散歩はじいさんの日課だった。介護人たちは人や場所を選ばず、聞こえよがしに愚痴をこぼす。じいさんは正直、目覚し時計代わりの怒声よりも、まずい三度の飯よりも、この愚痴が一番苦手だった。一日中、介護人の小言を耳にしているなんて、とてもじゃないが堪えられない。じいさんは人一倍我慢強くて負けず嫌いだが、体や精神は嘘をつかない。昼食後に施設を発ち、夕暮れ時に帰る……長い目で見ると、その方が、じいさんにとっても介護人にとっても都合が良いのだ。

じいさんの密かな楽しみは、中央公園にある噴水広場で旧友と会話に興じることだった。旧友といっても、『長寿の家』で苦楽を共にした仲間のことだ。彼らは今、街外れにある老人ホーム『うさぎの寝床』で生活している。じいさんも金銭に余裕がありさえすれば、今この瞬間からでもそこに移り住むことだろう。だが、金の話とは無縁の生活を送っているじいさんの現段階を考慮すれば、それはまさに夢のような話だった。

この日ももちろん、じいさんは公園に向かってゆっくりと歩を進めていた。その道中、庭師の男が屋敷の女主人にこっぴどく叱られている様子を見物したり、坂道で車椅子を押す老婦人の手伝いをしたりもした。

そんなことも多々あって、じいさんの散歩にはいつも笑顔が耐えなかった。代わり映えのない街の退屈な風景の中には、こうした新たな出会いや発見が付き物なのだ。じいさんが散歩を日課とする本当の理由は、そこにあるのかもしれない。

じいさんはこの日、昼食に用意されたオートミールに、砂糖ではなく塩が使われていたことに半ば腹を立ててはいたものの（介護人が嫌がらせでわざとやったんだと、じいさんは結論づけた）、昨夜見た夢のことを考えるようにして、オートミールの一件を強引に忘れようとした。

その夢とは、じいさんがよく見る“不思議”な夢だった（いや、夢とはむしろ、全てが“不思議”の中にあって、その空間を無意識の内に覗き込んでしまっているだけかもしれない）。数多の種族が共存する、争いのない平和な世界がその舞台となるのだが、じいさんがそこで見たもの、聞いたもの、嗅いだもの、触れたもの、食べたもの……。五感だけが目を覚ましているかのようにフル活用され、夢を夢とは認識させない不思議な感覚でいつも心が満たされるのだ。しかし、この夢から目を覚まし、現実世界を目の当たりにした瞬間のじいさんときたら、底なしの沼にでも沈んでしまいそうな気分だった。

そもそも、じいさんがこんな夢を繰り返し見るようになったのは、つい数ヶ月前からのことだ。特にこれといった大きな転機があったわけでも、際立った介護人のいじめが続いたわけでもない。ふと、ある夜から、この夢を見始めるようになったのだ。

目の前を、老夫婦を乗せた農作業用のこぢんまりとした荷馬車が通り過ぎ、そのおぼろげな視界にようやく中央公園の噴水広場を視界に入れることが出来た時、何か奇妙なことが起こった。じいさんは昔から聴力には自信があった。そのせいで、介護人のこぼす愚痴を不必要に拾い聞きしてしまうのもまた事実だが、この歳で聴力が衰えていない場合、何かと便利なことの方が多い。だが今回は、その類が違う。

それは、歌だった。女性の歌声が聞こえる。しかも、ただ聞こえてくるのではない。行き交う人々の雑踏を、我が物顔で走り抜ける自動車の騒音を、全て無視するかのように、全てすり抜けてくるかのように、その妖美な歌声は、じいさんの耳に直接語りかけてきた。

まるで、歌声以外の雑音のボリュームだけを下げたように、その女性の声はよりはっきりと聞こえる。聴力に自信があるといっても、数多く同時に発せられる音の中から一つだけに焦点を当てるなんて器用なことが、無意識のうちに出来るはずがない。それに、この歌声は一体どこから……？

じいさんは横断歩道の真ん中で思わず足を止め、その歌声に聞き惚れていた。それは聴いたことのない歌だが、聴者全員の心に明るい希望を見出させるような、美しいものだった。手足の感覚がなくなり、じいさんの心は、再びあの“不思議”な夢を見ている時のように、たくさんの幸福感で満たされていった。

今や、耳元で鳴り響く車のクラクションの音でさえ、じいさんには全く聞こえてはおらず、そのぼんやりとした視界には噴水広場の他に、青空に白雲と共に浮かぶ一つの黒い点しか写っていなかった。

黒い点が陽の光から逃げるように進路を変えると、やがてそれは、中央公園の上空までやって来た。どうやら、あの黒い点のように見えるのは大型の戦闘機らしい。この戦争時代にはさほど珍しい光景ではない。というより、道の真ん中でいつまでもボーっと突っ立っている老人の姿の方が、街の人から見ればすこぶる珍妙な光景であることは確かだろう。どうやら、じいさん以外に、この歌声を聞き取れる者はいないらしい。

そして、謎の女性の歌声に酔いしれながらも、じいさんは見た。一体、じいさんは何を幸せそうに観察しているのだろうかと、興味をそそられた歩行人や運転手も見た。建物の窓から半身を乗り出し、空高く指を突き上げる、その住居人も見た。だだっ広い青空を流浪し、不気味に漂う戦闘機が、何か黒い塊を地上に落とす光景を……見た。

「よう、待たせちまったか？」

背後で誰かがそう言った。じいさんが振り返ろうとした、その時

……。

歌が……途絶えた。

十四章　歌と光と霧と……　4

じいさんは、カメラのフラッシュがピカッと光ったのだと、そう思った。そして、目の前に広がる光景は幻覚なのだと、自分にしっかりと言い聞かせた。これは幻か何かで、あと数秒もすればまたいつもの街並みだ……そうも言い聞かせた。

十秒……三十秒……変わらない。次は目をつむり、視界を真っ暗にしてから、十秒……三十秒……目を開けた……変わらない……何も変わらない。じいさんの目の前に広がる光景は、雑草さえも見当たらない、どこまでも続く空虚な荒れ地のままだった。

「何が……どうなってる？」

一体どれくらい回っただろうか？　じいさんはどこかに人影はないかと、どこかに残された建物はないかと、その場でグルグルと回って辺りを眺め続けた。その内に、方角さえも見当がつかなくなり、見渡す限りののっぺらな地にただただおののくばかりであった。

長寿の家は？　中央公園は？　今しがた歩いてきた道は？　街は？　人は？

ひどく狼狽しつつも、じいさんは探し続けた。だが、見事に調和する廃墟と青空（雲一つないことに、じいさんは気付かなかった）が地平線の彼方まで続いているだけで、他は何もない。それは、全くの『無』のように思えた。

じいさんはその場に座り込み、しばらくまともに使っていなかった頼りない脳味噌をフル回転させて、考えを巡らせた。

あの大型戦闘機が落としたのは街を破壊するための爆弾だったのだろうか？　しかし、この破壊力は何だ？　本当に爆弾か？　ピカッと光り輝いたあの一瞬で、街を、人を、跡形もなく消し去ったと

いうのか？　だがおかしい、おかしすぎる……爆風や熱、音さえ、何も感じなかった。……そして、この大惨事から、奇跡的にわし一人だけが生き残ったというのか？

「……これからわしはどうなるんだ？」

全てが消え去ってから十分ほど過ぎた頃、じいさんは突然、恐怖と不安に全身を震わせた。この様子では、食料も水も残されてはいない。破壊されずに済んだであろう、他国へ行こうにも、老いぼれたきゃしゃな両足と、子ども以下の体力では、その考えはあまりにも無謀すぎる。

長寿の家や介護人の愚痴が、懐かしくて、恋しくて、あのまずい飯を腹いっぱいに食べたいとさえ思えてきた時、じいさんの五十メートルほど前方で、明らかな異変が起こった。

霧だ。その一部にだけ、先の光景さえもうかがえないほどの濃い霧が立ち込めていた。巨大に膨れ上がった霧は、怪しくうごめき、ユラユラと煙のように揺れていた。

じいさんは骨をきしませながらゆっくりと立ち上がり、廃墟と化した無音の空間を、忍び足で霧に近づいて行った。今は霧が発生するような環境じゃないのに……といぶかりながら、じいさんは霧との距離を少しずつ縮めていった。砂と小石だらけの地面をしっかりと踏み締め、じいさんは、霧に触れるか触れないかの境目で足を止めた。

自分の考えがあまりにもばかげていると、じいさんは自らを咎めた。この怪しげな霧をど真ん中から通り抜けてみようなんて……その先にはきっと元通りの街並みが広がっているだなんて……。この霧を何事もなかったように通り抜けた後、自分に対するむなしさに拍車を掛けるようなものだ。だがきっと、この絶望的な状況下でそんな間の抜けたことをすれば、百年は語り継がれるような笑い種に

なるだろう。じいさんは乾いた笑い声を発した。

「へん！　わしは言ったはずだ」

霧に向かって拳を振り上げながら、じいさんは叫んでいた。

「『“こっち”側が“まとも”だなんて、絶対に認めないぞ』ってな」

じいさんは霧の中に飛び込み、走るように歩き続けた。やがて、視界は完全に閉ざされ、じいさんは気を失った。

十四章　歌と光と霧と……　5

じいさんはぼんやりと目を覚ました。

『ここはどこだろうか？』

やたらと狭い上に薄暗くて、肌寒い空気が辺りを満たしている。そばには、ヒト族と思しき青年が横になって眠っている。じいさんはほとんど空っぽな瞳でその青年を見つめ続けた。青年が目を覚ました。

「おはよう」

じいさんはとりあえず挨拶した。

「……おはよう」

こちらを見ようともせず、青年が寝ぼけた声で挨拶を返した。やがてじいさんと青年の目がばっちり合った。すると、青年の表情がみるみるうちにしかめっ面へと変わり、いかにも怪訝そうな視線でじいさんを観察した。

「あんた、誰？」

その毛皮のコートが気に食わないと言わんばかりの口調だ。それならと、じいさんは意気込んで質問に答えようとした。だが、自分の名前が出てこない。それは過去の記憶さえも例外ではなかった。昨日の食事も、自分以外の人間と会話した記憶も、なぜここにいるのかさえも思い出せない。何もかもが、脳味噌から排除されてしま

っていた。

「わしは……その……あの……だが……しかし……つまり……であるからして……ようするに……そうそう、じいさんだ」

じいさんは呆然と答えた。青年は何かを察したようにじいさんを見つめ返した。

「おじいさんだってことは見れば分かるよ……」

青年がイライラし始めたかたわらで、何やら巨大なものが地面の上でゴロゴロ動いた。それはイクシム族の男だった。

「おはよう」

じいさんが挨拶すると、男の表情に驚愕の色が広がった。その後のやり取りは、じいさんにとってあまり好ましくないものだった。初対面の巨漢から嵐のような質問が投げかけられたし、いかにも『狂人』を見るかのような目つきでこちらを観察するからだ。

「とりあえず、このおじいさんを兵士たちに預けよう。ゼル・スタンバインっていう兵士の所なら安心だ。彼なら信用できる」

青年は穏やかにそう言って、首からぶら下げてある懐中時計で時間を確認すると、イクシム族の男を振り返った。

「そっちを持って。さあ、おじいさん、散歩にでも行こうか」

じいさんは二人の力を借りてヨロヨロと立ち上がった。そしてなぜか、散歩という言葉が嬉しくてたまらなくなった。

「散歩、散歩、楽しい散歩。はて……杖はどこにやったかな？」

じいさんはあたりをキョロキョロと見回した。部屋のどこにも、杖らしきものは見当たらない。というより、杖など持っていただろうか？

「こんな、いかにも騒ぎを起こしそうなじいさんは、とっととそのゼルって兵士の所へ連れて行こう」

イクシム族特有のしゃがれ声がそう言った。じいさんは二人に連れられて狭い通路のような部屋を歩いていった。やがて、ランプの明かりに照らし出された場所まで引っ張られていった時、不意に暗闇が襲った。切れかけのランプが明滅しているのだ。じいさんはランプを食い入るように見つめた。失われた記憶を呼び起こすかのように、その明かりを、フラッシュを……。

「うぁ……！　うわあああああぁぁぁ！」

じいさんの恐怖に怯える叫び声を聞きながら、アーチャとシャヌは意識を取り戻した。二人の視界には抜けるような青空が広がり、小川の流れる静ひつな音がすぐ耳元で聞こえた。互いの手をしっかりと握り締めたまま、二人は草花の生い茂る小川の岸辺に横たわっていた。

「俺……あのおじいさんをずっと知っていたんだ……ずっと……」

アーチャの目尻から一粒の涙がこぼれ落ち、空を伝って青く染ま

った。

十五章　帰還　1

アーチャとシャヌは岸辺に生い茂る草花の上から起き上がり、辺りを見回した。そこはシシーラの街の一角だった。アーチャたちがしばらくの間過ごしたフィンとレッジの酒場が、橋の向こうに広がる空き地の中にたたずんでいるのが見える。

「知らせないと……軍がやって来るその前に……」

虚ろな声でそう言い、アーチャは酒場へ向かってよろよろと歩き出した。軍隊がシシーラに向かっていることを、まだアンジたちは知らない。

だがアーチャには、その目に映るすべての光景が幻影のような気がしてならなかった。未来を見つめていた今しがたの自分の意思に、じいさんの面影が乗り移っている気さえした。

「アーチャ、大丈夫?」

シャヌの声は、ずっと遠くの方から聞こえてくるやまびこのようになってアーチャの耳に届いた。アーチャはろくに返事もせず、ただ橋の向こう側を目指して漠然と歩き続けるだけだった。

橋を越えた道の脇に、誰かが立っている……アーチャはその人物を見て、無意識のうちに走り出していた。ゆるいアーチを描いた石橋の上をこちらに向かって歩いてくるのは、紛れもなくユイツだった。

「あれはどういうことだ!」

ユイツと顔を見合わせるなり、アーチャは出し抜けに怒鳴った。

ユイツは無表情のままアーチャを見つめ続けたが、シャヌの姿を見つけるなり、その口元に笑みを浮かべた。

「見てきたんだね、未来を」

ユイツは二人に向かって微笑んだ。

「あれが未来だって？」

アーチャは尚も怒鳴り続けた。

「あんなものが未来なはずない……あってたまるかよ」

ユイツに何を言っても動じることはなく、その真剣な眼差しでアーチャを見つめ返すばかりだった。抑え切れなかった苛立ちが徐々に静まっていく。

「おじいさんがいた……俺たちと行動を共にしてるおじいさんが……」

アーチャの声は消え入りそうだった。ユイツは一度、大きくうなずいた。

「君たちが見たものを、もっと詳しく聞かせてくれないか？」

ユイツは落ち着き払って要求した。

「未来を見てる時、私たちはおじいさんそのものだった。おじいさんが見るもの、聞く音……全部知ることができたわ。そこで私たちが見たのは、おじいさんの住んでいた街が突然消えてしまう光景…

…気づくと、海底のドレイ収容所にいて、そこにはアーチャとアンジが……」

シャヌはそれ以上続けなかった。アーチャの横顔に再び困惑の色が戻りつつあったからだ。

「……街が突然？　そうか……君たちは未来と過去を同時に行き来したんだね」

ユイツのその言葉でアーチャはますます困惑した。アーチャにしてみれば、それはまるで、異国の言葉でペラペラとまくしたてられているかのような恐ろしい感覚だ。

「かいつまんでですが、一から説明します」

二人の怪訝な表情を見兼ねるように、ユイツはそう言った。緑の軍服が空に漂う草原のようになって、アーチャとシャヌの前を右往左往した。

「まず、君たちは未来へ行く際、タイムホールと呼ばれる霧状の入り口を通過したはずです。これは僕が作ることのできるムーンホールよりも、遥かに高度な技術と魔力が要される魔法なんだ」

「あの霧はユイツが作り出したんだろ？」

アーチャは自信を持って聞いたが、ユイツは首を横に振った。

「僕じゃない。ムーンホールを発生させたのは、シャヌ、君だよ」

シャヌは必要以上に目を瞬かせて、ユイツをまじまじと見た。

「そんなはずない……だって、作り方を知らないもの……」

「最初は誰もが無知さ」

ユイツは淡々と続けた。

「君は純粋だった……何も知らなかったから。だから未来を見ることができた。君の中に眠る勇気と自信を、アーチャと一緒なら呼び起こすことができると、僕は考えた。君がその翼で空を飛ぶことで、真の魔力が開放された。朝陽という特別な光が魔力に力を注いだ。結果、未来を見たいという二人の純粋な心が、タイムホールを生み出すきっかけとなった」

ユイツは足を止め、片時も目を離すことなくアーチャとシャヌを見つめた。

「五十三年後の未来。ヒト族は、日常で当然のように目にする“光”に着目した。そして、光こそが魔力をもしのぐ絶大な力を秘めているということに気付き始めた。“フラッシュ”と呼ばれる破壊兵器が作られたのは五十八年後。実験が繰り返され、対人用に実際に使用されたのは六十年後……つまり、君たちが見てきた未来は、その六十年後の世界だと断言できるだろう。そして今から百十年後、タイムトラベルを実現可能にした力の源こそ、その光なんだ。けど、ジェッキンゲンがフラッシュの開発技術をこの時代に持ち込んでしまったせいで、また歴史が変わってしまった……」

アーチャの心臓が一気に脈拍を上げ、体中を巡る血液が熱を帯びたように感じた。未来の中で見たあの光が……大都市を一瞬で滅ぼしたあの光が、アーチャの記憶の中で無数に光り輝いている。目を

固く閉じても、それは同じだった。

「街を壊滅させたのも、ジェッキンゲンやファージニアス、おじいさんをこの時代へ送り込んだのも、みんなその光ってわけか……」

アーチャは目をつむったまま、わずかにいきり立ってそう言った。

十五章　帰還　2

「どうしてそこまで未来のことに詳しいの？」

ユイツの透き通るような二つの瞳を覗き込みながらシャヌは聞いた。アーチャはあることをふと思い出し、顔を上げた。

「そういえばお前……えっと……今を生きる者たちの記憶として存在してるって、確かそう言ったよな？　そのことと何か関係あるのか？」

アーチャは頭の中に断片的に残されていたユイツとの会話を探り出し、核心に迫るような仰々しい口調でそう聞いた。ユイツは腕組みし、石橋の末端にそびえる石柱に寄りかかって二人の方を見つめた。

「あの時、僕は自分のことを不死身だとも言った。つまり簡単に言うと、僕は実体じゃないんだ。かといって、ジェッキンゲンのように魔法体を作り出しているわけでもない。今君が言ったように、僕は人々の記憶としてのみ存在し、こうして君たちと会話している」

「つまり私が今目にしてるあなたは、“私の記憶の中の存在”っていうことかしら？」

シャヌは要領良く答え、ユイツを驚かせた。アーチャはやはり、ちんぷんかんぷんだった。

「詳しいことはまた次の機会ってことにしておこう。君たちにはいずれ、すべてを話す時がやって来るだろうから……さあ、もう行く

時間だ。仲間が君たちのことを待ってるよ」

ユイツは橋のたもとにムーンホールを作り出してから、二人に向かって手を差し伸ばし、二人を中に招き入れようとした。アーチャはあと一歩というところで踏みとどまった。

「まずい……あの酒場の地下にまだ仲間がいるんだ。もし軍がやって来たら……」

「大丈夫。彼らなら七時間も前にもうそこを出たよ。軍が到着した時、地下室はもうもぬけの殻だった」

それを聞いて、アーチャは安堵するどころか、ひどく面食らった。

「七時間も前だって？　そんなはずないじゃないか。だって俺たちが戦闘機から脱出したのは、ほんのちょっと前だぜ？」

アーチャの言葉に、ユイツはしまったと言わんばかりに顔をしかめた。

「そういえば、まだ教えてなかったね。君たちが未来で過ごしたわずかな時間は、こっちではその何倍にもなるんだ。近未来で“タイムラグ”と名付けられるこの現象は、言わば時間的なズレのことで、一直線上に存在する空間に対し、時間というものは複数の流れの中で互いに……これ以上は、専門知識があってもなかなか納得できない難しいところなんだけど、続きを聞きたい？」

アーチャは間違っても首を縦に振らないように気をつけたし、シャヌはためらいもせずに愛想良く遠慮した。

「この先はグレア・レヴというスラムにつながってる。僕は一度、ゼル・スタンバイン大尉のところに戻るから、ここでお別れだ……シャヌ、これを」

ユイツが背嚢からおもむろに取り出したのは、一冊の本だった。アーチャもシャヌも見覚えのある、あの本だ。

「ヘインの見た世界……どうしてこれを？」

本を受け取った矢先、シャヌはとっさに聞いた。

「その本の記憶が僕に教えてくれた。『私は長い時間をかけてたくさんの人の手を渡り歩いてきたが、まだその時は来ないのだ』と。だがこうも語った。『旅の終わりも近いだろう』と。だから、シャヌにその本を持っていてほしいんだ。その本の持つ些細な夢を、叶えてやってほしい」

シャヌは笑顔でうなずき、しっかりと本を抱いた。

「まだ意味の分からないことだらけだけど、その……色々とありがとな、ユイツ」

「さようなら、ユイツさん」

ユイツのパッとしない笑みに見送られ、アーチャとシャヌはムーンホールをくぐり抜けていった。その先はスラム街を一望できる小高い丘の上だった。眼下には、久しく見ていなかったグレア・レヴの荒涼とした町並みが青空と共に広がっている……はずだった。

「え……？」

アーチャとシャヌは同時に声を漏らし、まばたきし、目を疑った。そして、目の前に広がる真実をいつまで経っても受け止めることができず、その場で棒立ちしていた。

二人をすくみ上がらせていたのは、グレア・レヴを半分ほども飲み込む巨大なクレーターだった。隕石の襲来を受けたかのように、街の西半分が芸術的にえぐり取られている。

「どういうことなんだ?」

呆然と立ち尽くしたまま、アーチャは絶望的な声を発した。ユイツなら何か知っているのではないかと振り返ったが、そこにはもうムーンホールはなかった。こうしてはいられないとばかりに、アーチャは転がるように丘を駆け下りていった。シャヌがそのすぐ後を追った。

「アーチャ、止まって!」

アーチャは街の入り口手前で急ブレーキをかけ、砂埃を舞い上げながらシャヌを振り返った。シャヌは息を切らしながらアーチャに追いつき、クレーターの方を指差した。

「グレイクレイ国の軍隊が街を見張ってる……ほら、あそこ」

シャヌの言うとおりだった。クレーターの周囲には(近くで見ると、庭付きの豪邸がまるまる一軒収まってしまいそうなほどの大きさだ)暗緑色の軍服が群れを成していたし、崩れ落ちた家屋の影に見え隠れしているのは銃を構えた兵士だった。

「どういうことなんだ?」

外壁と屋根の一部分だけが残された廃屋の影にシャヌと共に身を隠しながら、アーチャはその言葉を繰り返した。

「カエマの手紙とはまるで状況が違う……それにあの穴はなんだ？」

アーチャはぶつぶつと独り言を呟き、崩れ落ちた外壁から額をちょこっとだけ覗かせながら、兵士たちの動きを細々と観察した。

「みんな無事だといいけど……」

シャヌのその一言で、アーチャは失いかけていた平常心を取り戻すことができた。シャヌの手を取り、瓦礫の山を崩さないように静かに立ち上がった。

「ルースター・コールズのアジトへ戻ろう。みんなが無事だとすれば、きっとそこにいるはずだ」

十五章　帰還　3

二人は兵士たちに見つからないよう慎重に歩を進めていった。家屋の密集した狭い通りをゆっくりと進み、瓦礫を静かに踏み越え、曲がり角では鼻先を突き出して向こうの様子を窺うほどの念の入れようだった。

街の外れに行けば行くほど兵士たちの警備体制は緩和していき、わだちのうっすらと残るアジトへの一本道に辿り着く頃には、全力で疾走しても平気なほどだった。『拾い物』で建てられたアジトのてっぺんでギラギラと光り輝くのは、ルースター・コールズの象徴、黄金の雄鶏だ。

アーチャとシャヌは、ついに帰還したのだ。

「思えば……長い……旅路だったぜ」

全速力で駆けて来たので、アーチャはもうヘトヘトだった。アジトのすぐ脇に、ヴァークスの愛車『カメレオン』が駐車されていることにも気付かないほどだった。アーチャは汗のにじむ手で取っ手を握り、半分壊れかけの扉を押し開いた。二人の帰りを今か今かと心待ちにしていた仲間たち全員がそこにいた。

「ほら、俺の言ったとおりだろ？」

聞きなれたしゃがれ声が、出し抜けに言葉を放った。

「こいつは絶対に生きて帰ってくるって」

椅子にドカッと腰掛け、この部屋は狭すぎてうんざりだ、と言わんばかりの表情でアーチャとシャヌを見つめていたのは、やはりア

ンジだった。アンジだけではない。ファージニアス、じいさん、フィン、レッジ、カエマ、トナ、マニカ……みんなが笑顔で二人を迎え出てくれたのだ。

ここでは狭すぎるからと、全員が二階の広々とした寝室に移動した。再会の喜びも束の間、街の中枢を我が物顔で独占している兵士たちに警戒しながらも、アーチャたちは、この数日の間に各々に巻き起こった事件や事実を報告し合った。円状になって尻を据えるアーチャたちのど真ん中にさっそうと踊り出たのは、ファージニアスだった。

ファージニアスはアーチャとフィンの時同様、内ポケットから金色のペラペラしたカードを取り出し、自分は実兄のジェッキンゲン・トーバノアを追って百十八年後の未来からやって来た『時空連盟』の一人であることを告白した。これにはみんな驚きを通り越して呆れるばかりだったが、アーチャとフィンもファージニアスに加勢して、何とかみんなの関心を半信半疑にまで持ち上げることができた。

「でも、二人ともよく助かったよなあ」

狙撃され、黒煙を上げながら雲の中に消えていった小型戦闘機の様を恐々と思い出しながら、アーチャは言った。ファージニアスは自身ありげににっこりした。

「あの時は幸運が続きましてね。手痛く狙撃はされましたが、急所を外していたらしく、バランスを失いつつも何とか海面に軟着陸できました。燃料に影響はなかったのですが、浸水が故障箇所にも及んでいて、修理するのに半日がかりでした。電波の送受信機が壊れていたせいで連絡も取れず、仕方なくここに帰ってきたというわけ

です。あの戦闘機は目立ちすぎるからと、中に兵士を閉じ込めたまま近くの海岸付近に乗り捨ててきましたよ……大丈夫、ドアロックは解除しておきましたから」

ファージニアスは相変わらず早口で、流暢にまくしたてた。

「とにかく、二人が無事で良かったよ」

「あなたもね、アーチャ」

ちょうど向かいに座っていたフィンが、疲れ切った、それでいてほっとしたような表情でそう言った。アーチャがシャヌを救出しに行く際、目に涙を溜めてまで説得してくれたのがフィンだったことを、アーチャはふと思い出した。

「それにしたって、お前はよくやったよ」

レッジが嬉々としてアーチャに言った。

「俺たちは影からでしかお前を支えてやれなかったが、シャヌを救い出せて本当に良かったと思ってる。ついでに、軍の埃まみれの脳みそに、俺の立派な功績がはっきりと残された。願ったり叶ったりだぜ」

「じいさんが邪魔ばかりしなかったら、もっと効率良く事が運んでたんだ」

アンジがしかめっ面でじいさんを見た。当のじいさんは、窓から外の景色を覗き込むのに夢中だった。アーチャはその幸せそうなじいさんの横顔を見て、また断腸の思いにかられるのだった。

「次は私たちの番よね」

カエマが抑揚のない声で言った。場の空気がずしりと重くなるのを、その場にいた誰もがとっさに感じ取った。カエマは（母親のマニカも、そのひざの上に頭を乗せて眠りこける弟のトナもそうだが）、アーチャが約束どおり戻ってきたというのに、ずっと浮かない顔のままだった。

「あれは、にいに最後の手紙を送った次の日だったわ。派手な服装に、銀色の髪を長く伸ばした……ファージニアスおじさんそっくりの男の人がグレア・レヴに来たの。大隊の指揮をとってた」

「そりゃ間違いなくジェッキンゲンだ」

アーチャがうなった。

「みんなももう見たでしょう？　街の半分を跡形もなく消し去った張本人は、そのジェッキンゲンって奴なのよ。あいつ、地上から上空の戦闘機にあれこれ指示して、何か黒い爆弾みたいなものを落とさせたの。あたしたちは身の危険を感じて遠くからその様子を見てたんだけど……あれはきっと“フラッシュ”よ」

十五章　帰還　4

「そんな……」

フィンは立ち上がってカエマに詰め寄った。

「それは本当なの？　どうしてフラッシュだと分かるの？　ねえ、どうして？」

肩をつかまれ、前後に揺さぶられるカエマの表情にいささかの恐怖の色が駆け抜けたが、レッジが急いでフィンの荒々しい行動を止めに入った。

「本で読んだことがあるの……百年前、マイラ族の……」

カエマはちらっとシャヌの方を見て一瞬ためらったが、やはり続けた。

「……百年前、マイラ族の住む浮遊島を一瞬にして消し去った光の話を。その本に書いてあったとおり、熱や爆風、爆発音でさえ感じ取れなかった。ただピカって光っただけなの……気付くと、街の半分が消滅していた……たくさんの人たちと一緒に」

「軍の目的は一体何なんだ？　ただの殺戮か？」

沈黙を背にアーチャが怒鳴った。

「殺戮が目的なら、こんなスラム街を狙わずに、もっと人や建物の多い都市部を攻撃するだろう……意味のある攻撃をな」

レッジが見解を述べた。すると、アンジが何か思い出しように身を乗り出した。

「レッジ、お前言ってたよな？　フィンは軍の秘密を持ってるって……そのフラッシュとかいう得体の知れない兵器と何か関係があるんじゃねえのか？」

レッジが何か言おうと口を開きかけたが、フィンが手を差し出してそれをやめさせた。

「そのとおりよ」

フィンの口調からはもはや、迷いの色さえ感じ取れなかった。

「二年前まで、私はグレイクレイ国の戦闘研究員として地上で勤務していた。当時、研究及び製作していたのが“フラッシュ”という未知の殺戮兵器だった。光を利用した画期的な兵器だということは、以前から知っていたわ。そして、こんなにも残虐で、人類の存亡が危ぶまれるような恐ろしい兵器の製作は、一刻も早くやめるべきだと、プロジェクトの責任者に説得したの……ジェッキンゲン・トーバノア、その人にね」

その名が語られた瞬間、空気が張り詰め、全員が息を呑んだ。

「でも、無駄な抵抗だった。私はプロジェクトから外され、海底のアクアマリンで勤務するように命令された。初めは大人しくしていたけど、あんな地獄のような生活には耐えられなかったし、どうしてもフラッシュのことが忘れられなかった……そして、私はアクアマリンから脱走することを決意し、人魚の力を借りて地上へ戻った。

都で酒場のウエイトレスとして働きながら、元同僚だったレッジと連絡を取り合い、復興しつつあるシシーラの街に移り住んだの……そこへ、あなたたちがやって来た」

そこまで説明すると、フィンはマニカの方を見て気まずそうに笑った。

「ずっと黙っていてごめんなさい、マニカさん。騙すつもりじゃなかったの」

マニカはトナの額を優しく撫でながら、首を横に振った。

「私の方こそ……あなたのこと何も知らなかったし、知ろうともしなかった。今はみんな、自分のことで精一杯なのよね……きっと」

マニカの表情はどこか悲しげだった。

「フラッシュといえば……」

アーチャが静かに切り出した。

「信じ難い話だろうけど、俺たち、ユイツの力を借りて未来を見てきたんだ」

「ユイツとは、前にゼル・スタンバインと一緒に街へ来た、あの新米兵士のことですか？」

ファージニアスが興味津々な表情で食いついた。アーチャは、戦闘機内で起こったこと、ユイツのこと、『ムーンホール』や『タイムホール』のこと、未来で見聞きしたこと、そして、じいさんの身

に起きた真実を余すことなく事細かに説明し、聞く者を嘆息させた。

「ユイツはきっと、俺たちに未来を見せることで、世界に迫る危機を知らせたかったんだと思う。そうでなけりゃ、ムーンホールを使って俺たちを地上へ送り帰していただろうから……でも分からないのは、どうしておじいさんがこの時代にいるかなんだよなあ」

アーチャを含む多くの眼差しがファージニアスを捉えた。ファージニアスはすべてを承知したかのように、何度かゆっくりとうなずいて再び円の中心に進み出た。その足取りは、この瞬間を待ってましたと喜ばんばかりに軽快だった。

「百十年後の未来で完成したタイムトラベルの仕組みについて簡単に説明しましょう。これは光の力を凝縮させて利用した、言わば『光速を超越する力とその働き』に関連するものなのです。その力を最大限に活用するため、人々は最適な環境と最高の精密機器を整え、爆発的なエネルギーを生み出すための技術を開発し、タイムトラベルの実験に挑みました。実験は数十年もの間繰り返され、多くの犠牲者を出しました。一億年前の過去に飛ばされて行方不明になった者、上半身だけ未来へ旅立たせてしまった者。中でも際立って続出したのが、白骨化して帰ってくるというものでして……これはみな人づてに聞いた話で、私は実験に加わっていないんですけどね」

ファージニアスは咳払いし、仕切り直すような改まった口調で話を続けた。

「ですから、何の知識もないおじいさんがたった一人、空っぽ同然の廃墟で時空間を捻じ曲げて時間を超越し、過去へさかのぼることなど不可能なのです。ええ、絶対に。……ところで、そのユイツという人物についてですが……」

あごにその長い指をからませると、ファージニアスは首をかしげて物思いに耽った。

「私のように時空連盟に長く勤めていると、まあ、こういった類の噂話をよく聞くんですよ。何でも、時間と時間を隔たりなく自由に行き来し、尚且つ同時に、複数の時間の中に存在している人物がいる、という噂なんですけどね。無論、そんなことは有り得ないわけです。だってそうでしょう？　私たちには、過去があるから今があり、今があるから未来があるのです」

ファージニアスは質問を受け付けることなく、自分の言葉に酔いしれるような夢見る笑みでペラペラと喋りまくっていた。しかも終わる気配が漂わない。

「その人物は時折、連盟本部の監視モニターに現れるのですが、何しろ姿形がぼやけていまして、何者なのか、いまだに特定できていないのです」

「おばけじゃねえの？」

だが、アンジの発言はあっさり無視された。

「しかもその人物は、私たちが調査対象としている八千年前の過去から一万年後の未来まで、すべて似たようなぼやけた輪郭で観測されているのです。アーチャが先ほど言ったように、ユイツが本当に人々の記憶として存在しているのであれば、この噂話を裏付ける決定的な根拠に結びつくかもしれませんね」

十五章　帰還　5

たそがれを告げるオレンジ色の斜光がアジトの中を照らし出し、半ば小人たちの縄張りと化していた台所を明るく染め上げた。アーチャ、シャヌ、アンジは、かろうじて居間と呼ばれる空間に陣取り、今後のことについてあれやこれやと討論していた。アーチャが、「ゼル・スタンバインが何らかの行動を起こすまで待とう」という意見を述べた直後、アジトの扉が開かれ、カエマとマニカが埃まみれのみすぼらしい布袋を抱えて中に入ってきた。アーチャはテーブルの上の雑貨類を床に払い落とし、二人が荷物を置ける空間を用意してあげた。

「他の人たちもアジトに来るようにって誘ったんだけど、みんなお尻が石にでもなっちゃったみたいに動こうとしないのよね」

重みで悲鳴を上げる布袋をテーブルの上によっこらせと置きながら、カエマが言った。それにマニカが続くと、アーチャの視界は埃と荷物でいっぱいになった。

「避難って言ってもだぞ、ずいぶんと大荷物だよな……」

荷物が圧迫するせいで、アンジの体は布袋と壁の間に挟まれて苦しそうだった。

「あら、食器棚を諦めたんだから、これくらい大目に見てよね」

マニカが本当に残念そうな表情で言った。

「あ、ここ破けてるわ。後で縫ってあげる」

シャヌがそう言った。布袋を突き破ってひょっこり顔を出していたのは、角張った小さな額縁のようなものだった。

「シャヌって、裁縫もできるんだね。感心しちゃうなあ」

今晩の料理を思い浮かべながら、アーチャは一人、心をゴムボールのように弾ませてウキウキしながら言った。

「本で読んだことがあって、一度やってみたいなあって、ずっと思ってたの。アーチャには、いつか服を作ってあげるね」

アーチャは段々と頬が紅潮していくのが分かった。うつむいて「ありがとう」と言う自分の姿をこっけいに思ったアンジがニタニタ笑うのを、アーチャはなるべく見ないようにした。

「これ、お父さんの写真立てよ、ほら」

木製のツヤのある写真立てを布袋から慎重に引き抜きながら、カエマは自慢げに言った。だが、目の前に掲げられたその写真に写る人物を見て、アーチャとアンジは言葉を失った。そして、誰かが時を止めたかのように、二人は写真を見つめたままピクリとも動かなくなった。アクアマリンでのかつての惨劇が、二人の脳裏をすさまじい勢いで通り過ぎ、こちらを笑顔で見つめ返す写真の人物と重なって、それがより鮮明なものとなった。

カエマとトナを両腕でしっかりと抱き上げる男の……ジャーニスの笑顔が、そこにあった。

「どうかしたの？」

カエマに声をかけられ、アーチャとアンジはほぼ同時に我に返った。アーチャは、写真立てを手に持ったままこちらを心配そうに見つめる、カエマのその純粋な瞳を見つめ返した。まだ何も知らない、その“純粋”な瞳を……。

「にい、もしかして、お父さんのこと知ってる？」

『他のメンバーはどうしたかって？　みんな死んだのさ！　俺を残して、みんな勝手に死んじまった！』

アーチャの心の中で、アーチャ自身が叫んでいた。

『人が死ぬってこと、まだよく分かんないから……』

記憶の中のカエマが、目を潤ませてアーチャに訴えかけてくる……悲しみに浸るその瞳が、カエマ自身と奇妙なほどうまく重なり合った時、アーチャの元にようやく声が戻ってきた。

「ジャーニスは……死んだ。海底のアクアマリンで……数週間前に……」

アーチャの声はか細く、わずかに震えていたが、部屋にいる全員がしっかりとそれを聞き取った。死刑宣告も同然の一言を、アーチャは口にしたのだ。

「やだ……」

数十秒の沈黙が、数時間にも感じられた時、カエマは涙で声を詰まらせた。

「やだ……やだやだやだ……やだー！」

叫びながら、カエマはアジトを飛び出していった。ジャーニスの写真をしっかりと握りしめたまま……。その瞬間、マニカがその場に膝からくず折れ、シャヌがカエマの後を追ってアジトを出て行った。

「アーチャ……本当なの？　あの人の最期を見たの？」

かろうじてテーブルの縁にすがりながら、マニカは聞いた。アーチャはコクリとうなずいた。

「ジャーニスは海底から脱出しようと必死だった。もう一度陽の光を浴びたいって、家族に会いたいって、そう言ってた。俺は、俺のことをいつも気遣ってくれたジャーニスに、何もしてあげられなかった」

「……いいえ」

驚くことに、マニカの顔にはうっすらと笑みが広がっていた。

「あなたは、ジャーニスの思いを受け取って、私たちの元へこうして持ち帰ってきてくれた。ありがとう、アーチャ」

アーチャはこぼれ落ちそうになる涙を袖でぬぐいながら、何度もうなずいていた。おりしも、上の階からファージニアスたちがトナを連れて下りてきたところだった。カエマの声を聞きつけて、心配になったに違いない。

「お母さん、どうしたの？」

母親の泣き顔を不安そうに見つめるトナをしっかりと胸に抱き寄せながら、マニカは声を押し殺して泣いた。アンジは暗い面持ちで席を立ち、ファージニアスを押しのけて二階へ上がっていった。

「マニカさん、これを」

アーチャは首からずっとぶら下げていた、ジャーニスからもらった懐中時計をマニカに差し出した。マニカは苦しそうに顔を歪めていたトナを離すと、震える指先で懐中時計を受け取った。

「あなたたちがシシーラに向かってここを発つ時、アーチャの首にかけてあったこの時計を見て、もしかしてって思ってたの。これは、ジャーニスが大切にしていた時計だったから……でもどうして？どうしてあの人がアクアマリンに？」

「どうしてって……ルーティーとの混血種だったからじゃないの？ルーティー族の多くは、アクアマリンで軍の機密工作に関与してたはずだよ」

マニカはかぶりを振った。

「そんなはずないわ……だってジャーニスはルーティーじゃないもの」

例のごとく、アーチャの頭の中は糸と糸が複雑にからまるようにごっちゃになってきた。ジャーニスがルーティー族でないとすれば、軍をあざむくほどの知能指数は先天的なものだとでもいうのか？

「あっ、そっか！」

後方でずっと話しを聞いていたフィンが、やにわに大声を張り上げて両手をパチッと叩いた。

「私がまだ地上で勤務していた時、同僚からちょっとだけ聞いたことがあるの。ルーティー族が誕生するきっかけになった……つまり、ルーティー族の源として選ばれたヒト族の天才がいるって……きっと、それがジャーニスだったのよ」

「ジャーニスが自分のことをヒト族だと言わなかったのは、愚かな種族を作り出すきっかけになった、自分自身への戒めのためだったのかもしれないな……」

アーチャは呟き、生気の消えかかった眼差しで懐中時計を眺めるマニカを見た。そして、他国侵略のためだけに使われるルーティー族を創り出すため、その血を強引に使われることになったジャーニスの悔しい思いを、その心にしっかりと感じたのだった。

十五章　帰還　6

夜のとばりがグレア・レヴを闇に染め、窓からこちらを覗き込む満月が南西の方角に輝いた。シャヌは読みかけの『ヘインの見た世界』を読み終えると、アーチャにおやすみを言って二階へ上がっていった。シャヌがアジトを飛び出していったカエマを連れ戻してきた時、アーチャは泣きじゃくるカエマの姿をまともに見ていられなかった。カエマは散々泣き明かした後、階段下で横になってぐっすり眠ってしまった。

夜遅く、居間の椅子に腰掛けるのは、アーチャとじいさんだけになった。アーチャはうたた寝するじいさんをまじまじと観察していた。こうして二人きりになるのは初めてのことだった。そのことが原因ではないのだが、まともに会話したことさえなかった。未来で見たことを話せば、ちょっとは記憶を取り戻すのではないだろうか？　アーチャの頭の中は、今やその考えでいっぱいだった。

「ねえ、おじいさん」

じいさんは寝ぼけ眼をパチパチさせてアーチャを見た。

「こんばんは、アーチャ。わしは今、夢を見とった」

「へえ。どんな夢？」

興味本位ではなく、アーチャは本気で知りたくてそう聞いた。じいさんは窓から月を眺めたまま、薄毛の頭部をさすった。

「いつも見てる夢じゃった。そこには、平和を絵に描いたような、たくさんの血族が共存する素晴らしい世界があった」

同じだ、とアーチャは察した。未来でじいさんが見ていた夢と、内容が同じなのだ。

「夢で感じたもののすべてに、はっきりとした感覚があるんでしょう？　まるで、夢の中の世界が本当の現実であるかのように」

じいさんは嬉しそうにうなずきながらアーチャを見た。

「よく知っとるのう。もしや、お前さんも同じ夢を？　これは奇遇じゃのう」

「違うよ。さっき話したじゃないか。俺は未来を見てきたんだって。その未来にはあなたがいて、どこかの老人施設で暮らしてた。何も覚えてないの？」

じいさんはぼんやりと窓の外を眺めながらゆっくりうなずいた。

「過去のことなど、思い出せぬ方が身のためなのじゃ。誰でもみな、辛く苦しい思い出は早く忘れてしまいたいと願う。幸せな思い出がその犠牲になったとしてもじゃ」

いきなり何を言い出すんだろうと、アーチャは少し戸惑いつつもじいさんを見た。

「シャヌも一緒に未来の世界を見てきたんだよ。それで俺……シャヌももしかしたら、じいさんと同じでどこか遠くの時間の流れからやって来たんじゃないかなって、そう考えてるんだ。ねえ、どう思う？」

聞いても時間の浪費だろうと勘付いてはいたが、アーチャは一応聞いてみた。アーチャのそんな気持ちを読み取ってのことか、じいさんはピンクの歯茎を覗かせるほどの笑顔だった。

「シャヌはとてもいい子じゃ。わしは、あの子ならきっとたくさんの人の命を救うことができると、そう信じておる。確かに、彼女の存在は道理に反しておる。だがそれは、まだシャヌという名前だけの存在にすぎん。夢と現実世界で生きる、名前だけの存在にな」

十六章　再び海底へ　1

東の空が柔らかなライラック色に染まり、連なる山々の輪郭が暖かな曙光に照らされると、まだうっすらとほの暗い闇の中から、グレア・レヴの廃れた街並みが美麗なシルエットと共に浮かび上がった。朝陽の斜光が建物と建物の間を縫うようにして入射し、多くの人々に朝の始まりを告げた。

太陽が東の山々の頂まで昇りきるそのずっと前から、アーチャはもう目を覚ましていた。アジトの外でひやりと冷たい朝風を全身に受け止め、不敵なにおう立ちをして街の方角を睨み続けているのには、心のどこかで妙な不安を覚えたからだった。

「何だろう？　こんな胸騒ぎは初めてだ」

扉が開く音を耳にしながら、アーチャは呟いた。

「邪悪だねえ、こりゃ。奥歯がガタガタいってら」

それはアンジだった。長いゴツゴツした腕を胸の上で組み、その顔は今にも青ざめてしまいそうなほど強張っていた。

「アンジにも分かるの？」

アーチャはいぶかしげに尋ね、アンジが得意げに鼻を鳴らすのを聞いた。

「こんなまがまがしい朝は身に覚えがないね。世界中の生き物が恐怖で空を見上げている姿が、俺にははっきりと見えるぜ」

それがただの強がりでないことを、アーチャはちゃんと承知していた。アンジも、アーチャと同じ邪悪な気配を感じ取っているに違いない。これから起ころうとする恐ろしい危機を、敏感に察しているに違いない。

「ファージニアスは、ジェッキンゲンのせいで未来が変わってしまったって、そう言ってた。どう変わったのかは分からないけど、俺、このままじゃ世界が終わっちまうような気がしてならないんだ。その瞬間がすぐそこまで迫ってきているみたいで……俺たちには、未来なんかないんじゃないかって……」

「だったらどうする？」

アンジの口調は穏やかで、それでいて衝撃的だった。

「このまま黙って観察日記でも書いてるか？　そんなのお前らしくねえんじゃねえの？」

アンジは、自由に大空を舞い、歌声のようにさえずる小鳥たちをまっすぐに見つめていた。

「俺は軍の奴らと最後の最後まで戦ってやる。イクシム族としてじゃなく、この世に生を受けた一人の人間として、世界の歴史に俺の名を刻み込んでやるのさ……」

アンジは急に口ごもり、小鳥たちからアーチャに目線を移した。アーチャは、そんなアンジの熱い眼差しをしっかりと受け止めた。

「俺がこうして決心できたのは、みんなお前のせいだ。お前さえいなけりゃ、俺は今ごろ、暗くて寒い海底の地獄で、間違った生き方

を選んでたんだからな。だからお前も最後まで戦え。未来から逃げるな」

アーチャはすっかり説き伏せられてしまい、何も言い返す言葉が見つからなかった。言いたかったことを言い終わり、アンジは照れくさそうな表情でアジトへと戻っていった。アーチャはアンジのその大きな背中に、たくましい勇気を感じたのだった。

十六章　再び海底へ　2

昼下がりの午後。アーチャたちは言い知れぬ不安を抱えたままアジトで息を潜めていた。アーチャは、街の中央に潜伏する軍たちの様子を調査しようと単独で行動したものの、状況は昨日とまったく変わっていなかった。兵士たちは警戒心を絶やさずに銃を構え続けており、いかにも頑丈そうな装甲車が列を成してクレーターの周囲を取り囲むその姿は、まるで壁そのものだ。ロープを使ってクレーターの中に入り込もうとする兵士は数え切れないほどで、小型掃除機のような珍しい機械を使って露出された地中を丹念に調べまわっていた。

「もどかしいわね」

フィンがキッチンの周りをうろうろしながら言った。

「まったくだ……俺なんか、相棒たちがいなけりゃ何もできやしない」

壁にもたれたまま、レッジが力なく続いた。レッジの言う“相棒”が、シシーラの酒場の地下にあるコンピュータたちであることは明白だった。

「マニカさん、カエマの様子は？　あれからどう？」

フィンとレッジが、街に巣くう軍隊をどうこらしめてやるかで議論を始めたかたわら、アーチャは椅子にぐったりと腰掛けるマニカに向かって小声で尋ねた。

「昨夜から一言も口を利かないの。今、二階でシャヌさんと一緒にいるわ」

アーチャは床に散乱する“拾い物”の上をひょいっとまたぎ、天井からぶら下がるタペストリーの下をくぐり抜け、階段を飛ぶように駆け上っていった。寝室で向かい合って座っているシャヌとカエマを見つけ、アーチャはそっと近づいた。

シャヌはカエマの手を取り、様々な慰めの言葉をかけてカエマを元気付かせてあげようとしているみたいだった。

「ありがとう、シャヌ。あたしならもう平気」

アーチャは二人のそばに座り、シャヌと一緒にカエマを見つめた。カエマの瞳は、あくびの涙さえ枯れ果ててしまったようにやつれて見えた。

「昨日はごめんね、にい。心配かけちゃったよね」

カエマの声はかすれ、喉はガラガラだった。アーチャは後ろめたい思いで胸がいっぱいになった。

「俺の方こそ、ごめん。もっと早くに気付いてやれれば良かったんだけどな……」

コッファに殺められるジャーニスの最期の姿を痛烈に思い出しながら、アーチャは言った。カエマは顔をうつむかせたまま弱々しく首を振った。

「二年前……軍の研究室で働いていたお父さんから急な手紙が来たの。訳があってしばらく帰れなくなるって……あたしたち家族はま

だ名も無かったこの街へ移り住み、お父さんの帰りを待ち続けたわ」

胸の痛みに苦しみながら、アーチャはカエマの話を黙って聞いていた。薄汚れたドレスの裾を見つめながら、カエマは続けた。

「あたしは、心のどこかでこう思ってたの。お父さんは死んじゃったんじゃないか、もうあたしたちの所へは帰ってこないんじゃないか……って」

カエマは顔を上げ、アーチャをまっすぐに見つめた。

「あたしこの前、にいに『人の死についてよく分からない』って言ったけど、本当はちゃんと分かってた。けど、信じたくなかった……信じるのが怖かった」

アーチャにはカエマの気持ちが良く分かっていた。十年前に両親を失った深い悲しみは、今も尚、アーチャの心にしっかりと刻み込まれている。だが、他人の死を受け入れるにはそれなりの時間を要するし、それは自分一人で乗り越えなければならない試練でもある。

「いつかこう思えるさ」

アーチャは明るく言った。

「お父さんはカエマの心の中でずっと生きていて、心に残った深い傷跡を、孤独にも打ち勝てる強い力へと変えてくれるんだ、って。この十年間、俺はそうして生きてきたんだ」

カエマの顔にわずかな笑みが戻った。これからを生きていこうというカエマの屈強な意思が、その笑顔にかいま見えた気がした。

「あ、そうだ」

シャヌは立ち上がると、窓際の肘掛け椅子の上に置いてあった本を手に取り、戻ってきた。

「もう読み終わったから、この本、あなたにあげる。すごく面白いから、最後まで読んでね！」

カエマは本を受け取り、表紙の金字を指でなぞった。カエマの瞳の中で『ヘインの見た世界』がキラリと輝き、じっとカエマを見つめた。本はその運命どおりに、シャヌからカエマへ手渡されたのだった。

「あたし、がんばれるよね……例え一人になっても、これでもうがんばれるよね」

カエマのたくましい表情をしっかりと見つめながら、アーチャとシャヌは力強くうなずき、顔を見合わせて笑った。

ジャーニスが心から願った『家族に会いたい』という思いが、今この瞬間、叶えられたんだ……アーチャは、カエマの決然とした表情に重なるようにして映る、ジャーニスの優しい笑みを見たのだった。

十六章　再び海底へ　3

「アーチャ！　来て！」

数十分後、下の階からフィンの叫び声が響き渡り、寝室から街の様子を窺っていたアーチャはその声に驚いて飛び上がった。一度、シャヌ、カエマと顔を見合わせ、それから何かを思い出したように急いで階下へ向かった。シャヌとカエマがそれに続き、階段の六段目を踏み外さないよう、慎重に飛び越えながらアーチャを追った。アーチャが一階に辿り着くと、そこには誰もいなかった。ただ、外への扉が開け放たれており、そこから夏の生ぬるい風が入り込んでは、床に積み重ねられた本のページを静かにめくり上げていた。

三人は外へと飛び出し、ある一点を見つめるアンジたちを見つけた。彼らの視線の先には、ゼル・スタンバインとユイツの姿があった。気付くと、アーチャは駆け出していた。

「ゼル……」

声も足元もフラフラだった。アーチャを見つめるゼルのその表情に、いつもの誇り高さは感じられなかった。

「どうして？　どうしてこの街を攻撃したんだ？　どうして軍隊がこの街にいるんだ？　どうして……」

ゼルは、腕にしがみついて疑問を投げかけるアーチャから顔を背けた。その姿を見て、ゼルが心に抱える、言葉に表すことのできない悔しさが、アーチャにもはっきりと伝わった。

「すまない……本当に。私には止めることができなかった」

誰も何も言えなかった。みんな今はただ、沈黙という流れに身を任せることしかできないでいた。

「僕たちがここに来たのは、これからのことを報告し、君をある場所へ導くため」

ゼルにすがったままのアーチャに向かって、ユイツがはっきりと言った。アーチャはゼルから離れ、ユイツを見た。

「報告？　導く？　一体、これから何が始まるってんだよ……」

アーチャの視界は、果てない闇に包みまれていくように真っ暗だった。

「私から話そう」

ゼルが一歩前へ進み出た。

「まず、アーチャ。君に礼が言いたい。軍の元からシャヌを救い出し、無事に連れ帰ってきてくれたことはユイツから聞いた。本当にありがとう」

素直に喜べず、アーチャは黙ってうなずいた。

「ユイツの正体や、ムーンホールのことも承知している。……軍専属の元研究員、フィン・ラターシアがここにいるということは、フラッシュの件について、もうみんな聞き及んでいると察してよろしいかな？」

「お久しぶりです。アクアマリン以来ですね」

フィンは慎ましく挨拶した。

「フラッシュの詳細は昨日、みんなに話しました。しかし、本当にあの兵器が使用されただなんて……未だに信じられません」

「先日、ここで使用されたフラッシュについて、私はどうしても納得がいかない。すべてジェッキンゲンによる計画だが、彼は既にザイナ・ドロ将軍の言うことさえ聞かなくなりつつある。彼の暴走を止められる手段は、何もないのだ」

「これからのことって、何なんだ?」

みんなが暗い顔でうつむく中、アンジがじれったいとばかりに質問した。ゼルは少し顔を上げ、全員を見渡した。

「そのザイナ・ドロ将軍も、謎の失踪を遂げたまま姿を現さないのだ。……ジェッキンゲンは最後の手段に出るつもりだ……ジャーグ族を復活させるための、最後の手段に」

アーチャは、激しい頭痛で立ちくらみそうになるのを我慢しながら、その名を頭の中で復唱した。

『ジャーグ……ジャーグ……どこかで聞いたことがある……』

だが、アーチャはそれ以上考えることができなかった。心臓が太鼓を打ち鳴らすように脈打ち、額を汗が流れた。喉はカラカラだった。

「ジャーグ族なんて聞いたこともねえぞ」

レッジが息巻いた。他のみんなもレッジと同じ意見らしかったが、ファージニアスだけは事の重大さが分かっているようだった。

「この世界には、まだ誰にも知られていない、数多くの血族が存在するのだ。そんなジャーグ族の末えいがたった一人だけ、アクアマリンに……つまり、君たちが囚われていた海底の奴隷収容所にいる。……アーチャ」

ゼルに名を呼ばれ、アーチャは素早く顔を上げて返事をした。その声はわずかにかすれていた。

「ジェッキンゲン、そしてザイナ・ドロ将軍の計画を阻止できるのは君しかいない。この世界にたった一人、君だけだ」

その理由を知る必要はないと、アーチャはとっさに考えた。ゼルの言うとおりにすべきことが、アーチャ自身がずっと捜し求めていた“答え”につながる……アーチャはそのことに気付いていたのだ。

今や、その場に集まる全員がアーチャのことを見つめていた。

「分かってるよ、ゼル。俺はもう一度、海底へ行く」

アーチャの言葉には微塵の迷いもなかった。アーチャがそう答えるのを分かっていたかのように、ゼルは大きくうなずいた。

「今からすぐ、ユイツのムーンホールを使ってアクアマリンへ行ってほしい。そして、君たちが一度囚われたことのあるあの牢へ行き、ジャーグ族の最後の一人を救い出すんだ。場所は四時の方角で、一

番奥の部屋。これが牢屋の鍵だ」

アーチャは銀製の小さな鍵を受け取り、しっかりとポケットにしまい込んだ。そして、アーチャを不安げに見つめるシャヌたちを見た。

「というわけだ……みんな、俺が帰るまで待っててくれ。シャヌ……その……」

アーチャはまごついたが、やがて決心が固まった。

「君はもう、一人でも大丈夫だ……だろ？　俺がいなくても、この大空を飛べるはずさ。シャヌの思う英雄が、きっと力を貸してくれるはずだから」

シャヌはしばらくアーチャを見つめるだけだったが、やがて勇ましくうなずき、アーチャに微笑みかけた。

「私、自分を信じてる。でもそれ以上に、ここにいるみんなのことを信じてる。アーチャが無事に帰ってきてくれるって……信じてる。だから大丈夫だよ、アーチャ。私は大丈夫」

その時、アーチャとシャヌの間に割って入るかのごとくアンジの咳払いが響いた。

「俺も行くぜ」

アンジの猛々しい声がそう言った。アーチャを含め、全員が驚愕し切った表情でアンジを見つめた。

「何だって？」

思わずゼルが聞いた。

「俺も行くって、そう言ったんだ」

アンジは頑固に言い張った。アンジが何を考えているのか、アーチャには何となく分かっていた。

「俺はアンジがいてくれた方が心強いかなあ」

アーチャがとっさに機転を利かせた。ユイツがクスッと笑った。

「君がそうしたいと言うなら無理に止めはしないが……」

ゼルは嘆息混じりに言った。

「帰りは運任せだということを忘れないでほしい。ユイツは前の一件で反逆者と見なされ、今や指名手配中だ。へたに騒ぎを起こしたくないので、ここに残しておくことに決めたのだ。私はジェッキンゲンの元へ戻らなければならないので、ユイツの力を借りて一旦ここを離れる」

ゼルの説明が終わると、ユイツは手を大きく振り下ろし、今しがた自分が立っていた位置にムーンホールを作り出した。

「この中に入るのか？」

アンジがおずおずと聞いた。ムーンホールを初めて拝見する大半の者が驚きの声を漏らした。

「ここを抜ければアクアマリンへ直行です。僕が助けてあげられるのはここまで」

「ありがとう、ユイツ。……アンジ、心の準備はできてるか？」

アンジは胸を張って背筋を伸ばし、いつものように鼻を鳴らした。

「準備なんていらないぜ、アーチャ。俺たちにはいつも、計画なんてものはなかったんだからな！」

いかにもアンジらしい返事を受け止めた直後、アーチャはもうムーンホールの中だった。後を追うようにしてアンジがそれに続いた。二人はそれぞれの思いを胸に、再び暗黒の海底へと足を踏み入れた。

十六章　再び海底へ　4

ひやっと冷たい空気が露出した肌に触れ、毛を幾本か逆立たせた。闇にうっすらと浮かび上がるランプの明かりが、圧迫するような狭苦しい部屋を照らし出し、アーチャたちにそこがどこなのかを再認識させた。出口となっていたのは、アーチャとアンジが寝床として使っていた懐かしの（ここが思い出の地になるなんて、アーチャやアンジにしてみればこの上なく腹立たしいことだった）、あの無駄に長い通路のような部屋だった。作業時間だからなのか、今は誰もいない。

「さて……と」

手をこすり合わせながら、アンジが出し抜けに言った。

「別行動といきますか。アーチャは牢屋へ、俺は捕まってるドレイたちのところへ」

出口へ向かって歩きながら、アーチャはニンマリ笑ってアンジを振り返った。

「やっぱり、イクシム族をここから出してやるつもりだったのか。そんなことだと思ったよ」

アーチャは通路へと顔を突き出し、誰もいないことを確認すると、そう囁いて更に歩き続けた。

「同種だけじゃない。ドレイ全員だ」

アンジのその言葉に、アーチャは思わず立ち止まりそうになった。

「そうか……そうだったな」

アーチャは、ドレイ全員をここから脱出させるなんて無謀な考えだと思ったが、アンジからその言葉を聞けて、とても嬉しかった。かつて、イクシム族のやり方だけを主張してきたアンジだったが、今はもう違う。誰にでも誇れるような、立派な志を持ったアンジがすぐそこにいた。

「やっぱり誰もいないな……」

鏡面のような湖が中央に張る聖地をそっと覗き見ながら、アーチャはアンジに囁いた。ギービー族の大暴走が巻き起こってから数週間、聖地は何事もなかったかのように静まり返り、今や辛酸な思いのみが流浪するだだっ広い空間に過ぎなかった。だが、これはむしろ二人にとってチャンスだった。

「いいか。それぞれの目的が成し遂げられたら、前のようにグランモニカの所へ行くんだ。あの人なら、きっとまた助けてくれる」

アンジは肩をすくめて微笑した。

「気ままにお出かけしてなきゃいいけどな……じゃあ、後で」

「……アンジ」

アーチャは出発しようとするアンジの太い腕をつかんだ。アンジのつぶらな瞳が、その剛勇な眼差しと共にアーチャに向けられた。

「死ぬなよ……絶対死ぬなよ」

不器用な感情表現しかできないアンジのその表情に、アーチャが今まで目にしたことないほど清々しい笑顔があった。

「ああ、分かった。また地上へ戻ろう。今度はみんなと一緒に」

アーチャにはそれだけで十分だった。

二人はそれぞれの道を走り出した。アーチャは真っ先に、四時の方向にある牢屋へと続く通路に向かった。通路に入ってすぐアーチャの足元に現れたのは、見覚えのある横幅の広い急な階段だった。アーチャはなるべく足音を立てないように気をつけながら階段を下り、ゼルの言っていた一番奥の部屋まで迷わず突き進んでいった。

この闇の向こうに何が待ち受けているのか？　ジャーグ族とは何なのか？　その答えを見つけるべく、アーチャはどんどん歩いていった。やがて、牢獄の突き当たりまで到達したアーチャが見たものは、鉄格子で区切られた牢屋だった。周囲の牢屋と大差ないように見えるが、唯一、他と明らかに違う点があるとすれば、それは中から人の気配を感じ取れることだろう。こちらを見つめるわずかな視線を捉えることができるし、かすかな吐息の音も聞こえる。

「誰かいるんだろう？　……いるんだよな？」

アーチャは鉄格子越しにそっと話しかけてみた。反応はなかった。その牢屋だけランプの明かりがなく、相手がどんな姿形をしているのかさえ見当がつかない。ジャーグ族とはもしかすると、ライオンのような猛獣かもしれない。

「俺は悪い奴じゃないんだ。ただ、君を助けに来ただけなんだ」

アーチャは恐々と話しかけ続けた。すると、何やらゴソゴソと物音が聞こえた。アーチャは耳をそばだてた。

「……おいで……ほら」

とても小さく、か細い声が格子の向こうから確かに聞こえた。それは心なしか、どこかで聞き覚えのある、安心できるような声だった。

「開けるぞ……噛み付くなよ」

アーチャはゼルからもらった鍵を取り出し、錠前に差し込んで二度ひねった。銅製の重々しい錠前は音を立てて外れ、アーチャの手の平に転がった。扉を押し開け中に入ると、内部の状況が先ほどより鮮明になった。

はっきりしたといっても、部屋の隅に大きな桶が一つと、床一面のゴザ一枚きりしかない。その上に膝を抱えて座り込み、壁に背を預けてこちらを見上げるその人こそ、ゼルの言っていたジャーグ族の末えいなのだろう。顔はよく見えないが、その体格や声からして男なのは確かだ。

「やあ……あの……さっきも言ったけど、俺は悪い奴じゃないよ。君を助けに来たんだ。すぐにここから出よう」

アーチャが手を差し出しても、男はピクリとも動かなかった。ただ、闇に浮かび上がるその二つの瞳が、アーチャをより強く見つめ返すだけだった。

「そうだよな……いきなり目の前に現れた男がこんなこと言ったって、信用できないよな」

アーチャは言いながら、自ら納得した。そして、シャヌはどんな気持ちで自分と会話していたのだろうと、彼女と初めて会話した時の状況を今と照らし合わせながら考えてみた……当時の思考が半分まともじゃないのは明確だった。

「俺の名前はアーチャ・ルーイェン。君の名前は？」

「アーチャ……ルーイェン」

男はぼそっと繰り返した。

「そう、アーチャ。俺の名前だ。君はジャーグ族だって聞いたけど……本当……なの？」

またも頭痛が襲い、それに目まいが重なった。今度は鉄格子に捕まっていなければ立っていられないほど重症だった。

「意識が……あるのか？」

明らかに具合悪そうなアーチャに向かって、男が平然とした態度で聞いてきた。何のことか分からず、アーチャはひどく困惑した。

「どういう意味？」

「ジャーグ族という言葉を耳にしても、意識を保てるのかと、そう聞いたんだ」

男の口調は今までで一番はっきりとしていた。男が何を言いたいのか、アーチャには段々と分かってきた。

「君、知ってるの？　俺がたまに記憶を失うこと……？」

「そうか……やっぱりな……」

男はアーチャを無視し、独り言を繰り返した。アーチャは徐々に苛立ち始めた。

「俺をおちょくってるのか？　さあ、立って。早く俺と一緒にここを出よう。誰かに見つかるとまずい」

「帰りたいか？　シャヌの待つグレア・レヴに？」

その瞬間、アーチャは背筋が凍った。男の無気力な瞳がこちらをまっすぐに見つめている。

「どうしてシャヌや街のことを知ってるんだ？」

「俺は、お前のことなら何でも知ってる。お前以上にな」

その言葉は、アーチャを芯から戦慄させた。心臓が体の内側を叩き、肌寒い地下の奥深くで、アーチャは全身にしっとりと汗をにじませた。

「お前……何者だ？」

「俺は、お前の中の闇だ」

アーチャは鉄格子まで後ずさりし、男の目を食い入るように見つめ続けた。まばたきすることを知らないその瞳は、横に二つ並んで

じっとアーチャを見据えてくる。金縛りにあったように、アーチャは指一本動かせなくなってしまった。

「思い出せ、アーチャ。かつて、その途絶えた記憶の中で何をやってきたのかを……そして、自分自身が誰なのかを……」

荒々しく呼吸を繰り返しながらも、アーチャは男の言葉をしっかりと耳にしていた。そして、男の言葉でアーチャの記憶の引き出しが次々と開かれていくように、ここ数週間にアーチャの身の周りで起こったことが、走馬灯のように目の前を通り過ぎて行った。そして、求めもしないのに、答えを導き出そうと記憶の計算式が自然と組み上がっていく……だが、答えは出なかった。

「俺はヒト族のアーチャだ……そして、お前はジャーグ族の末えいだ。俺は……お前を連れて、みんなの所へ帰るんだ……」

アーチャは絶対の自信と頑なな意志を持ってそう言い切った。男は冷たい声であざ笑った。

「そこまで言うなら見せてやるよ。本当の答えってやつをさ」

十七章　闇の中の答え　1

次の瞬間、アーチャの目の前は完全な闇だった。手にしっかり握っていた格子さえも消滅し、アーチャはその場に軽く尻餅をついた。まばたきしても闇と光の区別がなく、手を伸ばしてもつかむ先は常に空だった。

「お前の記憶をさかのぼらせてもらうよ、アーチャ」

闇の向こうから男の声が聞こえた。アーチャはぼんやりと暗闇を見つめ、これから何が始まるのかさえ分からず、その場に黙って座り込んでいた。

「お前が記憶を失った時、そこで何が起きていたのか、見せてあげよう。まずは……そう、ここだ」

アーチャの目の前を長い光の筋が走り、眩く一閃して上下に広がった。視界いっぱいに白く輝く薄っぺらい壁のようなものが現れ、アーチャの体はその光に吸い込まれるようにして感覚を失っていった。不透明に輝く光彩が長方形のスクリーンを成し、そこに、まだアーチャの記憶に鮮明に残る、ある場面が映し出された。

どこからともなく、ジャーニスの声が聞こえてきた。

「誰かが救われるには、誰かが犠牲にならなければならない。それがこの世の摂理だ」

スクリーンの中のジャーニスがはっきりとそう言った。アーチャは目を見開いた。

「これは……あの時の……」

「そのとおり」

男の声が言った。それに合わせて、スクリーンの光景が時間を止めたように動かなくなった。

「お前とアンジが、ジャーニス、コッファと共に地上への脱出を図った、あの朝の光景だ。覚えているだろう？　ジャーニスはコッファに毒矢を放ち、彼は瀕死状態だった。アンジは息絶えたフリをしていたみたいだけどね」

男は低い声で短く笑い、「続きを見ようか」と唐突に切り出した。スクリーンには、ジャーニスが自分の懐中時計を手に取り、時刻を確認するシーンが映し出された。アーチャは食い入るようにしてその光景を見つめた。不思議なことにそれは、この時、アーチャ自身がその目で見た光景とまったく同じものだった。この映像は、アーチャが見聞きした記憶を忠実に再現させたものなのだろうか？

スクリーンの中からジャーニスがこちらを見つめ、言った。

「僕には、この血を汚してでも守らなければならない大切な人たちがいる……だから、これは正当な行為なんだ。……さあ、もう時間だ」

「どうして俺が？　どうして俺がこの計画に……」

この発言が自分のものだと気付くのに、しばらく時間がかかった。そして、ジャーニスが言った。

「君の血だよ、アーチャ」

その瞬間、スクリーンに映し出される映像が乱れた。アーチャはこの時のこともはっきりと覚えていた。

「意識がなくなる瞬間……」

スクリーンの光景が正常に戻っていくのを確認しながら、アーチャは呟いた。

「正確に言えば、お前は忘れてしまったんだ」

すぐ耳元で男の声が聞こえた。アーチャはスクリーンから目を離し、声の元を目で探した。男は続けた。

「お前は真実から逃げるために、このことを忘れてしまう必要があった。そうすることで、自分という存在を見失わないようにした」

「真実って何なんだ?」

アーチャは段々と遠ざかっていく声に向かって乱暴に聞いた。返事はすぐにやってきた。

「続きを見れば分かるさ。君が忘れてしまった、続きをね」

十七章　闇の中の答え　2

アーチャはスクリーンに目を止めた。ジャーニスがメガネのレンズを通してこちらをじっと見つめている。やがて、ジャーニスが言った。

「最初に君と会った時、君は私に向かってこう言った。『俺は純粋なヒト族だ』と。正直、私はとても驚いた。君は君自身のことをまったく知らない……というより、覚えていないようだった。ジェッキンゲンに何をされたのかは分からない……だが、せっかくの機会だ、思い出させてあげよう。君はジャーグ族だ、アーチャ」

心臓が狂ったように低音を刻み、一点を見つめたまま、アーチャは呼吸することさえできなくなっていた。アーチャの探し求めていた“答え”が、衝撃的な真実と共に見出された瞬間だった。

ジャーニスの話は続いた。

「君がこのアクアマリンへ連れて来られた時、その姿はジャーグ族そのものだった。彼らはその邪悪な姿ゆえ、普段はヒト族の容姿でいることが多かったと聞く。だが、そんな偽装も軍の前では通用しなかった。ヒト族はジャーグ族の力を恐れ、軍の力を持って十年前に根絶やしにした……はずだった。だが、君がアクアマリンに現れた時、僕の中で確立されていた事実は虚実となった」

ジャーニスの声は興奮で裏返り、その表情にはわずかな笑みがかいま見えた。

「ジェッキンゲンは何らかの方法を用いて、君の中からジャーグの力だけを奪い取った。そして、抜け殻となった君はドレイとなり、

あの部屋で目を覚ました。僕は兵士になりすますという方法でゴーレムから君の情報を聞き出し、善人を装って部屋を訪ね、君の前に現れた……まだどこかに残されているであろう、ジャーグ族の力を借りるためにね……すべてを承知したなら……」

その言葉を最後に、スクリーンから映像が消えた。後に残されたスクリーンから発せられるのは、ぼんやりとした輝きと、アーチャに突きつけられた絶望的な“答え”だった。

「俺とお前の関係が少しずつ分かってきただろう？」

男の声が遥か遠くの方から聞こえてきた。愉快でたまらないといった口ぶりだ。

「俺がジャーグ族……だって？　違う……何かの間違いだ」

アーチャはわらにもすがる思いでそう言った。男はすげなく笑った。

「強情だなあ。それじゃあ、もう少し時をさかのぼってみようか」

スクリーンがチカチカと明滅し、次の映像が映し出された。アーチャのすぐ目の前に、大柄な巨漢が現れた。まだジェッキンゲンに正体を明かされる前の、兵士として暴れ回っていた双子のジングの姿だった。

「覚悟しとけよぉ、８１２番。遅かれ早かれ、お前もさっきの奴もいつかこうなる」

太いだみ声でそう言った直後、ジングは床に横たわるイクシム族

の死体に唾を吐きかけ、見下すような視線でアーチャを見た。
胸くそ悪い薄ら笑いを浮かべるジングの顔をアップで映したまま、映像がまたも一時停止した。

「お前がここに来てまだ間もない頃の記憶だ。続きをよーく見てろよ」

直後、ジングの顔色が青ざめ、一振りの拳がその顔面をとらえた。ジングの巨体は無様な格好で吹っ飛ばされ、肉詰めされた鉄火巻きのようにゴロゴロと転がってうつ伏せで止まった。男の不謹慎な笑い声がガンガン反響し、アーチャは不快な表情でスクリーンを睨みつけていた。

「これは失礼」

笑いを押し殺しながら男が謝った。

「本当に見てほしいのはジングじゃない。お前の手だ。ほら……」

スクリーンの映像は、アーチャの繰り出した拳がジングの顔面にクリーンヒットする寸前まで巻き戻っていた。その手は、確かにアーチャのものである……はずだった。

「何なんだよ……これ」

そこに映し出されていたのは、濃い紫色の皮膚に覆われた細長い腕だった。幾本もの赤い筋が腕から肩にかけて浮かび上がり、黒ずんだ親指の爪は刃物のように鋭利で、殺気立って見えた。

「お前の腕だ。別の言い方をすれば、ジャーグ族特有の邪悪な姿」

アーチャはそれ以上、その腕を見ていられなかった。両の瞳からスクリーンを通して恐怖が入り込み、アーチャ自身を虫食んでいくようだった。

「そろそろ核心に迫ろうか」

男の声がいきなり冷静になった。アーチャは不明瞭な光を放ち続けるスクリーンに目を向け、男の次の言葉を待った。もう身も心もボロボロだった。

「アクアマリンへ連れてこられる直前に何が起こったのか、お前はずっと知りたかった。違うか？」

スクリーンに映像が映し出された。うっすらと記憶に残る、あの時見た光景がそこにあった。

「お前が忘れてしまった記憶を、俺が呼び起こしてやろう。そして、すべてを思い出すんだ。途切れてしまった記憶の糸をつなぎ合わせろ。さあ、上映開始だ」

アーチャは乾き切った喉を唾液で潤わせ、汗の滲む手の平を硬く握り締めながらスクリーンに見入った。心臓が高鳴りすぎて、耳の中で脈を打っているかのように大きく聞こえた。

「そう……あれは雨の降る夜だった……」

男の手短な解説の後、別の声が聞こえてきた。

十七章　闇の中の答え　3

「この調子でいけば、明日の今頃は酒場で裸踊りだ」

聞き覚えのある、あの男の太い声が嬉々としてそう言った。ルースター・コールズの元首領、ヴァークスだ。スクリーンには確かに、宿屋の一室でのんびりと椅子に座ってワイングラスを傾ける、ヴァークスのずんぐりとした体型が鮮明に映し出されている。

そこは木造の古びた宿屋だった。激しく雨の打つ窓ガラスには縦に大きなヒビが入り、どこからか隙間風が入り込んでビュービューいっている。丸テーブルに置かれたランプが、埃っぽい部屋とヴァークスのひげもじゃの赤ら顔をチラチラと照らし出していた。傾いた洋服タンスの脇に置いてある垢だらけの薄汚れた鏡の中に、アーチャがいた。かび臭いソファーに深く腰掛けてこちらを見つめている……。

「屋敷の警備も手薄な所が多いし、こりゃ思ったより楽勝かもね」

鏡の中のアーチャが笑顔で言った。その返答を心待ちにするように、映像にはヴァークス一人だけが映し出された。

「気を抜くのはおめえの悪い癖だぞ、アーチャ。標的が犬小屋みてえな所でも、油断大敵だ」

「酒場の裸踊りはどうなのさ？」

ヴァークスの凄みの利いた眼差しがスクリーンを突き抜けてアーチャを睨んだ。

「大会優勝の前祝いだっての。楽しみを蓄積させることは、気分の高揚につながるんだ。……そろそろ飯にするか」

ヴァークスはテーブルの足元に置いてある大きなリュックサックを指差し、そう言い添えた。映像が上からのアングルになり、ヴァークスの金たわしのような頭髪を見下ろすことになった。

「その前に、あの我がまま三人娘から何か連絡が入ってないか、フロントへ行って確かめてみる。すぐに戻るから、そうしたら飯にしようぜ」

声だけがそう言い、足音が部屋に響き渡った。扉、薄暗い廊下、急な下り階段、だだっ広いホール、フロントと笑顔の係員……映像がみるみるうちに変わり、その度にアーチャの中の忘れられていた記憶が掘り起こされていった。やがて、また声が聞こえた。

「ピゲ族から何か連絡はない？　電話でも、手紙でも、何でもいいんだ」

係員の女は奥の部屋に引っ込み、小さな黒い手帳を手に持ってまた現れた。

「そういった方からの連絡は一切ございませんが？」

女は笑顔のまま言った。アーチャの声が「ありがとう」と礼を言い、場面はまた空虚なホールへと戻っていた。行きよりも快活な足取りで階段を一段一段踏みしめ、アーチャは再び廊下へと足を踏み入れた。その時、ヴァークスの沈んだ声がかずかに聞こえてきた。誰かと喋っているようだ。

「……はい、今からやります」

アーチャは、この時自分が、聞きなれないヴァークスの敬語に不信を抱いていたのを、今はっきりと思い出した。映像は開け放たれた扉からこっそりと部屋を覗き込むように映し出された。部屋の一角を見つめるヴァークスの姿が目に止まった。

「……用意した飯に睡眠薬を混ぜてあります。熊でも三日は眠り続けるという強力なものです」

映像が停止したようにピタリと動かなくなり、アーチャは背筋が凍りついた。

「嘘だ」

思わず出た一言だった。

「嘘なんだろ、ヴァークス？」

アーチャはスクリーンの中のヴァークスに向かって叫び続けた。返答はなく、代わりに別の声が聞こえてきた。

「彼の血を熊と一緒にしてもらっては困りますけどね……でもまあいいでしょう。私がいれば何の問題も生じません」

それははっきりと聞き覚えのある、あいつの声だった。アーチャがそうしてくれと願ったとおりに、スクリーンの映像が少しずつ動き、部屋の中をより鮮明に映し出した。部屋の隅に立っていたのは、紛れもない、ジェッキンゲン・トーバノアだった。いつものケバケバしい服装の上に華麗な笑みを浮かべ、ヴァークスをその高い鼻の

上から優越そうに見下ろしている。

「それで……その……」

ヴァークスの態度が急にたどたどしくなった。

「約束の報奨金のことなんですが、もうちょっと上げてもらえませんかね？」

ジェッキンゲンのさげすむような笑みに拍車が掛かったのをアーチャは見た。ヴァークスのいやしい瞳がすがるようにジェッキンゲンを見つめていた。

「ボランティア団体と装ってあの怪物に近づいてから、一年も耐えてきたんですよ！　いつ殺されるかも分からない恐怖の中で一年もですよ？　やっとここまで追い込んだんです、もう少しだけ……」

ほんの一瞬だけ映像が乱れ、次には、すぐ目の前にヴァークスの後ろ姿があった。

今のアーチャにも、この時自分が何を考え、何をしようとしていたのか、よく分かっていた。アーチャを孤独から救ってくれたヴァークス、とても頼りになるヴァークス、そして、アーチャを売ったヴァークス。そのどれもが憎かった。その手で殺してやりたいほどに、憎く、そして、悲しかった。

「ヴァークスを殺したのはお前だったんだ、アーチャ」

スクリーンに映し出される悲惨なシーンをじっと見つめたまま離さない、怒りと悲しみに満ち満ちたアーチャのその耳元で、男の声が言った。アーチャは呆然としたままスクリーンを眺め続け、血の

ほとばしる鏡の中の自分と静かに向き合っていた。
鏡の中でたたずんでいるのは、まさに悪魔だった。全身を覆う紫色の皮膚、鋭い爪先から滴り落ちるヴァークスの血、黒い大きな翼と先端の尖った大きな耳……闇の中で己を見つめる、何者も寄せ付けないその凍りのように冷たい、青い眼。

「あれが……俺か……」

アーチャは、すべてを受け入れるような穏やかな口調で呟いた。
それからすぐ、スクリーンの中で新たな動きがあった。変わり果てたアーチャが鏡の中で後ろから後頭部を殴られたのだ。映像がグルリと向きを変え、背後に迫っていた大勢の兵士たちを捉えた次の瞬間、映像はもうソファの下だった。どうやら、ジェッキンゲンが背後から何か魔法をかけ、アーチャを埃まみれの床に突っ伏させたらしい。

「魔法で筋肉を麻痺させましたので、いずれはまぶたさえ開けていられなくなる。人のことは言えませんが、後ろから殴りかかるのは反則でしょう」

ジェッキンゲンの高らかな声が言った。スクリーンには次々と兵士たちの足元が映し出され、その映像いっぱいに埃が舞い上がった。

「すぐに海底へ連れて行きなさい。でもそーっと、慎重にですよ。大事な大事な私の宝物なんですからね！」

映像はここで途絶え、ジェッキンゲンの鼻に付く気取った声すら聞こえなくなった。アーチャは空っぽな表情で真っ暗なスクリーンを眺めていたが、やがて映像が再生され、そこにジェッキンゲンともう一人、ゼル・スタンバインの姿が映し出された。アーチャは目

をパチクリさせた。

「ようこそ、我が軍の秘密基地へ」

ジェッキンゲンがこちらを見下ろしながら言った。そのすぐ右隣で、ゼルが沈痛な面持ちのまま突っ立っている。二人の頭越しに、錆びれて黒ずんだ鉄製の格子が列を成して立ち並んでいるのがうっすら見えた。どうやらそこは、アーチャが先ほど訪れたあの牢屋らしい。

「てめえ……ヴァークスと一緒にいた野郎だな」

アーチャの声が牢屋に荒々しく響いた。ジェッキンゲンの白い歯が闇に映えた。

「血の気の多さ、殺意に満ちた目、その美麗な容姿、恐るべき力。すべてにおいて、他の追随を許さない完璧な種族。しかし、そのままでは力が強すぎる……この私を上回るほどにね」

闇の中でジェッキンゲンの両手が赤く輝き、炎のようにギラギラと揺れた。

「そこで私はひらめいた。君をジャーグ族とヒト族の二つに分けてしまおう、と。君たちジャーグ族はその邪悪な姿を隠すため、日頃からヒト族でいられるようにしていたみたいですしね。だからやり方さえ心得ていれば、ほら」

ジェッキンゲンの赤く輝く両手が無抵抗なアーチャに向かって伸びていき、スクリーンに映っていた映像が一瞬にして切り替わった。アーチャが見つめるのは、壁にもたれて座り込む、抜け殻も同然の

もう一人のアーチャだった。

「スタンバイン。このヒト族をどっかの部屋に放り込んでおいて。面倒なら殺しても構わないけどね」

「いえ……ドレイとして働かせましょう。一人でも多い方が作業ははかどります」

「まあ、それもそうですね。とりあえずこっちの方は、その時が来るまでこのまま閉じ込めておくのが無難でしょう。強大な力を持ってしても、この二人が揃わなければその力も発揮できまい」

十七章　闇の中の答え　4

気付くと、白く輝くスクリーンの前に誰かが立っていた。アーチャが鏡の中で見たジャーグ族の男が……いや、もう一人のアーチャが、そこに立っていた。

「君は……俺だったのか」

アーチャは感情のない声で言った。こちらを見つめ返すその青い瞳が、スクリーンから放たれる光の中でぼんやりと輝いていた。

「ようやく分かってくれたみたいだな、俺」

もう一人のアーチャが、アーチャの声でそう言った。アーチャはおぼつかなげにクラクラと立ち上がり、小さくうなずいた。

「俺たち、また一人に戻らなくちゃいけないのか？」

アーチャが聞いた。

「だろうな」

もう一人のアーチャが答えた。

「無論、人格がどっちになるのかは分からねえ。俺か、それともお前か。もしくはその両方か、もしくはそのどちらでもないか……」

アーチャは低くうなだれたが、すべてを了承したようにまた顔を上げた。

「俺が俺でなくなる前に、教えてくれないか？　俺たちのこと、ジャーグ族のこと」

もう一人のアーチャはしばらくアーチャを見つめ続けたが、やがてしっかりとうなずいた。

「ずっとずっと……もう何百年も前の話だ。俺たちジャーグ族の祖先は、マイラ族と浮遊島で共存していた。けど、少しずつ力と邪悪さを増していくジャーグ族を、マイラ族は段々と恐れるようになった。結果、ジャーグ族は地上へ追放された」

「どうしてジャーグ族が？」

アーチャは即座に聞いた。

「当時は、その数も力も、マイラ族がジャーグ族を上回っていたからさ。いや、正確には、上回っていたからこそ、ジャーグ族の急速な成長に脅かされ、追放することを選んだんだ。支配される側でなく、支配する側で存在していたいがためにな」

「ずいぶんと理不尽だな」

アーチャは言ったが、もう一人のアーチャは首を振った。

「いや、一概にそうとは言えない。なぜなら、ジャーグ族も気付いていたんだ。自分たちの体に宿る力がどれほど邪悪で、おぞましいのかを。だから素直にマイラ族に従い、彼らは地上で生きることを選んだ。そうして、その力を地下深くに封じ込め、普段はヒト族の姿でいるようにし、外界に自分たちがジャーグ族であることを悟ら

れないためにひっそりと暮らしていった。……そしてその無名の地は、後にこう名付けられた……グレア・レヴ、と」

「そうか！」

アーチャは弱々しく指を鳴らした。

「ジェッキンゲンがフラッシュを使って街を攻撃した……地下に眠るジャーグ族の力を復活させるために。奴がそのことを知っていたのは、未来の世界で時空連盟に勤めていたから」

もう一人のアーチャは、自分の頭の冴えっぷりにやたらと感心して何度もうなずいていた。

「俺とお前が分離した後、お前の見聞きしていることがなぜだか俺にも伝わった。これは俺にとって幸運だった。俺はそのおかげで人格を失わずに済んだんだからな。そしてその人格に関しては、お前もかなり幸運だった」

「俺も？」

アーチャはすっとんきょうな声を出した。

「ジェッキンゲンの魔力が弱まっているおかげで、俺たちはこうして面と向かって話すことができるんだ。そうでなければ、お前はまたいつものように意識を失い、記憶を忘却させていただろうさ。しかもお前の怒りは、ほんの一時的だが、俺の人格を完全に取り戻させることもできた。ジングをやっつけることができたのも、そのおかげだ」

「魔力が弱まってるって、どういうことなんだ？　やっぱりあいつは魔族じゃなかったのか？」

もう一人のアーチャは鋭い牙を見せつけてニヤリと笑った。

「あいつが魔族じゃないのは、弟のファージニアスを見れば分かるだろう。あいつは、お前の仲間だったピゲ族の三人と同じ手を使って魔力を手に入れてたんだ」

アーチャはすぐさまピンときた。

「マイラ族の翼か」

もう一人のアーチャは力強くうなずいた。

「ジェッキンゲンは定期的にシャヌの翼から羽を抜き取り、我が物にしていた。けど、お前があいつの元からシャヌを引き離したことで、その力は徐々に弱まり始めた。一度は帰ってきたものの、薄れ始めていた魔力を完全な状態へ戻すまでには至らなかった」

「シャヌには申し訳ないけど、いっぺんにたくさん抜いちまえば良かったんじゃないのか？」

もう一人のアーチャは鼻で笑い、やれやれといった調子で再び説明を始めた。

「お前、目の前で見たじゃないか。ピゲ族がマイラ族の強力な魔力に耐え切れず、あっという間に朽ちていくあの様を。発狂して暴れ回り、骨だけになって死んでいったあの様を。ただでさえ魔力には耐えられない小さな体なのに、バカみたいに欲張るからあんな結果

になってしまったんだ。まあ、欲張りという点では、ジェッキンゲンも負けず劣らずだけどな。……さて、と。立ち話はここまでだ」

アーチャの中に再び緊張感が戻りつつあった。この数分間、もう一人の自分を相手に冷静な態度と面持ちで会話をしていた自分が、とても信じられなかった。

「そうか……俺たち、一人に戻るんだったよな」

すっかり気落ちした様子のアーチャに向かって、もう一人のアーチャが同情するような表情でため息を漏らした。

「自分が自分でなくなるってのは、死に値する恐怖かもしれない。けど、お前が本当のお前に戻るには、これしか方法がないんだ。お前はずっと“答え”を探していたんじゃないのか、アーチャ？」

アーチャは黙りこくってうなずいた。

「……俺の求めていた答えは、君だった。俺たちが元の一人になることで、その答えは完結する……だったら、やってやるさ。俺はもう迷わない。その答えってやつを、最後まで見届けてやるんだ」

二人は互いの目を見つめたまま同時にうなずいた。そして、そうすべきだと分かっていたかのように、アーチャとアーチャは手を取り合い、しっかりと握った。二人を結ぶ接点から強い光が放たれ、それが熱に変わると、そこはもう元いた薄暗い牢屋だった。

アーチャは半ば呆然として周囲を見回し、そこに自分一人しかいないことを再確認した。

十七章　闇の中の答え　5

「不思議だ……こんな状況だというのに、快楽が体を満たし始めている」

その声はアーチャのものだった。だが、鋭い爪も、背中から生える黒い翼も、紫色の皮膚も……そして、その人格さえも、アーチャのものではなかった。もう一人のアーチャが、その体のすべてを支配していた。

「悪いね、アーチャ」

アーチャは自分の心に向かって呟いた。そして、かつての記憶と感覚を思い出すかのように、その大きな黒い翼をその場で羽ばたかせ、まだ眠ったままの邪悪な力をみなぎらせた。

「待ってろ、アンジ。すぐそっちへ行く」

アーチャは大きなつむじ風を巻き起こすほど強く翼を羽ばたかせ、その勢いを利用して格子に突っ込んでいった。鉄格子はマッチ棒でできているかのようにベキベキとへし折れ、素直に道を譲った。アーチャはバランスを失いつつもできるだけ早く翼を動かし、突風が路地を吹き抜けるかのように牢屋から飛び出すと、一気に聖地の天井付近まで舞い上がった。そこから湖の張る地面を見回しても、やはり誰もいなかった。しかし、アーチャのその耳はかすかにだが、どこかから発せられる騒々しい物音をちゃんと聞き取っていた。

「あの作業場からか」

アーチャはくるりと向きを変え、過去に自分たちが神殿造りに励んでいた作業場へと通じる穴を見定め、凄まじいスピードで滑空していった。穴に飛び込む寸前に翼を折りたたみ、地表スレスレを飛んで行くその姿は、その手の学者から言わせればまさに未知の生き物で、百科事典に載せようと意気奮闘してカメラを構えたに違いない。

穴を抜けた先は、まさに戦場の真っ只中だった。

イクシム族を始め、ゴーレム族、ギービー族、ノッツ族、それにマープル族までもが、兵士たち相手に勇猛果敢に立ち向かっている。イクシム族は兵士たちを軽々と持ち上げては投げ飛ばし、ゴーレム族は機械的な動きで兵士たちを追い回し、ギービー族とノッツ族は手を組んで兵士たちにイタズラを仕掛けていた。中でも目を引く戦いぶりはマープル族で、その得意の魔法を駆使し、憎き兵士たちに謝罪の隙も与えないほどこてんぱんにこらしめていた。

大混戦の中、その中央でどっしりと構え、黄金の輝きでその存在感をこれでもかとアピールしているのは、あの神殿だった。黄金の神殿は、アーチャとアンジがいた時よりも遥かに壮麗で、巨大な柱が幾本もそそり立つその風貌は、一日中眺めていても飽きないと思われるほど立派なものだった。

「……グランモニカ」

アーチャは、黄金の神殿の頂において、玉座にゆったりと腰を掛け、ドレイたちの戦いぶりを高見から拝見している巨大な人魚を見つけた。それは紛れもなく、グランモニカだった。両手に輝く巨大な真珠玉が彼女であることを明確にしている。アーチャはすぐさま神殿目がけて急降下し、グランモニカの前に降り立つと、堂々たる表情で近づいた。

「久しぶりですね、アーチャ」

アーチャは足を止め、グランモニカをじっと見つめた。

「よく俺がアーチャだと分かりましたね」

すっかり変わり果ててしまった自分自身を哀れに思いながら、アーチャはそう言った。グランモニカは奇妙な笑顔でアーチャを見た。

「足音で人を判別するなど、私にとっては造作もないこと。例えあなたが、ジャーグ族の姿となって私の前に現れたとしてもね。……きっと彼にだって分かっているはずです」

アーチャは後ろを振り返り、すぐ背後にたたずむ一人のイクシム族を見た。アンジだった。

「お前、アーチャなのか？」

階段を駆け上がってきた矢先、アンジは肩で息をしながらおずおずと聞いた。その声はわずかに上ずっている。アーチャは青々と輝くその瞳でアンジを見つめ返した。

「ああ……なぜ俺だと分かった？」

アーチャはやはり聞いた。アンジは目を逸らしたが、やがてまたアーチャを見た。

「俺、ずっと知ってたんだ……お前がジャーグ族だってこと」

アーチャは言葉を失った。

「ジャーニスに毒矢を撃たれてやられたフリをしてた時、ジャーニスが、アーチャはジャーグ族だと言ったのを聞いたんだ」

「なぜ今まで黙ってやがったんだ?」

アーチャは怒りをあらわにしてじりじりとアンジに詰め寄った。だがアンジは、威嚇的な眼差しで歩み寄ってくるアーチャに動じることもしなかった。

「そんなこと、言えるわけないだろ。自分の正体に気づいてなかったお前に、『お前はジャーグ族だ』なんて……俺だって、ずっと苦しかったんだ」

「ならば質問を変えよう……なぜ逃げなかった?」

アーチャは足を止め、静かに聞いた。

「逃げるって、何から?」

アンジの苛立たしげな声がぶっきらぼうに聞き返した。

「ジャーニスの話を全部聞いたんだろ? ジャーグ族の恐ろしさを知って、どうして俺から逃げなかったんだ? こんな化け物の俺から……」

「お前だったからに決まってるだろ!」

アンジは怒鳴った。

「ジャーグ族が自分たちの力と姿に怯えていたのは知ってる。けど

な、それはイクシム族の俺たちだって同じことだ。みんな自分が怖かった。他人がこんな醜い自分を見てどう思うのか、どんな冷たい目で見るのか、とても怖かったんだ。だが……お前は違った」

アンジの声は段々と小さくなっていったが、アーチャにはすべて聞こえていた。

「お前だけだった……こんな俺に話しかけてくれたのは。仲間を失い、絶望の中で生きていた俺は、あの時お前に心配されて……本当は、すごく嬉しかったんだ。異なる種族同士での争い、考え方の行き違い……そんなのはみんな些細なことなんだって、関係ないんだって、気付かせてくれた。そんなお前を、俺は心の底からすごいと思った。だから、お前がジャーグ族だろうが何だろうが、そんなことはどうでもよかったんだ。俺はお前を……アーチャ・ルーイェンを、まじで尊敬してるんだぜ」

アーチャはまっすぐにアンジを見ていられなかった。アンジに対する後ろめたい思いが、アーチャをそうさせていた。

「お前にそう言われて、あいつも喜んでるだろうよ……」

「え……何？」

アンジは聞き返したが、アーチャは応じなかった。

「悪いけどな、アンジ。俺はもうお前の知ってるアーチャじゃねえんだ。ジャーグ族として目覚めたもう一人のアーチャとして、俺は今ここにいる……これからもずっとな」

アンジは視線を下に向けてしばらく黙り込んだが、やがて顔を上

げた。

「分かった。分かったから、これ以上複雑なのはなしだ。とにかく、お前はアーチャなんだろ？　だったらそれでいいじゃねえか」

アンジの開き直りも同然の態度に、アーチャは思わず拍子抜けしたが、これからやるべきことを完全に忘れはしなかった。

十七章　闇の中の答え　6

「これは一体どういうことなんだ？　なぜドレイたちが暴走してる？」

「グランモニカが発破をかけやがったんだ」

アンジは興奮気味に答えた。

「お前と別れた後、俺は真っ先にこの作業場へ向かった。作りかけだった神殿のことも気になってたしな。中に入ると、ドレイから兵士まで、全員がここに集まってた。この神殿の頂上にグランモニカが座っていて、みんなに向かってこの神殿のことを話していた。俺はドレイたちに紛れ込んで隙を窺い、機会を見計らって遺跡の階段を駆け上がった。そして、グランモニカに地上で起こったことを全部話した。フラッシュのこと、ゼルの言っていたジャーグ族復活のこと、ザイナ・ドロ将軍が行方不明になってること……とにかく全部だ」

アンジは早口で一気に説明し、一呼吸置くと、また続けた。

「ドレイたちだけじゃなく、兵士たちでさえグランモニカの力に屈服しているようだった。兵士って言ったって、ただのヒト族だ。あの魔力の前じゃビビって何もできやしない。俺はグランモニカと顔見知りだったし、あの人は俺の言うことを信じてくれたみたいだった。その後は見てのとおりだ」

アンジは眼下で戦闘を繰り広げるドレイたちを見回した。

「グランモニカがみんなに話してた神殿のことって何なんだ？」

アーチャが聞くと、アンジは腕を組んで記憶を辿った。

「途中からでよく分かんねえけど、確か……この神殿を地上へ浮上させるだか、魔力を開放させるだか……そんな感じだったぜ」

「そのとおりです」

背後からグランモニカの声がして、二人は同時に振り向いた。グランモニカのすべてを見透かすような瞳が、二人をじっと見つめて離さなかった。

「先日、あなたたちを地上へ送り届けて間もなく、私は察しました。ヒト族と決着をつけなければならない時が来たのだと」

グランモニカがまとう繊細な衣が、黄金の床の輝きに反射してキラリと光った。

「教えてくれないか？　この神殿のこと、今までのこと、これからのこと……」

「いいでしょう」

グランモニカは、アーチャの要望に素直に応じてくれた。

「ですが、時間がありませんので簡潔にお話します」

二人は、兵士たちの叫び声やけたたましいまでの騒音から逃れるようにしてグランモニカの所まで歩み寄り、その小さく澄み切った

声を一言も聞き漏らすまいと耳をそばだてた。

「ジェッキンゲン率いる軍隊が、私たちの住処であるこの海底洞窟を占領したのは二年以上前のことです。ジェッキンゲンはまず、世界各地から多くの血族をここに集め、ドレイとし、日夜働かせました。無論、この神殿を完成させるために。彼がこの海底に目をつけた理由は、魔力の結晶体であるアクアマリンの奪取と、この私を自分の計画に利用しようと目論んだからです」

「あいつの計画って何なんだ?」

アンジが聞いた。

「求めもしないのに、彼は私に色々と話して聞かせてくれました。未来を変えるためにこの時代へ来たこと。世界を支配することで、その目的が成されること……そして、つい先日、ザイナ・ドロ将軍を殺したこと」

アーチャの眉間にしわが寄った。アンジは何か言おうと口を開いたが、言葉は出てこなかった。

「ジェッキンゲンの野望において、ドロ将軍の存在は邪魔だったようです。全世界を手中に収めるにあたり、自分一人の力だけで十分だと考えたのでしょう。現に、地球上の生き物を死滅させんばかりの凶悪な殺戮機械がついに完成したのです」

「多くの生体実験を繰り返したっていう、あの機械のことか?」

アンジはすかさず聞いた。グランモニカはゆっくりとうなずいた。

「ですが、厳密には未完成と言えるでしょう。マイラ族であるシャヌが海底から連れ出され、その強大な魔力が注ぎ込まれることはなかった……そればかりか、地下に封印されていたジャーグ族の力さえも肩透かしに終わり、牢屋に閉じ込めていたジャーグ族の復活さえ阻止された。そもそも、フラッシュを使って封印を解こうなど、哀れな発想です。ジェッキンゲンはおそらく、それほどに焦っていたのでしょうね」

喋り疲れたのか、グランモニカは大きく深呼吸を繰り返し、束の間の休息を得た。

「この神殿は、ジェッキンゲンの虚しい産物とも言えるでしょう」

グランモニカは唐突に話を再開させた。

「彼は、ドレイたちに神殿を作らせる際、未完成だったこの神殿にある仕掛けを施しました。悲しみや、苦しみ、痛み、悩み、絶望感、恐怖感、悲愴感……私たちの心の中に生まれるそれらの闇を、この神殿の内部に蓄積できるように魔法をかけたのです。多くの種族が存在するこの世界において、最強の血族として君臨すべきはヒト族であると主張するために……そして、闇の力を解放し、世界を恐怖で支配するために、ジェッキンゲンはこの神殿をドレイたちに作らせた」

「あんなナルシストに、そう易々と世界を支配されてたまるかよ」

アーチャは牙を剥き出しにしていきり立った。グランモニカは、そんなアーチャの怒りを静めるような柔らかな眼差しでこちらを見据えた。

「私はジェッキンゲンの野望を阻止するため、この神殿を奪い、ドレイたちの心に語りかけた。何が正しいのか、誰が敵なのかを再び思い出させるために。よって、彼らはもうドレイではない。ヒト族と戦うために生まれ変わった戦士なのです。……アーチャ、そしてアンジ。私たちと共にヒト族と戦いましょう。この美しき世界を、そして、私たちの歩むべき未来を破壊したヒト族に、私たちの力を見せつけてやりましょう」

「おい、ちょっと待ってくれ……」

アンジが反論しようとしたその時、足場が低い音を立てて上下に大きく揺れ動いた。アンジは口も利けぬまま床に這いつくばり、頭の上に手を置いてヒーヒー言った。

「子供たちはここに留まり、哀れなヒト族に最後の制裁を与えなさい。生かすも殺すも、あなたたちにお任せします。……さあ、戦士たち。私と共に地上へ参りましょう」

アーチャは心の中でグランモニカの声を感じた。おそらくアーチャだけではない。その場にいるドレイ全員の心にも響き渡っていたのだろう。ドレイたちは互いに手を取り合い、この強い振動に振り落とされないよう、神殿の至る所にしっかりとしがみつき、グランモニカの言葉に従った。

「聞こえますか、アーチャ？」

グランモニカの声が再びアーチャの心に語りかけてきた。

「私の反逆を知ったジェッキンゲンは、既に多くの軍隊を丸め込み、動き始めています。行きましょう、グレア・レヴへ……いえ、あな

たの故郷へ」

その瞬間、ジャーグ族の血が興奮と喜びで全身を駆け巡り、アーチャをかつてないほどに勇み立たせた。有り余る力を解放できる快感、血に飢えた体が発する底無しの欲望、断末魔の叫び声を源とする究極の生命力。

今や、アーチャの感情は爆発寸前だ。

「俺は、ヒト族に殺された両親と仲間たちのカタキを討つ……行こう、グランモニカ」

足場が一際大きく振動し、遂に神殿が宙を浮いた。目を開けていられないほどの白い光に包み込まれると、黄金の神殿は音も立てずに海底の作業場から消滅した。

足元の揺れが唐突におさまった時、夕暮れ時のオレンジ色に染まる空が頭上を支配していた。眼下に見えるのは巨大クレーターの残るスラム街で、アリのように黒くて小さな兵士たちが、群れを成してごそごそと動き回っているのがかろうじて確認できる。アーチャはそこから更に上空へ向かって飛び立ち、西日の射し込む遥か遠くの海岸線をじっと見つめた。

細い筋状の雲の切れ目からこちらに向かって突き進んでくるのは、空を埋め尽くさんばかりの漆黒の戦闘機群だった。

「来い、ジェッキンゲン。俺がすべてを終わらせてやる」

十八章　真紅の戦い　1

空気を切り裂くような無数の発砲音が地上から鳴り響いた。宙に浮かぶ黄金の神殿と、その更に上空を舞うアーチャを狙って、兵士たちが軍から支給されたそのご自慢の銃で発砲を始めたらしい。しかし、翼が風を煽って大きく羽ばたくだけで、アーチャの急所を見定めて飛来してきたその弾丸たちは、何も出来ぬままその役目を終えた。

西から迫り来る戦闘機群は徐々にその輪郭を明瞭にし、逆光の中を低い轟音と共に突き進んで来る。神殿がアジトのある方角へゆっくりと移動する間、アーチャは思いに耽り込み、軍が来襲する様子をただじっと見つめていた。

「戦うこと以外の解決策はないのか？」

弾丸が頭上を飛び越えていく中、アンジがグランモニカに詰め寄った。グランモニカの青い瞳が静かにアンジを見据えていた。

「あなたもイクシム族なら分かるでしょう、アンジ。世界荒廃の元凶がヒト族にあり、彼らの暴走を止められるのが私たち以外に存在しないことくらい。私の考えでは、ヒト族の腐敗した心を改心させる手段など皆無に等しい。ならば、打ち滅ぼすまでです」

「そうして、ヒト族に代わって世界を支配しようって魂胆か」

アンジは吐き捨てるように言い放った。グランモニカの眼がゆっくりと瞬いた。

「あんたもジェッキンゲンと一緒じゃねえか。それじゃあ解決はで

きても、そこから何も生まれやしない。また同じことの繰り返しだ」

「随分とおかしなことを言うんですね」

グランモニカの口角から牙が突き上がった。

「ならばヒト族の肩を持つがいい。ですが、ここにいる者たちはそんなあなたの考えを受け入れてはくれませんよ。彼らの瞳をよくご覧なさい。結束した闘争心と絶対の復讐心に燃えるあの瞳を」

アンジは神殿の至る所を見回した。イクシム族、ゴーレム族、ノッツ族、ギービー族……西日に照らし出されるその表情はどれもが勇ましく、揺るぎないヒト族への怒りを憎悪と共にたぎらせていた。

アンジはたそがれの空を見上げた。遥か上空で翼だけを動かし、じっと動かずに西の海岸線を見つめるアーチャの姿がそこにあった。アーチャが今何を思い、考え、想像しているのか、アンジにはよく分かっていた。

「あいつの気持ちも、みんなの気持ちも、俺は十分承知してるつもりだ……」

遠ざかっていくアーチャの後ろ姿からグランモニカに視線を移しながら、アンジは整理の行き届いた心持ちとしっかりとした語調でそう言った。

「だからこそ止めたいんだ。戦争では何も生まれないということを、気付かせてやりたいんだ。そして俺たちは、種族という概念をかなぐり捨てて、これからを共存すべきだ……それしか解決の方法はない」

グランモニカは何か言おうと身を乗り出したが、空を見上げたまま硬直した。次いで神殿の隅々からどよめき声が上がり、やはりそれぞれが空を見上げた。遠くの方から轟音が聞こえてきた時、アンジはやっとみんなが何を見つめていたのかを知った。それは西日を背にして空を駆け抜けてくる、鋼鉄の戦闘機群だった。恐ろしいほどの数でオレンジ色の空を埋め尽くしている。

「地上へ降り立った時、幾千の歴史上において最も残酷な戦いが幕を開けるだろう」

神殿の高度が少しずつ下がっていく中、アンジの心はグランモニカの声を捉えていた。戦士たちの瞳は夕陽の赤い射光に照らされてより激しく燃え上がり、今にも神殿から飛び降りて兵士たちに立ち向かわんばかりだった。

「地上を支配してきたヒト族の長き時代は今日で終わり、彼らに明日はない。血の力の限りを尽くし、戦いの向こう側にある栄華を見極めよ。悪しきヒト族を根絶やしにし、世界の頂点に君臨すべきは誰かを答えよ。さあ、戦士たち、戦いの準備を」

神殿が完全に地上へ降り立った瞬間、アンジはグランモニカに背を向け、脱兎のごとく階段を駆け下り、グレア・レヴの地へと足を踏み込んだ。そこはアジトと町の中程にある荒地だった。雑草がまばらに茂り、枯れ木がしなびた枝を伸ばしてそよ風にさらしている。アンジが走り出した瞬間、耳をつんざくような爆音が辺りに響き渡った。振り返ると、空中からもうもうと黒煙が立ち上り、煙を尾にして鉄製の残骸が地上へ向かって降り注いでいた。戦闘機が木っ端微塵に吹き飛ばされたに違いない。別の戦闘機がその黒煙の脇をさっそうとすり抜け、次々と町の上空に姿を現した。

「アーチャ……ちくしょう」

アンジは確信した。戦闘機を空中で爆破させたのはアーチャに違いないと。そして、ジャーグ族の血によって目覚めたアーチャは、もう今までのアーチャなのではないと……。

「アンジ！」

アジトが目の前に迫ってきた時、前方からシャヌの声が聞こえた。アジトを背に、不安げな面持ちでアンジに向かって手を振っているシャヌの姿が見えた。おそらく、アーチャとアンジの帰りを心待ちにしていたのだろう。

「アーチャは？　アーチャはどこなの？」

膝に手を置いて苦しそうに呼吸を繰り返すアンジの顔を覗き込みながら、シャヌが急かすように聞いた。アンジは首を横に振った。

「あいつはもうアーチャじゃない。いや……グランモニカに洗脳されて、みんながおかしくなっちまってる！」

その時だ。グランモニカの声がぼんやりと心の中で響き渡った。

十八章　真紅の戦い　2

「さあ戦士たち、各々の力を駆使し、ヒト族から何もかもを奪い去るのです。イクシム族よ、その銃弾にも耐えられる強固な体でヒト族を押し潰し、己の強さをしかと見せしめよ。ノッツ族よ、地に殺意のイバラを這わせ、ヒト族の意思から自由を奪い、バラのトゲで殺傷せよ。ギービー族よ、切り落とされた首を天へ掲げ、死して尚、苦しみと悲しみを死者に与えよ。そしてゴーレム族よ、その従順なまでの意思で我の願いを聞き入れよ……北のアジトに身を隠すジャーニス・アグシールの娘、カエマ・アグシールを、私の元へ」

心の声はここで途切れた。アンジとシャヌは顔を見合わせ、同時にアジトを振り返った。二人とも、なぜグランモニカがカエマを狙うのか、その目的がさっぱり理解できない、といった困惑の表情を浮かべていた。

その時、立て続けに二度の爆発音が大きな振動と共に轟いた。アンジはシャヌの腕を引っ張り、かなり強引にこちらを振り向かせた。シャヌは遠くの空で立ち上る黒煙とアンジの真剣な眼差しの両方を目にして、いささか驚いたようだった。

「シャヌ、よく聞いてくれ。アーチャはジャーグ族の血で目覚め、両親のカタキを討つために軍隊と戦ってる。あいつの暴走を止められるのはシャヌだけだ。シャヌなら絶対にできるって、そんな気がするんだ。だから頼む、アーチャをアーチャ自身の中から救い出してやってくれ」

シャヌはアンジの言葉を理解するのにわずかな時間を要したが、やがて大きくうなずくと、それに続いて翼が美しく上下した。

「アーチャが前に言ってくれた。私に救われる命があるって……その時を待ってるって……私、アーチャを助けたい！」

翼が柔らかに羽ばたき、残照を受けてオレンジ色にきらめいた。アンジの頭上で風が巻き起こったかと思うと、シャヌの両足はもう地を離れていた。

「中のみんなをお願い。私、きっとアーチャを連れて戻ってくるから」

シャヌが西の空へ飛び立った直後、また爆発が起こった。アンジは、熱を帯びた赤い閃光と濃い黒煙を背に、大型の戦闘機から落下傘兵が次々と町へ降下していく光景を目にした。アジトからはまだかなり遠い場所だが、油断はできそうにない。ゴーレム族が一致団結してこちらに向かってくる、その重たい足音が地響きとなって今にも聞こえてきそうだった。

アンジは急いでアジトの扉を押し開け、中に飛び込んだ。“拾い物”によって雑然とした部屋は不安と恐怖の表情で溢れ、そのどれもが一斉にアンジを見つめる結果となった。

「一体町では何が起こってるんだ?」

出し抜けにレッジが質問を投じた。

「アーチャは一緒じゃないの?」

マニカが震える声でレッジに続いた。このままだと呼吸する余裕さえないほどの質問攻めに遭うと確信したアンジは、みんなを落ち着かせようと大声を出しながら腕を振り上げ、詰め寄ってくる錯乱気味の表情たちをその場に沈黙させた。

「心の中で女の声を聞いた奴は？　誰かいるか？」

これまでの借りを返さんとばかりにアンジが質問した。みんな互いの顔を覗き見ては、アンジに向かってかぶりを振った。

「だったら移動しながら話す。ここは危険だし、時間がねえんだ」

アンジは部屋の奥に回り込み、床に散乱する首なしの人形やら、壊れたメガネやらを踏み越え、全員をアジトの外へと追い立てた。それからカエマを背負い、黙って俺について来いと言わんばかりに手招きし、アジトの裏を回るようにして北に広がる荒野を目指して走った。そこは、アンジの一回りも二回りも大きな岩がゴロゴロ転がっていて、身を隠すのには最適な場所だと言えた。

岩場まであと数百メートルというところで、アンジは走るペースを極端に下げ、今までに起こったことを簡潔に説明した。ジェッキンゲンのこと、軍隊が来襲したこと、海底に住む人魚のグランモニカがドレイたちに発破をかけ、今兵士たちと戦っていること、そのグランモニカがなぜかカエマを狙っていること（アンジの首根っこにしがみつくカエマの手に、わずかな力が加わった）。じいさんがみんなに追いついたのは、アーチャの身に起こったことを話し終えた直後だった。

だが結局、その話の内容に関して、アンジは誰の感想も得ることができなかった。すぐ前方にムーンホールが出現し、そこからユイツの体がぬっと現れたのだ。

「止まるんだ」

行く手を阻むように直立しながら、ユイツはそれだけを言った。一行は言われるがままに足を止め、怪訝そうにユイツを見た。

「そこをどけよ。寝ぼけてんのか？」

アンジは苛立たしげに言った。ユイツはわずかに前進し、その悲しみを帯びたような表情でアンジを見つめた。

「寝ぼけてなんかいない。ただ、僕の頼みを聞いてほしいだけだ」

その毅然とした態度と口調から、どうやらそこをどくつもりはないらしい。

「頼みなら後でゆっくり聞いてやるよ。今はそれどころじゃな……」

「今だ！　今すぐにだ！」

アンジとユイツの間を吹き抜けた強い風が砂をさらって宙へ舞い上げたので、二人の視界は一時的にさまたげられた。次にアンジが見たのは、すぐ目の前に立ち塞がるユイツの姿だった。

「その子を……カエマ・アグシールを僕に渡すんだ。グランモニカの所へ連れて行く」

アンジは耳を疑った。こんなにも唐突で理不尽な頼み事を聞いたのは生まれて初めてだった。

「聞き捨てなりませんね、ボーイ」

ファージニアスが華麗に踊り出た。レッジの凄みの利いた形相がそれに続いた。

「みなさんに手荒なまねはしたくありません。おとなしく渡してくだされればそれでいいのです」

「お前、やっぱり軍の味方だったのか！」

レッジが吼えた。ユイツはアンジの肩越しにマニカの当惑しきった表情を覗き込み、説きつかせるような落ち着いた様子で首を振った。

「僕は時間と空間を正しい流れに修正する者。よって、僕はどちらの味方でもない」

またも背後で爆発が続き、アンジはその不吉な轟音に後押しされるように口を開いた。

「なぜグランモニカはカエマを狙うんだ？」

教えてもらってもカエマを手渡すつもりはなかったが、その答えを知りたかったのはアンジだけではない。それは本人であるカエマ自身が一番知りたかった真実だった。

十八章　真紅の戦い　3

「計画に必要な人物として、グランモニカがカエマを選んだからです。これはどの時空の流れにおいても変わらない事実として存在している……決められた流れに逆らってはいけないのです」

「訳の分からないことを……」

カエマの背中に手を添えながら、マニカが言った。

「グランモニカの計画って何なの？　これ以上私たちを巻き込まないで……」

「僕はジャーニス・アグシールを知ってる」

ユイツが不意にその名を口にした途端、マニカから声が奪われた。

「二年前、ヒト族は今までにないまったく新しい種族を誕生させた。そして、それがジャーニス・アグシールの血を使って作られたルーティー族だった。彼はその天才的な発想力と図抜けて高い知能指数を高く評価され、新種創造の実験の材料として選ばれたのです。そんな彼の血を引くカエマもまた、グランモニカに目をつけられてしまった。マープル族の配下となるヒト族の象徴を築くため……そして、新世界への後継人にさせるため」

たそがれ時の冷ややかな空気が周囲を包み込んでくれていたおかげで、アンジたちは冷静に物事を考えることができた。ユイツが何を言おうが、グランモニカがどんなにいかれた思想をぶちまけようが、つまり、結論は単純なことだ。

「象徴？　新世界？　どんな理由だろうと、カエマは渡さないぜ。絶対にな」

アンジが言い放つと、ユイツの表情が一気に険しさを増した。

「だったら、こうするまでだ」

ユイツはさっと身を伏せ、地の上で右手を素早く、大きく振った。アンジの足元にムーンホールが現れ、アンジは底なしの水たまりに飲み込まれるかのように、カエマと共にその中へ落ちていった。

マニカの絶望に震える泣き声と、固い地に向かって姉の名を呼び続けるトナの声が重なった。いたたまれないほどのもどかしさと焦燥感によって生み出された怒りの矛先は、すべてユイツに向けられた。

レッジはユイツに飛びかかったが、ひらりとかわされ、地面に手を着いて倒れ込んだ。

「送りやがれ……」

起き上がろうともせず、レッジが地面に向かって言った。その真下で、くるぶしほどまで伸びた一束の雑草が、風に揺られてユラユラと前後していた。ユイツはレッジのそばまで歩み寄り、彼の背中をじっと見下ろした。

「俺をジェッキンゲンのいる所まで送りやがれ！　こうなったら、親玉のあいつと正々堂々戦ってやる！」

「無駄なことです。そんなことをしても、歴史上の事実は変えられない……いや、変えさせない」

「違う！」

ユイツが冷酷に言い放っても、レッジは引き下がらなかった。

「俺は自分に悔しいんだ。相棒がいなきゃ悪あがきさえできない無力な自分が……軍からこそこそと逃げ回って生きてきた自分が、たまらなく悔しいんだ！」

レッジはゆっくりと立ち上がり、ユイツに詰め寄った。ユイツは微動だにせずにレッジの顔を見上げていた。

「軍に立ち向かっていくアーチャを見ていて、気付いたんだ。俺の選択は間違ってたんだって……ルーティー族は天才かもしれないが、導き出される答えはすべて正解じゃないんだって。だから、例え死んだっていい……俺を、ジェッキンゲンのいる所へ送ってくれ」

「私もお願い」

マニカとトナに付き添っていたフィンが、レッジの話を耳にして勇気を奮い起こしたようだった。もうその表情のどこにも、迷いの色はなかった。

「あの高い鼻をへし折るまでは、絶対に死んでたまるもんですか」

ユイツは半ば呆れ気味に視線を落としたが、やがてすべてを理解したようにコクリとうなずいた。

「分かりました。ジェッキンゲンは今、２００－ヘガという大型戦闘機の中で、西海岸の上空をこちらに向かって飛行中です。……片

道切符です、後悔しませんね？」

二人は互いを見合い、同時にうなずいた。ユイツはいつものようにムーンホールを作り出し、その場から離れた。

「マニカさん」

ムーンホールを目の前にして、フィンが泣き崩れるマニカに向かって声をかけた。

「あの子なら大丈夫。アンジも一緒だし、それに……お父さんと同じで、しっかりしてるもの。ジャーニスはね、自分がどんなに苦しくても、相手がどんなに強くても、決して希望を捨てたりしない、立派なヒト族だったわ。……それじゃあ、さようなら」

マニカが顔を上げると、そこにはもう二人の姿はなかった。

「むごいのう」

赤い空を眺めながら、じいさんがぼんやりと言った。

「人がどれだけ不幸になっても、戦争は終わらないんじゃなからな」

じいさんの視線は、母親の肩に顔をうずめて小さく嗚咽するトナに移っていた。マニカはそんな息子の頭を、慰めるように優しく撫でている。

「さて、僕は町の方へ行きます。まだやらなくちゃいけないことが残ってるんで」

「その前に、一つ聞いてもよろしいですか？」

何事もなかったかのように立ち去ろうとするユイツを引き止めつつ、ファージニアスは質問の認可を要求した。ユイツは立ち止まって振り向き、ファージニアスを見た。ファージニアスはその動作を見て、「結構ですが、手短にお願いします」という意味なのだと勝手に解釈した。

「あなたもしかして、私よりも遥かに遠い未来から来た時空連盟の関係者じゃないんですか？」

ユイツは目をパチパチさせた。ファージニアスは銀髪の前髪をかき上げ、じっとユイツを見つめた。

「時空連盟……設立当初は、確かにそのような名称でしたね」

ファージニアスは心の中でほくそ笑んだが、それは束の間だった。

「確かに、僕には過去や未来の情報を知る力があります。だけど、僕は時空連盟の類とはまるで無縁です。それに、僕の実体は何百年も過去の時間の流れにあって、未来ではないのです」

「実体……ですか？」

ファージニスは首をかしげた。

「そういえばアーチャが言ってましたね。あなたは人々の記憶の中で生きているのだと」

ユイツの口元に微かな笑みが浮かんだ。

「ええ、それは本当です。僕は生まれ持って手にしたこの力を使い、永遠に生き続けるための術を見出しました……すみませんが、話はここまでです。行かなければいけませんので」

ユイツがムーンホールを使って町へ出向いていった直後、ファージニアスは、マニカ、トナ、じいさんを振り返り、陽気に声を張り上げた。

「さあ、私にもまだ残された使命があります。ここは一旦街の中枢へ向かい、みんなと合流することにしましょう」

十八章　真紅の戦い　4

アンジは三メートルもの高さから黄金の硬い床目がけて尻餅をついた。その痛みと衝撃が全身をほとばしると、まるでトランポリンの上で跳ねたかのようにその場で飛び上がった。鈍痛でもがき苦しむアンジに振り落とされる前に、カエマは自らの意思でそこを脱した。

アンジは涙目で辺りを見回した。そして、眼下に広がる廃墟や、兵士たちとイクシム族の壮絶な戦いを見下ろせる高台にいることに気が付き、そこが神殿の頂であるとすぐに悟った。突然の来客に、グランモニカさえも目を丸くしたほどだった。

「あなたがグランモニカね？」

カエマは背伸びをし、勇敢にもグランモニカと向き合っているところだった。

「いかにも……もしやお前が……？」

グランモニカは、目の前で胸を張って背伸びをする少女を穴の開くほどまじまじと観察した。どうやら、自分の探していた人物が自らひょっこり姿を現したことに、戸惑いを隠せないようだった。

「いかにも。私がカエマ・アグシールよ」

カエマはグランモニカを真似てそう言った。既に足元は爪先立ちになり、プルプル震えている。

「これは意外でしたね。もう少し大人びていて、おしとやかな性格

の女の子を予想していたのですが」

「残念だったなグランモニカ。しかもカエマには、詮索好きっていう厄介なおまけ付きだぜ？　その上、頑固で意地っ張りときたもんだ」

アンジはカエマをその場から引き離し、グランモニカがカエマのことを見限ってくれるような口実を並べ立てた。これにはカエマも立腹だったが、グランモニカの場合はむしろ、悦に入ったようだった。

「どうやったのかは知りませんが、なるほど、ゴーレムたちをすり抜け、わざわざ自分から私の元へやって来てくれたようですね。それでしたら話は早い……すぐにでもジェッキンゲンを殺し、世界を闇で包み込むまで……」

「そんなわがまま、アーチャやアンジが絶対に許さないんだから！」

アンジの腕の中でカエマがわめいた。グランモニカはカエマの威勢の良さに感心したようで、周囲の騒音をかき消すほどの高声で笑った。

「カエマ・アグシール……愉快で快活な子ですね……さあ、おいで」

グランモニカが長い指と柔らかな手首を使って手招きした。すると、アンジの腕からカエマの体がスルリと滑り抜け、そのまま宙を舞った。アンジは、金切り声で叫ぶカエマのばたつく足をつかもうと飛びかかったが、手は空を握っただけで、うつ伏せに倒れ込んでしまった。

「アンジ。あなたの相手は私ではなく、ヒト族です。履き違えてもらっては困りますね……それ」

グランモニカのうろこに覆われた手が、カエマの時の手招きとはまったく逆の動きをすると、アンジは神殿の外へ向かって軽々と吹き飛ばされてしまった。得体の知れない文字が円形状につづられた踊り場で一度叩きつけられ、後は地面に向かってそのままゴロゴロと階段を下っていくだけだった。

尻餅の時とは比べものにならないほどの痛みが全身を駆け抜けたが、悠長に悶えている暇はなかった。神殿は再び浮上を始め、カエマを連れたまま上空へ舞い上がったのだ。アンジは痛みと自分への不甲斐なさに呆然としていたが、すぐ背後でけたたましいほどの爆発音が連発したので、そちらを振り返らずにはいられなかった。

そこにあったのは戦闘機の残骸だった。今や爆発と炎上で跡形もないが、似たような黒々とした戦闘機の肉片は町のあちこちに飛散していた。これらすべて、アーチャの手によって葬られた戦闘機の、見るも無残な亡骸だというのか？

アンジは天にでも祈るような気分で空を見上げた。遥か上空で戦闘機群と戦うアーチャの姿が、まったく別の世界に存在する、まったく別の生き物に見えたのは、アーチャがジャーグ族として覚醒してしまった確かな証拠なのかもしれない。

アーチャは今、素晴らしい気分だった。破壊する興奮と、膨大な力を惜しみもなく解放できる喜びが、アーチャの体を無意識の内に動かしていた。邪悪な力をみなぎらせたその拳で戦闘機の翼をもぎ取り、機体の中央を貫き、コックピット内のヒト族たちの戦慄した表情を覗き込む……墜落していく朽ち果てた戦闘機の鉄くずを上空から見下ろし、何もかもを無に変えていくその快感に体が震えた。

もはや地上は炎上する戦闘機の亡骸によって火の海と化し、その炎の勢いは空さえも真紅に染めるほどだった。夕空の赤、炎の赤、血の赤……この強烈な赤みを帯びた戦場が、ヒト族への殺意を更にみなぎらせ、気分を高揚させる源となった。

「やめて！」

数え切れないほどの戦闘機を破壊したところで、背後から何者かの声がかすかに聞こえ、アーチャはとっさに振り返った。

同じ赤色に染まるその翼は、自分のものとは似て否なるものだった。アーチャの心に残るわずかな記憶の欠片が、その翼の持ち主がシャヌだということを思い出させてくれた。

「何しに来た」

アーチャの口調は痛烈だったが、シャヌは動じることをしなかった。

「アーチャを助けに来たの。これ以上、誰も殺してほしくないから……」

「冗談だろう？」

アーチャは冷たく笑った。

「俺を助けるって？　このとおり、アーチャ・ルーイェンはかつてないほどに生き生きしてるんだぜ」

「あなたはアーチャなんかじゃない」

シャヌは小さな声で、しかしはっきりとそう言った。

「私の知ってるアーチャは、優しくて、思いやりがあって……どんなに心が辛くても自分を見失ったりしなかった」

戦闘機が突風を巻き起こして二人の頭上を海岸の方へ飛び去っていった。アーチャの強烈な睨みが奇怪に輝いても、シャヌはひるむことなく続けた。

「アーチャを返して。私を闇の中から救ってくれたアーチャを……」

「黙れ！」

空気をも震撼させるようなおぞましい声でアーチャは叫んだ。

「俺たちジャーグ族を毛嫌いしていたマイラ族なんかに、一体何が分かる？　自らの邪悪な力と姿に怯えて生きてきたジャーグ族の苦しみが、お前なんかに分かってたまるか！　俺はやっと見つけたんだ……誰もが恐れたこの力を自由に解放できるやり方を……それは、死んでいった両親と仲間たちのカタキを討つこと……そして、ヒト族をこの世から抹殺することだ」

アーチャは西に広がる海岸線の向こう側を見つめた。見覚えのある一機の大型戦闘機が、うなりを上げてこちらに近づいてくる。アーチャの感情が更に高ぶり、戦闘機を見つめるその青い瞳が冷たく微笑んだ。

十八章　真紅の戦い　5

ムーンホールの出口はひと気のない静かな通路だった。レッジとフィンは足音を立てずにすぐさまその通路を走り抜け、突き当たりを右に曲がって暗がりに飛び込み、そこで息を潜めた。

「この戦闘機って確か……」

フィンが言いかけた。

「ああ、２００－ヘガ……アーチャが乗り込んだ怪物だ」

レッジは声をわずかに上ずらせてそう言った。

「内部の構造ならすべて覚えてる。それに、最後の相棒も残ってるしな……」

レッジは胸の内ポケットから吸盤付きの金属片を取り出し、通路の照明に当ててキラキラと輝かせた。それはとても小さく、円形で、中央の半球状のガラスが光を通して赤く輝いている。

「私たちのとっておきのお守り……まさかこんな形で使うことになるなんてね」

その輝きに目を奪われながら、フィンは悲しげに囁いた。レッジは、フィンが“お守り”と言ったそれを壁に押し当て、吸盤を使ってしっかりと固定させると、側面の小さなでっぱりを爪で押した。

「行こう。最後の仕上げが残ってる」

レッジはフィンの手を取って立ち上がらせ、もう一度通路を走り抜けた。左手に現れた階段を上り、その先の通路をすぐ右へ曲がり、また階段を上った。そうして辿り着いた先は、狭くて薄暗い通路だった。すぐ右手にやせ顔の兵士が一人立っていて、頑丈そうなドアの前で見張りについている。二人は階段の隅に隠れながら息を殺した。

レッジは尻のポケットから折りたたみ式のナイフを取り出し、刃を引き出すと、フィンに向かって小さくうなずいた。フィンはしばらく無反応だったが、深呼吸を繰り返し、ようやく意を決した。

見張りの兵士にしてみれば、それは一瞬の出来事だったに違いない。兵士がよそ見をした隙を狙ってレッジが後ろに回りこみ、羽交い絞めにすると同時に手に持っていたナイフを首元に突きつけた。フィンは兵士が取り落とした長身の銃を拾い、兵士の頭に突きつけながら慎重に　ドアに近づき、開けた。

「動くな！」

フィンがコックピット内に向かって叫んだ。人質にした兵士を使ってジェッキンゲンをおびき出そうと計画していたのだが、どうやらその必要はなさそうだった。操縦席に座っていたのはその標的であるジェッキンゲン・トーバノアともう一人、ゼル・スタンバインだった。

「おお！　これは、これは……ようこそ、我が空飛ぶ城へ」

自分に向けられた銃口をしげしげと観察しながら、操縦席の向こう側に広がる真紅の戦地をバックに、ジェッキンゲンは満面の笑みで二人を歓迎した。

「俺たちが何しに来たか、分かるよな？」

レッジがナイフをぎらつかせながら言った傍らで、人質の助けを求める声が虚しく繰り返された。

「それよりも、どうやってここに来たか、の方が興味をそそるんですけどね……まあ、さしずめあの小僧がまた手を貸したのでしょうけど。……ゼル、彼を助けてあげなさい」

ゼルは無言で立ち上がり、狭いコックピットを抜けてフィンと向き合った。フィンはゼルを味方だと思い込んでいたので、今はジェッキンゲンの味方のフリをしているのだろうと考えていた。だが、そうではなかった。

ゼルは腰の辺りへおもむろに手を伸ばすと、ベルトから拳銃を抜き取り、何のためらいもなく引き金を引いた。銃声が弾丸と共に飛び出し、レッジの右太ももを貫いた。レッジは痛みで叫びながら床を転げ回り、人質はその隙に逃げ出した。フィンは悲鳴を上げて後ずさりし、血の池を渡ってレッジの上にかがみ込んだ。

「あなた……ずっと味方だと思ってたのに」

もがき苦しむレッジを気にしつつも、フィンは人形のように無表情なゼルの顔を見上げ、涙声で訴えた。その間にも、レッジの足からは血がドクドクと流れ出ている。

「ゼル、もういいですよ。後は私が始末しますから」

ゼルはマントをひるがえして席に戻り、ジェッキンゲンがそれと入れ替わるようにしてフィンの前に立ちはだかった。

「もうすぐで……てめえらの最期だ」

レッジがしわがれ声で言った。その顔には血の気がなく、フィンが止めても尚、話すのをやめようとはしなかった。

「お前がまだこの戦闘機に乗っていてくれて……幸いだった。以前……この戦闘機内のコンピュータにハッキングをかけた時……こっそり爆破プログラムを仕込ませてもらった。……それは、俺たちがさっき仕掛けた……信号送受信専用の起爆装置と連動している……つまり、その爆破プログラムを開始させれば……この戦闘機は爆発して跡形も残らないってわけだ。……無論、俺たちも死ぬがな……」

「さすがはルーティー族、といったところでしょうか」

ジェッキンゲンは賞賛の拍手を送りながら言った。

「しかし、なんと使い勝手の悪い爆弾でしょうか。プログラムも複雑ですし、起爆させるのにも不便だらけだ」

「足跡を残さず綺麗サッパリ終わらせるには、もっともなやり方なのよ……それに、プログラムは臨機応変に書き換えられるから、状況に応じた爆発をさせることもできる」

フィンが不承不承といった態度で説明した。

「戦闘機に仕掛けるもっとも基本的な……爆破プログラムを教えてやるよ」

レッジは額ににじんだ脂汗を血に染まった袖でぬぐい取り、青白いやつれた笑顔で言った。

「燃料の消費量を計算して爆破信号を送るんだ……ここに仕掛けておいたものもそれさ。……起爆装置の電源を入れた途端……爆破プログラムは信号をキャッチし、計算を開始する。そうして……ある一定の燃料を消費したら、起爆装置に爆破信号を送り返す……つまり、このまま順調に飛び続ければ……この戦闘機は勝手に爆発するってわけだ」

ジェッキンゲンの笑みが薄れ、顔面が蒼白になったように見えた。見張りの兵士は狂ったように悲鳴を上げながら逃げ出し、ゼルは不安げな横顔でジェッキンゲンの様子を窺った。

「どうします？　不時着しますか？」

ゼルが提案したが、レッジはせせら笑った。

「もう手遅れさ……相手はこんな怪物だ……起爆装置が信号を送ってから十分も経たずに爆発する。まあ……せいぜいあと一分ってところだな」

「とても残念です」

ジェッキンゲンが肩を落とした。

「みんなここで死ぬのよ……あんたも、私たちもね」

フィンの言葉の一部を否定するかのように、ジェッキンゲンはほんの小さく顔を振った。

「私が一番残念に思うのは、あなた方二人が無駄な死を遂げてしま

うことです」

レッジは薄れゆく視界の中でジェッキンゲンの顔を見上げていた。その表情にはまた微かに笑みが戻っている。

「何を血迷ったことを……」

フィンは自分の目がおかしくなったのかと思った。ジェッキンゲンの姿が二重に見え、その輪郭は靄の中で透かし見ているかのようにぼやけていた。

「失われつつある、最後の魔力を使ってこの影武者を作っておいたのは正解でしたね。これは魔法体といって、実体はまた別にあるんですよ。それにしても……嗚呼、本当に残念です」

「この……ちくしょう！」

レッジはフィンから銃をもぎ取り、会心の笑みを浮かべるジェッキンゲンの顔目がけて銃を乱射した。弾は雲の中を貫通するかのようにすべてすり抜け、天井や壁に当たって跳ね返された。

その瞬間、ジェッキンゲンの姿は完全に消え失せ、レッジとフィンの中にあったわずかな希望も完全に絶たれた。レッジは窓に映る夕空を見上げ、その美しい光景が冥土の土産になってしまうことを悔やみはしたが、心はそう沈んではいなかった。

「やれるだけのことはやったさ」

フィンの震える肩を抱き寄せながら、レッジが静かに声をかけた。フィンの目にいっぱいの涙が溜まり、頬を伝ってレッジの肩に流れ落ちた。

「あとは……アーチャたちが何とかしてくれる」

フィンはレッジの肩に顔をうずめて幾度もうなずいた。

「きっと変えられるよね……こんな世界でも……明るい未来に変えられるんだよね」

十八章　真紅の戦い　6

アーチャの見つめ続けるその真っ只中で、２００－ヘガ大型戦闘機は爆発した。機体の中央部分が黄色い光を放って破裂し、爆音と黒煙が戦闘機の残骸と共に周囲に飛散した。アーチャは自分でも何が起こったのか分からず、機体の断片が丘に向かって雨のように降り注ぐその光景を、ただ黙って眺めているしかなかった。

「ねえ、あれ。人じゃないかしら？」

シャヌは今しがた爆発の起こったあたりを漠然と指差した。アーチャはその指先を目で追い、開かれた地味な色のパラシュートが地上へ向かってゆっくりと落ちていく姿を見つけた。運ばれている人間は意識がないのだろうか？　首を肩に乗せてぐったりとしている。

「まさか……」

アーチャは翼を上下に動かし、パラシュートを目印に空を滑空していった。シャヌもすぐに後を追ったが、アーチャの隼のようなスピードにはかなわなかった。

戦闘機の襲来は２００－ヘガをしんがりにそれ以上現れることはなかった。グレア・レヴの町から戦闘機のエンジン音が消え、残ったのは兵士とイクシム族の痛々しい絶叫だけとなった。だが、西の海岸に訪れた平穏はほんの一瞬に過ぎなかった。

アーチャは町を抜けて間もない所で滑空を中断した。逆光でよく見えないが、アーチャの気を引いた巨大なそれは確かに海の中にいて、こちらをじっと見つめているようだった。

「一体……？」

その瞬間、視界の右半分が強烈な光によって包み込まれ、アーチャは腕でとっさに顔を覆った。そして、訳も分からないまま真っ逆さまに落ちていった。翼を動かそうとしても、右翼の感覚がない……というより、右翼そのものが消滅していた。

耳元で鳴り響く風の音が死の前兆に聞こえた時、アーチャの目の前は草の生い茂る小高い丘の上だった。アーチャは体を縮ませて空を向き、背中から地面へと落ちていった。草がクッション代わりとなったのは幸運だった。そうでなければ今ごろ、背部から発せられる激痛もあいまって、本当に死んでしまっていたかもしれない。地に落ちて間もなく、右翼の付け根部分から炎が燃え上がっているかのような、熱による痛みがアーチャを襲った。

「……大丈夫？」

脇の小道にシャヌが立っていた。心配そうな面持ちでこちらを見つめている。

「俺がやられた時、一体何が起こった？　あの光は何だ？」

アーチャは痛みに耐えながら声を絞り出した。翼を失った今、海面に浮かんでいた得体の知れない何かを、自ら確認しに行くことさえできなかった。

「あなたが何かに気を取られていた時、海面からあの神殿まで一直線に光が伸びたの……あなたの翼はたまたまその光に触れて……」

シャヌはアーチャにそっと近寄りながら説明した。アーチャはパラシュートの降下地点を目指してズルズルと足を引きずっていった。

「でも、神殿には結界みたいなものが張られていて何ともなかった……ねえ、あの人の所まで行くんでしょう？　肩を貸してあげる」

「やめろ！」

アーチャは差し出されたシャヌの手を振り払った。

「マイラ族の情けなんか受けてたまるか……どっか行っちまえ！」

大声を出すと痛みが増し、傷口の熱は広範囲に広まった。あまりの苦痛に身悶えすることさえできず、その鋭い爪を地面に突き立て、土を草ごと掘り返すことで痛みを発散させるしかなかった。

「ダメ。ほら、つかまっていいよ」

シャヌはアーチャの腕と肩を取り、ゆっくりと立ち上がらせた。アーチャは抵抗することもせず、シャヌに体を預けてゆっくりと歩を進めた。

「なぜだ……なぜ俺を助ける……」

アーチャは、「苦しみを紛らわすために声を出したいんだ」と自分に言い聞かせ、心に思ったことを口に出して聞いてみた。

「俺はジャーグ族だぞ……お前たちマイラ族は俺たちのことを……」

「アンジが言ってたよ」

全力でアーチャの体を引っ張りながら、シャヌは笑顔で答えた。

「血が違うからってそこに壁を作っちゃいけない、偏見や悪い概念を捨てて正面から向き合うんだって……アーチャがそのことを気付かせてくれたんだって……アンジ、すごく嬉しそうに話してくれた」

アーチャはシャヌを見た。アーチャの体を支えているだけで限界だというのに、それでも尚、その横顔に笑顔は絶えなかった。

「すごく難しいことかもしれないけど、それは私にもできることなんだよ。だから私はあなたを……アーチャを助けたい。アーチャの理想は正しかったんだって、証明したい。証明できたら、きっとみんな分かってくれる……そんな気がするの」

眠っていた最高の力をやっと手にできたというのに、アーチャは今、最悪な気分だった。翼を失い、天敵だったマイラ族からは情けまでかけられ、過去の自分に説教までされた。何が正しくて何が間違いなのか……アーチャには、その見境がつかなくなりつつあった。今の自分の存在でさえ、例外ではなかった。

二人はそのままゆっくりと歩き続け、やがて小高い丘の上にうつ伏せのまま横たわるヒト族のそばまで辿り着いた。丈の短い見慣れたマントが、風に当たってふわりとひるがえった。

「おい……生きてるのか？」

アーチャはシャヌから離れ、地面を這うようにしながらヒト族に近づくと、小さな声で話しかけた。くしゃっとしわの寄ったパラシュートが布団のように覆い被さり、ヒト族はピクリとも動こうとしない。アーチャはわき腹あたりを押し上げ、ヒト族を仰向けにした。すすだらけ、傷だらけの、ゼル・スタンバインの顔がアーチャを見上げた。

十八章　真紅の戦い　7

「……殺せ」

ゼルはかろうじてそう言うと、口の中に溜まっていた血を吐き出すのにひどくむせ込んだ。

「私は君ばかりか、たくさんの者たちを裏切ってしまった……生かされる価値も、生きていく資格もない」

「……だろうな」

アーチャは考えを巡らせながらそう答えた。

「俺の腕はお前を殺したいと叫んでいる……だが、心の奥底ではその衝動を否定している。何かが……俺の記憶の中で、何かがこの殺意を押し殺そうともがいている」

二人のそばまで歩み寄ってくるシャヌの足音が聞こえた。

「でも、アーチャ言ってたよね？　ゼルは自分を助けてくれた心の中の英雄だって……どうして殺したいと思うの？」

「その英雄っていうのは、過去のアーチャが自己否定のために錯覚した、幻影だからだよ」

シャヌはとっさに振り向き、その声の主を確認した。そこにいたのはユイツだった。見る者の心を魅了する、その不思議な笑顔は相変わらずだった。

「どういうことなの？」

シャヌは誰とも指定せずに質問した。

「つまり、そういうことだ」

アーチャが答えた。

「ジャーグ族は己の存在そのものに屈し、体内に宿る力を封印した。そうして長い間、この邪悪な姿をひた隠しにしてきたんだ。もちろん、俺もその一人だった。普段はヒト族の姿でいるように心がけていた。ジェッキンゲンはその特性を利用し、アーチャ・ルーイェンという存在をヒト族とジャーグ族の二人に分けた。ヒト族だった方の俺は、自分がジャーグ族であることを否定するため、十年前のあの記憶を書き換えた……」

落ち着いて喋ることで無意識のうちに痛みを忘れられることに気付いたアーチャは、横様に寝転んだまま話を続けた。

「元の一つの体に戻ったことで、俺の記憶は悲惨な思い出と一緒に甦ってくれた。ゼル・スタンバインのこと、村で起こったこと……十年前のあの日、俺の身に起きたこと……」

アーチャは深く呼吸し、風に揺られる草花を遠くに見ながら続けた。

「ヒト族だった時のアーチャが、十年前の出来事をみんなに詳しく話したはずだ。俺が住んでいた村が敵国の兵士たちに襲撃され、両親や仲間が殺された……ここまではあいつの言うとおりだ。だが、

炎の中をたった一人で兵士たちに立ち向かって行ったのは、あいつの思い描く英雄、ゼル・スタンバインじゃなかった……その英雄は、自分自身だったんだ」

アーチャは腕を着いて頭を上げ、そのままゆっくり胴体を起こしてゼルを睨んだ。ゼルは弱りきった体でかろうじて呼吸していた。

「惨劇の発端は、西の海岸に打ち上げられていたこいつを、俺の両親が助けてやったことから始まった。その容姿からすぐに国軍に勤務してるヒト族だって分かった。それでも俺の両親は、村の仲間の反対を押し切り、こいつを看病し続けたんだ。国軍に自分たちの正体がジャーグ族だとばれると、何をされるのか見当もつかない……だからみんなこいつのことを恐れていたんだ。……やがて歩けるまでに回復したこいつは、村を出て行った。そして数日後、村は軍の襲撃を受け、俺は両親とたくさんの仲間を失った」

言い終わると、アーチャはそのままうつ伏せに倒れ、再び襲ってきた痛みの波に耐え忍んだ。シャヌは何か気の利く言葉を探しているようで、肩で息をするアーチャの後ろ姿を見つめたまま押し黙ってしまった。

「私には、この世に存在する理由が必要だった」

町の方から聞こえる空虚な発砲音と重なるようにして、ゼルのかすれ声がそう言った。

「その理由を見つける手段がどんなに冷酷なものだとしても、私はその理由に従ってただがむしゃらに生き続けていた。だが……もうその必要もなくなった」

ゼルはうっすらと目を開け、その瞳に夕焼け空を映すと、また静かにまぶたを閉じた。

「あの時も、そして今でも、私の生きがいは兵士として国に貢献することにあった。任務完遂のためなら手段など選ばず、上官に褒められるためなら靴だって舐めた。その上官がどんなに悪い思想を持った者だろうと、私には関係なかったのだ」

「だから俺たちのことを他言し、村を襲撃させたってのか？」

アーチャは怒りで声を震わせた。ゼルは瞳を閉じたままゆっくりとうなずいた。

「だが……まだ幼かった君一人に、私たち軍隊は全滅させられた。私は命からがら逃げ出し、こんりんざい、ジャーグ族のことには一切触れまいと心に誓った。それから何年も経ったある日、ジェッキンゲン・トーバノアがグレイクレイ国軍に入隊してきた。ドロ将軍を買収して今の地位まで登りつめたという噂が流れていたが、私はそれでも奴に従った……というより、従わざるを得なかったのだ。奴は私の顔を見るなり、誰も知らないはずのジャーグ族の一件を話し始めた。戦闘機の墜落で海に放り出されたこと。漂流した挙句、心優しい村人に命を救われたこと。治療途中、そんな彼らの正体を偶然に知ってしまったこと……」

ゼルは更に激しく咳き込み、ぐったりと口を開けて苦しそうに息を吐いた。口から血が滴り落ち、生い茂る草地の一部を赤く染めた。

「ジェッキンゲンは安い賃金でヴァークスという荒くれと三人のピゲ族を雇い、ジャーグ族の最後の生き残りであるアーチャ・ルーイエンと共に行動するよう命令した」

ゼルは自分の知っている情報を全部吐き出してしまおうとしているかのようにまくしたてた。アーチャは一言も聞き漏らすまいと集中したが、余力が底を尽き始めたゼルにとっては酷なことだったに違いない。

「どうして自分から俺を捕まえに来なかったんだ？」

ゼルの容態の悪さを承知しつつも、アーチャは遠慮なしに聞いた。

「ジェッキンゲンは当初、ジャーグ族にはほとんど無関心なようだった。マープル族の住む海底洞窟を占領する計画も同時進行していたし、何より奴の手元にはシャヌがいた。もっとも、ジェッキンゲンにしてみれば、人々を戦慄させるおぞましいジャーグ族の力よりも、手も足も使わずに生物を殺められる魔力の方が魅力的だったのかもしれない」

ゼルは死んでしまったかのようにしばらく動かなくなったが、やがてまたおもむろに口を開いた。

「海底で十年越しに君と再会した時、私は、こんな子供一人に自分の存在をめちゃくちゃにされてしまいそうで、正直、恐怖を感じていた。だが結局、君は私の存在に気付くことなく、ジェッキンゲンの手によって二人に分離してしまった。そうして私は、完全なヒト族となったアーチャ・ルーイェンと出会い、その勇敢な志に感銘を受けた。この子にならシャヌを託せると、私は考えたのだ。……だがその選択は、上官の命令を無視し、同時に自分の存在理由を否定することにつながった。しかし、それでも尚、私は君にすべてを託してみたいと、本気でそう思った……そして、その判断は間違っていなかった」

十八章　真紅の戦い　8

「なぜだ……」

アーチャは拳を握り、弱々しく地を叩いた。

「なぜお前たちは、ヒト族のアーチャをそこまで信頼し、ジャーグ族の俺の力を否定する？　こんな腐った世界で生き残る術は、何者にも劣らない力を手にすることだ。俺はやっと、最強の力を我が物にすることができたんだ……この世界で、俺の存在は確立されたんだ！」

「誰も望んでなんかない！」

シャヌが声の出る限りで叫んだ。

「人殺しのための力なんて、誰も望まない。思い出して……アーチャはそんな悲しい力、望んでなかったはずだよ」

「嘘だ……俺はみんなのカタキを討つんだ……父さんも母さんも、俺がそうすることを願ってるはずだ」

爪が手に食い込むほど強く拳を握り、アーチャは、自分の意思を貫こうと頑なまでに主張し続けた。ゼルは荒々しい呼吸を繰り返し、やがてその虚ろな瞳をアーチャに向けた。

「いや……それは違う。君の両親は、命が儚くも尊いものだと知っていた。だから自分たちの危険を顧みず、私のことを助けてくれた。そんな二人が、君に復讐することを望むと思うか？　アーチャ……

君はたくさんの愛情を受けて育ったんだ」

「……愛？」

その言葉の意味を探るようにして、アーチャは呟くように繰り返した。心の中でずっと、この言葉を待っていたような、そんな気がした。

「君の両親からは、他の者にはない、何か強い力を感じた。それは君が言う邪悪な力でも、弱者を服従させる力でもない。そして私は、ヒト族のアーチャが持っていた何にも勝る力が、その両親から感じた強い力に共通していると気付いた……それは、自らを犠牲にしてでも他人を守り通したいという、愛の力だった」

その瞬間、アーチャは心の中で何者かの声を聞いた。アーチャは知らず知らずの内に、その声に聞き入っていた。

『俺、ずっと疑問に感じてたことがあったんだ』

誰かがはっきりとそう言った。

『俺はどうしてシャヌを助けたいんだろう……って。でも、ようやくその答えが出た』

背中の痛みさえ忘れ、アーチャはその場に立ち上がっていた。そして、しっかりとした足取りでシャヌの前まで歩み寄り、彼女の瞳を見た。こちらをじっと見据え返す、その汚れなき瞳を。

「俺は、シャヌのことをずっと愛してたんだ」

その言葉は、アーチャのものであって、アーチャのものではなかった。目に涙を浮かべるシャヌを優しく包み込むように、アーチャは彼女を見つめ続けた。

「俺が本当の俺であるために……愛し、愛される存在であるために……この姿を捨てる時が来た。俺は、もう一度ヒト族に戻りたい」

「そのきっかけを君に与えるために、僕がここにいるんじゃないですか」

ユイツは「自分のことをお忘れではありませんか？」と言いたげに進み出た。アーチャもシャヌも、ゼルでさえ、ユイツがそこにいたことを忘れかけていた。

「どうやるんだ？」

アーチャがせっついた。

「ヒト族だった時のアーチャの記憶を、掘り起こしてやればいいんです。アーチャは自分の赴く地のすべてに、記憶の隠し場所を幻影として作り上げていた。どこに何があったか、よく思い出してごらん。共通する何かが、思い浮かぶはずだよ」

記憶をさかのぼりながら、アーチャはほんやりと考えた。

「あいつが錯覚した英雄の姿……か？」

アーチャはノロノロと答えた。ユイツは嬉しそうにうなずいた。

「ヒト族となった君は、過去の記憶をそこに隠さなければならなか

った。そうすることで、自身の存在を確かなものとしていたんだ。分かるかい？　本来守られるべきものを差し置いてまでそこに隠そうとした、その場所がどこなのか」

「英雄？　戦士……鎧……そうか、甲冑だ！」

アーチャは突然ひらめいた。

「グレア・レヴでは俺たちのアジトの中にあるし、トワゴの入り口には剣闘士の石像が並んでいた。シシーラにあるレッジの酒場には、鎧をまとった兵士たちの絵が飾ってあった。ヘガの戦闘機には鎧を着た死体。海底には……海底には……そういえば、ジャーニスの手紙を地面に埋める時、何か硬い物にぶつかった。あれはあいつが作り出した幻の甲冑だったんだ！」

すべてを思い出した瞬間、アーチャの目の前は真っ白になった。体がふわりと宙に浮くのを感じた時、アーチャの心は清々しいほどの開放感で満たされていた。

気付くと、アーチャの首に腕をからませるシャヌの姿が目の前にあった。アーチャはそのまま強くシャヌを抱き寄せ、シャヌの肩に乗せた自分の腕を見た。紫色だった皮膚は肌色に戻り、長かった爪は切り落とされた具合に丸く縮んでいた。

「ただいま」

シャヌの耳元にそっと声をかけ、アーチャは、薄れゆくジャーグ族の記憶に手を振り、真紅の空へと追い立てて別れを告げた。

東の空のてっぺんに、一番星が瞬いていた。

十九章　黒雲　1

「みんな……あいつから逃げるんだ」

ゼルは空を見上げたまま唇だけを動かし、やっとの思いでそう警告した。アーチャは横たわるゼルに駆け寄り、ベルトにしっかりと固定されてあるパラシュートを取り外すと、道の脇に放り投げた。その際、服の裾がはだけ、ベルトにくくりつけられた拳銃のホルスターがちらとかいま見えたが、そのことに関して、アーチャは何も考えないようにした。

「あいつって、ジェッキンゲンのことか？」

アーチャは聞いた。ゼルは頭をもたげてうなずき、西の方角を見据えた。

「降下途中、神殿を攻撃するジェッキンゲンの姿が見えた……いや、正確には、殺戮機械そのものだ」

「そんなはずはない」

半ば狂乱気味に歩み出ながらユイツが声を張り上げた。

「ジェッキンゲンは戦闘機の大破で瀕死の重傷を負っていたはずだ。操縦席に装備されている緊急脱出装置を用いて外に飛び出し、あなたと同じく地上に降り立った……」

「それは違う」

ゼルは小さな声で簡明に否定した。

「私と同乗していたジェッキンゲンは魔法体という幻影だった。レッジとフィンが機内に仕掛けた爆弾が作動する直前、あいつが跡形もなく消滅したのを私は見た」

「レッジとフィンの爆弾って？」

シャヌが聞いた。ゼルは上半身を反るようにして起こし、アーチャがそれを手伝った。それから、ゼルは戦闘機内で起こったことを息も絶え絶えに説明し、時には苦しそうにむせこんだ。すべてを知ったアーチャは言葉を失い、すっと立ち上がり、水平線の向こう側からこちらを優雅に眺めるたそがれ時の太陽へと視線を移した。瞳に突き刺さるオレンジの射光がかすみ、レッジとフィンの今際がアーチャの心に焼き付いた。

「ジェッキンゲンが乱した時の流れにおいて、殺戮機械までもが完成し、よって事実が虚偽となった……ばかな」

ユイツは両手で髪の毛をぐしゃぐしゃにかきむしり、錯乱という狂気の中で右往左往し始めた。

「おい……どうしたんだよ」

白花の咲き誇る緩やかな丘を登っていくユイツの背に向かって、アーチャはぞっとしながらも呼びかけた。こんなにも取り乱したユイツを見るのは初めてのことだった。いつも平静で穏やかな男は、今、丘一面に咲き乱れる花々を無慈悲な足取りで踏みつけ、喉の奥から聞こえるのは、威嚇と警戒に染まる犬のうなり声を真似たような音だった。

「信じない……信じない……信じない……信じない……」

しぼり出されるような声が繰り返され、アーチャの耳にまとわりついた。

「町へ戻ろう。争いをやめさせなきゃ」

ついには地面に膝を着いてしまったユイツを気にしながらも、アーチャは半ば強引に提案した。

「グランモニカなら、きっと何とかしてくれるんじゃないかしら。その殺戮機械とかいうものも、止められるかもしれない」

ゼルの重たい体を背負うアーチャに手を貸しながら、シャヌが憶測を述べた。

「確かに……あの人魚にしてみれば……ジェッキンゲンは邪魔者だ」

生気の感じられないゼルの乾いた声がそう言った。アーチャはゼルの肩越しに丘を振り返り、熱い西日を背にしっかりとした歩調で歩み寄ってくるユイツを見た。逆光の中の瞳がギラギラと輝き、瞬きもせずにこちらをねめつけてくる。

「これ以上あいつの好きにはさせない……僕の永遠を汚す奴は記憶から抹殺してやるんだ……」

ユイツは興奮で頬を紅潮させながら意気込み、今しがたとは打って変わった勇ましい足取りでアーチャたちの脇を通過して行った。アーチャとシャヌは顔を見合わせ、ユイツの後ろ姿を目で追った。

すると、ヒト族とジャーグ族たちの入り乱れるグレア・レヴの街並みが自然と目に止まり、アーチャたちの関心を奪い去った。

今や、そこは戦場だった。

炎に包まれた街の中枢で多くの種族が激しくぶつかり合い、互いの体を血に染めて己の意志を貫こうとしている。各々の思いは違えど、戦いの先に待ち受ける絶望という未来へ足並み揃えて行進していくその姿は、まるで、断崖絶壁に向かって突進していく列車そのものだった。無論、その乗客たちは無意味な争いに血と涙を流す生き物たちだ。このままでは本当に、崖下に広がる底なしの闇へと列車もろとも落ちていってしまう。平和という名の列車と共に……。

「すぐ足元にある平和を、どうして誰も望もうとしないんだ……」

アーチャは怒りを押し留めて呟いた。だがその数秒後……アーチャは、闇が頭上に広がるのは夜だけではないということを痛感させられ、膨れ上がる怒りに穴でも開けてしまったかのように、徐々に落ち着きを取り戻していった。しかし、アーチャの心は平常心をも通り越し、乱心まで辿り着くと、その後はずっと恐怖心だった。

「え……あ……」

アーチャの声は物も言えぬほどすくみ上がっていた。

「あれは……黒い……雲？」

見上げつつ、シャヌはゆっくりと言葉を並べた。アーチャは生唾を飲み込み、空を眺めたまま恐々とうなずいた。

「グランモニカが言っていた……神殿にはドレイたちの心の闇を封じ込めてあるんだって。あれが……あの黒雲が……」

十九章　黒雲　2

街から音が消えた。

誰もが天を見上げ、そこに我が道を築く鳥たちでさえ翼をたたんだ。戦士たちは互いの首根っこをつかみ合ったまま硬直し、その風貌はまさに生きる彫像のようだった。ギービー族は無重力空間を舞う奇妙な宇宙人よろしく宙を流浪し、ノッツ族と共に天を仰いで口をポカンと開けていた。

夕空を夜の闇よりも漆黒に染めるのは、神殿の頂から立ち上って宙を漂う黒い雲だった。雲は弾力がありそうなほど厚く、太い柱状になって天へ上って行くその姿は、まるで、漆黒に染まった織物が空から地上へ向かって垂れ下がっているかのようだ。

「どいつもこいつも、頭の中どうなってんだよ」

ゼルの重みでよろけながら、アーチャは食いしばった歯の隙間からもどかしげに吐き捨て、街へ向かって再び歩を進めた。その足取りはやたらと重たく、靴の下敷きになった草葉は根元から折れ、地にべっとりと伏せて靴底の形を成した。

「……アーチャ！」

炎の熱と鉄の焼ける臭気に満ちた街へと足を踏み入れた時、アンジのしわがれ声がどこからか聞こえてきた。アーチャは首を振って周囲を見回し、ジャーグ族の針金のような頭髪がすぐ右手にある崩れた家の外壁からちょこっと覗いているのを見つけ、兵士たちに気づかれないようこっそり歩み寄った。

「元の姿に戻れたみたいだな」

ゼルを外壁にもたせかけるアーチャの姿をまじまじと眺めながら、アンジが落ち着いた声でそう言った。剥き出しになった鉄骨の先端は熱を帯び、暗黒の天に向かってまっすぐ伸びている。

「みんなのおかげさ……それにしても、一体これから何が始まるんだ？」

アンジはぎこちなく首をひねり、黒ずんで汚れた顔を神殿へ向けた。

「カエマがグランモニカに捕まっちまった。ユイツがムーンホールを使ってグランモニカに手を貸しやがったんだ」

「あいつ、グランモニカの味方だったのか？」

カエマの安否を心配しながらも、アーチャはユイツへの不信感を高めずにはいられなかった。アンジは、今度ははっきりとその太い首を振った。

「どっちの味方でもないって、あいつ、はっきりそう言ってた。……グランモニカのあの様子だと、カエマに危害を加えるようなことはしないんじゃねえかな……たぶん」

「どういうことなの？」

静けさを取り戻した街の方角から目を逸らしながら、シャヌは即座に聞いた。

「……ユイツが言ってたんだ」

アンジはもごもごと答えた。

「グランモニカがカエマに目をつけたのは、天才ジャーニスの娘だからだって。それに、新世界への後継人にさせるためだとも言った……」

「新世界？」

アーチャは軽く笑い飛ばし、闇の中でより際立って美麗に光り輝く黄金の神殿へと目を向けた。グランモニカの満悦そうな表情が脳裏に浮かび上がっては消えていった。

「ああ、そうかいそうかい！」

アーチャは聞こえよがしに声を張り上げ、怒りに任せて手振りした。

「どいつもこいつも、自分の危ない思想ぶちまけて好き勝手してるってわけだ。世界支配だの、新世界だの、記憶の中の存在だの、もう訳わかんねえよ！」

遥か頭上で百枚の紙束を全力で引き裂いたような音が轟き、アーチャの憤った心はやにわに臆病となった。視界いっぱいにまで発達した黒雲が渦を巻き、中心から外に向かって稲光が走り抜けた。

「冷静になるんだ、アーチャ」

ゼルはうなだれたまま、潰れかけの声でアーチャを説きつかせた。

「今は時を待つしかない。彼らにとって、私たちの存在などちっぽけなものだ……少なくとも、ジェッキンゲンからしてみればな」

「そういや、殺戮機械がどうとか言ってたよな……」

その時、炎の壁の奥から歓喜の雄叫びが上がり、アーチャは出しかけの言葉をすっかり飲み込んでしまった。街の中央部から絶えることなく聞こえてくるのは、兵士たちの喜びに満ちた叫び声だ。帯のようにたなびく猛々しい低い声が熱風と共に空へ上り、黒雲と混ざって雷鳴と化し、アーチャたちを震撼させた。

「逃げるんだ……ああなってしまっては、もう誰の手にも負えない」

ゼルの言葉を受け止めきれず、アーチャは廃墟の中から外へ飛び出し、たなびく炎の先端にユラユラとかいま見える謎の球体をその目で見た。百メートルほど前方の平坦な荒地にさまようその球体は、表面は白に近い銀色で、そのつややかなボディが黒雲を縫って射し込むオレンジの光線に照り返ると、闇の中でも不気味なほど鮮明に映えた。心臓がドクンと大きく脈打つように、それは律動的に収縮と膨張を繰り返し、その都度、左右上部にある象の耳のような翼が上下にはためくと、割りに合わないその巨体を地上数メートルの高さまで浮上させた。

「あれが？」

アーチャの後を追ってきたシャヌとアンジが声を揃えて驚愕した。言葉には出さないが、アーチャも二人と同じ思いだった。

「あんな丸っこいのが殺戮機械だって？　まるで耳の生えたカブじゃねえか」

アンジは露骨にさげすむと、その言葉を否定するかのように、球体にある異変が起こった。ボディを形成する前方中央の外殻が左右に割れ、そこから更に小さなガラス状の球体が剥き出しになると、黒雲の落とす深い影の中でピカッと一閃した。

「伏せて！」

シャヌが叫んだ。三人は地面に伏せた。アーチャはギュッと目をつぶった。暗黒の視界に一瞬だけ光が射した。音は無かった。だだそこに、恐怖だけが残された。目を開けたくない……アーチャは本気でそう思った。

十九章　黒雲　3

兵士たちの狂喜の叫びは恐怖の叫びに変わっていた。多くの者が撤退し、街を飲み込まんばかりのクレーターの縁に沿って並ぶ軍の装甲車へ我先にと駆け込んだ。足音が地鳴りとなって響き、砂埃を舞い上げた。アーチャはうっすらと目を開け、視界いっぱいに広がる砂の靄を通して向こう側の光景を見つめた。

目の前でメラメラと燃え盛っていたはずの炎が消滅していた。代わりに、地面が大きく半円状にえぐられ、干上がった川のようになって街を横切っていた。深さは大人のイクシム族ほどもあり、滑らかな弧を描く輪郭は底の方まで続いている。その空間にいたはずの者、家屋、戦闘機の残骸、炎、石ころ、空気でさえも、機械から発せられた光に飲み込まれ、荒野へと続く長い傷跡だけを残し、跡形もなく消滅していた。

「ジャーグの翼を焼き切った、あの光だ」

アーチャは身を伏せたままか細い声で言い、膝に手を当ててよろよろと立ち上がった。シャヌもアンジも無事だった。

「こっちへ来る……」

アーチャの手を借りて身を起こしながら、シャヌは囁くように言った。シャヌの言うとおり、殺戮の球体は自らが作り上げた荒地の傷跡を辿るようにして、段々とこちらへ近づいてくる。やや前方に傾き、上部の翼が一際大きくはばたくと、速度を増した。

「本当に逃げた方がいいんじゃねえか？」

アンジはじりじりと後ずさりながら声を震わせた。アーチャは冷静に首を振った。

「光からは逃げられない……それに……」

「あの中にジェッキンゲンがいる……そうよね？」

アーチャは声の主を振り返った。決然とした眼差しで球体を見つめる、シャヌの姿がそこにあった。

「逃げずに立ち向かって、正しいことが何なのかを、私たちが証明するんだよ……目を逸らしちゃいけない現実と戦わなくちゃ」

「そうだよな！」

アーチャは大げさにうなずき、迫り来る殺戮機械なんかへっちゃらだとでも言わんばかりに明るく振舞った。アンジの口がポカンと開いた。

「俺たちがやらなきゃ、誰がやるんだ？　結果がどうであれ、少なくとも、俺たちは答えを見失わなかった。そうだろ？　正義を掲げて戦うんだ。例えその相手が、こんな怪物だろうとな……」

威圧的な雷が明滅する蛍光灯のようにチカチカと光り輝き、耳をつんざくような轟音が雨のように降り注いだ。炎と雷によって照らし出されるその姿は、間近で見るとアジトに並ぶほど大きく、ボン、ボンと音を立てて伸縮する奇妙な容姿を除けば、その美しさにおいて、この空飛ぶ球体の右に出るものはないだろう。それはまるで、誤って地上へ落ちてきた満月の珍事を目の当たりにしているかのようだった。重力に反して浮上を続けるその未知なる球体は、妖美で

壮麗な輝きを放ち、鼓動のようなリズムを取って膨張と縮小を繰り返している。

「ヒト族の知恵によって作られた集大成がこいつってわけだ」

アンジはもうすっかり吹っ切れたようだった。そうでなければ、こんなひどいしかめっ面で皮肉を浴びせられるものか。

「ジェッキンゲン！」

足を前後に開脚し、右腕をシュッと振り上げながらアーチャが叫んだ。こうすると、物語の主人公にでもなったようで気分が良かった。そうでもしなければ、とっくに膝がガクガクいっているところだろう。

「お前がそこにいることは分かってるんだ！　おとなしく姿を現せ！」

球体に変化があったのはそれからすぐのことだった。不恰好な左右の翼がその動きを止め、地上スレスレの高さまで降下すると、グルリと手前に半周し、ボディに大きく描かれたグレイクレイ国の国旗をこちらに見せつけた。やがて国旗の紋様にバツ印の亀裂が生じ、そこから金属製の強固な外殻を突き破るようにして何者かの頭が突き出した。球体のボディよりも深みがかった濃い銀色の頭髪が覗き、それはすぐにジェッキンゲンのものだと分かった。

「アーチャ・ルーイェン……私のすべてを狂わせた元凶か」

全身を凍りつかせるような冷たい声が聞こえた。

「その目……そうか。二つの体が一つに戻ったようだな」

ジェッキンゲンのより明瞭とした声が呟くようにそう言った時、彼の姿はもう首まで見えていた。アーチャは何か言おうと深く息を吸ったが、金属のきしむ不快な音が響いたので思わず口をつぐんだ。花びらのように折り曲げられた四辺の外殻と、首元のわずかな隙間を縫うようにして突き出てきたのは、青く太い筋の浮かび上がるジェッキンゲンの右腕だった。中から体を引っ張り出そうと、白銀のボディに手を着いて踏ん張っている。

「お前の体を二つに分けた時、やはりヒト族の方は殺しておくべきだった。その強大な力だけを欲するのであれば、ジャーグ族の体だけでも十分だったんだからな。まあ、どれもみな後の祭りだ。あのジャーグ族は精神が不安定で、実験の対象には不向きだったのだからな」

アーチャは、黒々と染まるジェッキンゲンの眼を見つめた。機械というヒト族のおぞましい産物によって支配された、無の瞳だ。

続いて左腕が窮屈そうに抜け出し、右腕に習って体を押し出した。金属のひしゃげる鈍い音と、はらわたを引きずり出すような気色の悪い音が重なり、そこに球体が脈動する鼓動の響きが加わった。世にも珍妙な音楽が奏でられ、その不気味な楽器たちにせっつかれるようにして球体の中から現れたのは、ジェル状の赤い物質で包み込まれたジェッキンゲンの上半身だった。稲光を受けて体全体がてらてらと赤く光り、暗闇の中に不吉な光明を差した。

「絶対の権力と支配だけの世界なんて……そんなの悲しすぎる」

シャヌは一歩前へと踏み出しながらそう訴えた。ジェッキンゲンは身を乗り出し、シャヌの悲愴な表情をじろりと見下ろした。

「シャヌよ……かつては、私もお前と一緒だった」

ジェッキンゲンは、自らの心を取り巻く過去への怒りを剥き出しにし、三人を鋭い目つきで睨んだ。

「私にとっての過去……お前たちにしてみれば、それは百年以上も未来のことだ。機械と力のみが世界を支配する、腐った未来だがな……」

十九章　黒雲　4

「どういう意味だ？」

アンジはアーチャとシャヌの後ろから声を張り上げた。言葉と一緒に、身に巣くう恐怖さえも吐き出してしまおうとしているみたいだった。

「これから先、たくさんの国々が殺戮の兵器を持つようになり、世界は『絶対の権力』という名の欲望に飲み込まれていった。そして、ヒト族同士の巻き起こした世界戦争が勃発し、多くの血族が死滅した。百年後の未来から……希望という言葉が消えた」

ジェッキンゲンは目を見開き、顔中に気味の悪い笑顔を浮かべて三人を見回した。

「私は戦争によって腐敗した世界から逃れるため、二百年以上前の過去へとさかのぼった。そして、消滅寸前のマイラ族の浮遊島から一人の赤子を奪った……両親は赤子の名を叫びながら私を追ってきた……私はタイムトラベルの装置をセットし、マイラ族を滅ぼすフラッシュが島を襲うのを待った……事実どおり、島は謎の光によって消滅し、私はその光の力を借りてこの時代へやって来た。当時私には、時空連盟から逃れられるだけの強い力が必要だった。そして、従順な赤子を一から手なずけることで、マイラ族の持つ強大な魔力を利用しようと考えた……十六年後、その計画は完全な失敗に終わった」

アーチャはまっすぐにジェッキンゲンを見上げたまま硬直していた。そして、海底でマイラ族の少女を見つけた時のあの興奮が、再

び体中を駆け巡った。根が生えたように動こうとしない足の裏から正常に動作しない頭の中まで、まるまる全部だ。

アーチャは、シャヌがあまりに不敏で、彼女の横顔さえ見ることができないでいた。どう声をかけたらいいのか、それさえも分からずじまいだ。

「本当は……そうじゃないかって、ずっと思ってた」

その言葉に魔法でもかけられていたかのように、アーチャのコチコチだった体は正常に戻り、首を振ってシャヌを振り返ることができた。

「海底でグランモニカの話を聞いてから、ずっと……」

「……グランモニカ」

ジェッキンゲンは呟き、遥か上空に浮かぶ黄金の神殿を仰いだ。

「アーチャ・ルーイェン……私の心は激しい怒りに満ちている。お前と出会ったことで、順調だったはずの私の計画が徐々に崩れ始めたからだ」

虚ろな表情で神殿を見上げたまま、ジェッキンゲンはくぐもった声で続けた。

「ゼル・スタンバインを丸め込んでシャヌを連れ去り、私の手駒だったグランモニカまでお前に手を貸す始末。終いには、ユイツなどという得体の知れない小僧まで現れた。……なぜだ？　なぜ私に噛み付く？　なぜ強者に従おうとしない？　なぜ運命を受け入れない？　時をも制圧する私の力に、なぜ誰も屈しない？　……私は自ら

に問い、やがてその答えを得た」

球体の正面部分が内部に落ち窪み、左右にゆっくりと割れた。中から淡い光に包まれる、絢爛な輝きを放つオーブが現れた。だがアーチャは、目を細めなければならないほどの美しさにまばゆくその光輝が、まさに死を呼ぶ光だということを知っていた。

「世界を征服することがその答えだとでも言いたいのか？」

徐々に美しさと輝きを増していくガラスのオーブをちらちらと伺いながら、アーチャは上ずった声で聞いた。背後からアンジの嘆きが聞こえ、それは確かに「落ち着け、はやまるな」と聞き取ることができた。

闇に溶け込むような、おどろおどろしいジェッキンゲンの眼光がアーチャを捉え、静かに見据えた。

「時間、空間、光……当たり前のように存在し、常識として周知されているこれらを、世の本当の恐怖として認知する者に、支配など必要ない。なぜなら、その者たちは私と同じだからだ。時間による束縛、空間による閉塞、光による幻影……それらがみな、恐怖そのものであることを、私と同様、彼らは知っている。そして、どうしようもない絶望感で心身が満ちた時、私はある答えを導き出した」

ジェッキンゲンは自らの体を見つめ、酔いしれるような声で続けた。

「強い存在を支配するには、それ以上の力が必要だ。そして、その絶大な力がすぐ目の前にあったことに、私は気付いた。時空を超越し、光を手にすることのできる存在……この殺戮機械こそ、私の理想としていた答えそのものだった」

黒雲が水平線の彼方まで広がり、わずかに残されていた残照のかけらをも飲み込んだ。闇の中からこだまするジェッキンゲンの声は次第にその声量を増し、淡いオーブの光を受けて英気を得た。

「この殺戮機械を完成させるために、我々国軍は数々の生体実験を繰り返してきた。どの種族の血が最もふさわしく、どの種族の体が最も順応するのか？　複数の血を組み合わせ、エネルギー源として適したものを抽出しようとしたこともあった……だが、どれも失敗に終わった。あの当時、シャヌの存在がどれほどいとおしかったことか……だがその点においては、アーチャ、君に感謝すべきだろう。シャヌの生体実験が行われていれば、私は間違いなくそこで満足していただろうから。この世において、マイラ族、ジャーグ族をしのぐ最強の種族が何なのかを知ることもなく……」

ジェッキンゲンの空虚だった瞳の奥に嬉々とした輝きが戻っていた。その奇怪な眼差しで三人を見つめ、並びの良い白い歯が優越そうにきらめいた。

「私が求め、殺戮機械が待ち侘びたその存在こそ、ヒト族という最も身近な種族だった。私は自らの体を機械化させ、殺戮機械を我が身に取り込むことに成功した。誰もが隠し持つ貪欲な心、他人をねたむおぞましい憎悪、弱者を支配する束縛……こいつは、そのすべてを受け入れてくれた！　私はこの世界において、最も強い存在として君臨することができた！」

オーブが今までで最も強い光りを放ち、アーチャたちの目を焼いた。身をかがめる直前にアーチャが見たのは、天に向かってまっすぐ放たれるオーブからの光線だった。深い闇を切り裂くようにして放たれた光芒は、宙をさまよう黄金の神殿に真っ向から直撃した。

アーチャは、まだまともに機能しないままの目を酷使して光の筋を辿り、その先端が神殿の手前まで続いているのを確認した。神殿の周囲には何やら結界のようなものが張られていて、青々とした光の幕が円形状に輝いている。神殿は結界によって厳重に守られ、光は西の空へと跳ね返された。

「結界……？　なるほど、踊り場の術式はこのためか」

ジェッキンゲンは悔し紛れに舌を打った。

「ならばこれならどうだ……時をも消し去る極上のフラッシュ……ヒヒ……」

狂ったようなジェッキンゲンの独り言が続いた。

「私が最強であるために、グランモニカ……お前の存在は私の手によって滅ぼされる。廃れた未来を変えるべき者として……万物を支配する最強のヒト族として！」

ジェッキンゲンのすぐ背部の外殻が空へ向かって押し上がり、球体はみるみるうちに変形していった。アーチャが見たのは、ボディを構成していた金属が液状となり、まるで意思を持って動いているかのようにうねうねと変貌していく驚異的な光景だった。完全な円を形成していた殺戮機械は今やその原型をとどめず、面影さえ残っていない。

アーチャたちが目の当たりにしたのは、どんな反撃の手段にも耐えしのげそうなほど立派な白銀の砲台だった。煙突のように太い砲口が天へ向かって伸び、その根元からは先ほど同様、ジェッキンゲンの体が半分ほど突き出していた。砲台の下部は鉄製のかたびらでぐるりと覆われ、まともな足場を探して宙を流浪している。

「どうすることもできねえのかよ！」

アンジは歯がゆそうに地面を蹴った。

「このままじゃカエマが……」

アーチャが己の無力さを痛感させられたのは、これで何度目だろうか？　打開策を考えてみるものの、出てくるのは腑に落ちないため息ばかりだった。

十九章　黒雲　5

その時、西の方角から赤い斜光が差し込んだので、三人の注意はそちらにそそがれた。それは、今しがた神殿の結界によって跳ね返されたフラッシュが、雲を飲み込んだことによって生じた一筋の西日だった。黒雲の一部にポッカリと穴が開き、そこから眩いほどの強い陽射しが漏れ出ている。

「光……マイラを滅ぼした……フラッシュ……」

シャヌは何かに取り憑かれたようにフラフラと歩き出し、抑揚の無い声を発した。突然のことに、アーチャもアンジも驚くことしかできなかった。

「お前たち、逃げるなら今の内だぞ」

ジェッキンゲンが低い声で言った。

「今度のフラッシュは、発動箇所を中心に直径十キロメートルを飲み込む超強力製だ。ユイツの持つ不思議な力を使って、地球の裏側にでも避難するんだな」

「そんなことしたら、お前も死ぬぞ！」

アーチャは脅すように、それでいて警告するように言った。ジェッキンゲンの視線は上空の神殿へと戻っていた。

「私は死なない。光原子によって作られた核が光のシールドを生成し、互いは反発しあい、私はかすり傷一つ負いやしない。言っただ

ろう。私は光をも凌駕する存在なのだと」

アーチャは絶望感で全身の力が抜け落ち、アンジは恐怖で足をすくませた。

「俺たち、もうダメなのか？」

十キロメートルを十秒で走り抜けられるほどの脚力があればなあ、と悔やみながら、アンジは沈みきったしわがれ声で聞いた。だがアーチャは、アンジの声にはほとんど耳を傾けていなかった。夕陽の光に見惚れたままのシャヌが心配だったのだ。

「なあ、シャヌ。もうすぐでジェッキンゲンの奴がフラッシュを……」

「分かってる」

シャヌの毅然とした声が即座に返ってきた。

「私がやらなきゃいけないってこと……ちゃんと分かってる」

アーチャは、シャヌはフラッシュの脅威を目の当たりにしたせいで、とうとう頭がいかれてしまったのだと確信した。しかし、次のシャヌの言葉ですべてが明らかになった。

「私がこの瞬間に存在している理由が必ずどこかにあるって、グランモニカはそう言った。アーチャ……私、やっと分かった。存在しちゃいけないこの時間の流れに存在している理由が、やっと分かったの」

「シャヌ、何を言ってるんだ？　君がここにいるのは、十六年前にジェッキンゲンが……」

シャヌはただまっすぐにこちらを見つめただけだというのに、なぜだかアーチャは言葉を失ってしまった。

「その後にこうも言ったわ。目的を成し遂げた時、その存在は消えてなくなる、って。私が私のままでいられたのは、そこに果たさなければいけない目的があったからなの。私にしかできないこと……それは、過去の仲間たちを犠牲に、ここにいるみんなを救うことだった」

「まさか！」

アーチャは愕然とした。大きく開いた口から荒々しい声が吐き出され、シャヌを見つめ返す瞳が驚倒によって据わった。

「アーチャ、見ろ！」

アンジが空を指差して叫んだ。そこにあったのは霧だった。夕陽を受ける淡いオレンジ色の霧がキラキラと輝き、闇の中で一際明るく発光している。紛れもない、アーチャとシャヌが未来へ向かって飛び込んだ、あの霧とまったく同じだ。

空を見上げていたジェッキンゲンがぞっとするような笑い声を上げた。

「霧を使って目をくらませようとでもいうのか？　最期の悪あがきがこのザマとは。マイラ族が、聞いて呆れる」

ジェッキンゲンは砲口の照準を神殿に合わせ、会心の笑みを顔中

に広げた。

「冥土の土産だ、受け取れ！」

砲口の先端が爆発したかのような凄まじい衝撃が周囲に広がり、音が壁と化して三人の内耳を襲った。その反動で砲台全体が後方に三メートルほど吹っ飛び、勢いよく飛び出したフラッシュという名の爆弾は（それがどんな姿形をしているのか、誰一人分からなかった）、微かな煙の筋を残し、霧の向こう側にある黄金の神殿へ向かって突っ込んでいった。

発射後の不快な余韻だけが残されたその只中で、シャヌはその場にくず折れ、ジェッキンゲンの怒り狂った叫び声が闇のしじまを貫いた。

「どういうことだ……なぜ発動しない！」

ジェッキンゲンが怒りの形相で怒鳴り散らした。

「何をした！　完璧だったはずのフラッシュに、一体何を細工しやがったんだ！」

砲台が地を鳴らしながら向きを変え、殺意をみなぎらせる発射口がアーチャたちを捉えた。

十九章　黒雲　6

「まだ分からないの？」

アーチャに助け起こされたシャヌが、アーチャの肩を借りながら涙声で言った。

「百年前にマイラ族を滅ぼした謎の光……そして、今あなたが放ったフラッシュ。私が作り出したタイムホールによって時を超え、その二つは繋がったのよ。あなたが自分の時代を捨て、過去へ逃避しようと意を決めたその瞬間から、歴史は変わっていた……そして、あなたの野望は阻止され、その代償として、マイラ族は滅びた」

「違う！　違う！　違ーう！」

ジェッキンゲンは余力の限りを尽くして叫んだ。

「私の意志は、この身が朽ちても尚、その恐怖と共に生き続ける！　世界を震撼させた存在として、人々の記憶に永劫とどまるんだ！」

荒げた呼吸を繰り返すジェッキンゲンの表情が明らかにやつれ始めた。揺さぶられた頭髪はボサボサで、口角からは唾液が流れ落ち、とがったあごの先端を伝って垂れ下がっている。

「そうでなければ、未来を変える意味がなくなってしまう……人々の記憶が私の存在を呼び起こしてくれる限り、世界は私に降伏し、私の存在は確かなものとなる……あんな未来で生き続けるのは、もうたくさんだ……」

「そんなの間違ってる！」

怒りにかられてアーチャが叫んだ。

「こんなやり方じゃ、結局は何も変わらない！　お前がどれだけ強くなっても、人々がどれだけ戦慄しても、世界から戦争はなくならないんだ……。種族という隔たりを忘れ、互いをいつくしむ心を持った時、人は初めて他人を愛することができる。そして、それが平和へのきっかけにつながる」

「こざかしい戯言だ……」

ジェッキンゲンが憎々しげに言うと、そこにずっしりと構えていた砲台が氷のように溶け、やがて風船のように膨らむと、元の球体に戻っていた。

「人魚は後回しだ……まずはお前たちから殺す」

球体の中央部から再びオーブが現れ、その狂気じみた光でアーチャたちの強張った表情を照らし出した。三人は肩を寄せ合って一つにまとまり、二つの球体をまっすぐに見つめる他なかった。この状況をどう切り抜けるか……アーチャは死の恐怖と向き合いながらも考えを巡らせたが、もはやどうすることもできないことを悟っていた。

今この瞬間に、正義の味方でも現れてくれればどんなに心強いか。そう、この声の主のような勇ましくも猛々しい味方が……？

「時が満ち、準備が整った」

等身大のムーンホールをくぐり抜け、三人の目の前に勇敢な姿を

現したのはユイツだった。先ほどの狂乱っぷりはどこへやら、その表情には燃え上がらんばかりの二つの瞳が輝いている。

「ユイツ！　お前どこに行ってたんだよ！」

あまりに突然の朗報だったので、アーチャはユイツの名を『救世主』と置き換えそこねた。

「君たちは離れていて……さあ！」

ユイツに言われるがまま、アーチャ、シャヌ、アンジはその場から遠ざかった。

「俺は今、命というかけがえのない拾い物をしたぜ」

街の出口付近まで避難した時、アンジがようやく口を利いた。額には汗がにじみ、呼吸難にでもおちいったような息遣いだった。

「彼、大丈夫かしら……」

ジェッキンゲンからある程度の距離を置いても、シャヌの不安は依然として残されたままだった。アーチャは腰に手を当て、ユイツの行く末を案じるような面持ちで向こうの様子を見つめた。

「きっと何とかなるさ。あいつ、自信たっぷりなふうに見えたし……シャヌ！」

アーチャはあることに気づいてかなり驚いたが、シャヌとアンジはそのつんざくようなアーチャの叫び声にもっともっと驚いていた。

「な、何？」

「ここにいる……目的を遂げた君が、まだここに！」

シャヌも事の重大さに気づいたらしく、アーチャを見つめ返したまま呆然としていた。

「考え方としては二通りある」

アンジが横から割って入り、「俺はとっくにそのことに気付いていた」とでも言わんばかりの理知的な態度をあらわにした。

「まず一つ、目的を勘違い。二つ、グランモニカの嫌がらせ」

「期待した俺がバカだった」

アーチャは呆れて言った。しかし、アンジの考えは肩透かしだったかもしれないが、その読みは的を射ていたかもしれない。シャヌは考えに耽り、呟いた。

「やらなければいけないことがまだ別にあるとしたら、それって何だろう……」

周囲にはいつの間にか強風が吹き荒れていた。雷鳴はいっそう大きく、連続して鳴り響き、嵐でも迫っているかのような具合だった。そんな近辺の騒音をかいくぐるようにして、ユイツとジェッキンゲンの会話がおぼろげに聞こえてきた。

「待たせたね、ジェッキンゲン。あの時の決着をつけようじゃないか」

「決着？　もうとっくについているではないか。私がこの体を手に入れたその瞬間からな」

「そうじゃない」

ユイツは不敵な笑みを浮かべて否定した。

「『私の魔力とあなたの超能力、どちらがその上をいくのか勝負です』……この言葉、忘れたの？　あの時の決着はまだついてないよ」

ジェッキンゲンの顔に醜悪な笑顔が広がった。

「ちょうどいい……お前には多大な憤りを感じているところだった。初めに言っておくが、私は魔力をもしのぐ優れた力を手に入れた。光という、万物の存在を超越した力をな」

その時、アーチャは信じられない光景を目撃した。剣を前に構えたゼルが、その弱った体をひきずるようにして前進している。向かう先は、ジェッキンゲンの背部だ。

「ゼル！　だめだ！」

アーチャは大声を出してゼルを止めようとしたが、その行動が不幸な結果を招いた。ジェッキンゲンが背後に近づくゼルに気付いてしまったのだ。

「おやおや。無能な剣士の登場だ」

肩で息をするゼルを見下ろしながら、ジェッキンゲンは冷たい声

で言った。

十九章　黒雲　7

「よく聞け、ユイツ……」

尚も前進を続けながら、ゼルはしゃがれた声を発した。

「この核がある限り、お前の策略は失敗に終わる……だから、私が……破壊するまで……」

「哀れな奴め」

ジェッキンゲンは吐き捨てるように言い放った。

「優柔不断なお前は、私の部下になった時からずっとそうだった。大して役にも立たない甲斐性なしめが……上官への楯突きと悪巧みばかりが板につく、何とも無意味な存在よ」

球体から先端の尖ったヤリのようなものが突き出し、ジェッキンゲンはそれを手に取ると、ゼルに向かって構えた。その瞬間、アーチャは我を忘れて駆け出していた。足を踏み出すたびに前方の光景が変わり、対象に近づくにつれてアーチャの中から希望が薄れていった。そして、炎のくすぶる戦闘機の残骸を飛び越え、ゼルが高々と剣を振り上げた時、ジェッキンゲンの手から一本のヤリが放たれた。

「ゼル！」

アーチャはもう一度その名を呼んだ。仰向けに倒れこむゼルの体に深々と突き刺さっていた硬質なヤリは、役目を終えたとばかりに

どろりと溶け、地を伝って球体に飛びつくと、そのまま吸収されて跡形もなくなった。

「お前の始末は後だ、アーチャ」

そう言うと、ジェッキンゲンはくるりと背を向け、ハーフパイプ状の溝に沿ってユイツに接近して行った。

「しっかりして……大丈夫、傷は浅いから」

それは、思いつく限りの慈悲の言葉だった。ゼルの腹部からはおびただしい量の血が流れ、緑色の軍服を絶望の色で染め上げていった。

「まだ……まだだ……」

ゼルはアーチャの手を押し退け、声にならない声でそう言った。立ち上がろうとして肘をつき、震える両腕で上半身を押し上げた。傷口から血がどっと溢れ出し、裾を伝って滴り落ちた。

「立っちゃダメだ！　死んじまう！」

アーチャは必死に叫んだが、ゼルの顔を覗き込んで絶句した。なんと、笑っている。

「立てるさ……誰かのためになら、立てる」

その言葉どおり、ゼルは渾身の力を振り絞って立ち上がり、グラグラとおぼつかなげな両足で全身を支えた。ゼルは驚倒するアーチャをないがしろに、足元に転がっていた剣を拾い上げると、余力を

フルに使ってそれを放り投げた。剣は五、六メートル前方に落下し、地面で跳ねて溝の中に落ちた。

「行け、アーチャ」

力のすべてを使い果たしたゼルは横様に倒れ込み、アーチャの顔を見上げて言った。ゼルの目は完全に据わっていた。その瞳はもはや何を見るでもなく、死という闇に向かって、今にも機能を停止させんばかりだった。

「私のことはいい……さあ、行くんだ」

ゼルの言葉を受け止めた時、アーチャはそこにジャーニスの姿を見た。ジャーニスがアーチャに残した最期の言葉が、頭の中で止めどなく復唱される……。

『行け、地上へ』

何か目に見えない不思議な力で引っ張られるように、アーチャの足は自然と動き出していた。恐ろしい力を備えた究極の殺戮機械目指して闇の中を疾走するには、それなりの勇気と覚悟を要した。それでもアーチャは、その先にある明るい希望を信じて……ジャーニスの思い描いた地上という名の希望を信じて、走り続けた。

ジェッキンゲンに追いついた時、アーチャは見た。街を南北に両断する光の傷跡の中から、剣を持って威勢良く飛び出す一人の男の姿を。

「……ファージニアス！」

ジェッキンゲンの恐怖におののく声が霹靂の轟音と共に鳴り響い

た。ファージニアスは両手で不器用にゼルの剣を持ち、斧で薪を割るようにして頭上へ大きく振り上げると、核に照準を合わせて切っ先を振り下ろした。その動作とほぼ同時に、核がまばゆいほどの強い光を発した。剣の先端が核に触れ、高らかな金属音を響かせた瞬間、ファージニアスは核から放たれた光線に包まれ、一瞬にしてその場から姿を消した。ファージニアスの命は、光によって照らされ、深い闇の中へと葬られたのだ。

アーチャには、ファージニアスの死を悲しむ余裕は与えられなかった。球体から核が滑り落ち、音を立てて地面に落下すると、アーチャの足元まで転がった。

「アーチャ！　シャヌだ！」

ユイツが叫んだ。ジェッキンゲンが核を取り戻そうと躍起になって接近してくる。アーチャは空気のようにふわりと軽い核を拾い上げ、すべきことを承知していたかのように、シャヌの頭上目掛けて放り投げた。

何度も練習を重ねたかのように、二人の息はピッタリだった。シャヌの右手が頭の高さまで上がり、手の平が宙を舞う核へ向けられると、五本の指は力強く空を握った。

「やめろおおおぉぉ！」

耳をつんざくようなジェッキンゲンの絶叫と共に、核は太陽のような強烈な光と熱を発し、ガラスの破片さえ残らないほどの凄まじい威力で爆発した。それは、世界一壮麗で豪快な、忌まわしき花火だった。光の粒が空を埋め尽くす流星群のようになって地上へ降り注ぎ、見る者の心を魅了した。多くの尊い命を奪ったその美しき姿は、光となって解き放たれた死者たちの魂でもあったのだ。

だが、核の中で生成された光はまだ宙に生きていた。それは今ま

で以上にギラギラと強く発光し、アーチャたちの心を容赦なくわななかせた。ジェッキンゲンの奸悪な高笑いが雷鳴と競い合うようにして辺りにこだました。

「光の命が生きていた……私の意志は、まだ未来の中にあったのだ！　光が私を照らし続ける限り、私の存在は滅びぬ！　私は、私の意志と共に、人々の記憶の中で永久に生き続ける！」

それは、ジェッキンゲンの高揚した精神がもたらす、心からの叫び声だったに違いない。未来と過去を生きてきた彼は、本当の恐怖とは何かを悟り、辛苦な現実を否定するため、何にも勝るその体を手に入れた。廃れた人類のしがない産物であり、この世の象徴とも言うべき、その醜い体を。そして、その『正当な行為』が自身の破滅へとつながったことに、ジェッキンゲンはまだ気付いていなかった。

「……さあ、ユイツ。もうこれまでだ」

ジェッキンゲンは静かに言い、核の残していった光の命に向かって手をかざした。発光体は時間の経過と共に大きさを増し、ジェッキンゲンの思い描くままに変化していった。目が痛むほどの強烈な輝きを放つ頃には、そばにたたずむ廃屋をまるまる一戸飲み込んでしまうほどの大きさにまで膨れ上がっていた。

光の命はノロノロと宙を移動し、天にかざすジェッキンゲンの腕の前で音もなく動きを止めると、周囲を太陽のごとく明るく照らし出した。

「僕は、僕自身の扱い方をよく心得ている。よって、僕は負けない」

光彩に照らされるユイツの表情は、それ自体が『自信』で構築さ

れているかのように、揺るぎなく、確実なものであった。

「俺たち、今度こそ絶体絶命だ」

アーチャの元に駆け寄ってきたアンジが、出し抜けに弱音を吐いた。シャヌはそんなアンジの背後から不安顔を覗かせ、ただじっと向こう側の様子を見つめるばかりだ。アーチャはいたたまれない思いにかられながら横たわるゼルの方に目をやった。突風でマントがひるがえる他は、指先一本さえ微動だにしない。ファージニアスに至っては、もう……。

「ファージニアスが殺された……」

アーチャは、吹き荒れる強風の音にかき消されそうなほどの微かな声で切り出した。

「俺には、誰が正しくて、何が間違いなのか、もう分からなくなっちまった。ジャーニスがそうだったように、ジェッキンゲンのやってることだって、それは自分にしてみれば正当な行為なんだ。間違ってなんかないんだ」

二人の黙り込んだ顔をじっと見つめながら、アーチャは更に続けた。

「みんなだって、誰にも否定されたくない考えや思いの一つや二つ、心の中に持ってるだろう？　だから、それらを否定されることは、自分の存在を否定されることと一緒なんだ。それが例え、明確な過ちだったにしても……俺たちは、もっと他人の意志を尊重すべきなんだ」

「でも、ジェッキンゲンのやってきたことは決して許されることじゃない」

シャヌがそう言うと、アーチャはジェッキンゲンへと視線を戻し、アンジは眉根を寄せて顔をしかめた。

「窮屈な世の中だぜ」

そのとおりだと、アーチャは肩をすくめた。

今や、光の命はその主であるジェッキンゲンの球体をも飲み込まんばかりに巨大化していた。その中央部は燦々たる太陽よりも明るく、輪郭はおぼろ月のように淡く輝いている。それにも関わらず、ユイツは相変わらず不敵な笑みを浮かべたまま、何も行動しようとはしない。どんな素晴らしい作戦を思いついたにしても、光の中で薄笑うジェッキンゲンの不気味な表情からも見て取れるように、タイムリミットが迫っているのは明らかだった。

「お前は幸せ者だ、ユイツ。光の中で絶命し、死の恐怖と向き合う暇もなく、刹那にしてそのすべてが滅びるのだからな」

ジェッキンゲンは高ぶる興奮を抑えようともせずにそう言った。両腕が左右に大きく広がり、光の命がその場で大きく震え始めた。

「私は光を糧とし、希望と絶望の狭間でこれからを生きていく……人類の記憶の中にジェッキンゲン・トーバノアの名を刻み込み、我が名を語り継ぐ者の恐怖の根源において、私の存在は確立される……世界の支配者は、この私であるべきために！」

それはすべて、ほんの一瞬の出来事のように思えた。

ジェッキンゲンがその長い両腕を前に突き出すのと同時に、ユイ

ツの表情から笑みが消え失せ、胸の上で組んでいた腕をほどいた。
ジェッキンゲンと同じく両手の平を体の前へ押し出すと、そこに、ルースター・コールズのアジトに覆い被さらんばかりの巨大なムーンホールが出現し、海中を思わせるような空間が見上げる者の視界を波打たせた。ジェッキンゲンによって放たれた光の命は、空間に引き寄せられるようにして吸い込まれ、その麗しげな威容は一時的に姿を消した。

アーチャが、ジェッキンゲンの遥か上空、空飛ぶ神殿のすぐそばにムーンホールの出口が開かれていると気づくのに、そう時間はかからなかった。黒雲で敷き詰まる空をアーチャが率先して見上げ、シャヌとアンジ、ユイツがそれに続いた時、ジェッキンゲンはようやくすべてを悟った。

「いやだ……」

天を仰いだ、ジェッキンゲンの最期の言葉だった。

ねじれた空間をくぐり抜け、ムーンホールから姿を現した光の命は、自らがあるべき元へ……ジェッキンゲンという、支配者の元へ、まっすぐに帰っていった。その儚い存在を、全人類の大過の象徴として見せしめるために。

二十章　アーチャの選択　1

光の命がジェッキンゲンを包み込んだその瞬間、純白の閃光が矢となって周囲に拡散し、アーチャたちの全身を貫いていった。無数の光の矢は一瞬にして大海を越え、黒雲という分厚い闇の天井にぶつかって掻き消えた。

その数秒後、アーチャは右腕で自らの顔を覆い、左腕でしっかりとシャヌを抱き寄せている自分に気がつき、同時に、生きていることを実感した。

顔を上げるとそこには、暗闇の中に溶け込む凄惨な光景が広がっていた。墜落した戦闘機の破片が赤黒い炎を上げ、街を横断する光の傷跡の向こうには兵士たちの亡骸が覆い被さるようにして横たわっている。瓦礫の中に埋もれたイクシム族の体はピクリとも動かず、誰とも区別のつかない血痕が川のようになって地を流れ、乾いた大地を紅色に染め上げている。

その街並みは以前と変わらぬ深閑な空気を漂わせていた。だが、地上では強風が吹きすさび、稲妻は雲の中を疾駆し、黒雲の落とす暗黒の影は今や全世界を覆い、人々の希望を絶望へと変えていた。

アーチャはその只中で、本当の敵は神殿の頂きからすべてを征するグランモニカであることを再認識し、世界に待ち受ける史上最悪の瞬間をその眼で察した。天にそびえる黄金の神殿を見つめる、その二つの眼で。

「この時間の流れにおいて、僕の役割は終わりました」

気配も無く歩み寄るなり、ユイツは出し抜けに言った。

「ジェッキンゲンは死に、グランモニカの計画はとどこおりない。それに君たちは、未来を見ることができた……。あとは、時の終わ

りを迎えるだけだ」

ユイツが何を言いたいのか、三人には分からずじまいだった。互いに怪訝な顔を見合わせ、返す言葉も見つからないうちに、ユイツは踵を返して三人から離れていった。向かった先は、地面に横たわるゼルのところだった。

「大丈夫。まだ息はある……かろうじて、だけどね」

後を追ってやって来た三人に……特にアーチャに向かって、ユイツは言った。どうしてこんなに冷静でいられるのだろうかと、ユイツの態度を見ていてアーチャは不思議に思った。

「……終わったのか？」

案じ顔で覗き込むアーチャに向かって、ゼルはしぼり出すような弱々しい声で聞いた。表情は青ざめ、潤んだ瞳はまっすぐにアーチャを見つめたまま据わっている。

「終わったよ……終わったんだ。……さあ、もう喋らないで」

アーチャは気分を落ち着かせるような静かな声でそう言い、ゼルの肩に手を置いてそっと微笑んだ。ゼルは眠りにつくような安堵した表情でまぶたを閉じ、口元に柔らかな笑みを浮かべた。

その時、雷の遠音とも突風の風音ともとれない、微かな音の響きが鼓膜に伝わり、アーチャたちは音の聞こえる方へ一斉に顔を向けた。ファージニアスが飛び出してきた溝の辺りから聞こえてくるようだった。

「……チャ！　アーチャ！」

それは聞き覚えのある子供の声だった。アーチャは連呼される自分の名前の出所を目指して足を進め、溝の中の暗がりに目を凝らした。声は段々と大きくなり、やがて、その声の主がトナだということが分かった。

「アーチャ！　こっち、こっち！　ここから出して！」

アーチャは四つん這いになって溝の中を覗き込んだ。土の壁を打ち鳴らすトナと、その足元でうずくまるマニカ、そして途方に暮れたような表情のじいさんがそこにいた。

「今出してやる！　アンジ、手を貸してくれ」

アーチャとアンジが二人がかりで三人の救出を試みると、数分後には無事、全員溝の中から這い出ていた。トナ、マニカ、じいさん……三人全員が、激しい泥んこ遊びでも繰り広げた直後のように、服も顔も土だらけ、泥だらけ、傷だらけだった。

「どうしてこんな所にいたの？」

シャヌが聞いた。

「ファージニアスだよ！」

トナが熱っぽく答えた。

「僕たち、ファージニアスに連れられて街まで来たんだけど、途中で兵士たちが逃げ出していくのを見つけたんだ。お母さんはアジトまで引き返そうって言ったんだけど、ファージニアスったら、どう

しても聞かなかったんだ……あいつがいるからって」

トナはここまで一気に説明すると、突然うつむき、何事かを考え始めた。きっと伝えるべき内容を思い出しているんだなと、アーチャは思った。その証拠に、トナは何か思い出したように不意に顔を上げ、また早口で話し始めた。

「この穴にこっそり飛び込んでから、僕たち、ジェッキンゲンの姿を見たよ。丸い乗り物に乗ってたよね？　ファージニアスはずっとジェッキンゲンを見上げたまま、僕にじっとしてろって言うんだ。だから僕、おとなしくしてた。そしたら、大きな剣がいきなりおじいちゃんの上に落ちてきて、おじいちゃんはもう少しで頭を真っ二つにされるところだった」

トナは呼吸を整え、小休止をとると、また説明を再開させた。少し休んだおかげか、その口調は輪を掛けて早くなっている。

「ファージニアスはその剣を見て、何かひらめいた。ポケットからスイッチのたくさん並んだ小さな機械を取り出して、凄い速さでそれを打ち始めたんだ。後ろから覗き込もうとしたけど、その時にはもうポケットの中だったよ。そうしたらファージニアス、今度は剣を持って外へ飛び出していった。それからすぐ、ジェッキンゲンの叫び声が聞こえて、その……僕は怖くなかったけど、お母さんが心配だったから、一緒にくっついて空を見上げてたよ。僕、雷は平気なんだ」

「ファージニアスさんは無事なの？」

トナが喋り終わるのを待ってマニカが聞いた。虚ろな瞳がアーチャを見つめている。

「ファージニアスは……死んだんだ。ジェッキンゲンにやられた」

「でも安心しろよ！」

トナとマニカの顔がそっくり同じに驚嘆したのを見兼ねて、アンジが空元気に声を張り上げた。

「カエマはきっと無事だ。グランモニカは、カエマに手出しするような雰囲気じゃなかった。だから……絶対に帰ってくるさ！」

カエマを守りきれなかったことを遠回しに詫びているのだなと、アーチャには何となく分かった。だがアンジの心意気も空振りで、むしろ余計に二人を不安がらせてしまった。

「あの神殿に、グランモニカとかいうマープル族と一緒にいるんでしょう？　その人のことはファージニアスから聞いたわ。とても恐ろしい計画を企ててるって……でもそれくらい、私にも分かってた。神殿から黒い雲が噴き出した時、とても不吉な予感がしたもの」

マニカの表情が漆黒の空にも劣らぬほどどんよりと曇った。かつては美麗な姿を保っていたブロンドの髪の毛も、今や砂混じりの強風にさらわれ、見るも無残に痛めつけられている。

アーチャはもう、こんな姿のマニカを見ていられなかった。二年前、まだあどけない二人の幼子を連れ、お金どころか寒さをしのぐ毛布さえ持たず、素足のままグレア・レヴへやって来たマニカのことを、アーチャはこの中の誰よりもよく知っていた。

とても仲の良い親子だった。お金がなくても、一日満足に食べられる食料がなくても、それでもそこには笑顔が絶えなかった。そしてその笑顔の奥に隠されていたのは、溢れ出しそうなほどの悲しみ

や、苦しみや、寂しさだった。ジャーニスの最期を見届けたアーチャだからこそ、あの時マニカが見せた笑顔の本当の意味が分かるのだ。

二十章　アーチャの選択　2

「俺、グランモニカの所へ行く」

アーチャは拳を握った。

「魔族相手にどこまでできるか分からないけど……でも、カエマは絶対に連れ戻す！　ついでに、グランモニカもぎゃふんと言わせてやる！」

アーチャはユイツの姿を探したが、どこにも見当たらなかった。ムーンホールの力を借りようと思ったのだが、どうやらユイツを探している暇もなさそうだった。

「シャヌ、もう一度飛べるかい？」

アーチャは期待に目を輝かせて聞いた。シャヌは力強くうなずいた。

「アンジはみんなのことを頼む。俺はシャヌと一緒にグランモニカに会ってくる」

「おう、任せとけ」

アンジの頼もしい返事がアーチャを安心させた。マニカとトナから激励の言葉を送られながら、アーチャはシャヌの手を握り、呼吸を落ち着かせた。今アーチャの心の中を満たすのは、未来を案じる不安感でも、グランモニカに対する恐怖心でもなかった。今自分にできることは何なのか？　自分にしか救えないものとは何なのか？

そして……。

『悔いを残さない生き方とは、何なのか？』

シャヌと共に空へと舞い上がりながら、アーチャは自らに問い掛けた。それは、心のどこかで、世界に待ち受ける最悪の運命を受け入れてしまったからなのかもしれない。もう人類に未来はないのだと、諦めてしまったからなのかもしれない。

神殿がすぐそこまで迫ってきていた。その周囲には、光を弾き返した結界が青白くぼんやりと輝き、黄金の神殿が放つ壮麗な輝きをくすんだ暗緑色に染め変えている。稲妻が頭上を駆け抜け、耳をつんざくような雷鳴がそれに続いた。強風が絶え間なく二人を襲い、シャヌはその度に大きくバランスを崩した。

「あの結界、すごく厄介だと思わない？」

体勢を立て直しつつ、シャヌは非難めいた声を出した。

「グランモニカめ……ちょっとは気を利かせてくれてもいいのに」

突風に運ばれ、アーチャの声がグランモニカの耳に届いたのだろうか？　神殿を丸く取り囲む青白い光彩が段々と薄れ、やがて完全にその姿を消した。二人が顔を見合わせて目を瞬かせていると、グランモニカの声がどこからか聞こえてきた。それは、心の中で響き渡るような感覚だった。

「恐れることはありません。あなた方を丁重に歓迎します」

騒音で満たされる耳の中で響かないせいか、グランモニカの澄んだ声はよりはっきりと聞こえた。アーチャとシャヌはもう一度互い

の目を見て、言葉にならない小さなコンタクトを交わした。二人の意思は複製のごとく瓜二つだった。

シャヌの翼は一際大きく羽ばたき、二人は荒れ狂う強風をものにして神殿の頂きに滑空していった。玉座にどっしりと構えるグランモニカと、そのそばで足を三角に畳んでうずくまるカエマの姿が視界に入った。稲光が神殿の輪郭を浮かび上がらせ、アーチャたちをおどろおどろしく出迎えた。

「アーチャ！　シャヌ！」

カエマは顔を上げて金切り声を上げるなり、駆け寄ってアーチャの膝に抱きついた。

「来てくれてありがとう……あたし……あたし……」

「怖かったんだよね。寂しかったんだよね。もう大丈夫だから」

シャヌはその場に膝を折り、優しく声を掛けた。カエマはシャヌの肩に顔をうずめ、小さく嗚咽した。

「シャヌ、カエマを……」

アーチャはそれだけを言い残し、グランモニカの待つ中央の玉座まで歩いていった。グランモニカは両目を閉じ、深く眠るような面持ちで腰を掛けている。

「世界は、心の闇によって閉ざされ、その役目を終えました」

アーチャの耳はグランモニカのゆるりとした語調を捉えていた。目がぎょろりと上を向き、あごの牙が神殿の輝きに照り返ってキラ

リと一閃した。

「ヒト族の姿に戻れたようですね、アーチャ・ルーイェン」

「そんなことはどうでもいい」

アーチャは冷静に対処した。そして、その落ち着きを失うまいと自意識を高めた。

「カエマを解放しろ。妄想ごっこなら一人で十分だろ」

「私が生み出すのは夢ではなく、現実です」

グランモニカは静かに否定した。

「それに、もう後戻りはできません。黒雲は世界の空を覆い尽くし、命ある者の恐怖心が新世界を呼び寄せ始めた。この世界が完全に飲み込まれるのも、もはや時間の問題です」

アーチャは、アンジからも聞いていたその『新世界』という言葉に、自分でも驚くほど敏感になった。

「その新世界って、一体何なんだ？　まさか、天と地を引っくり返そうってんじゃないだろうな？」

グランモニカは小さく、短く笑った。

「この世界とは別の、私が作り出したまったく新しい世界です。そこには、戦争による荒廃も、腐敗した人々の心も存在しない。カエマ・アグシールは、私の意志を継ぐヒト族の後継人として、この世

界から新世界へと足を踏み入れる。私と共に、新世界を築き上げていくのです」

今度はアーチャが笑う番だった。だがそれは、絶望の淵から沸き上がるような狂った笑い声だった。

「つまり、この世界にも、俺たちにも、明るい未来なんてないってわけだ」

アーチャは自分なりの結論を述べた。すぐ足元には黄金の神殿が燦然と輝いているというのに、アーチャの目には、すぐ上空でねじれるような渦を巻く黒雲の闇しか映っていなかった。

「そんなの横暴よ！」

話を聞いていたシャヌが憤然と立ち上がりながら叫んだ。カエマはその足元で、目線を下に落としたままドレスの裾を握っている。

「人々が手を取り合えば、この傷だらけの世界だってまだ立ち直らせることができる。勝手な思想と独断だけで世界を滅ぼそうなんて、そんなの絶対間違ってる！」

シャヌは、こんな追い詰められた状況だというのに、アーチャよりもよほどしっかりしているようだった。心が闇に染まりつつあるアーチャに対し、シャヌの心にはわずかだが、まだ希望が残されていた。未来への、明るい希望だ。

二十章　アーチャの選択　3

「カエマには先ほど、すべてを話しました。カエマの考えがどのようなものでも、世界の結末に変動はありません。新世界の入り口は開かれ、私たちはその最初の一ページに名を刻むこととなる」

シャヌがまた何か言い返そうと口を開きかけた傍らで、カエマがスッと立ち上がり、グランモニカを睨んだ。

「みんながこの世界に残るなら、あたしだって残る！　家族や仲間を見殺しになんかできないもん！」

途端に、アーチャは毅然とした意気を奮い起こし、グランモニカを振り返った。シャヌの強い志とカエマの言葉が、アーチャにわずかな勇気を与えてくれた。こうするしか道は残されていないのだという、そんな決断を下すための、わずかな勇気を。

「少し時間をくれないか？　地上に戻って、みんなと話したい。もちろん、カエマも一緒に」

グランモニカは考え深げに目をつむり、やがて答えを出した。

「……いいでしょう」

グランモニカの両手に収まる巨大な真珠が、その手の中でチラッと光った。

「かつての生き様を振り返り、涙が枯れるまで別れを惜しむがよい。新世界が時間を許す限り、その機会を与えよう。おりしも、新たな

客人がお見えになるようですしね」

グランモニカの最後の言葉に不審を抱いたその瞬間、アーチャたちは真珠から放たれた強い光に全身を包み込まれ、神殿の頂から姿を消した。ふと気づくと、アーチャたち三人はグレア・レヴの街外れに立っていた。瞬きをすると目の前は別世界だった……まさにそんな感覚だ。

「アーチャ！」

アンジの声が闇をえぐり、地面を揺らすような大きな足音がそれに続いた。アンジ、マニカ、トナの姿が暗闇の向こうから現れ、アーチャたちと顔を見合わせた。マニカは涙で声を震わせながらカエマの名を呼び、その両腕でしっかりと抱きしめた。もう決して離しはしないと言うかのように。

「無事に助け出せたみたいだな」

アンジは嬉しそうに顔をほころばせたが、アーチャの浮かない顔を見て、事態が好転していないことをすぐに察した。

「時間をもらったんだ……この世界が終わる、その時まで」

アーチャは、カエマとマニカが抱き合ったまま号泣する様を見つめながら、アンジにそっと囁いた。トナは赤ら顔をくしゃくしゃにして涙をこらえている。

それは、アーチャとシャヌがグランモニカから聞いた新世界のことを、アンジやマニカに詳しく話して聞かせている時のことだった。街の東に広がる荒地に一点の強い光が射したかと思うと、次にはドーム状に大きく膨張し、また次には一気に収縮して完全に消滅した。

やがて各々が耳にしたのは、こちらに歩み寄ってくる一組の微かな足音だった。

「誰だ？」

アーチャは恐る恐る声を張った。だが、足音の主から返事が返ってくるその前に、今度は街の広場の方で立て続けに三度の光が射し、先ほどと同じようにそれぞれが膨張と収縮を繰り返した。それは夜の繁華街を彩る特別製のネオンを見ているようだったが、その珍妙な現象にいつまでも酔いしれている余裕はなかった。その理由は、足音の正体にあった。

「あーあ、みっともない。また到着地点がずれてしまいましたね」

暗がりから姿を現したその人物を見て、アーチャはすべてを疑った。

「まあ、それはさて置き……。初めまして。私、百十七年後の未来から参りました、時空連盟の歴史調査部担当、ファージニアス・トーバノアです」

その事実を知る者なら、誰もが言葉を失っただろう。死んだはずのファージニアスが、満面に笑顔を広げ、手を振りながらこちらに歩み寄ってくるではないか。足もあるし、体も透けてなければ、顔も青白くない。亡霊でないことは確かなようだ。

「ファージニアス……お前、本当にファージニアスなのか？」

アーチャはどうにかして声を絞り出した。その言葉を聞いて、ファージニアスは何か重大なことを思い出したように目を見開き、手

を叩いた。

「私としたことが、うっかりしてました！　私には初対面でも、皆さんは顔見知りだったんですよね！　その上、私の身の上を何もご存知でない！」

ファージニアスそっくりの男は、自らの言葉で徹底的に打ちのめされたようだった。アーチャたちは半ば呆然とその男を見上げ、カエマはすすり泣くのをやめた。

「率直に申しますと、私、三十二分前に兄に殺された私自身の連絡によって、別の時間の流れからあなた方を助けにやって来た、一年前のファージニアス・トーバノアなのです。もっと分かりやすく言い直すとですね、皆さんが会っていたのは、百十八年後のファージニアスで、私は百十七年後の、しかも異なった時間の流れから来たファージニアスなのです」

アーチャたちに質問させる隙さえ与えず、ファージニアスは容赦なく喋りまくった。だが、言われてみれば確かに、その男はファージニアスそのものだった。極彩色のやぼったいハイネックの服、空咳混じりの流暢で気取った喋り方……どこをどう見てもファージニアス・トーバノア、その人だった。

「時間にはたくさんの流れがありましてね。今も尚その数は増え続けています。そして、その数だけ未来も用意されているのです。しかし、私の未来は死んだ私のものとは異なりますが、大差はないのです。時空を監視する時空連盟も存在していますし、こうしてタイムトラベルも実現可能になった。だから私は、この時間の流れでＳＯＳを求めた私自身が、その直後に殺されることを知っていました。無論、兄の悪事や、グランモニカの新世界計画まで、全部です」

その時、三メートルはある光の傷跡の横幅を軽やかに飛び越えてやって来たのは、光沢のあるタイトなスーツに身を包んだ三人のヒト族だった。みんな背が高かったが、中でもファージニアスは群を抜いて長身だった。

「到達点の計算違いは相変わらずですね」

金髪で童顔の青年が鼻の詰まったような声を出した。ファージニアスはバツが悪そうに顔をしかめた。

「未来の先輩は殺されたって聞いたけど、犯人は実の兄なんでしょう？　それってヤバくないかしら……複雑な意味で」

縮れた黒髪を強引にポニーテールにしたような髪型の女が、つっけんどんな態度で言った。ファージニアスの表情に得意の笑みが戻っていた。

「まあ、その兄も死んでしまったみたいですし、他の流れにこれ以上の影響は及ばないでしょう。これは余談ですけど、私の兄なら平気ですよ。ついこの前、職場希望していた老人保護施設から合格の便りが来たんです。兄は大喜びした末に玄関先の表階段から転げ落ちて、腕と腰の骨を折る大ケガをしたばかりですから。きっと今頃、病室のベッドで枕を濡らしてるんじゃないでしょうか」

笑ったのはファージニアス自身を含め、金髪青年の愛想笑いだけだった。

二十章　アーチャの選択　4

「それで、こいつらが例の……？」

口ひげを蓄えたいかつい顔の男が荒い鼻息でアーチャたちを観察し、事細かく詮索するようにその小さな目をすがめた。

「また乱れやしませんかね？」

「ええ、大丈夫です。彼らには一度、死という現実を突きつけられている。だから時間の流れをまたいでも……」

「ちょっと待った！」

アーチャはようやく割って入ることができた。ずっとチャンスを窺っていたのだ。

「どういうことなのか、まず俺たちに説明してくれよ。あんたがファージニアスだってのは分かった。それで、ここに来た目的は何なんだ？」

ファージニアスはまた「しまった！」という困り顔でアーチャたちを見た。

「先ほども申しましたように、我々は死んだ私自身の連絡を受けてここへやって来たのです。当初は、時空犯罪者である兄を捕まえにやって来たのですが、ここへ向かう途中、本部からジェッキンゲンが死んだとの連絡が入りましてね。しかもその兄を殺したのが、なんとユイツだというではありませんか。現地調査と報告のため、こ

こへやって来た次第です」

「ユイツを知ってるのか？」

アンジが興奮気味に聞いた。

「あたしたちが六年も追い続けてきた時空犯罪者さ。あんたたちと一緒にいたファージニアスさんは、そのことを知らなかったみたいだけどね。……それにしてもその口ぶり、いかにもユイツのことを知ってるって感じだね」

女がそう答えるのを聞いて、アーチャは、この女性はグレアそっくりだなと思った。目つきや口調がそっくりだ。

「ライナンテ。まだ私の話は終わってないよ」

ファージニアスは優雅にたしなめた。

「とにかく、私が見たところでは、兄は確かに死に、ユイツにはまたも逃げられた……といった感じでしょうか？　我々はこのことを本部へ報告し、その後……まあ、これは私の出した提案ですが、あなた方を別の時間の流れへ連れて行って差し上げよう、こういうわけです」

それを聞いた誰もが、束の間、その言葉の意味を理解しようと頭の中で反復させた。そして、自分たちは助かるのだという結論に辿り着いた。自分たちだけは……。

「グランモニカの新世界計画は恐ろしいものです」

ファージニアスは、複雑な表情を浮かべるアーチャたちに向かって続けた。

「歴史の筋書きに狂いがなければ、グランモニカの新世界計画は失敗に終わっていたのです。ザイナ・ドロ将軍が使用したフラッシュによって、グランモニカはあの神殿ごとこの世から姿を消していたはずでした。しかし、兄がシャヌ嬢をこの時代に連れてきてしまったことで、時間に大きな狂いが生じてしまった。ドロ将軍は殺され、シャヌ嬢はみんなを守るため、タイムホールを使ってフラッシュを過去へ送り飛ばした。そうして、マイラ族は滅び、グランモニカの新世界計画が実行された」

「これから、この世界はどうなっちまうんだ？」

アーチャはそっと尋ねた。

「新世界の大陸が黒雲の中から現れ、この世界の何もかもを飲み込んでいきます。やがて、時間の流れそのものが変わり、時空連盟の最新技術を持ってしても、その後のことは皆目見当がつかなくなる。ですから、そうなる前に、我々と一緒に未来へ行きましょう。皆さんは兄の野望を阻止しようと、本当によくがんばってくれました。連盟の総指揮官も、きっとお喜びになるはずです」

「でも、ここことは別の時間と空間に移動するのはまずいんじゃないのか？　グランモニカが、その人の存在は消えてなくなるって、確かにそう言ったんだ」

アーチャが尋ねると、ファージニアスは首を振ってそれに応じた。

「その者に関わる大きな目的、夢、希望があるのなら、話は別です。

皆さんは、この時間の流れにおいて、今や死をつきつけられた存在……よって、そこに生きるという目的を見出すことができるのです。皆さんはどんなに遠い未来においても、その存在を消されることはない。ですが、自分をよく知る過去の時間へと赴くなら、これといった目的も、夢も、希望も必要ありません。己の存在は、過去の時間を生きた己自身によって確立されるからです」

沈黙が訪れ、辺りは重たい空気に満たされた。ファージニアスの提案が、この荒廃しきった時間の流れから脱出できる唯一の術であることを、その場にいる全員が承知していた。しかし、その自由と希望は手を伸ばせばすぐ届くところにあるというのに、アーチャたちは、それぞれが抱くこの世界への強い思いを断ち切れないでいた。

「私たちが生き延びられたとしても、世界中の人たちは救われない……それでいいのかな？　本当に、こんな終わり方でいいのかな？」

長い静寂を破ったのはシャヌの声だった。そしてそれは、みんなが心に思っていたことでもあった。正しい結論を導き出すことができない、迷える者の心の叫びだった。

『誰かが救われるには、誰かが犠牲にならなければならない。それがこの世の摂理だ』

ふと、ジャーニスの言葉がアーチャの頭の中を駆け抜けていった。確かに、ジャーニスのこの言葉は正しいものかもしれない。他人の命を犠牲にしなければ、救われない命だってあるのだ。今、アーチャたちの前に立ちはだかるその選択肢こそ、生きるか死ぬか、見殺しにするか共に死ぬかの、まさに究極の分岐点といえた。

「もう時間がありません。火急の選択で申し訳ないのですが、どう

するのか、早々に決めて頂きたい」

ファージニアスが性急にせっつくと、アーチャは意を決したような面持ちと足取りで前へ進み出た。

「みんな、これは自分自身の問題だ。未来へ行って生きるか、ここに残って正々堂々と死ぬか……自分の意思で決めるんだ」

自分はどうしたいのか、アーチャはあえて言わなかった。アーチャは一人その場を離れ、暗がりに向かってトボトボと歩き出した。みんなしばらくその様子を目で追ったが、やがてうつむき、自らに突きつけられた過酷な現実を、アーチャの言葉と共に受け入れようとした。

二十章　アーチャの選択　5

アーチャが向かったのはゼルのところだった。横たわるゼルの脇に誰か座っていて、じっと動かないまま顔を覗き込んでいる。アーチャがその目で見たのは、きちんと足を畳んで硬い地面に座り込む、じいさんの寂しげな後ろ姿だった。

「何してるの？」

じいさんの横に座りながらアーチャは聞いた。ゼルの安らかな表情は、先ほどとまったく変わっていなかった。

「考えていたんじゃ。わし自身のことについて色々とな」

突風が吹き抜ける中、じいさんはおもむろに答えた。

「自分のことについて考える時って、楽しいことより、辛いことの方が多いよなあ」

アーチャは、今思っていることをそのまま言葉に置き換えた。特にこれといった同意を求めたわけでもないが、じいさんはアーチャの予想していた以上の反応を示してくれた。

「わしは、過去の自分について振り返ることを、ずっとずっと拒んでいた。記憶喪失になったことで、どこかに置いてきたはずの悲惨な過去を思い出すのが、とても怖かったんじゃ」

「ふーん……おじいさんにも、そんな辛い過去があったんだね」

アーチャは暗い声色で言った。じいさんのか細い笑い声は、うねるような風にさらわれて掻き消された。

「長生きすれば、それに値するだけの苦悩や恥に苛まれるものじゃ。人間、いさぎよさも肝心じゃて……わしはもう、十分生きた」

「話……聞いてたんだね」

アーチャはうなだれた。

「前に話したろう？　おじいさんは六十年後の未来から来た人だって……ファージニアスに頼めば、元の時代に帰らせてくれるかもしれないよ？　いや、もしかしたら、もっと平和な時間の流れの中に連れて行ってくれるかもしれない」

アーチャは自らの胸の内にあるわずかな望みをじいさんに託した。しかし、じいさんは視線を落としただけで、その話題には触れなかった。

「ゼル・スタンバインなら、どちらを選んだかのう？」

じいさんは唐突に話の内容を切り替えた。アーチャはゼルの顔を見た。上空でけたたましい雷鳴が轟いても、強風が前髪をかき上げても、その穏やかな表情は一瞬だって崩れることはなかった。

「雷とか、風とか、嫌なら嫌だって……言ってもいいんだぜ？　俺が止めてやるからさ」

アーチャは静かに声をかけた。返事はなかった。

「泣きたいなら、泣いてもいいんだぜ？　大丈夫……ちょっとくらい鼻水すすったって、誰にも聞こえやしないからさ」

ゼルが涙を流すことはなかった。目を開けることも……なかった。

「悔しくて叫びたいなら、叫んでもいいんだぜ？」

アーチャの言葉がゼルに届くことは、決してなかった。そこにあるのは、深い眠りにつくかのような、安らかな笑顔だけだったからだ。体内を流れる血も、様々な思いを巡らせる心も、ゼルの中の時間も、すべてがそこで止まっていた。

「うあああぁぁぁーっ！」

前のめりに立ち上がり、よろけつつもファージニアスの元へ駆け出しながら、アーチャは腹の底から叫んだ。どうしてそうしたかったのかは分からない。ただ、心に蓄積されていた鬱憤や迷いを吐き出してしまいたかったのかもしれない。迫り来る死の恐怖を、完全に断ち切ってしまいたかったのかもしれない。

本当の答えは、アーチャ本人にさえ分からなかった。

「どうすりゃいいんだよ！」

アーチャはファージニアスの服につかみかかってがなった。

「俺たちは未来へ逃げるしかないのか？　グランモニカを倒す術はないのか？　全部あいつの思い通りになっちまうのかよ！」

ファージニアスは何も答えず、何かをかみしめるような苦々しい表情で顔を背けた。ファージニアスを追い詰めるように、アーチャ

は大声を浴びせ続けた。

「俺は……誰かが死ぬのも、自分が死ぬのも嫌だ！　もっと生きたいんだ……みんな、もっと生きていたいんだよ！　例えそれが、こんな廃れた世界だったとしても！」

「人類は滅びるべきなんだ……僕がそう決断した」

全員が声の聞こえた方へ一斉に振り返った。一冊の古びた本を脇に抱えるユイツの姿が、暗闇にぼんやりと浮かび上がっていた。

「あなたは……」

ファージニアスは声を詰まらせ、目を丸くした。その瞳は、宝石がはめ込まれているかのようにキラキラと輝いている。

「それ、どういう意味だ？」

ファージニアスの服から手を離し、静かに歩み寄ってくるユイツをまじまじと見つめたまま、アーチャはすげない口調で聞いた。

「ジェッキンゲンの愚かな行為が時間の流れに傷をつけ、やがて、この僕にも修復できないほど深刻なものとなった。そうして、僕はグランモニカの新世界計画に便乗し、世界そのものを滅ぼすことで、時間の流れをリセットしようと考えた」

ユイツが話す傍ら、ファージニアスの仲間たち三人がヒソヒソと会話し、何やら準備を始めだした。どこからか箱型の小さな機械を取り出し、それを地面に置いて手際良く側面のスイッチを押している。

二十章　アーチャの選択　6

三人の作業に気を取られながらも、アーチャはユイツの話に耳を傾けた。

「僕が軍へ入隊したのもそのためで、ゼル・スタンバインと行動することで君たちに接近しようと試みたんだ。グレア・レヴで初めて会った時、僕は君たちにここは危険だと告げ、街を出るように促した。未来にある僕の記憶を辿ることで、君たちがシシーラの街へ行くことは分かっていた。というより、分かっていたからこそ、君たちをこの街から遠ざけたんだ。そして僕は、アーチャたちが軍に捕らわれるよう、時間の流れを書き換えた。一番厄介だったのは、ファージニアスがジェッキンゲンを捕まえるために企てていた計画を、すべて台無しにさせることだった」

「そんな手の込んだことをしてまで俺たちを罠にはめる理由が、どこにあるんだ？」

アンジは、レッジにこっぴどくなじられていたことを振り返りながら、非難がましく聞いた。

「アーチャとシャヌに、本当の未来を見せたかったから」

ユイツは淡々と答えた。

「マイラ族の強大な魔力と光の助けさえあれば、タイムホールを作り出すことは可能です。僕は君たちに、美しい未来を知ってもらいたかった。この世界には、こんな素晴らしい未来が待っていたんだって。でも、アーチャとシャヌが見たのはまったく違う未来だった。

どういうことかは分からないけど、フラッシュによって壊滅した未来を見てきてしまったんだ……この時間の流れには存在しないはずの未来をね……」

「この時間の流れにはって……それ、どういうことだなんだ……？」

「長話はそこまでだ」

口ひげの男が声を張り上げた。

「ユイツ。お前、自分の立場が分かってるのか？　時空保護法を片っ端からないがしろにして、よくもまあ時連の俺たちの前で、そうのん気に立ち話なんかできるもんだ」

「時空保護法？」

ユイツはポカンとした。

「そんなのあったんだ」

歯茎をむき出して殴りかかろうとする男を全力で押さえつけながら、ファージニアスはユイツを振り返った。

「あなたは百以上の法を犯した時空犯罪者として指名手配される身です！　ここはおとなしく、我々の指示に従ってもらいますよ！」

「いいよ。分かった」

ユイツはやけに素直だったので、男の怒りは水でもかぶったかのように消沈した。

「でも、僕に最後の役目を果たさせてほしい。……カエマ」

カエマは返事の代わりに小さな悲鳴を上げた。ユイツを良く思っていないのは、その二の足を踏む様子からしても明確だった。グランモニカに捕まったそもそもの理由は、ユイツにあるのだ。

「何……？」

結局、カエマはその場から一ミリも動かずに返事をした。マニカがカエマの腕を離そうとしなかったのもその理由の一つだった。マニカもまた、ユイツのことをかなり良く思っていない者の一人だった。

「シャヌから君に受け継がれた、この本を渡しておきたくてね」

ユイツは詫びを入れるような優しい口調で言った。差し伸ばした手の先には、しっかりと『ヘインの見た世界』が握られていた。

「どうして知ってるの？」

カエマは本を受け取りながら尋ねた。ユイツはにっこりした。

「君の記憶の中に僕が在り続ける限り、僕の存在は証明される。そして、君の記憶が僕に語りかけてくれるんだ」

「……トリックに決まってる」

手帳のようなものに何やらメモをとっていたライナンテが、そうぼそりと呟くのをアーチャは耳にした。

「だから、君が時空連盟の方々から突きつけられた選択で、深く悩んでいるのも知ってる。……うん。君のその選択は、間違ってなんかない」

まるで、ユイツの一人芝居を見ているようだった。話し相手であるカエマさえも会話についていけず、“時空連盟の方々”に至っては、口が半開きになる始末だった。

「先輩、準備が整いました！」

金の前髪をなびかせながら、青年が敬礼混じりに報告した。気付くと、地面には銀色の棒らしきものが四角を描くように立てられていて、全部で四つ、微弱な輝きを放って闇を照らしている。その手前には箱型の装置が置いてあり、裏側から四つの棒をつなぐ太いコードがごちゃごちゃと伸びている。

ファージニアスが右手を振り上げた。

「では……送光、開始！」

「送光！」

青年が繰り返し、ライナンテが手際良く装置のスイッチを押した。間もなく、四つの棒すべてが白色に輝き、それぞれの先端部から上中央へ向かって神秘的な光線が放たれた。四つの光線は一点で交わり、すべての点をつなぎ合わせて構成された面が金色に輝くと、三角屋根の家のような輪郭が浮かび上がり、そのままぼんやりと輝き続けた。大人が一人、まるまる入り込めそうなほど大きい。

「“フラッシュナッシュ”という、人工的に作り出した未来への入

り口です」

ユイツの肩に腕を回しながら、ファージニアスが説明した。

「私たちはユイツをつれて先に向かいます。残りの光エネルギーから計算しても、あと五分と持たないでしょう……それに……」

そこまで言って、ファージニアスは空を見上げた。アーチャもとっさに見上げた。黒雲とは違う巨大な何かが、空を覆い尽くしている。アーチャは生唾を飲み込んだ。

「あれが……新世界？」

それは絶望に染まる声色だった。ユイツの肩を握るファージニアスの指先に力が加わった。

「グランモニカの新世界計画はとうとう大詰めのようです。ここに残るか、未来へ行くか。決断を急いでください。それじゃあ、私たちはこれで……」

「ちょっと待ってください」

ファージニアスの高い鼻を見上げながら、ユイツが穏やかな口調で言った。

「行き先を変更してください。百十七年後ではなく、六十年後の未来に」

その言葉の真意を見出そうと、その場にいた全員がユイツを見た。そして、誰もが怪訝な表情を浮かべたが、唯一、ファージニアスだ

けがユイツの考えを悟った。

「いいでしょう」

ファージニアスは眉をクイッと上げてユイツに相槌を打つと、ちらとアーチャの方を振り返り、またすぐ前に向き直った。

「ライナンテ。時間を六十年後にセットし直してください。行き先を変更します」

「帰れなくなっても知りませんからね」

渋々と命令に従いながら、ライナンテは不快を露にそう警告した。

「私の部下を一人、未来から手配させるので心配いりません。それじゃあ、今度こそ私たちはこれで」

ファージニアスとユイツが光の中へ飛び込んでいったのをきっかけに、部下の三人がそれに続いた。アーチャ、シャヌ、アンジ、カエマ、マニカ、トナ、そして今しがたノロノロとやって来たじいさんが、そこに残された。

「ユイツって人が言っていたカエマの正しい選択って、何なの？」

カエマの顔を覗き込みながらマニカは聞いた。知りたいようで、知りたくない……そんな表情だった。カエマはしばらく母親の目をじっと見つめるだけだったが、やがて口を開いた。

「お母さん。私、ここに残る……グランモニカと一緒に、新世界へ行く」

「そう……そう……」

マニカは自分の中に生まれた感情を押し殺すかのように呟いた。

「どうしてここに残ろうと？」

アーチャが聞いた。カエマは両腕でしっかり本を抱えながらアーチャを見た。曇りのない澄み切った二つの瞳が、闇の中で確かな光を放っている。

「私が、みんなの思いを背負わなくちゃいけないから。未来へ行って私だけ助かっても、新世界の進行は止まらない……世界中のたくさんの人たちを巻き添えにしてしまう。私は、この世界に残されて死んでいく、たくさんの人たちの思いを継ぐ。これは、選ばれた私にしかできないことなとなの。だから私は、ここに残る」

カエマの意志に異論を唱える者は、そこに誰一人としていなかった。選んだ答えに正解・不正解が存在しないことを、その場にいる全員が知っていたからだ。

「お母さんとトナは、未来へ行って。私なら一人でも大丈夫……」

「……一人じゃないわ」

マニカの顔に笑みが広がった。それはとても弱々しい笑顔だったが、溢れんばかりの愛情が込められていたことに、カエマは気付いていた。

「カエマを一人置いて、未来へ行くわけないじゃない」

「僕も一緒にいるよ……ずっとね」

トナはそう言い、マニカの腕にしがみついて空を見上げていた。天よりゆっくりと降下する大地の底が、先ほどよりもはっきり見えるようになってきた。

「カエマ、よく聞いて」

マニカの声は、差し迫るその瞬間に怯えるように上ずり、震えていた。

「あなたはお父さんに似てしっかりしていて、ちょっぴり気の強い女の子だけど、誰でも一人が寂しいって感じる時がある。だから、みんなが恋しくなった時、涙が止まらなくなった時、青空を見上げて、笑ってみて。私たちはずっとそこにいて、あなたのことをいつも見守ってる……いつも笑いかけてる」

カエマの足が宙に浮いた。青い光に包まれた体が、神殿へ向かって少しずつ上昇していく。アーチャはとっさにカエマの手をつかもうとしたが、その前にマニカの腕が伸び、カエマの指先をつかんだ。

「お母さん！」

カエマの涙が頬を伝ってこぼれ落ち、雫となってマニカの腕に滴った。

「カエマ、生きて。あなたの未来を、しっかり生きて」

二人は無情にも引き離され、その絆は束の間に終わった。だが、

マニカのその目に涙はなかった。我が子に思いのすべてを託したマニカにとって、もう涙は必要なかった。

「カエマ！　グランモニカにいじめられても、くよくよすんなよ！」

アーチャは声が枯れるほど大きな声で叫んだ。こちらを見下ろすカエマの毅然とした表情は、もう今までの彼女ではなかった。それは、新たな始まりに向かって歩み出そうとする、立派な勇姿そのものだった。

二十一章　愛の歌　1

「さあ、次は俺たちの番だ！」

カエマの姿が闇に溶け込んで完全に見えなくなった後、アーチャは吹っ切れたように意気込んだ。

「今か、未来か。生か、死か……」

アンジは多少の鼻声で呟いた。暗くてよく見えないが、その目には涙が溜まっていたはずだ。

「そうね。私たちも選択しなきゃ……自分の未来だもんね！」

シャヌは涙をぬぐいながら笑顔で言った。それに合わせてアーチャがうなずいた。

「しかも、もう本当に時間がないみたいだ……ほら」

アーチャはファージニアスたちが残していった装置をあごで指した。未来へ運んでくれるその金色の光は、時折チカチカと明滅し、箱型の装置は「ビッビッビッ」という不気味なノイズを響かせている。

続いて、アーチャは空に向かって親指を立てた。新世界の大陸が、先ほどよりも遥かに大きく、それでいて風を巻き込む低いうなり声と共に、地上を目指してどんどんと降下してくる。水平線の上空に漂う大陸が稲光に照らされ、そのおかげで山の連なる輪郭を明確にとらえることができた。これらはやはり、新世界を築くための“パーツ”だったのだ。

「何か聞こえないか？　ほら……」

アンジがやにわにそう言った。口に人差し指を当てがい、耳を澄ましている。アーチャやシャヌ、マニカ、トナ、じいさんまでもが耳を澄ませた。聞こえてくるのは霹靂と風の轟音だったが、やがてアンジの耳にしたその音を誰もが聞いた。いや、ただの音ではない……歌だ。

「ここから聞こえてくるみたいだ……」

アーチャはフラッシュナッシュから放たれる微弱な光を覗き込みながらそう言った。

「この先はたしか、六十年後の未来に……」

それは、シャヌが言いかけた時だった。今までずっと沈黙していたじいさんがヨロヨロと進み出たかと思うと、震える指先全部を前に突き出して目を輝かせた。ゼルを英雄だと発言した、あの時のじいさんの面影がかいま見えた。

「もしや……これは……」

次いで、じいさんは酔いしれるような声を発した。表情全体が爛々と輝き、二十歳は若返ったように見える。

「じいさん、この歌知ってるのか？」

唖然とした表情でじいさんを見つめながら、アンジが聞いた。

「この歌……俺も聞いたことあるよ」

アーチャは自分の発声で歌の邪魔をさせまいと、小さな声で囁いた。

不思議だった。死の淵に立たされているというのに、この歌声を聞いていると、死への恐怖、苦しみ、絶望感さえも、すべて生きる希望に変えることができた。そして、現実に立ち向かう勇気を得ることができた。

歌が段々とはっきり聞こえるようになってきた時、アーチャはじいさんの体を通して向こうの景色を望んでいる自分に気がつき、夢の世界で強烈なビンタを喰らったような衝撃にかられた。そして、次の瞬間にはもう叫んでいた。

「おじいさん！　体が……」

映写機に映し出される登場人物の一人にでもなったかのように、じいさんのきゃしゃな体は淡い光に包まれ、水のように透き通っていた。当人のじいさんは、それが当然だと言わんばかりに冷静で、顔色一つ変えはしない（もう今となっては、その表情を読み取ることさえ至難の業だと断言できた）。

「どうやら、未来からのお迎えが来たみたいだ……」

じいさんが言った……のだろうか？　今までとは、喋り方も、雰囲気も、どこか違う。

「お迎えって……ここにいる理由が……なくなったってこと？」

アーチャは動揺を隠しきれていなかった。首を横に振るじいさんの平静な態度は、アーチャとは両極端なものだった。

「さっきファージニアスが言っとっただろう……自分をよく知る過去の時間へと赴くなら、これといった目的も、夢も、希望も必要ない。己の存在は、過去の時間を生きた己自身によって確立されるからだ……と」

じいさんは、薄れゆく自身の体に急かされるように早口でそう説明した。

「わしはな、アーチャ。愛の込められた美しい歌に命を救われ、六十年も前の過去へとやって来た。それは、失った記憶を取り戻すためでも、過去に置いてきた悲惨な事実を思い出すためでもない……おぬしとシャヌを巡り合わせるために、わしはこの時代へとやって来たんだ」

じいさんから発せられる声も、どこからか聞こえる美麗な歌声も、アーチャたちの目の前から、その体と共に消滅しつつあった。じいさんが優しく微笑むのを、全員がその目でしっかりと見た。

「シャヌ……君は賢い子だから、大方の察しはつくだろう。君は、君に与えられた最後の使命を、ようやく果たす時が来たんだ。シャヌがその使命を終えた時、わしの存在はアーチャ・ルーイェンとして完結し、この時間の流れから姿を消す」

歌が……途絶えた。

二十一章　愛の歌　2

その瞬間、アーチャの視界は全てを飲み込む眩い白銀の光に覆われ、目の前に際限なく広がっていた凄惨な世界を光だけの奇妙な空間に変えた。アーチャはその時、自分たちは脳天に落雷を受けたんだと、そう確信した。そして、シャヌが発動させた何らかの魔法のおかげで命拾いできたのだと、そうも確信した。だが結局は、そのどちらも正解ではなかったらしい。

なぜなら、次の瞬間にはもう、雲一つない青空と空っぽの大地に姿を変えていたからだ。

「ここって……」

地平線の向こうを漠然と眺めながら、アーチャは静かに呟いた。そこは、かつてアーチャとシャヌが訪れた、フラッシュによって壊滅させられた六十年後の未来だった。その只中で途方に暮れるじいさんの姿を、アーチャはまだ鮮明に覚えている。

「アーチャ」

誰かがアーチャの名を呼んだ。後ろを振り返ると、そこにじいさんが立っていた。アーチャそっくりの熱い眼差しでこちらを見つめている。

「あなたが六十年後の俺自身だったなんてな……でも、そうだったらいいなって、思ってたんだ」

アーチャは複雑な心境で言った。

「例え頭がボケても、鏡の中の自分にだけは話しかけまいと肝に銘じておったんだがな」

じいさんは言葉の一つ一つに皮肉を練り込んでそう言った。消えかかっていたはずの体は、何事もなかったように明瞭な輪郭を保っており、もうそのきゃしゃな体を通して向こうの景色を眺めることもできなくなっていた。

「その……ちょっと聞いていいか？」

アーチャは自分自身に対して遠慮がちに尋ねてみた。

「俺に六十年分の知恵を貸してほしいんだ。時空連盟の残していった道具を使わずに、俺たちが俺たち自身の未来を歩み続ける方法を、教えてくれ」

アーチャは言いながらも、『なんて難解な質問だろう』と自分で感服する始末だった。しかも、未来の自分に向かって話しかけるなんて不思議な感覚だ。

じいさんの表情が柔らかな笑顔に変わった。

「お前がその答えを求める必要はない」

「どういうこと？」

アーチャはいぶかった。じいさんは目を閉じ、首を横に振るばかりだったが、やがて重々しく口を開いた。

「シャヌがその答えを教えてくれる。ついさっき、未来から届いたあの歌を聞いただろう。お前にも分かるはずだ……あの美しい歌声

がシャヌのものだということくらい」

アーチャは大きくうなずいてじいさんを見た。

「シャヌの歌声は、マイラ族の力によって、過去へ、そして未来へと響き渡った」

じいさんは夢見るような口調で続けた。

「六十年後の未来で、なぜわしだけがフラッシュの猛威から生き残ることができたのか……それは、そこに愛の力があったからだ。シャヌの歌に込められた愛が、わしの命を救ってくれたのだ」

不意に、じいさんはクスッと笑った。

「ジェッキンゲンは一つだけ、わしらに素晴らしい存在を残してくれた」

じいさんの口元に深いしわが刻まれた。

「もしかして……シャヌのこと？」

アーチャはじいさんの微笑みに向かって聞いた。

「時は繰り返す……人々の過ちを乗せて」

じいさんは続けた。

「わしはシャヌの歌によってフラッシュから守られ、その力はわしを六十年前のこの時代へと誘った。海底でジェッキンゲンがわしの

存在に興味を持ち、作業現場を訪れていなければ、お前とシャヌは出会っていなかっただろう……そうして時は繰り返し、同時に未来は朽ちていく……人々の過ちと共に。しかし……例えこの世界が滅びようとも、我々の存在は生き続ける。この時間という不滅の流れの中で、永久に生き続けるんだ……さあ、行ってやれ。シャヌが待っておる」

じいさんは右手に広がるのっぺらな荒野へと視線を流した。青々とした晴れ空の下、二人のアーチャに向かって小さな笑顔を見せるシャヌの姿が遠くにあった。

「ここって、六十年後の未来……だよな？」

シャヌのそばへ駆け寄るや否や、アーチャが当惑じみた声で聞いた。

「他のみんなは？　俺たちだけここに来ちゃったのかな？」

「みんなは……いない」

シャヌの表情から笑顔が消えた。アーチャはシャヌの視線の先を目で追った……じいさんがいなくなっている。

「ここは私たちの記憶の中。最後に、アーチャと話したかったから、フラッシュナッシュの力を借りて記憶を具現化させたの。……だから、ここを知らない人は決して立ち寄ることができない。見ることも、感じることもできない」

アーチャは、抑揚のない声で話し続けるシャヌを怪訝な表情で見つめていた。明らかにいつもと様子が違う。

「何か知ってるのか、シャヌ？」

シャヌの顔を覗き込みながらアーチャが聞いた。とっさに、訴えかけてくるようなシャヌの瞳がアーチャを見つめ返した。

「私という存在がどうしてこの時間の流れに留まっているのか……私、その本当の理由を見つけたの」

「本当の理由……？」

アーチャはシャヌの口からその“理由”を聞きたくなかった。聞いてしまったら、シャヌがどこか遠くへ行ってしまいそうでとても怖かった。そんな一心から、アーチャは無意識の内にシャヌを強く抱きしめていた。

「理由なんかもういい……ずっと一緒にいよう。君を失いたくない」

シャヌは泣いていた。アーチャの胸に顔をうずめ、声を押し殺して泣いていた。

「だめ……だよ。だって、私が勇気を出さなきゃ……アーチャ、死んじゃうんだよ」

「それでもいい……それでもいいから！　だから……」

「アーチャ、前に言ってくれたよね」

腕の中で、シャヌが嬉々とした声でそう言ったのをアーチャは聞いた。

「私に救われる命が、きっとどこかにあるって……その時を待ってるんだって。……六十年後のアーチャを助けることが、私に与えられた最後の使命だったんだよ。私の歌が、アーチャをフラッシュから守る大きな力に変わったんだよ」

アーチャの腕から力が抜け落ち、シャヌの肩を滑って宙を漂った。もうシャヌの意志が揺らぐことはないだろう……そう判断した瞬間だった。

「きっと、シャヌなら……」

アーチャは心の底から搾り出すような声でそう言った。そうでもしないと、ぐっとこらえていた何かが声を詰まらせてしまいそうだった。

「シャヌなら、俺だけじゃなく、もっとたくさんの命を救えるはずだ。俺、シャヌを信じてる。すべてうまくいったら、一年でも十年でも、百年でも……ずっと君を待つよ。シャヌが帰ってきてくれるその時まで、ずっと……」

アーチャはもう、それ以上喋ることができなかった。それは、二人の唇がそっと重なり、束の間の愛を分かち合ったからなのかもしれない。あるいは、シャヌの美麗な姿態が宙を舞っていたからなのかもしれない。

今のアーチャには、そのことを考えている余力さえなかった。青空を背にして翼を揺らめかせるシャヌの姿はとても美しく、陽の光を浴びて眩いばかりに煌く様は、アーチャの心を魅了するほどだった。

微笑みかけるようなシャヌの瞳が、アーチャをまっすぐに見据え

ていた。

「アーチャ……ありがとう」

翼が左右に広がり、風を巻き込んで大きく羽ばたいた。次にはもう、シャヌは大空へと舞い上がり、アーチャの視界からあっという間に消え去ってしまっていた。アーチャは黙ったまま天を仰ぎ続けた。それは、雲一つない青空が、元のどす黒い黒雲の色に戻っても同じだった。荒廃しきった街の真ん中で、アーチャはただ一人、深い闇に向かって翼を羽ばたかせる一人の少女の勇姿を、ずっと見守っていたのだった。

二十一章　愛の歌　3

叩きつけてくるような強風に真っ向からぶつかり、稲妻にひるむこともせず、シャヌは黄金の神殿の頂に音もなく降り立った。うろこをくすんだ虹色に輝かせる厳しい表情のグランモニカと、その脇に横たわるカエマがすぐに視界に入った。カエマは、どうやら意識を失っているらしい。投げ出された手足はピクリともせず、長い黒髪が風にさらわれて大きく煽られているだけだ。

「未練がましい小娘めが。何をしにここへ来た？」

荒々しいグランモニカのその語調に、かつての高貴な雰囲気は微塵も感じられなかった。グランモニカの本性がいよいよかいま見え始めた。

「始まりを告げに来ました……新しい未来の始まりを」

暴風と雷鳴の轟音がすぐ耳元で鳴り響く最中、シャヌは物怖じもせずにそう言った

「お前たちに未来などない。あるのは、過去という腐敗と、今という絶望だけだ」

グランモニカの大きな瞳が、稲光に照らされてギラリと輝くのをシャヌは見た。

「マイラ族……己の力に溺れた、何とも醜い生き物よ。百年の時を隔て、尚も我々人魚族の邪魔をしようというのか」

「私は、自分の魔力に屈して、他人を服従させるようなことはしない」

「お前の思想など関係ない」

グランモニカの下あごから鋭利な太い牙が突き上がった。

「マイラ族の存在そのものに、生きる者の心を戦慄させるだけの恐ろしい力が備わっているからだ。百年以上も前、まだマイラ族が天空にその住処を築いていた頃、この世を支配していたのは魔族の力だった。人魚族とマイラ族……海と空が地を挟んで対立する時代が何百年も続いたが、マイラ族がフラッシュによって滅ぼされたことにより、二つの種族の争いは幕を閉じた。そして、私がこの座に上り詰めた矢先……今度は地を支配していた者たちがその頭角を露にし始めた」

「……ヒト族」

シャヌはポツリと言った。このけたたましい騒音の中、シャヌの小さな声を聞き取れるのはグランモニカくらいだったろう。

「そうだ。我々の存在を脅かした、ゴミも同然のヒト族だ。ジェッキンゲンの存在も相まってか、地上での文明の発展は、ここ近年において目を見張るものがあった。ヒト族は魔力に代わるものを次々と生み出し、ついには、光の力をもその手中に収めてしまった。歯止めの利かなくなったヒト族の暴走を止めるため……私は、新世界の創造を決断した」

「違う。あなたはただ怯えてるだけ」

シャヌははっきりと断言した。グランモニカの強烈な睨みがシャヌの勇気をえぐった。

「何が言いたい？」

とげとげしいその声には、グランモニカの煮えたぎるような怒りが込められていた。それでも尚、シャヌは自分の弱い部分を見せまいと意識を高めた。ひるむこともせず、むしろ、更にグランモニカとの距離を縮めた。

「発展しすぎたヒト族の文明から逃れるために、あなたは新世界という逃げ場を創っただけに過ぎない。ヒト族から逃れられるだけの力は持っていても、運命に立ち向かうには力が及ばなかった……あなたは、自分自身に負けたのよ」

「言葉を慎め！」

その瞬間、グランモニカの腕の中に収まっていた巨大な真珠が眩く煌いた。グランモニカの怒声は、空気を震撼させ、闇を貫いたが、シャヌの剛勇なまでの心持ちを打ち崩すまでには至らなかった。手元の真珠は尚も強く光り続けている。

「お前たちは、グランモニカという存在によって滅ぼされる運命にあるのだ！　マイラ族の魔力を持ってしても、もうここから逃れられやしない！　呪うがいい……無力な己を！　儚い運命を！」

「確かに、あなたを超えるだけの力を、私は持っていない……だけど、こんな弱い私にも、一つだけできることがある。それは、死を否定することでも、運命を受け入れることでもない……。“信じる”ことが、私の導き出したたった一つの答えだった」

微笑みかけるシャヌを見て、グランモニカは一時的に声を失った。神殿の美しい輝きによって浮かび上がるシャヌの姿は、まさに天使そのものだった。

「以前、私はアーチャと一緒に世界の未来を見ることができた。それは、異なった時間の流れに存在する未来だけれど、でも、そこには確かに未来があった。だから、私は信じたい……私たちにもまだ未来が残されているんだってことを、心から信じたい」

グランモニカの高笑いが辺りを満たした。その笑顔はシャヌのものとはほど遠く、醜悪そのものだった。

「血迷ったか。こんな状況で、お前に何ができる？　死に直面しても尚、自らに課せられた運命を受け入れぬというのなら……」

グランモニカは二度目の沈黙を余儀なくされた。腕にしっかり抱いていたはずの真珠が音を上げて粉々に砕け散り、欠片が周囲に飛散したのだ。中でも一際大きな破片がグランモニカの右まぶたを切り裂き、多量の血を滴らせた。ヒト族と同じ、真っ赤な色の血だ。なぜこのようなことが起きたのか……グランモニカがそのことに関して深く考える必要はなかった。

二十一章　愛の歌　4

シャヌは歌っていた。

黄金に輝くステージ上で、雷というスポットに照らされながら、聴く者すべての心を魅了するその美しい歌声で、華麗に歌っている。歌声は段々と大きくなり、やがて遠くまで響くようになった。それはまるで、歌うことを覚えた教会の鐘の音だ。

翼から淡い光が放たれ、シャヌの全身をふわりとまとった。計り知れない強大なマイラ族の魔力が、その歌声と共に世界中へ羽ばたき、聴く者の心に『希望』という名の音色を響かせている。

「どういうことだ……」

黒雲が割れ、その雲間から月明かりが射し込み、シャヌを包み込んだ。月光を受けて、翼は更に強く光り輝いた。愛の込められたシャヌの歌声は、聴く者の心に希望を芽生えさせ、心の闇を糧に増幅していた黒雲が次々と消滅を始めた。だが、地上へ向かって降り注ぐ新世界の大陸は、その速度を緩めようとしない……すでに、神殿のすぐ上空まで迫りつつあった。

シャヌは自分の腕全体が透けていることに気付きながらも、歌うことをやめなかった。まるで、じいさんの時とまったく同じ現象だ。それは、自らに与えられた使命を……六十年後のアーチャを助けるという使命を、無事に果たせたという何よりの証拠だったに違いない。

六十年後の未来の世界、街の中でじいさんが聞いたあの歌声は、時空を越えて響き渡ったシャヌ自身のものだったのだ。

「万物の力は新世界の前ですべて無と化す。今さら何をしようが無駄なことだぞ」

グランモニカが勝利を確信したように声を張り上げた。笑みの広がる顔半分は血の赤に染まり、その表情はより不気味な風貌をかもし出している。

「誤解しないで。私は、ただ信じてるだけ……信じる思いを、希望に変えてるだけ」

歌うことをやめ、シャヌは奮い立つような力強い語調でそう言った。

「流れる時に思いをはせて、その心は受け継がれる。身は滅びようとも、意志は証となって生き続ける。そうして、未来の主の元へ、帰っていく……」

「万策尽き、血迷った挙句の結論か」

グランモニカは言ったが、シャヌはほとんど聞いていなかった。というより、もうすでに聞ける状態ではなかった。その全身は水よりも透き通って風に揺られ、立っていられないほどの脱力感がシャヌを襲った。

シャヌはその場に倒れ、横たわるカエマの姿を、薄れゆく意識の中で見つめた。ユイツから手渡された「ヘインの見た世界」は、投げ出された腕の下敷きになってしっかりとその場に留まっている。強風に吹き飛ばされるような心配はないだろう。

シャヌは自分の腕を見た……のだろうか？　どこにも見当たらない。完全に消えてしまっている。

「アーチャ……私もう……行かなきゃ」

それはまるで、声まで透き通ってしまったかのように、響きのない、空っぽな声だった。視界さえもぼんやりかすみ始めると、やがて濃い霧に包まれたように目の前は真っ白になった。シャヌは余力を振り絞り、純白の世界を仰いだ。強風と霹靂の轟音さえも聞こえなくなった。

するとほんの一瞬、視線の先に、アーチャの笑顔が浮かび上がった気がした。気付くと、シャヌも満面の笑顔だった。

「大好きだったんだよ……ずっと」

涙を含む声でシャヌが囁いた。その瞬間、何もかもが、消え去ってしまった。

『私……アーチャが大好きだった』

「シャヌ？」

シャヌの声が聞こえたような気がして、アーチャは誰もいない空虚な荒地を振り返った。だがそこにあったのは、新世界の大陸が落とす邪悪な影ばかりだった。天を覆い隠す大地の底は、すぐ上空まで迫ってきていた。

「アーチャ！」

風の音に混じって、アンジのしゃがれ声が響き渡った。アーチャが振り向くと、そこに青ざめた表情のアンジが立っていた。

「みんなは？」

アーチャはすかさず聞いた。

「マニカさんとトナなら無事だ。いい隠れ場所を見つけたんだ……一時的なものだけどな。じいさんは……消えちまった。跡形もなく」

「そうか……」

アーチャは呟き、うず高い瓦礫の影から見えるフラッシュナッシュを見つけた。放たれるのは微弱な光ばかりで、今にもその役目を終えんばかりだった。

「結局、みんなここに残ったんだな」

「お前はどうする、アーチャ？　俺はどこまででも着いていくぜ」

アンジは強気になって言ったが、その声はわずかに震えていた。アーチャは深呼吸し、心を落ち着かせ、闇の中で黄金に輝く神殿をしっかりと見上げた。

「ついさっき、シャヌの歌が聞こえた。六十年後の俺を救った、あの歌だ。もしかしたら、今度は俺だけじゃなく、世界中の人々を救ってくれるかもしれない……信じよう、シャヌを」

自身の言葉を胸に、アーチャは勇ましい表情でアンジを振り返った。そんなアンジも、既に覚悟を決めていたようだった。勇猛な笑みを顔いっぱいに浮かべている。

アーチャは勇ましく瞳を輝かせ、割れた雲間から地上を見下ろす月に向かって笑いかけた。

「待ってるからな、シャヌ。俺たちの未来の中で、ずっと待ってるからな」

二十一章　愛の歌　４（後書き）

ここまで読んで下さり、本当にありがとうございます。
次話で最終章です！

最終章　翼　1

暖かな陽射しが雲を縫って地上へ降り注いだ。街の小路を吹き抜けるそよ風が開け放たれた窓から優しく部屋に流れ込み、ベッドの上で眠り続ける男の前髪にいたずらすると、そのまま扉の下を通って去っていった。

男は一度大きく寝返りを打ったが、やがてハッと目を覚まし、ベッドから飛び起きた。そして、何度も狂ったように周囲を見回した。緑色のカーテン、角の欠けたタンス、きしむ床板、漆喰の壁、剥き出しにされた細長い蛍光灯、窓の向こうに広がる見慣れた街並み。すべてがいつもどおりのはずなのに、普段と何一つ変わらないはずなのに、男にとっては、そのことがとても不思議でならなかった。

まだ夢を見ているんじゃないか、これはデジャ・ヴなのではないか……そんなことばかり考えてしまう。

男は考えに耽った挙句、部屋の隅においてある鏡台に駆け寄って自分の顔を覗き込んだ。そこに映っていたのは、しわくちゃの顔、骨ばった輪郭、節くれ立った手、薄い頭髪。木造の小部屋に困惑な表情が二つ……アーチャ・ルーイェンがそこにいた。

「俺だ……わあ！」

アーチャは自分のしわがれた声に驚いて、鏡の中の自分から二メートルも飛び退いた。それはちょうど、部屋に一つしかない白ペンキの扉が向こう側から静かにノックされたのと同時だった。

「ど、どうぞ……」

アーチャは扉に向かっておずおずと呼びかけた。タンスの側面に立て掛けてある杖に手を伸ばしている自分がそこにいた。心が錯乱

しているせいか、扉をノックしたのは凶暴な野獣だと思い込んで疑わなかったのだ。

だが、扉を押し開けて入ってきたのは、朗らかな笑みを浮かべたふくよかな女性だった。

「おはよう、ルーイェンさん。着替え、お持ちしましたよ」

エプロン姿の女はそう言って、大またでズンズンと部屋を横切っていった。アーチャは目をパチクリさせ、ベッドから半分落ちかけの布団を綺麗に畳み直す女の後ろ姿をまじまじと見つめた。

「朝食は下に用意してありますから、温かいうちに召し上がってくださいね。今日はほっかほかのココアがおまけですよ」

着替えらしき物をベッドの上に置くと、女はアーチャを振り返ってそう言った。

「あ……ああ……ありがとう」

アーチャが礼を言うと、女の顔から笑顔が吹っ飛んだ。

「ルーイェンさんが、ルーイェンさんが私に“ありがとう”ですって！」

女はあんまり驚いたので、顔面が内側に引っ込んであごが二重になり、目玉が飛び出した。

「いつも命令口調で私たちをこき使ってきたルーイェンさんが……どうしたの？　熱でもあるの？　……あらやだ！　窓を開けっ放しで寝たのね。きっと風邪だわ。すぐに薬をお持ちしますから……」

「ちょっ……待っとくれ！　わしは風邪なんかひいてないぞ！　この七十七年間、一度もひいたことがないのだ！」

アーチャは自分の発した言葉で驚愕した。今、無意識の内に『七十七年間、風邪をひいたことがない』と、確かにそう口にしたのだ……。

「一体どういうことだ？」

女が怪訝そうな表情で部屋を去った後、アーチャは服の袖にきゃしゃな腕を通しながら、しわがれた声でそう呟いた。

「目が覚める前まで、わしは十七歳だったはず……世界が滅亡の危機にさらされていて……それで……」

深く考えながら、アーチャは部屋の扉を開け、廊下を左へ歩き、突き当たりを右に曲がり、途中に現れた階段をノロノロと進んでいった。というのも、腰がくの字に曲がり、膝の関節がやたらと痛むので、思ったように前へ進めないのだ。何となく手にしていた杖と壁伝いの手すりがなければ、もうとっくに階段を転げ落ちていたことだろう。

やっとの思いで下の階へ辿り着くと、すぐ目の前はもう食堂だった。木造の長テーブルが五台、横一列にきちんと並べられ、クッションの乗った質素な作りの肘掛け椅子がその周りに置かれている。既にポツポツと人が座っており、その中には……。

「ユイツ！」

アーチャは声を押し殺してその名を叫んだ。ユイツは確かに食堂

の一番端の席に座っていて、どこか遠くを見つめるような眼差しで窓の向こうを眺めている。まるで、あの時から一秒も時が進んでいないかのように、ユイツの顔にはしわの一本も見られず、六十年前の若々しさを保ち続けていた。

最終章　翼　2

アーチャは杖を突き、半ば駆け足で食堂の中を突っ切っていった。『歩く』以外の移動手段を実行したのは久しぶりだ。

「なぜここに？」

ユイツの隣の席に腰を落ち着けるなり、アーチャはやぶから棒に質問した。情けないことに、たかだか十メートル走っただけで息が上がり、椅子がなければまともに話してもいられない。

「さすがに六十年も経ったら、忘れてしまいますかね」

窓から見える庭園を望みながら、ユイツは静かに言った。

「僕は人の記憶の中に生きる存在です。だから、あなたが僕のことを忘れない限り、僕の存在は確かなものとなる」

ユイツののんびりとした態度を見ていると、アーチャは、慌てふためいていた数秒前の自分が恥ずかしく思えてきた。

「お前、言ってることが相変わらず訳分からんのう」

アーチャは負けじとのんびり感想を述べた。しかし、もっと緊急に聞いておきたいことが他にもあることを思い出し、性急にまくしたてた。

「それより、これはどういうことだ？　なぜわしがここにいる？　知り得ないはずの六十年分の記憶が、なぜわしの中にある？　あの

後、世界はどうなったんだ？　わしは“死んだ”はずでは……」

アーチャはとっさに口をつぐんだ。ユイツが不可思議な魅力を放つその瞳で、アーチャをまっすぐに見つめたからだ。

「あなたには大切な仲間がいた。数々の困難を共に乗り越えてきた、かげかえのない仲間が」

「仲間……？」

アーチャは繰り返し、かすかな記憶を辿った。ユイツが小さくうなずいた。

「あなたは、崩壊寸前の時間の流れから無理に抜け出してしまったため、仲間と、この六十年分の時間を失った。記憶だけが残され、何も意識しないでこの食堂まで来れたのはそのためです。六十年前にあなたの元へやって来たおじいさんが記憶を失っていたのも、理屈は同じです。彼の場合はかなり重症でしたけど……」

「ここは……この世界は何なんだ？　あの時とは全く別の世界だというのか？」

アーチャは杖の頭を固く握り締めながら訪ねた。そうでもしないと、杖が汗ばんだ手から逃げ出してしまいそうだった。

「時間の流れが違うだけで、あなたがいた世界と何ら変わりはありません。ただ、ちょっと中身が違うだけです……ほら」

その時、二人の背後が人の話し声でガヤガヤと騒がしくなった。アーチャは肩越しに通路の辺りを見つめた。そして、暗がりから現

れた複数のイクシム族に目を奪われた。みんなアーチャと同じ柄のポロシャツを着込み、まばらに生え揃う針金のような太い頭髪を振って会話に興じている。まるで、山道を転がり落ちる複数の大岩を見ているようだった。

「ばっちゃん！　ココア持ってきて、ココア！」

席に座った一人が荒々しく急き立てた。その声に反応して厨房から顔を覗かせたのは、なんとピゲ族だ。小さな体の上に小さな頭を乗せ、よく見る三角帽子ではなく、コックの白い帽子をかぶって何かキーキー叫んでいる。だが、イクシム族の太い声にかき消されて何も聞こえない。

アーチャは、今度は窓の向こうに広がる庭園に注目していた。植えられた色とりどりの花や緑の木々に水を撒き、シャレた麦わら帽子をちょこんと頭に乗せているのは、ゴーレム族だ。いつもの虚ろな瞳に、爛々とした輝きを灯しているのがはっきりと分かる。

「もうお分かりでしょう？」

様々な光景に見惚れたままのアーチャに向かって、ユイツが声をかけた。ヒト族の老人が三人、イクシム族の輪の中に溶け込んでいくのを見ながら、アーチャはうなずいた。

「異なった種族同士が共存してる……他の種族を好まないイクシム族とピゲ族が、ヒト族と一緒になって笑ってる。すごい……まさか、こんなことが……」

目の前の現実を素直に受け入れられず、アーチャはただ驚嘆するばかりだった。

「あなたの追い求めていた夢が、こうして実現したんです。もっと喜んでもいいんじゃないですか？」

「ああ……そうかもしれないな」

目線を落とし、杖の上で指先をもじもじさせながら、アーチャはゆっくり答えた。

「ユイツ、なぜわしの前に現れた？　このことを伝えるためか？」

たっぷり沈黙した後、アーチャはずっと気になっていたことを聞いた。

「あなたに最後の挨拶をしておこうかなって、そう思ったんです」

ユイツの表情が一瞬だけ紳士的なものに見えたのは、アーチャが六十もの歳を重ねて、人の見方が変わったからなのかもしれない。もしくは、アーチャの中で、ユイツが少しだけ大人に近づいたからなのかもしれない。だが、そのどちらにしても、アーチャには都合が悪かった。

「ユイツが行ってしまったら、わしはまた一人ぼっちになってしまうな」

孤独の寂しさを、アーチャは誰よりも一番分かっているつもりだった。ユイツの話を聞かされるまでは……。

「僕も、かつては一人でした」

アーチャは顔を上げてユイツを見た。ユイツの過去の話を聞くの

は、初めてのことだった。

「両親は？　兄弟もおらんのか？」

アーチャが聞いた。ユイツはまた庭園に目線を戻し、ノッツ族が二人がかりで苗木の植え替え作業をする様子をしばらく観察していた。

「僕は、マイラ族の母と、ジャーグ族の父の間に生まれました」

ユイツがやにわに言った。あまりに突然のことだったので、アーチャは口にしようと準備していた言葉をうっかり全部忘れてしまった。

「あなたも知ってのとおり、かつて、彼らは浮遊島で共存していましたが、マイラ族はジャーグ族の力を恐れ、浮遊島から彼らを追放しました。そして、その渦中に生まれたのが僕でした。父は僕が生まれてすぐに地上へ降り立ち、僕は母の元で生きていくことになりました。背部の翼がマイラ族のものだったからです。母は、僕にジャーグ族の血が流れていることを周囲の者に内密にし、ひっそりと生きてきた」

ユイツは、触れたくない辛酸な過去に足を踏み入れるように、その手前でゆっくりと呼吸を整えた。

「しかし、僕が二歳を迎えた時、僕の瞳にジャーグ族特有の青い輝きが見られるようになった。当然、周りの者は疑いの目を向けた。族長が母を問い詰め、母は秘密を打ち明けた。夫がジャーグ族であること、僕にもその血が流れていること……。僕は翼を取られ、見せしめとして海に捨てられた」

「ばかな……」

アーチャは吐き捨てたが、一際うるさくなったイクシム族たちのだみ声のせいで、ほとんどユイツの耳には届かなかった。

「だけど、命あるものにとって、死が最悪の不幸とはいえません」

もう一度アーチャを振り返りながら、ユイツが続けた。

「僕は死の孤独の中で時という存在を見つけだし、この世が時間に支配されていることを知った。その時間を超越するためにはどうしたらいいのか……僕は長い時間をかけて考えた。そうして、僕は人々の記憶となって世に留まる術を見出した。記憶として存在することが、僕がこの世を生きた証につながるから」

「生きた証……か。昔、誰かが同じことを言っておった……いや、気にせんどくれ。老いぼれじいさんの独り言だ」

アーチャはカラカラと笑った。ユイツもつられて笑った。

「しかし、世界が平和になったというのに、何か物足りないのう……」

アーチャが独り言を繰り返す傍ら、ユイツが席から立ち上がり、アーチャの薄い頭髪に向かって軽く一礼した。

「さて、僕はもう行きます。アーチャさん、今まで……」

「ん？　ん？　何だ今更、かしこまりおって。アーチャでいいわい」

それを聞いて、ユイツはにっこり微笑んでうなずいた。アーチャは杖に体重を乗せてゆっくり立ち上がり、ユイツと長い握手を交わした。

「アーチャ、今までありがとう。君たちとの出会いは、僕にとって最高の記憶となった。だからもう、僕はアーチャの中で生きていく理由がなくなった……新たな時間を求めて、僕はまた旅に出るよ」

「それは……わしが、ユイツのことを忘れてしまうということか？」

ユイツは大きくうなずいたが、そこにあるのは決して悲哀な表情ではなかった。アーチャを心から安心させるような、そんな暖かな笑顔だった。

「大丈夫。失ったものは、案外まだ自分の近くにあったりするものなんです。だから、アーチャの仲間も、きっとどこか近くにいるはずです。見つけ出してください、必ず」

最終章　翼　3

午後、毛皮のコートを全身にまとったアーチャは、施設の外へと足を踏み出していた。理由は分からないが、なぜかそうしなければいけないという衝動にかられたのだ。門を抜けてから建物を振り返ると、玄関脇の柱に掛けてある石造りの看板に、『長寿の家』と書いてあるのが読めた。

「うぅ……寒い」

まだ秋の始めだというのに、地を滑るように吹き抜けていく風はとても冷たく、歳月を経て衰えたアーチャの体にはかなり応えた。

「おいおい、足よ……わしをどこへ連れて行こうというのかね？」

コートの襟をしっかり引き寄せながら、アーチャは自分の足に向かって尋ねかけた。ズボンの裾から見え隠れしている枯れ枝のように細い足は、これといった指示を出している訳でもないのに、アーチャを街の方へどんどん引っ張って行く。

「行き先は、お前さんだけが知っとるというわけか。……これ、せっかちな足め、ちょっとは年寄りをいたわったらどうだ」

人前で独り言をまくしたてるのが、これほど楽しいと思えたことはなかった。道行く人はアーチャをちらと振り返るが、また何事もなかったように前を向いて歩き続ける。老人の独り言なんて、酔っ払いの鼻歌も同然なのだ。

大屋敷の立ち並ぶ通りを道沿いにしばらく歩いていると、屋敷の庭園から怒鳴り声が聞こえてきて、アーチャは思わず足を止めた。

きちんと刈り込まれた垣根の葉と葉の間から様子を窺うと、作業着を着た庭師の男と屋敷の主人らしき女が向かい合っているのが見えた。見るからに貧相な庭師は、豪勢な黄色いドレスを着込んだ女にペコペコと頭を下げ、女はさも立腹そうな表情で男を見下ろしている。

「そりゃ私だって怒りますとも！」

女主人の高声が垣根を越えて通りに響いた。

「遅刻した上、大切なバラを踏み潰し、それに加えて早退させてくれですって！　ええ、私だって怒りますとも。減給だけで許してあげようと思いましたけど、あなたはもう明日から来なくて構いません！」

「そんなあ……」

男は情けない悲鳴を上げ、すがるように女を見上げた。

「今日はとっても大切な用事があるんです。お願いします。どうかクビにだけは……」

男があまりにかわいそうなので、アーチャは半分開きっぱなしの門を押し開け、ゆっくりと屋敷内に足を踏み入れた。柔らかな芝を踏み進んで二人の元へ近寄ると、女主人の驚愕しきった表情がアーチャを見つめた。アーチャは気にも止めず、男の頭に向かって杖を振り下ろした。

「これ！　何をぼさぼさしておるんだ！」

驚きと痛みの入り混じった表情で振り返る庭師に向かって、アーチャは叫んでいた。

「今日は娘さんの結婚式だろうが！　お前という奴は、一体何度あの子を泣かせれば気が済むんだ？」

男はしばらくポカンとしていたが、やがてアーチャだけに見えるように微笑んだ。

「そうなんです！　今日は娘の結婚式でして……どうしても行かなきゃいけないんです！」

「まあ……」

女の怒りに歪んだ表情がみるみるうちにほころんでいった。

「そういうことでしたら……よろしい。今日のあなたの失敗には目をつぶってあげましょう。さあ、早く式場へ行ってあげなさい」

男は大急ぎで荷物をまとめ、軽い、嬉々とした足取りで庭園を駆け抜けていった。門の前で一度頭を下げると、振り返ることもせずに敷地内から姿を消した。

「それじゃあ、わしもこれで……」

「ところであなた、どちら様？」

そそくさと立ち去ろうとするアーチャに向かって、女が呼び止めた。アーチャはその場ですぐに立ち止まったが、女の顔を振り向こうとはしなかった。

「わしは……アーチャ・ルーイェンだ。こんなじじいになっても、自分の名前だけは忘れんものでな。それだけは確かだ。他には何か？」

これ以上は年寄りの長話しになるだけだと、女はそう悟ったのだろう。それ以上アーチャを引き止めなかったし、疑いの目を向けることもしなかった。

「ありがとうございました」

アーチャが門を抜けて通りに出ると、先ほどの庭師がすぐそこで待っていて、アーチャと顔を見合わせるなり礼を言った。

「礼には及ばん。おせっかいは昔からの悪いくせなんだ」

言いながら、アーチャはまたせっせと歩き始めた。男も息を切らしながらアーチャの後をついてくる。帽子を深くかぶっていたせいで分からなかったが、よく見るとこの男、アーチャまでとはいかないが、なかなかの年かさだ。

「私、つい先週、この街へ四十年振りに帰ってきたんです。それまではポーラムという港町で漁師をしていましてね。こう見えてなかなか名の通った腕利きの漁師だったんですよ。妻とは離婚し、子も自立したので、老後の生活は家族と一緒に過ごそうと決めていたんです。この街へ帰ってきたのもそのためでしてね。それにほら、こんなに年を取ると体力の面でも若い奴らにはかなわなくなってしまって……足手まといになっちまったんですよ」

男はぜえぜえ言いながらも喋りまくり、作業用具の入った重たそ

うなリュックサックをしっかり背負い直すと、おぼつかない足取りで坂道を登った。

「お主今、妻とは離婚したって、そう言ったか？　なぜだ？」

アーチャは遅れだした男を振り返りながら聞いた。

「まあ、あれですよ……私の不手際といいますか……」

「女か」

アーチャはやれやれと首を振った。

「酒場の女将さんと、自慢の船で水平線に沈む夕日を見に行っただけです。それなのにあいつときたら……」

男の声が聞こえなくなった。見てみると、十メートルも後方で座り込み、リュックに背中を預けて肩で息をしている。

最終章　翼　4

「まったく、だらしないのう！」

アーチャが呆れると、男は「先に行ってください」と言うように手で合図した。アーチャは“慈悲”のかけらさえ見せることもせず、男を置き去りにして坂道を登り続けた。すると、やや前方に、車椅子を押す女性の後ろ姿が見えた。腰がアーチャと同じくの字に折れ曲がっている。

「手伝いましょうか？」

フーフー言いながら車椅子を押していた女性の隣に並びながら、アーチャは笑みを広げて“慈悲”を示した。ハスの花のロウ細工があしらわれた愛らしい帽子をかぶる女性は、アーチャが予想した通りの『仲間』だった。

「あら。悪いね、お若いの」

アーチャの顔をじっくり覗き込みながら、女は皮肉を言った。

「後ろの小僧にはかなわないがね」

アーチャが言うと、女はちらと振り返り、小さく嘲笑した。

「フン。ありゃ女ったらしの漁師さね。情けないねえ、まったく」

「え……彼をご存知で？」

坂道の頂上付近に差しかかって気が緩んだせいか、アーチャの口調は車椅子の車輪のようにぎこちない調子だった。

「彼、私の息子なのよ」

車椅子に座っていた女性がか細い声でそう言った。アーチャは驚いた拍子に力が抜け落ち、危うく車椅子と一緒に坂道を転げ落ちるところだった。

「たまげた！　彼の言う家族ってのはあんたのことだったか！」

頂上に到着した矢先、アーチャは溜まっていた思いを全て吐き出すようにそう言った。

「あたしゃ、あいつの姉だけどね」

「うひゃあ」

アーチャは折れ曲がっていた腰がピンとまっすぐ伸びるほど肝を潰した。その時、庭師の男がやっと三人に追いついた。疲労しきったその顔は、数分前のものより十歳は老け込んで見える。

「待たせてしまって、どうもすいま……」

男はさも驚いた様子で女の顔を見つけ、息が詰まったように口をつぐんだ。

「姉さん！」

次には、バツの悪そうな表情が男の顔に広がっていた。女はとっ

さに顔をしかめた。

「やだねえ。そんな化け物を見るような目つきであたしを見るんじゃないよ」

「もしや、見てたか？」

男はそわそわしがら聞いた。

「はて、なんのことやら」

白々しくとぼける女の顔に、意地の悪い笑みが広がった。

「ええ、ええ。誰も知りません。たまたま通った屋敷の前で、血のつながった弟が若い女にしいたげられてる様子なんて、誰も見てませんし、聞いてません」

「口の悪さと根性の曲がり具合は相変わらずだな、姉さん」

男はそう言って、車椅子に腰掛ける母親に向かって微笑んだ。

「母さん……うん、元気そうで何よりだ。体の具合はどう？」

「この頃はね、もうすっかりいいんだよ。この街は親切な人ばかりで、とても過ごしやすいから、きっと体の調子もいいんだねえ。それに……助けてくれてありがとうね、お若い紳士さん」

母親はアーチャを振り返り、心を込めてそう言った。

「私たちこれから船に乗って、隣国までお芝居を見に行くんです」

男の声はウキウキしていた。

「仕事を早退したかったのもそのためでして。姉とは前から連絡を取っていて、港で落ち合おうってことになってたんです」

それからしばらく、アーチャは家族と漫談していたが、その心の中はずっと不思議な気持ちにかられていた。この一家三人とは今日初めて会ったはずなのに、どうしてもそんな気がしなかったのだ。その楽しい会話を聞いていると、懐かしいいつかの記憶が込み上げてくる。それは、いつだったかも思い出せないほど昔の記憶だ。

やがて家族と別れ、アーチャが辿り着いた先は、大きな二つの通りに挟まれた間にある、街の中央公園だった。五つの区画に分かれたとても大きな公園で、春にはたくさんの花々が咲き、夏には噴水の周りに人々が集い、秋には紅葉の絨毯が道に敷かれ、冬には職人が手掛けた雪の像が立ち並ぶ。

ふとアーチャの脳裏に甦ったのは、何十年も前の街の姿だった。あの頃の街は、今と比べればひどく殺風景かもしれない。だがそこには、確かにたくさんの笑顔があった。夢を追いかける人々の、大きな希望に満ちていた。

しかし、今それに代わって存在しているのは、コンクリートで固められた道路と、その上を無頓着な表情で走り抜けていく自動車たち、何かに向かって忙しなく歩み続ける人々の姿。そして、機械化した世界。

「いいんだ。どんなに世知辛い世の中でも、わしらが今生きているということに変わりはないのだから」

アーチャは誰にも聞こえないほどの小さな声でそう呟いた。

アーチャが公園へと続く横断歩道を渡っていた時、それは不意に

起こった。

「歌だ……」

女性の歌声が、この広い街のどこからか聞こえてくる。謎の歌声は、街中の喧騒を物ともせずにかいくぐり、耳ではなく、心の奥で響き渡った。アーチャは思わず足を止め、視線をあちこちに向けて声の主を探した。そこから見えるのは、よどみなく流れ続ける人と自動車、そして、美麗な風貌の建物ばかりだった。だが、アーチャが目を凝らしていたのは空だった。

雑踏で埋め尽くされる都会の上空、抜けるような青空の下に、一機の飛行船が浮遊していた。それを目にした瞬間、アーチャの脳裏を過ぎったのは記憶という名の戦慄だった。どこか見覚えのあるこの光景を見ていると、アーチャは脳味噌の裏側をじりじりと焼かれる思いに苛まれた。この直後に起こる惨劇と恐怖が、アーチャの感情を一気に高ぶらせた。

「よう、待たせちまったか?」

男の太いしわがれ声がそう言った。アーチャはとっさに振り返り、自分の背後に立つ一人のイクシム族を見た。

歌が……途絶えた。

最終章　翼　5

惨劇は風と共に脇を吹き抜け、恐怖は賛美な歌と共に消滅した。アーチャがイクシム族の男を目にした瞬間、六十年前の“過去”が今という“現在”に追いつき、そして、寸分の狂いもなくピッタリと重なった。

「……アンジ」

気付くと、アーチャはその名を口にしていた。まるで、そのイクシム族の男を、そう呼ぶべき者として初めから解釈していたかのように。

「ほら、行くぞ。何ぼさっとしてる？」

アーチャは半ば呆然としてアンジの横顔を眺めていた。アンジのその口ぶりは、まるで、「お前とは昨日会ったばかり」とでもいうような、軽い調子だった。混乱状態のアーチャを置いて、アンジはどんどん先へ進んでいく。

「待ってくれ……アンジ……ちょっと待って……」

石畳に足をとられ、アーチャはよろけて転んだ。厚手のコートは無事だったが、膝がひりひりと痛んだ。吹き止まない秋の冷たい風が傷に応えた。

「大丈夫ですか、アーチャ」

遠い昔に聞き覚えのある、何者かの声がそう尋ねた。アーチャは

四つん這いのまま顔を上げ、差し出された手の主を確認した。陽光の影に顔を覆い隠すその人物は、銀髪を肩まで伸ばし、刺激の強い香水の香りを振り撒き、白く煌くような歯を覗かせ、宝石のように輝く瞳でこちらを見下ろしていた。

「ファージニアス……ファージニアスか！」

腕を支えられ、よろよろと立ち上がりながら、アーチャは狂喜に満ちた声を発した。ファージニアスはとっておきの笑顔でアーチャにうなずいた。その姿は、ユイツと同じ、六十年前のあの日から一秒も時が経っていないかのように若々しかった。

「ようやく思い出したようですね。私たち“仲間”のことを」

「一体どういうことだ？」

アーチャは荒々しくいぶかった。ファージニアスはアーチャのコートから埃を払い落とし、飽くまでも冷静な笑顔を絶やさなかった。その笑顔が、アーチャを安心させたのは確かだった。

「一から、ちゃんと説明してくれんか？　老いぼれの埃をかぶった脳味噌にもしっかり理解できるように」

アーチャは落ち着きを取り戻しつつ、平静な口調で要求した。ファージニアスはこっくりとうなずき、サラサラの髪の毛を秋の風になびかせた。

「六十年前のあの日、アーチャを救ったのは一人の少女でした。少女の歌に込められた愛の力が、世界の人々を救うきっかけとなったのです」

「あの歌声……シャヌ……そうだ」

記憶を一つ一つ掘り起こしながら、アーチャは消え入りそうな声で言った。

「私たちがフラッシュナッシュの行き先を六十年後にセットし直した理由の一つが、アーチャたちに歌を聴かせるためでした。もう一つは、あなた方を六十年後のこの時代に送り込むため。シャヌ嬢の歌が、アーチャたちを救うことは分かっていました。今アーチャがこうしていられるのも、すべてフラッシュナッシュとシャヌ嬢の力のおかげなんです。二つの力は結束し、希望を糧とした者たちに生きる時間を与えた。そうして、この六十年後の世界へ、人々の意志は送り込まれた」

「シャヌは？　シャヌはどうなったんだ？」

喉を枯らしながら声を張るアーチャを、傍を通り過ぎる通行人がじろじろと振り返った。老いぼれじいさんと道化師のようなけばけばしい風貌をした男が真剣な表情で話し込んでいるのだから、それだけでも振り向く価値はあっただろう。

「アーチャも知っての通り、シャヌ嬢はあの時間の流れにいるべき存在ではなかった。六十年後のアーチャを助けるという使命を果たした彼女は……」

「そうか……そうだったな……もうよい」

アーチャは肩を落とし、腹の底から深々とため息を吐き出した。

「わしのシャヌを信じる心は、まだまだ腐っちゃいない。だから、わしの粗末な命に代えてシャヌを守ってやれるのなら、どんなことだってする覚悟はできておる」

「ヘイ、アーチャ。そう落ち込まないで」

ファージニアスはあの優雅な調子を取り戻し、アーチャの肩をポンと叩いた。

「ここは、前の世界とは異なった時間の流れなんですよ。多くの血族が共存するこの世界において、マイラ族は今現在も尚、確かなものとして存在しているのです」

ファージニアスを見つめるアーチャの瞳が、彼の白い歯の輝きと競い合うようにしてキラキラと輝いた。

「それじゃあ、もしかしたらシャヌはまだ……」

アーチャはファージニアスの表情が曇るのを見て、思わず口をつぐんだ。

「シャヌ嬢が生きたのは百六十年も前の時代です。今はもう……」

アーチャは再びがっくりと肩を落とした。

最終章　翼　6

「ファージニアス、なぜわしの前に現れたんだ？」

アーチャはどんよりと重たい空気を吐き出しながら尋ねた。

「知らせるためです」

待ってましたとばかりに、ファージニアスはすかさずはきはきと答えた。

「六十年前、シャヌに助けられたアーチャ、アンジ、マニカ、トナは、それぞれ別の時間の流れに飛ばされてしまいました。時空連盟に勤務する私は、長い時間をかけて彼らを探し出し、事情を説明したのです……今のアーチャのようにね」

「アンジがあんな調子なのも納得だ。……ということは、さっき会ったあの家族はもしや？」

ファージニアスは穏やかに微笑み、うなずいた。

「姉の名はカエマ。弟の名はトナ。そして、母親の名はマニカです」

今日はひどく驚かされっぱなしだったので、アーチャは自分の心臓を心底かわいそうに思った。

「道理で、どこかで会ったことがあるような気がしたわけだ」

アーチャの笑い声はすっかり乾き切っていた。ファージニアスの

顔は、またも真剣な表情に切り替わっていた。

「過去において、カエマ嬢だけは、シャヌ嬢の力を持ってしても救い出すことはできなかった。おそらく、グランモニカの力の影響が直接及んでいたためでしょう。時空連盟が総力を上げてカエマ嬢を捜索しましたが、見つけ出すことはできませんでした。……しかし、時間とは不思議なものです」

ファージニアスは夢見るような声を発した。

「どの時間の流れにおいても、心が通じ合う者たちは必ずどこかで巡り合う。だから、この世界において、アーチャとアンジは昔からの古い親友としてその関係を確立させている……もしかすると、時空連盟にも見通すことができなかった“奇跡”が起こるかもしれない」

「奇跡って？」

ファージニアスの答えを聞く前に、アーチャの名を呼ぶしゃがれ声がそれを遮った。声の聞こえた方を見てみると、太い腕を大きく振り回しているアンジの姿がすぐに飛び込んできた。腕の振り回しっぷりを見る限り、かなり憤っているのは明確だ。

「ありがとうな、ファージニアス。お主のおかげで……ファージニアス？」

ファージニアスが立っていたその場所にはもう、彼の影さえ残ってはいなかった。アーチャは人々の雑踏に目を凝らしたが、ファージニアスの姿を見つけ出すことは遂にできなかった。

「一体何やってたんだ？」

アーチャがようやく追いついた矢先、アンジがとげとげしく尋ねた。六十年経っても、時間の流れが変わっても、その性格は相変わらずだった。

「若い頃はいつも俺を引っ張り回してただろ？　さあ、早く行こうぜ」

「行くって、どこに？」

アーチャが突拍子な声で尋ねると、アンジの驚き呆れた顔がアーチャを覗き込んだ。

「そのことを忘れちまったのにここまで来たのかよ。大したもんだぜ！」

アンジは感服して目を見開き、大げさに驚く仕草をした。どうやら、アーチャの記憶はまだ完全ではないらしい。

「俺たち、今から歌のコンサートに行くんだろ？　前にチケットを渡したはずだぞ」

アーチャはギクリとしてコートのポケットをまさぐった。すると、右のポケットの中からしわの寄った一枚のチケットが出てきて、アーチャは思わず歓声を上げた。

「そういえば、歌手のウェノア・エルマータが他界してから、歌とは無縁の生活だったのう」

「ウェノアは、俺に“ユーモア”を教えてくれた歌手だ」

歩きながら、アンジは満悦そうに言った。アンジがウェノアの生涯の生き様について語り続けるその傍らで、アーチャは別のことに興味をそそられていた。それは、ポケットの中からチケットとは別に出てきたもう一枚の紙切れだった。紙切れはしっかりと折り畳まれており、かじかむ手でゆっくり広げてみると、どうやら最近の新聞記事らしいということが分かった。日付はアーチャの誕生日と重なる……。

『ザイナ・シュロ将軍の勝利宣言。光爆弾“フラッシュ”をついに解禁』

アーチャは目を疑った。何度も瞬きし、何度も深呼吸を繰り返し、そしてもう一度記事に目を落としてみた。すると……。

『ザイナ・シュロ国王の小粋な気配り。飛行船から銀のチョコレート』

記事の内容はすっかり変わっていた。裏を返してみても、先ほどの記事は見つからなかった……いや、見つからなくて良かったのだ。

「平和っていいもんだ」

アーチャは空にポツンと浮かぶ飛行船を眺め、幸せそうに呟いた。そのすぐ脇を、老夫婦を乗せた農作業用の馬車がゆっくりと通り過ぎ、アーチャたちにほほ笑んだ。

二人は開演時間ギリギリになって会場内に駆け込み、ハアハア、ゼエゼエ言いながら空いている席に滑り込んだ。中は薄暗かったが、来客者たちの多くがヒト族だということはすぐに分かった。中にはピゲ族の団体やイクシム族の夫婦もかいま見え、みな楽しそうな面持ちで会話に興じている。

「ところで、誰のコンサートだったかな？」

アーチャは窮屈そうにコートを脱ぎながら、今ごろになってそれを聞いた。アンジは折り畳まれたリーフレットをかざし、天井から射すほの明るい照明に当てて、字を読み取った。

「『時を超えて……マイラ族による天使の歌声』」

「マイラ？」

静まりゆく会場内で、アーチャはすっとんきょうな声を出した。それと同時に、開演合図のブザーが頭上で鳴り響き、アーチャの声を掻き消した。場内は一寸先さえも暗闇に覆われ、吐息の音さえも聞こえない完全な静寂に包まれた。やがて幕の上がる音が聞こえ、ステージ上のライトが眩く輝いた。

ステージの左裾から姿を現したのは、純白のドレスに身を包み、背中に翼を持つ一人の少女だった。その瞬間、会場中から小さなどよめきが起こり、中には歓喜の声を上げる者もいた。

少女は満員の会場に向かって一礼し、ステージ中央まで歩み出ると、手に持っていたマイクを口元に近づけた。

最終章　翼　7

私たちの族長である母は、マイラの民に多くの言葉を残しました。

何も知らなかった私に、母は言いました。
人を信じるために、大きな愛を持ちなさい。

大きな愛を探していた私に、母は言いました。
孤独の中の小さな愛ではなく、人から与えられる大きな愛を受け止めなさい。

愛をくださいと言った私に、母は言いました。
愛が欲しいのなら、愛される心を持ちなさい。

誰からも愛される、優しい心を持とうと努力した私に、母は言いました。
愛される心が欲しいのなら、愛する心を持ちなさい。

愛する心を求め続ける私に、母は言いました。
誰かを愛したいのなら、人を信じる素晴らしさを知りなさい。

最後に、母は言いました。
希望と絶望を手に、それらを生きる糧として信念を貫きなさい。
強い心と弱い心を持ち、孤独と結束の中から真意を見出しなさい。
そして、自分という存在を、その心でしっかりと受け入れなさい。

族長である母の名は、シャヌ。

かつて、時を越えて人を愛したと云われ、私たち命ある者に、生きることの本当の意味を教えてくださいました。
今は亡き母を思い、この歌を贈ります。

『ねえ、アーチャ。私ね、ずっと考えてたの。この広い世界には今この瞬間も、戦争や病、飢饉に苦しむ人たちが大勢いて、誰かに助けを求めてる。私は、その人たちのために何ができるだろうって、ずっと考えてた。私にできることといったら、明るく励ますことくらいだろうけど……けど、それでもいいの。アーチャが私を助けてくれるように、私も誰かを助けたい。この世界に存在しているってことを、実感したい』

「見てるか、シャヌ。世界中が君の愛で満たされて、みんな幸せそうに微笑んでる。ほら、俺だって」

涙でくしゃくしゃになった顔を強引にほころばせながら、アーチャは呟いた。しかし、涙を流しながらシャヌに語りかけるアーチャの心は、揺らぐことのない、未来への確かな希望に満ち溢れていた。

人はみんな、目には見えない翼をその背中に持っている。

強風にも立ち向かえる翼、すぐに疲れてしまう翼、勇気に満ちた翼、慈悲のある翼、臆病な翼、意地悪な翼、わがままな翼、鼻持ちならない翼、頼りになる翼、頑固な翼、明朗な翼、自由を求める翼。
みんないつか、その翼を羽ばたかせて飛び立っていくんだ。

空へ、未来へ――

空へ、未来へ　〜完〜

最終章　翼　7（後書き）

制作期間11ヶ月……数多の推敲の末、この作品は完成しました。
時空という難しいテーマを踏まえ、矛盾が生じるたびに書き直し、どうにかして『最低でも、人間の読める小説』に近づけようと努力しました。
ですから、一際思い入れの強いこの作品もまた、僕の宝物です。

正直、このストーリーは複雑です。作者自身、「？」と思う瞬間があります。まだまだ未熟な証拠です。
ですから、この作品を最後まで読んで下さった読者様、本当にお疲れ様でした。そして、ありがとうございます。

この小説を読んで、少しでも何か感じるものがありましたら、ぜひお聞かせ下さい。お待ちしています。

それでは、「これから始まるおとぎ話」の姉妹編、「空へ、未来へ」。これにて完結！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0261e/

空へ、未来へ

2010年10月26日01時39分発行